猪俣津南雄

金の經濟學

中央公論社版

金の經濟學

猪俣津南雄著

中央公論社版

—— 1932 ——


VELUT
ARBOR
ÆVO


LIBRARY
JUL 12 1996
UNIVERSITY OF TORONTO

序

この「金の經濟學」は、大變大部なものになつた。私は、はじめ、この三分の一ぐらゐの分量で書き上げられる積りでゐたが、第一篇を半分ほど書くと、それが間違ひであつたのを知つた。誰にもわかるやうに書いてしかも理論の正確さを失はせまいとすると、豫定より大きな分量になるのは避けがたいことがわかつてきた。强ひて短くしようとすれば、計畫した內容の一部分を犧牲にする外なかつたが、私としてはそれも出來かねた。

さういふ譯で、私は、豫定の期日までに書き上げることが出來なかつた。そのために、出版者も私も、未知の讀者諸君から大變督促を受けることになつたが、責任は出版者の方に無く、私の方にあつたのだ。出版者の方では、非常に出版を取り急いでゐた。

出版者は、毎日缺かさず原稿を取りに來て吳れた。日曜にも祭日にも來た。一日のうちに二度も三度も來たこともある。私は、その度毎に、十枚でも十五枚でも出來たゞけの原稿を渡すやうにした。さうやつておよそ一千二百枚ほどの原稿を九十日間に書くことは、私としても精一杯の努力であつた。

それも、私の友人達の非常に熱心な協力が無かつたなら、私には到底不可能だつたであらう。中でも友人萩原厚生氏の協力は決定的な重みを持つた。氏は、かねてからの研究に基づいて、豐

富な資料をも提供して吳れた。

本書は、理論的な部分（第一篇及び第二篇）と、現實の過程を分析した部分（第三篇及び第四篇）とから成つてゐる。本書において取り扱つた問題は、最近もつとも大衆の關心を集めてゐるものでありながら、同時にまた非常に理解の困難な事柄に屬してゐる。しかも理解の困難な理由の一つは、ありとあらゆるブルヂョア的な偏見と誤謬とがこの問題にひつ絡まつてゐるからだ。

私は、かうした問題をとり上げるのは意義のあることだと考へた。

私は、最近の發展を究明するのには、問題の範圍を出來るだけ廣くして全面的に取り扱ふことが必要だつたので、先輩達が未だ研究を發表してゐない分野にまで立入らなければならなかつた。私がこの著作において成功を收めたかどうかは多くの批判を待つて決定されることであらうが、自分としてはとにかく一通り解說と研究の責を果し得たと思つてゐる。そしてそれと共に、私の信じて疑はないことが一つある。それは、この書物を多少とも眞面目に讀んでくれた人達はきつとマルクス主義への關心を深めるだらうといふことだ。

以上をもつて序文にかへる。

一九三二年四月二五日

猪俣津南雄

目次

第一篇　貨幣としての金を中心に

第一講　金が貨幣になるまで

第二講　貨幣

第三講　貨幣の資本化と資本主義生產

第二篇　金の經濟學

第五講　金本位制と兌換券

第六講　金の流出入と爲替相場

第八講　インフレーション

第九講　恐慌と貨幣

第十一講　金の偏在

第十二講　第三期世界恐慌

第十三講　金本位制の崩壞

第四篇　金再禁止後の展望のために

第十四講　世界戰爭から金解禁まで

第十五講　金解禁から金再禁へ

第十七講　金再禁止後の發展

目次終

第一篇　貨幣としての金を中心に

第一講　金が貨幣になるまで

一　どうして貨幣は必要か？

吾々は先づ誰れにもわかることから始めよう。

資本主義社會は一つの商品生産社會である。こゝで生産される一切のものは、價格を持つ。一串一錢の「燒き鳥」から一臺五萬圓のロールス・ロイスにいたるまで、およそ人間勞働によつて生産されたもので價格なきものを探し出すことは不可能だ。そんな譯だからまた從つて人間勞働によつて生産されないもの迄も價格を持つ。「代議士の相場」や「大臣の相場」はもうかなり前からあつたが、近頃は「内閣の相場」まで問題になつてきた。かやうに一切のものが「商品化」して行く。

だが、人々は物好きからさうやつて一切のものに價格をつけてゐるのではない。それどころか

どうして貨幣だ、自分のものは出來るだけ多く賣らう、高く賣らう、人からは出來るだけ安く買はう、取る金は多く、渡す金は少く、――全くこの爭ひを中心に人生は渦卷いてゐる。その道の大選手なのであらう、或る大きな會社の重役は、何んでもかでも一應値切らなくては承知出來ないで、汽車の切符まで値切つて「出札係」を驚かしたといふことだ。さうかと思ふと一方では、一昨年來の諸商品價格の暴落で、何百萬人といふ日本人は、破産、失業、自殺した。

現在の資本主義社會は、一の發展した商品生産社會であり、その歷史的命數の終點に瀕した商品生産社會である。こゝでは、商品生産社會の矛盾が極度まで擴大深化されてゐる。そのために却つて、錯綜した幻惑的な諸現象の上面が、商品生産社會の本來の組立てとその固有の矛盾の本質を見分け難いものにする。だが、いかに尻尾が九つに裂けても狐は狐以外のものではない。見る眼で見れば、一見して正體は知れるのだ。

確かに、誰れもかも貨幣を目がけ、突進してゐるやうに見える。それは確かに事實でもあるし、またそれが現在の社會生活の一大特徵でもある。だが、同じやうに確かに、貨幣と並んで商品が

ある。貨幣は、全く影の形に添ふやうに、商品と一緒に動いてゐる。また、誰れがどうして貨幣を手に入れたにせよ、そしてそれがいま何處にどう貯へてあるにせよ、貨幣は何時かは商品にめぐり合ふ運命を持つてゐる。事實において、さうした運命を持つ物としてのみ、人は貨幣を獲得し、蓄積する。

それだけでは未だはつきりしないと言ふなら、諸君は誰れにでも問ふがよい、――『君の金、その金でいち〳〵買はなくても、必要なものはすべて得られると言ふことになつたら、君はそれをどうするか』と。

『金の有難味』の染み込んでゐる彼は、一應首を傾けるかもしれぬ。そんなことは起りさうもないと思ふかもしれぬ。だが、本當にさういふことになるならば、貨幣は無くてもいゝものだし、實は無い方がうるさくなくていゝんだと、彼は結局白状するだらう。そして、實際に工場で物を生産してゐる勞働者ならば、誰よりも早くそのことを承認し、理解する。また、事實において、各人が貨幣の世話にならないで必要なものを手に入れることの出來る社會は、過去にも存在した

し、遠からぬ將來にも人類を待つてゐる。

而かに、商品を離れて貨幣はなく、貨幣は商品生産社會特有のものである。貨幣は、商品生産社會の特殊事情に基づいて存在する。

毎日々々、日本中で、世界中で、商品と呼ばれる無數の生産物は、ひつきりなしに貨幣と取りかへられてゐる。一方には商品を渡して貨幣を受取る者がある。他方には貨幣を渡して商品を受取る者がある。貨幣が動く度毎に商品も動く。米は百姓の手から鍛冶屋の手に渡り、鎌は鍛冶屋の手から百姓の手に渡つて行く。大數的に見よ、そして全體として見よ。人々は一應は商品と貨幣を取りかへるが、しかし結局は商品と商品とを取りかへるのだ。機織女のつくつた銘仙を錺屋さんが着ると、彼女は錺屋さんのつくつた簪をさす。本屋が靴を穿けば、靴屋は講談本を讀む、等、等。各人の生産物は商品として各人の間に取りかへられてゐる。卽ち、人間勞働の生産物は、商品は、交換されてゐる。そしてその際、貨幣はその交換を媒介する。

商品生産社會は、商品を交換する社會であつた。さればこそ、この社會は貨幣を必要とする。

では、交換そのものはどうして必要か？

そこに問題がある。

二　商品生産社會の矛盾

問題とその解答をはつきりさせるために、吾々は、最も單純な商品生産社會をとつて考へて見る。

古くは自然經濟の時代があつた。そこでは所謂「自給自足」が行はれ、生産物も生産手段も個個人の所有ではなくて、彼等の形成した小社會――氏族社會、等――の共有であつた。この「原始共産體」の内部に於いて各人は異なる勞働に從事しても、それは直接にお互ひのための、そして全體のための奉仕であつた。謂はゞ、一家族内の夫と妻のそれ〴〵の仕事のやうに、乃至は野球チームの投手、捕手、遊撃、等々の活動のやうに。

が、生産力の發展につれて、各人は、また彼等の社會は、自己の消費するよりもます〳〵多く

のものを生産し得るやうになつてきた。それと共に、各人の專門的に從事する勞働の種類もますます／＼多くなつてきた。さうなつてくると、「自給自足」の經濟は破れてくるし、獵具、農具、家畜、土地、雜多の工具、仕事場、等の生産手段は、次第に、彼等の社會の共有物から個々人の私有財産に變化する。かくして社會は、次第に大きくなると共に、商品生産社會に發展する。

まだ資本家も賃銀勞働者もない單純な商品生産社會の構成の骨組みを言ふと、そこでは、先づ生産者相互の間に分業が行はれ、各生産者は、それ／＼の生産手段を私有財産として所有し、おの／＼自己の勞働をもつて、各自の個人的利益のために生産する。こゝでは彼等は、各自の私的利益のために生産するのだが、しかし各自の生産物を自ら消費するために生産するのではなく、他人に賣らんがために生産する。つまり彼等は、生産物を商品として生産する。從つて、この社會における商品の交換は、偶然的な出來事ではなく、日常不斷の現象である。

ところで、商品交換は日常不斷の現象であるとして、さうした交換の必要は一體何に基づくか？　一層強く言へば、如何なる事情が商品交換を必然ならしめてゐるか？　これが吾々の問題

であつたのだ。

吾々は答へる、それは商品生産社會そのものゝ根本的な矛盾に基づく、と。

では、それはどんな矛盾であるか？　この社會では、生産は社會的生産であるに拘らず、所有は社會的所有ではなくて私的所有であること、これである。

説明しよう――

原始共産體における生産は言ふまでもなく社會的生産であつた。各人の從事する様々な勞働及びその様々な生産物は、お互ひのため、社會全體のための勞働であり生産物であつた。從つてまた、おの／＼の生産物も社會的勞働の生産物であつた。商品生産社會になつても、生産は社會的生産たる性質を失ふどころではない。

そこの「獨立の生産者」であるところの誰でもをとつて見るがよい。裁縫師でもいゝ、大工でもいゝ、炭燒きでもいゝ。諸君が裁縫師に、君の生産物はどんな物かと尋ねるならば、彼は多分縫ひ立ての、ひのしをしたばかりの洋服を指さして、これだと答へるだらう。ところで、その生

産物はどうして生産されたのか？

それは、洋服地の羅紗を生産する職工の勞働がなければ出來はしなかつたのだ。ところが、この羅紗屋の勞働の背後にはまた羅紗糸をつむぐ紡工の勞働がある、更にまた羊を飼つてその毛を剪み切つてゐる百姓がある。諸君はまた、その毛を剪み切る鋏だの、裁縫師が裁ち物をする鋏だのをつくつてゐる鍛冶屋の勞働を見落すことは出來ないだらう。鋏もさうだが、針もさうだ。針屋の細かな勞働なしには、裁縫師はあがつたりだ。さうかと思ふとまた、針や鋏や火熨斗に用ひる金屬を地中から掘り出す鑛夫の勞働が現はれてくる。が、また、火熨斗はあつても、炭燒きの燒く炭が無くなつたら大變だらう。同時に、諸君は、彼れの用ひる裁ち物板や物指しをつくつてゐる別種の勞働のことも知つてゐる。それに大體、われらの裁縫師は露天で仕事をしてゐる譯ではなく、大工の建てた立派な家に住んでゐるのだし、そして何よりも先づ、お百姓のつくつた物を頂いて腹をこしらへなければ、てんで仕事にも掛かれないのだ、等、等、等、まことに際限もない！

明かに、われらの裁縫師の勞働は、社會的勞働の長い鎖の一環に過ぎないのだ。「彼れの生產物」であるといふ洋服は、實はかうした社會的勞働によつて社會的に生產された物だつたのだ。だが、吾々は、かうして裁縫師の勞働とその生產物が如何に社會的勞働とその生產物に依存してゐるかといふことを力說したからといつて、吾々は少しも裁縫師に對して不公平であらうとする譯ではない。彼は彼で言ふだらう、——今の話はたしかにその通りだが、しかしまた、あなた方がさうやつて洋服を着てゐられるのも私達の勞働のお蔭なんだ、と。

正にその通りなのだ。一つの商品生產社會にゐる何千人かの裁縫師達は、その社會の何十萬といふ人間の着る洋服をつくつてゐる。彼等は、正に、社會全體にとつて必要な洋服の生產を受持つてゐる。が、その點では、大工も、炭燒きも、機織女も、どの生產者もみな、社會に對して全く同樣の關係に立つてゐる。從つて、社會全體の何十萬人かの洋服を生產するところの何千人かの裁縫師達に裁縫師達で、また、彼等以外の何十萬人かの生產者達の諸々の生產に依存する。そしてそのことこそは、この社會の生產の社會的生產たる所以をます〳〵明白ならしめるのだ。

あらゆる種類の勞働及び生産物の相互の依存――それが社會的生産の姿である。從つて、もしも社會的勞働の鎖のどこかの一環にでも故障が生じ、その生産物の過不足が生ずれば、混亂は忽ち鎖を傳はつて全社會に波及する。かういふ事情こそ、生産の全體が社的生産であることを決定的に立證する。

ところで、生産はかやうに社會的であるにも拘らず、所有の方は、私的である。肝腎の生産手段――即ち道具、機械、土地、等、生産に當つて不可缺のもの――は、個々の生産者の私有財産として所有されてゐる。個々の企業はいづれも生産者個人に所有され、銘々がてんでんばら〳〵に自分個人の考へに從つて自己の生産する物と方法と組織とを決定し、自己の負擔と危險とにおいて生産する。そして誰れも彼も、私有財産の精神に基づいて生産する。どの生産者の頭の中も、たゞ自分自身の個人的利益の追求といふことで一杯になつてゐて、社會の利益などといふ考への入込む餘地はない。他人にはすべて損をかけても、自分だけは得をしよう、それが銘々の態度である。原料や道具を手に入れるにも、生産物を手離すにも、此の精神・態度を

もつて一貫する。そして此の際最もをかしなことは、例へば鍛冶屋のつくる裁縫鋏でも、葬儀屋のつくる棺桶でも、それはその生産者たる鍛冶屋や葬儀屋以外の人々にこそ必要な物であれ、彼等自身には全く不用のものであるに拘らず、彼等自身の「製品」として彼等自身が所有するといふことだ！

これはどういふことを意味するか？

これは、一の鎖を形づくつてゐるところの社會的生産の個々の環、社會的勞働の個々の環が、所有の私的性質のために、謂はゞバラ〳〵になることを意味してゐる。個々の環とは、靴屋、桶屋、牛乳屋等々のそれ〴〵の勞働であり生産である。若しも、それ〴〵の生産手段が彼等の私有である代りに社會の共有であり、隨つてまた彼等の夫々の生産物は彼等によつて私有されるといふやうなことがなく、直ちに公共の倉庫に積まれて社會の機關の手によつて分配されるのであるならば、問題はない。ところが、事實はさうではなくて、靴屋、洋服屋等々は、これは俺のつくつた靴だ、洋服だといつて、がつちりと所有する。さうだとすれば、どうなるか？

吾々は、さうであるからこそ、商品生産社會では、生産物を、商品として、交換することが必要なのだと主張する。言ひ換へれば、この特殊な社會の內在矛盾が、商品交換を必然ならしめるのだと說く。何故といつて、生産の社會的性質上、靴屋は自分の穿く靴でなく洋服屋等々の穿く靴を生産してをりながら、所有の私的性質上それを先づ自分の所有となし、洋服屋は洋服屋でまた靴屋等々の着る洋服を生産してをりながら、それを第一に自分の所有物にしてゐるとすれば、各自の「所有する」生産物を、個人的利益の立場から、商品として交換するよりほかに仕方ないではないか。

間違ひのないやう言つておくが、吾々は、「お嫁さんゴッコ」のみいちやんや花ちやんの、キャラメルとチョコレートの交換などを問題にしてゐるのではない。握り飯を拾つた蟹と、柿の種を見付けた猿が、握り飯と柿の種を交換したといふやうな「交換」を問題にしてゐるのでもない。また、自給自足經濟の部落にたま〳〵通りかゝつた「旅人」などがそこで何かを「交換」したといふやうな場合を問題にしてゐるのでもない。吾々の場合は、そんな氣まぐれな、偶然的な「交換」ではなくて、一社會の日常不斷の現象となつてゐる交換の場合なのだ。

私的所有者は存在しても、彼等の間に社會的生産の鎖が成立つてゐなければ、さうした商品交換は生じない。反對に、社會的生産が行はれても、その鎖の環が私的所有によつてばら〳〵にならない限り、商品交換の必要はない。

教科書などには、交換とは大變いゝものゝやうに書いてある。そして商品交換を必然ならしめる社會的矛盾のことはそつと伏せてある。それは恰度、藥といふものゝ效能だけを說き立てゝ、病氣そのものに就いては何も言はないのとおんなじだ。病氣がなければ藥は生じない。社會的矛盾がなければ商品交換は起らない。

商品生産社會においては、各人はお互ひの勞働を必要としながらも、私的所有制度のお蔭で、お互ひの勞働から引離されて孤立する。引離されたものが再び結びつき、社會的生産のその社會的性質を取戻す唯一の方法は、各人の生産物を交換することだ。この交換によつて、各人の勞働は、曲りなりにも結びつけられて、他人にとつて、社會にとつて、役立つものとなる。分業と共に私的所有權を有する商品生産社會の生産者は、各自の勞働を直接にお互ひのために役立たせる

ことが出來ない。勞働をもつて直接奉仕し合ふことの出來ない彼等なればこそ、彼等は生産物を「交換」する。彼等は、社會的な勞働と生産とにおいて直接に結びつくことが出來ない。だから物の交換を通じ、物を通じて、やつと結びつく。

三 商品の價値

以上、商品生産社會の根本矛盾を多少とも詳しく考察して來たのは、ひとり交換の必然性のみならず、商品、價値、貨幣の性質及び必然性もまた、そこから生ずるからである。

交換の支配する單純な經濟社會に於ては、一見孤立的な個々の生産者が、その勞働によつて、人間に必要な生産物を生産するのだが、彼は自らそれを消費せずして市場に投じ、彼自身に必要な他の生産物と交換する。かゝる生産物は商品である。

何よりも先づ商品は人間勞働の生産物である。

第二に商品は、人間の慾望を滿足させる性質を持つ。即ち使用價値を持つ。具體的な物として

の商品、即ち羊毛を刈るもの（鋏）、室を暖めるもの（炭）、傷をなほすもの（膏藥）としての商品は、使用價値である。

種々なる使用價値は、種々なる具體的な人間勞働によつてつくられる。即ち、炭燒き勞働、鐵鍛冶勞働、等々によつてつくられる。この使用價値がなければ商品は市場に入り込めぬ。誰れも見向きもしまいから――。

だが、商品は、使用價値を持つと同時に、更に交換價値又は單に「價値」を持つ。靴墨は靴を光らせる物であるだけではない。市場における靴墨は、實に、葡萄酒、芝居切符等々と交換し得るものとして現はれる。商品の生產者＝所有者は、たゞ此の交換價値を實現せんがためにのみ、市場へ生產物を持込んで行く。

商品の持つこの二重の性質――それは、吾々の檢討した商品生產社會の矛盾の現はれである。

商品は謂はゞ兩面の怪物だ。彼はその一面をもつて自己の所有者の方を視つめ、他の一面をもつて買手の方を視つめてゐる。靴屋はたゞ交換價値のために靴を市場へ持込むのだが、運轉手は

ただ使用價値のために靴を買ふ。商品は、その所有者＝供給者にとつてはたゞ交換價値を持つが、需要者にとつてはたゞ使用價値のみを持つ。一方にとつて最も大切な使用價値は、他方にとつてはどうでもいゝものであり、後者にとつては大きいほどいゝ交換價値は、前者にとつては小さいほどいゝ。——これが、商品の性質に現はれた、社會關係の矛盾である。

こゝに明白なことは、使用價値は交換價値でなく、交換價値は使用價値でないことである。

ところで、葡萄酒と靴墨が交換されると言つても、市場においては、握り飯と柿の種が交換されたやうに無雜作にそれらが交換されるのではない。葡萄酒の所有者は言ふだらう、——靴墨はいゝが、しかし一體どれほど靴墨をよこすのか？　するとまた、靴墨の所有者も同じやうなことを言ふ。

交換價値における問題の中心は、分量である。交換される商品の量的比較であり、その割合である。若し、市場において結局葡萄酒二合が靴墨十個と交換されるとすれば、葡萄酒二合の交換價値は靴墨十個で現はされる。そして、使用價値としては全く相異なるところの兩者は、今や、

價値においては全く等しいものとなつてゐる。

　では、かやうに交換價値として現はれるところの價値とは何か？　それは如何なる性質のものか？

　それが使用價値でないことは、上來述べたところによつて自明である。おまけに使用價値は、それ自身量的比較の對象となり得るものではない。葡萄酒一合のほろ醉ひ機嫌は、靴墨一個で靴を光らせるよりも五倍だけ愉快だとか、山羊一頭は金釘一貫目よりも十倍だけ有用だなぞと言つたらナンセンスだ。

　強ひて使用價値（所謂效用）を量的比較の對象たるものに還元しようとすれば、ブルヂョア學者がやるやうにロビンスン・クルーソーのお伽噺などを持込んで來なければならなくなる。

　交換價値として現はれる價値は、童話の世界のものではなく、現實の市場で現はれる。この價値は、すべての商品に含まれてをり、その含まれる割合に應じて諸々の商品は交換されるのだ。吾々の例においては、葡萄酒二合が靴墨十個と交換されたが、その場合、葡萄酒一合には靴墨一

個の五倍の價値が含まれてゐる。むろん葡萄酒はたゞ靴墨だけと交換される譯ではなく、麻布團、お茶、マリヤ、蒲鉾、綿絲、等々とも、それ／＼の割合で交換される。靴墨にしても同樣だ。かやうに、葡萄酒、靴墨、その他等々すべての商品に含まれる價値なるものは、一商品のそれは他商品のそれの何倍又は何分の一といふやうに比較計量し得るものである。さうである以上、使用價値（效用）のやうに質を異にするものではなく、質は飽くまでも同一で、たゞ量においてのみ差異あるものであることは明かだ。諸君は、さうした共通要素を見出せばよい。

諸君は、商品が人間勞働の生産物であることを知つてゐる。

諸商品が人間勞働の生産物である限り、人間勞働は諸商品に含まれる共通要素であることは疑ひない。ところがまた、人間勞働なるものは、――前の使用價値の場合とは違つて――、同質の量的存在に還元することも出來るのだ。

といふのは、――

なるほど、蒲鉾屋の勞働、花造りの勞働、さうした具體的勞働は、おの／＼質の違つたもので

ある。それらは、その質が違へばこそ、それ〴〵質を異にする使用價値をつくり出す。だが、諸君は、具體的勞働を考へることが出來るなら、抽象的勞働も考へることが出來るのだ。

それはちつともむづかしいことではない。例へば電氣は、まるつきり質の違つた樣々の仕事をする。電燈においては光をつくる、ストーヴにおいては熱をつくる、煽風機においては風をつくる、等。具體的な仕事はこんなに違つてゐるのだが、しかし、吾々は同時に抽象的な電氣エネルギーなるものを知つてゐる。それは、謂はゞ「電氣一般」だ。「單なる電氣」だ。「電氣そのもの」だ。

諸君は、電氣がする樣々の仕事を、すべて一樣に抽象的な電氣エネルギーなるもの、消費量に還元する。それと同じやうに、諸君は、種々樣々な商品をつくる種々樣々な人間勞働を、すべて一樣に、抽象的一般的な勞働エネルギーの支出量に還元する。かゝるものに還元された人間勞働は、謂はゞ「人間勞働一般」であり、「單なる人間勞働」であり、「人間勞働そのもの」なのだ。そしてそれは、電氣エネルギーの場合と同樣、質においては全く同一な、量においてのみ異る存在

に過ぎないのだ。

さうなれば、數量としての比較が出來る。そして、市場の人達は、正に左樣な比較をする必要に迫られるのだし、また現實にそれをやつてゐる。

さて、吾々は、諸商品の交換價値として現はれる價値の性質を問題にした。そして、この價値なるものは、それを含む割合に應じて諸商品が交換されるものだから、それは質においては全く等一で、たゞ量においてのみ相異なり、それ故に相互に比較し得るところの共通要素として諸商品に含まれてゐることを知つた。そこで吾々は、さうした性質を持つ共通要素を商品のうちに探し求めた。そして、諸商品に含まれる、抽象的な人間勞働としての人間勞働こそ、正にさうした共通要素であることを知つたのだ。吾々は今や、問題の共通要素たるものはたゞそれだけで、それ以外には全く無いと諸君に告げる。こゝに、諸君が若し、それ以外にもまだ何かありさうに思はれるなら、今のうちに一生懸命に探して見られるがよい。しかし無いものは無いのである。

蛇足ではあらうが、附加へれば、問題の「共通要素」として、諸商品の重さだの容積だののこ

とを思つたりする者は、嘲笑される覺悟が要る。何故といつて、こんなものは、共通要素は共通要素でも、現物としての商品、使用價値としての商品の共通要素だし、さうであればこそ交換價値とはまるで關係がない、罌粟粒ほどのダイヤモンドが山ほどの石炭と交換されるといつたことになるのだから。

で、マルクスは言つた――「一切の勞働は、一面においては生理的意味における人間勞働力の支出であつて、そしてそのやうな等一な人間勞働すなはち抽象的な人間勞働たる性質においては商品價値を形成する。が、他面においては、一切の勞働は、特定の合目的な形態をとる人間勞働力の支出であつて、この具體的な有用勞働たる性質においては、使用價値を生產する。」

四　價値の決定

以上で、大體、交換價値として現はれる價値の性質はわかつたし、またその價値はとにかく商品に含まれる抽象的な人間勞働に依存するといふこともわかつてきたが、しかしまだ次の問題が

殘つてゐる。

一、それでは、商品は、それに含まれる抽象的人間勞働の量に比例して交換されるのか？　もしさうなら、それはどうしてか？

二、更に、各商品の價値それ自體の大きさは何によつて決定されるのか？　更にまた、その大きさはどうして變動するのであるか？

この二つは、嚴密に言へば別々の問題だが、しかし密接に相關聯する。こゝでは二つをひつくるめて研究する方が便利である。が、諸君は、その際、吾々の研究の對象は、資本家と賃銀勞働者の資本主義社會に於ける複雜化された價値法則ではなくて、今迄通り單純な商品生産社會——即ち手工業や自作農の如き「獨立の生産者」のみの商品生産社會——における價値法則であることを忘れて貰ひたくない。この價値法則を知ることは、價値法則をその本來の姿において、從つて根本的に、把握することである。

商品は、社會的な生産と私的な所有との間の社會的矛盾を母として生れる兩面の畸形兒だが、その生れ故郷は市場である。そして、商品の價値は市場において始めて實現されるのだから、市場の人々を觀察すると價値の本質がわかつて來る。

一度お客さんとして彼等の前に立つて見給へ。彼等商品所有者達は最初はきつと諸君買手のために商品の一面を強調する。使用價値を持ち上げる。これはとてもお似合ひになります、こちらになるとまるで品格がちがひます、此の方がずつと長持ちがいたします、などと辯じ立てて來る。しかし、諸君が若し、そんなことはどうだつていゝといふやうな顔をして、一つ思ひ切つて値切つたとする。さうすると彼等はぢきに本音を吐いてしまふのだ。いや、――と多分頭を掻きながら――、これはどうしてその倍もかゝつてゐますんで、とか、大變手間を喰つてゐるんですからどうしてなか〳〵、とか。

こゝに彼等が持出してきたのは、商品の他の一面たる交換價値＝價値の面である。彼等は使用を強調し、手間を強調する。そして手間とは、その商品の生産に支出された勞働をさしてゐる。

費が洋服屋なら、彼は第一に、洋服の裁縫に費した自分自身の手間――勞働支出――を持出してくる。次には、原料としての羅紗や裏地、附屬品たる釦や糸、裁縫用の道具や機械の消耗分、仕事場の保温や照明、等のかゝり、を持出してくる。しかし、この原料・道具・機械等のかゝりとは何だらう？　どれでもよい、例へば原料の羅紗をとらう。それをつくるところの羅紗屋は羅紗屋で、その生産に支出した自己の勞働を持出して來る。羅紗製造の原料たる羊毛にしてもおんなじだ。今度は羊毛刈りの勞働が持出される。最後に羊をとれば、こゝにも羊飼育の勞働が現はれる。かうやつて何處までも突き詰めて行くと、結局、あらゆる商品の生産に必要な、すべての費用は、勞働支出に還元されるのだ。そしてそれ以外のものはと見れば、いづれもすでに自然の中に存在するもので、それに對して勞働が加へらなれい限り、それ自身で生産費用の一部をなすことは出來ないやうな物質だけしか殘らない。

社會全體として見れば、一切のかゝり、一切の費用は、人間勞働の支出に歸着する。市場の人人が、各自の商品の價値を實現しようとする際に、その商品の「喰つてゐる手間」を強調するの

は不思議でない。從つてまた彼等は、「手間を喰つた」程度の大小、手間の多少に從つて、商品價値の大小を計量し比較しようとすることも、不思議ではない。だが、さうする限り彼等は、種々なる具體的勞働を「單なる手間」に、卽ち抽象的勞働に還元する。

こゝですでに明かなことは、「抽象的勞働」の抽象性は、マルクスが頭の中で勝手にやつた抽象によるものではないことだ。勞働の抽象化は、現實の市場そのものにおいて遂行せられ、抽象的勞働は市場において現實に存在する。マルクスはたゞ實在する抽象的勞働を、理論的に正しく分析し表現しただけである。そのことはまた、研究の進むに從つてます／＼明瞭になるだらう。

研究を進めよう。

それでは、諸々の商品は、おの／＼その生產の進行中に支出される勞働――むろん抽象的勞働――の量に比例して交換されるだらうか？　單純な商品生產社會は、諸商品がさういふ風に交換されざるを得ないやうな、さういふ傾向を生じる仕組みになつてゐる。但しこの場合、各商品の生產に支出される勞働の量とは、社會的に必要な平均的な勞働の量を意味するのだが、こゝでは

一應そのことを前提して、その說明は後は讓ることにする。

勿論、この社會に於ては、社會の指導的機關が交換の割合を定めるのではない。さうした機關のないことこそは商品生產社會の特徵なのだ。さうかと言つて一個人がそれを定めるのでもない。定めたからといつてその通りにはなりつこない。諸商品の交換される割合は、社會の意志にも、個々人の意思にもよらないで、それらの意思からは獨立した全く特殊な社會的過程によつて、謂はゞ自然法的に定められるのだ。即ちそれは「自由競爭」を通じ、商品生產者相互の間の「猿蟹合戰」を通じて決定されるのだ。

問題を成る可く簡單にする方がいゝから、先づ社會において必要とされる數量が殆ど同じくらゐの二つの商品、例へば足袋と下駄について見る。

足袋一足の生產には平均二日の勞働を要するし、下駄一足の生產には平均してその二倍の四日を費さねばならないとする。

すると、社會全體の立場から見て、その必要とする下駄の總數と、足袋の總數とが生產される

のには、足袋生産の勞働の總量が下駄生産の勞働の總量の半分であればいゝ譯だ。そしてこの場合に、交換の割合は下駄一足に對して足袋二足といふ割合であれば、足袋屋も下駄屋も恰度銘々の支出した勞働に相當して各自の商品價値を實現するし、社會全體の需要も、足袋においても下駄においても過不足なく充たされてゐる。それは均衡の保たれた狀態である。

均衡を得た狀態においては、商品の價値は、支出勞働量に從つて定まつてゐる。

ところで、假りにいま一足の下駄が、二足の足袋と交換される代りに、たつた一足としか交換されないといふことが起つたらどうなるか？　支出勞働量に比較して、足袋は高いし、下駄は安いのだ。足袋生産の勞働は「割がいゝ」が、下駄生産の勞働は「割がわるい」。下駄屋はけた／＼笑つてなんかゐられない。下駄はあかんといふので下駄屋は減るが、商賣は足袋に限ると言つて足袋屋は殖える。それでとう／＼足袋生産の勞働總量と、下駄生産の勞働總量とが、同じ位になつたとしよう。さうなつたら、均衡は全く破れてゐる。下駄一足をつくるには四日かゝるのに、足袋の方は二日で出來るのだから、足袋はベラ棒に澤山生産されて、社會の必要よりも五〇％も

多くなり、下駄の供給總額は、反對に、必要より二五%も少ないといつたことになつてゐる。さうなると今度は、主客顚倒で、下駄は高く、足袋は安く、下駄一足に對し足袋三足の割合で交換されるといつたことにならずにはゐないのだ。

　そこでまたもや商賣がへのゴタ／＼騷ぎが起るのだが、今度はあべこべの方向をとる。足袋屋はもうたび／＼有難いなんか言つてゐられない。こいつはいけないと言つて逃げ出すのは足袋屋さんの方である。その代り、下駄屋は殖える。それと共に、下駄の値は下つて行き、足袋の値は上つて行く。さうして結局はまた、下駄一足に對して足袋二足といふ割合で交換されるところまで行き、足袋商賣も下駄商賣も似たり寄つたりといふところに落ちつかうとする。

　かうして、商品の價値が支出勞働量に從つて定まると共に、均衡狀態もまた取戻されるのだ。（一）そこには、需要と供給、生産と消費の均衡がある、（二）足袋生産の勞働總量と、下駄生産の勞働總量との間の均衡がある。（三）足袋屋の生活水準と、下駄屋の生活水準との間の均衡がある、等、等。之を言ひ換へれば、均衡狀態が保たれてゐる以上、商品の價値は勞働量に從つて定まら

ざるを得ないのだ。

かうした價値法則は、どんな商品にも妥當する。前例では、社會において必要とされる數量が殆ど同じ位の二つの商品、足袋と下駄とを取りあげたが、それは鹽と米でも何でも構はない。社會において必要とされる數量からいふと、米は鹽の二十倍であるとする。そして、一升の米の生產は、鹽一升の生產の十倍の勞働量を要するとする。もしさうならば、社會の米生產の勞働總量が、鹽生產の勞働總量の二百倍になつてゐれば、恰度均衡が保たれることになる。この條件の下においては、米と鹽は前例同樣の次第によつて、互ひにその勞働價値に從つて交換されるのだ。

この場合にも、また前の場合にも、破れた均衡が回復されようとする際に却つて價値點を行き過ぎて逆の方向に於いて均衡が破壞され、それを回復する運動において又も行き過ぎる、といつた風に、絕えず波動を描き、振動を繰り返すといふことは、商品生產社會においてはむしろ普通の現象である。だが、勞働價値法則は、正にさうした市場關係の混亂の中に自身の道を貫くのだ。

以上に說明したところでは、二つの商品が、生產と交換とにおいて交互に均衡に向つたのだが、それはやがてすべての商品が絶えず同樣の交互的均衡に向ふことを意味してゐる。價値は、謂はゞ均衡の線である。この線を中心として交換の振子は動く。正確に價値と一致する交換はむしろ偶然であつても、それはちつとも構はない。諸々の商品の交換の諸關係は常に價値の諸關係に一致しようとする傾向を持つこと、それこそ最も本質的なことである。

吾々の說明もいさゝか行き過ぎ加減になつたから、少々もとへ戻すことにするが、——こゝに、商品の價値はその生產に費される勞働の量によつて決定されると言ふと、必ず飛び出して來る愚問がある。そんなら同じ足袋職人でもなまけ者や下手糞のつくる足袋は餘計時間がかゝる譯だからそれだけ大きな價値を持つのか、といふのだ。これに對する解答は、今迄述べたことのうちに既に含まれてゐる。問者は、つまり、商品の價値は個人的勞働の量によつて定まるのかときいてゐるのだが、むろんさうではない。さうではなくて、商品としての足袋なら足袋の價値は、社會全體の立場から足袋の生產に必要な平均的勞働の量によつて決定される。謂はゞ社會的平均勞働

の量によつて決定されるのだ。

もちろん足袋職人にもいろ〳〵ある。Aは二日で一足つくる。Bは四日でつくる。更に、一足こしらへるのに六日もかゝるC職人もあらう。さうだからといつて、同じ一足の足袋が市場において、二、四、六といふ幾つかの價値を持つ譯はない。それは一つの價値に定まらねばならぬ。商品生產社會では、賣る方では、出來るだけ高く賣らうとするが、買ふ方では成るたけ安く買はうとする。生產と消費は對立し、生產者と消費者は敵同志みたいになる。市場の競爭が起つて來る。そこで、足袋なら足袋の價値は、最低の二でもなく、最高の六でもなく、平均的な中間の四といつたやうなところで定まらざるを得なくなる。

かりに、足袋一足の市場價値が最高の六になつたとする。下手糞のC君達は得意になつて、下手こそ物の上手なれなどと駄洒落るかも知れぬ。ところが、さうなれば、B君やA君はもつとうまくやつてゐる。二や四に値ひすべきものが六に値ひするのだから大よろこびだ。足袋商賣はぼろいといふことになる。そこで足袋屋開業が大流行で、中には古參の足袋屋はだしといふやうな

のもあるだらう。市場に足袋の洪水が押寄せる。均衡は攪亂され、競爭は白熱化し、足袋は下落する……。しかし、また、行き過ぎて安くなり過ぎれば、世間には腕のいゝ足袋屋はさう澤山ないから、大多數の足袋屋は引合はなくなつて沒落し、供給は需要を充たさなくなる。そこでまた足袋の値は引返す、等々、およそ前述の通りである。一口に言へば、足袋の價値は、最高の六でも、最低の二でもなく、中間の平均的な四の邊に定まるのだ。

しからば、社會全體の立場から、足袋なら足袋の生產に必要な平均的勞働なるものはどうして決まるか？　それを知るには、足袋職人の數、彼等各人の勞働能率、及び彼等が市場に持込む商品の分量を見なければならぬ。（この場合にはむろん問題を簡單にする爲に足袋の原料たるキヤラコやコハゼや糸その他何から何まですべて足袋職人の手でつくるものと見做すのだ）。

いま一千一百人の足袋職人があるとする。うち二百人は、おの〳〵足袋一足の生產に二日を要し、一年間に各人が市場に供給する足袋は百五十足づゝだとする。次に彼等より能率の低い三百人は、おの〳〵一足に四日の勞働を費し、各人は七十五足づゝ供給し、殘りの六百人はおの〳〵

一足に六日づゝかけて各人五十足づゝ供給するものとする。最後に、この場合、需要と供給は均衡を保たれてゐるとする。

さうすると、次表を見ればわかるやうに、市場には合計八萬二千五百足の足袋がある。この生産物總體の生産のために費された勞働總量は三十三萬日の勞働である。これは社會において必要とされる八萬二千五百足の足袋を生産するに必要な勞働總量である。そこで、足袋一足を生産す

足袋の生産者	一足の生産に要する日數	生産者の數	一人一年間の生産高	總生産高	生産に要する總勞働日數
生産者群A	二日	二〇〇人	一五〇足	三〇、〇〇〇足	六〇、〇〇〇日
生産者群B	四日	三〇〇人	七五足	二二、五〇〇足	九〇、〇〇〇日
生産者群C	六日	六〇〇人	五〇足	三〇、〇〇〇足	一八〇、〇〇〇日
合計	—	一、一〇〇人	—	八二、五〇〇足	三三〇、〇〇〇日

るのには、平均してどれほどの勞働が必要かといふと、$\frac{330.000}{82.500}=4$ であるから、恰度四日の勞働だといふことになる。

この場合の四日の勞働は、すなはち、社會的必要勞働、もしくは社會的平均勞働に外ならぬ。そして、それは更に、社會の平均的技術、勞働者の平均的熟練、および平均的勞働條件によつて定まるのだ。

この社會的必要勞働、平均勞働の大小が、價値の大小を決定する。

諸君はすでに價値の性質を知り、價値が如何にして、また何によつて決定されるかを知つたばかりでない、今や價値の單位を知るに至つてゐる。社會的必要勞働時間こそ、大小いろ〱の價値の共通の單位である。

最後にもう一つ――

同一の職業――例へば足袋生産――に從事する人々の支出する個々別々の勞働時間が、社會的平均勞働時間に還元されることはわかつたが、異なる職業の場合はどうか？ 吾々は、足袋職人

の勞働と、時計工の勞働とを、同樣に取扱ふことが出來るかどうか？

それは出來ない。

一方は比較的單純な勞働だし、他方は複雜な勞働だ。時計製作の複雜な勞働を習得するのには、足袋つくりの勞働を覺える時間の五倍もかゝる。然るにもし、時計生產に要する社會的平均勞働の一單位例へば一勞働日と、足袋の社會的平均勞働の一勞働日とが價値において等しいものになるといふことになつたら、社會に厄介なことが起きるに極つてゐる。足袋工志願者は多からうが、時計工には成り手がない。時計の供給は社會の必要以下に落ちる。さうすれば勢ひ時計は高くなる。時計工といふ職業が馬鹿々々しいものでなくなる程度まで高くなる。

あらゆる熟練工、例へば旋盤工にしても同樣だ。彼等の勞働が割の惡いものになつて、旋盤工が減れば、冶金工業の發展は停止する。裁縫機械を欲しがつてゐる仕立屋も、鋤を求めてゐる農夫も、誰もかも困つてくる。

かやうに破壞された均衡はどうして回復されるか。それは複雜な熟練勞働の生產物の價値が、

單純な熟練勞働の生産物の價値以上に定まることにならなければ、決して回復されはせぬ。

ところで、一日分の複雜勞働が、同じく一日分の單純勞働よりもどれだけ多くの價値を形成するかといふ比較較量は、別に困難なことではない。

例へば、旋盤工が平均して、一生涯の勞働期間二十五年間なら二十五年間のうち、その二割に當る五年間を修業に費すとする。その場合には、彼は、謂はゞ只で働いた五年間の勞働といふものを二十年間に取返すために、二割五分ほど多い勞働報酬を得てよいことになる。さうすると、彼の一日分の勞働の生産物は、ちつとも修業を必要としない人夫のやうな單純勞働一日分の生産物の價値よりも、二割五分だけ多くの價値を形成しなくてはならないだらう。

かうして比較較量は、その他のどんな種類の勞働についてもやれることで、それによつて一切の熟練勞働、複雜勞働は、最單純な不熟練勞働——即ち人夫の勞働のやうな謂はゞ單なる勞働——に還元される。この單純勞働の一單位——即ち一日なり一時間なり——は、價値を形成する勞働の單位をなす。かくて、——吾々は、吾々の出發點であつた抽象的勞働に立戻つてゐる。

言ふまでもなく、個人的勞働を社會的勞働に還元したり、複雜勞働を單純勞働に還元したりするのは、政府がするのでもなく、オフィスでするのでもなく、また經濟學者がするのでもない。それは、商品生産社會特有の交換過程によつて、卽ち均衡の破壞と再建を繰り返す不斷の過程によつて、自然發生的になされるのだ。

以上を總括すると、諸君は遂に、次の如き價値法則の規定に到達したことになる。

曰く、各商品の價値は、それを生産するために社會的に必要な、平均的單純勞働の分量によつて決定される。

以下、吾々は、この勞働を單に社會的必要勞働と呼ぶであらう。

五　價値の役割

吾々は、兎に角以上によつて、『商品の價値は需要供給の關係で定まる』などといふ俗學說が如何に馬鹿々々しいものであるかといふことを知つただけでも、若干愉快に思つてい、だらう。

需要が供給より大なれば物は高くなり、供給が需要を超過すれば物は安くなると言ふ。それはその通りだが、しかしそれは商品の需要と供給が均衡を失つた場合の話ではないか。そんなら、需要と供給が均衡を保つ場合、一致した場合は、一體どうなるか？　その場合には「價値」は何によつて定まるのか？　大體、均衡が破れてゐるといふことは、均衡を得た狀態のあることを前提する。均衡を失つた場合ばかり取りあげて需要供給を持ち出して來るだけで、均衡を得た場合に對しては全く物の言へないやうな經濟學は、足が地についてゐない經濟學といふべきであらう。需要と供給が均衡を失つた場合には、商品は、或は價値以上に交換され、或は價値以下に交換される。其際、高くなつたり、安くなつたりしてゐるのは、商品の「價格」であつて、價値ではない。價格に就ては後に述べるが、價値の上下に動く所の價格と、其中心をなす價値とを混同するのは、馬鹿げてゐる。價値を價格にすりかへるやうな經濟學こそ、價値なき經濟學といふべきだらう。

商品の需要と供給のいづれか一方が他方を超過するといふ意味においての需給關係の變動は、商品の價値を說明しはしない。商品の價値は、需要と供給の一致した時にこそ定まるものなのだ。

そして、その價値は、商品の生産に支出された社會的必要勞働の分量によつて決定されること、それは吾々の究明し得たところであつた。

それでは、價値そのものは變動しないか？　大いにする。

マルクスは言ふ、――『一定の商品の價値の大きさは、其商品の生産に必要な勞働時間が不變であるならば、變化することはないであらう。が、この勞働時間は、勞働の生産力に變化ある毎に變化する。そして勞働の生産力は又、種々なる事情、わけても勞働者の熟練の平均程度、科學及び其技術的應用の發達程度、生産機關の範圍及作用能力、各種の自然的條件、等々によつて決定される』。

そこで、先づ自然的條件について言へば、年の豐凶に從つて農産物の價値は變動する。需給關係による價格の變動とは獨立して變動する。同じ一石の米でも、豐年の年の一石は、不作の年の一石よりもずつと少い勞働時間で穫れるから、價値そのものが低下する。

また、何か素晴らしい技術的進歩が起つたために、『若し僅かの勞働をもつて石炭をダイヤモンドに變へ得るやうになるとすれば、ダイヤモンドの價値は煉瓦の價値以下に低落し得るのであ

る』（マルクス）。

そこで、要約してマルクスは言ふ——「概括して言へば、勞働の生産力が大きければ大きい程、或る物質の生産に要する勞働時間は益〻小さくなり、その物質に結晶してゐる勞働量が小さければ小さい程、この物品の價値は益〻小さくなる。反對に、勞働の生産力が、小さければ小さい程或る物質生産に要する勞働時間は益〻大となり、斯くしてこの物質の價値も亦益〻大きくなる。從つて一定商品の價値の大小は、この商品に體現してゐる勞働の量に正比例し、その生産力に逆比例して變化する」と。

諸商品の價値を低落させるところの、勞働の生産力の發展は、本來は決して社會に混亂を惹き起す筈のものでない。しかし、資本主義社會をはじめ一般に商品生産社會においては、必然的に混亂が惹き起される。それは、この社會の生産には意識的な統制がなく、計畫がないからである。

生産に統制があり計畫がある社會は全く違ふ。例へばソヴィエットの國ロシアである。このロシアは、革命後間もないので、まだ完全な社會主義社會への途上にあるに過ぎないのだが、しかし

既に私的所有制度は原則的に××され、プロレタリア權力が××されてゐるために、統制經濟・計畫經濟を遂行する×××は××に出來てゐる。そこで、あの有名な五ケ年計畫を實行して、僅か數年間に勞働の生産力を素晴らしく增大させて世界のブルヂョアジーをびつくりさせてしまつたが、しかも各種の生産の間にも、消費と生産の間にもちやんと均衡がとれてゐて、混亂などは一つも起らないのだ。世界の資本主義諸國は失業者が二千萬人もあるといふべら棒な狀態だのに、さういふ未曾有の世界恐慌の眞只中にあつて×××××は失業者が出來るどころか卽つて人手が足らない位だといふことは、その何よりの證據ではないか。

吾々は、價値法則を說明した際に、商品生産社會では絕えず諸々の均衡が破れて混亂が起るといふことを明らかにしたが、それは一口に言へば、この社會の「生産の無政府性」に基づくのだ。そしてその無政府性は、更に私的所有制に基づくのだ。生産が社會的性質のものであるのに所有の方は私的であるといふ根本矛盾のために、社會的な勞働及び生産の長い鎖の、個々の環はばらばらになる。社會的な勞働と生産の一部分を受け持つてゐる筈の個々の生産者達は、社會の利

益などは一つも考へないで、私的所有の精神においてひたすらに個人的利益を追求する。從つて、社會全體の生産を統制するの、計畫的に遂行するのといふことは出來つこない。全體としての生産の計畫を樹てるためには、少くとも各企業の生産能力と販賣區域ぐらゐは知らなければどうにもならないのだが、もしそんなことを一々訊ねでもしようものなら、われらの生産者達は「營業の祕密」を發くつもりかと言つて眞赤になつて怒り出す。しかし、私的所有制を基礎とする限り、それも當り前だといふことになる！

ところで、自分は自分の企業の「絶對の主人」だと心得てゐるわれらの生産者達はどうやつてゐるか？

これはまた全く出鱈目法に、あてずつぽうに、行き當りばつたりに、生産をやつてゐる。それはその筈だ、彼等は自分の生産する商品が實際どれほど需要されてゐるかも知らないのだし、また知る方便もない。生産者としての彼等は、私有財産の墻によつて消費者から隔離され、消費者と敵同士にさへもなつてゐる。生産者と生産者との間の關係も同樣で、絶えず「猿蟹合戰」をやつ

てゐる。だから彼等は、自分の必要とする原料や機械がどんな風にしてどれだけ生産されてゐるかも知らないし、また知る方便もない。まして同業の連中に至つては、相手を蹴落して顧客を奪ひ取ることに夢中なのだし、その戰術の一つとして互ひに「營業の祕密」を死守するといふ有樣だから、自分の生産する商品が社會全體でどれほど出來るかといふことなどは皆目判らずにたゞ生産する。――これでは需要供給の均衡、その他等々の均衡が到る所に破れて絶えず混亂を起すのはちつとも不思議でない。

この狀態は、私有財産制の存續する限り、斷じて克服出來ないことは明らかだ。絶えず押しあひへしあつてごつた返してゐる社會、それは、その日暮しの社會である。明日を知らない社會である。かくて「宗教の阿片」も必要になる。「世の中はすべて運さ」といふことになる。

そこで諸君は、もつと根本的な問題を提起する權利がある。一體、何が、この盲目的に動いてゐる商品社會の巨體を破滅から救つてゐるのか？　この、無秩序の商品社會が、初發の一歩において破滅しないばかりでなく、却つて發展能力を示してゐるのはどういふ譯か？　この社會が、

たとひお粗末なあやふやな均衡でも、とにかく均衡を保ち得る根本事情はどこにあるか？
だが、諸君はすでに此の秘密を解く鍵を與へられてゐる。それは價値法則の中にある！
諸君は、もう一度、商品生產社會の根本矛盾を想起すべきである。それは、生產の社會的性質と所有の私的性質（私的所有制）との矛盾であつた。この矛盾は、交換を必然ならしめたことを諸君は知つてゐる。交換は、ばら〳〵になつた鎖の環を結びつけようとする。離れ〳〵の個人的勞働を結びつけて、勞働及び生產の社會性を發揮せしめようとする。ところが、——こゝに核心がある——、でたらめの交換では均衡は得られない。生產と消費の間、異なる生產と生產の間の諸均衡、生產者相互の生活水準の均衡等々は得られない。均衡が得られなければ、社會的勞働社會的生產たるの實はあがらない。至るところに故障がある。必要なものは不足であり、折角出來たものが不用であり、無駄骨を折る者があり、失業する者があり、餓死するものがある。
然らば、交換社會における均衡はどうして得られたか？　それは、多かれ少なかれ價値の線に添うて交換が行はれたからである。それが唯一の事情であつたのだ。

價値現象は、特殊の、矛盾した社會關係を反映する。一方、私有財産に基づく個人的利益の追求は、生産の無政府性となり、絶えず社會の諸均衡を破らうとする。他方、社會的生活からの促迫は、これも盲目的に、絶えず均衡の再建に向つて作用する。交互に作用する此の二つの力は、いづれもたゞ交換を通じて作用しつゝ、必然的に、價値の成立に導くのだ。また導いたのだ。

價値に從つての商品交換とは、商品に體化された社會的必要勞働に應當する交換のことである。從つて、それは結果においては、一種類の社會的必要勞働量と、他種類の社會的必要勞働量とが取りかへられることなのだ。すべての商品が價値に從つて交換される場合には、商品の過不足は少しもなく、恰度社會の必要とするだけのものが生産されてゐるだらう。その場合にはまた、すべての種類の社會的必要勞働が取りかへられて過不足なく、社會の各人の勞働及生産は、お互ひのためのものとなつてゐるだらう。その場合には更にまた、社會の各種の勞働は、恰度釣合ひのとれた割合で分配されてゐるだらう。

ところが、この社會の生産者達の各人は、決して價値に從つて交換しようとしてゐるのではな

い。各人はみな、自分の商品は出來るだけ高く、他人の商品は出來るだけ安く、といふ意圖をもつて市場に進出し、闘爭する。だから、商品が正確に價値通りに交換されることなどがあれば、むしろ偶然だ。だが、しかしまた、現實の交換の割合が價値から餘り離れるやうなことがあれば、商賣がへが起つて需給の變化を惹起すから、再び價値線へ引戻されて來る。

かくして、價値の線は均衡の線である。諸々の商品の交換は、多かれ少なかれその價値線に添うて押進められて行く。そしてさうである限りにおいて、ともかく曲りなりにも均衡は商品生產社會に實現されるのだ。それ故にこそ、生產の續行と、社會生活の續行は可能なのだ。

吾々はこゝに、此の社會における調整者としての大役を引受けた「價値」を見る。そしてその役割を演じ得るものはよかれあしかれたゞ價値だけなのだ。

ところで、諸君は、商品生產社會の唯一の調整者としての「價値」なるものは、何とグロテスクな調整者であることかと言はずにはゐられまい。

第一、價値は決して自ら進んで指導するやうなことはない。それどころか、えたいの知れぬ魔

物のやうだ。價値はたしかに實在する。總べての人は價値を追うて走つてゐる。しかし、その實體は眼に見えぬ。例へば雷鳴として現はれる電氣の正體が摑めないと同じやうに摑めない。價値は決してあたりまへの口を利くことのない無氣味な存在だ。おまけに意地惡い。一度だつて彼は、生産者に、「俺は君の商品の中にゐる」と前もつて教へたことがない。生産者達が、自分の商品を他の商品と交換してしまつた時に始めて、ばアと言つて顏を出して見たり、君の物の中にはゐなかつたよ、と笑つて見たりする。彼は、コースそのものを示す調整者ではない。たゞ、コースから外づれてゐるといふだけのことを、しかも外づれてしまつてからやつと、何人かの苦惱によつて知らせるのだ。おまけに、調整者たる價値自らが、「生産力の變動」につれて浮かれ歩くのだから堪らない。

だが、それもその筈ではないか。根が矛盾した社會關係の産物なのだ。

そこでまた、一つの「社會悲喜劇」も生れてくる。それは、「魂を置き忘れた男の話」ではない。「勞働を置き忘れた人間の話」である。彼は、商品を崇拜する。「物」を禮拜する。

といふのは——

商品生産社會における社會的必要勞働の取りかへは、直ちに人間勞働として互ひに素直に取りかへられるのではない。さうではなくて、諸個人の人間勞働は先づ勝手に「物」の中に結晶せしめられ「物」に體化せしめられるのだ。かく、商品たるべき「物」に體化されて始めてそれは、他種の社會的必要勞働と取換へられる資格を得る。そして恰度うまく、他種の社會的必要勞働と取換へられた時に始めて、自己もまた社會的必要勞働であることを立證する。そしてまたその時に始めて、價値は、我茲に在り矣と現はれ出でるのだ。誠にやゝこしい話だが、商品生産社會では、さうであるより外はない。

そしてその「價値」だが、それがまた交換價値として現はれるより外に現はれやうがない。例へば下駄一足は、足袋二足等々と交換される。足袋二足等々は、下駄一足の交換價値だが、かゝるものとしての足袋二足等々がなければ、下駄一足そのものゝ價値も現象界に存在し得ないのだ。同時にまた、交換價値といふやつは、例へば足袋二足等々の「物の形」を身につけて現はれるよ

り外に現はれやうがない。おまけにそれは、物と物、商品と商品とが現實に交換された時にだけ姿を見せる。（交換されないうちは何が飛び出すかわからない）。

價値の形成は、交換を前提する。價値はすべて生産過程においてのみつくられ、交換によつてつくられるのではないが、しかし交換を前提して形成され、また交換によつてのみ實現される。それによつてのみ價値たる自己を實證し、顯現する。しかも、たゞ「物」の姿においてゞある。

かやうに、こゝでは、人間勞働は物化され、外化されてゐる。人間勞働によつて形成される價値は、商品に結晶せしめられ、商品の一定量としてのみ人間の前に立ち現はれる。

これが、商品生産社會の唯一の調整者の「横顏」である。

この社會の人々は、彼等のグロテスクな調整者の宿るであらう商品の前にひざまづく。南無商品様！　此程は貴方様のお蔭でございました、今度もまた御機嫌でいらつしやいますやうに！

自分の企業の「絶對の主人」である筈の人間達が、自分自身の勞働のことは忘れ果て、自分自身の勞働でつくつた商品の前に頭を下げる。商品は偶像に祭りあげられる。

それは、どうだらう。自分の勞働が果して有用勞働であるかどうか、社會的必要勞働であるかどうか、從つて價値として實現されるかどうか、そして自分の懷があたゝまるかどうか、そしてまた必要な物・ほしい物が手に入るかどうか、それとも馬鹿な損をして眞ッ裸になつてしまふかどうか、――一切のことは、たゞ商品が賣れるか賣れないかにかゝつてゐる。賣れるまでは、どうなることかわからない。商品こそは彼れの運命を支配してゐるかのやうに思はれる！

彼等は、事實においては商品生産社會の生産關係に支配されてゐる。然るに彼等は、商品そのもの、中に人を支配する力があるかのやうに思ひ込む。從つてまた、彼等の生産物の持つ商品性が絶對不變であるかに思ひ込む。彼等は生産關係の變革を思ふどころか、ます／＼夢中になつて商品價値の尻を追ひ廻す……。

そこで吾々は、いよ／＼貨幣なるものを考察すべき順番になつてきた。

六　貨幣の胚芽

さて、今迄のところでは、商品交換が日常不斷の現象となつてゐるやうな商品生產社會を前提して價値を分析したのであるが、さういふ社會には、貨幣といふものが存在するのは言ふ迄もない。しかも、その貨幣がまた、何かしらすばらしい役割を演じてゐる。人々は、商品を追つかける前に先づ貨幣を追つかけてゐるやうに見える。貨幣こそ、價値中の價値として、世にも稀れなる光輝を放つてゐるやうだ。世間が持てはやすのは、品持ちではなくて、金持ちである。

吾々は、以上の研究においてはこの貨幣を暫く預かつておいたのだが、預かつたからといつて何も利息をつけようとした譯ではなく、研究上十分の理由あつてのことである。人間は光を見ると驚嘆する。そしてしば〳〵あがつてしまふ。例へば月光の美しさにうたれると感激し昂奮して月をおがんでしまふ。月光は、月そのものが放つ光だと彼は思ひ込んでゐる。人間は何十萬年か前に此の地球上に立ち現はれて初めて月を眺めてからこのかた、てつきりさうだと思ひ込んで來たのだが、今に至つても決してその錯覺から拔け切つてゐる譯ではない。さういふ彼に向つて、いきなり彼れの禮拜の目的物をとらへ、あのお月樣が光るのは實はお天道樣の光が映るからなん

だと說明して見たところで、そんなのは夜と晝をとつちがへてゐるんだ位に思ふだけだらう。と同じやうに、いきなり貨幣を取りあげて貨幣の謎を解かうとしても無駄である。また、商品價値の說明の中にいきなり貨幣を持ち込むことは、人々が貨幣に眩惑されてゐればゐるだけ、理解を困難ならしめる。それにまた、價値の本質は貨幣を度外視しても理解し得るが、貨幣の謎は、價値の本質がわからなければ到底解けはせぬ。さういふ譯で、貨幣のことは後に廻したのだ。

ここで今度は貨幣の番だが、——先づ誰でも氣附くであらうことは、今や、すべての商品の價値は貨幣で現はされてゐることだ。ジョウニィウォカー一杯は一圓である、卽ち一圓紙幣一枚である。あつぱつぱ一枚は二圓である、卽ち一圓紙幣二枚である。チュインガム一個は十錢である、卽ち十錢銀貨一個である。等、等。(尤も、紙幣や銀貨についての說明はまだ大分後になるが、ここでは取りあへずそれらのものは、本位貨幣と呼ばれてゐるピカ〳〵の金貨の身代りと見ておけばよい)。

かやうに貨幣が諸商品の價値を現はすといふことは、誰でも知つてゐるのだが、そのことは何

時にまた最も本來的な貨幣の機能であるのである。そしてこの、諸商品の價値を現はすところの貨幣なるものが生じたのは、また生じなければならなかつたのは、商品の價値そのもの・性質に基づいてゐる。で、問題は、貨幣の生ひ立ちである。——

諸君はすでにかういふことを知つてゐる、——商品の價値は、商品たるもの、物質に固有のものではなくて、一定の社會關係を現はしてゐる。しかもまた、商品が諸個人の慾望を充たす性質、商品の社會に對する有用性が、價値を形成するのではなく、商品の生産にとつて社會的に必要な勞働の量が價値を形成する。卽ち、價値の本質は社會的必要勞働である。

ところで、商品の生産者＝所有者は、絶えず一つの必要に迫られてゐる。彼等は、自己の商品の價値を實現しなければならぬ。謂はゞそれを本當に自分のものにしなければならぬ。そしてまた、その價値の大小をも知らねばならぬ。さうしなければ、次の生産を續けることも出來ないし、どんな風に生産すべきかもてんでわからない。いや、「喰べて行く」ことさへも出來ないのだ。

ところがまた、彼等は、交換によつて始めて自己の商品の價値を實現する。それによつて始め

て自己の商品の價値を知り、その大小を知る。

けれども、こゝに困つたことには、商品の價値といふやつは、決して自己をそのまゝ現はしはせぬ。價値の本性は一定の社會關係であり、價値の本質は社會的必要勞働時間だから。

例へば、一足の下駄を二足の足袋と交換した下駄屋さんは、自己の商品一單位の價値を二足の足袋として實現した。しかし、下駄一足の價値が足袋二足として實現されるといふことは、下駄一足の生產に必要な社會的平均勞働時間は、足袋二足の生產に必要な社會的平均勞働時間に等しい關係にあるといふ社會關係を現はしてゐる。吾々は前に、社會的必要勞働時間なるものを研究した際に、その概念を明らかならしめる方便として、均衡を得た狀態の下における足袋一足の社會的必要勞働時間を例解的に計算して示したが、吾々が若し現實の下駄屋さんであつたならば、現實の社會的必要勞働時間を計算することが出來るだらうか？　それは出來ない。

むろん下駄屋さんは自分の勞働時間は知つてゐる。しかしそれは彼れ個人の勞働時間であつて社會的必要勞働時間ではない。彼はまた社會的必要勞働時間についても絕えずおよその見當はつ

けてゐる。それをつけてゐればこそ、下駄商賣は値がいゝとかわるいとかいふこともわかるのだ。しかしそれは極く大ざつぱな見當に過ぎないので、多かれ少なかれ正確な計算に基づくものではない。從つてまたそれは、現實の市場の交換の場合に、これが下駄の價値であるなどゝ言つて持ち出したところで誰も相手にしないものである。

現實の商品生産社會の一定時における下駄一足の生産にとつて、社會的に必要な平均的勞働時間は何時間かといふやうなことを、いくら一人の下駄屋さんで知らうとしてもわかりつこはない。その時その社會に何千何百人の下駄屋があつて各々一足の下駄に何時何十分間費してゐるか、何百足づゝ生産してゐるか、それからまた、下駄の材料たる桐材や鼻緒や金具等々の生産にはそれぞれ何千何百人の人間がおの〳〵何時何十分費してどれだけづゝ生産してゐるかといふやうなことを知ることは、一人の下駄屋さんの能力を超越する。おまけに、勞働の生産力が絶えず變化する。假りに彼は、自分こそ日本一の下駄作りの名人で、自分のやうに四時間で一足つくる者は一人もないと今が今まで思つてゐても、その時すでにヨリ巧妙な道具が發明されて三時間でつく

れるやうになつてゐるかも知れないのだ。

だが、かやうに、實際的には、社會的必要勞働時間を計算することが出來ないからといつて、社會的必要勞働そのもの、存在を疑つたり、それが價値の實體であることを否定したりするのはむろん馬鹿げてゐる。それは恰度、一定時における世界中到るところの氣壓を知ることが出來ないといふ理由から、氣壓そのものの存在を疑つたり、氣壓の高低が風の實體であることを否定したりするのとおんなじだ。

私的所有制を廢止して社會全體の生産を一定の機關によつて統制する社會主義社會、卽ち商品のない社會が發達すればするほど、社會的必要勞働を知ることは容易になる。しかし、私的所有制に基づいて、個々の生産者がいづれも盲滅法に行き當りばつたりに生産しつゝ、互ひに敵同士になつてゐる商品生産社會においてはそれは不可能だ。商品の價値は、決して自己をそのまゝ現はさないと言つたのはそこである。

では、われらの下駄屋さんは、自分の商品の價値をどうやつて知るか？

彼はたゞ、下駄一足の價値は、それと交換されるところの足袋二足であることを知り、あつぱつぱ一枚であることを知り、葡萄酒一合五勺であることを知るだけだ。貨幣は尙は暫く度外視する。これを言ひ換へれば、一定量の一商品（一足の下駄）の價値は、たゞ、他の商品の一定量（例へば足袋二足）といふ形態をとつて現はれ得るだけなのだ。

さうすると諸君は、それは下駄一足の交換價値のことではないかと言ふだらう。その通りだ。交換價値は、價値の現象形態である。吾々は、先づ價値の現象形態としての交換價値から出發してさうして價値の實體を探りあて、その上でもう一度現象形態に立ち戻つてゐる。吾々は今や價値の現象形態、卽ち價値形態の分析を始めてゐる。そして此の價値形態の中に含まれてゐる「貨幣の胚芽」をつきとめようとしてゐるのだ。

で、兎に角まづ、下駄一足が足袋二足と交換されたとする。そしてたゞそれだけだとする。今や前者は後者に等しいといふ關係が成り立つてゐる。そして前者の價値は後者によつて表現されてゐる。これを一つの表式であらはすならば、

下駄一足＝足袋二足

といふことになる。これは價値形態としては最も素朴なもので、マルクスは「單純價値形態」と呼んでゐる。

諸君は、おなじみの下駄屋さんの立場に立つて見る。この場合には、彼の商品下駄一足の價値は、例へば八時間なら八時間の社會的必要勞働量として絕對的に自己の姿を現はすかはりに、他の商品足袋の一定量（二足）といふ形において、相對的に（卽ち他のものとの關係において）、自己の姿を現はしてゐる。その場合の下駄の價値は「相對的價値形態」にあるといふべきである。

ところで、下駄の價値が相對的價値形態にあるといふことは、謂はば下駄の價値が足袋二足を用ひて自分の價値を表現してゐるといふことである。人は鏡を用ひなければ自分の姿を見ることが出來ないのだが、一商品の價値は、他の商品を價値鏡として用ひなければ自己を表現することが出來ないのだ。吾々の例においては足袋二足がその價値鏡の地位に立つてゐる。かやうに、一つの商品の價値鏡の役をしてゐる商品は、「等價形態」にあると言はれるのだ。

むろん足袋が下駄の價値を表現する時があれば、反對に下駄が足袋の價値を表現することもあるわけだから、一寸考へると相對的價値形態だの等價形態だのといふ區別を設けるのは無用のことのやうな氣がするかも知れないが、どうして無用どころではない、極めて重要だ。どちらがどちらの價値を表現するにしても、自己の價値を表現する方の側に立つ商品と、その表現の道具になる方の商品とでは、まるで役割が違ひ、意義が違つてゐる。

マルクスはそこに眼をつけた。そしてその意義をはつきりと指摘した。

諸君は諸君の心眼をもつてこの單純な價値形態をぢつとみつめて見給へ。そこに相對した二商品のうちで、等價形態としての足袋なるものは、すでに他商品の價値を自己の姿で現はすといふ貨幣の役割と同じ役割を營みはじめてゐるではないか。むろんそれはまだ貨幣ではない。しかし大國主命は醫者ではなかつたけれども、皮をひん剝かれてひい／＼泣いてゐる兎の赤肌を癒してやつた限りでは、發展した社會における醫者の役割と同じ役割を演じたことになる。それと同じやうにいい、これらの足袋は、下駄の價値を現はす役割をする限りでは、早くも貨幣同樣の役割を

する。

そこで、諸君が、もう一歩突つ込んで考へると、更にかういふことが明瞭になつてくる。——問題は下駄一足の價値であり、その價値の大きさをはつきりと表現することに關してゐる。つまり、こゝに下駄といふ重寶なもの（有用なもの）があるが、その交換價値はどれほどか、といふ場合なのだ。吾々の例では、下駄一足は足袋二足と交換され、從つて足袋二足は下駄一足の價値を表現したのである。つまり、下駄といふ重寶なものの價値は一圓札二枚だ、と言ふやうな具合に、足袋二足だ、と言つた譯である。ところで、さういふ關係の成立つた限りにおいては、下駄の方は、單に重寶なもの、有用なものとして、卽ち單なる使用價値の姿としてのみ取扱はれるが、足袋の方は、單に下駄の價値を身をもつて現はすものとして、卽ち單なる價値の姿としてのみ取扱はれる。さうだとすれば、これは非常に意味の深い發展であるといはねばならぬ。なぜなら、諸君は前に、商品なるものは使用價値と交換價値とを一身に具有した兩面の怪物であることを見たのだが、諸君がこゝに價値の現象形態を研究してその單純價値形態を仔細に調べて見ると、

前には一商品の内部の對立をなしたものが今や二商品間の外部的な對立となつて現はれてゐるからである。卽ち、單なる使用價値の姿にある下駄と、單なる交換價値の姿にある足袋とが相對立するといふ關係になつてゐる。これは、一商品內の矛盾・對立が、更に外部に擴がること、擴大されることを意味するのだ。

諸君は、足袋が下駄の價値を表現する場合には、足袋は「單なる價値の姿」として取扱はれるといふとちよつと腑に落ちないかも知れないが、それならば發展した商品生產社會において貨幣と呼ばれるものが一切の商品の價値を表現してゐる場合を考へて見るとよい。例へば小判は金で出來てゐた。卽ち金が貨幣の役割をしてゐた。その金は指環にもなり、簪入れの金具にもなるから、使用價値を持つ點では足袋と違はない。しかるに、貨幣としての金は、さういふ使用價値としては取扱はれずに、たゞ一切の商品の價値を現はすものとして、卽ち一切の商品の價値姿態として、取扱はれる。もう一つ言ひ換へれば、價値の化身として役立つてゐる。吾々の例における足袋も、まことに端緖的にではあるが既にそれと同樣に取扱はれ、それと同樣の役割を始めてゐる

ゐるといふのである。この點に於いても、諸君は、單純な價値形態のうちに早くも貨幣の胚芽を見ることが出來るだらう。

が、さうなつてくると、早くもそこに一つの錯覺が起り得ることになる。足袋なら足袋、金なら金が、足袋そのまゝの姿、金そのまゝの姿でもつて、下駄一足の價値を表現するとなると、それらは謂はゞ始めから價値の體を具へてゐるやうに見えてくる。さうなると、何かしら足袋なり金なりが價値そのものであるかのやうにも思はれてくる。價値そのものであるならば、直ぐに何とでも交換出來る譯である。そこで、また、何とでも直ぐに交換出來るといふ性質までが——穿けば足が温まるとか、美しく光り輝いてゐるとかいふ性質などと同じやうに——本來的に足袋や金に具はつてゐるかのやうに思はれて來たりするだらう。

そのことのうちにすでに「貨幣の謎」は胎まれてゐる。然るにその「謎」は、この單純な等價形態が完全に發展して貨幣の形態をとつてからやつとブルヂョアジーやその學者達の「粗雜な注意」を惹いて彼等を迷はすに至るのだ、とマルクスは言つてゐる。

そこで、締めくゝりをする前に、諸君はもう一度下駄の方に眼をとめて欲しいのだ。下駄の方は、相對的價値形態にあり、他商品との關係に於いて自己の價値を表現してゐるのだ。そこには既に、一の社會關係が仄めかされてあることに諸君は氣付くだらう。下駄を生産した社會的勞働は、足袋を生産した社會的勞働と比較され、後者によつて量られてゐる。そしてこの關係が生じたのは、二つの商品がいづれも社會的必要勞働の結晶體として交換されるからなのだ。

では、要約しよう。

價値の現象形態（即ち價値形態）は、人間と人間との間に存する一定の生産關係が、物と物との關係として表現されるものに外ならぬ。商品生産社會に於いては、その人間勞働は外化され、物化されねばならなかつた。社會的必要勞働としての人間勞働は、商品に體化されて價値を形成する。この價値は、特殊の生産關係のお蔭で、それ自らを直接に絶對的に表現することが出來ない。從つて一商品の價値は、たゞ他商品の姿態、即ち他物の姿態に於いてのみ表現せられ得る。そして他商品による價値表現は、とりも直さず、商品自體の矛盾・對立の擴大化を意味してゐる。

この矛盾・對立の擴大を意味する單純價値形態のうちに既に貨幣の胚芽は含まれてをり、貨幣の謎も仄めかされてゐる。そして最後に、等價形態たり得るものは、必ず他の商品でなければならず、且つ自分自身も價値を有するものでなければならぬ。そして少くともこの二つの條件は、やがて貨幣たるべきものが具へねばならぬ條件である。

七　貨幣の成生

交換の發展につれて貨幣は成生する。——

が、こゝで、むかし／＼の物々交換の有樣を振返つて見ることは無益ではない。

獵に出て山道を踏み迷つた男がある。やつとのことで人の臭ひのする處まで出て來たが、足に大きな怪我をしてゐた。部落の女は、見知らぬ男に、大變よく效く藥があるがやらうかと言ふ。男は、よろこんで、日頃祕藏してゐた美しい石を彼女にやることにする。靈藥と美石は交換された。ブルヂョア經濟學者は、さういつたやうな牧歌的な「物々交換」に基づいて、價値現象を說

明し、物の效用や使用價値、卽ち物が欲望を滿足させる性質から、商品價値を導き出さうとする。しかし、さういふ偶發的な「物々交換」ならば恐らく何十萬年も前から行はれてゐたであらうが、そんな交換が何百萬べん繰返されたところで、商品としての物々交換は始まらない。商品としての交換がなければ價値現象は生じない。從つて貨幣も生じない。

商品としての物々交換が始まるのには、人類社會の生産力の發展が一定の段階に達して全く新らしい社會史の幕が開かれねばならぬ。言ひ換へれば、たとひ素朴な物々交換でも、人間勞働の生産物が交換によつて商品となるのは、一定の歷史的時期における人間社會の構成に基づいてゐる。人間と人間との間の特殊の生産關係に基づいてゐる。商品は、さうした特殊の社會構成と生産關係の成立と共に發生し、消滅と共に消滅する。

で、たとひ物々交換でも、商品としての交換が起るのには先づ、生産力の發展の結果、生産者達自身の使用する以上に多く生産物が生産されてゐなければならぬ。その超過する部分は、もはや生産者達自身の使用對象ではない。卽ち、それはもはや「祕藏の美石」や「祕藏の靈藥」では

ない。反對にそれは何時でも他人に讓渡し得るものである。第二に、この生產物の讓渡は一方的であつたり強制的であつたりしてはならぬ。即ち對等の立場に立つた者の交互的な讓渡しでなければならぬ。さうであるためには、人々は、たとひ暗默の間にでも、その讓渡し得る物件の私的所有者として對立し、かつ互ひに獨立の人格として對立し合はなければならぬ。つまり彼等は、戀人同士だつたり、血緣關係で結ばれた小社會內の者同士だつたり、また「主從」であつたりしてはならないのだ。

が、もちろん、人類の古い社會生活の形態だつた原始共產體（原生的共同體）の內部にある個個人は、さやうな私的所有者として對立しはしなかつた。そこで、商品としての物々交換は、最初はまづ、一の共同體の者と、他の共同體の者との間に起つてきた。それは、熊の皮と鹽の交換だつたこともある。砂鐵と米の交換だつたこともある。が、兎に角、さうした生產物が、謂はゞ共同體の對外生活において商品の性質を備へて來ると、今度はそこに反應作用が生じてきて、それらの物は共同體の內部の生活においても商品の性質を持つやうになつて來る。

ところで、初期の物々交換においては、生産物はすでに商品の性質を持つたとしても、商品と商品の交換される數量の割合は、はじめは全く偶然的のものであることは當り前である。さうした際には、生産物の所有者達がお互ひにそれを讓り渡し合はうとする意思行爲の方が重きをなし、謂はゞ銘々の主觀が幅を利かすのだから、交換の數量關係即ち熊の皮何枚が鹽どれだけと交換されるかは、勢ひ氣まぐれのものとなり易い。

が、しかし、さうやつてだん〳〵やつてゐるうちに、自分の部落には出來ないが他所では使つてゐる物、自分は持たないが隣人が他所で交換して來た物、さういふ物に對する欲望は次第に確立されて來る。交換の度數は多くなり、交換される物の範圍も擴がつて來る。かくして交換は絶えず繰り返されることによつて次第々々に一の規則正しい社會的行程になつて行く。

そこまで行くには、歴史上相當長い期間を要したことは明らかだが、かゝる過程の進行して行くうちに、人間勞働の生産物の少くとも一部分は、もはや生産者自身の使用・消費の爲めではなく、全く他物と交換することを目的として生産されねばならなくなつて來る。さうするとそこに、

人間勞働の生產物には、二種の有用性が生じて來ることは明らかだ。一つは、生產者の直接消費に對する有用性又は役立ちであり、もう一つは、交換の爲めの有用性又は役立ちである。二種の有用性の區分はます／＼確立され、兩者の對立は明確になつて來る。そしてそこに、使用價値と交換價値との分離が起り、交換價値はます／＼獨立の姿態をとるやうになる。と同時に一方、物と物とが交換される數量の割合もまた、前のやうに偶然的な氣まぐれなものではなくなつて、專ら社會的な生產そのものによつて決定され、個々人の意思行爲とは獨立したものになつて來る。一口に言へば、交換の繰り返し、そこから生れて來る一定の習慣は、人間勞働の諸々の生產物を、それ／＼の價値量に轉化してしまふのだ。

さて、諸君は、商品の價値の表現形態を研究し、その最も單純な形態のうちに早くも貨幣の胚芽を發見したのであつた。商品としての物々交換の始めの頃に、例へば熊の皮一枚が鹽一山と交換され、鹽は、熊の皮の價値を身をもつて現はす「等價形態」であつたとする。諸君はすでに、この一山の鹽でさへ、交換の發展した社會における貨幣の役割と同じ役割を演じ始めてゐること

を看取するにはするのだが、しかしその役割たるや、まことにお粗末至極のものであつたことは明らかだ。

二つの共同體の間にたま／＼熊の皮と鹽との交換が始まつてきたといつたやうな偶發的な場合であるならば、兩者の數量の割合がいゝ加減のものであることは言ふ迄もない。鹽の「所有者」その人が、鹽の分量に就いて正確な觀念がないといふやうなことさへあり得るだらう。それにまた、そんな場合には、熊の皮の價値の大小は、それと交換される鹽の多少に從つて決定されるやうにさへ見え、熊の皮が一定量の價値を持つが故に一定量の鹽と交換されるのではないかのやうに思はれるだらう。つまり、熊の皮の價値は、生産の條件によつて定まるのでなく、交換の條件によつて定まるやうにさへ見えるだらう。さうしたことは、商品交換の眼鼻がつかない胎生期のことだから仕方がない。

しかし、たとひ熊の皮と鹽だけの交換であつても、それが繰り返されて行くと事情は變つてくる。次第に、生産の條件が、勞働の條件が、交換の條件を支配し、價値を決定するやうになつて

行く、熊の皮一枚ぐらゐのためにそんなに澤山鹽はやれない、といつたやうになつてくる。乃至は、その反對のことがわかつてくる。つまりは社會的必要勞働がものを言ふことになる。

が、交換が頻繁になり、交換される物の範圍が擴がるのにつれて、價値表現の方も發展する。熊の皮は、もう鹽だけと交換されるのではない。鯛、椎の實、砂鐵、貝、米、麻布、鍬、等々、とも交換される。

前には、價値表現は、

熊皮一枚＝鹽一山

といふ單純な形態をとつたが、今度はそれが擴がつて、

熊皮二枚＝｛鹽三斗／米五升／麻布一反／砂鐵五百匁／鍬一挺｝

といふ「擴大された價値形態」に變つて來る。これは第二の價値形態である。

第二の價値形態にあつては、熊の皮の價値は、ひとり鹽の姿で表現されるだけではなく、米の姿、麻布の姿、等々、多くの姿で表現されることになる。およそ熊の皮と交換されるほどの商品は、それ〴〵の分量においてすべて熊の皮の「等價形態」をなし、熊の皮は今や多數の異なつた價値鏡を持つことになる。

かうなつてくると、交換される物の數量の割合は、もはや前のやうに偶然に定まつたい、加減のものではなく、ます〳〵社會的必要勞働に從つて決定されるといふことは明らかだらう。つまり、熊の皮、米、麻布、等々を生産する生産者個々の異なる具體的勞働は、交換を通じて、抽象的な人間勞働一般に還元されると同時に互ひに結びつけられて、全體としての社會的勞働の一部分にならうとする。そこで、個々の商品の價値は、おの〳〵その生産に要する社會的平均勞働の分量によつて決定されようとするから、その社會的必要勞働量に變化なき限り、價値もほゞ一定する。熊の皮の價値は、もはや、それと交換される鹽の分量の大小によつて大きくもなり、

小さくもなるといつた風のことはあり得ない。從つてまた、價値といふものが交換から生じ、交換條件によつて決定されるかのやうな外觀は無くなつた。熊の皮二枚は、如何に多くの物と交換されてもそれ〳〵にほゞ一定の割合で交換される、――即ち米なら五升、麻布なら一反、砂鐵なら五百匁目といつた割合で交換されるといふことになれば、熊の皮の價値は、その時々の交換條件によつて定まるのではなく、社會の生產條件によつて定まるといふことも睹易くなつてくる。

それは同時にまた、價値表現の「一步前進」であることは言ふ迄もない。表現はヨリ容易になつてくるし、またヨリ正確にもなつてきた。

マルクスは、この第二の價値形態に關し、次のことに注意せよと言ふ、――即ちそれは、商品價値といふものは、それを表現してくれる他商品が米であらうと鹽であらうと鐵であらうと、その使用價値の形態如何には全く無頓着なものだといふことだ。

ところで、この第二の、擴大された價値形態の特徵は、各商品は、それ〳〵に、樣々の價値鏡

（等價形態）を多數に持つけれども、否なさうであるが故にまた、すべての商品に共通な、統一的な等價物・價値鏡はまだ存在しないといふ點にある。

これは、この價値形態の缺陷を意味し、交換の不便を意味するのだ。

交換の度數と範圍が擴がつて、規則正しい社會的行程にならうとすればするほど、商品の所有者達は、價値表現によつて、商品の價値の大小を知る必要に迫られることます〳〵甚しい。その場合に、共通の價値鏡・等價形態が無かつたならばどうか？

熊の皮二枚の價値は、鹽三斗として表現され、また麻布一反としても表現される、等、等だ。それはいゝが、しかしそれだけでは、熊の皮の所有者＝生産者は、價値の點から見て、自分の商品を麻布と交換する方が有利なのか、それとも鹽と交換する方が有利なのか、それを決定することは出來ないだらう。

では、どうすればそれがわかるか？　それは、第三の、共通の價値鏡を見出すより外に方法はない。例へばそれが羊だとする。羊一頭は、熊の皮となら二枚、麻布となら一反と交換されるが、

しかし鹽となら、三斗ではなく、四斗と交換されてゐる。それが解れば、熊の皮の先生は、鹽と交換するよりも麻布と交換した方が有利だといふことを知るだらう。しかしどうして、それがわかつたか？　それは、羊といふ第三の共通の價値鏡があるが故にのみわかつたのだ。

また、米をつくらうか、麻をつくらうか、それともいつそ鰌すくひをやらうかと考へてゐる者にとつても同樣だ。米は、砂糖等々と交換され、麻は熊の皮等々と交換され、鰌は粟等々と交換されるとしても、それらすべてのものと交換される第三の、共通の、唯一の價値鏡たる商品がなかつたならば、米と麻と鰌の價値の大小を比較することは出來ないだらう。

そこで、どうしても、すべての商品に共通な、一般的な等價形態が生じねばならなくなる。

個々の商品所有者から見れば、共通の等價形態を持つことが必要である。しかし個々の商品所有者の頭腦の中で、必要であると意識されるそのことは、實は交換の發展によつて必然ならしめられるのだ。即ち、一方では生產がます〳〵社會的生產となるに拘らず、他方では所有がますます私的性質を強めて來るといふ矛盾の展開によつて、すべての商品の價値を表現する唯一の共通

の鏡が必然的に生じなければならなくなつたのだ。

が、さて、その共通の等價形態、價値鏡は、どのやうにしてつくり出されるか？

マルクスは言ふ——

第一の單純な價値形態は、『勞働の生産物が、偶然的な、且つ臨機の交換によつて、商品に轉化されるやうな、創草の時代に限られた事實である。』第二の擴大された價値形態、卽ち『發展せる價値形態は、勞働の生産物例へば家畜が、もはや例外的でなく習慣的に、種々なる商品と交換されるやうになつてから事實上はじめて現はれてくる』。ところで、一般的等價形態は、『必然的に商品世界の共同の仕事としてのみ發生する』。

それは天才の發明によるのではない、帝王の命令によるのでもない、さうではなくて、たゞ、諸々の商品所有者達の全く散文的な市場の行動によつて自然發生的につくりいだされる。

「共通の價値形態」は、實は、第二の『擴大された價値形態』の中に胎まれてゐる。諸君は、第二の價値形態の特徴を想起するがよい。それにおいては、各商品はそれ〴〵多くの價値鏡を持つ

てゐる。例へば熊の皮は、鹽、米、麻布、等々と交換され、それらのもの、多種多樣の姿において自己の價値を表現する。その場合、諸君は、熊の皮なる一商品の價値を取上げて、それが如何に表現されるかを眺めてゐたのであつた。が、諸君は今度はあべこべに、鹽、米、麻布、等々の多數商品の價値を取上げて見よ。そしてそれらの價値は、如何に表現されるかを考へて見よ。問題は至極簡單だ。鹽、米、麻布、等々は、いづれも一樣に、熊の皮と交換されてゐる。それなら、鹽、米、麻布、等の價値は、熊の皮といふ一商品の姿において、卽ち共通の姿において、表現される譯ではないか。そしてさうである限りにおいて、鹽、米、麻布、等々の諸商品は、すでに、熊の皮といふ「共通の等價形態」(價値鏡)を有する譯ではないか。

交換が發展し、頻繁になるにつれて第二の形態は成立した。そこには未だ統一的な、一般共通的な等價形態はないけれども、しかしすでに、相當多數の商品の共通の等價形態は幾つも存在する。

ところがまた、熊の皮なら熊の皮が、すでに相當多數の商品と交換されてゐるとすれば、更に

進んですべての商品と交換されるやうになることも、無論あり得るわけである。

事實において、さういふ風になつてくる。一定の時に一定の地方において、比較的頻繁に交換され、從つて比較的多數の商品と交換される二三の商品があるのは自然である。その中でもまた最も多數の、殆どすべての商品と交換される一商品がある。例へばそれは米であらう。さういふものがあれば、それさへ手に入れると、他の何とでも交換出來るのだ。そこで、すべての商品の所有者は、いづれも自己の商品を一旦米と交換して、そして更にそれを他のものと交換する。しかも彼等はさうしないではゐられないのだ。何故なら各商品の所有者達は、自己の商品を一旦米と交換することによつてのみ、始めて、自己の賣渡さうとする商品の價値と手に入れようとする商品の價値とを比較することが出來、有利か不利かを知ることが出來るのだ。

だが、それはどういふことを意味するか？

今や、一切の商品は、自分の價値を米の姿で現はすのだ。米は今や、一切の商品の一般共通的な等價形態となる。

これを表式で現はせば、例へば次のやうになるだらう。

麻布　二　反
鹽　　四　斗
栗　　百　個
鰯　　七十尾
鋤　　二　挺 ＝ 米一斗
貝殻　百　個
金　　二　分
等
等

この表式は、一見するとたゞ第二の表式をひつくり返しただけのやうに思へるかも知れないが、どうしてさうではない。それとこれとの間には、單なる量的變化ではなく、質的飛躍そのものがある。

この第三の價値形態は、「一般的價値形態」と呼ばれるものである。この形態において等價形態

は、「一般的等價形態」であり、そして、その一般的等價形態の地位にある商品は、一般的等價物である。吾々の例においては、米がそれである。

マルクスは言ふ――『諸商品は、今や、その價値を、單一なる商品によつて表現し且つ同一なる商品をもつて表現するが故に、統一的に表現する。商品の價値形態は、單純であると同時に共通的であり、從つて一般的なものとなる』。

今や、すべての商品は――それがいかに多種多樣でも――唯一つの價値表現を持つことになつたのだ。前には無數の鏡があつた。そしてそれらの鏡に、例へば熊の皮の價値を映すといふと、或ひは鹽の姿で現はれ、或ひは麻布の姿で現はれ、或ひは砂鐵の姿で現はれた。しかるに今度は、たつた一つの商品がその鏡になつてゐる。そしてそれに梨の價値を映さうと鐵の價値を映さうと、乃至はまた麻布や鹽の價値を映さうと、何を映しても一樣に米の姿で現はれる。社會全體から見るならば、そこで形成される價値全體は、前には無數の姿態と外觀をもつて現はれたのに、今度は全く統一された、唯一の姿態と外觀とをもつて現はれる。

これを價値の實體に就いて見るならばどうか。前には個々の生產者達は自分の商品を何と交換する方が有利か、自分の勞働を何の生產に支出した方が有利かといふことを見出すに當り、比較の基礎がまち／＼だつた爲めに、容易に決定し得なかつた。從つて各人各種の具體的勞働が、その生產物の交換を通じて、抽象的な人間勞働一般に還元せられつゝ、社會的必要勞働として互ひに結びつくといふ傾向もまだ十分といふところまでは行き兼ねた。從つてまた、個々の商品が、それ／＼の生產に要する社會的平均勞働に從つて交換されるといふ傾向も十分に發展しなかつた。然るに今度は、それらの傾向はいよ／＼完成の域に達するのだ。

だから、――諸君は眼を轉じて市場の光景を眺め給へ。そこへ流れ込む商品は、それが何人の生產物であり、どんな勞働の生產物であらうとも、高尙であらうと下賤であらうと、烏帽子ひたたれでも下駄の鼻緒でも、お公卿樣の短册でもみやこ腰卷でも、――そんな物は昔はなかつたと諸君が抗議するならば、――羅衣でも、苟もそれが社會にとつて必要である限り、今や人間勞働の生產物はすべて全く平等に、唯一の一般的等價物の姿において自身の價値を表現する。價値は

全く一色になつた。今や、あらゆる商品の價値は自由にその大小を比較され、あらゆる商品は、たゞ交換價値となり、價値となる。そしてたゞ價値として相對し、相關係する。そしてそれは、あらゆる勞働が今や全く一色になつたこと、あらゆる商品を生產するのに社會的に必要な平均的な、單純な、勞働一般、卽ち抽象的勞働になつたことを反映し、かゝるものとして相互に結びつくといふ本質的な事實を反映する。

が、言ふ迄もなく、一般的等價物そのものは、それ自身、かゝる社會的必要勞働の結晶體であらねばならぬ。

諸君は樣々な商品を持つて市場へ出かけて行く。諸君の或る者は二反の麻布を持つて行く、そしてこれの價値はいかほどかときく。それは米一斗だと答へる。諸君の或る者は四斗の鹽を持つてゐる。これはどれほどに値ひするかときく。それは米一斗だと答へる。諸君の或る者は梨百個の價値を尋ねてみる。それは米一斗だと答へる……。面白いことになつてきた。今や、米はたゞすべての商品の價値を表現するに役立つだけである。米はもはや他のすべての商品と同列に置か

れないで別物扱ひにされてゐる。他の一切の商品から取除けられて特殊の商品をなしてゐる。そこで諸君は、この一般的等價物としての米そのものの價値は幾らかときいてみる。誰も答へる者はない。それはその筈だらう、今やこの一般的等價物たる米の價値を言ひ現はさうとすれば、麻布なら二反、鹽なら四斗、梨なら百個等々々、ありとあらゆる商品の數量を數へ上げねばならない破目になるのだから。

が、一般的等價物としての米は、かやうに他のすべての商品から除け物にされる瞬間から、自分自身の本來の有用性を忘れられると同時にまた、全く新らしい別個の有用性を獨占することになる。交換のための有用性、役立ちがそれである。彼は、一切の商品の共通の價値姿態となることによつて、他のすべての商品と直接に交換され得るものとなる。すぐに何とでも交換され得るものとなる。

一口に言へば、眼に見えぬ人間勞働、一般的人間勞働の、唯一の體化としての彼は、今は價値の化身として現はれ、現象世界における價値中の價値となつたのだ。

實質的には、こゝに貨幣が成立する。

八　貨幣と金

實質的にはすでに貨幣であるところの一般的等價物は發生した。しかし、歴史上、かゝる一般的等價物が發生してから後も、それが本當の貨幣となるまでには、尚ほかなりに長い期間を要した。

一般的等價物たる商品は、その時々の市場の狀況によつて絶えず甲から乙へ、乙から丙へと變つて行く。例へば、季節の關係で市場が米を中心としたものであれば、米が一般的等價物になる。次に、獸皮を中心とする市場になれば、獸皮が一般的等價物になる。更に、貝が澤山採れゝば、貝がそれになる。さういつた風に、一般的等價物は謂はゞその場限りのもので、まだ一定の商品に極まつてしまはないのだ。

しかし、そこまで來てゐれば、本當の貨幣の發生へはたゞの一歩に過ぎない。商品交換がいま

一段と發展すれば、この一般的等價形態は一定の商品に固定する。つまり、何時市場へ行つて見ても、米なら米が一般的等價物の役割を演じてゐる。米なら米は、今や時間的に見ても、一般的等價物の役割を獨占する。そしてそれと共に一般的等價形態は、貨幣形態に結晶する。

歷史上、はじめて貨幣として作用するやうになつた商品は、處によつていろ〳〵違つてゐた。また一定の商品に固定すると言つても、それは勿論相對的のことであつて、樣々の商品は、樣々の國、樣々の地域において多かれ少なかれ長い期間貨幣として作用した揚句、ヨリ一層貨幣たるに適した商品に取つて代られてゐる。そして遂には、金といふ商品に終局的に取つて代られて、今日に及んでゐることは、諸君の熟知するところである。

金は、古くから商品であつた。金は、貨幣として作用するやうになつても、商品たるの性質を失ふものではない。金は、一面においては昔ながらの商品であり、他面においては貨幣である。すなはち金は、貨幣商品である。その點では、金は、歷史上貨幣として機能したすべての商品と同樣である。

そこでいま、第三の價値形態における商品米の位置に、商品金を据ゑて見よう——

麻布二反＝
醬油四斗＝
梨百個＝
絹七十尺＝　金二分
鐵二擔＝
貝殼百個＝
等等＝
等等＝

この形態についてマルクスは言ふ——「第一の形態から第二の形態へ、更に第二の形態から第三の形態への移り變りに際しては、本質的な變化が生じてゐる。しかるに第四の形態は、リンネルの代りに、〔即ち吾々の例で言へば米の代りに〕、今や金が一般的等價形態をとるといふ一點を除けば、第三の形態と何等異なるところがない。第四の形態における金は、第三の形態におけるリンネル〔米〕と同一のものに止まつてゐる。即ちそれは一般的等價物となつてゐる」。

それでは、どこが違つてゐるか？　それはたゞ、一般的等價形態は、今や、社會的習慣によつて終局的に、金といふ商品の素材形態と合成せしめられてゐるといふ一點に、進歩が存するだけである」。

マルクスはつゞいてかういふことを力說する。——金は、豫めすでに商品として他の諸商品に相對してゐたればこそ、今やまた貨幣としてそれらに相對するのだ。金もまた、他のあらゆる商品と同樣に、等價物として作用してゐたもので、それが次第に、大なり小なりの地域內において、一般的等價物たる機能をつくすやうになつたのだ。

金が貨幣となる前にすでに樣々の商品が貨幣として用ひられてゐたこと、從つてその時代には商品金の價値も、他の諸商品の價値同樣に、その時々の貨幣たる商品によつて表現されたこと、さういふことは歷史上極めて明白なことである。

多かれ少なかれ著名な事實だけを拾つて見ても、——古代アリアン人の貨幣は家畜であつた。彼等は家畜によつて諸商品の價値を表現し比較した。ギリシヤ人は、家畜の中でも主として牡牛

を貨幣に用ひた、金や銀の價値も、牡牛の數で言ひ現はされた。またホーマーの書いたものを讀んで見ても、ディオメデスの甲冑は九頭の牡牛に値ひしたとか、誰れとかの甲冑は一百頭の牡牛に値ひしたとか、いふやうなことが書いてある。ラテン語の貨幣といふ文字「ペキュニア」は、家畜「ペキュス」から出てゐるといふことだ。ゲルマン人の間では、古く指環貨幣が用ひられ、シリングといふ言葉は、糸で束ねた指環の擦れる音シエルから出たものだといふ。ロシアで最初貨幣として流通してゐたものは貉の毛皮であつた。更に、各所に、奴隷や武器が貨幣に用ひられた場合もある。十七世紀頃のアメリカのヴァーヂニヤ州その他の人々が貨幣として用ひたものは煙草であつた。一七三二年のアメリカ・メリーランド州では、玉蜀黍が法定貨幣として宣言されたことがある。

東の方へ來て、アジア・南洋の諸地方では、コヽアの實、棒茶、鹽棒なども、貨幣として使用された。チベットでは、今日でも、鹽棒や茶が通貨となつてゐる。また現在の蒙古の奥地でも茶が貨幣として用ひられてゐるといはれる。日本では、古代においてすでに穀物が貨幣として用ひら

れてゐた。懿德天皇の時代には、美石寶玉を貨幣たらしめることにして、穀物を貨幣として使用することを禁じたといふことだ。尚ほ、歐洲資本主義諸國の支配に屬さない、アフリカの獨立せる地方では、現在でも、卵、鹽、木綿、玻璃珠、貝類などが通貨になつてゐる。

以上を見てもわかるやうに、どんな種類の商品が先づ一般的等價物となり、やがて貨幣商品として固定するかといふことは、歷史的、地理的、社會的の諸事情によつて、最初は偶然的に定まるのだが、これについては大體において二つの事情が決定的な重味を持つとマルクスは言ふ。卽ち、自己の共同體において生じたところの、讓渡し得る生產物中の主要なもの——例へば家畜の如き——が、貨幣商品にまで發展する場合。もう一つは、自己の共同體に生じた同樣の生產物の價値の、謂はゞ原生的な現象形態となつたもの、言ひ換へれば、交換によつて他から得て來た物品の中で、最も重要なものが、貨幣商品に發展する場合。
で、一般的に言へば、金屬が貨幣商品となつたのは、比較的後のことである。ギリシャにおける金屬貨幣の最初のものは鐵棒であつた。フェニキヤ人は錫を、ローマ人は銅と青銅を用ひた。

しかし、アッシリヤ、バビロン、エヂプトなどにおいては、古代において早くも金銀が貨幣商品になつてゐた。

金銀のやうな貴金屬も、貨幣として用ひられた最初の頃は、地金のまゝで用ひられてゐた。地金の形狀は、棒、線、環、圓盤など、いろ／＼あつた。鑄貨の出來たのは餘程後のことである。地金のまゝの貨幣は、今日でもなほ、南アジアの半開國で見ることが出來る。そこでは、まづ試金石によつて、棒狀の銀地金の純分がどれほどかを調べ、それから小刀でその一端を切り取つてあらかじめ約束してある分量を量り、これを商品の賣手に與へるといふ風になつてゐる。また、むかし金銀が漸く貨幣になつた時分には、一般に、それを目分量ではかつたもので、あとから次第に秤を用ひるやうになつた。人間のつくつた最初の秤は、金をはかる秤であつたといふ者もある。この研究者によると、最初の分銅は、果實の種子だつた。それで、カラットといふ言葉はアラビア語から由來するが、これはいなごまめの種子を意味してゐるし、英語のグレーンは、分銅に用ひた大麥の種子を指してゐるといふのである。

貨幣商品としての金銀の流通は、初めはまづ金銀の産地で行はれ、それが各地へ輸入されて次第に世界に擴がつたものと思はれる。日本においても、金屬貨幣の最初のものは輸入貨幣であつたことは歴史の示すところである。そして當時の支配者階級は、それまで流通してゐた他の貨幣商品の代りに金屬の貨幣商品を流通させるのには相當骨を折つたやうに見受けられる。これなども、貨幣なるものがいかに自然法的・習慣的卽ち社會的に成生し、定着するものであるかといふことを物語つてゐる。

貨幣の成立について重要なことは、一定の商品が一般的等價物として固定化するといふ點にあるのであつて、その一定の商品が遂に銀になり金になつたといふことは第二第三のことである。金が商品生産社會に於て終局的に貨幣商品となつたことには勿論それだけの理由がある。しかしそれは金の物理的性質が貨幣たるに適してをり、しかもそれ以上の適したものが他にないといふ外部的理由に基づくに過ぎないのだ。貨幣の材料たるべきものがどんな自然的性質を持つてゐなければならないかといふことは、社會的産物たる貨幣——卽ち固定化した一般的等價物——が當

むところの社會的機能そのものによつて決定されるのだ。金そのものには、何の神秘もない。金は、それ自體としては、貨幣でもなんでもない。高橋是清がそれ自身としては大藏大臣でも何でもないのとおんなじだ。高橋是清がたま〱大藏大臣になつたのは、たゞ、大藏大臣なるもの〻營む政治的機能を營むのに適した性質を、たま〱彼が持ち合せたからだ、といふのとおんなじだ。

では、金はいかなる自然的性質を有するが故に貨幣の機能を營むのに適したか？　これは貨幣の諸機能を說明する際に更に關說するところあるであらうが、とりあへずマルクスに從つて要點をかいつまんで述べておく。

何よりも先づ貨幣商品は、一般的等價物であり、かゝるものとして一切の商品の價値の大小を表現し、その比較を容易ならしめるといふ機能を營まねばならぬ。ところで價値の本質は一般的勞働時間であつて、これは質においては全く等一で唯だ量的差異があるだけだ。從つて、價値を表現し比較し易からしめるといふ機能を營むところの貨幣商品たる物質は、(一)そのすべての部分

が全く同質のものであることが必要だ。ところで、

『例へば私が、——とマルクスは言ふ——、すべての商品を、牡牛だの、獸皮だの、穀物だので量るとすれば、牡牛と牡牛と、穀物と穀物と、獸皮と獸皮との間に、質の上で相違がある以上、事實において私は觀念上の平均の牡牛、平均の獸皮で、諸商品を量らざるを得ないことになる。しかるに金銀は、純分においては常に同一であり、從つてそれの同一諸量は、等しき量の價値を表現する』。

量的差異を直接に純粹に表示するといふ機能を營むために必要な第二の條件は、貨幣商品となる物質が、(二)大きくも小さくも自由に分割し得るものであること、及び、(三)それらを再び結合し得るものであることが必要だ。『金銀はこれらの特質を具ふることにおいて優秀なるものである』(マルクス)。

一切の商品の價値を、『自己』の姿において表現するところの貨幣たるべき特殊の商品は、また、自分自身の價値はなるべく變動しない方がい〻。ブルヂョアの「理想」は、それが絶對不變であ

ることである。金銀自體の價値は、他の商品同樣、その生産に要する社會的平均勞働時間の變化につれて變動する。しかし、平均して言へば、金銀の價値の變動は比較的僅かである。

次に、貨幣は、流通手段たる機能を營まねばならぬ。この機能は後に說明するが、流通に際してはとにかく商品は甲から乙へ、乙から丙へと動いて行き、貨幣は逆に乙から甲へ、丙から乙へと轉々する。ところで金銀は、誰でも知る通り、家畜だの何だのに較べれば恐ろしく持ち運びに便利である。一人の手から他人の手へ渡すことも、一國から他國へ送ることも容易だし、またその時の都合であわてゝ流通界へ飛び込んで行つたり、またあわてゝそこから逃げ出して來て金庫の中で晝寢をしてゐたり、誠に出沒自在であり得る。これは、貨幣商品としての金銀が、僅かな容積の中に比較的多くの勞働時間即ち交換價値を含むことに基づいてゐる。

右の性質と關聯して金銀はまた「富を蓄積する」手段としての貨幣の機能を營むのにも、最も適した性質を具へてゐる。それは嵩ばらないといふだけではない。耐久性がある、少しぐらゐ手荒なことをしてもなか〳〵毀れない。空氣によつて酸化して錆びたりなんかするどころか、金の

如きは王水以外の酸には絶對に溶けないといふがつちりしたところさへ持つてゐる。そこで昔はよく「金銀が藏の中で唸つてゐた」りなんかしたものだが、——ところがまたさういふ光景に憤慨したのかどうか、退藏することの出來ないやうな貨幣商品を禮讃した男もゐる。ピーター・マアタアは、當時メキシコで貨幣の一種として役立つてゐたカヽオの殼を指して言つた、——『おお、祝福された貨幣よ、人類には有用なる飲料を供し、しかもその所有者を、呪はれた貪慾に汚れさせない。お前は埋めておくことも出來ないし、永く貯へることも出來ないんだから』。もつとも、マルクスの意見では、多分この男は、餘程のチョコレート好きだつたんだらう、といふのである。

ところがまた、金銀といふもの、金屬らしくもない軟柔性までが、金銀の強味になるのだから面白い。金銀は、どうも軟かすぎるといふので、仕事道具、機械、建物といつたやうな生産要具の材料としてはボイコットされてゐる。おまけに消費用の物品として金銀でつくられた物も、どちらかと言へば無くつても濟むものばかりである。生産用具たるの役には立たないし、消費にお

いても必需品ではないといふことになれば、金銀が無くたつて、生産過程や消費過程に故障を來たす氣遣ひはない。そこで、彼等は大威張りで、いくらでも流通過程の方へ入込んで行けるといふものだ。

マルクスは更に、金銀は「かやうに消極的に、餘計なもの、無くても濟むものであるといふだけでなく、金銀の審美的特質は、彼等を、華美、粉飾、光彩、及び日曜日的な諸欲望にとつての自然發生的な材料たらしめる、一口に言へば剩餘と富との積極的形態たらしめる」と言ひ、更にまた、

『金銀は、謂はゞ地下の世界から掘り上げられる純粹光線として現はれる。銀は、本來の結合における一切の光線を反射するし、金は、最高強度の色調、赤心線だけを反射するからである。が、色の感覺は、美感覺一般のポピュラーな形態である。様々のインド＝ゲルマン系の言語において、貴金屬の名稱と色彩の諸關係との間に語源的關聯が見られることは、ヤコブ・グリムによつて指摘された。(彼のドイツ言語史を見よ)。云々』、とも言つてゐる。

金屬の貨幣商品は、始めは地金のまゝで通用したが、次第に鑄造されて、鑄貨の形態をとるやうになる。さうなるとまた、一定の理由によつて、貨幣商品は絶えず鑄貨形態から地金形態に、地金形態から在つても無くてもよい奢侈品の形態に早替りしたり、更にまたその逆の早替りを演じたりしなければならなくなる。この舞臺面でもまた、金銀だけが「千兩役者」たるの資格を持つ。

こゝで私は、諸君に、マルクスが吐いた名高い警句を紹介しておかう。しかもそれは、以上のことの總括に當るものである。彼は言ふ――

「自然は、銀行家や爲替相場をつくらないと同樣、決して貨幣をつくりはしない。たゞ、ブルヂョア的生產は、富を、唯一物の形態における偶像に結晶させねばならないから、金銀がそれに應ずる化身であるのである。金銀は本來的に貨幣ではないが、貨幣は本來的に金銀である」。

右の、「偶像」の由來についてはもう少しあとで說くことにしようが、最後の言葉、『貨幣は本來的に金銀である』といふのは、卽ち、金なり銀なりが、例の同質の物體で分割・結合共に自由で

あるといふ自然的性質を有する點で、價値の實體たる一般的人間勞働の本質と一致するものがあるといふことを指してゐる。

さて、吾々はずつと「貨幣商品」といふ言葉を用ひて來たが、これは極めて意味の深い言葉であつて、それをはつきりと理解することこそ貨幣の祕密を解く鍵だともいへるのだ。

貨幣商品として作用してゐる金をとらう。彼は、その生産に必要な社會的勞働の一定量を含んでゐる點に於いて、他のすべての商品と同じやうに商品である。しかし彼は只の商品ではない。その證據には、彼はすべての商品から唯一つとり除けられて特別扱ひにされてゐる。そして、交換のためにのみ役立つといふ獨自の社會的有用性を持つてゐる。この有用性は、彼が唯一の價値鏡として作用することに基づいてゐるし、かく作用することによつて彼は一般的人間勞働を體現する。

貨幣商品としての金は、かやうにして一般的人間勞働を體現する限りにおいては、貨幣である。しかし、その金は、それを體現することが出來るためには、それ自身まづ社會的必要勞働の一定

量を含むものでなければならぬ。貨幣商品金は、社會的必要勞働の一定量を含んでゐる限りにおいては、商品である。そして、商品金を必然的に貨幣商品にまで發展せしめたものは、交換の發展――即ち特殊の矛盾に充ちた社會的過程の發展――そのものであつた。そしてまた、商品金が、貨幣商品になり得たのは、貨幣として一定の社會的機能を營むに適した、獨自の自然的性質を、金が具へてゐたからである。

諸君は、貨幣商品金は商品であるといふ一面にだけ氣を奪はれてはならない。さうすると、貨幣は單に商品に過ぎないかのやうに思はれて來る。從つて、商品でさへあればどんなものでも貨幣たり得るかのやうに思はれて來る。從つてまた、金なら金といふ一定の商品が、貨幣として、他の商品と區別されるのは、全く偶然のことに過ぎないとか、乃至はそれが單に國家の手によつて五圓とか十圓とかいふ刻印を施されてゐるからに過ぎないとか、いふ風に思はれて來る。だがそんな風に、偶然だの、經濟外の要因などで、貨幣の成立を說明しようとすることは、商品と貨幣との間の本質的な差別を忘れることであり、商品から貨幣商品への發展は商品生產社會の矛盾

の展開によつて必然ならしめられたことを忘れるものである。

反對に、諸君はまた、貨幣と商品との區別にのみ氣を奪はれて、貨幣たる金は同時に商品であるし又あつたことを無視するならば、やはりまた貨幣成立の社會的必然性を忘れることになり、貨幣の本質を見失ふことになるだらう。

諸君は、もし商品生産の固有の矛盾を忘れ、その矛盾は、商品交換としての物々交換に早くも現はれて、貨幣の成立を必然ならしめたのだといふことを忘れるならば、貨幣は單に、物々交換の技術的な不便を免かれるために何者かがいみじくも工夫し發明した「便利な道具」に過ぎないかのやうに思はれて來るだらう。現に、經濟學者の一人は言つた、――貨幣といふものは交換を行ふための道具である。それは恰度機械が生産を行ふための道具であり、社會が生産物の分配を行ふための道具であると同じやうに道具である。そんな道具がいかにして出來たか、どういふ働きをするか、どういふ性質のものか等々を研究することは、經濟學の仕事ではない、と。かう言つて見事に貨幣を經濟學からノックアウトしたところの『機智に富んだ經濟學者』は、トーマ

ス・ホイスキンといふ英吉利の男であつた。だが諸君、諸君の日本の教科書は、今日でも、貨幣を單に「便利な道具」として教へてゐるではないか！

第二講　貨　幣

一　價値の尺度としての貨幣

諸君は、第一講において、貨幣の成り立ちを學ばれた。そこで、この第二講の主なる目的は、貨幣商品は如何なる機能を營むことによつて貨幣であるのか、それを詳しく研究することにある。この研究は、おのづから、貨幣なるもの、本來の機能と諸作用とを明らかにすることによつて、第三講以下の諸研究を準備することになるだらう。

第一講において吾々が交換を論じた際には、貨幣の未だ發生しないところの交換の段階について論じてゐたか、乃至はまた貨幣はすでに存在してゐても研究の順序上わざと貨幣を度外視してゐたのであるが、吾々の研究は進んで今や貨幣の成立を見究めたのである以上、この第二講においては、貨幣はすでに流通してゐるものと前提して差支へないし、また前提しなければならない。

更に、吾々は、そこに貨幣として流通してゐるものは金貨幣であり、金貨幣のみであるものと暫く假定する。言ひ換へれば、金が貨幣商品であるものと假定する。諸君の中には、實際に金貨幣の流通してゐるのを見られた人は極く少いであらう。しかし、諸君御存じの通り、英國では戰前まで金貨幣が流通してゐたのだし、日本でも德川時代には小判と稱する金貨幣が流通した。また、今日と雖も金貨はとにかく日本銀行の金庫の中に積まれてあると言ふのだから、諸君の見慣れた紙幣の代りに、金そのものが貨幣として流通してゐると想像することは少しも困難でなく、又不自然でもないだらう。

さて、諸君は、商品と商品とを直接に交換する物々交換の發展により、商品中最も頻繁に交換されるものは必然的に一般的等價物として作用せざるを得なくなり、一般的等價物として作用する商品はやがて固定化して貨幣商品となり、そして家畜、穀物、貝殼、等々に代つて遂に金が終局的に貨幣商品となつたことを知つたのだが、然らば、今や金が貨幣商品として作用するといふことはどんな事態を意味するか？ その場合には、

(一)商品金だけが、價値の唯一の化身として、すぐに何とでも交換出來るものとなつてゐる。
(二)卽ち、金を手に入れた者だけが、それと引換へに他の商品を手に入れることが出來る。
(三)すべての商品所有者は、自己の商品を、何よりも先づ金とかへねばならなくなる。さうしなければ、彼等の生産の私的目的は達せられず、また商品生産社會全體としても生産活動を續けてゆけぬ。

さうだとすれば、どういふことが起つてくるか？　一切の商品は金と交換され、金は貨幣商品として流通し、一切の商品の價値は金で表現される。一石の米は五匁の金に等しい、一反の銘仙は一匁の金に等しい、等、等。――卽ち、

一石の米＝5匁の金
一着の學生服＝4匁の金
一足の靴＝2匁の金
一反の銘仙＝1匁の金
一枚のレコード＝$\frac{1}{2}$匁の金

かうなれば、大小の比較が出來る。一石の米の價値は、一反の銘仙の價値の五倍だし、一枚のレコードの價値の十倍である、等々。矛盾に充ちた商品生産社會の性質上、一枚のレコードの價値と、一石の米の價値とを、直接に表現し比較することは出來ない。そこで今や、兩者の價値はそれ〴〵、同じ金の異なる分量として表現されることによつてのみ、相互に比較され得るものとなつてゐる。

さうすると、貨幣商品金の第一の機能は、商品界に、價値表現のための材料を提供し、各商品の價値をば、互ひに比較し得べき大さとして、――卽ち、同質異量のものとして――現はすことにあるといへる。彼は、卽ち、諸商品の價値の大小をはかる物の役をする。價値の尺度たる機能をつくす。そこでマルクスは言ふ――『かくして金は、價値の一般的尺度たる機能をつくすことになる。そして、この機能によつてのみ、特殊の等價物商品たる金は、まづ貨幣となるのであ

る」と。

が、かやうに各商品の價値が相互比較し得るやうになることに關して、一つの誤解が生じ易い。それは、商品界の外部から貨幣といふものが飛び込んで來て、その不思議な力によつて諸商品は俄かに相互比較し得るものになつたかのやうな考へ方である。事實は、正に反對である。一切の商品は、これを價値として見れば物化された人間勞働である。それは直接に表現されることは出來ない。しかし、本質においては同質異量のものであり、從つてあらかじめ相互比較し得る性質のものである。さればこそ、一切の商品は、その價値を、特殊の一商品金をもつて共通的に秤量することが出來、それ故にまた、この特殊の商品金をば、共通の價値の尺度たる貨幣にまで發展轉化せしめ得るのである。

勞働時間は、商品の内在的な價値の尺度である。貨幣は、この内在的な價値の尺度たる勞働時間の**現象形態**である。しかも**必然的な**現象形態なのだ。

で、吾々は、一切の商品のそれ〴〵の一定量は、今や、貨幣商品金のそれ〴〵の分量をもつて

現はされてゐるといふ事實に氣付かう。即ち、一石の米は五匁の金であり、一足の靴は二匁の金であるといふ。かやうに、商品の價値が、貨幣商品の一定量をもつて現はされたもの、それは何であるか？　吾々はそれを價格と呼ぶ。

今や、貨幣以外の一切の商品は價格を持つ。それは、一切の商品が今や金を共通の尺度としてその價値を表現するといふことから當然に生ずるのだ。價格は、謂はゞ、商品價値の金表現であり、價格における大小は、金量の大小として現はれる。即ち、例へば一石の米の價格は、一枚のレコードの價格の十倍大きいといふのは、前者の價格は五匁の金で、後者のそれは五分の金として現はれるからだ、といふが如きである。貨幣そのもの、即ち價値尺度の役をする金そのものは、むろん價格を持ち得ない。金一匁の「價格」を強ひて見出ださうとして見給へ。諸君は、金一匁の價値を金の一定量に現はさねばならなくなる。さうすれば、金一匁は金一匁だといふ間拔けなことを言ふより外はないだらう。

ところで、諸君は、もう一步突つ込んで價格なるもの、性質を見究める必要がある。靴屋さん

は言ふ、――手前共の靴一足は金二匁ですと。それは一時の相場に從つてさう言つてゐるのでも、また彼があてずつぽうに言つてゐるのでもどちらでも同じことである。それはよろしい。では、それは、彼が、一足の靴を二匁の金と交換したい、といふことか？　さうではない。もう交換してしまつたのなら、彼の手には靴はない筈だ。さうすると、彼等が、手前共の靴は金二匁ですといふのは、彼れの商品を二匁の金と交換する、するつもりだ、したい、といふ意思表示であつて、この際彼は、自己の商品の價値を二匁の金で言ひ現はしてゐるのだといふことは明らかだ。即ち彼は、自己の商品に、値をつけてゐるのである、價格を附してゐるのである。

なぜ商品所有者達はすべて商品に價格をつけるのか、つけずにゐられないのか、それはもうわかり切つてゐるだらう。彼等は自分に必要な生産物を生産するのではなく他人に對して必要な物を生産するのだ。そしてそれを自分の必要な物と交換しなければならないのだ。この交換に際して彼等は今や、何よりも先づ貨幣商品金と交換しなければならないのだ。だから、彼等は、自分の商品と交換せらるべき金の分量を表示する。

そこで、彼等がその商品に價格をつけ、價格として表示する金の分量だが、その場合のそれは一匁の金だらうと千貫匁の金だらうと、――彼等はまだ「現ナマ」を手に入れたのではないから、――全くたゞ彼等が頭の中に思ひ浮べた金量に過ぎないことは言ふ迄もない。その意味において、それは單に想像的な、觀念的な金量に過ぎないのだ。さればこそ彼等は、彼等のつけた價格を他人に知らせるために、舌を動かして「金二匁」と叫ぶか、それともさう書いた紙札を商品にぶらさげてやらねばならないといふものだ。

諸々の商品の價値は、價値として直接にその大小を比較される代りに、おの／＼みな金の種々なる量で言ひ現はされ、價格として大小を比較される。さやうに、二匁、五匁等々といふ種々なる量で言ひ現はされてゐる金は、即ち、價値の尺度の役目をし、この機能を營むことにおいて貨幣である。だが、さやうに言ひ現はされてゐる金は、人々の頭の中にだけ存在するところの、想像的な、觀念的な金であつて、「現ナマ」ではない。それ故に、貨幣としての金は、それが價値の尺度としての機能を營む限りにおいては、想像された金、觀念的な金で事足りるのだ。

そこでまた、貨幣について飛んでもない間違つたことが言はれるやうになる。——「貨幣にとつて金そのものの存在は必要でない」！

これはなぜ間違つてゐるか？　なぜといつて、金があらじかめ貨幣商品として交換過程内に活動してゐればこそ、それ故にのみ、金は思ひ浮べられることも出來、從つてまたそれが、觀念的な、價値の尺度として、作用し得るのではないか。

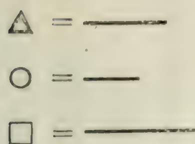
で、マルクスは言ふ——『商品の價値が、價格形態即ち想像上の金形態を附與されたからといつて、それだけではまだ／＼商品は金に實現されるものでなく、幾百萬マルクの商品價値をただ金で評價するといふだけならば、その目的のために一片の現實の金をも必要としないことは、どんな商品販賣業者もよく知つてゐる。要するに、貨幣なるものは、價値の尺度としての機能から言へば、單なる想像的または觀念的の貨幣として役立つに過ぎないのであつて、この事實からいろ／＼奇怪極まる學説が生ずるやうになつた』と。

二　價格の標準としての貨幣

さて、貨幣商品たる金は、諸商品の價値の尺度として機能しつゝ、諸商品の價値を、想像上の、種々なる金量で現はすことを諸君は見た。この想像上の、種々なる金量は、即ち、價格である。

この價格にあつては、價値は價値として示されずに、金量として示されてゐる。そしてまた金量としてのみ比較されるのだ。

が、たとひ想像上の金量にもせよ、金量が比較されるとなると、その計算の單位が必要になつてくることは明かだ。これは純然たる計算技術上の必要である。



例へば上圖の△、○、□、等は、大小の價値を有する商品であるとする。そしてそれらに等しいものとして示された三本の線は、各商品の價格であり、大小の金量を表示してゐるとする。いま、この三本の線を比較するに當り、單にヨリ長い、ヨリ短い、といふだけでなく、どれだけ長く、どれだけ短い

かを精確に示さうとすれば、どうしても計算の單位を用ひなければならぬ。それと同樣に、價格として言ひ現はされる種々の金量を勘定するのにも單位を用ひずにゐられない。

では、その單位は如何なるものであるべきか？　それは金量を比較するのだから、比較の單位もまた一定の金量でなければならぬ。吾々は、前に、例示的に、一石の米は、五匁の金、一足の靴は二匁の金、等々と言つたが、その場合には、例へば一匁の金が計算の單位になつてゐる。

そこで、一匁の金が價格計算の單位に定まつたとする。その場合には、貨幣としての金の一匁は、價格の標準になる。むろん、一匁を更に細分して分、厘、等々と計算することも出來るが、とにかく、價格は一匁の金を標準として計算されることになる。

貨幣商品たる金は、今や、その一定量を價格の標準たらしめることによつて、新らしい機能を營むのだ。

貨幣たる金が、價格の標準として營む機能は、もちろん、それが價値の尺度として營む機能から派生したものであり、この機能を更に完全ならしめるものに過ぎない。しかし、二つの機能は

異つてゐる。

價値の尺度として機能する時の金は、人間勞働の社會的體化としての金である。即ちそれ自身價値を含むものとして、諸商品の價値の尺度になる。そして、その場合における金の役立ちは、諸商品の價値を、想像上の金量たる價格に轉化することにある。が、この想像上の金量の比較計算の必要から、第二の機能が生じて來た。そこで、第二の機能即ち價格の標準としての機能を營む時の金は、もはや人間勞働の社會的體化としての金ではなく、習慣又は法律によつて定められた一定量の金――例へば重量一匁の金――としてそれを營むのだ。即ち、今度は、想像上の樣々の金量を比較秤量するための計算單位たる一定金量として、諸商品の價格の標準をなすのである。この場合における金の役立ちは、單に特定の金量として、大小さま〴〵の金量をはかることにある。それを間違へて、一の金量の價値を他の金量の重さではかるのだと思つてはならないのだ。

次には、この價格の計算單位となるところの一定の金量は、どういふ風にして定まるかといふに、これは金銀が貨幣となる前にすでに、その金屬としての重量を計算する單位を與へられてゐる

るものだから、最初はそれがそのまゝ利用されるのが普通である。卽ち重量單位としてポンドが用ひられてゐたとすれば、先づ銀一ポンドが價格の計算單位になる、といふが如きである。

その場合には、貨幣たる金屬の貨幣名は、その重量名と同じものである。貨幣名といふのは、價格の計算單位もしくは價格の標準として定められた金屬量、卽ち貨幣本位たるものに與へられた名稱のことである。だから、言ひかへれば、その場合には、價格標準の名稱もポンドであり、重量單位の名稱もポンドである。

けれども、それは永くは續かない。多くの場合、金屬の重量單位の方はそのまゝだが、價格の計算單位として定められる金屬量の方は、次第に變つてくる。從つてまた後者に對する名稱、卽ち貨幣名も變つてくる。かうした分離を來たさしむる原因はいろ／＼あるが、その決定的なものは次の三つである。(一)外國貨幣が輸入されて用ひられる。そしてその名稱は、從來國內に行はれてゐた重量名と違つてゐる。(二)價値の尺度たる機能をつくすものは、多くの場合、初めは銅、次は銀、それから金といつた風に變つて行く。それで、例へば、イギリスの「一磅」は、元來は正味

一封度の銀に對する貨幣名であつたが、價値尺度としての銀に金が取つて代るや否や、たつた十五分の一封度の金がその名を承け繼ぐといふことになつた。(三)權力者たる王侯達は、代々不純貨幣の鑄造を續けて行つた。從つて、貨幣の純分は次第に少くなり、たゞ以前の名稱だけが殘ることになる。

かうした歷史的過程によつて、貨幣名を重量名から分離させることは、各民族の習慣となる。貨幣本位、價格標準なるものは、元來、一方では純粹に傳習的なものだが、他方ではあまねく通用しなければならないものだ。そこで、結局は、それが、法律によつて規定されることになる。こゝに國家は、一つの、全然技術的な役割を演ずる。例へば、今や、一オンスの金は、何分の一かに分割され、その定量に對して磅だの、弗だの、法だの、圓だのといふ法定の名稱が與へられる。かゝる名稱をつけられた金量は、今や、明確な、正銘の、貨幣本位となる。即ち、貨幣としての金を計算する單位となる。が、この單位として定められた金量は、更に細分せられ、志、片、乃至は仙、乃至はまた錢、厘といつたやうな法定の名稱を與へられる。

かやうにして貨幣は、圓いにも拘らず、大部四角ばつたものになるのだが、しかしそこには何等の本質的な變化も生じない。一定の金屬重量が、金屬貨幣の本位をなすといふ基本的事實は少しも變らない。變つたのは、定量に細分されたといふことと、それに名前がついたといふことだけである。

しかし、價格の呼び方は變つて來る。言ひ換へれば、諸商品の價値を現はすところの金量の呼び方は變つて來る。一石の米は五匁の金に等しいといふ代りに、二十五圓に等しいとか、二磅十十二志に等しいとか言ふやうになる。どこが變つてゐるか？　商品の價値の大小は、金の重量名で言ひ現はされないで、貨幣名で言ひ現はされ、勘定される。かやうな言ひ現はし、かやうな勘定に役立つといふ限りでは、貨幣は單に計算用のものに過ぎなくなる。その限りでは、貨幣は單に計算貨幣として作用する。

かういふところから、貨幣についていろ〳〵な妄想が生じて來るから、少し詳しく說明しておかう。

貨幣が、價格の標準として機能し得ること、及びこの機能から轉化して更に計算貨幣として作用し得ること、これらはいづれも、價格が觀念的なものであり、頭の中のものであるといふ事實に基づいてゐる。それさへわかれば不思議はないだらう。例へば、一定の期間、一定の地域において一匁の金も流通しない場合でも、商品の價値を何十何億何千萬圓と言つて勘定するだけのことならいくらでもやれる。それだけのことならば、紙幣やなんかも無くたつて出來る。例へば、曾つて、シベリヤと支那との間に純然たる物々交換が行はれてゐた際なども、銀が價格計算に役立つてゐた。更にまた、貨幣が單に計算貨幣として作用するといふことだけのためには、計算の單位として、貨幣本位として定められたものが實際に鑄造されてゐる必要もない。すべてさういふことは、要するに、計算貨幣としての貨幣ならば、一般に觀念的に存在し得るからである。頭の中、紙の上、言葉の上のものとして存在し得るからである。が、左樣にして存在し得るといふことは、もちろん、貨幣の成立そのものを前提するし、何處かで「現ナマ」が交換過程内に活動してゐることを前提する。

さて、日本の貨幣について一通り説明すれば、――日本では、金が貨幣商品をなしてゐる。そして重量名で計へれば二分と呼ばれる金量が、法律上、貨幣本位に定められ、この金量に對して圓といふ貨幣名が與へられてゐる。圓貨幣と呼ばれる重量二分の金は、金貨幣に鑄造されてはゐないし、一般に金貨幣は流通してゐないが、しかし重量二分の金は、價格の標準として役立つてゐる。更にまた、重量二分の金に與へられた貨幣名であるところの圓は、錢、厘と共に、價格の計算名として役立つてゐる。從つて、想像上の金量であるところの價格は、何匁何分といふ重量名で呼ばれる代りに、何圓何十何錢何厘といふ貨幣名で呼ばれ、その限りでは貨幣はつねに計算貨幣として作用する。最後に、しかも最も重要なことだが、貨幣商品たる金は、これらの計算技術上の機能と並んで、またそれを通じて、商品の價値の尺度としての機能を營んでゐる。(むろん「ノルマル」な場合についてのことである)。

こゝで一番の厄介物は、圓、(錢、厘)、といふ貨幣名である。諸君は、この圓・錢・厘には慣れ切つてゐる。餘りに慣れてゐるために、この名稱の背後に何かあるかといふやうなことは考へた

こともない。それに大體、名前といふものは全く外部的のものである。「名は體を現はす」などといふが、決して本質を現はしはしない。四郎といふ名前には、それがどんな男かといふことはちつとも現はれぬ。同樣に、圓といふ貨幣名には、本質的な價値關係は爪垢ほども見當らぬ。そこで彼の正體が、わからなくなる。おまけにこの圓といふ貨幣名は、價格の勘定において、價値を言ひ現はすかと思ふとまた、貨幣本位をなす金量をも言ひ現はすといふ譯だから、尙更らやゝこしくなる。卽ち、この品物は二圓だといへば、それは一圓の品物の二倍の價値を現はすわけなのだが、同時にまた一圓とは、金二分をも言ひ現はす。さういつた譯だが、しかし諸君はすでに、貨幣の生ひ立ちから、成人して後の機能の一部まで研究されたのであるから、さうしたやゝこしいことも、畢竟、矛盾に充ちた商品生產社會に特有な必然的現象であること、特に商品の價値を使用價値から分離し區別して取扱ふための一種奇妙な社會的必要から生じたものであること、少くともそれだけのことはおわかりだらう。

なほ、注意までに言つておくが、——吾々は前に、貨幣たる金そのものは決して價格を持ち得

ない、と言つた。ところが、人は、金一匁は五圓するの、二匁は十圓するのといふやうなことを言ふ。うつかりすると、それが金の價格であるかのやうに思へるだらうが、それは飛んでもない間違ひである。その場合に五圓だの十圓だのといふのは商品の價格とはまるで違つたものである。それはかういふことに過ぎないのだ。二分の金は、貨幣として、圓といふ名稱を與へられてゐる。金二分が圓だから、四分を二圓と言ひ、一匁を五圓と言ひ、二匁を十圓と言ふ、たゞそれだけのことである。それらのものが、たまたま「鑄貨價格」などと呼ばれたりするのでますます價格であるかのやうな感を與へるが、しかし商品の價格とは、商品の價値を貨幣たる金（又は銀その他のもの）の量をもつて觀念的に言ひ現はしたものであり、言ひ現はす際の稱呼が圓たると磅たると弗たるとによつてその本質まで變るわけはない。貨幣たる金はもちろんそれ自身價値を持つが、その價値を金量卽ち自分自身の量で現はすといふことは出來るものでない。たゞ、價格の呼び方も圓であり、貨幣本位としての二分金の呼び方も圓であるところから、混同が生ずるだけのことである。

もつとも、一匁は五圓であるべき筈の金が、六圓五十錢であつたり、七圓であつたりすることもある。かやうな場合は、「金は打歩を生じた」と言はれる。これについての說明は、信用貨幣なるものを研究した後に讓らなければならぬ。

三　貨幣の價値と商品の價格

さて、價値の尺度及び價格の標準としての貨幣の機能に關する硏究を結ぶに當つてなほ重要な二三の點を說明しておくことが必要である。

第一、貨幣たる金そのものゝ價値の變動は、それらの機能にどう影響するか？

貨幣たる金は、價格の標準として機能する場合には、その一定量をもつて他の金量をはかるだけである。一が他の何倍か、何分の一かを示すだけである。ところで、二分なら二分の金の生產に必要な社會的勞働量——卽ち價値——が增さうと減らうと、二分といふ重量まで變化するわけのものではない。更にまた、金の價値が變動し、例へば半分に下落したとしても、二分の金は依

然として一匁の金の五分の一の價値を持つてゐる。さういふわけだから、金の價値の變動は、價格標準としての機能を妨げるやうなことはない。

同樣に金の價値の變動は、價値の尺度としての機能を妨げもしない。何故なら、金の價値の變動は、金が貨幣である以上、あらゆる商品の上に同時に影響する。從つて、他の事情に變化のない限り、商品相互の間の價値の割合には少しも變化しないからである。もつとも、その場合諸商品の價格は一樣に變化することになり、前よりも高く言ひ現はされるか低く言ひ現はされるかするのは言ふまでもない。

第二、――では、貨幣の價値の運動と、商品の價格の運動との間には、一般的に、どういふ關係があるか？

(一)先づ、貨幣の價値の方には變化がないとする。その場合における商品の價格は、商品價値が騰れば騰り、下れば下る。これは自明だらう。

(二)今度は商品價値の方には變化がないとする。さうすれば、商品の價格は、貨幣の價値が昂騰

すれば、一般的に低落し、低落すれば、一般的に昂騰する。

(三) けれども商品の價格はすべて一樣に、貨幣の價値の昂騰に比例して低落し、低落に比例して昂騰するとは限らない。さういふことが起り得るのは、その際あらゆる商品の價値が全く變化しない時に限られる。さうではなしに、例へばもし、貨幣の價値の昂騰すると同時に同じ比例をもつて昂騰する商品があれば、その商品の價格は變化しないだらう。また、もしこの商品の價値の高まり方が、貨幣の價値の高まり方よりも多いか少いかするならば、その商品の價格が低落する程度もしくは昂騰する程度は、商品の價値の動きと貨幣の價値の動きとの差によつて決定されることになるだらう。更にまた貨幣の價値の低落するのと同時に商品の價値も低落するといふ場合その他等々も、右に準ずる。

尚、貨幣たる金の價値の運動と、商品價格一般の運動との關係については、後に一項を設けて研究するつもりだから、こゝではたゞ簡單に原則だけを述べておくことにした。

第三、商品の價格と、商品の價値との關係はどうか?

商品の價格は、商品の價値を現はすが、しかしそれを直接に現はさないで、貨幣たる金の量で現はしてゐる。そこで一つの二重關係が生じて來る。例へば米一石が二十五圓であり、從つてまた金五匁に等しいといふ。——

米1石＝25圓＝金5匁

その場合の關係は二重になつてゐる。卽ち、(一)米一石の生産に必要な社會的勞働時間と、金五匁の生産に必要な社會的勞働時間とが等しい。(二)米一石は、圓と呼ばれる本位貨幣二十五個と交換される。これをマルクスの言葉で言へば、『價格なるものは、商品價値量の指標たる資格において同時にまた商品對貨幣の交換比例の指標である…』。

それはさうだが、しかしその反對に、商品對貨幣の交換比例の指標はつねに商品價値量の指標でなければならぬ、といふことにはならない。前例においては、二十五圓の貨幣(五匁の金)は一石の米の價値の指標であり價格であつた。ところがもし、需要と供給の均衡が破れたことによつて、右の二十五圓が、三十圓になるか、二十圓になるかしたとする。その三十圓なり二十圓なりは、

もはや商品價値の指標ではあり得ない。それにも拘らず、それは、依然として商品對貨幣の交換比例の指標であり、且つ米の價値形態としての貨幣形態であるから、米の價格たることには變りはない。

かやうに、價格の動きは、價値の動きから分離する。かゝる分離を生ずるのは、何よりも先づ商品對商品の交換が直接に行はれずして第三者たる貨幣商品を介して行はれると同時に、商品價値は直接に表現されずして貨幣商品の數量をもつて表現されるといふことに基づいてゐる。が、一層根本的には、商品生産社會の矛盾、その生産の無政府性に基づいてゐる。從つてまた價格が價値から離れ去るといふ可能性は、價格形態そのものに內在するものではあるが、しかしそれはこの矛盾に充ちた社會から見れば價格形態の缺點といふよりはむしろ「必要」な機能の一つをなす。

といふのはどういふことか？　諸君は、商品生産社會の均衡がどうして保たれ得るかを想ひ出しさへすればよい。諸君は、商品がその價値よりも高くなるか安くなるかする每に、その生産に

必要な勞働の、社會における分配は訂正され、商品の需要供給の變化を通じて絶えず價値通りの交換に導かうとする運動の起ることを見た。言ひ換へれば、商品交換の割合は絶えず價値を中心として變動することを見た。このことは直ちに價格にも當て嵌まる。かやうに價値を中心として變動する價格は市場價格と呼ばれる。變動する價値は市場價値と呼ばれる。この市場價値または價格は、價値そのものと混同すべきでないことも諸君はすでに知つてゐる。で、要するに、均衡を必要とする商品生産社會に對して唯一の目標を與へ得るものが價値であるとすれば、その目標から外れてゐることだけを現實に示すところの危險信號の役割をするものは、市場價値または市場價格の動きであると言へるのだ。

最後に、價格の矛盾――

その一つはすでに述べてある。價格形態なるものは、價値量と價格との間における量的不一致を可能ならしめる、言ひ換へれば價値量と、價値量それ自身の貨幣表現との、量的不一致を可能ならしめるといふ矛盾、これである。

次には、價格形態なるものは單にさうした量的矛盾のみならずまた一の質的矛盾をも含むのだ。といふのは、貨幣は商品の價値形態であるといふのに、價値の貨幣表現である價格が、價値の表現でもなんでもないものになるからである。見給へ、――良心、名譽、貞操、代議士、等それ自身としては商品ではない筈のもの、從つて商品價値のない筈のものが價格を持ち、貨幣に對して賣られるのだ。さういふものまでが價格を持つのだから、むろんその外いろ〳〵のものが價格を持つ。それらについてはなほ後に述べたいと思ふが……。

それからもう一つの面白い矛盾、それについては、いろんな商品にいろんな價格をつけて手具脛ひいて待ち構へてゐる人達にきいてみるとい〻。殊にこの頃のやうに失業だの減給だの、戰爭だの、金再禁だのと言つてゐる「時節柄」においては、彼等は一つの矛盾を痛感しまいとしても不可能だ。彼等はその商品をどうしても「現ナマ」と取り換へなければならないのに、取り換へることの出來ないといふ可能性はあり過ぎるほどある！　この矛盾は、代議士の價格にも、貞操の價格にも附き纏つてゐる。それは價格一般の矛盾なのだ。

そのことは、――然らば貨幣はどのやうにして甲から乙の手に渡るか、そしてその際どんな機能を營むか、といふ問題に吾々を導いてゆく。

四　流通手段としての貨幣

アフリカを旅行してゐる男があつた。彼は如何にして丸木舟を手に入れたか、といふ話である。これは實話であつて、或る旅行記に書いてある。

彼は丸木舟を傭はなければならなかつたのだが、アフリカ奥地の船頭さんは、舟賃を象牙で拂つてくれといつた。しかし旅人は、象牙は持つてゐなかつた。そこで、何處かに象牙はないかと思つて探すと、酋長サリブが持つてゐることがわかつた。が、サリブは、羅紗となら象牙を取り換へてもい丶といふ。旅人は生憎羅紗も持つてゐなかつた。彼はとう／＼酋長ハニフが羅紗を持つてゐることを聞き込んで、讓つて欲しいといふと、ハニフはそれを眞鍮の針金と取り換へたいと言ふのであつた。幸ひにも旅人は眞鍮の針金を持つてゐた。そこで彼はハニフが欲しいといふだ

けの針金を與へると、ハニフはそれに相當するだけの羅紗をサリブに與へ、そいサリブが今度は船頭さんに象牙を渡してくれた。「これらの取引の後にはじめて、――と旅行者は書いてゐる――私は丸木舟を手に入れることが出來たのであつた」。

こゝに物々交換の一典型がある。旅行者は、結局、針金と丸木舟を交換したのだが、彼はその交換を直ぐに實現することが出來なくて、いろんな媒介を經てはじめて目的を達してゐる。彼の所有した商品(針金)をW_1で現はし、彼れの手に入れようとした商品(丸木舟)をW_2で現はすならば彼れの實現せんと欲した交換の形態は次の如きものであつた――

W_1――W_2

ところが、さうは行かなくて、次の如き形態の交換を餘儀なくされた譯である。卽ち――

W_1(針金)――W_3(羅紗)――W_4(象牙)――W_2(丸木船)

この場合に、羅紗と象牙が、すでに一種の、交換の媒介者となつてゐることは明らかだ。物々交換にあつては、もつと〱多くの商品が一種の媒介者の役割を演じてくれなければ、交

換の目的は達せられないことが珍らしくない。しかるに、貨幣の成立した後は、事情は全く變つてゐる。

こゝに聖書を手に入れたいと思つてゐる酒場の主人があるとする。彼は、もはや、ウォツカを飲みたがつてゐるところの、聖書の所有者を搜さなくてもよい。彼は、例へばナンセンス作家でも誰でも懐の温かい者にウォツカを提供して貨幣を手に入れることが出來るだらう。そしてその貨幣をもつて、どんな聖書でも手に入れることが出來るだらう。更にまた聖書を賣つた者は、酒場のおやぢから受取つた貨幣でもつて、カジノ・フォリーの切符でも何でも好きなものを手に入れることが出來ようではないか。

これは、貨幣が活動してゐるところの商品流通の一場面だが、商品ウォツカが、商品バイブルと交換される形態は次のやうになる——

W_1(ウォツカ)——G(貨幣)——W_2(聖書)

ナンセンス小說とウォツカとの交換も全く同じ形態をとる——

W_1(ナンセンス小說)――G(貨幣)――W_2(ヴォツカ)

それから、聖書とカジノ・フォリーの切符との交換も同樣だ――

W_1(聖書)――G(貨幣)――W_2(カジノ切符)

等、等、――無限に、同形態の交換の連鎖は延びてゆき、擴がつてゆく。

こゝに明瞭なことは、(一)あらゆる交換において純然たる媒介者の役割を演ずるものは、今や、貨幣であり、そしてたゞ貨幣のみである。(二)今や、貨幣は、唯一の專門的な媒介者として、あらゆる商品の交換を助けてゐる。(三)貨幣は、今や、商品流通の不可缺の環をなす。

これが、貨幣の第二の機能である。卽ち貨幣が、流通手段として營む機能である。(むろん貨幣は、この機能を、貨幣の第一の機能卽ち價値の尺度としての機能と共に營むのだ。)

それなら、――と諸君は言ふだらう――、それはたゞ貨幣が物々交換の不便をとり除くといふだけのことではないか？ 吾々は答へる。斷じてそれだけのことではない、と。

もしも貨幣なるものが、諸君の教科書に書いてあるやうに、たゞ單に物々交換の不便を除くた

めに何人かによつていみじくも考案されたものであつたのなら、たゞ單にそれだけのものであつたかも知れない。しかし、諸君はすでに、貨幣の成立は商品生產社會の矛盾の展開による必然性であつたことを知つてゐられる筈である。そこで諸君は今度は、貨幣が交換の唯一の媒介者として作用するといふことは、同時に、社會的矛盾のより以上の擴大となることを知らねばならないのだ。

新らしい商品流通の形態 W—G—W をはつきりと瞶めて見給へ。こゝにG（貨幣）がはさまつてゐるといふことは何を意味するか？

物々交換の場合には、交換が實現されるのは手間どつたけれども、一度交換が實現すれば、それは常に商品に對して商品が直接に交換されるものだつた。即ち、常に W—W であつた。しかるに、今度はいかなる商品交換にも常に貨幣Gが介入しなければならないとなると、W—W といふ交換は常に二つの環に分裂する。即ち先づ、

W—G

といふ交換が起らねばならぬ。言ひ換へれば商品はまづ貨幣と交換されねばならぬ。商品はまづ

販賣されねばならぬ。そしてその上で更に、

(G——W)

といふ交換が起らねばならぬ。卽ち今度は貨幣が、商品と交換されねばならぬ。言ひ換へれば商品は購買されねばならぬ。

そこで、先づ、この販賣の環と購買の環とが、うまく結びつく場合を考へて見る。卽ち第一の商品ウォツカが賣られ、その代金たる貨幣をもつて第二の商品バイブルが買はれるとする。ところで、バイブルが買はれるといふことを言ひ換へればバイブルが賣られるといふことである。そして、ウォツカが賣られる時も、バイブルが賣られる時も、商品と貨幣商品とが取り換へられたといふ點は全く同一である。ところで、これを使用價値對交換價値といふ觀點から見ると、いづれの場合も、貨幣商品たる金を受取る方は、これを全く交換價値として受取つてゐる。彼等は、指環にいゝとか時計やカフスボタンにいゝとかいふ金の自然的性質に少しでも興味を持つて金を受取るのではない。これは、サリブが羅紗を受取り、ハニフが眞鍮の針金を受取る場合とは譯が

違つてゐる。さうではなくて、たゞ單に自己の商品の交換價値として、貨幣たる金を受取るのだ。卽ち、貨幣は今や專ら交換價値である。

反對に貨幣を渡して商品を受取る方の側を見ると、彼等は、ウォツカやバーイブルを交換價値として受取るのではない。彼等はウォツカを飮み、バーイブルを讀みたいと思つて受取るのだから、專ら使用價値としてそれを受取るのだ。これは、アフリカの旅行者が羅紗や象牙を受取る時とは譯が違つてゐる。「モダン」な彼等にとつては、ウォツカやバーイブルの交換價値などはまるで問題でないし、實はそんな交換價値などはゼロであつてくれゝばいゝ、ロハで手に入るんだがなあ、位に思つてゐる。

更にまた、貨幣たる金について見ると、それを受取る方がその使用價値を問題にしない位だから、渡す方でそれを問題にする筈はないし、反對にウォツカやバーイブルについて見ると、それを渡す方がその交換價値を專ら貨幣の中に見出してゐる位だから、受取る方でそれを商品の中に見出す筈はない。(これらの場合、いはゆる中間商人はすべて度外視して差支へない)。

さうすると、(三)——(ロ)といふ風に商品と貨幣とが相對立することになると、商品は常に專ら使用價値として、貨幣の方は常に專ら交換價値として、相對立することになる。卽ち、物々交換の場合には、個々の商品は使用價値であると同時に交換價値であるといふ內部的矛盾を持つてゐるのだが、その矛盾は今や商品對貨幣といふ外部の矛盾に轉化され、それと共に、商品世界全體の矛盾にまで擴大されてゐるではないか。商品世界は今や眞つ二つに分裂した。貨幣商品は交換價値の極に立ち、他の一切の商品は使用價値の極に立つて、相對立する。

かうした矛盾の擴大は、商品の最も單純な價値形態のうちにすでに萠芽的に含まれてゐるといふことを吾々は指摘しておいた。さうだとすれば、貨幣が唯一の專門的な交換媒介者たる時に生ずるところの、矛盾の擴大は、貨幣なるものによつて外部から突然に商品世界へ持込まれるのではなく、商品そのもの〻中に含まれる矛盾の展開であることは明らかであらう。

では、市場價値と交換價値との完全な分離、商品の矛盾の、外部への擴大といふことから、何事が起らねばならないか？

吾々は、一應、販賣も購買も共にうまく行つて二つの環は結びついたものと假定しておいたのだが、實はそこに早くも問題が起るのだ。

貨幣がすでに唯一の交換媒介者であり、この媒介によらなければ商品の交換價値は決して實現されないといふことになれば、何よりも先づ、W――G――W といふ過程が故障なく進まないことには社會全體の生產の續行は困難になり不可能になる。つまり、一切の種々樣々の勞働がお互ひに都合よく取り換へられ、すべての人の消費の必要が充たされ、次の消費のための新らしい生產がそれぐ\都合よく進められて行くといふことが出來なくなる。一口に言へば、社會全體の新陳代謝作用がうまく行かなくなつて來る。

ところで、先づ W――G をとる。マルクスはこれを、商品が『命がけの飛躍』をやつてゐる姿だと言つた。商品は、貨幣と引換へに、他人の手へ飛び移らねばならない。貨幣の方は、大威張りで、誰の手へでも飛び移り得るが、しかし商品の方はさうは行かない。しかも、その飛躍に失敗つたが最後百年目だ！

賣れない商品といふやつほど慘めなものはない。これは使用價値でない、といふ刻印を社會から捺されて腐つてゆくやつがある。それほどの極刑に處されなくても、二束三文に叩き賣られて行くやつがある。これなどは命からがらの「飛躍」をやつた部類だらう。もつと罪の輕いところで、元もろくろく取れないといつたやうな情ない金額と引換へにされる商品などはざらにある。

どうしてさういふことになるのか？　それは言ふ迄もなく、生産の無政府性、無計畫性から來る。あてずつぽうの、盲滅法の、行當りばつたりの生産である以上、生産された商品が果して使用對象となり得るかどうか、恰度入用だけ生産されて市場をだぶつかせないかどうか、さういふことはてんでわからない。幸ひにもナンセンス小說が賣れて、「彼氏」の手に若干の貨幣があつたればこそ、酒場のウォツカも賣れたやうなもの、、ナンセンス小說がいつも賣れるとは限らない。そんなナンセンスなものではなしに、およそ日本人なら誰れでも三度々々頂くであらうところのお米でさへも、何百萬石といふ大量のものが三井三菱の倉庫に三年越しつまつてゐてどうにも出ることが出來ず、盛んに毒瓦斯を發散してゐたり、これではならぬと一石三圓の四圓のとい

ふべら棒な値段で外國へ賣飛ばされてゐたり、――そのくせ國內では勞働者大衆が餓ゑてゐたり、おまけに農民大衆も餓ゑてゐたり、まことに凄じいことにもなり得る。

商品が賣れるか賣れないかわからないといふことは、買手があるかないかわからないといふことだ。言ひ換へれば、G――W、が生ずるかどうかわからないといふことだ。

で、たとひ第一の商品はどうにか『生命がけの飛躍』をやり了せ、W――G は實現されたとしても、これに續いてすぐに G――W が生ずるといふ保證などは一つもない。第一の商品を賣つた者は、まさしく貨幣を手に入れてゐる。彼は、晩かれ早かれ、その貨幣をもつて第二の商品を買ふではあらう。貨幣は結局商品にめぐり逢ふ運命を持つてゐる。だが、彼が、何時、何處で商品にめぐり逢ふかは、まるでわからない。一口に言へば、たゞ賣つただけで買はないといふ可能性、もしくは賣つただけの額より少くしか買はないといふ可能性、從つて購買の環と販賣の環との間に大なり小なりの間隙を生ずる可能性は、あり過ぎるほどある。さうすると、吾々が前に述べたところの、商品流通の連鎖が販賣の環と購買の環とに分裂するといふ單純な事實のうちに

すでに、商品は出來たが買手がないといふ矛盾した事態の生ずる可能性は含まれてゐる。

マルクスは、そこにすでに商業恐慌の一般的可能性のあることを指摘した。この恐慌の可能性は、貨幣を媒介者とする商品流通の連鎖において、相互に依存する諸要因が相互の對立物に轉化されるといふことから生じてくる。さればマルクスは言つた、「貨幣の流通は恐慌なしに生じ得るが、恐慌は貨幣の流通なしには生じ得ない」のだと。

實際、貨幣の流通する場合、卽ち貨幣が唯一の專門的な「商品流通の手段」として機能する場合を、全面的に觀察してみるがいゝ。販賣と購買の連鎖は無限に延びてをり擴がつてゐる。そこで、例へばバナヽ屋はバナヽを賣つてその金で帽子を買つたとしても、帽子屋にしてみれば、自分の受取る金は果してバナヽの化けたものか、メリンスの化けたものか、自轉車の化けたものかそんなことは少しも知らないし、またどうでもいゝことである。同じやうに、バナヽ屋にとつてもまた、彼の受取つてそして帽子を買ふのに用ひた貨幣が、どこの誰の手においてどんな商品の化けたものかはまるつきり知れはしないのだ。それでゐて、事實においては、バナヽ屋が帽子を

買ふことが出來たのは、例へばカジノ・フォリーの踊り子達の喰べたおさつを何處かのお百姓が賣つたからだかも知れないのだ。つまりその金でお百姓がバナヽを買つたからだかも知れないのだ。そしてまた、踊り子達におさつを賣ることが出來たのは、バイブルを賣ることの出來た男等等にカジノの切符が賣れたからでもあらう、等々實に際限がない。

だが諸君、かうした連鎖の一つでもが斷たれたらどうなるか？　そこに商品流通の攪亂が起るのは必然である。

かうした事態は、二つの相矛盾する事柄を同時に現はしてゐる。貨幣を媒介とする商品流通なるものが、一方においては、物々交換における個人的及び地方的制限を打ち破つて如何に廣汎な社會の新陳代謝作用を展開せしめるかを示してゐるが、それと同時に他方ではまた、そこに發展して來た社會的＝自然法的な關係の全體が、如何に取引當事者達の手に餘るものになつて來たかを示してゐるではないか。

ところでまた、その社會的＝自然法的な關係の全體が、取引の當事者達の手に餘るものになつ

て來れば來るほど、彼等はます〳〵貨幣の支配下に立つやうに思へて來る。そしてそのことはまた、貨幣流通なるものゝ性質に基づくのだ。

あらゆる商品は、到るところで「命がけの飛躍」をやらうと身構へてゐる。やれるかやれないかは、一にかゝつて貨幣が彼等の前に現はれるか否かにある。現はれたとする。商品はやれ〳〵と買手の方へ飛び移る。商品の附添人である賣手の方は、へイ有難うございますと頭を下げて貨幣を頂戴する。この貨幣が、今度は第二の商品の前に現はれる。そこでまた同じことが繰り返されて、へイ有り難う御座いますで終る。同じ貨幣がまた第三の商品の前に現はれる、等々、さういつた具合に貨幣は流通する。

商品は常に賣手の側に立ち、貨幣は常に買手の側に立つ。そして、貨幣は常に購買手段として作用する。流通手段として機能する貨幣、交換の媒介者たる貨幣は、常に購買手段として商品所有者の前に現はれる。

貨幣は、常に購買手段として作用することによつて、早くも商品世界の權力者にまつり上げら

れようとする。商品は、それが賣られて金になる限りにおいてのみ商品である。商品が甲の手から乙の手へと動くのは、二人の商品所有者の慾望が相互の商品に對してたま〳〵一致したからではなくて、貨幣の魔術棒の合圖によるといふ風になる。人々は、貨幣現象の背後にある社會全體の新陳代謝作用の大きな動きのことなどは忘れ果て、ましてその貨幣が社會的矛盾の産物であることなどは忘れ果て、たゞ〳〵貨幣の力の前に平伏する。そしてその「力」の根源を、商品世界以外に求めて見たりする。

そこでまた、商品が流通するから貨幣が流通するのではなく、貨幣が流通するから商品が流通するのだといつた風にも思はれて來る。たしかにまた、貨幣の動いて行く姿だけを見ると、さういふ錯覺が起らずにゐない——。

W_1（ウォツカ）——G——W_2（バイブル）

これは酒場の主人の手にあつた商品ウォツカが、商品バイブルに姿をかへて彼れの手にあることを示してゐる。それは商品の轉形する運動を示す。そしてこの轉形運動は貨幣を媒介としてな

されたことを示す。ところが、この轉形運動の前半なる W—G において、商品ウヰツカはきれいに飲まれてしまふから、使用價値としての身柄においては流通界から脱落し姿を消す。そしてたゞウヰツカの交換價値だけが貨幣の身柄で殘つてゐる。從つて商品ウヰツカは、その轉形運動の後半なる G—W を通過する際には、貨幣の姿でもつて動いて行く。そしてその通過が終るや否や、今度は商品バイブルが流通界から姿を消し、たゞその交換價値だけが貨幣の姿で殘つてゐる。この貨幣が更にまた前進し、それと共に第三の商品が姿を消す。さういふ具合に運動は續いて行く。

そこで、流通界の外觀を見ると貨幣の方は絶えず流通界にあつて活動を續けるのに、商品の方は一足動いては流通界から消えて行くものだから、貨幣が商品を流通させてゐるやうに見えて來る。現に、取引の當事者達は、金の廻りがいゝからとか、わるいからとかといつて、商品流通の原動力を貨幣の方に歸してゐる。

しかしそれが錯覺であることは言ふ迄もない。商品生産社會においては、商品と商品とは取り

換へられねばならず、その際に貨幣が媒介者として現はれねばならないからこそ、貨幣は流通する。また貨幣は、それ自身獨立した商品價値であるが故にのみ流通手段たる機能を與へられるのだ。一口に言へば、貨幣の流通は、商品の流通そのものの現はれであり、一形態であるに過ぎないのだ。

が、それにしても、貨幣の方はその流通手段たる機能の故に、絶えずその內部を駈け廻つてゐる。しかも商品の轉形を媒介する貨幣の流通は無限に分散し錯綜した運動であるから、貨幣がいかに活潑に飛び廻らうとも一個や二個の貨幣片で事足りる譯のものではない。そこで、與へられた時において、商品の流通を確保するためには、幾何の貨幣が必要であるかといふ問題が生じて來る。

第一に、貨幣は常に購買手段として商品に對するのだから、商品界の流通過程に必要なる流通手段の量は、とにかく先づ、賣買される諸商品の價格の總額によつて定まることは明かだ。

けれども、一週間內に賣買される商品の價格總額は例へば一千萬圓であるといふ場合に、貨幣

もやはり一千萬圓を必要とするといふことにはならぬ。なぜなら、同じ一個の貨幣は、一週間内に唯一度だけではなく、幾度も購買に役立つてゐる。同じ一圓貨幣でも、甲から乙、乙から丙の手へと渡り歩いて、米一圓、綿一圓、書物一圓、等々といふ風に、一週間内に五圓も七圓もの購買の役に立つ。むろん、役立つ回數、即ち流通の速度は個々の貨幣によつて異なる。しかし、その平均回數、平均速度を考へることは出來る。貨幣一單位の平均流通速度が大なれば大なるほど、各單位はヨリ多額の購買に役立つから、それだけ貨幣の總額は少くて事足りるであらう。

そこで、解答は與へられる。流通に必要な貨幣の總量は、商品價格の總額を、貨幣單位の平均流通速度で割つたものに等しい、と言はねばならぬ。

更に詳しく言へば、——

一、商品價格が一定してゐれば、貨幣の必要量は、流通商品の量の增すのに比例して增し、且つ貨幣の流通速度の減るのに比例して增す。その逆の場合は逆になる。

二、商品價格の騰貴する場合には、商品量がそれと同じ割合で減少するか、又は商品量は不變

で貨幣流通速度が同じ割合で増大するかすれば、貨幣の必要量は不變である。更に、商品量が價格騰貴よりもヨリ大なる割合で減少するか、又は貨幣流通速度がヨリ大なる割合で増大するかすれば、貨幣必要量は減ずる、（その逆の場合は逆になる）。

三、商品價格の低落する場合には、商品量がそれと同じ割合で増大するか、又は貨幣流通速度が同じ割合で減少するかすれば、貨幣必要量は不變である。更に、商品量が價格低落よりもヨリ大なる割合で増大するか、又は貨幣流通速度がヨリ大なる割合で減退するかすれば、貨幣必要量は増大する、（その逆の場合は逆になる）。

で、要するに、諸君は、先づ一般的には、商品價格の總額と、貨幣の流通速度とが、商品流通に必要な貨幣量を決定するのであつて、流通してゐる貨幣の量が、商品の價格を決定するのでは、ない、といふことを記憶しておかるべきである。

五　鑄貨と紙幣

金が貨幣商品となり、流通手段として機能することになると、金は鑄造された貨幣として流通すべき必要がすぐに生じて來る。それは、金が價値尺度として機能することになると、金の一定量は貨幣の本位もしくは價格の標準として定められる必要がすぐに生じるのとおんなじだ。が、しかしまた、鑄造貨幣になつた金が交換の媒介者として活動しはじめるや否や、それはやがて補助貨幣だの紙幣だのといふ代用物によつて置き代へられる必然性がそこに生じて來る。

こゝに諸君は、流通手段としての貨幣の機能に關する最も特徴的な事柄を研究する順序になつたのだ。

貨幣たる金をいち〱秤で量つて取引したのでは面倒で耐らない。さういつた不便を取り除くといふ技術的な必要から、貨幣は必然的に鑄造されるやうになる。國家は、こゝでも技術的な役割を引受けて、貨幣の鑄造を一手でやる。もし、二分の金が、貨幣の本位乃至は價格の標準として定まつて、それが圓と呼ばれることになれば、例へば金の純分一匁を含む鑄貨は、その圓盤面に五圓といふ刻印を捺され、その他いろ〱の飾りを身につけて堂々と流通界に現はれて來る譯

だ。かうなれば、商品と引換へに貨幣を受取る者は、いちいち秤の上に載せてみたり、舐めてみたり、吹いてみたりする必要は無くなつて來る。

かやうにして、日本が圓鑄貨を持てば、イギリスは磅鑄貨を持ち、アメリカは弗鑄貨、フランスは法鑄貨を持つ。これらの鑄貨は、それぞれの「國民的制服」を着けて登場する。これは、商品流通の國民的な領域が、一般的な世界市場領域から分離してゐることを示してゐる。諸々の金鑄貨は、一歩國境外に足を踏み出すや否や、その國民的制服を脱ぎ捨て、もとの地金を現はさねばならぬ。世界市場においては、貨幣商品金は全く赤裸々な金として、再び秤の上に載せられる。

これを見てもわかるやうに、金鑄貨と金地金とは、本來はたゞ形の上の區別に過ぎない。金鑄貨はいつでも坩堝の中に投げ込まれて地金姿になり得るし、地金は地金で、たゞ造幣局へ送られさへすればいつでも鑄貨の扮裝をつけることが出來るのだ。一方から他方への轉形も、その逆の轉形も、純然たる技術的作業に過ぎないのだ。

だが、むろん、單にそれだけのことでは濟まなくなつて來る。金貨は流通しなければならぬ。流通する金貨のひとつ〳〵、これほど手にとつて見て「素性の知れない」やつはない。が、とにかく彼等は、ごつちやな社會を驅けずりまはつてゐる。彼等は、ありとあらゆる手や財布、ポケットや巾着や紙入や、袋や箱やトランクの中でがちやついて、その度毎に、こゝに金の一分子、かしこに金の一分子をおつことす。さうやつて荒い世間で揉まれるにつれて、彼れの肉體は磨り減らされ、次第にその內的實質を失つて行く。或るイギリス人が言つたやうに、「鑄造したてのぴか〳〵の金貨をけふ銀行で受取つてあすそれを製粉屋に支拂ふところのパン屋は、おなじ純眞な金貨を渡してゐるのではない。それは彼が受取つた時よりも輕くなつてゐる」。

かういふ譯だから、――一八〇九年のヨーロッパに流通してゐた三億八千萬ポンドほどの金貨が、その後の二十年間に一千九百萬ポンドも磨滅してしまつてゐた、といふやうなことも敢へて異とするに足らないのだ。

すべての金鑄貨は、流通すればするほど輕くなる。金鑄貨の額面は實質から隔たつて來る。

名目上の内容は現實の內容から分離する。金貨の表面には五圓と刻まれてある。しかし、それは五圓即ち一匁の金(そして例へば三十時間の勞働)を含むものでなく、九分の金(二十七時間の勞働)しか含まない。或は八分の金(二十四時間の勞働)しか含まない。即ち四圓しか含まない。それでゐて、やはり、流通界においては、五圓として、一匁の金として作用する。さうだとすればそれはたゞ本物の五圓貨幣の「しるし」として、影として、象徴として、作用するだけのことである。言ひ換へれば、その「五圓金貨」なるものは、現實の五圓金貨ではなく、たゞ觀念上の五圓金貨に過ぎなくなる。一切の金鑄貨は、流通の初發の一歩から、多かれ少なかれ磨滅を免れないのだとすれば、一切の鑄貨は多かれ少なかれ觀念的な存在であり、象徴であることになる。言ひ換へれば、刻印だけは同じでも、實は正銘の貨幣ではないのだといふことになる。その證據には、一歩國境外へ足を踏み出すと、忽ち秤の上にのせられて、假面を剝がれてしまふのだ。しかるに、物の外觀だけに捉はれる人々は、金鑄貨こそ正眞正銘の貨幣だなどと思つてゐるのは、何時もながら滑稽なことではないか。

それでは、それだけ中味のないものが、なぜ額面通り、刻印通りのものとして通用するか。それは、鑄貨なるものが一國內で專ら流通手段として機能するといふ限りにおいてのことである。人々は、流通手段として鑄貨を受取るのである限り、それを手許に置くのはほんの一時であつて、また忽ちそれを商品と引換へに他人に渡す。その場合に彼等が五圓分の商品を手に入れることさへ出來れば、鑄貨は流通手段たる役目を果すのだから、それが重からうと輕からうと人々にとつてはどうでもいゝことであるからだ。

ところで、一度鑄貨の額面が實質から距たり始めると、距たりは際限もなく大きくならうとする。

同じ五圓の金貨でも、驅けずり廻つた回數の多少によつて、ひどく磨滅したやつと、それほどでないやつとある。それでゐて、どちらも五圓で通用する。さうである限り、利巧な人間共は目方のある方の金貨に目をつける。そして、こいつ贅澤に肥つてゐやがるといふので「贅肉」と思はれる部分に對して外科手術を施してやる。彼等は、その削り取つたあぶらみを失敬する。かや

うにして、餘り驅けずり廻らなかつた方の金貨すらが、痩せた兄弟分並みに目方を落されて行く。

そこで、金貨の純分はますます貧弱になり、しかも金貨一般がさうだといふことになつたら、どうか。百個の五圓金貨を秤にのつけて見ると、百匁ある筈のものが大體八十匁しかないといふことになる。金貨を持つた人々は、金市場へ出かけて行つて百匁の金を買はうとすると、五圓金貨百個ではもうそれを渡してくれぬ。地金商人は例へば百二十五個の五圓金貨を要求する。卽ち地金の相場は、百匁につき六百二十五圓、一匁につき六圓二十五錢だといふことになる。金貨そのものの値打ちが下がつたのだ。

かうなつては、いかに政府でも、もと通りの金貨は出せなくなる。たとひ一匁の金を鑄造して五圓だといつて出してやつても、忽ち鑄つぶされて地金に化ける。それはさうだらう、地金にすれば六圓二十五錢になるのだから。

そこで、貨幣の本位が變更されねばならなくなる。貨幣の計算名は依然として圓でも、從來圓

といふ名を與へられて貨幣本位に定められてゐた金の分量——例へば一匁——は、今や減らされねばならぬ。貨幣本位たる金の定量は今や例へば八分に切下げられ、これがもと通り圓と呼ばれるやうになる。そして新しい金貨は、この新しい本位に應じて鑄造されることになる。——初めは、金が、流通手段として、鑄貨として、觀念上の存在になり、觀念化されたのだが、今やその反作用として、貨幣の本位乃至は價格の標準に定められてゐた金の定量そのものを變更させるといふ譯である。かゝる過程は、歴史上絶えず繰り返されて來た。從つて『あらゆる近代國民の歴史に於いて、同じ貨幣名があらはすところの金屬內容が絶えず減少しつゝあつたといふ現象』も生じたのだ。これは何よりも雄辯に鑄貨磨滅の不可避性を語つてゐる。

鑄貨の磨滅すること、それによつて鑄貨が金の象徴に轉化するといふことは、到底避け得るものでない。しかし、それに對していろんな立法上の努力がなされて來た。その一つは、金貨の金屬內容の減少が一定の程度に達すると金貨たるの資格を剝奪して流通から引上げることを規定し、それによつて、象徴化された金の無制限に流通するのを避けようとする試みである。例へば

イギリスの法律では、〇・七四七グレーン以上の重量を失つたものはもはや法貨と見做さなかつた。フランスの五法銀貨はその重量の〇・五％以上を失ふと法貨でなくなつた、等々。が、これらのことは、金貨の磨滅と象徵化との不可避性を語るのみである。

さういふ次第である以上、金貨を流通させようとすれば、その流通の範圍を狹く限定しなければならなくなつて來る。卽ち、鑄貨の磨滅が比較的急速でないやうな流通部面にだけ金貨を流通させ、小賣取引などが行はれて磨滅の最も激烈なやうな部面には金貨の代用物を流通させねばならなくなる。

そんなことは出來るか？　出來るには出來る。

第一、磨滅して正味八分しかない金貨が五圓として流通してゐるのは、正味一匁の貨幣の「しるし」が、影が、象徵が、流通してゐるのだ。そのことは、すでに、貨幣なるものが流通手段として機能する限りにおいては、自己の「しるし」や影や象徵に、自己の機能を代理させ得るといふことを示してゐる。次には、しかし、――自分の象徵に自分の機能を代理させ得るとしても、

自分が自分の象徴になれるものではない。金が金の象徴であらうとしたつて駄目だ。自分と全く違つたものでこそ象徴であり得る。たとひ繪に描いた葡萄でも、葡萄は葡萄の象徴ではない。まして痩せた馬が肥えた馬の象徴になり得る筈はないのだから、輕い金が重い金の象徴にならうとするのは出來ない相談だ。だから、削り取りだの、鑄つぶしだのといふゴタ／＼も起きて來る。

そこで、今度は、銀貨や銅貨が、金の象徴として現はれて來る。金の表章(しるし)として現はれて來る。そして、それらのものは金の象徴、金の表章として、金貨の流通手段たる機能を代理する。この銀貨や銅貨は、「名目貨幣」であり、「代用貨幣」であり、「補助貨幣」である。

本來、流通する金貨全體のうちの何割かのものは、どうしたつて小賣取引の流通部面で作用しなければならないのだ。大體において、恰度その部分に相當するだけの銀貨や銅貨は、金貨に取つて代ることが出來る。これは單に流通手段としての機能を代理するだけのものだから、その銀貨や銅貨の金屬重量はどうでもよく、流通上その他の便宜に從つて勝手に法律で定めてよい。諸君御承知の通り、五十錢銀貨十個に含まれる銀純分の價値は、金一匁の價値に比べるとお話しに

ならないほど低いのだ。

銀貨や銅貨は、流通の浪風の一番荒いところで活動するのだから、その磨滅もまたお話しにならないほど激烈だ。諸君は、これがお錢かと首をひねらねばならぬやうな大それたやつに出くわしたことも屢〻だらう。それでも彼等は流通する。價値といふ點から見ればゼロなやつまでが流通する。

さうなつて來れば、材料上ではたゞ紙片に過ぎない紙幣といふ代物が現はれて來て、ピカ〳〵の金貨に代つて流通手段たる機能を營んだところで、少しも不思議はないことになる。それは代用貨幣の一種に過ぎない。無價値同様の金屬片によつて營まれてゐた機能と同じ機能が、無價値同様の紙片に移るのは、唯の一歩に過ぎないのだ。

紙幣は、金貨の象徴として、表章として流通する。從つてそれは、金貨を代理する限りにおいてのみ、流通手段としての機能を營むことになる。然らば、どこまで代理し得るかといふ問題になるが、これに對する解答は、後にインフレーションを論ずる時に讓らなければならぬ。

尤も、こゝに紙幣と言つたのは、今日日本において流通してゐるやうな兌換券——それは信用貨幣の一種である——のことではなく、國家そのものによつて外部から流通過程内に投げ込まれたもの——謂はゆる不換紙幣——を指してゐる。それは、嚴密な意味の紙幣であつて、上來説明したやうに、全く流通手段としての貨幣の機能から生じて來るものである。しかるに兌換券その他の信用貨幣なるものは、間もなく述べるであらうところの、支拂手段としての貨幣の機能のうちに、その發生の根元を持つてゐる。

で、要するに、こゝで重要なことは、次の諸點である。——

貨幣は流通手段として機能する限り必然的に鑄貨の形態をとらずにはゐない。が、鑄貨は鑄貨で、必然的に磨滅し、觀念上の存在に轉化し、象徴に過ぎなくなる。貨幣の流通手段たる機能は、金貨幣そのものによらずとも、その象徴たるものによつて代理せられ得る。そこで、無價値同様の銀貨や銅貨や紙幣が、金貨の象徴として、その流通手段たる機能を代理するといふことになる。だが、無價値同様の紙幣などが、内在的價値を有する金鑄貨に代り得るのは、たゞ一國内

の流通行程において流通手段として機能する限りにおいてのことである。

例へば五圓の米を賣つたその貨幣で五圓の石油を買ふお百姓のことにすれば、その貨幣たるやほんの僅かの間自分の手に止まるだけで、すぐにまた自分の手から飛び出してゆくものである。彼がそれを手離して、それと引換へに五圓に相當する價値のある商品を受取る以上、この五圓が金であるにせよ、またその代用物の銅貨や紙幣であるにせよ、それはどうでもいゝことだ。石油屋にしても全く同樣で、例へば彼がその五圓を流通に投じて五圓の價値あるラシャを手に入れるとすれば、文句はない。そして、このやうな商品の轉形、即ち W_1—G—W_2 に役立つといふこと、それだけが流通手段としての貨幣の機能なのだ。

最後に、かやうに、紙幣などがその機能を代理し得るのは、もちろん内在的價値ある鑄貨の存在を前提してのことである。それの存在を前提しないならば、それの代理をする貨幣もまた存在し得ないであらう。

六　貨幣としての貨幣

こゝでまた一應の締めくゝりをすることにしよう。

吾々は、まづ交換なるものを分析して商品の性質を見究め、商品の使用價値と區別される交換價値即ち價値を研究してその實體を把握した。さうした上で吾々は、價値形態の研究に進み、價値形態の發展としての一般的等價物に到達した。吾々は、一定の商品が、この一般的等價物に固定化して、貨幣商品となることを見た。そして更に進んで、この貨幣商品は如何なる機能を營むかを研究した。その結果、吾々は、價値の尺度たる機能と、流通手段たる機能とを學び得たのであつた。

で、一定の商品(金)は、かやうに價値の尺度として役立つと共にまた流通手段として役立つやうになれば、そのことによつて直ちに貨幣となるのである。即ち、それ以上社會の助けを借りなくても貨幣となるのである。これを言ひ換へれば、一定の商品(金)は、まづ價値の尺度と流通手

段の統一として貨幣となる。もう一つ言ひ換へれば、價値の尺度と流通手段との統一が貨幣である。

貨幣たる金は、二つの機能を併せ營まねばならぬ。そのいづれを缺いてもいけないのだ。例へばマルクスの指摘したやうに、イギリスに於いて代用貨幣として流通してゐた銀は、價値の尺度でもなく、支配的な流通手段でもなかつたから、貨幣ではなかつた。同じやうにまた、オランダに於いては、金は價値の尺度たる地位を奪はれるや否や、貨幣ではなくなつた。

かやうに、金は、價値の尺度と流通手段との統一として貨幣なのであるが、かゝる統一としてはまた獨立の存在を有するものであることに注意しなければならぬ。卽ち、價値尺度たる機能における金の存在とも異なれば、流通手段たる機能における金の存在とも異なるところの、獨立の存在を金は有するのだ。

諸君は、價値尺度としての金の存在は、單に觀念上の存在に過ぎないことを知つてゐる。また單なる流通手段としての金の存在は、象徴的な存在に過ぎないことを知つてゐる。かゝる存在は

いづれも獨立性のない存在だ。では、金はたゞそれだけの存在しか持たないか？　そんなことはない。金は、周知の如き金屬肉體としての存在を持つてゐる。そして、二つの機能は、この金屬肉體としての金の存在においてのみ統一されてゐる。その意味において、金屬肉體としての金は貨幣であり、貨幣は現實の金である。

機能を營む實體がなければ機能はない。金は、金屬肉體として存在すればこそ、それが一定の機能を營む際には觀念上の存在であることも出來、他の機能を營む際には象徴的な存在であることも出來、また象徴たる他物をして自己の機能を代理せしめることも出來るのだ。觀念化されるものがなければ觀念化はない、象徴化されるものがなければ象徴はない、代理されるものがなければ代理はない。

が、それだけのことではない。貨幣としての金は、價値の尺度たる場合のやうに單に觀念的なものであることも出來ず、また流通手段たる場合のやうに他物によつて代理されることも出來ないで、どうしても自己の黄金の現身をもつて現はれねばならぬ場合がある。即ち、專らその金屬

肉體のまゝの貨幣商品として現はれなければ、どうしても貨幣として作用し得ない場合がある。例へば、金が、貨幣として退藏される場合や、世界貨幣として作用する場合などがそれである。それらについては間もなく述べるが――。

そこで諸君は、價値尺度及び流通手段たる二つの機能を一身に統一してゐるところの、貨幣たる金の獨立の存在を見究めておかねばならぬ。

これを見究めるためには、貨幣たる金の獨立の存在を、流通手段としての存在からはつきりと區別してかゝらねばならぬ。

すでに述べたやうに、貨幣が流通手段であるのは、それが現實に商品と取り換へられる時に限られる。言ひ換へれば、W――G 即ち商品が貨幣に轉形される販賣の時、および G――W 即ち貨幣が商品に再轉形される購買の時に限られる。お百姓でも酒屋でも誰でもが、自己の商品の販賣を終つて貨幣を得たとする。その貨幣は彼等の手にあつて未だ購買に使用されずにゐるとする。その際の貨幣は流通手段たることを一時止めてゐる。しかも、一社會に存在する貨幣全體の

中の一定の部分は、常に、かやうな休止狀態におかれてゐる。それは、流通W――G――Wにおける第二の環G――W卽ち購買は、第一の環(販賣)の直後に行はれるのでもなく、またすべての人によつて同時に行はれるのでもなくて、多少の時間をおいて次々に起るのだからである。卽ち、貨幣の一部分が流通手段として機能する時、他の部分は常に休止狀態にある。全體として見れば總ての貨幣は交る〴〵休止狀態をとる。そして、休止狀態にある限り、貨幣は、流通手段としての存在を脫してゐる。

さういふ譯だから、貨幣たる金の獨立の存在を見究めるのには、休止狀態にあるそれを觀察しなければならぬ。

その場合諸君は、一方にはあらゆる貨幣片の總體、他方にはあらゆる種類の商品の總體を考へることが出來るだらう。そして、兩者を對立させて考へることが出來るだらう。茲は兩者の間の關係にかゝつてゐる。

この場合に、商品の金に對する關係は、まづ價格における關係である。すべての商品は、それ

それの價格において、一定量の金を表示してゐる。米一石は二十五圓で五匁の金を、帽子は五圓で一匁の金を、あつぱつぱは二圓で四分の金を表示してゐる、等。だが、それらの金は觀念上の金であり、觀念上の貨幣であるに過ぎない。諸商品は金そのものではなく、たゞその價値において觀念上の金を表示するだけのことだから、諸商品は金をたゞ代表するものに過ぎない。かやうにすべての商品が單に觀念上の金(貨幣)を表示することによつて、金(貨幣)を代表するものに過ぎなくなつてゐる以上、さやうに代表されるところの貨幣(金)そのものは今や唯一の現實的な商品であることになる。

ところで、商品は使用價値と交換價値即ち價値とを持つ。價格に現はれるのは、交換價値であり價値であり、從つて一般的社會的勞働であり、抽象的な富である。そして、今言つた關係においては、諸商品はそれらのものをたゞ代表するだけに過ぎないといふのに、金(貨幣)そのものの方は、それらのもの、特に抽象的な富の實體的存在であるといふことになる。

商品の金(貨幣)に對するもう一つの關係は、商品は金(貨幣)をもつて購買せられ得るといふ關

係である。これにおいては、抽象的な富ではなく、具體的な富が前面に現はれて來る。即ち、甘いもの、温かいもの、乘つて走るもの、等々の如き使用價値が前面に現はれて來る。

その際、商品の方はと見ると、それはおの〳〵たゞ具體的な富の一要素だけを表現してゐるに過ぎず、具體的な富の個々の一面だけを表現してゐるに過ぎない。しかるに、貨幣の方は、直ぐに何とでも交換することが出來、その限りにおいてどんな欲望でも充たすことが出來るのだ。それが貨幣(金)の獨自の有用性であり、獨自の使用價値である。(むろんこれは、美しく輝く等々の金の自然的性質のことを言つてゐるのではない)。貨幣(金)が、かうした「使用價値」を持つ以上、貨幣(金)は、その處女的な金屬肉體のうちに、あらゆる種類の使用價値、あらゆる種類の具體的富を孕んでゐることになる。つまり、貨幣(金)を提供しさへすれば、その等價物である限りどんな種類の使用價値でも無限に次々に實現することが出來るのだ。

その意味において、金(貨幣)は、それ自身の「使用價値」即ち何とでも直ぐに交換出來るといふ性質において、すべての商品の使用價値を代表してゐることになる。從つて、金(貨幣)は、具

體的な富の物質的代表者であるわけだ。「それはボアギュベールの謂はゆる「一切物の要約」であり、社會的富の摘要である」（マルクス）。

そこでマルクスは言ふ、――金は、『みづからその「價値尺度及び流通手段たる」機能を營むにせよ、また代理物にそれを營ませるにせよ、とにかくこの機能によつて專一的の價値形態となり、言ひ換へれば交換價値の唯一の適當な存在となり、さうした資格をもつて、單なる使用價値としての他のあらゆる商品に對立する時、貨幣として作用することになる』。

それでは、商品と貨幣との間の前記二樣の關係において、貨幣は如何なる存在を持つか？　それを要約してマルクスは言ふ、――貨幣は、『形態上では一般的勞働の直接の體現であり、內容上では一切の現實的勞働の總體である。それは、個體としての一般的富である』。さればこそ、人は富者を「金持ち」と言ふ！

これが、「獨立の存在」としての貨幣(金)の性質である。貨幣としての貨幣の性質である。

金は、流通手段としては、あらゆる侮辱を受けてゐる。削り取られたり、坩堝の中へ投げ込ま

れたり、カートン氏の金秤量器の上で刎ね飛ばされたり、遂にはたゞのシンボルである紙片にまで堕されたり、散々な目に會つてゐる。が、貨幣としての貨幣である時、その黄金の榮光は忽ち彼に返される。價値尺度としての彼は、たゞの下僕に過ぎなかつた。流通手段としての彼は、たゞの手間人足に過ぎなかつた。しかるに貨幣そのものとしての彼は、下僕から君主になり、手間人足から諸々の商品の神になる！

かくてまた、貨幣は偶像に祀り上げられる。そのことは、ブルヂョア經濟學の先驅者中の先驅者であるボアギュベールによつてすでに指摘されてゐる。——

人は、これらの金屬（金及び銀）を、一の偶像たらしめた。そして商業において金銀を用ひる目的や趣意、即ち金銀を相互間の交換と讓渡との保證として役立たせるといふ目的や趣意を忘れた。かくして人々は、金銀のかゝる役目を殆んど投げすてゝ、それを一種の偶像と化した。しかも人々はこの偶像に對して、多額の財物や貴重な必需品を犧牲にし、又常に犧牲にしつゝある。時には、人間をさへ犧牲に供する。古への蒙昧人でも、かゝる虛僞の偶像に對してこれ程の犧牲を

供したことは決してなかつた」。

諸君は、人間勞働の生産物が商品に轉化されると、人間の關係が物の關係に變つて來るといふことを學ばれたゞが、さうした社會關係の物化の形態は、諸君が貨幣を眺めるならば此上もなく鮮明に浮かびあがるだらう。物の外觀に幻惑された知能には、生産物それ自らが本質的に「價値」を持つかのやうに見えて來るのだが、貨幣たる金は、その自身の本性において價値の體現である。だから、商品崇拜の最高の形態は貨幣崇拜となる。マルクスは言つた、「貨幣の謎は、畢竟、商品の謎が、眼に見えるやうになり、人目を射るやうな形をとつたものに過ぎないのだ」。

七　貨幣の退藏

さて、吾々は、前に、一社會に存在する貨幣（金）は、その一部分が現實に流通手段たる作用を營んでゐる時に、他の部分は休止狀態にあり、全體として見れば總ての貨幣（金）は交る〳〵休止狀態をとることを見た。そして、かやうな休止狀態にある金において、貨幣としての貨幣、一般

的富」としての貨幣の存在を認識し得ることを知つたのである。が、しかし、そのやうな休止狀態にある貨幣は、たゞ一時流通を停止した鑄貨（卽ち流通手段）であるに過ぎない。そして、その場合の休止は、貨幣流通それ自體の單に技術的なモメントであるに過ぎないのだ。

ところで、人々はまた、貨幣を正に「一般的富」として所有し又は蓄積せんがために、貨幣を手に入れようと努力する。かゝる貨幣は、當然に、流通圈外に留置され、そこに不動化されて、流通手段として機能することを妨げられることになる。

この場合には、人々が商品を販賣する目的が變つて來る。彼等が、商品を販賣するのは、それによつて得た貨幣をもつて直ぐに自己の欲するものを購買せんがためではない。卽ち、その貨幣を直ちに購買手段として役立たせんがためではない。反對に、販賣によつて得たる貨幣をもつては何物も購買することなく、たゞその貨幣をば一般的富として所有し又は蓄積せんがためである。それはもはや購買の豫備行爲ではないことになる。從つて、商品を貨幣に轉形することは、それ自體が目的となり、よつてもつて社會全體が新陳代謝作用を營む手段ではなくなつて來る。

かやうに、貨幣を一般的富として所有し又は蓄積せんがために流通圏外に留置して不動化すこと、これが本來の意味における貨幣の退藏である。かく不動化された貨幣は「退藏貨幣」である。

貨幣退藏の傾向は、商品流通それ自身の最初の發展と殆ど同時に始まつてくる。

その最も素朴な形態は、早くも自給自足經濟の時代に現はれる。そこでは、必要以上に生産された生産物の剩餘だけが商品となるのだが、かゝる剩餘生産物が金銀と交換され、そして金銀として蓄へられる。かやうな金銀は、抽象的な社會的な富として保存される富の最初の形態である。

商品生産が更に發展してくると、貨幣退藏の必要はます〳〵増大する。慾望の種類はます〳〵多くなり、充たすあとからあとからと際限もなく起つて來るから、絶えず他人の商品を買はなければならないといふのに、自分の商品の生産と販賣には時間がかゝるのみならず、元來があてずつぽうな盲滅法な生産なので、まるで賣れないといふこともしば〳〵だ。そこで、さういふ場合に備へるために、貨幣の退藏は必然的に行はれ、且つ増大する。

だが、貨幣を退藏するためには、買はずに賣らねばならないのだから、誰も彼もさうしたのでは賣ることさへも出來なくなり、從つて貨幣退藏も出來なくなるといふ譯だ。けれども、金銀なるものはその産地において直接に他の商品と取り換へられるから、その限りでは辻褄が合つてゆく。そこで、金銀は更にあらゆる商品所有者の手に渡つて貯へられるやうになる。

かやうにして、退藏金銀は、到るところに生じてくる。そして多く金銀を貯へた者ほど、生活の不安はなく、世間でも幅が利く、

商品流通が更に發展して、商品の交換價値が使用價値から完全に分離し、商品を價値として保持することも、價値を商品として保持することも、出來るやうになると、正銘の「貨幣慾」が起つてくる。それは、「唯一の現實的な商品」に對する欲望であり、「交換價値の唯一の適當な存在」に對する慾望であり、「個性としての一般的富」に對する欲望である。そしてそれは、何時でも利用し得べき、絶對的に社會的な形態をとる富の力、卽ち貨幣の力が、增大することを意味してゐる。貨幣の所有者は、卽ち權力の所有者だといふことになる。

「黄金は不思議なものだ。それを所有する者は望み次第にどんな物の支配者ともなる。おまけに黄金をもつてすれば、魂を天國に昇らせることも不可能ではない」

これは、マルクスの引用した、コロンブスの言葉である。致富の目的をもつてする貨幣退藏の衝動は本來が、およそ「慾には限りのないもの」である。ところで、なるほど貨幣は直接他のあらゆる商品に換へられ得るものだから、その點ではこれも無制限的なものであり、從つて一切の具體的な富の一般的代表者ではあるのだが、しかし同時にまた、各人が手に入れ又は所有する現實の貨幣額には制限があり、限られた效力しか發揮し得ないことも明らかだ。どんな金持でも、世界中の品物を一人で買ひ占めるといふ所までは行きかねる。そこで、又もや貨幣慾が頭を持ち上げる。いくら蓄めても際限はない。

貪慾は彼に二つのことを命ずる。一つには「勤勉」、――なぜなら、多く生産して多く販賣すればするほど、ますます多くの金を手に入れられる。が、二つには「節儉」、――なぜなら、取

つた金を使つてしまつてはなんにもならない。貨幣を購買手段として用ひること、言ひ換へれば貨幣を消費物品に換へてしまふことは禁物だ。金持は、吐月峰みたやうに、溜まれば溜まるほど汚なくなる。

『かくて、貨幣退藏者は、現世の快樂を、黄金の物神に捧げるのであつて、禁慾の福音も彼にとつては眞劍な問題である』。(マルクス)

『わが貨幣退藏者は、交換價値の殉教者として、金柱のてつぺんに坐つた神聖な苦行者として、現はれる。彼にとつては社會的形態の富だけが問題である。それだから彼はそれを埋めて社會から隱す。彼はいつでも流通し得る形態の商品を欲求する。それだから彼はそれを流通から引上げる。彼は交換價値を夢にまで見る。それほどだから彼は交換を行はない』。(マルクス)

だが、——同時にまた貨幣の退藏は、かうした退藏者達の意慾からは獨立して、金屬貨幣の流通上に種々なる機能をつくすことも事實である。

例へば、商品流通の範圍や速度は絶えず變動し、商品價格も絶えず變動する。それにつれて貨

幣の流通量もまた絶えず變動しなければならぬ。從つて、貨幣は時の事情に應じて退藏形態から鑄貨形態へ、鑄貨形態からまた退藏形態へと絶えず形を變へることによつて、その流通量の伸縮性を保たれなければならなくなる。かやうに、現實に流通する貨幣の量が、常に流通部面の吸收力に適應したものであり得るのには、一國に存在する金(又は銀)の量は、鑄貨としての機能を營みつ、ある金(又は銀)の量よりも大なることが必要である。そしてこの條件を充たすものは、即ち退藏形態をとつた貨幣である。

で、要するに、吾々が貨幣の退藏といふ現象から學ぶべきことは、貨幣は價値の尺度および流通手段たる機能を併せ營むことによつて貨幣なのではあるが、しかしそれらの機能を營む際の觀念上の存在や象徴的な存在とは別な、獨立の存在においても作用しなければならないといふことである。貨幣は、一面においては常に退藏されねばならぬ。そして退藏される貨幣は、紙魚にも鑄にも侵されぬピカ〱の金でなければならず、その處女的な金屬肉體のうちにあらゆる種類の使用價値、あらゆる種類の具體的富を孕むものでなければならないのだ。

紙片などが貨幣の代用物として幅を利かしてゐられるのは、商品の流通がどうやら滞りなく運んでゐる時だけである。ひとたび社會的××××――例へば××、××、××、等――が來ると、たゞ一切の富の物質的代表者たる金、個體としての一般的富たる金だけが、威張り出す。彼だけが、やいやい言つて大切にされる。あんまり大切にされて、國外へ持ち出すことを禁じられたり、土の中へ埋められてしまつたりする！

『社會的新陳代謝作用が震撼される時期においては、發達したブルヂョア社會においてさへ、退藏貨幣としての、貨幣の埋藏が行はれる』（マルクス）。

それと同時に一方、前から退藏されてある金銀は、主として社會的激動期に流用されるところの、貨幣の隱れたる供給源泉』を形成する。

八　支拂手段としての貨幣

吾々は、今迄述べた貨幣の機能とは更に別個の機能を説明するために、もう一度商品流通に立

ち戻らねばならぬ。

貨幣の流通手段たる機能を說明する際には、常に、商品が引渡されると同時に代金も支拂はれるものと前提してあつた。しかし、常にさうとは限らないのは言ふ迄もない。諸君御承知の「掛け買ひ」といふやつがある。

「掛け買ひ」は、商品生產それ自體の中から自然にそして必然的に生じてくる。お百姓は、秋の收穫の賣り上げを當てにして、肥料だの何だのを掛けで買ふ。車大工は、二週間後でなければ荷車一臺つくり上げて市場へ出すことが出來ないけれども、差し當つて材料が必要だし、また每日のパンも必要だから、それらのものを掛けで買ふ。等々。

二十圓の肥料を掛けで買つたお百姓は、二十圓の債務を持ち、掛けで賣つた肥料屋はそれだけの債權を持つ。そこで、秋に支拂期限が來てお百姓がその二十圓を支拂つたとすれば、この二十圓の貨幣は支拂手段として機能したことになる。

ところで、その二十圓の貨幣だが、これが流通に入込むのは、支拂期日が來てからだ。しかる

に商品(肥料)の方は、そのずつと前に流通に入込んでしまつてゐる。だから、その二十圓の貨幣は、商品の流通を媒介することに役立つたのではない。從つて、それは流通手段として機能したのでないことは明かだ。

だが、掛け賣りの場合には、貨幣は、支拂手段として機能するに先立つてすでに、二種の機能を營んでゐる。

第一、この肥料を二十圓で賣りませう買ひませうといふ契約の時に先づ、貨幣は價値の尺度として機能し、肥料の價格の表示に役立つてゐる。そしてそれと同時にまた、お百姓が秋に支拂ふべき債務(貨幣額)の大きさを表示することにも役立つてゐる。この機能を營む際の貨幣はたゞ觀念的な存在として作用する。

第二、あとでお金(貨幣)を頂くことにして賣りませうといふ契約によつて、お百姓は肥料を現實に手に入れたのだ。そのお金(貨幣)たるや、たゞ契約の中に觀念的に存在するだけで、現實には現はれないが、しかしとにかく、肥料なる商品をば異なる所有者の手に移轉させるのに役立つ

た。だから、貨幣は、その際、觀念的な購買手段として機能した。言ひ換へれば、貨幣はその時すでに、觀念的にもせよ、購買手段即ち流通手段たる機能の方はつくしてしまつてゐる。期限が來た時に契約に基づいて支拂はれる貨幣が、何故に支拂手段といふ特別の機能を營むもので、流通手段即ち購買手段たる機能を營むものでないかといふことは、貨幣たる金の價値と、商品價格一般(物價)との關係が、變動する場合のことを考へると、一層はつきりとして來るだらう。

掛賣り契約の期間内に、金の價値――即ちそれを生産するために社會的に必要な勞働時間――が減少すれば、同じ二十圓(四匁の金)をもつて購買し得る諸商品の分量は減少するから、債務者には有利だが、債權者には不利になる。また、貨幣の價値は變らなくても、商品價格一般が騰貴する場合も同様である。反對に、貨幣の價値が大きくなるか、商品價格一般が下落するかすれば同じ二十圓(四匁の金)をもつて購買し得る諸商品の分量は增加するから、債務者には不利だが、債權者には有利になる。かうした事情は、購買手段即ち流通手段として機能する貨幣の場合には

決して生じない、商品と貨幣とは同時に取りかへられるから。

諸君は、面倒でも、右の事情を、もう一歩突つ込んで考へて見られるとい、。

お百姓は、同じ二十圓の貨幣を渡し、肥料屋はそれを受取るのだ。然るにそれが、流通手段として、商品と引換へに授受されないで、契約の期間をおいて支拂手段として授受されるといふと、今言つたやうな事情の下に損得が生じて來る。それは何を意味するだらうか？ それは、この場合には貨幣の性質が違つてくることを意味してゐる。

といふのは、――商品と引換へに貨幣が授受される場合には、その貨幣は、たゞ一時的にその商品の流通を媒介するだけであり、從つてまた肥料なら肥料といふ特定の一商品に對して關係するに過ぎないのだ。然るに、一定期間の後に、貨幣だけが授受される場合には、その貨幣は、――過去に取結ばれた契約上はどうにしろ――、現實にはもはや特定の一商品たる肥料に對して關係するのではなく、一切の商品に對して關係するものとして現はれる、といふ相違がそこに生じてゐる。すべての商品に對して關係するものであればこそ、商品價格一般の變動や、貨幣價値自體

の變動が、取引當事者達の損得をひき起し得るのではないか。

で、支拂手段として機能する際の貨幣は、かやうに一切の商品に對して關係するものとして現はれるのだとすれば、それは即ち「何とでもすぐに交換されるもの」として、「交換價値の唯一の適當な存在」として、「絶對的の商品」として、「交換過程の最後の言葉」として、現はれるのだといふことは明かだ。一口に言へば、そこに現はれるのは、貨幣としての貨幣なのだ。そして、かかる存在においてのみ、それは、支拂手段として機能することが出來るのだ。

そこで、また、支拂手段としての貨幣の機能には、一つの直接的な矛盾が含まれることになる。諸君御承知の通り、債務は相殺せられ得るものである。例へばAはBに對して債務があるが、Bは更にCに對して債務があり、そのCは更にまたAに對して債務がある、そして支拂期日はいづれも同日だ、といふやうな關係が生ずる限り、相互の債務は相殺されて、現金の授受を必要としない。せい〴〵のところ、相殺した殘額に對する現金支拂が必要であるだけだ。ところで、かやうに相殺されて現金を必要としない限り、その際の貨幣は唯金額の計算に役立つ計算貨幣として

一乃至は價値尺度として、單に觀念上で機能をつくすだけである。然るに元來、現實に支拂がなされるその際には、貨幣は、單に觀念的な存在として現はれるどころか、前記のやうに正眞正銘の貨幣として「絶對的な商品」として「交換過程の最後の言葉」として現はれなければならないものなのだ。さうでなければ支拂手段として機能出來ないのだ。これは、明白な矛盾であらう。

この矛盾は、恐慌に際して最も尖鋭に現はれて來る。そしてそれによつて支拂手段たる貨幣の機能の特殊性を此の上もなく明白ならしめる。

今迄はみんなが債權債務は相殺し得るつもりでゐた。ところがいよ〳〵恐慌がやつて來て誰れの商品も値が下がる、賣れないといふことになると、みんなが現金に困つてくるし、又みんなが相手の懐工合を疑ひ出す。そこで我れ勝ちに現金を掴まうとする。相殺どころの騒ぎではない。これを貨幣に即して言へば、それまでは單なる計算貨幣として觀念的な存在に過ぎなかつたものが、今や突如として「交換價値の唯一の適當な存在」として「絶對的な商品」として「唯一の富」として、再現するといふ譯だ。

この事態を言ひ現はした、マルクスの名高い言葉がある――

『ブルヂョアは、恐慌襲來の刹那まで、好景氣に陶醉した新人的自負心をもつて、貨幣などは空虛な幻影に過ぎないものとなしてゐた。彼等は、商品だけが貨幣なんだ、と言つてゐた。すると今度は、貨幣だけが商品なんだ！　といふ叫びが、世界市場の到る處に聞えてくる。鹿が新鮮な水を喘ぎ求むる如く、彼れの魂は唯一の富なる貨幣を喘ぎ求めるのだ』。

かういつたことの生ずる、金融恐慌なるものが爆發するのは、謂ゆる信用なるもの（掛賣りもその一種である）が十分に發展し、諸々の支拂ひの連鎖が全面的に擴がつて、それと共にまた支拂ひを相殺し清算する人爲的な組織が十分に發展してゐるところに限られる。現在の資本主義社會は、ブルヂョア經濟學者達が「信用經濟の時代」など、言つてゐるくらゐで、信用の發展は最高段階に達してゐる。さればこそ、昭和二年の金融恐慌や、現下全世界を襲つてゐる國際金融恐慌の如きものが、盛んに爆發するといふ次第である。

信用については尙ほ立入つて說明する機會を持つ筈だが、こゝではたゞ、商品流通が發展する

につれて信用も發展し、それと共に支拂手段としての貨幣の機能も擴大するといふことを注意するに止めよう。卽ち、一國に現存する貨幣のます／＼大なる部分は支拂手段として機能するやうになり、それに比例して購買手段としての貨幣の機能は縮小し、貨幣退藏の要素としての機能は更に一層縮小する。更にまた、貨幣は、支拂手段として機能するやうになると、商業上の大口取引の部面に適應した特殊の存在形態を與へられ、鑄貨の方は主として小口取引の部面に押しやられてしまふ。それからもう一つ、支拂手段としての貨幣機能から信用貨幣なるものが生じてくる。これは、例へば商業手形の如きもので、購買された商品そのものについての債務證書が、債務請求權を移轉する目的をもつて、再流通せしめられたものである。それらについては尙ほ後で說明する。

　支拂手段たる貨幣機能の發展と共に、支拂滿期日の準備として貨幣を蓄積して置くことが必要になつてくる。つまり、貨幣の一部分は、支拂期日に支拂手段として作用し得るやうに、あらかじめ退藏され、積立てられて、一の基金を形成することになる。この貨幣退藏は、例の、それ自

身が目的であるところの致富の手段として貨幣が退藏される場合のやうに、流通の外部における活動として現はれるものではなく、却つて交換過程そのものによつて必要とされ、商品流通の領域内で形成される。ブルヂョア社會の發展するにつれ、獨立の致富手段としての退藏貨幣の方は減少し、消滅せんとするが、支拂手段基金としての退藏貨幣の方はます〳〵増加する。しかし信用組織が發展し、銀行だの手形交換所だのが發達すると、かゝる基金は、ます〳〵その必要最小限にまで縮小されてくる。が、それにも拘らず、一定の基金は常に必要である。

最後に、貨幣の一部分が支拂手段として機能する場合には、商品流通のために必要とされる貨幣の量はどうなるか？

貨幣がすべて流通手段として作用する場合には、一定期間——例へば一週間——内に於て貨幣に實現される商品價格の總額を、貨幣の流通速度で割れば、貨幣の流通必要量は得られたが、今度はそれだけでは不十分だ。で、先づ、流通手段および支拂手段の流通速度は一定したものとする。第一に、その一週間内に滿期となる諸支拂がある。それに對して貨幣が必要になるから、この

諸支拂の總額を、商品價格總額に加へねばならぬ。

第二、右の諸支拂總額の中で相殺される金額がある。この部分に對しては貨幣は必要でないから、この金額は差引かねばならぬ。

第三、同じ一個の貨幣が、時には流通手段として通用し、時には支拂手段として通用する。かやうに交る〴〵通用する回數だけのものも差引かねばならぬ。

これを簡單に一つの表式で示すといふと――

$$\frac{\text{實現さるべき價格總額}}{\text{流通手段の流通速度}}+\frac{\text{滿期の支拂金額}-\text{相殺金額}}{\text{支拂手段の流通速度}}-\left(\begin{array}{l}\text{交々流通手段になつたり支拂手}\\\text{段になつたりする個貨の總金額}\end{array}\right)$$

といふことになる。

かやうに、加へたり引いたりしなければならないが、しかしそれは、流通する商品の價格が貨幣の流通量を決定するのであつてその逆ではないといふ根本法則を毫も變更するものでない。

九　世界貨幣

ところで、貨幣は決して國内にくすぶつてばかりゐるのではない。此の頃喧しい問題になつた金の流出だとか、弗買ひだとか、金の輸出禁止だとかいふのは、いづれも國際的舞臺面における金の活動、貨幣の活動に關する問題ではないか。

そこで吾々は、今度は國際取引、世界市場における貨幣の一般的な役割を知つておかねばならぬ。

諸君は、貨幣は流通から引上げられて退藏される際には「貨幣としての貨幣」であることを學ばれた。また、支拂手段として流通に入込む際にも「貨幣としての貨幣」となることを學ばれた。貨幣は更に、世界中の商品の一般的等價物として機能すべく、國内流通の限界を突破して世界市場に現はれる。この時にまた彼は、「貨幣としての貨幣」となる。この場合の彼は、世界貨幣として作用する。

われらの金は、それ〴〵の國境を脱出して世界市場で活動しはじめるや否や、それまで身に着けてゐた國民的な地方的な服裝――即ち價格標準、鑄貨、補助貨、紙幣、等の外衣――をかなぐり捨てゝ、地金のまゝの金になる。イギリスの磅貨だらうと、アメリカの弗貨だらうと、日本の圓貨だらうと、どんな國家的鑄貨だらうと、國外で流通するとなると、もうその稱號はどうでもよいものになり、たゞ實質だけ、純分だけの資格のものになる。赤裸々のその姿は無差別になり、たゞ目方だけがものを言ふことになる。

さうなつてくると貨幣の本質もはつきりする。貨幣は鑄造されて刻印があるから貨幣なのではない、また國家の公認によつてはじめて貨幣となるのでもない。さうでなくて地金としての金がすでに貨幣であるから、國家はたゞそのことを公認したり、またそれを鑄造して流通に便ならしめたりするのだといふことが明かになる。

諸君のすでに知られる通り、貨幣は本來、一つの社會の內部において流通しはじめたものではなく、大昔の共同體と共同體の間の交換に於て最初の機能を營んだものである。それから何千年

の後になつて世界市場が成立し、貨幣はいよ／＼國際貨幣として登場するやうになると、再びその本來の機能を取り戻して、一の社會と他の社會、一國と他國との間の取引において機能をつくすことになる。また、それだからこそ、もとの地金形態に立ちかへるといふわけだ。

原始共同體の相互の間の交換においては、幾つかの商品が價値の尺度の役目をした。それと同じやうに現在の國際市場においても、少くとも二つの商品、即ち金と銀とが價値の尺度として役立つてゐる。これは、一國の國內流通においてはたゞ一つの商品だけが價値の尺度として役立つてゐるのとは趣きを異にする。

國際市場において、かやうに二重の價値の尺度が行はれてゐるのは、或る國では金が、他の國では銀が、價値尺度たる機能を果してゐるからである。そこで、商品の價格を金で表示してゐる一國は、それを銀で表示してゐる他國（例へば支那）と取引する場合は、金で現はした價格を、銀で現はした價格に勘定しなほさねばならない。そしてまたその逆の場合も起つてくる。かやうな換算は金と銀との比價、即ち金の價値と銀の價値との比例に基づいて定まるのだが、しかしその

比價は絶えず變動するから、比價による換算もまた絶えず繰り返されてゐる。

更に、例へば日本の商品所有者と支那の商品所有者とは、金と銀とを交る〴〵國外流通のために使用しなければならなくなる。從つて、例へば日本の商品所有者は、日本で貨幣として機能してゐる金を、支那で貨幣として用ひられてゐる銀と交換しなければならなくなる。

で、かやうに世界各國は金と銀との二つの金屬を、世界貨幣として用ひてゐるわけだが、二つのうちで金の方が壓倒的に優勢であることは言ふまでもない。

金にせよ、銀にせよ、それが國際間の商品流通に現はれる際には吾々が前に規定したやうな流通手段として現はれるのではない。それは、今や、一般的交換手段として現はれるのだ。

一般的交換手段たる世界貨幣は、二つの形態において機能する。一つは、一般的購買手段といふ形態であり、もう一つは一般的支拂手段といふ形態である。

諸君は、貨幣が、國内流通において購買手段として機能するのはどんな場合であつたかを記憶してゐられるだらう。それは、諸々の商品が絶えず轉形運動をやつてゐて、貨幣はその際個々の

商品の交換價値のほんの一時的な形態を表示するといふ場合に限られた。國際市場においてはさうでない。國と國との間における商品の轉形運動が多少とも「圓滑」に進んでゐる場合、即ち國際間の新陳代謝作用がどうにか均衡を得て進行してゐる場合には、金銀は國際市場に於ける購買手段としては現はれないのが普通である。そして、あべこべに、大地震があつたとか、大凶作があつたとか、戰爭をやつてゐるとか、さういつたやうなことで、國と國との新陳代謝作用の從來の均衡が突然に破壞せられ、一國が異常な巨額のものを買はねばならぬといふやうなことになると、金銀は國際市場に出動し、一般的購買手段として機能する。金銀は、一般的購買手段なるが故に、どんな非常時にでも購買の役目を果すといふ譯である。

次に、金銀は、國際貿易の差額の決濟の際に、一般的支拂手段として機能する。國際間の商品の賣買は、諸君御承知の通り大部分信用で行はれるのだが、しかし賣りと買ひ、輸出と輸入の差額を決濟するといふ段になると、各國はお互に金なり銀なりで支拂ひを受けないと承知しない。そしてまた金銀であれば、誰も文句を言ふ者はない。その意味において金銀はたしかに一般的な

支拂手段である。

この一般的支拂手段としての機能は、國民間の商品交換が發展すればするほど重要性を增す。近世ブルヂョア社會の初期においてすでに、謂はゆる重商主義者が「貿易のバランス」といふ有名な合言葉を持つに至つたのは、この一般的支拂手段として機能する金銀に眩惑されたからだつた。

が、もう一つ、世界貨幣としての貨幣が演じなければならぬ役割がある。

一國が他國から物を購買するといふのでもなく、他國に對して支拂ひをするといふのでもないが、しかし一國の富を他國に移轉しなければならぬ場合が生じる。かゝる場合は、商品の輸出入と區別される資本の輸出入が盛んになるのに從つてますます多くなつて來る。ところで、かやうに富を移轉するとしても、その目的の如何により、また市場の狀況によつて、商品の形態で富を移轉することが不可能なことがしばしばある。例へば、戰爭をやるのに必要な金を貸附ける場合、破綻した外國銀行が現金支拂を再開するのに必要とする金を貸附けてやる場合、等、いろいろあ

るだらう。さういふ際には、たゞ金銀だけがお役に立つ。かゝる場合の金銀は、絶對的に社會的な富の體現として作用する。

かやうに金銀は世界中のどこにおいても、またどんな異常な場合においても、全く押しも押されもしない交換手段として現はれる。その意味でそれは一般的な交換手段として獨歩の地位を占めてゐる。しかし、それは何も、金銀といふものに神秘な性質があるからではなくて、たゞ商品交換が普遍化したといふ事實、從つて交換價値が普遍化したといふ事實を反映する。

金銀と取り換へられる生産物の數が多くなればなるほど、金銀はそれだけ多くの商品の姿を變へたものとなり、從つて又何時如何なる場合でもあまねく人に受取らせることの出來るものになる。商品の交換が世界中に亘つて廣く行はれゝば行はれるほど、世界中到る所の諸々の具體的な勞働はお互ひに取り換へられて、ます／＼完全に抽象的一般的な人間勞働に轉化される。それに應じてまた金銀は、さうした一般的勞働時間の直接的な體現者たる資格をます／＼完全に獲得する。だから、世界市場において初めて、貨幣の存在様式は、その概念と一致したものになる。

前には、商品の交換價値なるものは多かれ少なかれ狹い範圍にしか通用しなかつたのだが、今や世界市場においては、商品の交換價値は全世界におし擴げられてゐる。從つてまた、金銀に形を變へた交換價値の姿、卽ち商品の價値の獨立した姿態、一口に言へば貨幣は、今や、世界貨幣として諸商品に相對することになつたのだ。

この際、世界貨幣が地金形態をとるといふことは意味の深いことである。なぜ、世界中に通用する鑄造貨幣が出來ないのか？　それは、世界市場なるものが、國民經濟と國民經濟との間の烈しい對立の上に立つからである。しかもこの對立たるや、私的所有制度が存在し、從つて階級が存在する限り、到底なくすることなどは出來ないし、あべこべにます／＼激しくなつてゆく。だから、世界共通の鑄造貨幣を持つことはおろか、地金の金銀以外には、どんな國際的貨幣をも持つことは出來ないのだ。

ところで、金銀は、二重の流れをなして世界に流通する。

一つの流れ、――それは金銀の原產地を出發點として全世界市場に流れ込んで行く。そして、

大なり小なりの分量をもつて各國の流通部面に吸收され、それから國内のいろんな流通溝に流れ込む。そして、磨滅した鑄貨や銀貨を補充したり、贅澤品の材料に使はれたり、退藏貨幣に轉化されたりする。

この運動は如何にして開始されるかといふに、それは先づ勞働と勞働との交換をもつて始まるのだ。詳しく言へば、先づ、金銀に含まれてゐる、金銀産地國の社會的勞働と、金銀以外の商品に含まれてゐる、他國の社會的勞働との交換が行はれ、それと共に金銀はその原産地國から他の國々へ移轉する。それだから、諸國の國内流通の分野においても、金銀は與へられた大きさの價値をもつて現はれる。且つまた、金銀の生産費の變動は、世界市場において諸商品の價値比率の上に一樣な影響を及ぼすことになる。しかも、各國の國内的流通部面に金銀が吸收される分量が多からうと少なからうと、その點に變りはないのである。

もう一つの流れは、各國流通部面の相互の間の流れであつて、金銀は絶えず一國と他國の間を往復する。そしてこの運動こそは、爲替相場の絶えざる變動を伴ふのだ。

どんな國でも、その國內流通を「圓滑」ならしめるために準備金を持たねばならない。それと同じやうに、各國はまた、世界市場における流通に使用すべき準備金を持たねばならぬ。だから一國における退藏貨幣の機能は、一方では國內における流通手段及び支拂手段としての貨幣の機能から生じて來るが、他方ではまた世界貨幣としての貨幣の機能からも生じて來る。そして、この世界貨幣としての貨幣の機能から生じて來る退藏貨幣の役目を果し得るものは、たゞ「眞正銘の貨幣商品に限られる、卽ち現物の金銀に限られる。この點だけから見ても、金銀だけが「世界の貨幣」であることは明かだらう。

前に一言したやうに、ブルヂョア的生產の發展した國々においては、銀行が退藏貨幣の貯水池を形成し、そこへ退藏貨幣が大量的に流れ込んで來るのだが、この退藏貨幣は、その種々な特殊機能を營むのに必要な最小限に縮小されてゐる。從つて、——二三の特別の場合を除けば——、退藏貨幣の貯水池がその平均の水準を越えてひどく溢れてゐるやうなことがあると、それは卽ち、商品流通が停滯し、商品轉形の流れが中絕されたことを示すものである。更にまた、いま言

つた退藏貨幣の樣々の特殊機能であるが、この機能の一つとして、銀行券(日本の紙幣の如き)に對する兌換準備金たる機能が加はつて來ると、それとこれとの間に危險な衝突を生じ易いものである。それらのことについては尚は後に述べるであらう。

第三講　貨幣の資本化と資本主義生產

一　貨幣の資本化

さて、吾々は、第一講と第二講において、大體、經濟の本質に關する基本的な分析を終つたわけである。

しかし、以上のところでは、吾々は主として單純な商品生產社會を觀察したのであることを諸君は記憶せられるだらう。單純な商品生產社會には、賃銀勞働もなく、資本もなく、利潤もない。たゞ、自ら生產手段を所有し、自ら勞働するところの「獨立の生產者」があるだけだ（少くとも吾々は研究の便宜上さういふ風に假定した）。しかし、彼等は、生產上すでに分業をやつてゐるのだから、生產は社會的性質のものである。この生產の社會的性質は、所有の私的性質と矛盾する。そこで、必然的に商品の交換が發展し、それと共にまた必然的に貨幣は成立し、流通す

る。

この場合、社會は、商品の交換を通じてそれ自身の新陳代謝作用を營むわけであり、個々の生産者は商品の交換を通じて自己の物質的欲望を充足し、消費生活を全うするといふわけである。吾々は、かやうな商品交換に際して貨幣は様々の役割を演じ、機能を營むことを學んだのだ。

で、以上のところでは、各人は商品を賣つて貨幣を手に入れるにしても、それは結局、その貨幣をもつて他の商品を買つてそしてそれを消費して自己の欲望を充足する、といふことを目的とするものだつた。從つて、商品流通は、$W_1—G—W_2$ の形態をとるものだつた。これを一口に言へば、他の商品を買つて消費せんがために自己の商品を賣る、といふ場合について吾々は研究したのであつた。

しかしそれだけでは多分諸君は物足らなく思ふだらう。吾々は、貨幣の退藏を説明した際に、どうして人が貨幣を貯へるか、どうして人が「金を貯める」か、といふことまでは明かにした。しかし「金を儲ける」ことの方にはまだ充分に觸れてゐなかつた。ところが、その「金を儲ける」

ことこそは、諸君の資本主義社會の中心題目になつてゐる。今日では誰も彼も金、金といふが、それは大多數者にあつてはもちろんパンを買ふための貨幣を意味するけれども、しかし社會の中心勢力たる部分にあつては、儲けんがための金を意味し、資本を意味してゐる。資本家にとつては、パンのことなどは問題でなく、儲けることだけが問題なのだ。

それでは、「金儲け」の場合における商品と貨幣との關係はどうなつてゐるか？　それはその道の人に訊けばすぐわかることである。

彼はまづ、彼れの貨幣を「前拂ひ」する。卽ち、まづ彼れの貨幣でもつて原料だの何だのいろんなものを買ひ入れる。そこで、彼れの貨幣は商品に轉形される。それは、G――W である。彼は、それに加工して賣る。すると彼れの前拂ひした貨幣が戻つて來る。回收される。今や商品は再び貨幣に轉形された。それは、W――G である。この際もし、戻つて來た貨幣Gが、前拂ひした貨幣Gと同額であれば一文も儲けはない。ところが、この回收される貨幣Gには子が附いてゐて、それだけ大きなものになる。例へば、一千圓前拂ひしたものが二千圓になつて戻つて來

る。そこで彼は、千圓は儲けだといひ、利益だといふ。で、とにかく、賣買が行はれ、商品は流通した。今、彼れの儲け乃至利益をなすところの貨幣額を、小文字のgで現はすならば、この流通の形態は次のやうになる。

G——W——G＋g

この形態は、一口に言へば、儲けて賣らんがために買ふ、といふ取引の場合を示してゐる。かやうな取引が行はれ、右の如き流通形態が生ずる場合には、吾々は、貨幣は資本に轉化されてゐるといふ。そして、この流通形態を、資本流通の形態と呼び、前の W——G——W 即ち單なる商品流通の形態とを區別する。

こゝに注意すべきは、貨幣の役割である。

こゝでは、勿論、貨幣は價値を現はしてゐる。そして貨幣G＋gは、Gよりも大きな價値を現はしてゐる。即ち「價値は增殖された」のだ。そして、かやうな價値增殖がなし遂げられたといふ事實があればこそ、貨幣は資本に轉化してゐる譯である。ところで、さういふ風に價値が增殖

されるに當つては、價値はどうしても、その增殖過程の始點と終點とにおいて、貨幣の形態をとらねばならないのだ。それはさうだらう、第一、貨幣の形態をとらなければ、前の價値と後の價値といふ大きさの比較が出來ず、實際に增殖されたのか、又どれだけ增殖されたのか、てんでわからないことになる。第二に、これは自明のことだが、價値は、先づ貨幣形態をとつて出動しなければ、原料にせよ何にせよ、價値增殖のために必要な商品に形を換へることが出來ないのだ。

て貨幣は、この際、前拂ひされる價値と回收される價値とを比較秤量する價値尺度として機能する。そして更に、まづ購買手段として機能する。それ故にこそ貨幣は資本に轉化せられ得る。

ところで問題は、增殖された價値の部分は誰がつくり出したか、といふことだ。言ひ換へれば儲けとか利益とか言はれる部分の貨幣（例へば千圓）即ちgに相當する價値は、誰がつくり出したのか？

この新たに附け加へられた價値は、とにかく、加工、製造等に際して支出された勞働によつて

つくられたことは明かだ。だから、その儲けたといふ人間が「獨立の生産者」であつて、自ら勞働したのであれば、事は極めて明瞭である。その代り、その場合には問題の二千圓は實は利潤でも何でもなくて、彼自身の勞働の報酬に過ぎないことになる。ところで、資本家たるものの特徴は、自らは決して勞働しないことである。その代り彼は勞働者を傭つて勞働させてゐる。さうだとすれば、資本家の利潤となるところの、新たに附け加へられた價値なるものは、賃銀勞働者のつくり出したものであることは明かだ。

さうすると、少くとも二つの條件が成立してからでなければ、貨幣の資本化は生じないといふことになる。

第一は、一部の人々の手に貨幣が蓄積されてゐること。さうでなければ、誰も貨幣を前拂ひし得るものがない。諸君はすでに、如何にして貨幣の退藏が行はれたかを知つてゐる。あゝいふ風なのも資本化さるべき貨幣の源泉の一つをなすにはなすが、しかし歴史上實際に資本に轉化された貨幣の大部分は、封建領主や地主の手に蓄積された貨幣、およびそれらの古き搾取者と結合し

又は對立してゐた商人や高利貸の手に蓄積された貨幣であつたのだ。そして彼等の手に貨幣が蓄積されるのに比例して、ます／＼多くの「獨立生産者」達は貧乏になり、土地だの仕事場だのを失つて裸一貫に剝かれたのだ。

第二の條件は、この裸一貫に剝かれた人間がます／＼多くなり、賃銀勞働者として、プロレタリアとして、現はれること。この新しい階級は、勞働をするために必要な生産手段を持たないのだから、人に傭はれるよりほかに生きる道はない。

さうすると、こゝに全く新しい種類の商品が市場に現はれてくる。それは勞働力といふ商品である。今や、生きた勞働力を賣るものがあり、買ふものがある！

「金持ち」の手に蓄積された貨幣は、勞働力といふ新しい商品に對する購買手段となる。そしてそれと共に、貨幣は資本に轉化される。何はともあれ、勞働力の購買に充てられた貨幣でなければ、利潤を生んで回收されるわけはない。從つてまた價値の增殖は起らない。

で、貨幣の資本化は、全く新しい生産關係の發展に基づいてゐる。今や生産的勞働は生産手段

から引離されてゐる。そしてそれと共に、商品生産社會は二つの全く利害の相反した階級に分裂する。一方には、勞働力を賣るほかに生きやうのないプロレタリアの階級、他方には、生産手段を獨占し、出來るだけ多く彼等の勞働力を搾取しようとする資本家階級。

二 剩餘價値の生産

價値増殖のことに戻らう。

資本家の利益十圓に相當する價値は、勞働者のつくり出したことは明かだとしても、資本家がもし、勞働者のつくり出した價値に相當する金額のものを賃銀として勞働者に支拂つてゐるのならば、利益なるものも生じやうがない譯だから、そこにまだ問題が殘つてゐる。

資本家の前拂ひした二千圓は、一部分は生産手段の購買、一部分は勞働力の購買に充てられてゐる。それは次の割合であつたとする。

勞働力……………………………………一、〇〇〇圓

前拂ひ ┬ 生產手段 ┬ 機械建物等……………………五〇〇圓
　　　 │　　　　 └ 原料燃料等……………………五〇〇圓
　　　 └ 計……………………………………二、〇〇〇圓

回收……………………………………………三、〇〇〇圓

利益……………………………………………一、〇〇〇圓

計算をやさしくするために、假に、一圓即ち二分の金は、恰度一時間の社會的必要勞働を現はし、從つて一單位の價値を現はすとしよう。すると右の場合には二千の價値が三千に增殖されたことになる。この三千の價値の中には、生產手段の價値一千が入つてゐる。殘る二千の價値は、われらの資本家に雇傭された勞働者達の二千時間分の勞働の結晶である。（こゝに二千時間といふのは、彼等の現實の勞働時間を社會的必要勞働時間に換算したものであることは言ふまでもない、以下同じ。）

ところで、資本家が勞働者達に賃銀として支拂つたのは一千の價値にすぎなかつた。この賃銀

は、勞働者達の衣食住に必要な商品に轉化され、勞働者達の消費に充てられてゐる。この勞働者達の消費たるや、資本家のために勞働者達が勞働し得るため、勞働力を支出し得るために、絶對に必要なものである。

さうすると、勞働者達は、自己の勞働力を自らつくり出すのに一千の價値の諸商品を消費することを要したが、その勞働力は、資本家のために二千の價値をつくり出した。資本家の力は、二千の價値をつくり出すところの生きた勞働力を、一千の價値で買つた譯である。さうして、その差額たる一千の價値を、資本家の儲けとして、利益として懷ろに入れた譯である。

吾々は、かやうにして生ずる資本家の利益、即ちかゝる關係の下に勞働者によつてつくり出され、資本家によつて收得されてその利益を形成するところの價値を、剩餘價値と呼ぶ。

剩餘價値は偶然的に生ずるものではない。生産力の發展が一定の程度に達し、前に述べた新しい生産關係が成立する以上は、必然的に生ずるものである。

勞働の生産力の發展といふものは、人類社會にすばらしい變革を持ち來たす。前には、各人の

勞働は、やつと各人の生存と勞働とを可能ならしめるだけの生産物を生産するだけだつた。しかし、生産力が發展すると、それよりもずつと多く生産物を生産する。例へばめい／＼が十時間勞働するとしても、めい／＼の生存と勞働とを可能ならしめるだけの生産物は、例へば五時間で生産され、殘る五時間でもつて生産されるものは、――もし搾取する階級がないならば――、めい／＼の生活の向上のために費すことが出來るやうになる。

資本主義社會の勞働者達は、搾取者たる資本家のために十時間の勞働をして一〇の價値ある商品をつくり出す。しかし、彼等の生存と勞働を可能ならしめるために必要な生産物（商品）は、五時間で生産され、五の價値を持つ。資本家は、彼等にその五の價値をしか支拂はぬ。勞働者達は資本家に、一〇の價値を支拂はせることは出來ないか？

出來ない。――勞働者達は一文無しで、誰れかに雇はれるより外に生きやうがない。おまけに雇ふ資本家の方は少數だが、彼等は多勢だからお互に競爭する。そしてとにかく喰へさへすればといふので、われ勝ちに安く雇はれる。資本家は、蓄積された貨幣を持つてをり、一切の生産手

段を獨占する。「貨幣の權力」が、新しい形態で、ものを言ふ。そこで資本家は、勞働者の五時間分の勞働に對してはたゞの一文も拂はずに、その五時間の「不拂勞働」の汗と膏の結晶である五の價値を、有難うとも言はないでポケットへねぢ込んでゐる！

勞働者と資本家との對立する資本主義生産においては、剩餘價値の生産と收得とが、一切の生産の動機となり、目的となる。從つて、資本家階級による勞働者階級の搾取は、基本的な社會關係となる。

資本家による商品生産の直接の目的は、むろん使用價値なんかではない。彼れの目的は、價値增殖であり、彼れの活動のモーターは、抽象的富をます／＼多く占有せんとする欲望である。マルクスに、古き貨幣退藏者と新しき資本家とを比較して言ふ――

「かゝる絶對的の致富運動、價値に對するこの熱情的な追求は、資本家にも貨幣退藏者にも共通するところのものであつて、たゞ貨幣退藏者は狂氣の資本家に過ぎないが、資本家は正氣の貨幣退藏者だといふ點が異ふだけである。貨幣退藏者は貨幣を流通から救ひ出さうとすることによつ

て、價値の休みなき增殖を得ようと努めるのであるが、彼れよりも賢明なる資本家は、絶えず新たに貨幣を流通に委ねることによつて、同一の目的を達成するのである。

三　利潤と利潤率

さて、資本家は、絶えず新たに貨幣を資本化して流通に投ずることによつて、ますます多くの剩餘價値を生產し、收得しようとする。

ところで、剩餘價値は、勞働者が消費する價値乃至は賃銀として支拂はれる價値と、勞働者のつくり出す價値との差額である。だから、剩餘價値の大きさは、（一）勞働者一人が消費する價値又は賃銀として受ける價値が、少なければ少ないほど、大きくなる。（二）雇傭勞働者の人數が多ければ多いほど、大きくなる。（三）且つ勞働者一人の勞働時間が長ければ長いほど、又勞働が强烈であればあるほど、大きくなる。

そこで資本家階級は、絶えず勞働者に「消費節約」を强要する。そして、勞働者が奴隷の生活

水準を少しでも高めると、此頃の勞働者は贅澤になつたなどと言つて憤慨する。それはその筈だ、彼等が勞働者に「節儉の美德」を說くのは、賃銀を切り下げるためなんだから。

資本家の第二の努力は、同じ賃銀で勞働者を出來るだけ長時間働かせることであり、出來るだけ强度に勞働させることである。

が、第三には、資本家は、それらすべてのひどい條件の下に、出來るだけ自己の雇傭勞働者を多くしようと努力する。しかし、それは彼れの所有する資本の大きさにかゝつてくる。わけても勞働力たる商品の購買に充てる資本部分の大きさにかゝつてくる。

吾々は、總資本のうちで、勞働力の購買、即ち賃銀に充てられる資本の部分を、可變資本と呼ぶ。この部分の資本に含まれる價値の大きさは、生產過程を經て、變化し增大し得るものだからである。しかし、その他の資本部分は、生產手段の購買に充てられ、從つてその價値は、生產されるる商品の中に移されても、もとのまゝである。吾々は、それを不變資本と呼ぶ。

可變資本に含まれる價値は、生產を經て、剩餘價値だけ大きくなる。この剩餘價値は、可變資

本の價値の何割かに當る。その割合は即ち剩餘價値率である。吾々の例においては、

$$剩餘價値率＝\frac{剩餘價値\ 1,000圓}{可變資本\ 1,000圓}＝10割$$ であつた。

一般的には、剩餘價値は即ち利潤である。しかし、利潤はしば〳〵剩餘價値よりも狭い意味のものとなる。一の資本家がもし、生産に投じた資本の一部分を他から借り入れてゐるならば、それに對する利子を剩餘價値のうちから支拂ふだらう。また、土地を借りてゐるならば、それに對する地代を剩餘價値のうちから支拂ふだらう。利子や地代は剩餘價値の中から出る。利潤總額のうちからこれらを引去つた殘りは、企業家利潤とも呼ばれる。更にまた、資本家相互の間の、剩餘價値爭奪戰によつて、各自の利潤は各自の剩餘價値と異なる量に變つてくる、(後述)。もう一つ、或る資本家の企業が獨占企業であるならば、競爭によつて定まつた利潤の分配は更に變更され、彼れの企業の利潤率は、平均利潤率よりも大きくなるだらう。

が、いづれにせよ、資本家個々人が資本家としての努力の目標は、最大可能の利潤を收得することである。この努力からして、(一)自己の剩餘價値の蓄積により、また信用の利用によつて、自

己が生産に投ずる資本額を可及的大ならしめんとする努力が生ずる。同時に又、(二)かゝる資本の一單位——例へば百圓——に對する利潤を、可及的大ならしめようとする努力が生ずる。

そこで、まづ、利潤額の資本額に對する割合、即ち利潤率が問題になる。資本家は、利潤率の大なる事業を有利だといひ、利潤率の少なる事業を不利だといふ。では何が利潤率の大小を左右するか？　剩餘價値率即ち搾取率を一定したものとすれば、總資本のうちに可變資本の占める割合が多ければ多いほど、利潤率は大きくなる。

可變資本と不變資本との組合せは、各種の生産部門の技術的必要に基づいて異なつてゐる。電力、造船、製鐵などの諸部門では不變資本の割合が非常に大きいし、燐寸工業、織物工業などでは可變資本が比較的大きな部分を占めてゐる。マルクスに從へば、資本の技術的構成によつて決せられ、それを反映するところの、資本(價値)の構成は、資本の有機的構成と呼ばれる』のだ。かゝる資本構成にも、おのづから社會的な平均がある。マルクスは、この平均程度のものを平均構成と呼び、それに比して不變資本の割合の大なるものを高度構成、小なるものを低度構成と呼

んでゐる。

例解として、資本構成を異にする企業の利潤率を比較してみよう。

第一表

	總資本	可變資本	剰餘價値	剰餘價値率	利潤率
(甲)低度構成の企業	二〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇圓	一〇〇%	五〇・〇%
(乙)高度構成の企業	六〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	一六・六%
(丙)平均構成の企業	四〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	二五・〇%

かやうに、剰餘價値率即ち搾取率はおんなじでも、利潤率は違つてくる。低度構成の企業は五〇%、高度構成の企業は一六・六%、等。

この場合に注意すべきことは、各種の商品はそれ〴〵の價値に從つて賣買されるといふことが前提してあることである。これを言ひ換へれば、諸商品はその價値に從つて交換される傾向あり、といふ價値法則が作用してゐる限り、資本構成の異なるに從つて利潤率も異なつてくるのである。「獨立の生産者」のみから成る單純な商品生産社會においては、商品がその價値に從つて交換

されれば、各生産者は等しい勞働に對して等しい價値を受取ることになり、それで均衡は保たれてゐた。ところで、賃勞働と資本とが對立する資本主義社會においては、各勞働者はなるほど等しい勞働に對して等しく貧少な價値を受取るけれども、各資本家は等しい資本に對して等しい價値（利潤）を受取らないことになる。

そこで、資本家達はおつとしてゐられなくなる。彼等は、剩餘價値の爭奪戰をおつぱじめる。價値法則が彼等を踊らせるのだ。彼等は、同じ百圓の資本に對して五十圓も利益のあがる事業があるのに、十六七圓の利潤しか得られないやうな事業に資本を投ずるのは馬鹿々々しいと考へる。そしてわれ勝ちに利潤率の高い企業に向つて殺到する。資本は利潤の低い企業を去つて利潤の高い企業へ集まつてくる。利潤率の低い企業の生産物の供給は減少し、從つてその價格は騰騰する。かやうに價格が高まるから、今度は利潤率も高まつてくる。他方では反對に、利潤率の高い企業の生産物の供給は增大し、從つてその價格は低落する。價格が下がるから、今度は利潤率も減つてくる。もし價格の騰落運動が行き過ぎて、一方の利潤率が高くなりすぎたり、他方のそ

れが低くなりすぎたりすると、今度は反對の運動が起つてくる。

かくして、價値法則が作用してゐる限り、そして資本家間の競爭が行はれる限り、そしてまた一の事業から他の事業への資本の流出入が妨げられない限り、すべての事業の利潤率は絶えず平均しようとする傾向をとる。

すると、前掲第一表の數字は次のやうに變つて來るだらう。

第二表

	總資本	可變資本	剩餘價値	剩餘價値率	利潤率	利潤
(甲)低度構成の企業	二〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇圓	一〇〇%	二五・〇%	五〇、〇〇〇圓
(乙)高度構成の企業	六〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	二五・〇%	一五〇、〇〇〇
(丙)平均構成の企業	四〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	二五・〇%	一〇〇、〇〇〇

かやうに、利潤率は均等化されてくる。さうすると、各種の企業に生ずる剩餘價値の量は同一でも、利潤の量は違つて來る。これは資本家と資本家とが剩餘價値の爭奪戰をやつて利潤率が均等化されたことの現はれとして、例へば右表の甲種企業に生じた剩餘價値の半分は今や乙種企業

に關してその利潤を増大させたといふ譯である。かくして資本家社會においては、利潤率の均等化、即ち「等量の資本に對しては等量の利潤を」といふことが、支配的な原理となる。

四　生産價格の法則と價値の法則

いま説明したやうに、資本家間の競爭による利潤率の均等化は、價格の騰落を通じて起つてゐる。では、價格の騰落は、どんな風に生じてゐるか？

前表における甲種の企業の總生産物は、前からの假定に從へば、總資本の價値二十萬圓と、剩餘價値に相當する十萬圓とを併せて三十萬圓の價値を持つ筈のものである。同樣の計算によつて、乙種の企業の總生産物は七十萬圓の價値を持つ筈のものである。ところが、利潤率の均等化した場合には、第二表に示されたやうに、甲種企業の總生産物は、總資本の價値二十萬圓と、その二割五分の利潤五萬圓とを加へたところの二十五萬圓にしか賣られてゐない。即ち本來持つべき筈の價値よりも五萬圓安く賣られてゐる。これは、甲種企業の生産物の價格の下落に基づくのだ。

他方、乙種企業の總生產物は、總資本の價値六十萬圓に、その二割五分の利潤十五萬圓を加へたところの七十五萬圓で賣られ、固有の價値よりも恰度五萬圓だけ高く賣られてゐる勘定だ。これは、乙種企業の生產物の價格が騰貴したことに基づいてゐる。

もつとも、こゝに注意すべきことが二つある。一つは、丙種の平均構成の企業にあつてはその生產物は依然として價値に等しい價格をもつて賣られてゐることである。もう一つは、三種の企業を合計し、社會全體として見る時は、價値の總額も、價格の總額も、いづれも百五十萬圓であつて、兩者は完全に一致し、利潤率に大小があらうと、それが均等化されやうと、その間に何等の變化も生じないことである。次表を參照あれ。

第三表

	總資本	剩餘價値	價値	利潤	價格
(甲) 低度構成の企業	二〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇圓	三〇〇、〇〇〇圓	五〇、〇〇〇圓	二五〇、〇〇〇圓
(乙) 高度構成の企業	六〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇
(丙) 平均構成の企業	四〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇

今度は商品一單位の價値と價格との關係を見よう。いま兩種企業の生產物の數量を、おの〳〵十萬個づゝであると假定すれば、一個當りの價値と價格とはそれ〴〵次のやうになるだらう。

第四表

	價値	價格
(甲)低度構成の企業の生產物	二・〇〇	二・五〇
(乙)高度構成の企業の生產物	七・〇〇	七・五〇
(丙)平均構成の企業の生產物	五・〇〇	五・〇〇

この場合にも、甲種企業の生產物の價格は、價値よりも高い、乙種企業の生產物の價格は、價値よりも低い。しかし、丙種企業にあつては、兩者は依然一致する。

こゝに示された價格は、いはゆる生產價格と呼ばれるものである。これは諸商品の生產に投下されたる資本に對して平均的な利潤を與へるところの價格である。そして、それは、商品の費用價格（生產費）プラス平均利潤に等しい大きさのものである。

資本主義の生產にあつては、諸商品の市場價格は、價値ではなしに此の生產價格を中心として

騰落しつゝ、絶えずそれに一致せんとする傾向をとるやうになる。これは、マルクスの規定である。

そこで、ブルヂョア學者は、鬼の首でも取つたやうによろこび勇んで言ふ、――見よ、マルクスは矛盾してゐる！　彼は、資本論第一巻においては、商品は價値(勞働價値)に從つて交換されると言つた。然るに第三巻へ來ると彼は、價値ではなしに生産價格に從つて交換されると言ふ。これが矛盾でなくて、何が矛盾か?!　と。

ブルヂョア學者の「發見」する「マルクスの矛盾」はいつもこんなものである。諸君は、彼等に微笑を返してやるだけで澤山だらう。

ゴム風船に水素を入れて放つと、風船は空中高く上つてゆく。それを見て、あれは引力の法則と矛盾すると言ふ者があつたらどうだらう。ブルヂョア學者は恰度それである。彼等は、ただ、商品の或るものは價値以上で交換され、或るものは以下で交換されるといふ現象を見るだけで、それがなぜさうなつてゐるかを考へてみないのだ。だから、それが「矛盾」に見えてくる。だが

少しでも考へる力のある者には、直ぐ様わかるであらうやうに、ゴム風船はたゞでは空中へのぼらない。水素を入れるとつつと上つていく。かやうに、水素といふ特別の要因の力を必要とするといふこと、そして、水素がなくなればすぐにおつこちて來るといふことは、取りも直さず引力の法則が作用してゐるからなのだ。

商品の或るものが、價値によらず生産價格によつて交換されるやうになるためには、資本の間の競爭——平均價値率奪戰——といふ特別の要因の力を必要とした。なぜ必要としたか？ それは價値法則が作用してゐるからである。價値法則の作用は、構成を異にする諸資本の間の利潤率の相異を惹き起す。資本家は利潤率を目當てに馳けずり廻る、恰度青年が戀人の姿を追うて馳びずり廻るやうに。——青年は戀人にのみ氣を奪はれて、自分を動かしてゐるものが生殖本能であることに氣つかないかも知れない。それと同じやうに資本家は、利潤率の大小や價格の大小に氣を取られて、自分を動かしてゐるものが實は價値法則であることに氣付かない。從つてブルヂョア學者も氣つかない。

が、彼等が氣づくにせよ氣づかないにせよ、價値法則卽ち商品が價値に從つて交換されようとする傾向は執拗に働いてゐる。從つてもし、資本家達が少しでも競爭をゆるめたり、企業から企業への資本の流出入が少しでも停滯したりしやうものなら、恰度水素の稀薄になつたゴム風船がフラ／＼とおつこちて來るやうに、商品の價格は「生産價格」の線から離れて「價値」の線へと近づいて來る。そして、それだけ利潤率の均等は破れて來る。

で、要するに、生産價格の法則は、價値の法則と矛盾するものであるどころか、實は價値の法則から派生したものに過ぎないのだ。價値法則がなければ、生産價格の法則もない。生産價格の法則が實現し得るのは、價値の法則が作用してゐるからである。

その證據は、かういふことにも現はれてくる――

生産價格の軌道は、價格の軌道から獨立した勝手氣儘のものではない。なるほど低度構成の資本の生産物の生産價格の線は、價値の線よりも低いところにあるし、高度構成の資本の生産物のそれは、高いところにある。しかし、どちらも、一定の距離を保つて價値の線に沿つてゐる。そ

して、平均構成の資本の生産物の生産價格に至つては、全く價値の線と一致する！　更にまた、社會全部として見た場合、一方に高く賣られるものがあれば、他方にそれだけ安く賣られるものがあつて、差引なしになるものだから、生産價格の總量は價値の總量と完全に一致する。

　たゞ、生産關係が進つてきたのだから、資本主義生産の社會における「調整者」たる役割を演ずるものは、生産價格であるとは言へる。しかし、だからといつて、商品生産社會の本來の調整者たる價値は、その役割を演じなくなつたのではない。生産價格は今や調整者として表面に立つてゐるが、價値はその黒幕にゐる！

五　資本の蓄積

　それで、今度は、資本主義生産の發展に際して如何なる傾向が生じるかを手短かに説明しよう。

　吾々は、剩餘價値又は利潤の生産こそ、資本主義生産の動機および目的であり、自己の利潤の總

量を能ふ限り大ならしめることは個々の資本家の努力の目標であると言つた。

資本家達は一生懸命である。彼等は、先づ、出來るだけ搾取率を高める。さうすると矛盾に逢着する。搾取率はどこまでも高めたいのだし、また高めもするが、しかし、どこまでも際限なくといふ譯には行きかねる。とにかく、勞働者が生きてゐて勞働を續けてくれなければ、搾取すること自體が不可能になり、剩餘價値の生産自體が不可能になる。鷄が金の卵を生む鷄である以上、片ツ端から絞り殺してしまふわけには行きかねる。

彼等はまた、絶えず、利潤率の高い事業を追求して、それに資本を投下する。さうすると、利潤率は均等化してしまつて、彼等の個人的意圖とはまるで反對の結果になる。それに大體、さういふやり方でいくら猛烈に剩餘價値爭奪戰をやつてみたところで、頭がきまつてゐる。一定の時に生産される剩餘價値の總額はきまつてゐる。

だが、第三の方法が殘つてゐる。それは、商品の生産それ自體を擴張することだ。さうすれば一定の搾取率、一定の利潤率においても、剩餘價値の總量、利潤の總量は增大する。そこで、す

べての資本家は、おの〳〵自己の企業の生産を擴張しようとする。しかし、生産したものを賣らなければ剩餘價値は實現されないから、そこに猛烈な市場爭奪戰が展開される。これは最も普通の意味における、資本家間の競爭である。

この競爭といふやつは、個々の資本家にとつては全く恐ろしいものを意味してゐる。彼等めいめいの立場に立つて見給へ。もしも自分が市場を取らなければ人に取られてしまふのだ。もしも自分が生産擴張に失敗すれば、たゞ擴張が出來ないといふだけではなく、企業そのものまでも潰されてしまふのだ。だから、競爭といふやつは資本家をのつぴきならぬ板挾みにする。成功的な生産擴張をやるか、それとも敗退し沒落するか——。

ところで、資本家は生産を擴張するのにはどうしなければならないか？　ヨリ多くの資本を生産に投ずるより外はない。

一つの方法は、他人から資本を借りることである。だから、資本の貸借卽ち資本信用は否應なしに發展して來るのだし、——これについては第四講で述べることにするが、——しかし借りた

資本に對しては利息を拂はなければならぬ。從つて資本家としては、出來るだけ自分の資本をもつて生産を擴張しようとする。

しかしさうするのには、たゞ一つの方法があるだけだ。

資本家は搾取によつて剩餘價値を收得する。例へば一萬圓なら一萬圓の利潤を收得する。彼がもしそれをみんな自分の個人的欲望の充足のため、個人的消費のために使つてしまへばそれまでだ。彼が生産を擴張せんと欲する限り、彼はその剩餘價値の一部分――例へば五千圓――を生産擴張の目的に使用するより外はない。言ひ換へれば、彼れの手に、利潤として、剩餘價値として回收された貨幣の一部分を割いて、ヨリ多くの生産手段や勞働力の購買に充てるより外はない。

この場合には、資本の生み出した剩餘價値は、再び資本に轉化されることになる。そしてそこに一つの追加資本が形成されることになる。吾々は、それを、資本の蓄積と呼ぶ。資本の蓄積は、資本の增殖を結果し、剩餘價値生産の擴張を結果する。

そこで面白いことになつて來る。資本家は生産を擴張せずにはゐられない。が、生産擴張のた

めに必要な追加資本は、剩餘價値の中から出る。だから、生産擴張を熱望すればするほど、剩餘價値を大きくしなければならない。ところがまた剩餘價値を大きくしようとすればするほど、ます〳〵生産を擴張しなければならぬ、……といつた風で、生産は際限もなく擴張されねばならなくなる。

この剩餘價値または利潤の飽くなき追求といふことと並んで、前に言つた競爭の刺戟と壓力とがある。競爭の壓力は、資本家個人が生産の擴張を欲すると否とに拘らず、たゞ單に沒落を免れんがためにさへ生産擴張を餘儀なくさせる。

そこで、生産の擴張は際限もないものになる。一事業の發展の過程において「もう充分だ」といふことの出來る瞬間は決してない。從つてまた資本の蓄積も無限に進行しようとする。一度資本家になれば、自ら沒落を決意しない以上、無限に資本を蓄積しなければならぬ。何を措いても蓄積せよ、――これが資本家の合言葉だ。從つてまた、利潤の増加といふことは、資本家にとつてそれ自身目的であると共に、また不可缺の手段となる。これらすべては、資本主義生産の法則

そのものが資本家の上に下す至上命令に基づくのだ。

資本主義的蓄積は、前に述べた貨幣退藏による蓄積とは全く性質を異にする。なるほど、慾に限りはないといふ點においてはおんなじだ。しかし、資本家的蓄積は、古い型の蓄積のやうに個人の欲望を犠牲にする程度に比例して増大するのではなく、彼が搾取する勞働力の量と、搾取の強さとに比例して増大する。王侯のやうな豪奢な生活をしてゐる資本家の場合でさへ、彼の所得は、支出よりもずつと急速に増加する、從つて彼れの懐に入れる利潤總額のうちで、彼れの消費する部分の占める割合はます〳〵減つてゆくといふ有様だ。おまけに、資本主義的蓄積にあつては、競爭の壓力といふ全く新しい強大な要因が加はつてくる。そして、資本主義の發展がすばらしく急速であるのもそのためである。が、それだけにまた、資本主義なるものが一の制度として持つ歴史的壽命も非常に短いものとなる。

六　利潤率低落の法則

資本主義の壽命が非常に短いのは、むろん單に發展が非常に急速だからではない。急速な發展と共に、この制度の矛盾そのものが急速に激化するからである。

かゝる矛盾激化の一つは、利潤率の必然的低下といふ形で現はれる。

資本家は爭つて生産擴張をやる。みんなが出來るだけ多く生産し、出來るだけ多く賣らうとする。そこで彼等は市場で衝突する。生産界が資本家と勞働者との闘爭舞臺であるならば、市場は特に資本家と資本家との闘爭舞臺である。そしてこの闘爭における勝利の榮冠は、誰れよりも多く剩餘價値を實現した資本家に歸するのだ。

では、この闘爭における最も强力な武器は何か？　それは他人よりも安い價格である。マルクスは、低い價格こそ『ブルヂョアジーの重砲』であると「×××宣言」の中で書いてゐる。

どんな商品でもいゝ、例へばメリンスでもいゝ。メリンス一反當りの生産費は四圓、利潤は一圓で、一反五圓で賣買されてゐたものとする。

前提によつて、各資本家の生産費（費用價格）は平均四圓である。この場合に、爭つて生産擴張

をやつた資本家の十人が、もしこれまで通りの生產費のメリンスを市場へ持ち込んで來るならば、餘計に生產された分だけみんなのメリンスが賣れないか、又はみんながやたらに投げ賣りすることになつて、みんなの利潤は却つて減少する。しかし、もしもその中に、一人機敏な資本家Aなるものがあつて、新式の機械を採用して生產費を三圓に減らしてゐたとすればどうか。

彼は、メリンス一反四圓で賣つても平均利潤の一圓はポケットに入れることが出來るだらう。しかし彼はそんなにまで安く賣らなくても、恐らく四圓八十錢から五十錢位で賣りさへすれば、自分の商品は全部賣り捌くことが出來るだらう。他の九人の中の或者は全く市場から驅逐される。或者の販賣高は減り、利潤も少くなる。或者は多分もとの木阿彌だらう。たゞA君だけは大當りだ。市場の分前も大きくなる。利潤も平均よりずつと大きくなる。一反平均四圓六十錢で賣つたとしても、生產費が三圓だから一圓六十錢の利潤を獲得出來る。從つて利潤の總額も大いに增した。彼は見事に生產擴張に成功した。

だが、彼の得意時代は永くは續かない。

彼は、生産費を減少したとはいふものの、それは機械を勞働者に置き代へたのだ。死んだ勞働力(機械)を、生きた勞働力にとつて代らせたのだ。少くとも、生きた勞働力の割合を減らしたのだ。かゝる生産技術の改良は、資本の構成を變化せしめずにはゐない。前には彼れの資本の四分の一が可變資本として勞働力の購買に充てられてゐたのだとすれば、今度はそれが五分の一に減り、殘る五分の四は機械や原料などの購買に充てられる不變資本となつてゐるだらう。一口に言へば、資本構成は高度化してゐるだらう。

とても機敏な資本家Aは、彼の採用した新式機械が彼れだけのものである間は市場の主人としてふんぞり返つてゐられるのだ。だが、彼れの同業者達も指を啣へて見てゐはしない。そんな重寶なものがあるんならといふので、我も〳〵と新式機械を使用する。さうなると今度は、メリンス工業全體の資本構成は高度化する。そしてみんなが生産費を切下げて前よりも安く賣る。A君はもう、四圓六十錢で賣つて一圓六十錢の利潤をあげるなんてわけに行かなくなる。新式機械のために勞働の生産性が増大し、一反のメリンスを生産するのに必要な社會的勞働時間が減少した

だけそれだけ、價格もまた低落せずにはゐない。

新式機械採用以前のメリンス工業の總生產高は十萬反で、その總價格は五十萬圓であつたとしよう。そしてその生產に投じられた資本總額は四十萬圓であつて、うち三十萬圓は不變資本、十萬圓は可變資本であつたとしよう。そして搾取率は十割であつて、剩餘價値または總利潤は十萬圓であつたとしよう。さうすれば、この場合の利潤率は二五%であつたことになる。

しかるに今、生產擴張と共に新式機械が採用され、それがメリンス工業全體に普及したために、勞働の生產性は增大し、メリンスの總生產額は二十萬反になつたとする。同時にまた、新らたに二十萬圓の追加資本が投ぜられ、總資本は六十萬圓になつたとする。そしてその二十萬圓のうちの十八萬圓は不變資本として使用され、二萬圓は可變資本として使用されたとする。すると可變資本は十二萬圓になる。さうだとすれば、搾取率に變化のない限り、剩餘價値または利潤の總額は十二萬圓でなければならぬ。利潤の總額は增大した。

メリンス二十萬反の總價格は、資本總額六十萬圓プラス利潤總額十二萬圓に等しいもの、即ち

七十二萬圓でなければならぬ。從つてメリンス一反の價格は三圓六十錢に低落することになる。商品の價値と價格は低落した。

そこで、平均利潤率はどうなるか？　總利潤は十二萬圓、總資本は六十萬圓だから、二〇%である。利潤率は低落した。

前後二つの場合の相違を次表に示す。

第五表

	生産高	總資本	不變資本	可變資本	總利潤	總價格	利潤率
新式機械採用以前	100,000反	四00,000円	三00,000円	100,000円	100,000円	五00,000円	二五%
新式機械採用以後	200,000	六00,000	四八0,000	一二0,000	一二0,000	七二0,000	二0%

一反當りの計算

	單價	生産費	利潤	利潤率
新式機械採用以前	五・00円錢	四・00円錢	1・00円錢	二五%
新式機械採用以後	三・六0	三・00	0・六0	二0%

これによつてはつきりとわかるやうに、生産費の低下といふことが、生産規模の擴張と、勞働

の生産力の増大とによつてかち得られ、そしてそれは總資本の增大および資本構成の高度化を作ふものである以上、必然的に三つのことが生じてくる。第一、商品の價値が低落し、從つて價格は下落する。第二、利潤の總額は增大するが、しかし總資本の增大するほどには增大しない。第三、從つて、利潤率は低落する。

この利潤率の低落は、直接に、生きた勞働力の相對的減少といふことに基づいてゐる。賃銀に充てられる部分の資本の、相對的減少といふことに基づいてゐる。しかも、資本家は、剩餘價値の渇望と競爭の壓力とによつて、資本を蓄積し、生産を擴張し、勞働の生産力を高め、生きた勞働力の相對的減少を惹起さずにはゐられない。從つて、資本の蓄積が進み、資本主義が發展すればするほど、勞働力に對する需要はます／＼相對的に減少する。そしてそのこと、並んで、資本の利潤率はます／＼低落する。

むろん、――これは、吾々の例にとつたメリンス工業だけに生ずるのではない。他のすべての産業部門にも同樣のことが生ずる。そして、各種の産業部門の資本の利潤率を均等化する傾向も

絶えず作用する。それ故にまた、社會の總資本の一般的な平均利潤率は、必然的に低落するといふことになる。

かうしたことは、個々の資本家にとつては全く豫期しないことであり、豫期に反したことである。

われらの機敏な資本家A君のみならず、すべての機敏な資本家は、眞先に新式の生産技術を採用して自己の生産費を低下する。さうする外に、市場の競爭に勝つ有力な方法はないからである。また事實において、彼は勝利者として、平均利潤以上の利潤――即ち超過利潤――をものにする。およそ資本家にとつて、此の超過利潤ほど蠱惑的なものはない。それを思ふだけでも涎が流れ出る。が、それだけにまた、他のすべての資本家も涎を流す。そこで、新式の生産技術は全般的に普及するのだが、その揚句はといふと、機敏な資本家の超過利潤が消え失せるといふだけでなく、新らしい平均利潤率は前の平均利潤率より却つて低いといふ結果になる。

利潤率は、平均利潤率として低下する。これは、矛盾に充ちた資本主義社會の自然法的な運動

によつてさうなるのだから、資本家個々人の意欲や力を超越したものである。彼等個々人は、それを、與へられた事實として受取るより外はない。そして、新たなる超過利潤の獲得に向つて突進し、同じ筋書を蒸し返すより外はない。

かくて、利潤率低落の傾向なるものは、鐵のやうな冷たい法則になるのだが、資本構成の高度化といふことは、もう一つの理由からも、利潤率を低下せしめるのだ。といふのは、不變資本の割合が大きくなると、不變資本の中でもまた特に固定資本の割合が大きくなる。

固定資本といふのは、例へば機械だの樣々の工場設備だのといふやうなものに投ぜられた資本である。これは、原料や賃銀に支出される資本とは違つて、一回の生産によつてその全價値が消耗されるものではなく、回收されるものでもない。かやうに、前拂ひした全價値が回收されるまでに數十回・數百回の生産を經て數年乃至は十數年を要するところの固定資本が、その他の資本即ち原料・燃料・賃銀等に支出される流動資本に比して相對的に大きくなればなるほど、總資本の回轉期間は長くなる。しかるに、一定の期間例へば一年間における資本の回轉が多ければ多い

ほどそれだけ資本は餘計働いて餘計に剩餘價値をもたらすから、利潤率は大きいのだ。だから、資本構成が高度化し、固定資本の割合が增大すればするほど、利潤率は低落する。

平均利潤率の低落なるものは、もちろん、資本家を餓死させるやうなものではない。少くとも、利潤總額の增大するあひだは大丈夫だ。しかし、その代り、資本主義の矛盾をます／＼鋭くする。それに第一、ひとつ／＼の商品が資本家に約束する利潤の甘露がすくなくなる。そこで、資本家はます／＼あせり出す。彼等はます／＼搾取率を強めようとする。彼等はます／＼躍起となつて生産擴張をやらうとする。それらによつて、利潤率の減つたのを埋め合せようとする。さうして揚句の果ては、相互の競爭を避けるために、カルテルだの、シンジケートだの、トラストだのといふものまでつくるやうになる。資本主義は老衰して「獨占の段階」に入り込むのだ。そしてそれと並んで、資本は、利潤率の低い國内から、利潤率の高い植民地や半植民地國へと盛んに輸出されてゆく。帝國主義の時代が展開する。

だが、それらすべての資本家的努力にも拘らず、利潤率低落の法則は、執拗に自身を貫徹す

る。利潤率低落の法則は、「デモクレスの劍」みたやうに、資本家の頭上にぶらさがつてゐる。見給へ、此の頃の資本家の有樣はどうだ！

七　資本の集積・集中と、獨占

諸君は、メリンス工業の資本家が資本を蓄積し、生産を擴張した有樣を考察された際に、——私はわざと默つてゐたけれども——、そこに一つの新らしい資本の運動が起つてゐることに氣付かれたことだらう。

メリンス工業には、十人の資本家による、十個の企業があつた。初めは、その十個の企業が十萬反のメリンスを生産した。卽ち一個の企業は一萬反づゝ生產した。ところが、新式機械の採用後は、全體で二十萬反を生產し、各企業は二萬反づゝ生產することになつた。一企業の生產規模は增大した。これ卽ち、生產の集積である。

この生產の集積と並んで、資本の集積が生じてゐる。前には、メリンス工業の總資本は四十萬

圓で、一企業の資本は四萬圓であつたのに、今や總資本は六十萬圓になり、一企業の資本は六萬圓に増大した。

で、資本の蓄積が進むと共に、そして勞働の生産力の發展と共に、そこに必然的に、生産および資本の集積が起るといふことは明かだ。

ところで、吾々は、例の機敏な資本家A君の新式機械採用によつて惹き起された猛烈な競爭戰を經て新式機械が普及した後も、依然として十個の企業が存在するものと假定したのだが、これはもちろん可能なことではある。けれども、極めて多くの場合は、違つた結果を生ずるのだ。競爭戰の過程において、弱い資本家、弱い企業は、沒落する。そこで例へば、十個の企業のうちの四個は沒落し、六個の企業が勝利者として殘るといつたことになる。さうなれば、一個の企業は今や三萬三千三百三十三反づゝ生産し、十萬圓づゝの資本を擁することになる。この場合には、生産および資本は單に集積したのみならず、また集中したのである。集中は、企業の數の減少によつて生ずるのだ。

資本主義の發展と共に、生產および資本はますます集積し、集中する。これ、第二の重要な法則である。

集中は、理論上、どこまで進み得るか？　マルクスは言ふ――

「一定の營業部門について言へば、そこに投下された個々の資本の總てが單一の資本に融合されてしまふとき、集中はその極限に達してゐるであらう。また一定の社會について言へば、すべての社會的資本が、單一の資本家なり資本家會社なりの手に合一されてしまふ時に初めて、集中は同樣な極限に達してゐるであらう」と。

かくて、資本の集積及び集中なるものは、自づから「獨占」に導き得ることは明瞭である。

ところで諸君は、前節來の說明によつてもすでに、集積及び集中の必然性を理解することはむづかしくないだらう。それは、資本家たる以上どうしても大生產・大企業に進まずにはゐられないからなのだ。その理由を更に補足して言へば――

大規模の生產は生產ほど、技術的改良を採用し得る可能性が大きい。

大企業は、べら棒に多数の勞働者を使用する。だから、勞働の專門化や分業をヨリよく利用することが出來る。或種の費用は、生産額が増加してもその割合に増加しない。例へば建物の維持費、保險費、照明費、監督費、販賣費、等。だから大規模の生産においては、商品一個當りの費用が比較的少くなる。

大企業は、製品を賣る場合にも、原料や補助料などを買ふ場合にも、すべて大量的にやるから有利である。

大企業は、更に、信用を通じて資本を手に入れることが容易である。しかも、ヨリよき條件でヨリ多額の信用を、ヨリ長期に亙つて手に入れる。等、等。

これを要するに、大生産、大企業、大資本は、資本蓄積の結果であると共にその手段であり、競爭の成果であると共にまたその武器である。だから、個々の資本家は、否應なしに、大企業、大生産に向つて突き進む。剩餘價値の渴望と、競爭の壓力とは、こゝでも最強大な挺子である。が、こゝでもまた、資本家達の全く豫期しない社會的結果が、自然法的に起つて來る。

生産及び資本が集積し集中すればするほど、生産の社會的性質と、所有の私的性質とは、正面衝突をやるやうになる。生産の社會的性質は、單純な商品生産社會の場合とは比較にならぬほどはつきりしたものになる。前には、現實の生産者達は互ひに離れ〳〵に孤立して生産的勞働に從事した。ところが今度は、生産的勞働に從事する勞働者達は、途方もなく大きな一工場、一企業、一資本の下に集中されてゐる。何千人、何萬人、何十萬人と一塊になつた勞働者達は、生産に對しては、文字通りの協力者として、おの〳〵齒車の齒の一つとして、社會的に作用する。しかるに彼等の社會的勞働の果實は、たゞの一日だつて勞働に參加しないところの、資本の私的所有者の物になる。

かうなつて來れば、現實に搾取され抑壓されてゐるところの勞働者達は、たとひマルクスのマの字も知らなくても、資本主義の矛盾と不合理に氣づかずにはゐられない。勞働者大衆は否應なしに闘爭へ驅りたてられる。しかるに今や、勞働者大衆はまた、闘爭のための組織をも容易に持ち得るのだ。團結による闘爭、闘爭による團結、――かくしてまた、われ〳〵プロレタリアは一

階級であるといふ意識、われ／＼プロレタリアの利害と運命は全く一つだといふ連帯性の意識、われ／＼プロレタリアの双肩にこそ偉大な任務はかゝつてゐるといふ歴史的使命の意識をも、容易に獲得する。

同時に一方、資本主義は、その「獨占の段階」に入込んでゆく。

獨占への傾向は、すでに資本の集積・集中の運動そのものの中にある。資本家は更に利潤率の低落によつて獨占形成を強制される。この二つの傾向はいつしよになつて、獨占の時代を出現させる。そしてそれと共に、社會全體の生産手段は一握りほどの巨大資本家の手に握られて彼等の私的利慾の道具になつてゐるといふことが、どんなに意識のおくれた大衆の眼にもはつきりと映ずるやうになる。

八　恐慌

もう一つ、諸君がどうしても知つておかねばならないのは、資本主義における恐慌の必然性で

ある。貨幣と信用とが成立すると、そこにすでに恐慌の可能性が生ずるといふことは、前にも指摘しておいたが、今度は單なる可能性の問題ではない。

誰でも知つてゐることだが、資本主義經濟といふものは素直にすら〳〵と發展しはしない。景氣がいゝといふとみんなが有頂天になつてゐる。そんなことが二三年も續くことがある。すると突然、恐慌だ！　といふ叫びがあがる。足下から鳥が立つたやうな騷ぎになる。大混亂の突發だ。社會を舉げて上を下への大騷動がつゞく。かず〳〵の悲慘事が起つたあげく、やつと混亂が收まると、今度はみんなが、不景氣だ〳〵といつてくすぶつてゐる。社會全體が青菜に鹽といつた恰好になる。さういふ時期は二三年か四五年も續く。すると又ぼつ〳〵景氣が直つてくる。それから、また有頂天、大混亂、青菜に鹽といふ風になるのだから、資本主義の發展といふやつには、どうもヒステリー患者の出來損ないみたやうなところがある。この狀態は、景氣循環などと呼ばれることもある。

かういふ次第だから、前に言つた利潤率の低落や資本の集中なども、不斷にないゝ〳〵し的に起

るのではなく、資本主義經濟のヒステリックな發展過程を通じ、恐慌を契機として、多かれ少なかれ急激に起るのだ。

恐慌なるものは、先づ、商品流通および資本流通の中斷・停止といふ形で現はれる。何でも、急に商品が賣れなくなつて、滯貨の山が出來てしまふ。資本家は商品を貨幣にかへることが出來なくなる。從つて前拂ひした資本は回收されぬ。從つてまた、支拂ひも出來なくなる。そこで、資本家的生產行程の中斷・停止も生じて來る。資本家は破產する。工場は閉ざされる。機械はさびる。勞働者は街頭へ投げ出されて飢ゑる。山のやうに積まれた商品は、投賣りしても買手がないので腐つてしまふ。

何が原因か？

とにかく、買ひ手のない商品が山のやうに積まれて腐つてしまふのだから、商品の過剩生產が原因だといふことは明かだ。しかし、また、それは實に不合理極まる過剩生產だといふことも明かだ。社會の大衆が、飽きるほど食べて着て使つて、それでもまだ餘るほど商品が生產されたか

ら過剩生產だといふのならば、間違ひにしても我慢は出來るが、さうではない。それどころか、大衆は飢ゑてゐる！

こんな馬鹿げた過剩生產から恐慌が起るといふやうなことは、資本主義生產方法以前には、曾つてなかつたことである。なるほど、經濟的な災害や混亂といふことは昔からあつた。しかしそれは、例へば、旱魃、洪水、凶作といつたやうな自然現象に原因するものか、乃至は戰爭などに原因するものであつた。從つてそれらは、經濟外の原因による偶然的な現象に過ぎなかつた。しかるに、資本主義の恐慌の場合は、そんな風な原因はちつともなくても起るのだし、しかも生產物が不足だから起るのではなくて多過ぎるから起るのだし、おまけに八年目とか十年目とかにはきつと起るのだ。さうだとすれば、それはどうしても資本主義に特有な經濟的事情に基づくものでなければならぬ。

恐慌は、ブルヂョア經濟學者を手古摺らせたものである。今では一つ話のやうになつてゐることだが、或學者の如きは、恐慌があんまり規則正しく周期的にやつて來るものだから、これは太

陽の黑點と關係があるのだ、と途方もないことを書き立てたくらゐである。これは、恐慌の原因を、資本主義の制度以外のところに求めようとしたものだが、他のブルヂョア經濟學者達も五十步百步で、どれもこれも、資本主義に内在する矛盾それ自體が恐慌の根元であるのを認めることを拒んでゐる。だから、彼等の或者は、恐慌は偶然的な現象だといひ、或者は信用關係などを捉へて恐慌のたゞ上つらだけを說明し、或者は全く恐慌の分析を拋棄して沈默する。

だが、吾々から見れば、恐慌となつて爆發するやうな過剩生產が、何故にひとり資本主義においてのみ可能であり、必然であるかといふことを究明するのは困難でない。

單純な商品生產社會とは違つて、資本主義生產にあつては、

(一)　資本による勞働の搾取がある。從つて、一切のものを生產するところの大多數の勞働者達の消費は非常に狹く限られてゐる。しかるに、生產の方は、資本家の蓄積慾と競爭とによつて、盲滅法に擴張される。卽ち、生產と消費の矛盾がある。

(二)　盲滅法な生產といふことから生ずる無政府性は、今や、競爭的な、がむしやらな生產擴張

といふことによつて恐ろしく激化されてゐる。

（三）市場の點から見ても、それはもはや地方的なものではなく、世界市場にまで發展してゐるから、見透しはます〳〵困難になり、生産はます〳〵あてずつぽうな、無計畫なものになる。

（四）生きた勞働力に比べて生産手段の役割がべら棒に大きくなり、資本の中で、不變資本わけても固定資本を占める割合が非常に大きくなつてゐる。

（五）無政府的な生産に際して、勞働の生産力がぐん〳〵増大するので、種々なる生産要素および生産部門の間の均衡のとれた發展は不可能である。

（六）それ自身矛盾を含むところの信用が恐ろしく發展する。

もう少し立入つて説明しよう。

過剩生産とは、別な言葉で言へば、均衡の破れた生産のことである。ではどんな均衡が破れるのか？　破れずにはゐないのか？

資本家は、生産物を賣つて貨幣に代へねばならぬ。生産物の消費を欲してゐる何千萬人の人間

があつても、たゞ欲してゐるだけでは資本家の目的には役立たない。商品を買ふだけの貨幣を持つてゐなければなんにもならぬ。これを他方か見れば、資本主義社會の人々の消費の大小は、人人が商品の購買に充てる貨幣の所有額によつて制限されてゐるといふことだ。かゝる貨幣額の大小は、即ち人々の消費力を決定する。

ところで、この消費力は、資本主義社會では非常に狭く限られてゐる。人口の大多數を占める勞働者大衆は、「敵對的な分配關係」に基づいて、食ふや食はずの賃銀しか與へられてゐない。彼等は、自分のつくり出す價値の何分の一かを與へられてゐるだけである。資本家は資本家で、彼等が剩餘價値として收得する貨幣の出來るだけ多くを資本に再轉化して、資本の增殖に努めるから、彼等の消費もまた彼等自身の貪慾によつて制限を受けてゐる。それに大體彼等は少數である。

かやうに狭く限られてゐる社會の消費力なるものは、生產に對する絕對的な制限を形成する。それは、先づ、直接に人々の消費資料となる商品の生產に對する制限をなす。それは明白だ。しかるにまたそれは、間接には、原料や機械などのやうな生產手段たる商品の生產に對しても制限

をなす。なぜなら、どんな原料でも、機械でも、直接にか間接にか結局は人間の消費する物の生產に役立つのだ。從つて、消費資料が賣れなければ、生產手段も賣れなくなり、更にまた生產手段たる原料や機械の生產に役立つところの、他の材料や機械、等々も賣れなくなる。

人を喰つたブルヂョア經濟學者の一人は、石炭は鐵の生產に役立つし、鐵は石炭の生產に役立つといつた風の關係になつてゐるから、生產手段の生產といふものには制限はないと言つた。果してそんなものであるのなら、石炭も鐵も一手に生產してゐる三井・三菱といつたやうな資本家は、石炭と鐵の生產を際限もなく擴張して行ける譯なんだから、今日此頃のやうに石炭も鐵も賣れないといつて佛頂面をして滯貨の山をみつめてゐなくてもよかつた筈である。

て、資本家的生產は、それ自體の含む矛盾の故に、非常に狹隘な消費力によつて制限されてゐる。もし生產がこの制限を超えて增加すれば過剩生產になる。

しかるに、生產の方はどうか？　おとなしく此の制限內に止まらうとするか？　それどころではない。

資本家達は、消費力の大小などを考へて生産するのではない。また考へて見たつてわかりもしない。彼等はたゞ剩餘價値――利潤に對する飽くなき貪慾の命ずるまゝに生産を擴張する。更に、不斷の競爭の壓力の下に、沒落を免れる唯一の道として、生産を擴張する。彼等は、全く、生産擴張のための生産擴張をやる。だから、彼等は盲滅法に、がむしやらに生産を擴張する。過剩生産の起るのは當り前のことである。

ところで、消費者なるものはどこにゐるか？　資本家にせよ、勞働者にせよ、彼等は消費者として特別の一團をなしてゐる譯ではない。彼等は、すべて生産機構の中に編み込まれてをり、各種の企業と結びついてゐる。それでは、彼等の消費力はどうしてきまるか？　それは彼等の結びついてゐる各種の私的企業と私的生産が、彼等に、どれだけの利潤、どれだけの賃銀を與へるかによつてきまるのだ。

さうすると、生産と消費との均衡といふことも、一層詳しく考へれば、各種の企業の間の均衡、各種の生産の間の均衡の、一要素であることがわかつてくる。それは一體どんな均衡か？

マルクスは、此の問題を、非常に精細に、そして驚くべき正確さをもつて、研究したので、こゝでそれをいちいち述べてはゐられないから、かい摘んで言ふことにする。

何よりも先づ、各種の企業の間には密接な依存關係がある。それについては、前に「生産の社會的性質」を説明した際に述べたから繰り返さないが、とにかく、例へば、織物生産――綿絲生産――綿生産、更に織機生産または紡機生産――鐵生産――石炭生産といつた風に、到るところに依存關係の連鎖のあることは明かだらう。さうすると、各種の企業の資本家が生産の擴張をやるといふ場合には、例へば、綿絲、織機、等々の生産は、織物業の生産擴張に比例して擴張されなければ、過剩生産に陥るし、また綿織物の生産の方は、これらすべての生産擴張のために新らたに雇傭される勞働者達がその賃銀でもつて買ふところの織物の量以上に増加するならば、過剩生産に陥るといふことも明かだらう。

これだけでも隨分やゝこしい。ところがまた、かうした依存關係は、生産物の使用價値の點と、價値の點とで二重になつてゐる。といふのは、擴張によつて必要となるところの、綿絲、織

機、織物、等々一切のものは、品物として恰度相手の欲するものでなければならず、恰度相手の欲する數量のものでなければならず、且つまた恰度相手の購買し得る價値量のものでなければならないことになるからだ。それ以上に出れば過剩生産になる！

かやうに考へる場合には、諸々の消費資料の生産における均衡のみならず、諸々の生産手段の生産における均衡も同時に考へることが出來るだらう。ところで、諸君すでに御承知の通り、資本主義生産においては、生産手段の生産が非常に大きな部分を占めるのだ。おまけに、この生産手段なるものは、生産擴張に際して新しい生産技術が採用される度毎に、勞働力に對する割合が變化して、そしてその變化は、不變資本と可變資本との割合を變化させるのだ。そしてそれと共にまた、勞働の生産力は飛躍的に増加してしまふのだ。

かういふ變化が、生産の擴張と同時に起るとすれば、各種の企業の間、各生産部門の間において、生産が恰度釣合を保つて増加するなどといふことは、全く出來ない相談といふものだ。

かくして、――市場の見透しはつかず、生産に社會的計畫はなく、たゞ貪慾の焰と競爭の壓力

とによつて盲滅法がむしやらにやつてのける資本家的生産擴張なるものは、どの途、過剩生産を惹き起さずにはゐないのだ。

これは明かだが、しかし諸君は、この際、かういふ質問を提起する權利があるだらう。曰く、——もしも生産が必要を超過し、供給が需要を超過するならば、すぐに市場價格が低落する筈だから、資本家は生産を加減することになり、從つて、大した過剩生産を惹き起さないのではないか？　と。

それは一應その通りだ。しかし、それは、市場價格がすぐに下るならば、といふ條件つきで承認出來るだけのことである。そして問題は、實に、それがすぐに下るかどうかといふ點にあるのである。

此頃は事情が變つて來たからさうでもないが、以前の資本主義はともかく二年も三年も續く好景氣を持つたものである。そしてその期間、諸商品の市場價格はのべつ上がつて行つたものである。これはとにかく經驗的事實である。だから、問題は、過剩生産が起るにも拘はらず何故に市場

價格は下落しないで却つて二年も三年も昂騰を續けるかといふ點にある。

それは、實際には過剩生産が生じてゐてもそれを市場の表面に現はさないやうに作用する要素があるからだ。さういふ要素は四つばかりある。

第一は、固定資本の更新。――相當永續きのする好景氣が始まるためには、相當に巨額の貨幣が續けざまに市場へ投入されねばならぬ。それはどこから出て來るかといふと、資本主義生産においては、固定資本の更新といふことがある。機械その他の工場設備だの、鐵道のレールだのといふものは、例へば十年目位にはどうしても新しいものと取り換へねばならないのだが、この取り換への準備として各資本家は貨幣を積立てておく。固定資本は大きいから、その金額も巨額に上る。

そこで、その取り換への時期だが、それが恰度、不景氣局面から景氣局面への轉換期に際して起るのだ。好景氣の最中には、たとひ固定資本が生産技術上取り換へを必要とするやうになつてゐても、資本家はなんとかそれで間に合せて、せつせと利潤稼ぎをやる。恐慌期や不景氣局面に

おいては、資本家は金につまつてゐるし、市場に不安を感ずるから、固定資本の更新もうつちやらかしておく。そこで、いよ〳〵景氣もどうやら立直りさうなけはひになつて來ると、どの資本家も言ひ合したやうに固定資本の更新にとりかゝる。殊に恐慌から不景氣時代にかけて一般に商品價格が低落するから、生產費切下げのために新式の機械や設備が工夫されて、舊式のものでは競爭が出來なくなるといふ事情がある。そしてその理由からも、機械や設備を取り換へずにはゐられなくなつてくる。

かくして、固定資本の諸々の要素に對する需要がかたまつて起つてくる。從つて多かれ少なかれ巨額の貨幣が市場に現はれる。

第二、かくして景氣が起りかけ、一定種類の商品の價格が昂まり始めると、――元來資本家は何でも價格を目當に行動するのだから――、その價格騰貴を合圖に各種の生產の擴張が開始される。諸々の生產手段に對する需要が起つてくる。ところで、需要は多かれ少なかれ急激に起つて來たのだから、初めの間は供給が間に合はぬ。需要は供給を超過する。だから、價格は騰つてゆ

く。新らたに建増される工場等々が出來上つて、ヨリ多くの製品を現實に供給しはじめるまでには、相當の期間が要る。少くともその期間は、價格は昂騰しつゞける。

第三、價格騰貴の波、景氣の波は、一の産業部門から他の産業部門へと波及する。例へば、織機生産――鐵生産――石炭生産といふ鎖を傳つて波及するだらう。また別の鎖を傳つて綿絲生産――紡機生産、等々といふ風にも波及するだらう。一波は萬波を呼び、全面的な價格騰貴と生産擴張の時期が展開されてくる。生産手段の生産は、必要以上に増大する。

かうなれば、――前に述べた理由によつて――、むろんもう各種の生産の間の均衡は破れ、過剩生産は生じてゐるのだが、しかしそれはまだ表面には現はれない。

第四、そこへまた、信用といふ應援軍が現はれてくる。銀行は、これはすばらしい景氣だ、今こそ儲け時だといふので、どん／＼金を貸す。預金の總額よりもずつと多くの金を貸す。融通が利くので生産はます／＼擴張される。自分の金だけでは到底擴張出來ないやうな企業までが擴張される。擴張どころか、いろんなものがどん／＼新設されてくる。だから價格はなほも騰貴を續

ける。

かういふ調子で、過剰生産が表面に現はれる時期は先へ延ばされて行くのだが、しかし無限に先きへ延ばすといふ譯には行きかねる。破綻は來ずにはゐない。

破綻は、――好景氣の最中に取りかゝつた擴張工事、新設工事が大概出來上つて、新しい工場の製品がどん／＼市場へ持ち込まれてくる時に、始まるのだ。過剰生産はいよ／＼表面へ姿を現はしてくる。今度こそ價格は低落せずにはゐない。市場の一角に滯貨が現はれる。そして多かれ少なかれ急速に増大する。銀行は警戒しはじめる。利子は高くなる。利潤率は低下しはじめる。あつちからもこつちからも註文の取消しが來る。そこで、どこかの弱い一環をなす資本家が金につまつて支拂不能になつて破綻を暴露する。今度は、支拂不能の浪が、信用の連鎖を傳つて全面的に普及する。好景氣に醉つぱらつた資本家達は、自分の流動資金は手一ぱいに廻した上で借り込めるだけ借り込んでゐるのだから、支拂不能の浪の波及にはまことに好都合なことである。工業企業にも、商業企業にも、銀行にも破產が起る。商品價格は急落する。そこで、工場閉鎖、生

産制限、大衆失業、等々、型の如しといふ次第になる。

さて、商品價格はどこまで下落するだらうか？　理論的には、商品の價格の總額が、價値の總額に等しくなるところまで下落するわけである。さうすればそこで一應の均衡が回復されるのだ。恐慌は、破れたる均衡を強力的に立て直す。資本主義生産にあつては、恐慌による以外に均衡再建の方法はない。

過剰の商品は、投賣りされたり、腐つたり、燒かれたりして、處分される。過剰の資本は、資本の價値の減少や、破産や、破壞によつて、處分される。

新しい均衡が再建されると共に、一般的な平均利潤率も新しい水準へと低落する。この水準が如何にして決定されるかは、諸君にはすでに研究ずみのことである。

恐慌を契機として、資本家間の鬪爭は激化する。強い資本が弱い資本を打ち倒すのにこれほどうまい機會はない。弱い企業は、文字通り打ちのめされるか、屈伏して強い企業の統制下に立つか、買收されるか、合同するかする。生産および資本の集中は急激に進展する。

資本主義社會に殘存してゐる農民や手工業者についてはまだ述べなかつたが、これらの大衆は恐慌期から不景氣局面に際して、最もひどい犧牲を轉嫁されるのだ。彼等は文字通り將棋倒しに薙ぎ倒される。彼等の多數は正銘のプロレタリアに轉化する。農民大衆のます／＼多くは前々からの家內工業を奪はれて、資本家的商品を購買することを餘儀なくされる。これを、ブルヂョアジーは、農村に市場を「開拓」するのだといつてゐる。農民大衆も、手工業的な小生產者大衆も、自分の商品は安く賣り、資本家の商品を高く買はされることによつてどん／＼××されてゆく。この搾取は資本の蓄積にとつて大變にお役に立つ。

で、話はすこし傍道へ外れたが――、恐慌期の價格の下落、市場の收縮、利潤率の低落、等――これらすべては、競爭を激化する。資本家達は、あらゆる手段を講じて、舊市場の擴張と、新市場の獲得とに狂奔する。

ざつとかういふ順序を經て、多かれ少なかれ永い不景氣局面が終りを告げ、またもや固定資本の更新が始まつてくる。そしてまた、元の筋書がむし返されるのだ。資本主義の「古典的」な發

展の時代には、恐慌から恐慌までの期間即ち「經濟周期」の長さは、大體、支配的な產業諸部門の固定資本の壽命の長さに一致した。それはほゞ十年だつた。

此の筋書をむし返すといつても、むろんそれは單なる繰り返しではない。景氣の循環が一めぐりする毎に、勞働の生產力は飛躍的に增大し、資本の構成は高度化し、可變資本(賃銀)はますます相對的に減少してゐるのだから、社會の生產力に對して「消費の狹隘な基礎」はます〳〵狹隘になつてゐる。しかも固定資本の占める割合はます〳〵增大し、生產手段を生產する產業部門はます〳〵相對的に增大し、信用はます〳〵發展してゐるのだから、過剩生產そのものの規模と範圍はます〳〵大きなものになる。一口に言へば、恐慌は、一回は一回毎にます〳〵尖鋭となり、深大となる。

恐慌期における資本家達は、初めは國內の農村に向つて自己の市場を擴大する。やがては絕望的な努力をもつて、まだ資本主義的交換の範圍に入らなかつた後進諸國に血路を求める。しかしさうしたからといつて、根本事情は少しも變るものでない。後進諸國は、先づ資本主義的交換の

範圍に引き入れられ、次には資本主義國から生產手段を供給されて、それ自身がだん／＼資本主義國に轉化されてくる。そしてこの事情こそ、世界大戰以後の恐慌を恐ろしく深刻ならしめた一大要因であることは、諸君もおよそ御承知の筈である。

九　大衆の窮乏化

最近四五年來の日本ブルヂョアジーのスローガンの一つは、「徹底的整理」であつた。この「徹底的整理」といふスローガンは、金融資本の側のいろ／＼な魂膽もあるので決して單純なものではないが、しかしそれは結局は、過剩資本をなくしてしまへ、といふことだ。なぜ、彼等が此頃になつてそんなことをやかましく言ひ出したかといふと、それはもちろん過剩資本が途方もなく大きなものになつたからである。

過剩資本は、過剩蓄積によつて生ずる。

資本家達は、利潤率が低下し、資本一單位の稼ぎ高が減つてくると、その埋め合せをしようと

思つてます／＼資本の量を増す。つまり、實現された剩餘價値を更に資本に轉化して蓄積を進める譯である。しかし、一定の時に、かうして追加されてゆく資本は、或る程度に達すれば、もう利潤の量を増加せしめなくなることは明かだ。なぜといつて、そこには常に消費力の制限といふものがあり、從つて生產の擴張にも限度があつて、或る程度以上の資本の蓄積は必然的に過剩生產を惹き起すから。

で、かやうに、資本として追加されても最早や利潤の量を増加せしめないところの資本は、過剩資本である。だから過剩資本といふ意味は、資本家のお役に立たない資本であるといふだけのことであつて、社會に工場が多すぎるとか、機械が多すぎるとかいふのでは絕對にない。大衆は慘めな生活をしてゐるのだから、社會としてはいくらでも工場や機械を必要とするのだが、たま／＼それが資本家の金儲けの道具にならないといふだけの理由で過剩になるのである。

過剩資本は、もちろん好景氣時代にすでに生じてゐるのだが、しかし價格は騰貴し利潤は増加しつゝあるやうに見えるので、資本家は有頂天になつてゐる。恐慌が近づいて、過剩生產が表面

に現はれてくると、過剰資本もはつきりと姿を現はしてくる。そして恐慌と共に、俄然増大する。

資本の資格を失つた資本は、先づ、寢たり遊んだりして、謂はば居候ぶりを發揮する。かういふ資本がごろ／＼してゐるために、その壓迫を受けて利潤率はます／＼低くなる。本來あるべき水準よりも低くなる。そこで、資本家達は、こいつをなんとか早く處分しなくてはいかんと言ひ出すのだ。

前節を讀まれた讀者諸君は、この過剰資本が恐慌によつて忽ち處分されてしまふかのやうに思はれたかも知れないが、實際はさう簡單には行かないのだ。過剰資本の處分問題をめぐつて新しい鬪爭が資本家の間に起つてくる。といふのは、社會の資本總體のうちの二割とか二割五分とかいふものが過剰になつてゐるのだから、新しく出來た資本がそれに相當するだけ處分されるか、それとも舊資本が處分されるかといふ問題になつてくる。資本家達は、お互ひに自分のものは生かして人のものは殺さうとする。つまり、前には誰が餘計に儲けるかといふ喧嘩だつたが、今度

は誰が少く損をするかといふ喧嘩である。言ひ換へれば、それは損失轉嫁の闘爭である。かうした闘爭が進行してゐる限り、「財界」の空氣はまことに鬱陶しい。何しろ、何億といふ資本が無價値になつたり破壞されたりして、どの資本家かの損失にならうといふのだから無理もない。そこで、新しい價格下落が來たり、信用の動亂が起つたりして、謂はば地震の搖り返しのやうなものが來る。この種の恐慌は、近來、「整理恐慌」などと呼ばれることもある。

が、資本主義が發展すればするほど、形成される過剩資本は增大するばかりでなく、その大部分は處分されずに將來へ持ち越され、そこへまた新しい過剩資本が加はつてだん／＼尨大なものになつてくる。

といふのは、――(一)蓄積される資本の量がます／＼大きくなるのだから、そのうちで過剩資本となるものの量がます／＼大きくなるのは當り前である。更に、(二)利潤率はます／＼低くなつて資本の各單位の稼ぎ高はます／＼小さいのだから、そこへ割込んでゆく新しい追加資本はぢきに資本たる資格を失つて過剩の烙印を捺されるやうになる。それからもう一つ、(三)資本の集中が進

んで金融資本などといふ途方もなく大きな資本が出來てくると、信用制度を動員したり××權力そのものまでも動員したりして、自己の支配下にある資本は、過剩だらうと何だらうと絶對に減らさないやうにする。

そんな風になつてくると、資本の總量は全く尨大なものになり、それの稼ぎ出す剩餘價値＝利潤の總量もまた莫大なものになつてゐるのだが、さてその剩餘價値を資本に再轉化しようとしても、それは最早や利潤の總量を增加せしめないばかりか、却つて減らすといふやうなことまで起きてくる。そこで、資本は否應なしに海外の後進諸國へ輸出されねばならなくなり、しかもその後進諸國においてさへ行き詰まるといつたことになつてくる。世界資本主義の現狀の如きは正にそれなのだ。

かやうに、一方では過剩資本が發生し增大するかと思ふと、他方ではまた過剩人口が發生し增大する。全く資本に負へない代物は資本主義である。

過剩人口といふのは、一口に言へば失業者および半失業者のことである。勞働力のほかに賣る

もののない多數の人間が、その勞働力をすら賣ることが出來ない、——それが過剩人口を形成する。

なぜ勞働力を賣ることが出來ないか？　資本家が勞働力を買はないからだ。なぜ買はないか？　資本家の金儲けの役に立たないから。過剩人口卽ち失業者半失業者が生ずるのは、決して「人間が多すぎる」といふことなんかではない。大體、人間が多すぎるなどといふべら棒なことがあり得るものではない。吾々の社會は、働ける者、働きたい者を、むりに遊ばしておかねばならぬほど、それほど人間のなすべき仕事がないのだらうか?!

資本主義は、折角出來た機械や工場をやたらに「過剩」にし、折角生産される立派な生産物をやたらに過剩にし、おまけに折角生れた人間までも過剩にする！

先づ過剩人口の内容を見給へ。

工場、製作所、熔鑛爐、鑛山、鐵道、船舶、等、——かうした近代的産業の中樞的な部分を見ると、そこの勞働者達は、絶えず、生産に吸ひ込まれるかと思ふとまた逐ひ出されてゐる。そし

て平均してみると、その勞働者人口の何割かの者は常に失業してゐるのだ。この部分の過剩人口は「流動的な形態」にある。

次は農村、――こゝでもどん〳〵喰へない人間が殖えてゐる。さういふ人間は、資本主義が農村に侵入すればするほど多くなる。彼等は、これが人間の喰ふものかと思ふやうなものを喰べてどうやら命をつないではゐるが、みんな立派な失業者だ。その何よりの證據には、都會の方に口さへあれば直ぐさまどつと驅けつけてくる。いや、口がなくつても絕えず都會へ〳〵と流れ込んでゐる。この部分の過剩人口は「潛在的な形態」をとつてゐる。

それから今度は、自由勞働者等々の大群。この人々の就業は全く不規則で、平均すれば一年の半分から三分の二は失業だ。この群へは、いろんな方面から、喰へなくなつた人間が飛び込んで來る。農村からも來る、手工業からも來る、小賣商賣からも來る。すべての亡びゆく產業部門から來る。この部分の過剩人口は「停滯的な形態」をとる。

最後に、ドン底の人々がある。これにも大體四つの範疇がある。第一は、まだ勞働能力はある

のだが社會の救恤を必要とする人々。日本の「モダン語」では、これをガード階級などと呼ぶやうになつた。第二は、孤兒その他の窮乏兒。これの一部も、孤兒院だの何だのに收容されてゐる。以上の二つは、景氣の如何によつて勞働に動員されることがある。第三は、勞働無能力者、墮落者、「不良」、物貰ひ、等。これも社會の救恤を必要とする。「これは主として、分業のために融通が利かなくなつた人々、勞働者たる標準年齡以上に生き延びた人々、最後にまた、危險な機械や鑛山や化學工場その他の增加につれて數を增すところの、產業上の犧牲者たる不具者、癈疾者、寡婦、等から成る」（マルクス）。それから第四には、本來の意味でのルンペン・プロレタリアートがある。卽ち、浮浪人、犯罪者（泥棒、掏摸、暴力團）、賣淫婦、等。

日本では、ブルヂョアおよびその一味が、家族制度は大變いゝものだと頻りにほめてゐる。それはその筈だ、この家族制度こそ、彼等の懐を痛めずに、失業者收容機關の役をしてゐる！日本では、この家族制度なるものがあつて、たいがいの家が居候格の「厄介物」を背負ひ込んでゐるから、實際の失業者の數は統計に現はれて來ないのだ。

ところで、これらすべての「喰へない」人々は、社會に喰ふ物がないから「喰へない」のではない。喰ふ物にしろ着る物にしろ、それはウンと倉庫に積まれてゐて、文字通り「腐るほど」ある。工場は、まだ幾らでもつくれるんだがなあと言ふやうな顏をして遊んでゐるし、田舍へ行けば、田圃や畑も遊んでゐる。それでゐてお百姓などは、つくつたものを只同樣で賣つてゐる。

これでは、先づ、喰へない者、過剩人口は、どうして生じるか？　事は單純である。

例へば十年前に百萬人の勞働者があつて全部就業してゐたとする。その國の人口は、自然增加によつて、十年間に二倍になるとする。さうすれば、百萬人の勞働者人口も十年後には二倍して二百萬人になる譯だ。ところで、資本の方は、勞働者人口よりもずつと急速に增加して、十年間に三倍になるものとしよう。それは十年前の十億圓から一躍三十億圓に增大するものとしよう。資本の增加の方がはるかに早いのだから、十年後には、二百萬人よりももつと多くの勞働者に對する需要が生ずるかといふと、決してさうではない。なぜなら、總資本がそれだけ增大するものとすれば、そのうちの不變資本はもつと急速に增大してゐるのだ。だから例へば、十年前には總

資本の半分が賃銀たる可變資本であつたとすれば、十年後のそれは四分の一になつてゐるだらう。さうだとすれば、十年前の賃銀の總額は五億圓であつたのに、十年後は七億五千萬圓である だらう。平均一人當りの賃銀が同一だとすれば、五億圓で百萬人雇つてゐたのだから、七億五千萬圓では百五十萬人雇へることになる。なるほど賃銀勞働者の總數は五十萬人だけ多くなる。けれども、勞働者人口は二百萬人に殖えてゐるのだから、そのうちの五十萬人は勞働力を賣ること の出來ない勞働者、卽ち過剩人口となる譯ではないか。

更にまた、資本の增加率がもつと急速であつて、十年間に十億から四十億に增大したとして も、それに應じてまた急速に機械等々が採用され、可變資本の割合は五分の一に減るとすれば、前同樣の計算によつて、勞働者二百萬人のうち四十萬人は「過剩」になるわけだ。

要するに、數字はどうでもよいのであつて、資本主義の發展の法則上、總資本の增加のテンポよりも不變資本の增加のテンポの方が急速である以上、過剩人口は不可避的につくり出されるのだ。

ところが、資本主義はかやうにして絶えず勞働の需要の相對的減少を惹き起して過剩人口をつくり出すだけではない。資本主義の發展はまた、勞働力の需要よりも、勞働力の供給をヨリ急速に增大せしめることによつて過剩人口をつくり出す。

資本主義は、農民大衆をどん〳〵沒落させる。手工業や小商人などをもどん〳〵沒落させる。これらの沒落した大衆は、すべて勞働力を賣らねばならない人間として、卽ち勞働力の供給者として現はれる。更に、資本の集中がずん〳〵進むから、その度每に敗北した資本家企業の勞働者達が失業者として現はれる。そして最後にまた、過剩資本が增大すればするほど、それに應じた失業者および半失業者は增大する。

過剩人口はかくして際限もなく增大する。ところがまたこの過剩人口こそ資本家の利潤稼ぎのためになくてならないものなのだ。喰へない人間がいつも澤山ごろ〳〵してをつて、たゞ喰へさへすればいつでも雇はれるといふ風なことになつてゐなければ、資本家は就業勞働者の賃銀を喰ふや喰はずといふ水準に引下げておくことは出來ないのだ。つまり搾取が出來ないのだ。

私の友人が兵隊に行つたのは或る砲兵隊であつたが、彼はよく、馬を大事にしろと怒鳴られた。さういふ時に將校さんは言つた、――貴樣のやうな兵隊ならハガキ一本でいくらでもやつて來る、馬の方はさうは行かないんだぞ、と。

それと同じやうに、資本家も、勞働者はいくらでもあると思つてゐるし又事實その通りだから、いくらでも搾取することが出來るのだ。彼等は不景氣時代には、過剩人口の壓力を利用して就業勞働者の賃銀をうんと切下げる。そして、好景氣時代に物價がどん〱高くなつて勞働者が苦しまぎれに賃銀値上げを要求する時も、やはり過剩人口の壓力を利用して、要求を蹴る。

資本家階級は、過剩人口といふ尨大な「産業豫備軍」を持つてゐるから、大威張りで勝手なことがやれるのだ。賃銀の問題だけではない。勞働時間も延長出來る。勞働を強烈化することも出來る。一口に言へば、勞働者大衆を自己の奴隷として完全に支配することが出來るのだ。

就業勞働者の勞働時間が延長され、勞働が強化されゝばされるほど、少數の勞働者で事足りるから、就職難は激しくなり、失業者群は増大する。そして、それが増大すればするほど、搾取の

強烈化は容易になる。しかも、資本主義はその發展の法則によつて、絶えずます〱膨大な過剰人口を、勞働豫備隊の大軍を、喰へない人間の巨大集團をつくり出す。

そこでマルクスは言つた。……資本が蓄積されるのに比例して、勞働者の狀態は、――彼がどんな支拂を受けてゐやうと、良く支拂はれやうと、惡く支拂はれやうと――、ます〱劣惡化せざるを得ないのだ。『これは、資本主義的蓄積の、絶對的な、一般的な法則である』。

だが、諸君、――諸君は、大衆のかゝる窮乏化と並んで、他方ではます〱巨大な富が、實に幻想的な巨富が、極く少數の個人の手に所有され蓄積されてゐることを忘れてはいけない。

こんな狀態は永く續くだらうか？　それは訊くだけ野暮だらう。社會の制度は、社會あつてこその制度である。そして社會は、人間あつてこその社會である。もしも社會の制度が、最大多數の人間を喰へなくするやうなことになれば、そんな制度は、勤勞者大衆そのもの、、、、、、、、、、、、、、、、。問題は階級鬪爭を通じて解決される。それによつてのみ解決される。

諸君は、資本蓄積の法則を學ばれた。そして資本集中の必然性を學ばれた。今や更に、大衆の累進的窮乏化と×××の必然性を學ばれた。こゝで、諸君はもう一度、資本論の著名な一節を想ひ出すべきだらう。左に引用する一節は、邦譯「資本論」第一卷第二分册七五六頁に書いてあるのだから、尚ほ同書を繙いてその前後をも熟讀玩味せらるべきである。

『……(資本の)集中、卽ち少數資本家による多數資本家の收奪と並んで、次のやうな一切の事柄も發展してくるのである、——卽ち、勞働行程においては協業の形態はます〳〵大規模になる、科學は意識的に生産技術に應用される、土地の計畫的な利用は進む、勞働手段はたゞ共同的にのみ利用し得べき勞働手段と化す、あらゆる生産機關は結合的社會的な生産機關として使用されてそこに節約が生じてくる、あらゆる國民は世界市場の網の中に捲き入れられる、それと共にまた資本主義もます〳〵國際的な性質を持つ、等、等。そして、これらの變化に伴つて生ずる一切の利益を橫奪獨占するところの大資本家はます〳〵少數となるのだが、それと同時にまた、窮乏、壓迫、隷從、壞頽、搾取、等々はます〳〵增大する。が、それと共にまた、資本主義の生産行程

それ自身の機構によつて訓練され、統合され、組織されるところの、不斷に膨大しつゝある勞働者階級の反抗は增大する。資本獨占は、それと共に且つその下に開花繁榮したところの生產方法にとつて桎梏となる。生產機關の集中と、勞働の社會化とは、その資本主義的外皮と兩立し難い點に達する。資本主義の外皮は××される。資本主義的、、、、、、、、、、、、。、、、收奪される』。

第四講　信用と信用貨幣

一　流通信用と商業手形

以上で、資本主義の發展の法則は大體わかつたから、今度は、資本主義經濟を最もよく特徴づけてゐるやうに見えるところの、信用について研究しよう。この信用なるものは、貨幣の問題とも密接な關係がある。

信用關係は、單純な商品生產社會においても生ずるといふこと、そこから貨幣の支拂手段としての機能が生ずるといふことは、すでに述べてある。更に、信用なるものが、資本主義生產においてどんな役割を演ずるかといふことも、機會ある每に指摘した。

資本主義生產の諸過程から生ずる信用は、流通信用と資本信用とに大別される。先づ流通信用の方から始めよう。

流通信用はまた商業信用とも呼ばれるが、それは要するに前に述べた「掛け賣り」に際して生ずるのであつて、從つてそれは支拂信用であるとも言へる。

資本家は、製造した商品を一刻も早く賣らうとする。しかし、なか／＼さう都合よく運ばないことがある。例へば織物は出來ても、季節の關係で暫く倉庫に積んで置かねばならぬこともあり、また十日も二十日もかけて輸送しないと市場へ屆かないこともある、等々だ。さうすると、それだけのあひだ、彼れの資本は商品形態のまゝで停滯する。從つて、資本の回轉はのろくなり、利潤率は減る。

が、もう一つ資本家にとつて厄介なことが起り得る。といふのは、彼は、その織物を賣つて貨幣を手に入れないと、次の生産に着手するために必要な原料だの何だのが買へないといふことになるだらう。例へば、その買へない物が石炭だとすると、石炭資本家にとつても、それは有難くないことだ。石炭はちやんと掘り出してあるが、織物資本家の織物が賣れないおかげで、石炭を賣つて貨幣に代へることが出來かねる。二つの商品、織物と石炭は、W_1——W_2として向ひ合

つてはゐるが、たゞ貨幣Gが媒介者として現はれないばつかりに、商品の流通も資本の流通も停頓だ。

この場合、織物資本家が石炭をすぐ手に入れようとすれば、何處かから金を借りて來るより外はない。だが、そんなことをすれば利息だけ損をする。

信用は、資本家達のためにこの厄介な問題を解決する。石炭資本家は、織物が賣れるであらうこと、從つて織物資本家が支拂ふであらうことを信頼して、石炭を信用で賣る。そこで商品も流通し、資本も流通する。

流通信用の機能は今や明かだ。それは、資本が商品形態で停滯することから生ずるところの、資本の轉形運動の障碍を取り除く。資本家は、この信用のおかげで、資本の回轉期間を短縮することが出來、且つ他人から金を借りて利息を拂ふことを免れる。また、彼が、もし金を借り出すことが出來るなら、それを生産擴張のために使用し得ることになる。いづれにしても、彼等の大切の利潤を減らさずに濟む。だから、彼等は好んで、信用を利用する。信用は發展する。

信用は、もう一つの副は、客觀的な原因からもます／＼發展する。資本のうちで可變資本は相對的にます／＼減少するが、これは賃銀の形をとるのであるから、信用關係を生じない。信用關係を生じ得るのは不變資本の方だが、この部分はます／＼増大する。

ところで、石炭資本家は、織物資本家に對して石炭を信用で賣るとしても、支拂期日を定めることと、證文をとることは決して忘れない。證文といふ言葉が古臭いといふなら、證書である。この信用證書は、手形と呼ばれる。

手形は二種に大別される。今言つたやうに、支拂信用の關係者が二人だけの場合には、振り出された手形は「約束手形」である。しかし關係者は三人でもあり得るだらう。石炭屋が織物屋に石炭を信用で賣るくらゐだから、織物屋はデパートへ織物を信用で賣ることも出來る。その場合には、織物資本家は、石炭資本家のために、デパートにあてて「爲替手形」を振り出すだらう。デパートはその手形の引受けをする。そして期日が來れば、デパートは直接に石炭屋に支拂ひをし、二つの信用取引が一擧に決濟されることになる。

商業手形は、信用貨幣に轉化し得る。それについては間もなく述べる。

二　資本信用と貨幣資本

今度は、資本信用を說明するのだが、その前提として資本の貨幣形態について述べねばならぬ。

資本は、前例の場合のやうに、商品形態において停滯することがあるが、更に、貨幣形態においても停滯することがある。

資本が貨幣形態において停滯してゐるといふことは、別な言葉で言へば、資本が休息狀態にあるといふことである。もう一つ言ひ換へれば、資本が利潤稼ぎをやめてゐるといふことだ。資本は、G—W—G+gの轉形を首尾よくやりとげて、g卽ち利潤と共に貨幣形態で資本家の手に戾つて來たとしても、その貨幣がそのまゝ資本家の手に止どまつて次の轉形過程を開始することが出來なければ、それは休息狀態にあると言はねばならぬ。ところが、さまざまの事情から、

資本の一部はどうしても休息狀態に置かれることになる。

一、貨幣形態で回收された資本の一部分は、十年なら十年の後に固定資本を更新する目的をもつて積み立てられねばならぬ。かく積立てられた資本は休息狀態にある。

二、流動資本として作用するものゝ一部分もまた絶えず休息狀態にある。例へば資本の回轉期間が九週間であつて、そのうちの六週間は生產のために費され、その製品が賣られるまでに更に三週間を要するとしよう、(この三週間は即ち流通期間)、その際、假りに生產のために一週間當り一萬圓の資本を要するとすると、資本家は生產期間の六週間が終つてから更に資金が回收されるまでの三週間の生產を續行するためには、六萬圓の外になほ三萬圓を前拂ひしなければなるまい。ところがこの三萬圓は第七週の初めからやつと作用を開始するのだから、初めの六週間は休息狀態にある。そして次の資本回轉からは、その三萬圓は、いつも三週間づゝ休息狀態におかれるだらう。

三、賃銀として支拂はれる資本の一部分も同樣だ。假りに、前記六萬圓の半額三萬圓が賃銀であるならば、それは一週五千圓づゝ支拂はれるとしても第二週の初めにはなほ二萬五千圓が休息

状態にあり、第三週の初めに至つてもなほ二萬圓が休息状態にある、等々。

四、最後に、資本家が、實現した剰餘價値を再び資本に轉化して生産を擴張しようとする場合にも、その剰餘價値は暫くのあひだは積立てられて、一定の大きさに達しなければ、機械なりなんなりを買ふわけに行かないから、その期間はやはり休息状態にある。

かやうに、すべての産業資本家は、多かれ少なかれ休息態資本を持つのだが、資本家にとつては、資本が利潤を稼がないほどつまらないことはない。しかも、この休息態資本たるや、各資本家はこれを自分自身の企業に用ひることは出來ないのだ。だから、なんとかしてそれを利用しようとするのには、どうしても誰れか他人に貸附けるより外はない。ところがまた、この資本は全部貨幣形態をとつてゐるのだから、いつでも貸附けることの出來るやうな状態にある。

そんなら、借手はあるか？　大ありだ。しかも産業資本家そのものがとても借りたがつてゐる。元來、資本といふやつは、搾り取つた剰餘價値を貨幣の形態で實現するばかりでなく、搾取作用を開始する時に先づどうしても貨幣の形態をとらなければならないのだ。だから資本主義生産

においては、貨幣を握つてゐるといふことは、單にその等價物たる物を受取る可能性を掴んでゐるだけでなく、更に利潤を獲得する可能性を掴んでゐることになるのであつて、貨幣は今や價値の一般形態であると同時にまた資本の一般形態をなしてゐる。從つて、利潤の追求は、どうしても貨幣形態の資本の追求とならずにはゐない。

ところで、資本家は、みづから貨幣を所有してゐれば申分ないが、しかし必ずしも所有しなくても、一定の期間だけ貨幣を占有してこれを自由に處分することさへ出來れば、剩餘價値の獲得は可能である。即ち、彼等は、貨幣を借入れてこれを資本として使用し、勞働者の生産した商品を販賣して貨幣を回收し、そしてその中から借りたものを返せばよい譯である。

て、一方には、貨幣を、資本として借入れる者がある。他方には、貨幣を、資本として貸附ける者がある。さうすれば、そこに資本信用が生じて來る。

初めは、例へば織物資本家が石炭資本家に對して持つてゐたやうな支拂債務を、第三者が代つて現金で支拂つてやる、といふことから貨幣の貸附は生じてくる。その場合はつまり、織物屋と

石炭屋の信用關係は決濟される代りに、織物屋と第三者との間に貨幣の貸借關係が生ずることになる。この新しい信用關係の成立するのには、貨幣それ自體の授受が必要である。で、資本信用は、貨幣の交付によつて成立する。そこが支拂信用と異なつてゐる。從つてまた機能も異なつて來る。

資本信用において貨幣を貸附ける方は、休息態資本の所有者である。借受ける方は、それを資本として活動させる。だから資本信用の機能は、休息狀態の資本を、活動狀態の資本に轉化することにある。そしてそれによつて、資本の貨幣形態における停滯を除去することにある。

資本は貸附けられて貸附資本となる。貸附資本は、いつも貨幣の形態をとつてゐるから貨幣資本と呼ばれる。それは更に、所有者の手に利子を持ち込んで來る資本だから、利付資本とも呼ばれるのだ。

ところで、その利子であるが、それは前にも言つたやうに、剩餘價値または利潤の中から出る。今度はその點が一層はつきりしたであらう。貸附資本を利用する資本家は、それをもつて利

潤を獲得し、その一部を利子として貸附資本家に渡すのだ。從つてまた、利子の大きさが如何にして定まるかといふこともたやすくわかるだらう。

利子の大小なるものは、先づ貸附資本の大小と比較して考へねばならないが、貸附資本に對する利子の割合は、利子率または利率である。例へば百圓の資本が五圓の利子を生めば利子率は五分であらう。この利子率の最高限度は、社會全體について言へば、平均利潤率であることは明かだ。利子の最大限度が利潤だからである。

むろん個々の場合には、社會の平均利潤率よりももつと高い利子率の生ずることはしば〳〵ある。例へば、平均以上の利潤率をあげる資本家は、高い利子を拂ひ得るだらう。また、反對に、何とかして此際金を借りないことには利潤までもふいになるといつた破目にある資本家ならば、高い利子も我慢するだらう。そんな場合には、貸す方は、危險プレミアムとして高い利子を取り立てる。

が、一般的に言へば、利子率がもし利潤率以上に高まるやうなことがあれば、生産に投ぜられ

てゐる資本の一部が引上げられて、貸附資本として供給されるやうになる。だから、利子率は下つてくる。

それでは、利子率の最低限度はといふと、これは零まで下り得るわけだが、しかしそんなことは滅多にない。

すると、利子率は、最高限度たる平均利潤率と、最低限度の零との間を、騰落變動するわけだ。そしてその騰落は、貸附資本の需要と供給により、貸す資本家達と借りる資本家達との間の競爭によつて、決定される。そこで、一定の時には、需給の一致した點においておのづから社會的な平均利子率が形成されることになる。

この平均利子率は、平均利潤率が低下すればするほど低下する。周知の如く、後進國では利潤率が高いから利子率も高い。資本主義が高度に發展した國では利潤率が低いから利子率も低い。が、そこでまた、各國の間に貸附資本の移動が起り、國際的な平均利子率が成立しようとする。しかも、生産資本よりも貨幣資本の方が國から國への移動が容易だから、國際的な平均利子率は

國際的な平均利潤率よりもたやすく成立する。

さて、貸附資本または貨幣資本は、信用關係の上に成り立つのだが、これがまた誠に妙な資本である。

生産資本は、流通に入る場合、卽ち所有者の手から他人の手へ、他人の手からまた所有者の手へと移りつゝ轉形する場合には、常に貨幣として現はれるかまたは商品として現はれる。資本として現はれることは決してない。資本として現はれるのはたゞ生産の行程卽ち勞働搾取の行程においてのみである。しかるに、貨幣資本はさうでない。これは全く資本として流通に入つてくる。資本家Aが一萬圓の貨幣を資本家Bに貸附け、その貨幣がAの手からBの手に移る——卽ち流通する——とする。この場合の一萬圓の貨幣は、Aにとつても剩餘價値を生む價値であり、Bにとつても剩餘價値を生む價値である。卽ち、どちらにとつてもそれは資本であり　資本として授受される。

しかも、この貨幣資本は、その際、一種の商品になる。一萬圓といふ價値を有するこの商品

は、剰餘價値を生むといふ使用價値を持つてゐる。Bは、さういふ使用價値のある商品を一定期間使用する權利を得、その使用料として、剰餘價値の一部分——即ち利子——をAに支拂ふといふ關係になつてゐる。

そこでまた、この貨幣資本なるものの流通の形態が違つてくる。

産業資本（生産資本）の流通形態は、G——W——G＋g だと言つたが、これをもつと詳しく言ふと、Gは先づ生産手段及勞働力（W）に轉形し、生産行程（P）を經て、製品（W'）に形をかへるのだ。だから、本當は次のやうになる。

G——W……P……W'——G＋g

次に商業資本の流通形態はといふと、これは單に貨幣の商品への轉形（購買）、その同じ商品の貨幣への再轉形（販賣）、といふ二節から成るに過ぎないから、單純に、

G——W——G＋g

である。即ちこれには、全く生産行程といふものがない。從つて商品の姿態も、もとのまゝであ

る。従つてまた、商業資本の利潤も、産業資本に生ずる利潤の一部分を頂戴するものに過ぎない。

それでは、貨幣資本の流通形態はどうか？　これは最も單純で、

G——G+g

に過ぎない。それはさうだらう、貸す者の手から借りる者の手に渡るあひだに、貨幣は商品に轉形されるやうなことはない。まして、生産行程を經るやうなことはない。さういふことはすべて、貨幣資本が流通を了へて借手の手に渡つてからのことである。

貨幣資本は、いつでも貨幣形態をとつてゐる。そのことからして、二つのことが生じてくる。

第一、貨幣資本は、産業資本や商業資本のやうに商品や生産手段の形態をとることがなく、いつでも貨幣の形態を具へてゐるのだから、物を買はねばならぬ時、支拂ひをせねばならぬ時に、すぐさま役に立つ。この資本はつまり、常に出動準備の出來てゐる資本であり、戰鬪準備の出來てゐる資本である。誠に重寶だ。そこで、この貨幣資本の所有者は、自らは生産と全く沒交渉であ

るに拘らず、そんな重要な物を握つてゐるのだから大威張りだ。場合によつては、らく／＼と借手の死命を制することが出來る。そこで、資本主義生産の發展と共に信用がます／＼發展し、しかも貨幣資本が銀行の手に集中されて巨額のものになるのにつれて、貨幣資本は大變な勢力を持つやうになる。

第二、貨幣資本は、たゞ貨幣の形態を持つだけだのに、それでゐて間違ひなく剩餘價値の一部(利子)を頂戴する。そこで、資本主義社會では、一般に、貨幣を所有することは、剩餘價値の一部を頂戴する權利、利子を取る權利を持つことだと見做すやうになる。だから、商人は、資本家は、會社は、借りた金ではなく自分の金に對してまで利息勘定をする！

昔へさかのぼつて言へば、貨幣の流通及び退藏が始まると殆ど同時に、貨幣資本は發生した。即ち、貸附資本は、資本主義以前からあつた。しかし、それは高利貸資本といふものであつて、今日の貸附資本と貨幣資本とは性質の違つたものである。

昔の高利貸資本は、古い型の貨幣退藏から生じ、農民や手工業者の經濟的弱みや窮乏につけ込

んで、彼等を搾取した。乃至はまた、放逸贅澤な封建領主への貸附を通じて、間接に農民その他を搾取した。しかるに、今日の貨幣資本―貸附資本は、産業資本家を通じてプロレタリアを搾取する。

昔は、金を借りる者、高利貸資本の厄介になる者は、封建領主なんかでない限り、たいがい、不幸や災害を蒙つた者だつた。しかるに、今日、金を借りる資本家、貨幣資本を利用する資本家は、搾取擴大の手段を獲得し、生産擴張の手段を獲得する。だから、それを與へるところの資本信用はます〳〵發展し、從つて貨幣資本も發展する。

今日でも、農民、手工業者、小商人などの大衆が殘存する以上、高利貸資本も殘存し、横行する。しかし、社會全體として見れば、それはすでに近代的な貨幣資本―貸附資本の勢力に壓倒され、その支配下に立つてゐる。だから、二つを混同してはならないのだ。

三　銀行

今日の資本主義社會においては、貨幣資本は實に尨大な額にのぼつてゐる。そしてその大部分のものが銀行の手にあることは誰でも知つてゐる。

銀行の手にある貨幣資本は、大體、銀行自身の資本（即ち資本金や積立金）と、預金とから成る。

今までのところ、吾々は、資本の貸借は、産業資本家同士が直接にやつてゐるものと假定した。たしかに彼等は、一方に、自己の企業に使用し難い休息態資本を持ち、それを他の資本家に貸したがつてゐると同時に、また他方では、他の資本家の手にある休息態資本を借入れて、生産を擴張し、搾取を擴大したがつてゐる。そこで、資本信用が成立してくるわけである。

けれども、こゝに例へば、或る資本家が急に新式機械を買はねばならなくなつて一定額の貨幣を必要としても、恰度それだけの金額を、恰度必要な期間だけ貸してくれる他の産業資本家を見つけることは、なかなか容易でない。逆にまた、一定の期間休息してゐる一定額の資本を持つ方の側としても、恰度それだけの金額を、恰度それだけの期間借りようといふ確實な相手を探し出

すのは大變だ。それにまた、多額の現金を常に手許に保管しておくといふことも餘り感心したことでない。彼等としては、どこか安全な、そして利息まで附けてくれるやうな特別の保管者があれば願つたり叶つたりだらう。

かういふ譯で、個々の資本家の間の直接の貸借、直接の信用なるものは、いろんな障碍にぶつかるのだ。そこで、信用の發展と共に、かゝる障碍を除去するための特別の施設が生れて來た。それが銀行である。

銀行は、先づ自己の資本をもつて金貸商賣を始める。さうするとそこへ預金も集まつてくる。産業資本家は、自己の休息貨幣資本を、直接にみづから他の者に融通する代りに一まづ銀行に預け入れる。彼等は、先づ銀行に信用を與へ、銀行に貸す。

資本家達は、最早やお互ひに借手と貸手を探し合はなくてもよいことになる。銀行は、すべての貸手と借手との間の媒介者たる機能を營むことになる。銀行が、受け且つ與へる信用の大部分は、本來産業資本家または商業資本家それ自身が互ひに受け且つ與へんと欲する信用である。卽

ちそれは本質において資本信用たる性質を持つ。資本信用が銀行によつて與へられる時、それは銀行信用と呼ばれるのだ。

マルクスは、右の如き銀行の一般的機能を、次のやうな言葉で鋭く言ひ現はしてゐる。

『銀行は、實際の貸手と實際の借手のあひだに入込んで仲介者となる。一般的に言へば、此の方面の銀行業務は、貸附けられ得る資本をば、尨大な額において銀行の手に集中することに存し、かくして個々の貸手ではなしに銀行が、貸手全體の代表者の資格で、産業資本家および商業資本家の面前に現はれる。銀行は、貨幣資本の總支配人となる。一方、銀行は、すべての貸手に對して、借手側を集中し、全實業界のために借入れる。銀行は一面では貨幣資本の貸手の集中を、他面ではその借手の集中を代表する』。

銀行は、貸す金に對しては利子を取立てるが、借りる金即ち預金に對しても利子を拂つてゐる。銀行は、もちろん、拂ふ利子よりも、取る利子の方を大きくして商賣をする。その差額は銀行の利潤になる。ヨリ正確に言へば、それは銀行信用利潤である、銀行資本に對する銀行利潤の

割合は、銀行利潤率であるわけだが、この利潤率は一般的な平均利潤率に近いものになる。それよりも低ければ、銀行資本家は自己の資本を銀行から引上げて産業に投ずるし、反對にあまり高ければ、銀行が澤山出來すぎるだらうから銀行利潤率も低下する。

さて、銀行の預金には、いつでも隨意に引出すといふ約束でするところの當座預金と、一定の期間引出さないといふ約束でする定期預金とがあることは御承知の通りである。定期預金の方は、この約束があるので、利子が高い。尤も、引出さないと約束したからといつて利息の損をさへ忍べばいつでも引出せるのだが、しかし商品および資本の流通が「順調」に進んでゐる限り、定期預金に關する約束は大體守られるし、また當座預金にしたところで、その全部が一時に引出されるやうなことはない。

そこで銀行は、預金の引出しに應ずるために準備すべき金額——預金準備金——の大きさを、經驗によつて、知り得る譯である。それは預金總額の何分の一かで足る。銀行は、それだけのものを手許に殘し、その他はすべて貸附けることが出來るのだ。

かくして、社會全體の資本のうちで休息狀態にあるものは非常に少くなつて來る。休息狀態にある資本は、これを貨幣として見れば退藏された貨幣である。卽ち、退藏貨幣の數量が非常に減つてしまふのだ。吾々は前に、商品生產社會が發展して高度のものになればなるほど、退藏貨幣は大量的に銀行へ流れ込んでそこに集中され、商品流通のために必要な最低限にまで縮小されると言つたことを、諸君は記憶されるだらう。これを別な言葉で言へば、銀行は、休息態資本を吸收し、集中し、且つ配布することによつて、その現實の大きさをば、社會全體の資本流通の續行のために必要な最低限にまで縮小する。これも銀行の營む社會的機能の一つである。

銀行は、更に、當座預金をする者に、小切手帳を渡す。預金者は、――預金の範圍内で――その小切手に一定の金額を記入し、署名して、支拂をしようと思ふ相手に渡してやる。小切手を受取つた者は、それを銀行に差出して金額だけの貨幣を受取ることが出來る。この相手の方も、同じ銀行に當座預金勘定を持つてゐるならば、彼は小切手を受取る代りに、その金額を自分の勘定に繰入れて貰ふだらう。こんな風にして多數の支拂は單なる振替によつて濟まされることにな

る。資本家達の預金してゐる銀行は別々であつても、銀行同士が相互の諒解の上で小切手を支拂つておいて一定の期日に精算することにすれば、同樣の振替が可能になる。銀行はかうした關係においては、預金者即ち資本家達の出納係の役をする。

もう一つ、銀行はとても大きな仕事をする。銀行は、單に資本家達から預金をかき集めて來るばかりでなく、農民や手工業者や小商人や、場合によつては勞働者からさへも、預金をかき集める。そして、その金を資本家達に貸し與へて搾取の手段たらしめる。かうした大衆の預金は、謂はゞ彼等のへそくり金である。それは、彼等が裸身であり資本家ではないが故に、單なる生活のための生存のために貯へねばならぬ血の出るやうな金である。資本主義社會が發展すればするほど、金のある資本家はそれを成るたけ貯へておかずに資本として活動させて利潤を生ませようとするのだが、金のない者は生活の脅威からますます身を削つても貯へを持つ必要に迫られる。

ちよつと考へると、彼等大衆の預金にも利息が付くのだから、彼等もまた資本家のはしくれかなにかのやうに見えるかも知れないが、それは單なる外觀であり、しかもまことに僞瞞され易い

外觀である。資本家の手に入る利潤や利子は、彼等の贅澤な全生活を可能ならしめるばかりでなく、彼等の支配力の源泉をなす。しかるに、大衆がその預金に對して受取る利子なるものは、彼等の奴隷的な生活費のそのまた何十分の一にも足らないほどなさけないおこぼれだ。

利子の方はさうだが、しかし、大衆の貯蓄の方は、一人づゝの分はお話にならぬほど僅かでも何十何千萬人といふ大勢だから、銀行の手にかき集められていつしよになると巨大な金額になる。銀行は、それを資本に轉化することによつて、自己及び産業資本の勢力を著しく増大させる。大衆は、自己のへそくり金を銀行に預金することによつて、資本家達の搾取擴大の手段を提供し、資本家達に奉仕する。日本では、大藏省の預金部も、郵便貯金を通じて大衆のへそくり金をかき集め、それをいろんな方法で資本家の御用に供してゐる。

銀行が借りる金、預金のことはそれ位にして貸す金はどんな風に貸すか？

これも、主要なものだけを言へば、先づ第一に手形割引である。前にあげた例においては、織物資本家が石炭資本家にあて、約束手形を振り出したことになつてゐた。石炭資本家は、手形の

期限前に貨幣を手に入れる必要に迫られることがある。彼は、銀行へ手形を持つて行つて割引してくれといふ。銀行はオーライで、當日から期限までの期間の利子をお先きに頂戴して現金を渡す。手形の額面金額は一萬圓で、期限まで十六日間、日歩は三錢であるならば、銀行は四十八圓取る。そして殘りの九千九百五十二圓を石炭屋さんに渡すだらう。この場合には、手形は割引されたといふ。そして表面上は、銀行が手形を買つたことになる。といふのは、滿期日に手形を取立てる權利が銀行に移るからである。だが、事實においては、信用が移轉され、今度は銀行が織物屋さんに一萬圓の金を貸したことになる。

商業手形の割引によつて銀行が與へる信用は極く短期のものに限られる。もつと長期の信用を與へる際には、銀行はがつちりした擔保を取る。貸附の擔保として最も多く用ひられるのは、株券、社債、公債、債券等の有價證券である。商業手形それ自體が擔保に用ひられることもある。

それから、商品が擔保になることもある。その場合には、銀行は、質屋が羽織や時計を藏に預かるやうな具合に、資本家の商品を預かる譯ではない。資本家は商品を倉庫に入れ、倉庫から預

り證を取る。銀行はこの倉庫證券をさへ渡して貰へば貸す。同樣に、船でも鐵道でも、積荷證券を資本家に渡すから、資本家はそれを銀行に提供して借り出すことも出來るのだ。この場合には輸送中の商品が擔保になる。

最後に、土地・建物等の不動產も擔保になる。資本主義の發展と共に資本構成は高度化し、固定資本が大きなものになればなるほど、長期の信用は增加する。そして、工場、機械、船舶等々の固定資本が擔保の役をする。資本家達が銀行から借りた金を流動資本として使用せずに、固定資本たらしめる場合には、固定資本信用が生ずるのだ。これはますます多くなつて來た。

右の如き貸附の外にも、銀行はさまざまな特殊の業務を營んでゐる。資本家のために資金を輸送してやつて手數料を取ることもその一つである。もう一つ比較的最近に發展した銀行業務で重要なのは、謂はゆる發行業務である。これは銀行が會社の株券の發行や社債の發行に關係して、手數料を取つたり、乃至はまた「發起利得」なるものをものにしたりすることだ。

最後に、銀行は國家及び地方團體の公債發行に關係する。彼は、それによつて利得を得るのみ

でなく、また政府に對して特殊の勢力を持つやうになる。

四　信用貨幣

君によつて、諸君は、信用の媒介者として發生してきた銀行なるもの、一般概念を得られた譯だが、その前にすでに諸君は、信用取引なるものが現金支拂に代り得ること、およびその信用取引の結果として商業手形なるものが生ずることを知つてゐられる。

この商業手形は、吾々の前例においては織物資本家が振出したことになつてゐた。その場合、彼は、石炭を信用で買ひ、石炭資本家に對して石炭代金一萬圓の債務を持つてゐたのだから、彼れの振出した約束手形は一の債務證書であつた。そして、この債務證書を受取つた石炭資本家は織物資本家に對して一萬圓の債務請求權を持つてゐる譯である。

ところで、石炭資本家は、いま、一萬圓の機械を買つたとする。彼は、その支拂を、現金でする代りに、織物資本家に對する一萬圓の債務請求權を、機械製作所の手に移轉することが出來る

だらう。その手續は簡單である。彼は、たゞ織物資本家から受取つた約束手形に裏書きをして、機械製作所に渡せばよい。

一萬圓の約束手形は再び流通する。しかし、今度は前と趣きが違つてゐる。前に、織物資本家から石炭資本家の手に渡つた時のそれは、單なる信用證券であり、債務證書であり、借金の證文に過ぎなかつた。支拂期日には織物資本家は支拂をしなければならぬ。その時初めて貨幣が支拂手段として現はれてくる。しかるに今度の場合は、さうではない。石炭資本家は、機械製作所に對して自分は何月何日に支拂ひをするといふ證文を與へたのではない。その日に支拂ひをするのは、織物資本家の方である。石炭屋に對する債務は、織物資本家の肩に移されたのだが、それと共に、石炭資本家は、機械なる商品を買ひ取つたのだ。從つてその際に、商品と取りかへられた一萬圓の約束手形は、貨幣の代りをしたことは明かだ。

かゝる場合における約束手形は、もし即時に機械と引かへに渡されるならば、購買手段（流通手段）たる貨幣の代りをするだらう。またもし、機械の交附よりも後れて渡されるならば、支拂

手段たる貨幣の代りをするだらう。

かくして、信用から發生した商業手段は、更に貨幣の代用物として貨幣の役を演ずるやうになる。それが信用貨幣である。

例の一萬圓の約束手形は、更に、機械製作所から製鐵所へ、製鐵所から電力會社へ、といふ風に、手形の滿期日までは、何回でも貨幣に代つて流通することが出來るだらう。

同じことは小切手においても生ずる。小切手の場合はたゞ、滿期日に支拂ひをする者が銀行である點が違ふだけのものである。だから、小切手も信用貨幣となることが出來る。

だが、商業手形も、小切手も、信用貨幣としてはあまり便利なものではない。第一、振出人の信用を確めるのが厄介だ。第二、額面金額も、大き過ぎたり、小さ過ぎたり、端數があつたりして面倒だ。第三、何しろ支拂期日までのことだから、流通期間も長くない。だから、これらの信用貨幣は、たゞ限られた範圍内で流通し、一般流通界へは入つて來ない。

ところが、こゝに銀行券また兌換券といふものがある。諸君のおなじみの「紙幣」である。そ

してこれが、最も發達した、最も一般的な、信用貨幣である。だが、信用貨幣たることに變りはない。

現在、日本銀行の發行してゐる紙幣、卽ち銀行券は、銀行券としてもまた最も發達した種類のものであるために、却つてその正體がつかみ惡くなつてゐる。だから、もつと單純な銀行券から始めるとよくわかる。そこで諸君は先づ、銀行券、お紙幣なるものは、元來は、どんな銀行でも出すことが出來るので、必ずしも特別の銀行——例へば中央銀行——が出すとは限らないものだといふことを知つておく必要がある。それは、理論的に言つても、歷史的に言つてもさうである。現に、日本でも初めは幾つかの銀行がお紙幣を出してゐたのだし、米國などでは前にいろんな銀行の出したいろんな紙幣が今でも流通する。

諸君は、すでに、資本家が商品の代金を拂ふのに、現金を渡す代りに小切手を渡すことが出來るといふことを知つてゐる。その場合の資本家は、相手に向つて、私は銀行に貸してある金——預金——があるから、現金は銀行の方で受取つてくれ、と言つてゐるのである。それと同じやう

なことは銀行だつて出來る譯だらう。銀行は、手形を買つたり、擔保を取つて貸附をしたりする場合に、相手に向つて言へるだらう、――取り敢へず金額だけの銀行券を差上げておくが、金貨が御入用ならいつなんどきでもこれと引換へにお渡しする、と。資本家の方は、銀行は大丈夫金貨を持つてゐると信頼する以上、銀行券を受取るだらう。

銀行は、手形割引や貸附によつて相手に信用を與へるが、さて約束の金額の貨幣を渡すといふ段になると、その點については相手から信用を受け、そして信用を受けたしるしとして銀行券を渡すのだ。だから、銀行券は、信用證書の一種に過ぎない。

銀行から銀行券を受取る者は、まづ信用證書としてそれを受取るのだ。が、まづ信用證書として受取られた商業手形や小切手が再流通して貨幣の代りをするくらゐだから、銀行券も轉々と再流通して貨幣の代りをする。信用證券の一種としての銀行券の特徴は、第一、無記名であること、第二、支拂期日の指定がなく、いつでも金貨に換へ得ること、第三、額面の金額が例へば一圓、五圓、十圓といつた風で端數がないこと、第四、相手が銀行だけに信用が大なることであ

る。だから銀行券は、一般流通界にも入込んで貨幣の代りをする。何よりも先づそれは、流通手段たる機能を貨幣に代つて營むし、更に銀行に對する信用が動搖しない限り、支拂手段たる機能をも貨幣に代つて營むことになる。

銀行券は、金貨と取り換へられるまでのあひだ手から手へと渡り歩くことが出來るのだが、むろんそれ自身としては無價値同樣の紙片である。從つて、それが流通するのは、信用の表章として流通するのだから、その根柢をなすものは信用だ。そして信用の根柢には更に、立派な金屬肉體を持つた正銘の貨幣が頑張つてゐなければならぬ。貨幣が營む幾つかの機能のうちの或るものは、無價値の紙片によつても代理せられ得るものだといふことは、諸君にはすでに研究ずみである。

銀行券およびそれを出した銀行に對する信頼または信用は、どうして維持せられるか？　それは、金貨との引換へ――卽ち兌換――の要求に應じ得るだけの準備金によつて維持されてゐる。銀行は、かゝる準備金として、まづ第一に金地金または金貨を持つ。第二には、有價證券や商業手形などを持つ。この第二のものは、金地金や金貨に轉化され得るといふ意味においてのみ、準

備の一部をなすだけのことだから、金地金や金貨ほど確實なものでないことは勿論だ。恐慌期その他の動亂の時期においては特にさうである。

だが、普通の時期においては、銀行券は一度銀行から出ると流通してなかなか銀行へ戻つて來ない。銀行券の所有者達がすべて一時に兌換を要求するやうなことはない。だから、銀行は、發行した銀行券の總額に等しい準備金を持つ必要はない。そして實際上その何分の一で足るかといふことは、經驗によつて決定出來る。そこで銀行は、準備金なしに發行する銀行券の部分からは、大きな利得を引出すことになる。何故といつて、――銀行はその銀行券を貸附等々に用ひて利子を取るのだが、およそ銀行券なるものは預金とは違つて利子を拂ふ必要はないのだし、高が紙片を印刷したものに過ぎないのだ。だから、取る利子は丸儲けといふことになる。

信用の發展に基づいて銀行券がひろく流通するやうになると、例の如く國家が出動して技術的な役割を引受ける。ブルヂョア國家は、銀行券が故障なく流通するやうに、いろいろと法律で規定する。例へば、銀行券の種類を一定し、額面の金額を貨幣本位に準據せしめる。また、銀行

が、その實際の兌換能力以上に銀行券を發行しないやう、過度の發行によつて經濟の混亂を惹起したりしないやうに、(一)銀行券の發行高と準備金との割合を法定する。(二)銀行券の發行は、一つの特許銀行、または二三の特許銀行の特權たらしめる。(三)その代り、銀行券の發行から生ずる利得の一部分を國家に納めさせる、等。

かゝる特許銀行は、いはゆる發券銀行と呼ばれる。それは、「銀行の銀行」になり、「中央銀行」になる場合が多い。とにかく、それは特殊銀行である。

尚ほ、諸君の注意を要することは、ブルヂョア權力は盛んにこの發券銀行を利用するといふことである。第一には、諸君御承知の通り、國家財政に利用する。例へば、國債を引受ける義務を負はせる、等。第二には、謂はゆる金利政策などを通じて經濟を統制しようと試みる。第三、爲替銀行その他の特殊銀行に對して、特別の援助を與へさせる。第四、恐慌などに際しては、資本家救濟の機關たらしめる、等、等。そしてこれらの目的遂行のために、發券銀行を半官半民の銀行たらしめる。かうした點では、諸君の日本銀行などは代表的なものである。

だが、發券銀行がいかに半官銀行であらうと、また全官銀行であらうと、單にそのことのために、銀行券の信用貨幣たる性質は少しも變化するものではない。

五　信用の役割

第四篇の締めくゝりとして、資本主義生産における信用の役割を一通りに述べておかう。

信用は、流通部面においては、流通に要する諸費用の節約を結果する。なぜなら、(一)取引の大部分は信用取引になり、それが相殺される限り、また信用貨幣が金貨に代つて流通する限り、金貨そのものゝ流通は省かれる。(二)流通手段の流通速度が高められる。(三)資本の回轉が早められる。(四)種々なる準備積立金が少量で足るやうになる。言ひ換へれば、退藏貨幣と休息態資本とが減少する。

次に、信用は、利潤率の均等化を促進する。利潤率の均等化は諸々の産業部門の間の資本の流出入が容易であればあるほど、速かに實現される譯だが、信用はかゝる移動を容易ならしめると

いふことは明かだらう。

が、同時に一方、信用は商業上の投機を促進し、且つ過剰生産を促進する。これは、前講において、恐慌を論じた際に述べておいた通りである。

更にまた、信用は、生産の擴張を容易にし、勞働の生産力を急速に増大させ、世界市場の形成を促進する。かくして信用は、生産をますく社會的ならしめると同時にまた他方では、富の所有、生産手段の所有をますく少數の私個人の手に集中せしめ、加速度的に利子衣食者層をつくり出し、投機や欺瞞的要素を増大させて、所有の私的性質を極端にまで押進める槓杆の役をなする。一口に言へば、資本主義の内在矛盾を尖鋭化する。

信用の發展から直接に株式會社といふ企業形態が生じてくる。そして、産業企業も、商業企業も、銀行企業も、主要なものはすべて此の形態をとるやうになる。

株式會社の成立と共に、資本家は株式資本家になる。株式資本家は一種の貨幣資本家である。彼等は完全に生産行程から離れてしまふ。たとひ株式會社形態でも、産業企業における生産資本

はむろん利潤をつくり出すのだが、その利潤は配當として株主の間に分配される。株劵は、配當といふ利得を得る權利として賣買され、配當の大小に準じて價格を持つ。その價格は、大體、$\frac{\text{配當金額}}{\text{平均利子率}}$に等しい。從つて、株劵の所有者即ち株式資本家の受取る配當は、大體において、平均利子に相當するものとなる。そこで、前には等量の資本に對しては「等量の利潤」であつたものが「等量の利子」に變つてくる。資本家は利子衣食者に轉化する。一會社の株劵總體に投ぜられる金額は、原則として、その會社の生産資本の總額よりも大きい。しかも前者も資本と見做される。それは擬制資本である。

資本家企業は株式會社形態をとると、資本を集めることが容易になる。また、銀行などから信用を受けることも容易になる。從つて株式會社は、資本の集積を著しく促進する。

株式會社が發達すると、資本の支配はます／＼少數者の手に集中されてくる。例へば、一千萬圓の資本を有する者は、會社の大株主として、また重役として、五、六千萬圓の資本を支配し得るだらう。更に、姉妹會社だの、子會社だのをつくることによつて、そのまた何倍かの資本を支

配し得るだらう。

前に述べた理由により、また株式會社の發展によつて、資本の集積・集中が進むといふと、獨占が生じてくる。一の産業部門にたつた一つの巨大企業しかないといふ所まで進まなくても五つとか十とかの大企業だけになつてしまへば、お互ひに協定して販賣價格を高めたり、いろ〳〵やるやうになつてくる。即ち、カルテルやシンジケートの形態における獨占が生じてくる。乃至はまたトラストの形態において、會社と會社との間に公然または祕密の合同が行はれて尨大な勢力にまで結成され、生産物の七割も八割も獨占するやうになる。更にまた、巨大資本家は、種々なる獨占的大企業を結合してコンツェルンを形成する。

産業企業が集中し獨占化するのと同時に、銀行も集中し獨占化する。銀行資本は、生産技術上の制限がないから、非常に集中が容易である。そこで、四つか五つの巨大銀行が、否しば〳〵二つか三つの巨大なやつが、一國の貨幣資本總體の大部分を獨占し支配する。

かうした大銀行の資本は、獨占化した産業企業等々に貸附けられてある。しかもその貸附たる

や、多くは前に述べた固定資本信用の形をとつてゐる。從つて、銀行資本は今や産業資本と融合し、銀行と産業企業との利害關係は緊密になる。かやうに、産業資本と銀行資本との融合によつて生ずる獨占的巨大資本は即ち金融資本である。そしてこの金融資本は、ほんの一握りほどの巨大資本家の支配下にある。

獨占の段階、金融資本の段階は、即ち帝國主義の段階である。この段階において、資本主義に内在する一切の矛盾と對立とは、、、、、、、、、、、、。今や、帝國主義世界戰爭は××となり、世界は、、、、、、、、、、と同時に一方、資本主義は爛熟し、腐朽する。そしてその胎内には、、、、、、、、、、、、、、、、、、ゐる。

第二篇　金の經濟學

第五講　金本位制と兌換券

一　金本位制の意義

金本位制とは、言ふ迄もなく、一の貨幣制度を指してゐる。この金本位制なるものについては、諸君は實は第一篇においてすでに一通りその概念を把握してしまつてゐるのである。

諸君は、先づ、第一篇の第二講において價値の尺度および價格の標準たる貨幣の機能を論じた時のことを思ひ出して見られるがよい。その際に吾々は、國家は價値の尺度たる機能を營む貨幣商品金の一定量を貨幣の本位として定めるやうになる、といふことを明かにした。さやうに定めた場合には、その國は、正式に貨幣制度として金本位制を採用した譯である。で、吾々はまたその際に、日本においては貨幣の本位は如何に定められ、貨幣名は何であるかといふやうなことも、一通り説明しておいたのだ。

て、或る一國が金本位制を採つてゐるといふことは、その國の貨幣本位は金の一定量であること、その一定量は價格の標準をなすこと、就中その國では金が價値の尺度たる機能を營むことを意味してゐる。これが、金本位なるものの本質的な意味である。

諸君は、次に、金は世界貨幣であることを思ひ出さねばならぬ。

金が世界貨幣であるといふことは、金こそ世界共通の價値尺度であり、金こそ世界共通の一般的購買手段であり、一般的支拂手段であるといふことである。從つて、或る一國が金本位制を採用し、金を貨幣として持つといふことは、取りも直さず世界共通の價値尺度、購買手段、支拂手段を持つ、といふことだ。この點は、金本位制の作用を理解する上に非常に大切な點である。

といふのは、商品及び資本の世界市場がすでに成立した以上、各國の經濟は、世界經濟なる一全體の、一成分をなし、一環をなすのであつて、各國はもはや孤立經濟を營むことは出來ず、強ひて營まうとすれば恐ろしい故障と混亂が生じてくる。從つて、各國もまた、どうしても世界共通の價値尺度・購買手段・支拂手段たる金を貨幣として持たねばならないといふ事情になつてる

る。

これを別な言葉でいふと、金本位制なるものは、決して一國が勝手に、採用してゐるのではない。採用せざるを得ないから採用してゐるのだ。現在でも未だ金本位制を採用してゐない國があるとすれば、それはいづれも後進國乃至は半植民地國であつて、しかもみな金本位制を採用せざるを得ないことを知りつゝも種々なる故障の爲めに實行がおくれてゐるだけのことである。現にそれらの諸國は金本位制を採用してゐないために大變な損害を蒙つてゐる。

かういふ譯だから、また、一國が勝手に金本位制を廢棄して他の貨幣制度に移るなどといふことは、絶對に不可能だ。そんなら、すべての資本主義國が相談の上でさういふことがやれるかといふと、これも絶對に不可能だ。何故かといふに、――

第一、金が貨幣となり、世界貨幣となつたのは、一の自然法的な社會的過程に基くので、個々人の意思や權力者の意思に基くのではない。そも／＼貨幣なるものは一の必然的な産物として出現したのであつて、その出現を必然ならしめたものは商品生産社會＝資本主義社會の内在矛盾そ

のものである。この矛盾があるために、特定の商品が貨幣として一定の機能を營まなければならないのだ。しかし、その一定の機能を營み得る商品には自から限りがある。そして商品金こそはかゝる機能を營む唯一の適任者であるが故に貨幣となり、世界貨幣となつたのだ。それらのことは、第一講から第二講にかけて詳細に述べてある。

だから、資本主義世界においては、どんな偉い資本家やブルヂョア政治家が各國から寄り集つてどんなに仲よく相談してみたところで、金が貨幣たることを止めさせることなどは出來るものでない。もしも、それ自身社會的勞働時間を含むことによつて價値を持ち、その上にまた一切の商品の一般的等價物として「價値の化身」であり、「一般的富」であり得るやうな商品が、金以外にあれば別物だ。しかし、あひにく金以外にはない。だから、資本主義社會と、その內在矛盾とが存在する限り、金はどうしても貨幣である。

第二、同じ內在矛盾の一つの現はれとして、世界經濟の一環であるところの各資本主義國は猛烈に對立し鬪爭しつゝある。從つて各國は、現に世界貨幣であり一般的富であるところの、金の

爭奪に夢中になりこそすれ、金本位制の廢棄について本氣で仲よく相談するなどといふことは決してあり得るものではない。

　だが、さういふ事情でありながら、――金本位制といふものはどうも厄介なものだ、こんなものは廢止した方がいゝ、といふやうなことも近來頻りに言はれてゐる。この問題に對してはあとでまた觸れる機會を持つであらうが、大體、さういふことが言はれるのは、金本位制の維持が困難になつてきたからであることは明かだ。けれども、それは別に不思議とするに足らないだらう。金本位制なるものがそも〳〵資本主義社會の内在矛盾の産物である以上、その矛盾が激化して資本主義制度そのものがたぴッしやになつてくれば、金本位制もぐら〳〵するのは當り前のことである。

　以前は、金本位制なるものは、銀本位制や金銀複本位制などとの比較においてよく問題にされたものである。

　今日では、もはや金銀複本位制を採つてゐる國などはないと言つてよい。この貨幣制度は、金

銀といふ價値の異なる二つの金屬をば、元來一つであるべき價値尺度に用ひるのだから、そのこと自身に矛盾がある。一國の政府が金と銀との比價を法律で定めても、金銀の現實の價値は絶えず變動する。だから、法定比價は絶えず現實の比價と衝突し、價格の混亂その他を惹き起した。それはさうだらう、現實の價値が法律で定められた割合以上に出てゐる方の金屬は、地金にした方が割がいゝから、流通から引上げられ、鑄潰され、輸出される。そして諸商品の價格は、いつも、現實の價値が法定比價以下にある金屬によつて表現されることになる。つまり、實際には金銀交互本位制といつたことになり、たゞごた／＼の起るのが厄介だといふだけのことになる。この金銀複本位制なるものは、銀本位制から金本位制への過渡期の現象であつたといへるのだ。

　個々の國においてはもう金銀複本位制などはないが、しかし世界市場について見れば、今日と雖もなほ金と銀と二つの價値尺度が存在することは前に述べた通りである。もつとも、今日銀本位制を採つてゐるのは支那その他一二の小國だけである。以前は金銀の比價はおよそ十五對一の割合で長いこと安定してゐたこともあつたが、十九世紀末に銀價が激しい變動を見せて以來、銀

は加速度的に貨幣の地位から滑り落ちた。最近における銀價の變動はまた特に甚だしい、銀本位制の方はその通りだが、金本位制そのもの、方にもまた、近來は、いろんなことが起つてゐる。「金本位制の動搖」だの、「金本位の停止」だのといろ〳〵言はれてゐる。また事實において、一昨年から本年にかけて、英國、日本をはじめ二十數ヶ國が公式または非公式に「金本位停止」をやつた。どうやらまだ無事である國はアメリカとフランスだけしかない。

この「金本位停止」といふ近頃盛んに用ひられる言葉は、誤解をひき起し易い言葉であつて、それについては間もなく述べるが、しかしとにかく金本位制をとる國は殆どすべて兌換制度を持ち、金の輸出入の自由を原則としてゐるのだから、今やその兌換を停止し、金の輸出を禁止するといふことは、國内的にも世界的にも、ブルヂョア貨幣制度の異常な混亂を意味するのだ。これはたしかに分析究明に値ひする問題である。

吾々は、順を逐うてその分析究明を進めることとし、先づ金本位制と兌換券流通との關係を明かにすることから始めよう。

二　日本の制度

こゝで一通り日本の制度について知つておく必要がある。

明治維新後しばらくの間、日本の貨幣制度は非常な混亂に陷つてゐた。明治二年に銀本位制を採用した新政府は、明治四年にそれを金本位制に改め、明治十一年からは金銀複本位制になり、明治十九年には再び事實上の銀本位制に逆戻りするといつた有様であつた。そんな有様だつたから、流通する貨幣即ち「通貨」も、まるで滅茶苦茶だつた。いろんな金貨や銀貨と並んで、政府の發行した紙幣も流通し、多數の「國立銀行」が發行した銀行券も流通し、地方的には藩紙幣なんてものも流通した。政府の紙幣は不換紙幣として濫發されたから、明治十三、四年頃には平均して銀一圓は紙幣一圓五十錢乃至一圓八十錢に當るといふやうなことになつた。この貨幣混亂のために、農民大衆は猛烈に收奪された。

第一の改革は、兌換券發行を獨占する特許銀行として日本銀行を設立することだつた。そして、

それと共に、政府は不換紙幣の銷却を始め、やがて政府紙幣および不換紙幣化した銀行券の兌換を開始して、日本銀行をして兌換の任に當らせた。が、これら兩種の紙幣の通用を全く禁止することの出來たのは、やうやく明治三十二年末のことだつた。

が、同時に一方、銀價値の變動と下落とのために、爲替相場の動搖および物價の騰貴が甚だしく、銀本位制はます〳〵維持し難くなつて來た。そこで、日本ブルヂョアジーは、日清戰爭によつて支那から償金として取つた二億五千萬兩の金を金準備に充てゝ、金本位制を採ることにした。

それは明治三十年のことである。この明治三十年の貨幣法の諸規定は、補助貨幣に關する僅かの改正を除けば、すべて今日に及んでゐる。

貨幣法の實施後およそ一年の間に金貨と銀貨との引換へが行はれた。當時鑄造された金貨は約七千五百萬圓であつた。金貨と引換へその他の方法によつて引上げられた銀貨及び銀地金の總額も約七千五百萬圓であつた。そのうちの二千七百餘萬圓は補助貨の鑄造に充てられ、約七百萬圓は植民地へ送られ、殘る四千萬圓餘は外國へ賣却された。

最初は、兌換券と並んで金貨も少しは流通したけれども、間もなく兌換券に取つて代られた。

兌換券發行に關する現行規定の要點は次の諸點である。

一、日本銀行は、金準備に等しい額の兌換券を發行することが出來る。

二、それ以上に發行する場合には、國債、大藏省證券（即ち短期の國債）、その他確實なる證券または商業手形を、保證として發行する。

三、かゝる發行は、一億二千萬圓までは、任意に行ふことが出來、且つ無稅である。この部分は、「保證準備發行」と呼ばれてゐる。

四、更に、それ以上の發行に對しては、大藏大臣の認可を要し、且つ一ヶ年百分の五を下らざる割合で發行稅を納める。この部分は、「制限外發行」と呼ばれてゐる。

五、日本銀行は、何時でも兌換の請求に應じなければならぬ。

六、日本銀行の兌換券は、法律上有效な支拂手段である。

右の内、「保證準備發行高」は、初めはもつと少額であつたが、段々増加され、明治三十二年か

ら現行の一億二千萬圓になつたものである。かゝる増額は、資本主義の發展と共に、貨幣の流通必要量が増加したこと、信用が發展したこと、および政府の負債（國債その他）が増加したことを反映する。

いま、昨年の十二月十二日、卽ち金輸出再禁止直前の日本銀行の報告を見ると次のやうになつてゐる。

正貨準備	兌換券發行高	保證準備發行	制限外發行
五二一・三六二千円	一・〇〇〇・四八二千円	一二〇・〇〇〇千円	三五九・一一九千円

これによると、金貨および金地金五億二千萬圓ほどに對して、殆どその二倍に近い兌換券が發行されてゐる。世界大戰の直前の頃などは、日本銀行が實際に保有した正貨準備は世間に發表された金額よりも餘程少かつたといふことだが、今はさういふことはないものと假定しよう。これでも、金準備は、兌換券發行高の約半分しかないのだから、もし兌換券所有者のすべてが兌換を請求すれば、兌換は不可能であることは明瞭だ。その意味においては、兌換準備金なるものは全

く名目だけのもので、當てにならないものである。それにも拘らず、人々は兌換券は兌換されるものと信じてゐるから、普通の場合はみんなが兌換を請求するやうなことはない。では、何故に、人々は兌換を信じてゐるかといふと、それは主として、ブルヂョア××が絶對に日本銀行を支持してゐるからだ。マルクスは、「イングランド銀行券は國家の支持によつてのみ信用を保つてゐる」と言つたが、それは昔も今も變らない。

それでは、日本銀行の發行した十億の兌換券は、どんな働きをしてゐるか？

まづ第一には、金貨に代つて流通手段および支拂手段の役をする。だが、おなじくさうやつて貨幣の役をするにしても、それを所有する人の如何によつて意味は違つてゐる。資本家の手にあれば、それは資本としての流通卽ち G—W—G＋g とか、G—G＋g とかいふ流通において、貨幣の役をする。勞働者、サラリーマン、農民、手工業者等の手にあれば、それは單なる商品流通卽ち W—G—W における媒介者として、貨幣の役をする。日本は資本主義社會だから、後者の流通は、前者の流通によつて規制されてゐる。もう一つ、兌換券が政府の手にある

場合があるが、政府は、鐵道屋になつたり煙草屋になつたりして資本家として機能する時と、さうでない場合とがあるから、右の二つの場合のそれ〴〵に當てはまる。

もつとも、一定の時に發行されてゐる十億なら十億の兌換券は、すべて流通内に動いてゐる譯ではなく、その一部分は活動を休止して流通外にある。大衆の手にあるもので休止狀態にある部分は、持ち金や郵便貯金などになつてゐる。資本家の手にあるもので休止狀態にあるもの、大きな部分は、銀行預金になつてゐる。全國銀行預金の總額は昨年十二月に百億以上もあつたが、これは信用關係および計算が二重三重になつてゐるからである。

ところで、日本銀行は、單に通貨を供給せんがために兌換券を發行してゐるのでないことはもちろんだ。日本銀行は儲けんがために通貨供給の役を引受けてゐる。

前に言つたやうに、日本銀行の兌換券は、新しい通貨として、以前流通した銀貨、金貨、政府紙幣、銀行券など、引換へられたのだ。その後も、兌換券は、金銀の採掘だの賣買だの、外國貿易だのをやる大資本家や大銀行が獲得した金銀と絕えず引換へられ、通貨として供給されてゐる。

日本銀行が、か、るものと引換へに兌換券を發行する場合には、別に儲けはない筈のものになつてゐる。しかし、その代り若干の金準備を持てば、それを種にして金準備なしの、××××××××が出來るのだ。卽ち日本銀行は金を貸し、金の代りに兌換券を渡してやるのだ。この銀行は、いろんなことで回收不能の貸附をウンとこしらへたにも拘らず、例へば昭和五年の下半期だけで約五百萬圓の利益をあげてゐる。また現在でも、拂込二百圓の日本銀行株は五百圓以上の價格をもつてゐる。そして此の銀行の大株主は、巨大資本家と貴族である。

それでは、日本銀行は、誰に、どんな風に貸すのであるか。

この銀行は、「銀行の銀行」だから、政府と銀行だけに貸す。同じく昨年十二月十二日現在の報告によると、政府への貸附金といふ項目は、「法定貸附金」二千二百萬圓の外に三百萬圓だが、公債といふ項目は約二億圓ほどある。これは、普通の謂はゆる公債の形における政府への貸附の外に大藏省證券の形における短期の貸附を含んでゐる。日本銀行は、これらに對してはむろん利子を取る。マルクスも言つたやうに、國家の支持によつてのみ信用を得てゐる銀行券を、國家に貸附

けて利子を儲けるといふやうなことは、全く資本主義社會でなければ見られない圖だ。

日本銀行は、利子を取つて政府に貸附ける「義務」を負はされてゐる。日本銀行は、それを拒むことが出來ない！

政府への貸附と並んで、銀行への貸附がある。これは同じ日の報告によると、約八億圓にのぼつてゐる。この中には、「氷結した貸附」即ち回收不能の分が少くとも五億圓はある。このために日本銀行が損をすれば、政府が辨償してやるといふ保證が與へられてゐる。その他は、一般銀行が割引した手形を日本銀行が更に再割引してやつたもの、外國爲替手形に對する貸附、商業手形や有價證券を擔保とする貸附等である。

もつとも、近來の著しい傾向としては、一般銀行が、金に詰まつて手形や小切手の決濟が出來なかつたり、預金の引出しに應じ兼ねたり、乃至はまた營業決算期の貸借對照表の辻褄を合せ兼ねたりするといふと、日本銀行は貸附をやつて助け船を出す。一口に言へば、日本銀行は、支拂手段その他を供給する救濟機關と化してゐる。

が、とにかく、日本銀行の兌換券の發行高は、各種の貸附が增せばそれだけ增すし、減ればそれだけ減る。尤も、公債の場合は、日本銀行が公債を引受けるか買ふかすれば兌換券發行高は殖えるし、公債の償還を受けるか公債を賣るかすればそれだけ發行高も減るといふことになる。

諸銀行および政府は、一方では日本銀行から貸附を受けるが、他方では日本銀行に無利子で預金をする。同じ日の政府の預金は、三億二千萬圓、一般銀行の預金は七千八百萬圓であつた。日本銀行は、預金を受ける時には兌換券を受取るし、預金が引出される時には兌換券を渡す。だから、それに應じて兌換券の發行高もそれだけ減つたり殖えたりする。

三　兌換券の發行量と流通量

以上によつて、大體、兌換券はどうして發行され、發行量はどうして增減するか、といふことはわかつたし、また、發行された兌換券のすべてが流通する譯ではなくて一部は常に流通を休止して預金等になつてゐる、といふこともわかつた。さうすると、今度は、兌換券の流通量はどう

して増減するか、といふことが問題になつてくる。つまり、兌換券が多く流通したり、少く流通したりするのは何によるか、といふ問題である。

ちよつと考へると、兌換券の發行量が増せば流通量も増し、發行量が減れば流通量も減る、といふ風に思はれる。もし、さうであるならば、中央銀行は自由に通貨の量を増減し得るわけだ。しかし、そんな馬鹿げたことがあるものでない。

兌換券の流通量は、流通手段及び支拂手段――即ち通貨――の流通必要量の増減に從つて増減する。この流通必要量の大小は――、第二講の第四節及び第八節に述べた通り、――通貨の流通速度を一定すれば、大體、實現される商品價格總額プラス支拂總額の大小に依存する。そして、一定の時にどれだけの商品價格總額が實現され、またどれだけの支拂がなされるかといふことは、その時の生産及び商品流通の條件によつて定まるのだ。だから、一口に言へば、資本流通及び商品流通が、兌換券の流通量を決定するのであつて、中央銀行の意思が決定するのではない。

それは大して頭を使はなくてもわかることである。大體、兌換券なるものは、流通の必要が起

つてから發行されるのだ。また、いつたん發行されても、必要がなくなつた兌換券は、どんどん中央銀行へ戻つてくる。直ぐに戻らない迄も、流通を休止して預金に轉化する。そして、必要が起るといふと、再び發行されて中央銀行から飛び出してゆく、乃至は預金から通貨に再轉化する。

もつと詳しく調べて見よう――

兌換券が發行されるのは、(一)日本銀行が金の所有者から金を受取つてそれを準備金に繰入れる時と、(二)政府に對して、貸附をやる時と、(三)一般銀行に對して貸附をやる時と、大體この三つの場合しかない。

一般銀行が、日銀から商業手形の再割引をして貰ふ場合、および擔保貸附を受ける場合は最も單純だ。例へば銀行Aは、支拂に使用するため、もしくは貨幣資本として誰かに貸すために、餘分の貨幣百萬圓を日本銀行から借り出さうとする。この支拂ひなり、貸附なりが、資本流通・商品流通の必要に基づくことは勿論である。日本銀行は兌換券百萬圓を發行して銀行に渡してやる。それだけ多く兌換券は流通する。だが、手形はやがて滿期になる。貸附はやがて回收される。晩くもそ

の時には、銀行Aは日本銀行に借りた百萬圓を返して來る。そして、それと共に、兌換券は日銀に回流し、それだけ兌換券の流通量は減る。

銀行Aは、利息を拂つて借りてゐる金だから、用が濟めば一刻も早く日銀へ返してしまふ。そして、用が濟むといふことは、その金がもはや彼れの利殖の用に立たなくなつたといふことだし、利殖の用に立つか立たないかは、資本流通・商品流通の諸條件によつて決定されるのだ。

次は、國家への貸附の場合だが、國家が煙草屋だの鐵道屋だのをやつて資本家の資格で日銀から貸附を受ける場合は、本質上、右の場合と同斷だ。

が、諸君御承知の通り、、とする。そしてそれらの費用を支拂するために、中央銀行から借金をすることが珍らしくない。日銀によるこの種の貸附は、公債の形をとることもあり、「貸附」の形をとることもあるが、いづれにしても擔保なしの貸附である。この場合にも、兌換券はそれだけ多く發行される。しかもこの兌換券の發行は、本來の資本

流通・商品流通それ自體の必要に基づくものではない。

本職に於ける國家は、先づ租税といふ名目で、一定額——それは巨額だが——の貨幣を強制的に流通から引上げて來て、それから今度は國費と稱していろんなものを買込んだり俸給を拂つたりしてそれを流通へ戻すのだ。これは、ブルヂョア國家成立の當初から繰返してゐる操作だから、資本主義社會の生産及び流通は、この異樣な巨人的消費者を一つの要素として取入れてゐる。そこで、國家の收支の辻褄が合つてゐる限り、國家が流通界に割込んでも何等の波瀾も起さない。

國家は、收入に先立つて支出する必要のある時や、豫定通りの收入が無くて「赤字」が出たりした時に、中央銀行から借金することがあるのだが、しかし、その借金が、間もなく租税收入によつて返濟されるものである限りでは、やはり、波瀾といふほどの波瀾を流通界に起すやうなことはない。

餘分に發行された兌換券は、國家によつて流通に投げ込まれ、購買手段又は支拂手段の役をする。一時的には、それだけの兌換券の流通量は増す。だが、政府は間もなくそれだけの貨幣(通貨)

量を租税として取立て、流通界から奪ひ去り、それを中央銀行へ返濟する。さうすれば兌換券は收縮する。その間に、多少の廻り道があつても理窟はおんなじだ。一口に言へば、兌換券は通貨の役を果してしまへば中央銀行へ舞ひ戻る。

もう一つ、金地金を所有する者がそれと引換へに兌換券を受取る場合はどうか？

發行された兌換券は、彼がそれを資本として使用し得る機會に惠まれてゐるならば、直ちに流通に入り、それだけ兌換券の流通量は増すが、さうした機會に惠まれてゐなければ、預金に轉化されるだらう。かゝる機會の有無、およびその預金がやがて彼または他人によつて資本として使用されて兌換券の流通量を増すかどうかは、生産及び商品流通の條件によつて定まるのだ。

以上は、總じて「常態的」な場合について言つたのだが、むろんいつもさうであるとは限らない。限らないどころか、しば〳〵違つたことが起つてくる。

中央銀行は、信用の總元締のやうな顏をしてゐながら、自ら信用の「原則」を破壊する。苟くも銀行ともあらうものが、貸しても返さない金を貸すといふ法はなかるべき筈だのに、正にさう

した金を貸す。否な、——資本主義の矛盾が尖鋭に現はれてくると、さうした金を貸さざるを得なくなる。現に、日本銀行は、さうした回收不能の金を五億圓以上も貸してゐる。この貸附は主として、昭和二年の金融恐慌に際して起つたのだが、さういふ場合には、貸附額だけ兌換券は増發される譯だが、借りた方で返さないのだから、何時迄たつても中央銀行へ回流しない。

では、それはどうなるか？　五億なら五億の兌換券を受取つた銀行ＡＢＣ等は、それを支拂手段に使用する。卽ち預金を取り付ける者に支拂つてやるか、もしくは、大銀行ＯＰＱ等から借りてゐた金の支拂ひをする。そこで先づこれらの大銀行の手持現金が増大する。次に、騷ぎが靜まるといふと、預金を引出した者は置場に困つて今度は安全な大銀行ＯＰＱ等に預金する。卽ち、増發された五億圓の兌換券は、支拂手段としての役をすましても、中央銀行に回流せずに、市中の大銀行の「遊資」——卽ち借手のない貸附資本——を増大させる。

同じやうなことは、次の二つの場合にも生ずる。

資本主義の矛盾が尖鋭化してくると、政府自ら國家財政の「原則」を破壊せざるを得なくなり、

どし〳〵公債を發行して中央銀行から借金をする。これは、なか〳〵租税收入をもつては返せない。だから増發された兌換券は、購買手段・支拂手段の役をすましても、中央銀行へ回流しない。直接または間接に政府から商品の代金を受取つた資本家達は、それをもつて銀行からの借金を返すか、またはそれを銀行に預金する。銀行の手持現金および預金は増加し、遊資は増大する。

更に、戰爭か何かのために國際的な流通行程が攪亂され、巨額の金がひつきりなしに一國へ流入する場合がある。その金は、主として外國へ賣つた商品の代金、および外國へ貸した金の利子として流入するのだが、金を手に入れた資本家や銀行は、それを兌換券と引かへる。かやうにして増發された兌換券は、貸附によるものでないから、中央銀行には回流しないで、銀行の手持現金または預金に轉化され、遊資を増大させる。

以上いづれの場合にも、増發された兌換券は、流通手段・支拂手段としての當面の役目を果すや否や、乃至はかゝる任務も果さずにいきなり、遊休資本に轉化され、借り手のない貸附資本を増大させ、謂ゆる「金融緩漫」といふ狀態を惹き起す。そしてこの貸附資本の供給増加によつて、貸附

利子率の低落を惹き起す。これを言ひ換へれば、兌換券の増發は、兌換券の流通必要量を變化せしめるものではない、さうではなくて、流通必要量以上に發行された兌換券は、すぐに流通から引上げられて遊休資本に轉化され、貸附資本の供給を増加させて利子率の低落をひきおこすのだ。

さて、さうした狀態が生じたとして、それからどうなるか？　一つの可能性は、資本の海外流出である。資本は、利潤及び利子の低い內地を見捨てゝ、高い外國へ流れ出す。もう一つの可能性は、利子が安くなつただけそれだけ計算上企業家利潤が増すことになり、こいつはうまいぞといふので商品取引が活潑になつて生産が増すといふことである。さうなつてくれば明かに通貨の必要量は増す。從つて、兌換券の流通量も増す。そして、後者の場合には、謂ゆる「信用インフレーション」が起り得るのであつて、それについては後で詳しく說明する。

が、いづれにせよ、第一のことが起るか、第二のことが起るかは、全くその時の資本流通及び商品流通の諸條件によつて定まるのだ。利子が安くなつたからといつて、本當に企業家利潤が増すかどうかはその時の條件如何によることだ。たとへば、商品價格が下落して利潤の總量が減れ

ば、利率低落による「利益」などは譯もなくけし飛ぶだらう。利潤總量が增さないとなれば、資本家的生産は唯一の刺戟を失つて收縮する。從つて通貨の流通必要量も減少する。

で、——要するに、どの點から見ても、兌換券の流通量は流通の必要によつてのみ增減するといふことは明かだ。されば、マルクスは言つた——

「銀行券が、何時でも金と交換し得るものである限り、これらの銀行券の數量を增大せしめることは、決してその發行者たる銀行の手には屬さない。……流通銀行券の分量は、取引上の欲求に準據するものであつて、餘分の銀行券は卽時その發行者の手に復歸して來る」

これだけのことがわかれば、諸君はいろんな間違つた考へに陷らずにすむわけだ。

第一、兌換券の流通量は、中央銀行の金準備の增減に從つて增減するものでない。金準備が增せば、兌換券は一應增發される場合が多いが、しかし、それが流通必要量を越えれば、すぐに流通から引上げられる。反對に、金準備が減つたからといつて、流通手段および支拂手段の必要量が減らなければ、兌換券の流通量は減少しない。

第二に、中央銀行は勝手に通貨の量を伸縮させて「景氣」を左右する力などはない、なるほど中央銀行は「統制」なるものをやる。ブルヂョアジーや小ブルヂョアは、これが大變な偉力を發揮するやうに考へてわい〳〵言ふ。殊に、——「溺れる者は藁」のたとへに洩れず、——恐慌や不景氣の時などはそれが甚だしい。だが、中央銀行の「統制」なるものは、實は、通貨に對するものではなく、一般銀行の貸附資本に對するものなのだ。中央銀行は、割引歩合の上げ下げや、市場における公債の賣買などによつて、貸附資本の需要供給に若干の變化を惹き起し、市場利子率を動かすことは出來る。だが、たとひ市場利子率が低落して、利潤の中の生産資本の取分が多くなるとしても、それがために實際に商品取引が活潑になり、生産が増大し、從つて通貨必要量が増すかどうかは、生産及び商品流通の條件によつて決定される。中央銀行は、社會の利潤總量に變化を惹き起す力などはない。

四　兌換券と金——兌換停止

さて、以上はすべて、兌換券が金と引換へられ得る場合の話である。つまり、兌換券が兌換券である場合の話である。吾々は、さういふ場合における兌換券の流通法則を研究したのであつた。

マルクスは、かう書いてゐる――

「流通の速度と支拂の節約とが一定してゐるとすれば、現實に流通する貨幣の數量は、商品の價格と取引の數量とによつて決定されることは、單純なる貨幣流通を考察した際に論證した通りである。同一の法則は、銀行券流通の場合にも支配する」（傍點は筆者のもの）

で、吾々が前章に述べたことは、要するに、その點を明かにしたのであつて、右の法則を別の言葉で言ひ現はせば、銀行券卽ち兌換券の流通量は、結局、流通に必要な量に一致するといふことになる。

一體、兌換券の場合には、特に、必要以上のものが流通に投入される恐れが多いのだ。だから、吾々は、さういふことが起つた場合はどうなるかといふことを、特に詳しく研究した。

兌換券なるものは、元來、政府紙幣とは違つて、いろんな發行上の制限があるにはある。大

體、それは、利子のとれる場合でなければ發行されないのだし、發行に際しては確實な擔保を取ることが必要なのだし、また準備金に關する制限もある。けれども、また、中央銀行は、準備金以上の發行を許されてゐるのだし、慾張つてどん／＼貸附けることもあらうから、擔保などもいゝ加減なこともあり得るのだ。そこで、特に必要以上の兌換券が發行された場合を考察したのだが、しかしさうした超過部分は、中央銀行に回流するか、もしくは一般銀行の預金と化して、流通から離脱するといふことを吾々は見たのである。

　その點は、「單純なる貨幣流通」即ち金が流通してゐる場合と全く同樣である。單純なる貨幣流通の場合には、必要量以上に流通せしめられた金は、本來の意味の退藏貨幣に轉化されるか、又は海外へ流出することによつて、流通から離脱する。即ち、離脱の形態は異なるけれども、離脱の作用によつて流通量が必要量に一致せしめられるといふ點は全くおんなじだ。

　これだけのことを言へば、貨幣の流通量が多くなるから「物價」即ち商品價格一般が騰貴するといふやうな學說乃至俗見の間違ひを見拔くことは諸君にとつて容易だらう。それは、原因と結

果とを顚倒した考へだ。事實はその反對で、物價の騰貴が起ればこそ、貨幣の流通量も增加し得る。物價の騰貴は、他の原因によるものだ。貨幣の流通量が必要以上に增加するやうなことがあれば、その增加部分は、物價を高める作用を營むどころか、自分の方で流通から退却せざるを得ないのだ。その點は、金の場合でも、兌換券の場合でも變りはない。

また、必要以上の兌換券が預金に轉化されて、「金融緩慢」と利子率低下とをひき起す場合にしても、理窟はおんなじだ。利子が安いといふので資本家がどし〳〵銀行から貸附を受けて仕事をやり出したために、「景氣」が出たとしたところで、それは、信用の膨脹につれて、生產及び流通が繁忙となり、それにつれて通貨の量も增すのであつて、その逆ではない。この場合には、第一に生ずるものは、預金の增加卽ち休息態資本の增加、次は、信用によつてその休息態資本が作用態資本に轉化されるから、作用態資本の增加、第三は、それに基づく流通の繁忙と物價騰貴、そしてそれが次第に通貨の流通量を增大させるのだ。この場合に限らず、一般に、通貨の流通量を增加させるものは、結局、作用態資本の增加であつて、通貨の流通量の增大が物價騰貴の原因

をなすのではない。資本と通貨とを混同するなどは馬鹿げてゐる。

で、さういふ譯で、兌換券の流通量は、常に流通必要量によつて決定され、その增減に基づいて增減し、從つて兌換券流通の法則はまた金の流通の法則と一致するものとすれば、兌換券と金との關係はどうだらう？

さうである限りにおいては、兌換券は全く金が流通してゐる代りに流通してゐることになるだらう。例へば十億圓の金が流通してゐる代りに、十億圓の兌換券が流通してゐることになるだらう。一圓とは二分の金のことであるならば、十億圓の兌換券は即ち二十萬貫目の金の代りに流通してゐることになり、一圓の兌換券は正確に二分の金の代りをすることになるだらう。從つてまた一圓の兌換券は、常に正確に二分の金の價値（勞働價値）を代表して、諸商品の價値（同じく勞働價値）に相對することになるだらう。

だが、金と兌換券とのかうした關係は、何時までも無事に續くだらうか？　破れる時がないだらうか？

それはある。例へば、一圓の兌換券はもはや二分の金を代表しなくなつて、一分の金しか代表しないといつたやうなことは起り得る。それは、十九世紀の初めの二十年間ほどは英國にしば〳〵起つたし、一九一七年の世界戰爭當時及び戰後の歐洲諸國にも起つた。現在の日本その他の資本主義諸國にも起りかけてゐる。さういふことが起るといふと、兌換券の「價値減少」が生じたと言はれるのだ。が、むろん、兌換券はたゞ金の價値を代表するだけで、それ自身の價値を持つのではない。だから、兌換券の「價値減少」とは、同じ兌換券がヨリ少量の金を代表し、從つてヨリ少量の金價値を代表するやうになることである。言ひ換へれば、兌換券がその額面に示された金量――即ち一圓ならば二分の金、十圓ならば二匁の金――よりも少量の金を代表するやうになることである。

特定の事情が生ずれば、兌換券の價値減少が起る。それはどんな事情であるか？　それを知るためには、吾々は先づ普通の場合には何故に價値減少が起らないかを見究めておく必要がある。

兌換券がその額面通りの金量を代表し得るのは、それだけの金量といつでも引換へられるから

であるには違ひない。だが、引換へられる、兌換されるといつたところで、十億圓の兌換券がすべて引換へられる譯ではない。十億圓の兌換券に對して、金準備は——例へば——五億しかない。それでも引換へられるといふのはどういふ意味か？ すべての人が一度に兌換を要求しないからである。たゞそれだけのことである。滑稽なことのやうだが、誰も彼も兌換を要求しはしないからといふ理由で、誰も彼も兌換して貰へると思つてゐる！ たゞそれだけのことである。

エンゲルスは、英國が一八二五年に激烈な恐慌に襲はれた時のことを書いてゐる。イングランド銀行はありつたけの兌換券を發行してもなほ足らないで、どつかへしまひ込んであつた古い一磅券といふやつまで持ち出すといふ騷ぎだつたから、發行された兌換券の量は準備金を恐ろしく超過した。そんな風であり、また一般的な信用失墜が最も甚だしい際であつたにも拘らず、銀行券の信用は動搖を來たさなかつた。そこでエンゲルスは言つてゐる。——『これはさもあるべきことである。この種の價値表章は、全國民が信用を與へて支持してゐるのだから』。

さういふ譯だから、政府なり中央銀行なりが現實に兌換を停止すると宣言しても、尚且つ人々

は、結局は兌換が出來るものと信じてゐて、兌換券は額面通りの金量を代表してゐることが往々ある。例へば、日本における大正六年の兌換停止の當時などもその一つである。

もつとも、人々が兌換券は兌換されるものだと信用するといふその主觀が、直ちに、兌換券を價値減少から救つてゐる譯ではない。さうした「信用」は、先づ、必要量以上の兌換券が流通内にあることを不可能ならしめるのだ。といふのは、——兌換券の所有者達は、それを流通手段なり支拂手段なりとして用ひる必要のない時は、即ち用のない時は、銀行や郵便局に預けたり用簞笥の中へ入れたりして、大切にしまつておく。即ち、兌換券は、金貨と同じやうに「退藏」される。だから必要量以上には流通しない。從つてまた、價値減少を起さない。そして、大切にしまつておくのは、即ち、これは金と引換へられる、兌換されると信用してゐるからなのだ。

だが、兌換券に對するかゝる信用、エンゲルスの謂ゆる全國民が信用を與へての支持は、××××××？

どうしてそれどころではない。

資本主義社會においては、その内在矛盾のために、、、、、、、、、、、、、、さうである限り、兌換券に對する××××もまた必然的に來る。

世界市場を襲ふ恐慌に際しては、若干の國々からは猛烈に金が流れ出す。それらの國の金準備はずん／＼減つて無くなりさうになる。戰爭に際しては、莫大な戰費のために金準備を使ひつくすことはしば／＼だ。さうなれば、兌換も糞もあつたものでない。金準備の減少が或る程度に達すれば、兌換券に對する××はどうしても××する。

が、實際には、これはどうも金準備の激減は免れないことになつたから兌換券の信用は無くなるに違ひない、といふ見透しが立つといふと、もう信用喪失の過程が始まつてくる。かういふ場合に、一番目先きの利くのはもちろん「財界の樞機」を握つてゐる大ブルヂョアだ。彼等は出來るだけ横着に立廻らうとする。彼等は、自分の兌換券だけをいち早く金に換へて、そのことは一般大衆に知らせまいとする。けれども、彼等の行動はだん／＼世間へ洩れてくる。信用喪失の波紋はひろがつて行く。兌換の請求者は増加する。それによつて金準備はます／＼減少する。そし

てそれがます〳〵××を××させてくる。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

するとどうなるか？

中央銀行は兌換を停止する！　いや、大衆的兌換請求が起りさうになると、それに先き立つてもう兌換を停止する！

全く面白い制度ではないか。前には、誰も彼も兌換を請求しはしないからといふ理由で、誰も彼も兌換して貰へると信じてゐた。今度は、誰も彼も兌換して貰はねばならなくなつて兌換を請求すると、誰も彼も兌換して貰へない。兌換が最も必要になつてきた恰度その時に、兌換はきれいに拒まれる。

一圓紙幣や五圓紙幣をへそくり金に持つてゐる大衆が一番馬鹿を見る。兌換の大扉は、金を目がけて駈けつける彼等の鼻先きでピシャンと閉される。いや、それどころか、駈けつけやしないかと思ふともう閉される。殊にこの後の場合には、大衆の多くは未だ何事が起つたか知らずにゐる

たりするだけに餘計にひどい目に合はされるのだ。

その次第は後で述べるが、とにかく、一九一四年の世界戰爭の爆發と共に、兌換券の信用喪失が歐洲諸國に起つたことは周知のことである。それは、大衆的な兌換請求といふ形態をとつて現はれた。今度の世界恐慌に際しても、同樣のことが起つてゐる。現に二十數ケ國が兌換停止を餘儀なくされてゐる。大衆的兌換請求の起つた國は少ないが、起りかけた國は相當ある。その他の國も、兌換停止の時期がおくれゝば、起らずにはゐなかつたのだ。

で、とにかく、兌換停止の前なると後なるとを問はず、兌換券に對する信用が失はれゝば、兌換券の性質は一變する。それは、もはや兌換されないもの、金と換へられぬものと觀念されてゐるのだから、信用の表章ではなくなつてくる。それは單なる不換紙幣に轉化する。

もつとも、兌換券が兌換券でなくなつて、不換紙幣に轉化したからといつて、流通を止める譯ではない。止めるどころか、却つて猛烈に「流通」する。不換紙幣といふものは「流通」するものだ。否な、不換紙幣こそ最も猛烈に「流通」する。

不換紙幣化した兌換券は、不換紙幣の流通法則に從つて流通する。

五　不換紙幣の流通法則

不換紙幣は何故に金に代つて流通し得るかといふことは、第二講の五節に說明しておいたが、以下、吾々は、不換紙幣と呼ぶ代りに、單に紙幣と呼ぶことにする。

日本では、兌換券のことをさつといつたり紙幣と言つたりしてゐるから紛らはしいけれども、本來、兌換券と紙幣とは別の物である。

紙幣は、國家によつて發行されるのが普通であつて、國家が金準備を持つ場合はそれを兌換することも稀にないではないが、しかし兌換しないのが普通である。その點が第一、銀行券・兌換券と異つてゐる。第二、兌換券は貨幣の支拂手段たる機能から生じてくるが、紙幣は流通手段たる機能から生じてくる。第三、兌換券は、生產及び商品流通の必要から、信用に基づいて發行されるが、紙幣は、國家が財政上の不足を充たすために、權力に基づいて、無擔保で、そして無準

備で、發行する。第四、兌換券は國家によつて流通を強制されるとは限らないが、紙幣は常に國家によつて流通を強制される。

けれども、兌換券も一定の事情が生ずれば紙幣に轉化することは吾々の見たところである。さうなつた場合に、更に、國家がそれを財政上の不足を充たす手段に用ひるやうになれば、いよいよもつて紙幣になる。それは例へば、世界大戰當時に多くの國でやつたやうに、中央銀行は啻に兌換を停止したのみならず、現實的な商業手形と引かへに兌換券を發行する代りに短期公債證書と引換へにどん／＼兌換券を發行し、しかも『戰時のために必要となる程度に應じて』發行した、といふやうな場合である。

紙幣は、もちろん、それ自身の價値はない。また、金と引換へられるわけでもない。それにも拘らず紙幣が金に代つて流通することの出來るのは、それはたゞ貨幣の流通手段たる機能だけを代理する限りにおいてのことである。人々は、商品を交換する必要に迫られてゐる。從つて交換の媒介物を必要とする。たとひそれ自身は無價値の五圓紙幣でも、それを自己の商品と引換へに

受取つて、またすぐにそれを他人に渡して他の商品を受取ることが出來れば、流通手段としての役に立つ。それだけのことならば必ずしも金でなくてもよい。だから、紙幣は金に代つて流通手段たる機能をつくし得る。

兌換劵は兌換されるが故に金の代用物として現はれるのだが、紙幣は流通するが故に、また流通する限りにおいてのみ、金の代理をする。紙幣に轉化した兌換劵は、この新らしい資格においてのみ金の代理をすることが出來るのだ。

そこで、どの程度まで代理することが出來るかといふ問題になつてくる。これは、第二講第五節から持ち越してある問題だ。

だが、それは今になつて見ればもう諸君にとつてむづかしい問題ではない。紙幣は、流通する金を代理し得るだけなのだが、諸君は、その流通する金（貨幣）の量は如何にして定まるかといふことを知つてゐる。それは流通の必要によつて定まるので、その公式も諸君は知つてゐる。で、いま金の流通必要量が十億圓であるとするならば、十億圓までの紙幣ならば無難に金の代

理の役がつとまる譯だらう。そして十億圓の紙幣は、二十萬貫目の金を代表し、一圓の紙幣は二分の金を代表するだらう。この場合の紙幣は、前に述べた兌換券の金に對する關係と同じ關係になつてゐる。それだから、兌換券が不換紙幣と化した場合でも、その流通量がなほ流通必要量に一致してゐるあひだは、依然として金の代理をしてゐるといふことになる。

それなら、兌換券は兌換されてもしないでもおんなじか？　そんなことはない。

不換紙幣化した兌換券は、紙幣同樣、その流通量が流通必要量と一致するといふ保證は全然なくなるのだ。前にはおのづからその保證があつたのだから大變な相違である。

たとひ政府なり中央銀行なりが「誠心誠意」その發行量を流通量に一致せしめようと努力するとしたところで駄目なのだ。流通必要量なるものは絶えず變化するばかりではなく、一年のうちでも季節によつて餘程の相違がある。例へば最小必要量は八億で、最大必要量は十二億だとしよう。そして假りに先づ八億だけ發行したとする。

季節によつて、必要量が八億から九億、十億、十一億、十二億と殖えて來た時にどうするか？　もし増

發しなければ、通貨が足らないために商品價格一般は下落傾向をとる。しかし價格の下落ほど資本家にとつて嫌なものはない。だからどうしても必要なだけは增發されることになる。そこで今度は十二億まで發行されたとしたらどうなるか？　季節によつて市場は收縮し、貨幣の流通必要量は十億、九億、八億と減つてくる。流通してゐるものが金や兌換券であるならば、必要量の減るのに從つて流通量も減つてくる。しかるに、信用のなくなつた兌換券や紙幣の場合はさうは行かないのだ。

資本家は、それらのものを大事にしまひ込んでおくほど馬鹿でない。さうかといつて外國へ持ち出す譯にも行かない代物だ。だから彼等は、自分の商品を賣つてそれらのものを受取るといふと、一時も早くそれを他の商品に換へてしまはうとする。次に受取つた者もまた同じやうに早く他人に渡して商品に換へようとする、等、等、どこまでもその調子で進んでゆく。だから一口に言ふと、不換紙幣なるものは一度流通に入つたが最後脫け出すことは出來ないのだ。そして、全く不眠不休で流通しつゞけねばならないのだ。不換紙幣こそ猛烈に「流通」するといつたのはそ

とである。

さうだとすると、通貨の必要量が例へば八億に減つても、十二億の通貨が流通してゐることになる。貨幣として諸商品と相對するところの金は八億圓であり、十六萬貫の金である。しかるに、その代理をなすべき筈の通貨の方は十二億圓といふ額面をもつてゐる。額面の數字は十二億圓だが、それによつて代理される金の方は八億圓——十六萬貫に過ぎないのだ。だから、一圓といふ名目の紙幣は、實際には——二分の金ではなく——一分三厘三三…の金しか代表しないことになる。これはとりも直さず通貨の「價値減少」ではないか。

一圓紙幣はもはや一分三厘三三…の金しか代表しないとすれば、名前は一圓でも一圓がものはない。だから、二分の金を代表するためには、一圓紙幣一枚では足らなくなつて、一枚半を必要とすることになる。從つて諸君が地金商人のところへ行つて二分の金をくれといつて一圓紙幣をさし出すといふと、只今の「相場」は一圓五十錢ですが……と言ふに違ひない。その場合には金は五割の打歩を生じたと言はれる。が、それは金の價格が高くなつたのではない。紙幣の方に價

値減少が生じたのだ。

この通貨の價値減少は、必然的に、商品價格の上に反映されてくる。通貨の流通速度は平均一週十回だとするならば、そこには八億圓の十倍の八十億圓の商品が流通してゐるわけだ。言ひ換へれば、そこに流通してゐる商品の價値（勞働價値）は、十六萬貫目の金の價値（勞働價値）に等しいのであつて、その價値が金量で表現され、二分の金を一圓と呼んでそれを標準として秤量するならば、八十億圓の價格を持つべき筈なのだ。ところが、この場合には金は流通せず、金に代つて流通する紙幣は八億ではなしに十二億圓といふ額面を持ち、それが商品と取換へられるのだから、商品の價格はこの額面の數字をもつて言ひ現はされることになる、さうすると、――紙幣も一週十回流通するとすれば、――商品價格は八十億ではなしに百二十億圓と呼ばれねばならないことになる。即ち、商品價格一般は、物價は、本來よりも恰度五割だけ高くなることになる。

これは、もちろん、商品の價値が高くなつたからでもなければ、金の價値が下落したからでも

ないつたゞ單に、紙幣の價値減少の結果なのだ。二分の金を一圓としてはかれば八十億圓の價格を持つ商品をば、一分三厘三三…の金を一圓としてはかるから百二十億圓の價格になるといふだけのことなのだ。

ことはそれだけなのだが、しかしそれだけでは濟まなくなる。そんな物價騰貴が起るとなれば、商品流通、資本流通の進行上に、卽ち全經濟の進行上に、大混亂が起つてくるのは當然だ。

いくら馬鹿にされてゐる大衆でも氣がついてくる。そんな風に物價が高くなれば、同じ一圓紙幣でもつて前に例へば二升買へた醬油が一升三合三勺しか買へないことになるのだから、呑氣に構へてはゐられなくなる。なるほどこんな紙幣なんか持つてゐたのではひどい目に會ふといふので、前から「まさかの時」の用意にとしまつておいた紙幣までも戸棚や押入や天井裏から取出してきて、早く必要な物に換へようとする。紙幣はどん／＼流通に投げ込まれる。そしてます／＼流通量は增大する。だからます／＼物價は騰貴する。

政府としたところが、物價が高くなるのだから、今迄通りの物を買ひ込むためにさへ餘計の通

貨が要る。まして戰爭なんかやつてゐたのでは、いくら通貨を手に入れても足りつこない。だから、政府は、ます／＼多くの紙幣を出すか、乃至は公債を出して中央銀行にどし／＼「不換券」を發行させる。

さうなれば、何のことはない紙幣の洪水だ。通貨の價値減少はます／＼甚だしく、物價はべら棒に騰貴する。

これを、吾々はインフレーションと呼ぶ。

本來の意味におけるインフレーションとは、即ち、貨幣の流通必要量を越えて流通に投げ込まれた紙幣が價値減少を起して物價騰貴を招來することである。このインフレーションとその作用に關するもつと詳しい說明は、第八講の課題にしよう。

六　金準備の役割

元來、兌換券流通の制度なるものは、ブルヂョアジーにとつて誠に都合のよいものなのだ。貨

幣としての金は節約出來る、若干の金準備を種にして大きな架空資本をつくり出すことが出來る。それで中央銀行も儲けるし、資本家一般も搾取の道具を餘計手に入れる、おまけに恐慌が來れば資本家救濟の役にも立つ、といふのだから、これほど有難いものはたんとない譯だらう。

だが、兌換券の信用を維持するのには、相當の金準備がどうしても必要だ。金準備が或る程度以下に減少すると、通貨の價値減少が起つて全面的な混亂が展開する。たとひさうした際の損害の大部分は大衆に轉嫁するにしたところで、そんな混亂はブルヂョアジーにとつても歡迎すべきことどころではない。だから、彼等は極力兌換券の信用維持に努めるし、從つてまた豐富な金準備を持たうとする。

ところが、資本主義の矛盾は、この金準備にもはつきりと現はれてくる。

歴史的に言ふと、——理論的に言つてもさうだが、——貨幣としての金が兌換準備たる役目をするやうになるのは比較的最も新しいことである。今日の金準備の謂はゞ先祖に當るものは、個々の貨幣退藏者の手に貯へられた退藏貨幣であつた。が、國家が貨幣流通における技術的な仕事を

引受けて貨幣の鑄造を一手にやるやうになると、この退藏貨幣は集中されて、鑄貨準備金を形成する。更に、支拂信用が發展して來ると、今度は個々の生産者又は資本家の手許に支拂準備金が貯へられることになるのだが、やがて銀行が登場し、この支拂準備金を集中して預金準備金に轉化する。が、同時に一方、世界市場が形成されてくるといふと、鑄貨準備金と預金準備金とはまた、國際支拂準備金の役を兼ねることになる。最後に、中央銀行が兌換券を發行し、兌換券が鑄貨に代つて流通するやうになると、鑄貨準備金は不用になるし、預金準備金は金でなくてもいゝことになるから、その二つがいつしよになつて兌換準備金を形成する。が、むろん、その頃には、各國と世界市場との結びつきはます／＼緊密になるから、國際支拂準備金の重要性も増大する。

ところで、兌換準備といひ、國際支拂準備金といつたところで、何も別々の金が二つの役を分擔する譯ではない。中央銀行と政府の所有する同じ五億なら五億の金が、二つの役割を兼ねるのだ。

さうすると、今日の金準備なるものは、少くとも二つの機能を持ち、そのいづれの機能をもうまくつくさないと、大變な困難を惹き起すといふことになる。しかるに、この二つの機能はどうしても衝突する。

この衝突はいろんな形で現はれてくるのだが、差し當り誰にもわかることは、二つの役割の性質の相違から來る衝突である。兌換準備としての役割は國內貨幣としての役割だが、國際支拂準備としての役割は、世界貨幣としての役割である。金は、國內貨幣としての役割を果すのには國內に止まらなければならぬ。少なくとも一國の政府なり中央銀行なりの所有に屬さなければならぬ。しかるに世界貨幣としての役割を果すのにはどうしても國境外に出動し、他國のブルヂョアジーに讓渡されねばならぬ。金を支拂ふといふことは他人に渡すことである。

一口に言へば、金は、國外へ流出したのでは兌換準備たる機能は營めないが、しかしもう一つの機能をつくすのにはどうしても國外へ流出しなければならぬ。だから、金準備を兌換準備として豐富ならしめようとすれば、支拂準備としての機能が制限を受けることになり、支拂準備とし

ての機能を十分に發揮せしめようとすれば兌換準備の豐富さが失はれてくる。

ちよつと考へると、金準備の總額を大きくしさへすれば、二つの機能を二つとも十分に發揮せしめることが出來て問題はなささうにも思へるだらうが、それこそブルヂョア的な考へ方といふものだ。

世界がたゞ一國であるならば問題はないが、それならばまた國際支拂準備などいふものゝ必要もなかつた筈だ。一國がその金準備の總額を出來るだけ大きくしようと努力すれば、他のすべての國も同樣の努力をする。ところが、一定の時に世界に存在する金の量には限りがあるし、金はやたらに增加し得るものではない。やたらに增加し得るやうなものならば貨幣の役目はつとまらぬ。そこで必然的に生ずることは、各國の間に展開される金の爭奪戰である。

かうした爭奪戰は、むろん國民經濟と國民經濟との對立に基づくのだが、この對立は、民族の相違に基づくのでもなければ文化の相違に基づくのでもない。それは全くブルヂョアジーとブルヂョアジーとの對立に基づくのであつて、根本は私的所有であり、資本であり、搾取の存在であ

た。

金の爭奪戰は、根本的には、貨幣そのものが矛盾の產物であること、その矛盾は資本主義生產に內在する矛盾であること、——そのことの現はれに外ならぬ。そして、資本主義生產の矛盾は恐慌と戰爭とを不可避ならしめるが故に、金の爭奪戰は更に一層激化されざるを得ないのだ。

資本主義諸國は、單に「常態的」な場合に必要な金準備を豐富ならしめようと努力するだけではない。彼等は、恐慌期に備へるため、戰爭の準備を進めるために金の爭奪戰をやる。恐慌の時、戰爭の時は、價値の化身としての、一般的富としての金だけが物を言ふからである。從つてまた、恐慌が來た時、戰爭になつた時こそは、金の爭奪戰が白熱化する時だ。戰爭に勝つたやつはきつと負けたやつに向つて金をよこせといふ。これなどは、誰が見たつて明白な金の強奪ではないか。曾つてフランスが一八七一年から七三年に至る三十ヶ月間に、巨額の戰爭賠償金の大部分を金銀で支拂つた時に、國內通貨にも爲替相場にも大した變動を起さずに濟んだといふ話は、世界のブルヂ・アジーの稱讚を博した有名な話だが、それは、いかに巨額の金の強奪が行はれた

かを物語ると同時に、フランスが平常いかに熱心に餘分の金を貯へてゐたかといふことを物語るのだ。

様々な手段方法によつて陰に陽に絶えず行はれてゐる金の爭奪戰爭の結果は、各國の資本主義の發展の不均等といふ事實と相俟つて、若干の國々にどうしても金の不足を惹き起す。それはさうだらう、苟くも爭奪戰が行はれる以上、誰も彼もみんなが勝つといふ譯はないから、必ず敗ける者があり、敗ける者の方の金準備は必要量以下に減少する。そして金準備が減れば減る程、金準備の二つの機能の衝突は激しくなる。さうした狀態に置かれた國は、世界資本主義の弱い一環となる。

勝ち味の方の國のブルヂョアジーは、豐富な金準備を眺めてこれで安心だと得意になつてゐるのだが、實際に安心かといふとちつともさうではない。世界の資本主義諸國は、世界經濟といふ錯綜した鎖の環をなしてゐる。例へば恐慌が起つて來て、その中の弱い環が手ひどく痛めつけられて金の輸出禁止や兌換の停止をやり出すといふと、「金本位停止」の浪は鎖をつたつてすべ

ての環を襲ふのだ。現在の狀態の如きも卽ちそれであつて、一二の國はどうやら頑張つて未だ「金本位停止」を免かれてはゐるものの、その國は「安心」であるどころか、うん〳〵唸つてゐる。かうなつてくると、今度は、ブルヂョア學者やブルヂョア評論家は、これは金本位制といふものが惡いのだと言ひ出すのだ。見給へ、彼等は、資本主義そのものの矛盾は棚に上げて おいて、その矛盾の產物に過ぎない金本位制に文句をつけるのだ！

金本位制は「貨幣の必然性」に基づいてゐる。一國がどうしても金本位制をとらなければならないのは、國內の資本流通・商品流通を「圓滑」ならしめるために價値の尺度と「安定」した通貨とを持つと同時にまた世界經濟の一環として活動するために世界共通の購買手段・支拂手段を持たねばならないからである。だから金本位制を採るといふことは資本主義國が逃れることの出來ない運命だ。しかるに、その金本位制において金に課せられた二つの役割はどうしても衝突する！

もう一つ諸君の注意すべきことは、現在の金準備は誰の役に立つてゐるかといふことである。

金は一つには兌換準備をなしてゐる。しかし、大衆が必要に迫られて兌換を請求する場合にはきれいに拒絶されるといふことは諸君すでに御承知の通りである。では、誰が一體兌換制度なるものを利用してゐるか？　それは、大ブルヂョアだけである。なるほど、裝飾品その他のものをつくるのに金地金を使用する人達も兌換制度を利用するにはする。しかし、そんな目的のために兌換される金額などは全く微々たるものである。たゞ、大ブルヂョアだけが、絶えず巨額の兌換を行つてゐる。そしてまた、たゞ大ブルヂョアだけが、絶えず巨額の金を政府や中央銀行に「賣り渡して」兌換券と引換へてゐる。一口に言へば、金準備は大ブルヂョアのために存在し、大ブルヂョアによつてその運命を握られてゐる。

ところで、極く少數の彼等大ブルヂョアは、兌換して得た金をどうするかといふと、その一部分は國際的支拂手段として使用し、一部分は「一般的富」として海外へ移轉させるため――即ち資本輸出をするため――に使用する。そして、しば〳〵全く投機のためにそれをやる。つまり、彼等は、金そのものを用ひて國際的な大賭博を打つ。

今度の金再禁止前後にかけて、だいぶ世間を騷がせた「ドル買ひ」なるものは、彼等一握りほどの大ブルヂョアが、「通貨の安定」のための國民的金準備を、さうした大賭博に利用したことを意味するのだ。――昨年九月にイギリスを襲つた「金本位停止」の浪は、日本をも襲ひさうになつて來た。そこで彼等は金輸出禁止と兌換停止を見越していち早く兌換を開始した。彼等みづから兌換をしやうと、正金銀行にそれをやらせやうと、そんな手續きはどうでもよいことだ。とにかく彼等がどし〳〵「ドルを買つた」といふことは、事實上、金をどし〳〵アメリカへ送つたことになる。彼等は、わづか二ヶ月ほどの間に三億五千萬圓もの金を流出させた。そのために、大體八億圓ちよつとしかなかつた金準備が更に四億八千萬圓にまで激減した。そこで、彼等の見透し通り、「思惑」通り、金輸出禁止となり、兌換停止となつて、彼等はボロイ儲けをした。かくて、巨大資本家は金準備を賭博に利用して大いに儲けたが、大衆は金輸出禁止、兌換停止による物價騰貴等々に惱まされて悲鳴を上げてゐるといふ次第である。

もつとも、話はそれだけではない。それについては、まだいろ〳〵言はねばならぬこと、研究

しなければならぬことがある。それで順序として、次は、金準備の國際的な役割と密接な關係のある「金の流出入と爲替相場」の問題を研究することにしたい。それは、金本位制の理解のために缺くべからざるものである。

第六講　金の流出入と爲替相場

一　世界經濟

諸君は、前に、金は二重の流れをなして世界を流通するといふことを學ばれた。一つは、金の原産地國を出發點として全世界市場に流れ込むもの、もう一つは各國流通部面の相互の間のものであつて、絶えず一國と他國との間を往つたり來たりする金の流れであつた。そしてこの第二の金の運動は、爲替相場の絶えざる變動を作ふものだといふのであつた。吾々は先づ此の方の金の動きから始めるであらう、――

さて、舞臺面は、今や世界經濟であり、世界市場である。

吾々は、世界經濟・世界市場の成立およびその意義については機會ある毎に觸れてきたが、ここで更に補足を兼ねて概要を述べるといふと、――大體、資本主義生産なるものは商品生産の發

展によつて生じたものだから、資本主義の成立に先立つてすでに商品の流通は國境を越えて行はれてゐた。言ひ換へれば、國と國との間の商品交換即ち國際貿易なるものは、資本主義以前から存在した。從つて、苟くも資本主義國として現はれた國で外國貿易を持たない國はないわけである。ところがまた、一度諸國において資本主義が成立するといふと、資本主義生產なるものの性質からして、各國はどうしても外國貿易を持ち、國外市場を持たずにはゐられなくなる。

資本主義生產においては、盲滅法な、がむしやらな生產擴張が行はれて企業の規模がずん／＼大きくなつて行くために、どの產業部門にとつても晩かれ早かれ國內市場だけでは足らなくなり、どの產業部門も國境を越えて進出しなければならなくなる。更にまた、おなじ盲滅法ながむしやらな生產擴張のために、一國內の個々の產業部門の間の均衡はどうしても破れてくる。例へば急速に發展した綿絲產業の生產は、それを原料とする綿織物生產の必要以上に增大する。すると、その過剩生產は、綿絲恐慌をひき起しさうになる。それを避けようとすれば、綿絲資本家はどうしても製品の捌け口を國外に求めねばならないだらう。そこで綿絲の輸出が行はれ、綿絲產業が海

外市場を持つといふやうなことになる。

さういふわけで、諸國の資本主義生産が發展すればするほど、ますます廣い範圍に亙つて海外市場が「開拓」され、全世界はますます資本主義經濟の體系の中に捲き込まれてゆく。かゝる過程が信用の發展によつて更に促進されるといふことは前にも指摘した。同樣に、交通機關の發達もまた此の過程を促進する。

單純な商品生産の時代においては、如何に商品流通の範圍が擴がつても、各國はまだ大體において自給自足經濟の範圍を出なかつた。各國の經濟なるものは、多かれ少なかれ孤立的なもので、おのおのが獨立の經濟單位をなしてゐた。だから、國際貿易はあつてもそれは主として各國の特産物が交換されるものに過ぎなかつた。從つてまた、國際的な商品交換の前提は、生産の自然的條件が國によつて違ふといふことであつた。で、この時代においては、各國の間に分業があるといつても、それは謂はゞ自然的分業であつて、現在のやうな社會的分業はまだ國と國との間に確立されてゐなかつた。

ところが、資本主義の時代になると事情は一變する。今や國際的な商品交換の前提をなすものは、最早や自然的條件といふよりは、むしろ生産力の發展における差異であり、不均等である。今日では、自然的資源がいかに豐富でも、それを利用する技術的・經濟的條件の缺けてゐるところでは、それは死せる資源に過ぎない。反對に、生産諸力の發展した國は、國内に出來ないものを原料にしていろんな物をふんだんに生産し輸出する。綿なんか少しも出來ない日本や英國が、世界最大の綿製品輸出國であつたり、大變な石炭や鐵が埋藏されてゐるといふ支那が、鐵製品や石炭の輸入國であつたりする。さういふ具合に、各國の生産力の發展における不均等といふことが、自然的條件の差異を超越して、各國の間に分業を成立させる。

更に、生産力の發展した資本主義國は、安い價格といふ「重砲」をもつて後進國の小規模生産や手工業や家内工業をどん／＼破壞して資本家的商品に對する市場を擴大すると同時に、彼等後進國の生産者達を專ら原料供給者たる地位に就かせてしまふ。そこで資本主義世界經濟においては、農業國と工業國との間の分業が成立する。

かうなつて來て初めて、社會的分業は世界的規模において確立されるのだ。國際的な商品交換は、もはや少數特産物の交換ではない。それは、原料と製品との退つ引ならぬ交換であり、またどうしても無くてならない製品と製品との交換である。國と國との間の持ちつ持たれつの關係は非常に緊密になり、一方の生存と發展は、他方の生存と發展のための條件となる。各國の自給自足性は消滅し、孤立は不可能になる。個々の「國民經濟」なるものは、もはや獨立的な諸單位をなすものではなく、世界經濟といふ一個の經濟單位の內部の部分的諸單位となり、一つの全體の、種々なる構成部分と化す。

かやうに、世界の生産は今や全く社會的性質を持つに至つたけれども、それが資本主義世界である以上、所有は飽くまでも私的であり、生産の目的は利潤の追求であり、資本の任務は搾取である。搾取が行はれ、階級對立がある以上、各民族における搾取者階級、支配者階級は、その階級支配の道具たる×××を持つ。そして彼等はおの〳〵他民族の搾取と抑壓のためにそれを使用する。更にまた、彼等相互の競爭戰のためにそれを使用する。對立・鬪爭の場面は、世界的規

模にまで擴大されてくる。諸々の「國民經濟」は、一つの世界經濟の構成部分であり、お互の間に密接な相互依存關係を持ちながら、お互に絶えず鬪爭し、分裂しようとする。だから、資本主義の世界經濟は「對立物の統一」である。吾々が、大變な矛盾だと言つたのはこれである。

世界市場、卽ち、世界的規模における商品交換は、この矛盾に基づいて生じてゐる。だから、それは決して「有無相通ずる」といつたやうな美しい動機と目的の下に成立するのではない。國際貿易はすでに缺くべからざる人類の生存條件をなすにも拘らず、世界市場は飽くまでも利潤實現の場面であり、最も激烈な資本家的競爭の場面であり、國家的對立の場面である。さうであればこそ、金そのものがピカ〳〵の金屬肉體のまゝで貨幣として出動しなければならないのだ。また貨幣として爭奪されざるを得ないのだ。

二　國際金融市場

資本主義世界の諸國家の間には、商品の輸出入が行はれるばかりでなく、資本の輸出入が行は

れる。そして、商品の取引と資本の貸借とに基づいて國際信用が發展する。

生産力の發展した國では、資本の蓄積も進んでゐる。が、さういふ國は國ほど、平均利潤率は低落し、過剩資本は多くなる。それと共に、資本はどうしても國外へ輸出されねばならなくなる。

國外に投下される資本には、長期のものと短期のものとがある。

長期の海外投資には更に、利潤の獲得を目ざすものと、利子の獲得を目ざすものとがある。例へば、日本の紡績資本家は上海や青島に紡績工場を澤山持つてゐる。さういふのは、利潤の獲得を目ざすもので、産業資本輸出と呼ばれるのだ。この種の資本輸出は、關税によつて促進されることもしば〳〵ある。といふのは、――例へば支那が、日本から輸入される綿布に關税を課すといふと、日本の紡績資本家は、日本で綿布を生産する代りに、支那へ資本を送つて紡績工場を建て、そこで綿布を生産して關税を免れようとする。

利子の獲得を目ざす方のものは、貨幣資本輸出である。例へば日本の資本家が英米佛で發行される公債に投資したり、アメリカの資本家が日本の電力會社の社債に投資したりするが如きであ

る。もつとも、この貨幣資本の輸出には、政治的意義を持つものが少なくない。××が、××の政府に貸附けた「借款」の如きはすべてそれである。此の種のものは、べら棒に高い利子を取るのが常だが、同時にまた利息はおろか元金さへ取れなくなることも非常に多い。しかし、貸す方はそれを承知で貸す。なぜなら、敵は本能寺にあるのであつて、金を貸すことによつて相手國の權力者を籠絡し、「利權」を取つたり、政治を左右したり、あはよくば×××××といふのだから。

貨幣資本輸出は、しば／＼、産業資本輸出と結びつき、また商品輸出の前提となる。例へば、支那政府に金を貸し、日支の共同投資で石炭を掘る。乃至は、貸した金で、日本製の機械やレールを買はせたり、鐵砲、大砲、軍艦等を買はせたりする。鐵砲も軍艦も商品である。

要するに、資本輸出は、一定額の價値を一國から他國へ移すものだが、長期の資本輸出にあつては、その價値が貨幣形態で外國へ送られる場合と、商品形態で外國へ送られる場合とある。だが、短期の海外投資即ち資本輸出は、常に貨幣形態で行はれる。

短期資本輸出は近來は特に重要性を増して來た。それは、恐慌の頻發と激化、および革命、その他の政治的不安の頻發および激化のために、

(一)貨幣資本を生産資本に轉化しがたいこと、

(二)自國における貨幣資本の需要が減つたこと、

(三)しかも長期の海外投資は危險であること、等の理由に基づいてゐる。

この短期の海外投資といふやつは、利子の高低を追ふて國から國へと移つてゆく。交通機關と信用とが發展し、ニュースの傳達および送金の技術が發達してくると、電報一本でどの資本主義國へでも金を送つて投資することが出來るので、資本の移動は極く迅速に行はれる。外國の取引所で株の賣買をすることぐらゐは何でもないことになり、資本はその日〳〵の金利次第で、どこへでも利子稼ぎに出かけてゆくやうになる。先年、アメリカで氣狂ひじみた取引所景氣が起つた時は、莫大な「短期資金」が蟻の甘きにつくやうに世界中からそこへ流れ込んでゐた。また、去年の九月に三井銀行が五百萬圓の金に利子を稼がせようとロンドンへ送り込んだその翌る日にイギ

リスの金輸出禁止に會つて五百萬圓は見事に罐詰になつたといふことなども、近來有名な話である。

そんな風に便利になつてくるといふと、今度は爲替投機なるものも起つてくる。今日はドル對ポンドの比率上ポンドの方が有利だが、あすは却つて不利になるだらうといふ見込が立つと、例へば日本の資本家はポンドからドルに乘りかへておく。そして思惑通りポンドが不利になつた時再びポンドを買ひさへすれば、そこに儲けが浮んで來る。つまり、今日は蜜柑三個と煙草一箱との相場だが、あすは蜜柑が安くなつて四個の割合になるといふ場合に、今日のうちに蜜柑三個を煙草に換へておいて、あすまた蜜柑を買へば四個買へる、卽ち一個の儲けといふ勘定だ。

このやうに投機や利子の動きなどにつれて移動するものが謂はゆる「國際短期資金」なるものである。

「國際金融市場」といふ時は、主として右の短期資金および前記の貨幣資本の國際的流通を指していふのである。

一國內においても商品市場の中心地と金融市場の中心地が出來てくるやうに、世界においても同樣の中心地が出來てくる。かゝる中心地は同時に、爲替取引の中心市場ともなる。戰前ではロンドンとパリーがさうした中心地であり、就中ロンドンがさうだつた。パリーは商業取引ではロンドンの足許にも及ばなかつたけれども、貨幣資本の取引市場──特に募債地──としては、ロンドンと肩を並べてゐた。(さうした中心市場を持つたフランスは高利貸的帝國主義の國と呼ばれてゐた)。

金融中心地には各國の資本が集まつてくる。中心地の巨大銀行は、それを預かることにより、それを利殖することによつて、巨大な利益を得ることが出來る。なぜ中心地に各國の金が集まるかといふと、各國の取引は最も優勢な國の貨幣即ちポンドならポンドを計算貨幣として行はれるから、各國は支拂用のため、收支決濟のために、いづれもポンド貨を用意しておくわけなのだ。更に、各國が公債や社債の募集をやるに際しても、かういふ世界的金融中心地ならば非常に便利に行はれるから、各國の募債も自然そこで行はれ、英國なら英國は坐ながらにして巨額の發行利

得を得るといふことになる。で、かういふ利益があるところからまた有力資本主義國の間に金融中心地爭覇の鬪爭がおつぱじまつてくる。

だが、中心地となるためには、各國から十分な信用を受けねばならぬ。その信用がなければ誰も安心して金を置いておかないからである。ロンドンは、戰前までは正にかゝる信用を受け、國際金融市場の中心地であることが出來た。しかし、戰後は、英國の信用は傾き加減で、覇權は米國へ移つて行つた。昨年九月に英國が「金本位停止」を餘儀なくされたことは、英國の決定的敗北を物語る。金幾何を示すかわからないやうなことになつたポンドに信用をおくわけには行かないし、さういふことでは國際爲替の標準にもなり得ない。ヨーロッパでは、よかれあしかれパリーが中心地をなしてゐる。ニューヨークとパリー、これが現在、世界の二大金融中心地である。各國の募債も主としてこの二大中心地——乃至は三大中心地——で行はれるし、「國際短期資金」もおのづからこの中心地を中心にして各國の間を流動する。つまり、世界の資本家達は、國際的に最も便利で安全な中心地に金を預けておいて、そこから臨機應變に各地へ出動させるといふわけである。

かやうに、商品の輸出入と資本の輸出入とがすべての國と國との間に行はれると、そこにどうしても國際勘定なるものが生じてくる。

三　國際勘定の決濟と金

一例として、日本と米國とをとらう。米國の資本家は、生絲、絹織物、茶、雜貨、等々を日本の資本家から買つてゐる。日本の資本家は棉花、木材、自動車、フイルム等々を米國の資本家から買つてゐる。米國資本家も代金を支拂はねばならないし、日本資本家も代金を支拂はねばならぬ。どちらが多く支拂ふかといふことは、日本から米國へ輸出する諸商品の總價格と、米國から日本へ輸入する諸商品の總價格との大小によつて定まることは明かだ。これを貿易勘定といふ。そしてこの貿易勘定において、米國からの輸入が、日本からの輸出よりも大きい時は、日本の對米貿易は輸入超過（または入超）だと言ひ、反對の場合は輸出超過（または出超）だといふ。輸入超過の場合には、日本資本家は恰度それだけ多く米國資本家に對して支拂ふ譯だから支拂超過

になるし、輸出超過の場合には恰度それだけ多く日本資本家が米國資本家から支拂を受ける譯だから受取超過になる。

この輸出と輸入の差額は、貿易勘定の差額（バランス）と呼ばれたり、單に貿易尻と呼ばれたりする。そして、この貿易尻が、輸出超過＝受取超過を現す場合には、日本の對米貿易尻は「順」であるといひ、反對の場合即ち輸入超過＝支拂超過を現す場合には、日本の對米貿易尻は「逆」だと言ふ。

むろん、かうしたことは、ひとり日本と米國との間に生ずるだけではない。日本と英國、支那、フランス、印度、等々すべての國の間に生ずる。從つて諸君は、日本からすべての國への輸出を一方に持ち、すべての國から日本への輸入を他方に持ち、兩者を比較し得るわけである。その場合には、諸君は、全體としての日本の外國貿易勘定を知り、全體としての輸出超過＝受取超過、乃至は輸入超過＝支拂超過、を知り、全體としての貿易尻の「順逆」を知ることになる。

これはすべて日本を基準にしての話であるが、同樣のことは更に米國、英國、支那等々、あらゆる國を基準にして考へることが出來るのだし、また事實さういふことになつてゐる。

で、商品の輸出入の方はさうなつてゐるが、それと並んで資本の輸出入がある。この方は、一國の資本家と他國の資本家との間の賣買ではなくて貸借である。貿易勘定の方では、買つたものと賣つたものとの差額の如何によつて、一國は受取超過になつたり支拂超過になつたりするが、資本の國際勘定の方ではどうか？

例へば、米國の電氣資本家が日本でマツダランプ會社を起すとか、日本の電力資本家等々が、米國のモルガン等から金を借りるとかいふことになると、米國から日本へ金が入つて來る。あべこべに日本の三井・三菱等々が、米國や英國で發行された公債や株券などに投資するとか、紡績資本家が上海に工場をつくるとかいふことになると、日本から米國・英國・支那等々へ金が出て行くことになる。が、もちろん、さうした金は遊びに行つたり來たりするのではない。利子を生み、利潤を生むために行つたり來たりする。だから、日本へやつて來た外國資本家の金が利子や利潤を生めば、それに相當する金が外國へ出てゆくことになるし、反對に英米支那等へ出かけて行つた日本資本家の金が利子や利潤を生めば、それに相當する金が日本へ入つてくることにな

る。更にまた、外國へ貸した金、外國の有價證券に投資した金といふものは、晩かれ早かれ返濟され、回收されるから、それだけのものは外國から日本へ入つて來るなり、日本から外國へ出て行くなりする。

もつとも、これらすべての資本の取引において資本の貸手および借手となるものは、私的資本家のみならず、國家や地方自治體などもあつて、それらが時には非常に大きな役割を演ずるのだ。

さうすると、一定の時、もしくは一定の期間――例へば一年――における資本の國際勘定において、日本なら日本といふ一國から出て行く分は、

　　貸付ける資本 ＋ 外國へ回收される資本 ＋ 輸入された資本の利潤及利子

といふことになり、日本なら日本といふ一國へ入つて來る分は、

　　借入れる資本 ＋ 本國へ回收される資本 ＋ 輸出された資本の利潤及利子

といふことになる。

けれども、實際上は、右の出てゆく分のすべてが出てゆくわけではないし、入つてくる分のす

べてが入つて來るわけでもない。例へば「借入れる資本」は、入つてくる分の一項目ではあるが、それをもつて前の借金を返すといふことになれば入つて來ない。出てゆく分の一つとしての「貸附ける資本」の方も同樣の事情によつて出て行かないことがある。更に「回收される資本」が、新たなる貸附又は借入に廻されることになれば、それだけ出入りが違つてくるだらう。更にまた利潤及び利子として出てゆくなり、入つてくるなりする筈のものが、新たなる借入や貸附に廻されることもしば〱ある。

そこで、さうしたものをすべて差引くといふと、一定の期間――例へば一年間――において、日本なら日本へ現實に入つて來る金額と、日本から現實に出てゆく金額とが出る。そしてもし、入る金額の方が大きければ、そこに資本勘定の受取超過が生ずるわけだし、また出る金額の方が大きければ支拂超過が生ずるわけである。

さうすると、諸君は、國際間の受取勘定乃至は支拂勘定の二大項目を持つことになる。一つは商品の輸出入即ち貿易から生ずる收支であり、もう一つは資本の輸出入から生ずる收支であ

る。この二つでもつて、諸國の國際勘定尻の順逆は大體決定されるのだ。

もちろん、兩種の勘定尻の間の關係はいろ〳〵となる。例へば、

(一)貿易關係の受取超過は二億圓で、更に資本關係の受取超過が三億圓あれば、合計五億圓の受取超過になるが、もし二つとも支拂超過であれば、合計五億圓の支拂超過になる、等。

(二)貿易關係の受取超過は二億圓あつても、資本關係の支拂超過が二億圓あれば、とん〳〵だが、もし三億圓あれば、差引一億圓の支拂超過になる、等。

(三)あべこべに、貿易關係は支拂超過で、資本關係は受取超過の場合にも、右と同じやうな相殺もしくは差引勘定が出來てくる、等。

尙ほ、これらの二大項目の外に、運賃と保險料の收支があつて、主要資本主義國においてはそれが相當の重みを持つ。英國、米國、日本などのやうに大きな商船隊を持つ國では、この項目における受取超過がなか〳〵大きいのだ。それからまた、海外出稼人の送金、海外旅行者、海外滯在者への送金なども、それ〴〵國際勘定の項目をなす。だから、それらすべてのものを足すな

り引くなりしなければ、本當の國際勘定尻は出ないことになる。

それからもう一つ、一の勘定項目が他の目的に振り向けられることも珍らしくない。といふのは、例へば資本關係による受取分三億圓の全部または一部をもつて、商品を購買するとか、もしくはまた貿易關係による受取分二億圓の全部または一部をもつて、海外投資に充てるとかいふが如きである。かゝる場合には、それだけのものを當年の受取勘定の内から差引かれることはもちろんだ。

で、以上の如き諸勘定とその差引とによつて、一定年度における各國の國際勘定尻は決定される。或る國は、受取超過國として現はれるだらう。或る國は、支拂超過國として現はれるだらう。更に或る國は、また、國際收支がほゞ均衡を得た國として現はれるだらう。

各國の國際勘定は、貿易勘定にせよ、資本勘定にせよ、またその他のものにせよ、その時々のいろんな具體的事情によつて、大小および順逆が定まる。いろんな事情の中にはもちろん經濟外の諸要因もある。それはさうだが、しかし、多かれ少なかれ長期をとつてそして一般的に言へば、

受取超過國は概して生產力の發展の程度の高い國であり、支拂超過國は概して生產力の發展の程度の低い國である。

その關係は先づ貿易勘定に現はれる。が、貿易上の支拂超過が毎年々々續いて起れば、その國は結局破產するより外はない。そこで、さういふ國は資本輸入國となり、資本勘定の受取超過でもつて一時辻褄を合せなければならぬ。輸入された資本が、その國の生產力の發展を非常に急速ならしめることに役立てば、貿易上の支拂超過も次第に減少するわけだが、さうでない限り第二、第三の資本輸入が必要になり、大變な借金國としてひどい搾取を蒙ることになる。が、それにしても、その國の生產力は徐々に發展するし、もし何等かの不可避的な事情で搾取や壓迫がゆるむやうなことがあれば、生產力は急激に發展する。さうなつてくると今度は、世界的に異常な過剩生產が起つてくる。

が、いづれにせよ、世界戰爭以前においては、各國の國際勘定は曲りなりにもどうにか均衡が保たれてゐて、恐慌が起つても多くの破產國を出すやうなことはなかつたが、それは、主として、

生産力の發展の程度の高い國々から低い國々の方へ絶えず資本が流れ込んでゐたからである。

　この資本輸出は、發展した資本主義國に對してどんな役割をしたかといふことは諸君もおよそ御承知の筈である。それは、利潤率の急激な低下を免かれしめ、過剰生産と恐慌とを一時免かれしめ、資本蓄積の增大を可能ならしめつゝ、その國をます〳〵寄生蟲的な利子衣食者國と化すのであつた。ところで、先進資本主義國は、かうして寄生蟲的な性質を增せば增すほど、その生産力の發展のテンポは、少くとも相對的には、のろくなる。典型的なのは、イギリスであつた。イギリスは、いつの間にか貿易上の支拂超過國となり、たゞ資本勘定の尨大な受取超過(利潤利子等)でそれを埋め合せて、全體としての受取超過國の地位に立つてゐた。英國ブルヂョアジーのかうした寄生生活は、當時、世界のブルヂョアジーの羨望の的となつたものだが、戰後は忽ち馬脚をあらはした。戰後の詳しいことは後にする。

　が、さて、吾々の問題は、國際勘定はどうして決濟されるかといふ問題である。

日本の資本家は、米國の資本家から自動車だの何だのを買ふ、また米國のスチール株だの何だ

のに投資する。本來ならば、その際いち〳〵貨幣たる金を米國へ送るべき筈なのだ。米國の資本家が日本の商品を買つたり、日本へ金を貸したりする場合も同樣で、本來ならば日本へ金を送るべき筈なのだ。そのむかし、國際貿易なるものが、少數特產物の交換に過ぎなかつたやうな時代には、國と國との間の金の貸借なんてことは殆どなかつたし、商品の交換は、直接の物々交換でなければ、常に金・銀・寶石といつたやうな貨幣と引換へに行はれた。否な、交易の主要目的は、外國から出來るだけ多く金銀をかつさらつて來ることにあつた時代もあつたのだ。しかるに、資本主義が發展し、信用が發展するにつれて、事情は違つてきた。諸國のブルヂョアジーは決して金の爭奪をやめはしないし、近來は特にまたそれが猛烈になつてはきたが、しかしそれにも拘らず、眼まぐるしいテンポで發展する資本主義世界の日常不斷の國際取引に當つて、諸國のブルヂョアジーが出來るだけ信用を利用しようとするのは當り前のことである。

そこで、資本主義の段階においては、國際取引の大部分は信用で行はれる。

どんな國でも、一方には支拂勘定を持ち、他方では受取勘定を持つてゐる。支拂勘定と受取勘

定とは、信用を通じて相殺される。その相殺は、資本勘定と資本勘定との間に行はれ、また貿易勘定と資本勘定との間にも行はれる。それについてはすでにあらまし述べてあるが、信用を通じての相殺は更に貿易勘定そのものにおいても生ずるのだ。それは、前に說明した支拂信用の場合に生ずる相殺と全く同じ理窟のものである。そこで、さういふ風に債權と債務、借りと貸しとの相殺が行はれる限りでは、貨幣たる金の出動を見ずして取引は濟まされるといふことになる。

だが、いかに相殺が盛んに行はれたところで、到底相殺し切れない部分が殘るといふことも明かだ。それは卽ち、一國の總勘定の受取超過または支拂超過をなす部分である。それだけの部分は、どうしたつて支拂超過國から受取超過國へ金そのものを送つて決濟しなければならないのだ。諸君が、例へば一年間における或る一國の支拂超過額を知れば、大體同期間にその國から流出する金の總量を知ることが出來る。更に、他の一國の受取超過額を知れば、大體その國へ流入する金の總量を知ることが出來るだらう。

もつとも、流出または流入する金の量は、支拂超過額または受取超過額とぴつたり一致する譯

では決してない。

例へば、大地震、大凶作、戰爭、さういつたことのために一國が俄かに異常に巨額な物を外國から買ふやうな場合には、信用だの相殺だのといつても相手にされないから、金がいきなり購買手段として乘り出してゆくことになる。また、戰爭の費用を貸す場合、猛烈な爲替投機が起つて送金を必要とする場合なども、どうしても金そのものを外國へ送らねばならぬことがある。この場合の金は、「一般的富」といふ資格でもつて一國から他國へ移されるのだ。

最後に、信用で取引された商品の支拂をする役目をもつて金が出動する場合、卽ち金が國際的支拂手段として出てゆく場合は一番多いのだが、この場合でも、それに先立つ種々なる相殺が完全に行はれるとは限らないから、純粹の支拂超過額と金の流出量とが正確に一致するわけではない。

だが、これらの點を考慮に入れることを忘れさへしなければ、一般に、國際勘定の支拂超過額は金の流出量を決定し、受取超過額は金の流入量を決定すると見て差支へない。(但し、こゝでは、金の二つの流れのうちの一つに問題を限つてゐるのだから、金生産のことは度外視されてゐる)。

もつとも、一定年度における或る國の支拂超過額は例へば一億二千萬圓であるとしても、流出すべき一億二千萬圓の金は一度にどつと押し出すのでもなければまた毎週五十萬圓位づゝちびちびとのべつ流れ出すのでもない。資本家達は、どんな時でも算盤をとつてゐる、そして彼等が手形で支拂をするよりも「正貨現送」した方が有利だと見るといふと、金は俄かに中央銀行の地下室から引出され、最寄りの波止場から積出される、別に五色のテープで別れを惜まれるやうなこともなく……。

資本家達が「正貨現送」は有利か不利かを定める際に、彼等の算盤の基準となるものは外國爲替相場である。

四　爲替相場

日本ブルヂ ヨ アジーが金解禁をやつてから再禁止をやるまでの間の或る日に、諸君がもし對米爲替相場は今いくらかと尋ねたならば、多分、四十九弗八分の五見當だといふ答を得たことだら

う。

この四十九弗八分の五とは一體何のことか？ それは、日本の金の百圓は、アメリカの金の四十九弗六十二仙五に換へられるといふことを意味してゐる。では、何の必要があつて日本の金をアメリカの金に換へるのか？ それは、アメリカに對して金を拂はなければならないからであり、またアメリカへ拂ふのにはアメリカの金で勘定して拂はなければならないからである。て、例へば諸君が、アメリカから買ふ本の代金を送らうと思つて郵便局か銀行へ行き、百五十弗の爲替を組んでくれといふと、郵便局や銀行は右の換算率で計算して、それでは三百二圓二十七錢出してくれと言ふだらう。

しかし諸君は、かういふ質問を出してもよいわけだ、——一圓とは二分の金に與へられた名だし、一弗とは四分〇一二の金に與へられた名で、その割合で行くと、百圓は四十九弗八十四仙六になる筈であつて、それが圓と弗との本當の換算率であり、謂ゆる法定平價であるのだから、僕が送らうとする百五十弗もその換算率に從つて三百圓と九十三錢出せばよいわけではないか？

それを三百二圓二十七錢だなんていふのは僕をゴマ化すのではないか？　とさうすると、郵便局や銀行はニヤ〱して答へるだらう、――いや、法定平價は仰せの通りだが、今の相場ではさうなるんです、と。そこで、諸君は何だか馬鹿々々しいと思ひながらも仕方がないから一圓三十四錢ばかり餘計にガマ口から出すといふことになる。

この爲替相場なるものは、爲替市場で定まるのだ。爲替市場は、日米間のものならば、日本の資本家と銀行とそれからアメリカの資本家と銀行とによつて構成される。この市場で彼等は何を取引するか？　外國爲替手形を取引する。

日本と米國との間にいろんな國際勘定が生ずる以上、日本においても米國においてもおなじやうな手形取引が同時に起るのだけれども、日本の側を觀察しただけでも理窟はわかる筈である。――諸君でもアメリカから本を買ふために大枚百五十弗を送ることさへあるのだから、綿や自動車を輸入して儲けたりアメリカの公債や株券を買つて利殖したりする連中は、何億といふ金をアメリカへ拂はなければならぬ。が、いち〱正貨（金）を送るのは大變な手數だから、彼等はニ

ユーヨーク宛ての爲替手形即ち弗手形の需要者として現はれる。ところが他方には弗手形を供給する者がある。この方は、アメリカへ賣つた生糸の代金の受取分があるとか、アメリカから借りる金の受取分があるとか、乃至はまたアメリカに當座預金を持つてゐるとかいふ連中だ。この連中は、アメリカから受取るべき金をいち／＼正貨で取り寄せる代りに各自の債權を手形にして前の連中に供給し、彼等から金を受取ればよいわけである。

もつとも、需要者と供給者とが直接に相手を探し出すのでは、金額の不一致や支拂期日の相違などから大變厄介なことになるわけだが、そこには銀行といふ便利なものがある。

銀行といつても資本金百萬圓なんていふちつぽけなのでは問題にならないが、正金銀行、三井銀行、三菱銀行、安田銀行、朝鮮銀行といつたやうな大きなやつで外國に支店を持つてゐるのがある。彼等は手形の供給者からは手形を買ふ、つまりアメリカに對する合計何億弗といふ債權を表はす數々の證書をば、手形割引をする時のやうにして買ひ取つて、それをアメリカへ送つてやる。そして一方では銀行はアメリカに對して合計何億弗といふ債務を持つところの多くの資本家

達がニューヨーク宛ての弗手形の需要者としてやつて來るといふと、それ〴〵の金額の手形をこしらへて彼等に賣つてやる。

彼等は彼等で、それをアメリカへ送つてやる。この取引に際して、銀行は、弗手形を賣つて得ただけの圓貨幣（謂ゆる圓資金）でもつて弗手形を買ふことになる。

それで日本の方は一應片がつくわけだが、アメリカの方はどうなるか？　銀行は、買取つた弗手形（債權證書）をアメリカの支店へ送つてやる。支店は、その手形をアメリカの債務者に示して支拂をさせるのだ。そこで支店は弗貨幣（謂ゆる弗資金）を手に入れる。同時に一方、日本の本店銀行から弗手形を買つた先生は、それをアメリカの債權者へ送る。すると、この債權者は、更にそれを例の支店にさし出して支拂を受けるといふわけだ。その際、支店は弗資金（弗貨幣）を持つてるから支拂ひに困らない。が、その弗資金の大きさは、アメリカ資本家に對する日本資本家の債權（受取分）の大きさで定まることは明かだらう。

これで、四方八方調子よくいつて債權債務は相殺された恰好になる。例へば日本の生糸輸出商

達は、その代金の何億圓かを先づ圓貨幣で受取つたし、アメリカの生糸輸入商はそれに相當するものを弗貨幣で支拂つたであらう。更に、日本の棉花輸入者はその代金の何億ドルかに相當するものを先づ圓貨幣で支拂つたし、アメリカの棉花輸出商はそれだけのものを弗貨幣で受取つたであらう。

で、要するに、銀行は、爲替手形の賣買をやる爲替銀行としては、中間に立つて利子と手數料をとるところの——時には大いに投機で儲けるにせよ——一の仲介者に過ぎないのだ。銀行は、いくら澤山金を持つてゐるにしても、利子にも手數料にもならないやうな仕事には一文も使はない。だから、弗手形に對する需要は結局弗手形の現實の供給によつて充たされることになる。言ひ換へれば、弗手形を銀行に賣る者がなければ、誰も銀行から弗手形を買ふことは出來ないのだ。ところで、その弗手形の需要は、アメリカに支拂ふ金額の大きさで定まるし、供給はアメリカから受取る金額の大きさで定まるだらう。例へば、アメリカへの支拂金額が八億弗で、アメリカからの受取金額は六億弗だとすれば、弗手形の需要は八億だが、供給は六億しかないだらう。

むろん、日本資本家の取引先はアメリカだけではない。だから、弗手形があると共に、磅手形もあり、法手形もあるわけなのだ。しかし、問題を簡單にするためには、日本の一切の對外取引においては一應みな弗が計算貨幣として用ひられるものと考へても差支へない。つまり、イギリスとの取引でも、フランスとの取引でも、みんな一先づ弗に換算してやるものと假定すればよい。さうすれば、日本には弗手形だけしかないことになる。實際にはさうなつてゐないけれども、しかしさうなる傾向は現實にある。

それでは、爲替相場はどうして定まるか？　それは弗手形の需要と供給によつて定まるのだ。需要と供給とが一致してゐる場合には問題はない。その場合には、日本貨幣の米國貨幣への換算率は、法定平價通りである。即ちそれは一圓が代表する金量と、一弗が代表する金量との割合によつて定まるから、百圓は四十九弗八分の七に相當し、それがそのまゝ爲替相場になる。この場合には、相場は平準にあると言はれるのだ。

だが、需要と供給は常に一致するとは限らない。いや完全に一致するなんてことは偶然だ。弗

手形の需要の大小は、アメリカその他への支拂額の大小による。供給の大小は、アメリカその他からの受取額の大小による。そこで、支拂額の方が受取額よりも大きくて、需要は供給を超過したらどうなるか？

弗手形を求める者は銀行へ行く。銀行ではどうも弗手形が不足で困るといふ。しかし、それでもなんでも欲しいといふ。それなら、――と銀行は言ふ――、百圓について四十九弗八分の五でもいゝか、と。買手は、どうも仕方がない、と頭を搔く。――つまり相場は、八分の二（二十五仙）だけ下つたのだ。

ちよつと考へると、需要が增したのに相場が下るといふのは變なやうだが、それは圓を基準として、百圓に對し何弗といふ風に言ひ現はすから、さうなるのだ。もし弗を基準として百弗に對し何圓といふ風に言ひ現はすことにすれば反對になる。卽ち、弗手形に對する需要が超過すれば、爲替相場は例へば二百圓五十錢から二百一圓五十一錢に騰貴するだらう。だが、こゝでは慣行に從つて百圓基準で勘定する。さうすれば、今言つたやうに相場は二十五仙下つたのだ。

これを言ひ換へれば、圓の弗への換算率は低落した。さういふことになると「圓は下落した」と言はれる。弗に對して圓が下落したことはたしかである。だが、この場合、圓だの弗だのといふのは一體何だらう？

圓は、貨幣以外のものを表はす筈はない。弗も同樣だ。ところで、圓の金純分は減つたのではない。それは依然として二分の金である。さればといつて、弗の金純分が増したのでもない。それは依然として四分〇一二の金である。だからこの場合の「圓の下落」は、「貨幣としての貨幣」の資格における圓の下落でないことは明かだ。では、流通手段または支拂手段としての貨幣の資格における圓の下落だらうか？　むろん、さうでもない。なぜといつて、圓はたゞ弗と比較されただけの話であつて、まだ購買手段として作用しもしなければ、支拂手段として債務決濟の役を果したわけでもない。それに第一、國內市場においての圓は、少しも異常を呈してゐない。ヨリ少量の商品としか交換されなくなつたわけでもなんでもない。圓の下落は、明かに、世界市場においてのみ生じてゐる。とはいふものの、圓はまだ世界貨幣として、卽ち金の現身をもつて、出動

したのではない。

だが、諸君は、もう一つの貨幣の機能を記憶してゐるだらう。それは計算貨幣としての機能であつた。（第二講の第二節および第八節を參照あれ）。いはゆる爲替相場なるものの決定に際し、世界市場において機能するところの圓貨幣や弗貨幣は、たゞ計算手段として機能してゐるだけなのだ。從つてその二つのものゝ比較において圓の下落が生じたとすれば、それは計算手段としての貨幣の資格における圓の下落に過ぎないのだ。

世界經濟の內部においては國民經濟と國民經濟との對立がある。それ〴〵の國民經濟の內部においては、貨幣はそれ〴〵の「國民的制服」をつけて國家の體面を重んずる。圓だの、弗だの、磅だのがそれである。そこで、世界市場においては、卽ち國際取引においては、米國への支拂は弗で計算しなければならないし、日本への支拂は圓で計算しなければならない、等々といつたことになる。だから、世界市場においては、世界貨幣は「現ナマ」としての赤裸々の金銀だけれども、それが出動する前に先づいくつかの國民的貨幣が、計算貨幣として對立する。そして、一の

計算貨幣單位は他の計算貨幣單位に引直されねばならぬ、換算されねばならぬ。この換算に際して、一定の事情が生ずれば、一の計算貨幣單位は他の計算貨幣單位に對して下落する。

吾々の例においては、弗爲替手形の需要が供給を超過したことによつて圓の下落が生じてゐた。が、反對にもし、弗手形の供給が需要を超過する場合には、「弗の下落」が生ずるだらう。つまり、弗手形の出し手が多過ぎて買手がないならば、出し手は例へば百圓について五十弗でなければ銀行へ賣れないだらう。爲替相場は五十弗に騰貴する。そしてそれはもちろん、圓に對する弗の下落を意味するのだ。

そこで、もう一度、圓の下落卽ち日米爲替相場の下落の場合に立戻り、——それは一體どこまで下落し得るかを考へて見る。

相場が下がれば下がるほど、弗爲替を買ふ者は割が惡くなる。言ひ換へれば、手形で一弗を手に入れるのにます〳〵多く圓を出さねばならなくなる。彼等は、アメリカへ支拂ふべき金があつて、弗爲替を買ふのだが、餘りに割が惡くなれば考へて來る。そんなことなら、手形なんか買つ

て送るより、いつそ、正貨を送らうか、と。彼等は算盤をとつて正貨の輸送費を彈き出す。それはおよそ百圓について三十仙になる。もし、それだけの輸送費をつかつても尚ほ且つ正貨を送つた方が得であるほどに、それほど爲替相場が下つて來るならば、彼等は正貨現送を選ぶだらう。彼等は、自分の取引銀行にそれを依賴することが出來る。銀行は、彼等のために、日銀でお紙幣を金に兌換して輸送の手續をとれば、金は左樣ならとも言はないで流出する。

米國に對して支拂勘定を持つ者は、今や爲替手形といふ信用證券を利用することを止めて、正銘の金——世界貨幣——そのもので支拂をする。卽ち、弗手形の需要者たることを止めて正貨を現送する。さうすれば、それだけ弗手形に對する需要は減るわけだ。この需要減少のために、需要の大きさが供給の大きさと同じになれば、日米爲替相場は平準になり、圓の弗への換算率は再び法定平價を回復するだらう。

あべこべに弗手形の供給が需要を超過して弗の下落が起る時も同樣である。その下落が或る點以下に達すれば、今度は、日本の債權者は、アメリカから日本へ正貨を送らせた方が有利になる。

正貨で支拂ひを受ければ、弗手形を出す必要がなくなるから、それだけ弗手形の供給は減る。そして供給が需要と一致するに至れば、爲替相場は平準に復すといふことになる。

いま、正貨の輸送費は普通百圓につき三十仙ほどだから、それを勘定に入れて、手形による支拂と正貨現送による支拂との損得を比較して見ると、爲替相場が四十九弗八分の五以下に下れば米國へ正貨現送した方が有利になるし、五十弗八分の一以上に上れば日本へ正貨現送させた方が有利になる。だから、この上下二つの相場は、正貨現送點と呼ばれてゐる。

さうすると、諸君は、かういふことがわかるだらう、――日米爲替相場は、弗手形の需給の大小に從つて、平準點を中心としてその上下に騰落するが、しかし、正貨現送點以上には騰貴しないし、以下にも下落しないものである。もつとも、正貨現送點なるものは一つの基準を示すだけだから、資本家乃至銀行は、その時の都合で、爲替相場が正貨現送點まで下らないうちに正貨現送することもあらうし、また少しぐらゐ現送點以下に下つても正貨現送をさし控へることもあるだらう。が、それにしても、爲替相場は、正貨現送點を甚しく超えて騰落するものでないこと

は明かだ。

で、諸君はこゝで次の諸點に注意する必要がある。

第一、以上のことは、米國も日本も金の輸出を自由になし得るといふことを前提するものだ。金の輸出は、一方では爲替相場の騰貴を五十弗八分の一の邊で喰ひ止めて弗の下落を阻止する作用を營むし、他方では爲替相場の下落を四十九弗八分の五の邊で喰ひ止めて圓の下落を阻止する作用を營むのだ。だから、どの國でも金の輸出が自由であり、從つて、一國と他國との間に金の流出入が自由である限り、爲替相場は騰落しても極く僅かであつて、しかも絶えず各國貨幣の法定平價の水準に一致せんとする傾向にある。そこで爲替相場がかういふ狀態にあるといふと、爲替相場は安定してゐると言はれるのだ。

第二、——けれども、爲替相場の安定は、金の流出入が自由に行はれることを前提とする。從つて、もし、最近の日本みたやうに金の輸出を禁止して、この前提を破壞してしまへば、爲替相場の安定は失はれる。爲替相場はどこまで下落するかわからない、圓はどこまで下落するかわから

ない。現に、日米爲替相場は、金再禁止以前には四十九弗八分の五見當のところにゐたが、再禁止後はずん〳〵おつこちて此の頃は三十弗だのなんだのと言つてゐる。

第三、かうした大幅の下落乃至變動は、金の輸出を禁止して、金の世界貨幣としての活動を拘束するから起るのだが、しかし、たとへさやうな禁止・拘束がない場合でも、爲替相場なるものは僅かにもせよ騰落する。この騰落は、爲替手形の需要供給の關係によつて生ずるのだが、その需要供給關係を決定するものは、國際的な支拂勘定と受取勘定の大小である。從つて、それらの勘定の大小がある限り、爲替相場の騰落はどうしても生ずるのだ。たゞ、金が自由に輸出されて國際的支拂手段の役目を果たし得るあひだは、例へば弗手形に對する需要の超過をなくすることが出來るから、僅かな下落に止まるといふだけのことである。

第四、さうだとすると、これを正貨流出に即して言へば、現實に正貨流出の起るのは、爲替相場が正貨現送點以下に下落した時、また下落せんとする時だといふことになる。ところで、一定年度における日本なら日本の、全體としての支拂超過が、例へば一億圓あるとすれば、弗手形に

對する需要はどうしても供給を超過することになり、從つて爲替相場はどうしても正貨現送點以下に下落しようとすることになるから、その度毎に金は流出し、結局は一億圓の金流出を見ねば止まないだらう。

五　金の流出入と金輸出禁止

各國が金の輸出入に制限を加へずに一國から他國への流出入を自由ならしめるといふことは、各國が保有する國際支拂準備金たる金をして世界貨幣たる機能を充分に發揮せしめることである。さうしておかないと、何よりも先づ爲替相場の安定が失はれる。

爲替相場が安定を失つて絶えず大きく動搖するとなると、例へばアメリカから買ふにしても、またアメリカへ賣るにしても、同じ價格の商品に對してどれだけの金を受取ることになるか、支拂ふことになるか、てんで見當がつかないから、商賣が出來ないといふことになる。資本の貸借の場合も同樣で、例へば借りた時と返す時とで金額が大變違ふといつたことになる。さうなれば、

國際貿易は阻害され、國際信用は萎縮するのは當然だ。その他まだいろ〳〵の困難と混亂とが生じて來る。

さうしたことになるのも、畢竟、各國間の金の流出入の自由を拘束して各國の保有する金の世界貨幣たる機能を制限または停止することに基づくのだから、諸國のブルヂョアジーは、退つ引きならないことがない限り、金の輸出の禁止をするやうなことはしないのだ。が、それにも拘らず、資本主義の矛盾は、しば〳〵彼等に金輸出禁止を餘儀なくさせる。

が、そのことについて述べる前に、金の流出入と、通貨および物價との關係について一言しよう。

一般に俗學說によると、金が澤山流れ込むといふとそれによつて通貨の量が增大し、通貨の量が增大するといふとそれによつて物價が騰貴するのだといふ。しかし、第五講の第五節に述べたやうな特別の場合の外は、通貨の量が物價の高さを決定するのではないことはすでに幾度も力說した。

金の流入が直ちに通貨の増加を來たすといふ考へも間違つてゐる。そんなことは、金貨が流通してゐる場合でも生じない。いかに金が流入したところで、流通する貨幣の量は、流通そのものの必要によつて定まるのだから、流通必要量以上に流入した金は、退藏される。たゞ、退藏された金の所有者は、それを遊ばせておくのを嫌がるから、それが貨幣資本として金融市場に現はれる。そしてそれによつて貨幣資本の供給が増すから、利子率は低下する。それが、金流入によつて生ずる直接の結果である。

金に代つて兌換券が流通してゐる場合は尚更さうである。流入した金は流通界に現はれないで、その代り兌換券が發行される。新らたに發行された此の兌換券は、預金に轉化され、利子率の低落を惹き起すといふことは、第五講第四節に述べた通りである。但し、異常な場合に生ずる異常に巨額な金流入は、前に一言した「信用インフレーション」を惹き起すことがある。しかも、その「反動」として來る恐慌は物凄い。そこで、そのために金の輸入禁止を餘儀なくされることもある。世界大戰中のスカンヂナヴィア諸國の如きはそれだつた。

金流出の場合に關する俗學說も同じやうに間違つてゐる。金が流出すればそれによつて通貨の量は減少し、通貨量が減少すればそれによつて物價が下落する、といふやうな因果關係はない。たとへ金貨が流通してゐる場合でも、その金貨がいきなり流通から引上げられて海外へ輸出されるといふやうなことはない。ナポレオン戰爭後のフランスの場合のやうに、巨額の金銀が輸出された場合でも、それは退藏されてゐた金銀であつた。流通必要量以上の金貨は常に退藏されてゐる以上、よしんば流通中の金貨がいきなり輸出されたとしても、その穴埋めに退藏貨幣が出かけて來る。そしてそれによつて流通必要量は維持されるのだ。

兌換券流通の國では、それらの點は一層明白になる。此處では、流通してゐる銀行券が引上げられて兌換され、それによつて得られた金が輸出されるといふやうなことは先づ絕對に起らない。だから、流通する兌換券の量に變化はない。萬々が一さういふことが起つても、銀行券の增發によつて譯もなく穴は埋められる。が、正貨現送に際して實際に兌換されるのは、流通外にある預金である。だから、金が流出すれば預金が減る、そしてそれは貨幣資本の供給減少を意味するか

ら利子率は騰貴する。こゝでも、それが金流出の直接の結果である。

そこで、もし、他の條件が同一ならば、「資本の缺乏、原料の高價、需要の減退、從つて事業の減退、從つて遂には流通の減少、必要な流通貨幣の減少となる」（マルクス）。

しかし、——と人は言ふかも知れぬ——、金流入の場合には、金流入——利子率低落——事業増大——通貨増大となるのだし、金流出の場合には、金流出——利子率騰貴——事業減退——通貨減少となるのだとすれば、金の流出入は結局通貨の増減となるのだから、つまりおんなじわけではないか、と。

大いに違ふ。もしも金の流出入がいきなり通貨の増減となるのならば、二つの現象のあひだには直接の因果關係がある。しかし、二つの現象の中間にどうしても利子率騰落・事業増減といふ二つの環が割り込まねばならないとすれば、因果關係は間接になり、現實の過程においてはそれだけ他の諸條件に左右される可能性が多くなる。從つて、金の流出入が通貨の増減を惹き起さない場合もます〱多く生ずるのだ。

が、それにしても、金の流出は、必然的に預金の減少となり、利子率騰貴となり、企業家利潤の減退となるとすれば、どうだらう？　たゞそれだけのことであつても、もし巨額の金流出が急激に起れば、信用恐慌、銀行恐慌の爆發を見る可能性は十分だ。そしてブルヂョアジーがそれを避けようとすれば、金輸出禁止を餘儀なくされるだらう。

巨額の、そして多かれ少なかれ急激な金流出は、國際勘定の支拂超過からも起り得る。その場合には、たとひ恐慌爆發の虞れはそれほどでなくとも、金準備の著しい減少は、兌換準備の不安を激成するし、また「戰爭準備金」の缺乏を意味することになる。つまりそれは、金準備のいくつかの機能の衝突を惹き起すのだ。そして、それによつてブルヂョアジーは金輸出禁止を餘儀なくされる。

更に、此頃の資本主義世界には、金輸出禁止を強制する新しいモメントが幾つも現はれてゐる。世界戰爭以前にあつては、各國の國際勘定は、第三節に述べたやうな事情によつて、どうにか均衡が保たれてゐた。從つて、爲替相場も安定狀態にあつた。周期的な恐慌の尖鋭な爆發を見る

際のみじかい期間には、爲替相場の動搖や異常な金の流出入などが起るけれども、間もなく「平靜」を取戻すのが常だつた。その時分のことについてマルクスは書いてゐる――

『一般的恐慌が終熄するや否や、金銀は、……前に均衡狀態の下において各國の特殊準備金として存在してゐた時と同じ割合で、再び各國の間に配分される。他の諸事情に變化のない限り、各國における金銀の相對的大小は、各國が世界市場において演ずる役割によつて決定されるであらう』。

これは、マルクスが特に言葉を添へてゐるやうに、『他の諸事情に變化のない限り』においてのことである。ところが、世界大戰後は、『他の諸事情』は恐ろしく變つて來た。

こゝでは簡單に述べなければならないが、第一、戰爭中に、金の配分に激變を來たした。第二、戰時から戰後にかけて各國の國際勘定の均衡がひどく破れて來た。さういへば誰でも氣がつくのはドイツだらう。ドイツは、金をすつかり取られた上に、有名な「飢餓輸出」なるものを強制されてゐる。それから、尨大なソヴィエット・ロシアは、社會主義國として、資本主義世界市場から脫

同時に民族××の段階に入込んだ。

これだけでも、戰前の國際貿易の均衡は根本的に破れたことになる。そこへ持つて來て饑餓輸出を強ひられてゐるドイツなどは、アメリカその他の高い關稅のために饑餓輸出品をさへ持ち込めない。おまけに、政治的不安の甚だしさその他の理由によつて、今や長期の資本輸出が不可能化してゐる。動亂の植民地、半植民地諸國に對してのものは特にさうである。(諸君、これらの國こそ戰前には巨大な資本を「先進國」から押しつけられて全體の均衡維持に役立つてゐた!)

さういつた風だから、恐慌は頻發するし、且つ深刻に襲つて來る。さうするとまた賣れない商品と、過剩資本とが、大變なことになる。さういふ資本は「短期資金」として國から國をうろつき廻る。更に、經濟的不安と政治的不安とのおかげで、資本は生產資本としては稼げないから、投機に走る。が、狂氣じみた投機の後には恐慌が來る。

かうした譯で、各國の保有する金準備なるものは、もはや、「世界市場において演ずる役割」に應じて配分されたものではなくなつた。それはさうだらう、世界市場における商品流通がそもそも體をなしてゐないのだ。その上に、資本の輸出入がめちやくちやだ。國際勘定なるものはあるにはあるが、それはもはや世界經濟の構成部分相互の間の「正常」な新陳代謝作用を反映するものではない。さういつた風な多少とも均衡のとれた國際收支の運動に伴つて各國の間を往つたり來たりする金であつてこそ、「世界市場における役割」に應じて各國の間に配分され得るのだが、さうではないのだから、金の流出入と配分とはまつたく亂脈だ。

さうなるといふと、各國間の金の爭奪戰はます〳〵激化する。一般的富としての金、世界の貨幣としての金を持たないことがます〳〵不安になるからである。またさうであればあるほど、金を持つことがます〳〵強味になるからである。各國が金を欲しがれば欲しがるほど、金を持つ國はそれを競爭の武器として、壓迫の武器として、他國に對して使用し得る！　フランスやアメリカなどは盛んにそれをやつてゐる。金の爭奪は、戰爭の危機を深める一要因となるが、戰爭危機

の深まりは更に金爭奪戰を激化する。

かくして、戰後の資本主義諸國の間には、謂ゆる「金の偏在」と呼ばれる現象が生じて來た。一二の國が世界中の金の大部分を獲得し、他のすべての國は金に飢えてゐる。

こんな諸事情があるとすれば、一國から他國への「危險」な金流出が起らなかつたら不思議だらう。が、こゝに最も特徴的なのは、「資本逃避」による金流出と、投機による金流出である。この二つはしばしば同時に起り、しかも、貿易上の支拂超過による金流出と重なり合つて起るのだ。

資本逃避とは、讀んで字の如く資本が逃げ出すのだ。大體、戰後においては、資本はしよつちう逃げ支度をしてゐるのだが、最近の二三年はとても逃げ足が早くなつて來た。外國へ出かけてゐて本國へ逃げ戻るのもあれば、他の國へ逃げ込むやつもある、が、一番ひどいのは本國から外國へ逃げ出すやつだ。普通にはそれを資本逃避と言つてゐる。何故逃げるかといへば、恐慌、戰亂、××がこわいからである。しかし、資本は逃げながらも決して稼ぎを忘れない。だから、いつも、ヨリ安全な方へ方へと逃げながらも、うまい儲け口を狙つてゐる。そこで、逃げながら、

投機に走つたり、投機に走りながら逃げたりする。

一昨年から始まつて昨年九月以來急に激烈になつた日本の金流出は、見事に金輸出禁止を惹き起したが、これなどは、投機と資本逃避とを兼ねた金流出の典型的なものである。

さうすると、——

一、繼續的な輸入超過＝支拂超過を主要原因として異常な金流出が起り、金準備を激減させる場合、——これはその國が國家破産に瀕したことを意味してゐる。そしてこの場合には、金準備がその國際支拂準備たる機能を果したことによつて、その兌換準備たるの機能は破壊されやうとする。

二、資本逃避および投機を主要原因として異常な金流出が起り、金準備を激減させる場合、——これにあつては、資本を逃避させる資本家や、投機資金を送り出す資本家が、さうした特殊の目的のために兌換を利用する。だから、この場合には、金準備がその兌換準備たる機能を果したことによつて、その國際支拂準備及び戰爭準備金たる機能は破壊されやうとする。

で、いづれの場合にも、金輸出禁止は不可避となる。

六　金輸出禁止國の爲替相場（一）

それでは、金輸出禁止をした國の爲替相場はどうなるか？　それは前にも言つたやうに、一口に言へば、安定を失つて大きく動搖する。すくなくとも、その可能性は十分にある。

マルクスは、爲替相場を變動せしめ得る原因として三つのことをあげてゐるが、それは今日でも爲替相場變動の主要原因をなすものだ。

一つは、前に述べた國際支拂差額である。吾々が例解したやうに、アメリカに對する日本の支拂額が受取額を超過すれば、弗手形に對する需要は供給を超過して、日米爲替相場は下落する、といふが如きである。吾々は、かやうな支拂差額に原因する爲替相場の變動が、金輸出禁止國においてはどんな形態をとるかといふことを、本節の後半において研究する。

もう一つの原因は、金銀の比價の變動である。この原因による爲替相場の變動は、金本位國と

銀本位國との間に起るといふことは明かだらう。假りに日本と支那の場合を例にとり、先づ昭和三年における金銀の比價に從へば金一匁は銀二十五匁に當り、圓と兩の換算率は百圓對六十兩であつたと假定する。その後、銀の價値が下落したために、金一匁は銀五十匁に當るやうになつたとすればどうか？　さうすれば、たゞそれだけの原因によつて、兩は圓に對して下落し、換算率は百圓對百二十兩になるだらう。

この金銀比價の變動に基づく爲替相場の變動は、他の原因に基づく爲替相場の變動と同時に生じ得る。だから、それがもし、他の原因によつて動く爲替相場の運動と同じ方向に動けば、その運動をそれだけ大きくするだらうし、反對の方向に動けば、それだけ小さくするだらう。が、現實には、銀の價値は下落傾向にあり、銀本位國は概して支拂超過國だから、かゝる國の爲替相場は二重の原因によつて下落する。

爲替相場變動の第三の原因は、一國內の通貨の價値減少である。これには大體三つの場合があり得る。（一）鑄貨の磨滅による價値減少（これについては第二講第五節に述べてある）。（二）不換紙幣

または不換紙幣化した兌換券の流通量が、必要量以上に增加したことによる價値減少、(これについては第五講第五節に述べた)。もう一つは、(三)後に述べる「平價切下げ」によつて、一國貨幣本位の金量が減らされた場合、卽ち法定金量の低下による本位貨幣自體の價値減少、(これは、鑄貨流通に際しても銀行券流通に際しても起り得る)。――だが、さし當り諸君にとつて實際的重要性のあるのは第二の場合だから、それについて說明しよう。

マルクスは、明瞭に書いてゐる、――『もし一磅が、以前の二分の一の貨幣しか代表しないやうなことになれば、前に二十五法に換算されてゐた磅は十二法半に換算されることになるのは言ふ迄もない』

これを圓と弗との關係に引き直せばかういふことになる――。

この場合は、國際支拂超過のために生ずる爲替變動ではないのだから、先づ、國際勘定は恰度均衡を得てゐるものと假定する。さうなれば日米爲替も平準點にあつて五十弗といふ相場であるだらう。(以下、計算を簡單にするために、法定平價は百圓に對して恰度五十弗だと假定する。)

さうした際に、何等かの理由によつて不換紙幣化された日銀兌換券が、何等かの理由によつて通貨必要量の二倍も流通するために、一圓は二分の金ではなく一分の金しか代表しなくなつたとしよう。即ち、通貨の價値は二分の一に減少したと假定しよう。これが出發點である。

注意までに言ふが、吾々は「通貨」といふ言葉を、つねに、流通中の貨幣といふ意味に用ひてゐる。言ひ換へれば、流通手段および支拂手段として機能しつゝある貨幣または代用貨幣といふ意味に用ひてゐる。だから、吾々がいま問題にしてゐる爲替變動の原因は、國内の流通手段および支拂手段たる資格における圓の價値減少である。——この價値減少は、どうして日米爲替相場の下落となるか？

こゝに生じた圓の價値減少は、全く名目的のものに過ぎないが、しかしその價値減少に應じて物價もまた名目的に騰貴する。即ち、第五講第五節に述べたやうに、今迄一圓であつた物は二圓になり、二圓であつた物は四圓になる、等、商品價格は一般に騰貴する。これは、國際勘定に影響を及ぼさずにはゐない。

何故といつて、ウォーターマンを十圓で賣り、フォードを千圓で賣つてさへ大きな儲けがあつたところへ、今度はウォーターマンが二十圓で賣れるし、フォードは二千圓で賣れるのだから、アメリカの資本家はホク／＼ものだ。彼等は、好機逸すべからずと、何でもかんでも持ち込んで來る。爲替相場が平準である以上、1.000圓＝500弗のフォードを一臺日本へ輸入する毎に、2.000圓＝1.000弗の割合で支拂を受け、原價の倍以上も儲かるのだから、値引きをしても持ち込まずにはゐられない。そこで、輸入は激増する。

ところが、輸出の方は反對に激減する。――前には百斤六百圓であつた生糸が今度は二倍の千二百圓になつてゐる。生産費もそれに應じて騰つてゐる。六百圓であつた時分には三百弗でアメリカへ賣つても儲かつてゐたのだが、爲替相場が平準である限り、今度は六百弗に値上げして賣らなければ儲からぬ。しかし、六百弗などといつたところで、アメリカの方には通貨の價値減少はないのだから、アメリカの資本家はそんなべら棒に高いものが買へるか、といふだらう。とにかく、そんなに値上げをすれば需要は激減する。從つて輸出は激減する。

つまり、輸出品の需要供給の均衡も破れるし、輸入品の需要供給の均衡も破れるのだ。そしてそれと共に、輸出は激減し、輸入は激增するのである。

が、さうなれば、國際勘定の以前の均衡も破れて來る。卽ち受取勘定は減り、支拂勘定は增して、支拂超過になる。弗手形の需要は供給を超過する。だから爲替相場はどうしても下落する。

では、どこまで下落するだらうか？

爲替相場が下落すればするほど、一方では輸出の不利益はます／＼少くなるし、他方では輸入の利益がます／＼減つて來る。例へば爲替が二割下落して100圓＝40弗になれば、日本の生產資本家はもう六百弗で賣らなくてもよい、四百八十弗で賣れば千二百圓受取れる。ヨリ安いアメリカ價格で賣ればそれだけ需要は增してくる。反對にアメリカ資本家は、フォードを二千圓で日本へ賣つても、もはや千弗ではなく、八百弗しか受取れぬ。だから、前ほど値引きは出來なくなり、それだけ需要は減つてくる。かういふ譯で、爲替相場の下落に伴つて輸入は減るし、輸出は殖えてくる。さうやつて双方から歩み寄つた揚句の果は、輸出と輸入とが均衡を得る點に達するだら

う。さうすればもう爲替相場は下落しなくなる。言ひ換へれば、爲替相場は、輸出數量と輸入數量との以前の均衡、および受取勘定と支拂勘定との新しい均衡が回復される點まで下落するだらう。

これは、つまり、爲替相場の下落が、輸出入の均衡を回復させるといふことだ。だから、爲替相場がどこまで下がれば均衡が回復されるかといふ問題なのだが、それは、恰度通貨の價値減少を生じた割合だけ、爲替相場が下落すれば、均衡は回復されるわけである。卽ち、通貨の價値減少は五〇％だから、爲替相場も五〇％下落して二十五弗になればよいわけだ。つまり、マルクスの言つた通りのことになればよいわけだ。といふのは——

爲替相場が下落して、百圓が二十五弗に換算されることになれば、生糸百斤の國內價格千二百圓は三百弗に相當するし、フォード一臺のアメリカ價格五百弗は二千圓に相當する。そこで、アメリカ資本家はフォード一臺を日本へ持ち込んで二千圓で賣つたところで、最初の値段通り五百弗しか受取れない。だから、彼等の利潤率は前とおんなじだ。從つて輸入は舊に復することにな

る。また日本の資本家はといふと、これは生糸百斤をアメリカへ持ち込んで、以前の通り三百弗で賣つても、爲替相場の關係上、新しい國内價格に等しい千二百圓を手に入れることが出來るから、彼等の利潤率も前と同じになる。だから、輸出も舊に復することになる。

三百弗に對して千二百圓といふと大變な開きがあるやうだが、その「圓」たるや正に半分に價値減少した「圓」なのだから、別に不思議はないわけだ。輸出入全體について言ふと、最初はアメリカ側の輸出入はおの／＼三億弗づゝ、日本側の輸出入はおの／＼六億圓づゝだつたとすれば、今度はアメリカ側はもと通りだが、日本側は、價値減少した圓で數へるから、輸出入おのおの十二億圓づゝといふことにならう。

で、要約すれば、輸出入の數量はもと通りになつて均衡を得る。双方の利潤率も前と變らない。貿易勘定は、價値減少をした圓と、價値減少をしない弗とで言ひ現はされた價格において、それ／＼均衡を得る。が、それと共に、日米爲替相場は、日本通貨の價値減少と同じ割合で下がつてゐる。これを言ひ換へれば、日本の圓は國内通貨の資格において下落したのと同じ割合で、

幣に對しても下落した。

この際、特に諸君の記憶を乞うておきたいのは、次のことである。卽ち、以上に述べた場合においては、「圓」は先づ國內での通貨たる資格において——金に對して——下落を演じ、それから國際勘定の變化を通じて、今度は、世界市場での計算貨幣たる資格において——金幣に對して——下落したといふことである。

尙ほ、以上においては、通貨の價値が急に半減してそれから爲替下落の運動が起つたものと假定したので、多少變に思つた諸君もあつたかも知れないが、それは問題を抽象的に理論的に扱ふためにさうしたのであつて、現實においては、通貨の價値減少が例へば五%、一〇%、一五%といふ風にだん〳〵ひどくなり、それと共に物價が騰貴するのに從つて、爲替相場もそれ位づゝ——否しば〳〵それよりも却つて多く——下落してゆくだらう。

それから、前の說明では爲替相場は五〇%下落して、そこで止つたやうに言つたけれども、それは通貨の價値減少を五〇%と前提したからであつて、もし通貨の價値減少がそれ以上になれ

ば、爲替相場もそれにつれてどこまでも下落するであらうことは言ふまでもない。要するに、通貨の價値減少は、それに相應した爲替相場の下落を惹き起すといふのである。

最後に、右の如き場合において、爲替相場の下落は正貨の現送によつて喰ひ止められるだらうか？　正貨を現送すれば、その時だけは爲替の下落が止まる。しかしまた直ぐに下落しはじめる。そこで更に正貨を現送すれば下落は止まるが、しかしまた直ぐに下落しはじめる。そこで更にまた正貨現送すれば……等々、いくらやつても際限はない。だから、何百億圓の金でも流出し得ることになる。國內通貨の價値減少がある場合は、それに比例して爲替相場が下落してしまはない限り、輸入の有利と輸出の不利が續いて支拂超過になるのだから、金は無限に流出する。しかし、一國の保有する金準備には限りがあるから、いゝ加減流出すれば金準備は涸渇する。さういふ譯で、どうせ金輸出禁止は不可避だとすれば、始めから金輸出禁止をする方が利口といふものだ。が、さうすれば、爲替相場の下落は正貨現送に妨げられずにどこまでも進行する。

だから、諸君は、通貨の價値減少に原因する爲替下落なるものは、金輸出禁止國において起る

ものだと理解してさしつかへない。それに大體、兌換券流通國における通貨の價値減少なるものは、金輸出禁止・兌換停止の下においてのみ起り得るものだといふことも、諸君はすでに知つてゐる。（第五講第四節および第五節）、その點から見ても、右に述べた爲替下落の法則は、金輸出禁止國における爲替相場の法則であると理解して差支へない。

七　金輸出禁止國の爲替相場（二）

そこで、今度はいよ〳〵、前に約束した問題の說明で、國際支拂差額に原因する爲替相場の變動なるものは金輸出禁止國においてはどんな形態をとるかといふことだ。

これは原因が全く違つてゐる。だから、今述べた場合と混同すべきではない。吾々は、混同を避けるために先づ日本にも米國にも通貨の價値減少は全然ないものと前提する。即ち、米國の通貨としての一弗は法定通り四分の金を代表し、日本の通貨としての一圓も法定通り二分の金を代表し、いづれも法定平價にあるものと前提する。（更に、日本の對外取引はすべて一應弗に換算

して行はれるものと假定する）。

その場合に、日本が金輸出禁止をしたとしよう。たとひ金輸出禁止をしても、受取勘定と支拂勘定とが均衡を得てゐれば、爲替相場は平準を保ち、百圓對五十弗の邊に安定してゐるだらう。また、日本が繼續的な受取超過國であるならば、爲替相場は、絕えず五十弗を超えようとする傾向を取るだらう。そして、相場が正貨現送點以上に騰る毎に、外國から金が流入して來るだらう。この金流入は、受取超過額と大體一致するだらう。

では、日本が支拂超過國である場合はどうか？　それについては、諸君が第四節において研究したことからおよそ見當はつく筈である。

爲替相場は下落する、ハメを外して下落する。

この場合の爲替下落は、直接には、金の輸出の禁止、卽ち金の世界貨幣としての活動を拘束することに基づいてゐる。しかし、一層根本的には國際勘定の支拂超過に原因する。だから、一國の生産力が相對的に低いために、その國が繼續的な支拂超過國である場合には、その支拂超過が

續く限り、際限もなく金は流出するわけで、何百億圓あつても足らないわけなのだ。爲替相場はたゞその金流出のおかげで下落を喰ひ止められてゐるだけだ。そこへもつて來て、その金流出をさまたげるのだから、今度は爲替相場の方が、支拂超過の續く限り何處までも下落する。一口に言へば、一國が支拂超過國である限り、無限の金流出か、無限の爲替下落か、といふことになる。いづれの場合も、行きつくところは支拂不能であり、國家破産である。で、こゝに前提した、いゝ、諸條件の下においては、爲替相場は、理論上、零にまで下落し得る。

今言つたことを別な言葉で言ふと、この場合の爲替相場の下落なるものは、その出發點であり原因であるところの支拂超過をなくするやうな力、——卽ち國際勘定の破れた均衡を回復させるやうな力は、それ自身にはない、といふことである。それはまたさうだらう、そんな力があるのなら、支拂超過國は金輸出禁止をして爲替相場を下げさへすれば支拂超過を克服し得るわけだから、のべつ金輸出禁止をやることになる。前の場合においても、爲替下落なるものは、その原因をなすところの、通貨の價値減少なる事實をなくする力などはなかつたのだ。その點は全くおな

じてある。

ところで、前の場合には、日本貨幣の圓は、先づ國內通貨たる資格において價値減少をやり、それから世界市場における計算貨幣の資格において價値減少をやつたのだが、今度の場合は反對で、圓は先づ世界市場における計算貨幣の資格において價値減少をやる。卽ち、先づ爲替相場の下落が起り、圓は弗に對して下落する。この下落は、國內通貨たる資格における圓に對してどんな影響を及ぼすか？

爲替相場がハメを外づして下落すれば、恰度その下落した割合だけ、國內通貨としての圓も下落する。そしてこの下落は、國內の商品價格一般の騰貴を通じて現はれる。それはかういふ過程をとる――

日米爲替相場が、五十弗から四十弗に下落したとする。二割の下落である。この下落のために、輸出は有利になるが、輸入は不利になる。

先づ輸出から言へば、爲替相場が平準で 100圓＝50弗 である際に生糸百斤の日本價格は六百

圓、アメリカ價格は三百弗であつたのならば、爲替相場が下落して 100圓＝40弗 になるといふと、もとの三百弗でアメリカへ賣れば七百五十圓受取れることになる。從つて値引きが出來る。即ち、二百四十弗まで値引きしても日本價格の六百圓は受取れる。そこで輸出は增加する。

それでは輸入はといふと、爲替相場が平準の時の棉花千斤のアメリカ價格は百二十五弗で、日本價格は二百五十圓であつたのならば、いま爲替相場が下落して 100圓＝40弗 になるといふと、アメリカ資本家はもとの二百五十圓で日本へ賣つたのでは百弗しか受取れない。これでは損をするから、どうしても棉花の輸入は減つて來る。これはひとり、生糸と棉花に限つたことではなく、輸出入品一般がすべて同樣なことになつてくる。

そこで、全體として輸入は減るし、輸出は增す。一口に言へば、爲替相場の下落によつて一つの攪亂が起るのだ。

この攪亂は、國內物價の騰貴を惹き起す。輸入が減退すれば、國內における輸入品の供給は需要以下に減少するから、品不足だといふので價格が高くなつてくる。また生絲等々の輸出が儲か

るといふのでどん〳〵海外へ持ち出せば、國內への生糸等々の供給は減る。だから、生糸等々も品不足だといふので高くなる。さうなるといふと、これらのものを用ひてつくる絹織物等々も高くなるし、更に、これらのものを生産するのに必要なさま〴〵の原料その他の生産手段や勞働力の價格も高くなつてくる。更にまた、高くなつた輸入品をば、原料その他の生産手段として使用するところの産業部門の生産物も騰貴する。かゝる生産物——例へば綿糸の如き——もまた輸出される以上、その理由からもまたまた輸出品の價格が高くなり、それが更にまた他の商品の價格を高くする。また一般に、ウォーターマンが高くなればスワンも高くなるといつたやうなもので、いろんな「舶來品」が高くなれば、それに類したいろんな「國産品」も高くなる。さういふ譯で、全面的な價格騰貴が起つて來る。そしてこの物價騰貴と共に品不足もなくなつて、もと通りの供給が得られることになる。

　それは何を意味するか？　爲替相場の下落によつて輸出は増大し、輸入は減退するとは言へ、それと同時にまた商品價格一般が騰貴するのである。卽ち物價水準を變革する運動が進行するの

である。

ところで、商品價格が一般に高まれば高まるほど、輸入の不利は少くなるし、輸出の利益は減つてくる。だから、輸出は初めは増すが後には減り、輸入は初めは減るが後には増して、前後相殺されようとする。しかるに商品價格の方は、一貫して騰貴運動を續けるのだ。この騰貴運動は、金輸出禁止をした支拂超過國が、世界市場と深く結びついてゐればゐるほど、急速に進行する。

では、物價はどこまで騰貴するか？　物價は、爲替相場の下落によつて惹き起された攪亂がおさまるところまで騰貴するだらう。とにかく、そこまではどうしても騰貴しようとするだらう。それで、どうなれば攪亂はおさまるかといふと、一旦増した輸出は減り、一旦減つた輸入は増して、いづれも元通りの數量になり、日本から諸外國へ輸出する資本家達も、日本へ輸入する諸外國の資本家達も、元通りの商品を元通りの數量だけ輸出し輸入することによつて、元通りの利潤率を得るやうになれば靜まるのだ。が、さうなるためには、日本の國内物價は、爲替下落によつて生

じた特別の有利さと特別の不利さとを無くするところまで騰貴しなければならない筈である。

さうすると、吾々が假定したやうに爲替相場の下落が二〇%ならば、それに應じて國内物價は二五%騰貴しなければならない筈である。計算は次のやうになる——

例へば生糸百斤は、六百圓から七百五十圓になる。爲替相場四十弗に際して一般物價が二五%騰貴するとすれば、生産費も二五%高くなるから、前に百斤六百圓であつた生糸の日本價格が七百五十圓になつて、恰度元通りの利潤率が得られることになる。また、輸出においても、爲替が四十弗ならば、元通りの三百弗でアメリカへ賣れば、恰度七百五十圓受取れることになる。そして、元通りの三百弗で賣ることにすれば、恰度元通りの數量の輸出が出來ることになる。そこで、アメリカへの供給量と、國内への供給量との割合も元通りになる。

棉花にしても同樣だ。棉花百斤の日本價格は前の二百五十圓から三百十二圓五十錢に騰貴すれば、四十弗の爲替相場においては、アメリカ資本家は元通り百二十五弗を受取れる、等、等。

かういふ具合に國内物價が騰貴するといふと、輸出増進・輸入減退といふ攪亂は一應をさまる

のだが、さてその場合に、肝腎の支拂超過の方はどうなつてゐるか？　これは依然として殘つてゐる。金輸出禁止前の國際勘定は、受取が十億圓、支拂は十二億圓であつて、二億圓の支拂超過であつたとしよう。その後、爲替相場が二〇％下落したために國內物價は二五％騰貴したとすれば、受取勘定が十二億五千萬圓に增加すると同時に支拂勘定は十五億圓に增加し、支拂超過は二億五千萬圓になるだらう。卽ち支拂超過額も、物價の騰貴率に準じて二五％大きくなる。

だが、かうした支拂超過が存在する限り、爲替相場は更に下落せずにはゐないのだ。そしてその支拂超過が生產力の相對的低位に原因するものならば、生產力を高めることによつて原因を除去しない限り、支拂超過はいつ迄も續くだらう。その意味において吾々は、金輸出禁止國の爲替相場は際限もなく下落し得るといふ。

もつとも、右に述べた支拂超過額の二五％の增加なるものは、この場合の物價騰貴そのものと同じやうに、名目的なものである。言ひ換へれば、それらは價値量の增大をあらはすのではない。價値量としては以前と全く同一なものだが、その同じ價値量が「下落した圓」で言ひ現はさ

れるから、大きな數字になるといふだけのことである。

吾々は、前にかう言つた、――爲替相場が下落すれば、その下落した割合だけ、國內通貨としての圓も下落する、そしてその下落は、國內の商品價格一般の騰貴を通じて現はれるのだ、と。で、今や正に、その國內通貨としての圓の下落が生じたのであつて、商品價格はすべてその下落した圓で言ひ現はされてゐるのである。卽ち、一般物價の騰貴として現はれる現象は、實は單に國內通貨としての圓の下落を反映するものに過ぎないのだ。

爲替相場の下落は二〇%であつた。從つて、世界市場における計算貨幣としての圓は、弗に對して二〇%下落した。そこで今度は、國內通貨としての圓もまた恰度二〇%下落した。言ひ換へれば、國內通貨としての圓は、もはや二分の金としては通用せず、一分六厘の金としてしか通用しない。さういふ圓ではかられるから、前と同一の價値量がヨリ多くの圓であらはされる。例へば、前に百圓の價格を持つた商品――例へば四石の米――は、その價値量には何の變化もないに拘らず、今や百二十五圓といふ價格を持ち、二五%の騰貴を示すといふことになる。

ところで、——圓は下落した、圓は一分六厘の金として通用するに過ぎぬといふが、その圓とは如何なる圓か？　この圓の下落は國内で生じてゐる。しかしそれは、紙幣としての圓の下落ではない。不換紙幣化した兌換券としての圓の下落ではない。そんな代用貨幣ではなしに正銘の金貨——しかも磨滅したりなんかしない「純眞」の金貨——が流通してゐても、圓の下落は生ずるのだ。また、この圓の下落は、計算貨幣としての圓の下落でもない。正味二分の金を含む一圓金貨を出して米四石を買ふといふと、前には百個渡せばよかつたのに、今度は百二十五個渡さなければならないのだ！　だから、これは正しく流通手段としての圓の下落である。

二分の金はどこまでも二分の金として通用しさうなものだ、それが一分六厘にしか通用しない。そんなことは一體どうして起つたか？

圓は先づ世界市場での計算貨幣として——弗に對して——下落した。すると、輸出増大・輸入減退といふ攪亂が起つて、國内で必要な品物の不足が生じて來た。だから、前と同じ品物に對してヨリ多くの金を渡さなければ品物が得られなくなつて來た。そこで、弗に對して圓の下落した

割合に應じ、またそれに基づいて必要な品物の不足を來たした割合に應じて、二割五分だけ餘計の金量を商品に對して支拂ふことになつたのだ。そこで始めて攪亂はをさまつて、必要な品物が元通りの數量だけ手に入ることになつたのだ。だから、物價騰貴の一歩々々は、實は、國內流通手段としての圓の下落の一歩々々に過ぎなかつたのだ。

では、弗に對する圓の下落はどうして起つたか？　（そこまで立戾つて考へるとよくわかる）。それは、支拂超過額に對して外國へ支拂ふべき金を支拂はず、流出すべき金を流出させず、日本にある金の、世界貨幣としての活動を拘束したからだつた。金は、貨幣としての機能を不具にされた。金は反逆せずにはゐない！

（一）金は、國境外へ飛び出して支拂手段の役目を果すべき必要に迫られてゐるといふのに、それを無理やり國內に抑留するものだから、金は今度は國內商品に對して二割五分も多く支拂はれたりしてすねてゐる。

（二）價値と價値との比例よりも二割五分も多く商品に對して支拂はれ、二分の金が一分六厘に

しか當らないなんてことは金の沽券に關はるから、金は更に、輸出禁止の掟を破つて國境外へ脱出しようとする。普通の言葉で言へば、金は盛んに密輸出されやうとする。

それはさうだらう、外國へさへ出掛けて行けば、二分の金は立派に二分の金として通用する。例へば棉花千斤は、日本でこそ、三百十二圓五十錢で、六十二匁五分の金に當るけれども、それだけの金をアメリカへ密輸出すれば百五十五弗ほどになるから、千二百四十斤の棉花が買へる。そしてこれを堂々と日本へ輸入すれば三百八十七圓五十錢に賣れるといふわけだ。ぼろい儲けである。(もつとも、これは金貨が流通してゐる場合である。)

さういふ譯だから、國内で兌換券が金に代つて流通してゐる場合には、兌換券に對して金は二割五分の打歩を生じて來る。即ち、一匁の金塊は、一圓紙幣五枚ではなく六枚四分の一と交換される。もし打歩を與へなければ密輸出される。

これらすべてのことは、金自體の價値には何の變化もないことを物語る。從つて「貨幣としての貨幣」たる機能における金の價値には何の變化もない。そしてその機能こそ、世界市場で發揮

され、また國内においても兌換券に對しては發揮されるのだ。

不換紙幣化した兌換券が流通する場合のことをもう一歩突つ込んで考へて見給へ。右に述べたやうな狀態であるといふと、ちよつと考へると紙幣の價値減少が生じてゐるやうに思へるだらう。しかし、それとこれとは違つてゐる。

紙幣の價値減少とは、流通の必要量に應じて流通すべき金量以上の紙幣額が流通する時に起るのだ。例へば十億圓が流通必要量であつて一圓は金二分ならば、二十萬貫の金が流通する。その際、金に代つて流通する紙幣が十二億五千萬圓に增加するならば、紙幣の一圓は、流通すべき金の、二分ではなく、一分六厘をしか代表しなくなる。それが紙幣の價値減少だ。この場合にも商品價格一般は騰貴する。それが本來の意味でのインフレーションであり、通貨膨脹である。

しかるに吾々が問題にしてゐる場合はこれとは違つてゐる。爲替の下落に伴つて國内物價が一般に二割五分騰貴する場合には、流通する金量も——流通速度が不變なら——二割五分多くなる。總價格が十億から十二億五千萬圓になれば、流通金量は二十五萬貫になる。そしてそれと

共に、二分の金は一分六厘にしか當らないものになる。紙幣が金に代つて流通してゐれば紙幣額もそれだけ多くなるのは當然だが、それは流通金量そのものが多くなるからであるし、紙幣の一圓が一分六厘の金をしか代表しなくなるのは、流通手段として機能する二分の金そのものが一分六厘にしか當らなくなるからなのだ。

だから、いま問題にしてゐる圓の下落＝物價騰貴は、本來の意味のインフレーションとは別物だ。もつとも、爲替下落による圓下落＝物價騰貴は、更に本來のインフレーションをも惹き起し易いものであり、從つて二重の原因によつて圓下落＝物價騰貴が大變なものになり得るといふことは後で說明する。

これを要するに諸君は、貨幣たるものの本質を忘れなければ、貨幣をめぐつて起るいろんな厄介な現象もたやすく理解出來るのだ。貨幣は、ブルヂョア社會の矛盾の產物であり、その必然的な產物である。この矛盾に充ちたブルヂョア社會、矛盾に充ちた資本主義世界經濟においては、金は飽くまでも自己の重要性を主張する。自己の存在理由を主張する。金が貨幣として機能する

ことを妨げるといふと金は忽ち反逆する。

日本なら日本が金の輸出を禁止して、金が國際的支拂手段として機能することを妨げると、日本の貨幣は忽ち世界市場での計算貨幣たる機能を滿足に果さなくなる。さうするとまた忽ち、國内での流通手段たる機能をも滿足に果さなくなる。爲替相場の安定も、通貨の安定も失はれる。ブルヂョアは閉口する。

ところで、諸君は、金は先づ、價値の尺度と流通手段の統一として貨幣となつたことを知つてゐる。しかも、かゝる統一としての金は獨立の存在を有することを知つてゐる。それは金屬肉體としての存在だ。貨幣としての貨幣の存在だ。いかに罰當りのブルヂョアジーでも、この黄金の現身における貨幣を粗末にすることは出來ないし、まして無くすることなどは出來ないのだ。いや、あまり大切にし過ぎるから金輸出禁止などをやる。

が、いくら金輸出禁止などをやらかしても、金の現身における貨幣が存在する限り、それは飽くまでも世界共通の價値尺度として機能する。ブルヂョアジーは、この機能だけは妨げようにも

妨げやうがない。日本の金をたゞの一匁も世界市場へ出さなくても、またたとひ日本には一匁の金もなくなつてしまつても、矛盾に充ちた資本主義世界經濟が存在する限り、商品の價値は金によつて量られる。アメリカの金か、イギリスの金か、どこかの金によつてはかられる。だからこそ、圓の下落となる。不具にされた圓貨幣の下落となる。

圓貨幣は、金輸出禁止によつて、その流通手段たる機能を不具にされ、一般的等價物として滿足に作用し得なくなる。

以上、本節で扱つた問題は、事柄自體が相當むづかしい上に當面の實際的重要性も大きいからと思つていくらか詳しく說明したために大分紙數を費してしまつたが、最後にもう一つ諸君の注意を乞ひたいことがある。それは、諸君としては多分お氣附のことと思ふが、本節では問題を全く抽象的に理論的に扱つたといふことである。さういふ風に扱はなければ、金輸出禁止國の爲替相場の變動を一の經濟法則として理解することは不可能だ。が、現實の過程においては、本節の說明に當つて抽象したところのいろんな要素の作用がある。ことに、金輸出禁止は恐慌期に實行

されることが多いのだが、その場合には、恐慌期の諸要素が入つて來る。そんなやうないろんな要素が加はれば、それだけ法則の作用は變化をうける。それらのことについては追ひ〱述べるつもりだが、しかしさうした變化を理解するためには、何よりも先づ法則そのものをしつかりと把握しておかねばならないのだ。

八　爲替ダンピング

ダンピングといふのは、外國への投賣り、または安賣りといふことだ。資本家、わけても獨占時代の資本家は、自國では高く賣り、外國へはずつと安い價格で賣つて、大いに「愛國心」を發揮する。その場合、彼等が外國へ賣る價格は、生産價格（即ち生産費プラス利潤）以下であること、價値以下であることが稀でない。

前節で述べた輸入減退・輸出増大といふ攪亂が起り始めるといふと、資本家達は得たりと外國へ安賣りをする。そして大いに輸出を殖やさうとする。しかもこの場合には、生産價格で賣つて

も尚且つ外國に對しては安賣りになる譯だが、彼等がさういふことの出來るのは、諸君のすでに知らるゝ通り、爲替相場が安いからである。そこで、この場合のダンピングは、爲替ダンピングと呼ばれるのだ。

ブルヂョアジーは、爲替ダンピングが出來るやうになると、やれ輸出增進・輸入阻止だの、國際收支の改善だの、好景氣への第一步だのといつてはしやぎ出す。ところで、そんなことはいつまでも續くものではなく、爲替下落による有利さを相殺するところまで國內物價が騰貴してしまへば、一應もとの杢阿彌になるのだし、また國內物價は必然的にそこまで騰貴する傾向があるといふことは、すでに諸君の硏究濟みである。もちろん、その場合にも、爲替と通貨の安定が失はれるといふ「結構なお土產」は殘るのだが……。

で、とにかく、爲替ダンピングなるものが可能であるのは、物價騰貴の運動の方が爲替下落の運動よりも遲れてゐるあひだだけだといふことは明かだらう。言ひ換へれば、それは、世界市場での計算貨幣としての圓の下落の方が、國內通貨としての圓の下落よりも進んでゐるあひだだけ

のことである。たゞ、爲替相場はとても「敏感」で、下げ足が早いので、爲替ダンピングは可能となる。

爲替ダンピングの時期の資本家の儲けはぼろい。しかも彼等は、國民的勞働の犠牲において儲けるのだ。

說明の便宜上、前の例解を利用しよう。爲替が平準の時には

生糸　100斤．600圓＝300弗

棉花　1,000斤．250圓＝125弗

であつた。その場合には百斤の生糸をアメリカへ持込むといふと、それに對して二千四百斤の棉花を日本へ持つて來ることが出來たわけである。なぜなら 棉花$1{,}000\text{斤}\times\frac{300}{125}=2{,}400\text{斤}$ だから。

これはつまり、百斤の生糸は、二千四百斤の棉花と交換されたといふことだ。いま、一圓は社會的必要勞働の一時間を代表し、一弗は二時間を代表するとしよう。さうすると、

生糸　100斤＝600圓＝300弗＝600勞働時間

棉花　2,400斤＝600圓＝300弗＝600勞働時間

といふことになつて、日本の生糸とアメリカの棉花との交換は、等量の勞働の交換であつたのだ。言ひ換へれば、日本から六百勞働時間を與へる每に、アメリカから六百勞働時間を受取つたのだ。――尙ほ、注意までに言へば、その際、生糸一斤は六時間の勞働で生産され、棉花一斤は四分の一時間の勞働で生産されてゐる。

ところで、爲替ダンピングの場合はどうか？

爲替は二割下つて100圓＝40弗になつたとしよう。更にブルヂョアジーの謂ゆる輸出增進・輸入阻止で、生糸の輸出は百斤から百十斤に增加したとしよう。さうすると、

生糸　100斤＝600圓＝240弗
生糸　110斤＝660圓＝264弗

であるから、生糸百十斤の輸出に對しては二百六十四弗受取れることになる。しかし、必要な棉花は買はねばならぬ。そこで、この二百六十四弗をもつて棉花を買ふといふと、棉花のアメリカ

價格は千斤百二十五弗であつて、そのために「輸入は阻止」されてゐるのだから、」

棉花　1,000斤×$\frac{264}{125}$＝2,112斤

といふことになつて、二千百十二斤しか買へないのだ。

だが、勞働と勞働との交換關係はどうなつたか？　今や、百十斤の生糸は、二千百十二斤の棉花と交換されてゐる。が、生産のために社會的に必要な勞働時間は變化してゐない。だから、

生糸　1斤＝6勞働時間　　110斤＝660勞働時間

棉花　1斤＝$\frac{1}{4}$勞働時間　2,112斤＝528勞働時間

といふことになる。事情はまるで變つてきた。生糸と棉花との交換において、日本からは社會的必要勞働の六百六十時間をアメリカへ提供するが、それに對してアメリカからは五百二十八時間の社會的必要勞働しか受取れない。その差、百三十二時間の社會的必要勞働は、全く無償でアメリカへ投げ込まれてゐる。これは確かに投賣である！

吾々は、一例としてたゞ生糸と棉花とをとつたけれども、爲替ダンピングの行はれる限り、有

と同樣の關係は、日本から輸出される一切の商品と、日本へ輸入される一切の商品との間に生ずるのだ。

そんな風に、勞働の投賣が續けられて行けば、國民的勞働は日一日と涸渇するし、勞働者は絞りつくされて鰊粕みたやうになるだらう。爲替ダンピングのために資本家の儲けが多くなつて「景氣」が出るやうなことがあれば、それは結核患者の頰が紅潮を呈するのとおんなじだ。個々の資本家を富ます爲替ダンピングは、國民の實際の「富」を國外へ投げ出しつゝ、「國民的富」の源泉を涸らすのだ。

爲替ダンピングは、國內物價の騰貴が爲替下落を相殺すると不可能になるが、しかしその際に尙ほ國際的支拂超過の存在する限り、新たなる爲替下落が起るから、それと共に新たなる爲替ダンピングの時期が始まつてくる。かうした蒸し返しは、理論上は、××××の瞬間まで、爲替相場が零に近づくまで、乃至は勞働者階級の××××まで續き得る。

九　爲替管理

吾々は、支拂超過を有する金輸出禁止國の爲替相場の法則を第七節で研究した際には、爲替相場はいきなり二〇%下落したものと假定した。そして、それに應じて國內物價が二五%騰貴するといふと、新たなる爲替相場の下落が起るものと假定した。これは、先づ、根本的な一般的な傾向を明かにするためにさうしたのだ。

だが、爲替相場は、その際限もない下落といふ根本傾向を貫くにあたつて、もつと複雜な運動形態をとるのである。爲替の下落が起るといふと、輸出は增し、輸入は減る。さうすると、支拂超過は一時的にすくなくなる。この支拂超過の減少は、爲替相場を反騰させる傾向を持つ。しかし、爲替相場が少しでも引き返せば、それだけ輸出は不利になり、輸入は有利になるから、支拂超過は殖えてくる。同時に一方、國內物價の騰貴運動が進行してゐるから、それによつて一層根本的に、輸入の有利と輸出の不利とが加はつてきて、爲替相場は再び下落する。

かういふ風に、爲替相場の下落運動は、一直線をゑがかずに、謂ゆるジグザグな波瀾をゑがきつゝ進行する。一口に言へば、爲替相場は絶えず動搖しつゝ下落する。しかも、この動搖は多かれ少なかれ大幅だ。そしてそれは、前に述べたやうに、商品および資本の國際取引を萎縮させるのだ。

が、それと同時にまた、この動搖は、爲替投機の機會を提供する。爲替相場は今や投機の的になる。それが爲替ならば、その下落を思惑して買ふ者があり、反騰を思惑して賣る者がある。思惑が當れば只儲けだから、資本家達は投機に夢中になる。投機の場合には、一方に儲ける者があれば他方にはきつとそれだけ損する者があるのだが、爲替投機の利得は、日本の資本家の甲に歸することもあり、乙に歸することもあり、また外國の資本家の甲なり、乙なりに歸することもある。が、いづれにせよ、投機資金の豐富な者、そしてまた大きな國際取引をやつてゐるのでおのづから爲替市場の見透しが利く者、さういつた連中が勝つのは言ふ迄もない。獅子の分け前は、いつでも、大ブルヂョアのものである。

ところで、さうした爲替投機は、爲替相場の動搖に拍車をかける。從つて國際取引それ自體の困難はますく増大する。そこで、これではいかん、爲替相場を安定させろ、といふ叫びが揚つてくる。

爲替相場安定策の第一歩は、謂ゆる「爲替統制」である。「爲替統制」は、國家自らがやることもあり、國家がバックして爲替銀行にやらせることもある。が、その方法は要するに、弗爲替が下落し始めれば賣つて出るし、反騰し始めれば買ひ向ふ、といつたやうなことである。

だが、爲替相場は、下落すべき原因があつて下落し、動搖すべき原因があつて動搖してゐるのだから、その原因が除去されないうちに、たゞ爲替の賣買によつて爲替を安定させようとすれば、どうしても巨額の爲替統制資金が必要になる。しかも、爲替相場の「統制」は、外國相手の仕事だから、結局、金そのものを送り出さないと爲替賣買の決濟が出來ないことになる。だから、一方では金の輸出を禁止しておきながら、他方では政府自ら金を輸出する！　金はどうしても國境外へ飛び出して果すべき役目を果さうとする。戰後、日本政府は、三度ばかり「腰を据ゑ

て」爲替統制をやつたことがあるが、いつも巨額の正貨が流出した。爲替統制が、どれだけ奏效するかといふことは、一つには支拂超過の大きさによるが、一つには金保有高の大きさによる。

この爲替統制といふやつは、資本家達には自由に爲替の賣買や投機をやらせておいて、それに政府が立向ふのだ。だから、爲替統制をやつて政府が使つた國庫金の大部分は、資本家の利得と化す。一國の金準備がまだそれほど涸渇してゐないあひだは、資本家達もさうやつて儲けてゐられるが、金準備が涸渇すればするほど、國家破産の危險は增して來る。そしてそれと共にまた、爲替統制の奏效もます〱困難になつて來る。

そこで、第二のステップとして、「爲替管理」が現はれる。

爲替管理が必要となつてくる時分には、單に爲替相場の下落と動搖が激しいばかりではなく、また投機が盛んに行はれるばかりではなく、猛烈な資本逃避がはじまつてゐる。そこで政府は、ブルヂョアジー全體の利益のために、投機や資本逃避を抑制しなければならなくなる。そしてその方法としては、爲替の賣買を政府が監視し、政府の許可する場合または「正當な理由ある場

合」のほかは爲替を賣らないことにする。爲替管理とは要するにそれである。

ところが、いくらさうやつてみたところで、支拂超過のある限りは爲替相場は下落する。そこで更に一歩を進めて、輸入に對してまで制限を加へるやうになる。これは輸入管理と呼ばれるが、畢竟するに爲替管理の一歩前進である。

が、それで爲替投機や資本逃避が防げるかといふと、なかなかさうは行かないのだ。なるほど資本家達は前のやうに大びらではやれなくなるから、多少の效果はあるやうなものの、そこは「蛇の道は蛇」であつて資本家達はいくらでも「法網をくゞる」ことを知つてゐる。たとひ爲替の賣買を制限されたところで、資本を逃避させるぐらゐは何でもない。例へば彼が生糸輸出者であつて、自分の資本をアメリカへ逃避させようと思へば、彼れが輸出してアメリカで賣つた生糸の代金を、そのまゝアメリカに置いて預金するなり證券を買ふなりすればよい。また彼が棉花の輸入者であるならば、アメリカで買つた棉花を、更にアメリカの誰かに轉賣して、その代金をアメリカに置くことも出來るのだ。それからまた、金の密輸出といふ「古典的」な方法もある。だ

が、――さうやつて資本が逃避すれば、支拂超過は否應なしに増大する。

それに、大體、輸入管理などをしたところで、その國が多少とも發達した工業國であり、原料輸入國であるならば、輸入制限をなし得る範圍は知れたものである。原料の輸入を必要以下に制限したりなんかすれば輸出も減る。それから、「正當な理由」ある場合には輸入を許すといふことになると、たいがいの輸入は「正當な理由」があることになるし、殊に大ブルヂョアのやる輸入で正當な理由のないものなどはないことになる！

かういふ譯で、爲替管理にせよ、輸入管理にせよ、それは尖鋭な危機を一應緩和する目的には役立ち得るが、多少とも大きな支拂超過を克服する力などはない。從つて、爲替相場の下落および動搖を阻止する力も微弱である。そして爲替管理がどれだけ奏效するかといふことは、やはり、支拂超過の大小と、保有金準備の大小とにかゝるのだ。

が、それにしても、金輸出禁止や爲替管理が餘儀なくされる國が多くなればなるほど、世界經濟＝世界市場の分裂は深大となる。しかも、その際、いかにも資本主義らしい馬鹿げた矛盾が起

るといふのは、それらの國はいづれも世界市場から自己を隔離することを目ざしてゐながら、同時にまた全世界市場を自分のものにしようと欲してゐることだ！

諸君、それを全面的に眺め見渡すとどういふことになるだらう？　それは、資本主義諸國間の市場爭奪戰の激化の光景であると同時にまた金の爭奪激化の光景であるではないか。

一〇　金輸出禁止國の物價

支拂超過を有する金輸出禁止國においては、爲替の下落に伴つて物價の騰貴が生ずるのだが、この物價騰貴の運動もなか／＼複雜な形態をとる。現實にどんな形態をとるかといふことは、限りなく複雜な現實の諸要素の作用によつて定まるのだから、そのいち／＼の場合について述べるといふことは出來るものでもなく、また理論的硏究の範圍に屬するものでもない。で、こゝでは、たゞ物價騰貴の運動形態について注意すべき若干の事柄を指摘するだけに止めなければならぬ。

第一、すべての商品の價格は、一二三で一齊に騰貴するわけではない。或るものの騰貴は早く、或るものはおそい。その國の生産物全體のうちで輸出されるものの種類及び割合が多ければ多いほど、從つてまたそれと交換的に輸入される商品の種類及び數量が多ければ多いほど、商品價格は速かに騰貴するし、また歩調を揃へて騰貴する。反對の場合は、反對である。が、しかし、輸出入品が多い場合でも、價格の騰貴はやはり商品によつて多少の遲速があるし、またすべてが騰貴するまでには多少の時を要するのだ。

騰貴の早いのは、先づ輸出入品であり、生産上それと直接に關係のある諸商品である。その他のものは騰貴が遲い。騰貴の速い方の諸商品の生産と密接な關係のある商品であつてしかも價格騰貴の遲いのは、勞働力である。勞賃である。これは、階級關係、搾取關係に原因する。それから、これは本來の意味の商品ではないが、株券などの價格は非常に早く騰貴する。

株券などの騰貴が早いのは、謂はば先廻りをして騰貴するのだが、この先廻りといふことも、物價騰貴の運動における重要な要素をなす。一般に、卸賣價格は先廻りをして騰貴する。ま

た、大きな商事會社、工業會社、わけてもその結合體であるカルテルなどがつける販賣價格は、眞つ先に騰貴する。從つて、小賣商人の販賣價格や、手工業者・農民などの販賣價格は、騰貴が遲れるといふことになる。

かうした不揃ひな物價運動の結果として、資本家わけても大資本家の事業には、一時的な利潤增加が生じて來る。つまり、彼等の製品の販賣價格は、原料や勞働力の價格の高くならないうちに、高くしてしまふから、それだけ餘計儲かるといふわけだ。かうしたことが、大衆にとつて何を意味するかといふことは、後にインフレーションを論ずる時に詳しく分析する。

元來、資本主義社會といふものは、商品價格が騰貴しさへすれば景氣がいゝと思ふものだが、そこへもつてきて一時的にもせよ資本家の利潤を增すといふのだから、いよ〳〵もつて「好景氣」らしい外觀が生じて來る。けれども、そんなものが「好景氣」でもなんでもないことは、諸君のこれまでの研究によつてもたやすくわかるだらう。

吾々は、前に、輸出增加・輸入減少から「品不足」になつて物價騰貴が生ずると說いた。それ

は說明をわかり易くするためにわざと廻り道をしてさう言つたのだが、——おなじ「品不足」でも、景氣循環の際の好景氣局面に生ずる「品不足」は、先づ商品の需要が增加してそして供給を超過するから生ずるのだが、こゝでの場合はまるで違つてゐる。即ち、商品の需要は少しも增加しないで、たゞ供給だけが減る。しかもその供給の減少即ち品不足は、專ら、圓なら圓の下落によつて生ずるのだ。本當の原因は圓の下落である。圓が下落するから、ヨリ多くの圓を提供しなければ元通りの商品數量が得られない。そこで品不足が生ずるのだ。

で、爲替下落に基づく物價騰貴は、好景氣などとは似ても似つかぬものである。それでも、個個の資本家の利潤增加の機會は生ずるし、それに何しろ商品價格の騰貴は不揃ひである。この狀態は、資本家の投機心、思惑心を刺戟せずにはゐない。彼等は、かういふ際に儲けなくてはといふので、安いうちにどん／＼原料を仕入れたり、また生產を擴張したりする。それの最も甚だしいのは、謂ゆる見越輸入といふやつで、資本家達は、金輸出禁止による爲替下落が起りさうだと見ると、弗なら弗の安いうちにどし／＼輸入品の買付をやる。それも、みんなが我れ勝ちにやる

のだから、全體としてはどうしても行き過ぎる。製品の需要は增しもしないのに、餘計の原料を仕入れたり、餘計の製品を出したりすれば、過剩生產となるのは當然だ。卽ち、投機、思惑は、大なり小なりの恐慌原因をつくり出すことになる。

次には、金輸出禁止それ自體が恐慌期の眞最中に起つた場合を考へて見よう。これは最も有り勝ちのことであるし、現に、日本をはじめ各國に起つた昨年以來の金輸出禁止は、正にその場合に當るのだ。かういふ場合には、金輸出禁止といふことそれ自身が、一つの恐慌現象でもあるのだが、それについては後述する。

恐慌が進行中であれば、そこには當然に過剩生產物があり、賣れない商品（滯貨）の山がある。そこで、爲替の下落、圓の下落が起つて輸出增加・輸入減少が生じても、それは「品不足」といふ形では現はれないで、たゞ前からあつた商品の過剩が緩和されるだけのことになる。

恐慌の過程が進行中であり、過剩生產物が存在するあひだは、商品價格は一般に下落しつゝあるわけだ。だから、商品の過剩が一時緩和されゝば、それだけ商品價格の下落運動も緩和される

だらう。そして更に、商品價格の下落が一時止ることもあらうし、また一時はなか〳〵騰貴することもあるだらう。この場合には、恐慌による物價下落の運動と、爲替下落による物價騰貴の運動とがかち合ふわけだから、その何れの力が強いかによつて、結局において下落か、停滯か、騰貴かが決定され、またその程度も決定されることになる。

が、何れにしても物價を騰貴させる力は現實に作用するのだから、少くとも卸賣物價は、たとひ一時何にもせよ、爲替下落の程度に應じて騰貴する。殊にカルテル等々の獨占價格を設定してゐる場合にはさうである。

そこで、資本家の利潤勘定（謂ゆる採算）だけは兎に角一應「好轉」するわけだが、それと共に、行き詰つてゐた支拂や信用關係も樂になる。もし、信用恐慌や銀行恐慌などが差し迫つてゐたとすれば、その切迫した狀勢も一應緩和されることになる。さういふところからも、「景氣好轉」の蒲燒の匂ひがする。

だが、卸賣價格が騰起したからといつて、それは毫も現實の需要増加に原因するものではな

いのだし、まして恐慌の進行中は現實の需要は減少しさへするのだから、高い價格をつけられた商品は、卸から中間商人、中間商人から小賣へと動いて行つて、いよ〱消費者に面と向ひ合ふといふと、そこでぽかつと鼻を打つてしまふだらう。なぜといつて、消費者大衆はそんな高い物を買ふやうな餘計な金はまだ一文も與へられてゐないのだ。恐慌過程が進行中であり、賃銀の切下げと失業の増大とが進行中であり、農業恐慌が進行中であるとすれば、大衆の「購買力」は前より却つて減つてゐる。

そこで、「反動」が起らずにはゐない。資本家達は、先廻りをして自分の商品に高い價格をつけては見たものの、買手がなければ仕方がない。今度は急激な價格下落が來る番だ。それがどの程度のものであるかは、前に指摘した二つの力の大小による。

更にもし資本家達が盛んに思惑をやつてゐて、餘計の原料を仕入れたり生産を擴張したりして、新らしい恐慌要因をつくり出してゐたとすれば、反動は一層凄いものとなり、前から進行中の恐慌は、更に深化し激化するだらう。

この場合には、株劵その他の有價證劵に對する投機とその反動がお手傳ひをする可能性が少くない。恐慌の際には、資本は生産部面へ投ぜられて活動することが出來ないから、投機の機會があるとどん〳〵そこへ集つて來る。そして「新東」は二百圓だの、「鐘紡」は二百五十圓だのといつてメートルをあげたがる。ところで、事業界がぺちやんこになれば、泡のやうな取引所景氣は忽ち吹つ飛んで、會社や銀行の破産に拍車をかけるのだ。

それから、今度の場合のやうに恐慌が世界的規模において進行しつゝある場合には、過剩生産物は、ひとり國内のみならず、世界中到る處にある。そこで、資本家が爲替ダンピングをやるつもりで、例へばアメリカへ生糸を送つたとしても、アメリカには前から生糸の供給過多がある以上、日本の生糸が安いからといつて大して買へるものではない。それでも強ひて賣らうとすれば、販賣價格を生産價格以下にさへ引下げるやうな破目になつて、たゞ「國民的勞働の無償提供」だけが猛烈になるだけだらう。おまけに、爲替ダンピングに對しては、相手の國も默つてゐない。そんなものに對しては特別に關稅を高くして受付けまいとする。

さうすると、輸出の有利、輸出の增進なるものも大したことでなくなつて來る。しかるに一方、輸入の方は見越輸入によつて恐ろしく增大し、しかも見越輸入なるものは爲替下落の見透しのある限り續くから、國際勘定は一時的な「改善」すらもなく、却つて惡化を續けるかも知れないのだ。

爲替下落の原因であるところの支拂超過が、主として貿易勘定から來てゐる場合には、さういふことになる。けれども、その支拂超過をば資本勘定の受取超過によつて埋め合せることの出來る國は、事情が違ふ。例へばイギリスのやうに尨大な海外投資を持つてゐる國は、一定の期間のうちにその海外投資を流動化して本國へ回流させることが出來るだらう。もつとも、さういふことをすればまた、それだけ海外諸國の困難が深まつて、それが更にイギリスへ反作用するのだが……。

で、金輸出禁止による爲替下落が、恐慌の進行中に起る場合には、國內物價の騰貴はよし起つても緩漫であり、比較的わづかであつて、場合によつては全然起らないこともある。

だが、それとは別に、恐慌期における金輸出禁止國の爲替の下落、乃至は「圓」の下落は、物價を騰貴させる新らしい要因をつくり出す傾向をもつ。それは本來の意味のインフレーションへの傾向である。

一兌換券が流通する國においてインフレーションが起るのには、少くとも二つのモメントがなければならぬ。(一)兌換券の信用が無くなつて、不換紙幣並に扱はれること、(二)不換紙幣化した兌換券が、流通必要量を越えて流通すること、これである。

兌換の停止は、必ずしも直ぐに兌換券の信用喪失となるものでないことは前に述べた通りだが、しかしそれが信用喪失への第一歩となり得ることは疑ひない。その兌換停止はすでに行はれてゐる。そこへもつてきて、たとひ物價は恐慌のためにそれほど騰貴しないとしても、爲替相場はそれには構はず下つて行く。弗に對する圓の下落がひどければひどいほど、圓に對する信用は失はれ、それが更に兌換券の信用にも響いてくる。おまけに、國内においても、お紙幣は金と對等でなくなつてゐる。爲替が二十五弗になつて、圓の値打ちが弗の値打ちの半分しかなくなれ

ば、金一匁は一圓紙幣五枚ではなく十枚と交換されるのだ。さういつたやうなひどいことになると、誰しも兌換券の値打ちを疑ひ出す。

爲替がこつぴどく下落して、百圓が十五弗なんてことになつたらどうだらう？　そんなことになりさうだと、どうしても「爲替統制」や「爲替管理」をやらねばならなくなるのだが、やればどうしても金は流出する。金が流出して四億の金準備が二億に減つたらどうだらう？　これはます／＼お紙幣の信用にかゝはることだ。さうかといつて、うつちやらかしておけば、爲替は下がるばかりである。

さうなれば、資本は大量的に國外へ逃げ出して行く。それが更に、爲替の下落と金流出に拍車をかける。

しかるにまた、兌換券の増發もます／＼不可避となる。

切迫した信用恐慌や銀行恐慌は、金輸出禁止と爲替下落によつて一時は緩和されるにしても、同時にまた資本逃避や、爲替投機や、物價騰貴を見越しての投機と思惑や、金を物に換へようと

する運動などによつて、銀行預金はずん〳〵減る。銀行の狀態は却つて惡化する。そこへ更に、前に述べたやうな「反動」も起つて來る。そいつが來ては大變だ。そこで、反動的な價格下落を防ぐため、銀行恐慌の爆發を防ぐためには、どうしても兌換券を增發しなければならぬ。

さうかといつて、中央銀行はやたらに紙幣をばら撒くわけに行かないから、政府がウンと公債を發行して中央銀行に引受けさせる。そして政府が代つて紙幣をばら撒いてやる。これは、商品流通・資本流通それ自身の必要からではなく、外部から流通へ投げ込まれる紙幣である。

それと共にまた、國家自體の財政狀態の惡化から、餘計の紙幣が流通に投げ込まれる。租稅收入は必然的に減る。物價が騰貴しても騰貴しなくても減る。騰貴すれば、大衆一人々々の收入のヨリ多くの部分が商品の購買に費されるから、租稅として徵收し得る部分は減る。また、騰貴しなくても、大衆の收入は、失業、減給、等々によつて減るのに買ふ物の値が下らないならば理窟は同じことで、租稅として徵收し得る部分は減る。しかるに、國家の支出は增す。物價が上がればそれだけ支出の增すのは當然だ。たとひ上がらなくても、下がらなければ租稅收入

は減るのだから、やつぱり「赤字」が出る。まして、戰爭みたいなことなんかやつてゐれば、「赤字」は途方もなく大きくなる。

かういふ譯で、國家は盛んに公債を中央銀行にしよひ込ませて兌換券を增發させ、その紙幣を次々に流通に投げ込むことになる。さうなれば、否でも應でも、紙幣の洪水だ。インフレーションだ。物價は新たなる原因を得て躍騰する。そして爲替は、新たなる原因を得て底無しに下落する。謂ゆる「マルクの二の舞」だ。

だが、以上の如き場合における「通貨の必要量」はどうして定まるのか？　金輸出禁止前の通貨の必要量は十億だつたとしよう。爲替が二割下落して物價が二割五分騰貴すれば、十二億五千萬圓の通貨が流通しなければならぬ。その場合に、前の十億を必要量と見なす見解もあるかも知れぬ。さうすれば、二億五千萬圓は必要量の超過だから、そこにすでにインフレーションがあることになる。だが、この場合の二億五千萬圓は、外部から流通に投げ込まれるのでもなく、それがために物價騰貴が起るのでもない。物價騰貴の原因は、弗に對する圓の下落であり、世界市場

での計算貨幣としての圓の下落である。だから、私は違つた見解をとる。十二億五千萬圓こそ、この特殊の場合の通貨必要量であり、それ以上の紙幣の流通はインフレーションになる。もし、爲替下落による物價騰貴の運動が、恐慌過程による物價下落の運動によつて鈍らされ、騰貴が一割に止まるとすれば、十一億圓が通貨必要量であるだらう。

二　金本位停止の意義

では、この機會に、第六講から第五講へさかのぼつて、金本位停止の意義を一先づ要約しておかう。

一、金本位停止は、恐慌、戰爭、××等の「非常時」に起る現象であつて、資本主義の矛盾、並びに貨幣そのものの矛盾の現はれに外ならぬ。

二、ブルヂョアジーは、激烈な金流出、大衆的兌換要求、もしくはそれらの惧れがあると、金本位停止を餘儀なくされる。

三、金本位停止は、「資本主義諸國の間」の金爭奪戰の一表現である。

四、金本位停止は、兌換停止によつて、金の兌換準備たる機能を阻害し、金輸出禁止によつて、金の世界貨幣たる機能を拘束する。

五、支拂超過國の金輸出禁止は、爲替相場を下落させ、爲替相場の安定を喪失させる。爲替の動搖は、國際貿易を萎縮させ、世界市場の分裂を深化する。

六、支拂超過のある限り、爲替相場はどこまでも下落する。爲替相場の下落は、支拂超過を無くするやうな力はない。

七、爲替ダンピングは、「國民的等價の無償給付」であり、「國民的富」の源泉を涸らすものである。

八、爲替下落による「輸出增進・輸入阻止」は、國內物價が爲替下落に相應して騰貴するや否や不可能となる。

九、爲替相場の下落による國內物價の騰貴は、國內通貨の價値減少の現はれである。この價値

減少は、完全な金鑄貨や兌換券が流通する場合にも生ずる。

一〇、この場合には、國內の諸商品は、世界市場における計算貨幣としての「圓」の代表する金量――卽ち二分なる法定金量以下の金量――をもつて、その價格をあらはされる。從つて、この價格總量に應當して流通する金貨幣の純分總量は、法定金量を單位として計算した流通必要量よりも大なるものとなる。從つてまた、流通する金貨幣の各單位は、法定の金量〔例へば二分〕以下のものとしてしか通用しなくなる。（インフレーションの場合は、それと異つて、流通する不換紙幣の總量が、流通すべき金貨幣の總量以上に增大し、不換紙幣の各單位は、金貨幣の各單位の金量以下のものしか代表しなくなり、それ故にまた法定の金量〔例へば二分〕以下のものしか代表しなくなる）。

一一、金の世界貨幣たる機能の拘束は、世界市場での計算貨幣たる機能を不具にすることになり、ひいては國內の流通手段たる機能をも不具にし、國內通貨の安定を喪失させる。

一二、言ひ換へれば、通貨としての一圓は、貨幣の本位及び價格の標準として法定された金量

以下のものとしてしか通用しなくなり、しかも幾何の金量として通用するかも不定になつて、絶えず爲替相場の動搖する毎に變ることになる。

一三、だが、それにも拘らず、「貨幣としての貨幣」たる金そのものは、價値の尺度たる機能を止めるものではない。止めなければこそ、金の輸出を禁止した國の貨幣は、然らざる國の金貨幣に對して價値減少し、且つまた金は、金輸出禁止國の兌換券に對して打歩を生じるのだ。

一四、兌換停止は、兌換券の信用喪失への第一歩であり、從つて本來のインフレーションへの門を開くものである。

一五、爲替の下落わけても恐慌期のそれは、兌換券の信用喪失を促進し、本來のインフレーションへの傾向をつくり出す。

一六、本來のインフレーションは、更に爲替下落を促進し、通貨の安定を全く破壞する。

それでは、すべての國が金本位停止をやつたらどうなるか？

その場合にも、或る國々は受取超過國であり他の國々は支拂超過國であることに變りはない。受取超過國の爲替相場はなかなか安定を失はぬ。その國が全體としての受取超過國である限り、一二の國に對しては支拂超過になつてゐても、「爲替裁定」、「爲替統制」その他の手段によつて、爲替相場及び通貨の安定を維持することが出來るだらう。(「爲替裁定」とは、支拂をする際に、相手國の爲替相場が自國にとつて不利な時は直接の支拂を避け、最も有利な爲替相場のある方へ廻り道して支拂をすべく、その道順を定めることである)。また、たとひその安定が失はれても、短い期間の内に安定を取戻すことが出來るだらう。かやうに爲替相場及び通貨の安定した受取超過國は、國際金融市場および爲替市場の中心を形成する。そして、他のすべての國の爲替相場は、その國の貨幣を基準とし、支拂超過の有無大小に從つて、決定されるだらう。そして絶えず動搖するだらう。

だが、かゝる狀態は、非常な混亂の狀態であることは明かだ。資本と商品の國際取引は、諸國の爲替相場及び通貨の不斷の動搖のために日一日と萎縮する。そして諸國がおのおの獨自の立場

からその混亂を脱け出さうとしてもがけばもがくほど、資本及び商品の世界市場の分裂は深化する。國際的分業の社會的性質は蹂躪され、對立闘爭は尖鋭化し、各國民の生活は窮乏する。受取超過國それ自體も、この渦卷く不安と動搖の中に捲き込まれずにはゐないのだ。

さういふ譯だから、金本位停止なるものは、ブルヂョアジーにとつても、怖ろしいものである。そこで彼等は、その泥沼から脱け出ようとして、いろんな努力を試みる。

一、金準備を少しでも多くしようと思つて、金鑛を所有する大資本家に特別利潤を與へて金生産を「奬勵」したり、他の金輸出禁止國の資本家と結託して自國の方へ金の密輸出をやらせたりする。

二、金準備の補充のため、乃至は一時的にでも支拂超過を少くするために、資本輸入を企てる。また、自國からの資本の流出を阻止し、外國へ投資してある資本を回流せしめようとする。

三、支拂超過を少くするために、一方では「消費節約」を宣傳し、他方では生産力の増大と、

市場獲得鬪爭とに夢中になる。

四、生產力を增大せんとする努力は、謂ゆる合理化運動となつて、勞働者階級にあらゆる犧牲を強制する。そして再び、途方もない過剩生產をつくり出す。

五、市場獲得鬪爭は、植民地・半植民地國への侵略となり、帝國主義戰爭と反ソヴィエット戰爭への直進となる。

大體さういふ次第であるが、日本には前から金輸出再禁止論者なるものがあつて、金の輸出を禁止すると「景氣が好轉する」とか、「財界の建直し」が出來るとか、たわいもないことを言つてゐた。そこで、日本ブルヂョアジーがいよ〳〵恐慌と××とによつて金輸出禁止を強制されるといふと、「論者」達は、頻りに「輸出增進・輸入阻止」の叫びを上げて見たり、物價が上げ足らぬからインフレーションを起せといつたりして、一生懸命である。もう少しすると、「論者」達が今度は何を言ひ出すか、――けだし興味ある問題だらう。

第七講　金と物價

一　金の生産と金の價値

金の生産についてはかういふ話がある。西暦七百六十年といへば大分古いことだが、その頃、ボヘミヤのプラーグといふ町の南方を流れる河の中に砂金が出るといふことを聞込んで、貧民達は出掛けて行つた。彼等は、砂金をとり始めて見ると大當りで、三人の者が一日に三マルク金をとることが出來た。これは當時にしては大變なみいりだつたので、われも〳〵と「金掘り」に押寄せる者が出て大變な騒ぎになつた。彼等は、農業なんかはほつたらかして、わつしよ〳〵と金の出る河を目ざして移住して行つた。すると、翌年の秋には、田畑をつくる者がすつかり減つたので收穫は激減し、國中がひどい饑饉に惱まされた、といふのである。これは、説話みたやうだが、史實である。

二十世紀の諸君は、何と牧歌的なゴールド・ラッシュではある、と思ふかも知れないが、しかしこの事件のうちに、金なる生産物の特殊性は遺憾なく語られてゐる。

金は、他のすべての生産物と異つて、「貨幣商品」として生産される。さうでなかつたら、そんな騷動は起らなかつた筈だ。例へば、或る年或る河で鯉が非常に繁殖して、子供でも一日に百以上はとれるといつたことになれば、一日三マルクの金をとるよりももつと大きなみいりであるわけだが、しかしそれがために國中の者が鯉とりに出掛けて農作物の收穫が減る、といふやうなことは起り得ないのだ。金は、鯉だの何だのとはまるで違つて、すぐに何とでも交換出來るといふ特質を持ち、また退藏し蓄積しておけば何時でも交換の用に立つといふ特質を持つてゐる。だから、金こそ一般的富として所有の對象となり、無限の所有慾の對象となる。それは、「貨幣商品」のみが持つ特殊性である。

それでは、金は無限大の價値を持つだらうか？　さういふ譯には行き兼ねる。貨幣商品金の價値に關しては、吾々はこれまで一貫して一つの原則的な立場を押通して來た。それは卽ち、金の

價値は、他のすべての商品の價値と全く同樣に、それを生產するために社會的に必要な勞働時間によつて決定され、金の價値はこの勞働時間の變動と共に變動するものであり、またこの價値こそは直ちに貨幣の價値を形成し、從つてその變動と共に貨幣の價値も變動する、といふのである。だが、吾々は、如何にしてさうであるかといふことはまだ詳しく說明してはゐなかつた。だから、こゝでその責を果すことにする。

もつとも、說明して見たところで、諸君はむしろあつけなく思ふだらう。貨幣商品たる金は、一面では常に商品であつて、先づ商品としてその價値を決定され、そしてその價値をもつて貨幣の役目をする、從つて價値を決定される場合の金は、一般商品と變らないから。――だから、諸君として最も必要なことは、むしろ、「貨幣商品」といふ概念をはつきりと摑むことである。しかし、これだつて別にむづかしいことではない。

一つのものが二つの資格を併せ持つといふことはザラにある。金は「貨幣商品」だと聞かされると首をひねる者はあつても、荒木貞夫は「軍人政治家」だと言はれて妙に思ふ者はないだらう。

日本の制度上、陸軍大臣は軍人たることを要する以上、「軍人政治家」は必然的に生ずるのだ。そこで荒木貞夫は先づ軍人としてその價値を決定され、その價値をもつて陸軍大臣といふ政治家の役目をする。「軍人政治家」としての荒木貞夫は、政治家たることの故をもつて、軍人たるの一面や軍人としての價値を失ひはしないだらう。――ちつとも解りにくい點はない。

もつとも、數ある軍人の中で荒木貞夫が何故に陸軍大臣になつたかといふことはまた別個の問題だが、それは彼が陸軍大臣として政治家たるの機能を營むに適した性質を誰よりも多く備へたからだと解すべきであつて、恰度それと同じやうにまた、數ある商品の中でも金は最も貨幣たる機能を營むに適した性質を持つが故に貨幣となつてゐる。

さて、それでは、金の價値は如何にして決定され、如何にして變動し、またその變動は如何なる影響を諸商品に及ぼすか？

吾々は先づ、基本的な關係を把握するために、「單純な商品生產社會」を假定する。そこでは、一切の人間勞働の生產物は商品として交換される。商品の價値は、生產において形成され、

交換において實現される。商品と商品とは一定の割合でもつて交換される。例へば一足の下駄が二足の足袋と交換されるとすれば、一足の下駄の交換價値は二足の足袋であらはされ、交換價値の大小は、各商品の生産のために社會的に必要な勞働時間の大小に比例する。この勞働時間は、各商品の價値を決定する、商品と商品とがその價値に比例して交換されないといふと、社會の均衡は破壞され、社會の新陳代謝に故障を來たす。社會は均衡を得ようとするが故に、商品と商品とはその價値に從つて交換されざるを得なくなる。

貨幣商品たる金は、貨幣としては諸商品の交換の媒介者となり、諸商品の價値の尺度となり、價格の標準となる。そこで、二分の金が一圓と呼ばれるならば、二分の金の生産に要する社會的必要勞働時間と等しき勞働時間を含むところの二足の足袋や一足の下駄は、先づ二分の金と交換され、それ〴〵一圓といふ價格を持つ。――それらのことは、諸君にはすでに研究ずみであり、問題は、その二分なら二分の金の價値である。

金は天から降つては來ない。人間勞働によつてのみ地底や砂中から掘り出され、人類の役に立

つものとなり、交換の對象となり、商品となる。卽ち金は、人間勞働によつて生産されて、商品となる。一定の時、一定の社會においては、一定量の商品金の生産のために必要な社會的勞働時間は一定する。それは疑ひない。では、——

(一)その一定量の商品金は、同一の勞働時間をもつて生産される他の諸商品の一定量と交換されるだらうか？　正しく、される。吾々は、されざるを得ないことを明かにすればよい。

が、もう一つ、(二)一定量の商品金の生産に要する社會的勞働時間が變化した場合、例へば減少した場合はどうか？　商品金は、それに應じてヨリ少量の諸商品と交換される。

(三)更にもう一つ、商品金の含む勞働時間におけるこの變化、この減少は、諸商品の上に如何なる影響を及ぼすか？　それは、諸商品の價格を一般に高くする。

この三つの問題の解答に關する說明は、いつしよにする方が便利である。

偶然的にでも何でもいゝから、一つの社會が均衡狀態にあつて、貨幣商品金は、恰度その社會的必要勞働時間に比例して他の一切の商品と交換されてゐたとしよう。更に、二分の金は一圓と

呼ばれ、二分の金の生産に必要な勞働時間は平均一日であつて、生産に平均一日を要する下駄の一足、半日を要する足袋の二足、四分の一日を要する米の四升、等々と交換されてゐたとする。そして、貨幣としての金は、恰度流通必要量だけ流通してゐたとする。その場合に、もし、誰かが新らしい砂金取り場を發見したために、平均一日の勞働でもつて前の二倍の四分の金が取れるやうになつたとしたら、どうなるか？

その新しい場所で砂金を取る者は、一日の勞働で得た金をもつて、二足の下駄、四足の足袋、八升の米、等々を手に入れ得ることになる。つまり、自分の一日の勞働を、他のすべての者の二日の勞働と交換し得ることになる。われらの金生産者達は、恐ろしくうまい商賣を見つけたことになる。

それだけの理由からでも、他の人々はどし〳〵砂金取りに押掛けるだらう。まして金は一般的富として扱はれるのだから、ゴールド・ラッシュが起るのは當然だ。そこで例のボヘミヤの話のやうなことになつて來る。だが、いくら金生産が儲かつても、またいくら金は欲しい物であつて

も、みんながめい〲の仕事をやめて砂金取りに押寄せたために、下駄も足袋も米も何もかも足らなくなつて饑饉が起るといふやうなことになれば、どうだらう。それは恐ろしい均衡の破壞である。

今度は、砂金取りの連中が悲鳴をあげる。金はどつさりあるが喰ふ物がない、着る物がない。これは堪らんといふので、餓鬼のやうに食物や衣服をあさり求めるだらう。彼等は、自分の取つた金を惜し氣もなく提供する。金はふんだんにあつて、食物や着物はからつきしないのだから、今度は一足の下駄、二足の足袋、四升の米、等々が、元のやうに二分の金ではなく、六分の金、八分の金、乃至は一匁、二匁の金とさへ交換されねばならなくなる。金は命から二番目だし、命あつての物種だから。

これは、前には一圓だつた諸商品が、三圓になり、四圓になり、五圓、十圓にもなつたことを意味してゐる。事態はすつかり顚倒されたのだ。今度は砂金取りが馬鹿にみじめなものになつて來た。五日も十日もかゝつて取りためた砂金を、下駄屋さん、足袋屋さん、お百姓さんの一日の

勞働の生產物に取換へるといふんでは、ゴールド・ラッシュも幻滅だ。そこで、駈け出しの砂金取りはもとの商賣へ戻つて行く。それと共に、諸商品の供給は殖えてくる。價格も次第に下つてくる。卽ち、諸商品は次第にヨリ少量の金と交換されるやうになる。では、どういふところに落ちつくか？

その社會は、すべての人々が前に消費してゐた諸々の生產物を元通り手に入れ得るやうになれば、均衡が回復されるのだ。さうなるのには、一日の勞働の生產物たる下駄一足、足袋二足、米四升等々は、今や、同じく一日の勞働の生產物たる四分の金と交換されねばならないだらう。それよりも少量の金と交換されゝば、金生產者が減り過ぎて、その社會の商品流通に必要なだけの貨幣量も得られないし、裝飾品等も得られない。さうかといつて、四分よりも多量の金と交換されゝば、金生產者が多くなり過ぎて、下駄、足袋、お米、等々が足らなくなる。

さうすると、三つの問題の解答の意味も明瞭になつてきた。(一)貨幣商品金と、他の一切の商品とが、なぜ勞働價値に從つて交換されずにはゐないかといふと、それは、普通の商品と商品と

の交換の場合と全く同樣に、矛盾に充ちた商品生産社會の内在法則の盲目的作用があるからである。そして、(二)二分なら二分といふ一定量の金の生産に要する社會的平均勞働が一日から半日に減少すれば、二分の金は、もはや、足袋一足・米二升等々、ヨリ少量の商品としか交換されなくなる。同じことを、異なる觀點に立つて言ひ現はせば、(三)金の價値の減少した結果は、從前通り一日の社會的必要勞働の生産物である諸商品が、今や金二分ではなく四分と交換されることになり、從つて一圓ではなく二圓の價格を持つやうになる。つまり、物價は、恰度金の價値の下落した割合だけ騰貴する。

ついでながら、ゴールド・ラッシュの後始末をつけるといふと、――半減した勞力で金が生産されるやうになつたのだから、既存の金の價値もそれにつれて一樣に低落する。貨幣たる金の價値が減少して商品價格一般が高まつたのだから、貨幣の流通必要量は増大し、退藏貨幣の量や、裝飾品用の金の量なども増してゐるだらう。しかし、金の生産者はおの〳〵一日の勞働で前の二倍の金を生産し得るのだから、金生産者の數は以前と餘り變らないだらう。

尙は、金の價値の低落を惹き起す主要原因は二つある。一つは、今述べたやうな、ヨリ豐饒な砂金採取地や金鑛が探掘される場合だし、もう一つは、金生產においてヨリ進步した技術が採用される場合である。いづれの場合も、金生產の勞働の生產性は高められるのだ。

二　資本主義社會の金生產

資本主義社會においても、金の生產と金の價値、金の價値と物價との關係は、原則的には全く單純な商品生產社會におけると同樣だ。たゞ社會關係と經濟機構がヨリ複雜なだけに、立入つた說明を要する點が生じて來る。

資本主義生產の發展と共に世界經濟が成立する。世界經濟の構成部門は、相對立する多くの國民經濟に分れてゐる。これらの國の中には、金を生產する國としない國、多く生產する國と僅かしか生產しない國、等、いろ〳〵ある。そこで、金は、多く生產される國から、僅かしか生產されない國や、少しも生產されない國へ流れて行つて、諸國の間に配分される。これは世界を流れ

る二つの金の流れの一つであつて、本講の研究は、謂はゞこの流れに沿うての研究である。もう一つの流れは、商品および資本の國際取引に基づいて、國と國との間を絶えず往復するもので、諸君はそれについての研究は終つてゐる。もちろん、この二つの流れは、或る程度までは常に重なり合ふし、またしば〳〵交錯する。が、しかし、一つの流れは、常に金生産國から流れ出し、この流れにおける一國の他國に對する關係は常に金生産國に對する關係であるといふ點で、もう一つの流れと異つてゐる。そこで、吾々が、この金の流れに沿ふて理論的研究を進める場合には、世界中で金の出る國、金を生産する國は、たゞ一國だけで、その他の國はすべて金を生産しないものと假定してさしつかへない。

資本主義生産の發展と共に、金の消費量――使用量といつた方がわかり易いなら使用量――は絶對的には増大したけれども、相對的には非常に減少した。「相對的には」といふのは、生産される商品總量、流通する商品總量と比較して言へばといふ意味である。第一、奢侈品や装飾品の種類が非常に増加し、且つ金以外のものが非常に多く用ひられるために、この用途における金の消

費量が相對的に減少した。第二、貨幣として流通すべき金の量は、貨幣の流通速度の增したことや、信用の發展したことのために非常に減少した。第三、資本主義生產においては、蓄積の動機、目的、意義が違つて來て、個々人が金を貨幣として退藏し蓄積するといふことが無意味になつたために、個々人の手に貨幣として退藏される金の量が非常に減少した。第四、更に、國內では紙幣や銀行券が金貨に代つて流通するために、金は主として各種の準備金として用ひられるやうになり、しかもこの準備金は、中央銀行や政府の手に集中されるために非常に少量で足るやうになつた。

かういふ譯で、現在では、資本主義生產の均衡が多かれ少なかれ維持されてゐる限り、貨幣としての金は、私的な富として個人的所有の對象となる代りに、國民的準備金として國民的所有の對象となつてゐるかの觀がある。

けれども、資本主義社會は、その內在矛盾の故に、必然的に激烈な均衡破壞の時期を持つものである。だから、貨幣としての金は、個人的所有の對象でなくなるやうなことは決してない。更

に、國民的準備金としての金は、一面では常に一般的富として、所有の對象となつてゐる。從つて、貨幣商品金は、一九三二年の今日でも、古代ボヘミヤにおけると同樣、依然として、一般的富として扱はれ、從つて無限の所有慾の對象となつてゐる。

で、金に對する所有慾には限りがない。しかるに金の供給にはもちろん限りがある。無限性と有限性とが見事に衝突する。

供給に限りがあるといつても、それは此の地球上に存在する金鑛石の量に限りがあるといふ意味ではない。それにもむろん限りはあるが、商品生產社會、資本主義社會に供給され得る金の量は、それよりもずつと〳〵少量だ。金は、人間勞働によつて生產され、供給されねばならぬ。單純な商品生產社會では、金を生產し供給する人間勞働に對して、他の諸商品の形態でそれと等量の人間勞働が提供されるやうな關係が成立しなければ、金の生產および供給は減少する。資本主義社會においては、金を生產し供給するところの他人の勞働を搾取して剩餘價値を生產し收得する資本に對して、平均利潤が與へられるやうな關係が成立しなければ、金の生產及び供給は減少

する。だから、金に對する無限の所有慾は、金の供給の自然的制限の遙か手前において金の供給の社會的制限に突き當る。

が、金の生産及び供給は、金生産に投ぜられる資本に對して平均利潤を與へる「社會的必要」があるために制限されるとしても、金に對する所有慾は無限である以上、金に對する需要は無限に大きいのではないだらうか？　さうだとすれば、金の生産には如何に多くの資本が投ぜられても常に平均利潤が得られることになり、制限は單に自然的制限のみに過ぎないと同様なのではなからうか？

どうして、そんなことはない。諸君は、金に對する所有慾と、金に對する需要とを混同してはならないのだ。日本中の人間に自動車は欲しくないかと聞いて歩いたら、たいがいの者は欲しいと言ふだらうが、しかし欲しいと思ふだけでは「需要」ではない。自動車に對する「需要」が生ずるためには、自動車が欲求されると同時に更に自動車に對して「對價」が提供されねばならぬ。自動車の需要者は、その「對價」として金を與へることが出來るだらう。しかし、金の需要者

は、金の「對價」として金を與へることは出來ないから、他の商品を與へなければならぬ。ところが、この商品なるものが天から降るのではなく、人間勞働によつて生產され、しかも資本家はその生產に際して利潤を得なければ承知出來ないのだ。だから、たとひ一般的富としての金に對する需要であつても、一定の時におけるその大きさは限られる。

假りに、一時間で生產される二分の金が、同じく一時間で生產される一反の綿布と交換されてゐて、その場合には金生產の資本の利潤率も、綿布生產の資本の利潤率も、恰度一般的な平均利潤率に等しかつたとしよう。さうした際に、綿布生產の資本家が、金の獲得に夢中になつた揚句、百時間もかゝつて掘り出される二分の金に對してまでも需要者として立現はれ、一時間に一反づつ生產される綿布を對價として與へるとしたら、二分の金に對して百反も綿布を與へねばならないだらう。そんなことをすれば、恐ろしく劣惡な金鑛を掘る資本家でも平均利潤率は得るかも知れないが、綿布資本家の方は、利潤どころか、いゝもとでまでもけし飛ぶにきまつてゐる。

で、資本主義社會においては、一定の時における金の生產および供給も、また金に對する需要、

も、共にその時の社會的勞働の生産性と資本の平均的搾取率とによつて制約されてゐる。金に對する所有慾が如何に猛烈でも、この客觀的限界をどうすることも出來ないのだ。戰爭準備、その他の目的から、政府はしば〳〵この限界を無視した金の需要者として現はれる。さういふ場合には、政府は、自國が金生産國であるならば、金生産資本家に對して利潤の不足を補償しなければならないし、自國が金生産國でないならば、諸商品を生産する資本家に對して利潤の不足を補償してどし〳〵商品を金生産國へ送らねばならなくなる。が、いづれにせよ、國家が資本家にくれてやる價値も、金生産國へ送り出す商品も、只では決してつくり出されないのだから、國家が金獲得に夢中になればなるほど、諸々の均衡はます〳〵破れてきて、新陳代謝と擴張再生産に大變な故障が生じて來る。

金に對する所有慾の無限性と、金の需要及び供給の有限性とは、いづれも資本主義の矛盾から發生して、そして互ひに衝突するのである。この衝突は、更に、前講に述べた金爭奪戰に導くのだ。かうした衝突、鬪爭は、古代ボヘミヤに生じた均衡破壞と同樣な均衡破壞を、一九三二年型

に再生産することも出來たのだ。

さて、長い話を短くしようと試みたので、少し言葉が堅くなり過ぎたやうだが、もう一つ諸君に是非知つておいて貰はねばならないことがある。といふのは、資本主義社會においても、金を手に入れようと思ふ者は、個人であれ、國家であれ、それに對して結局商品を提供するのだし、從つて金生産者の方は、金に對して結局商品を受取るのだ、といふことだ。これは金と金とを交換するといふことが無意味である以上、謂はゞ自明のことである。

金生産國においては、もし金鑄貨が流通するならば、金鑛資本家は金塊を造幣局へ送つて鑄貨と引換へて貰ふだらう。また、もし兌換券が流通するならば、金塊を中央銀行へ送つて兌換券と引換へて貰ふだらう。彼は、國内では鑄貨や兌換券が流通手段として金の代理をしてゐるから、先づそれらのものを手に入れるのだ。そして、それらのものを代理として金を商品と交換するのである。で、かやうな手續きがとられる場合でも、鑄貨なり兌換券なりが、金の價値を完全に代表してゐる限り、金が地金のまゝで直接に商品と交換されるのと少しも變らない。

が、金生産國と、金を生産しない國との間には、金地金と商品とが直接に交換されてゐる。この直接の交換はのべつ行はれるし、また最も大量的に行はれる。金生産國から金を得ようと思ふ國は、それに對して自國の鑄貨や兌換券は送れないし、まして金地金を送れる筈はないから、どうしても他の商品を送るのだ。初めは、金生産國で外債を發行するとかその他の方法をとつて信用で金を手に入れたとしても、その負債を返して金の所有權を完全に獲得しようとすれば、結局商品を送るより外はない。

かやうに、金は、代理を通じてか直接にか、先づ第一に商品と交換されて、流通に入り込んで行く。金の價値は、貨幣として流通に入り込んでから形成されるのではない。金は、それ自身の生産過程において形成された價値をもつて流通に入り込んで、そして貨幣として作用するのである。

金は流通に入込むに當つて先づ商品と交換されるのだとすれば、一定量の金は、その價値が少くなるといふとヨリ少量の商品と交換され、それと共に商品一單位の價格が高くなるといふこと

も明かだらう。その點は、單純な商品生産社會の場合と少しも變らない。

金價値の變動とその影響の關する限りでは正にその通りだが、しかし、資本主義社會における金と商品との交換の割合それ自體はどうして定まるのか？

商品はその生産に要する社會的勞働の大きさに比例して交換されるといふ「價値法則」の作用は、資本主義生産においては若干の變更を受けることを諸君は知つてゐる。（第三講第四節の生産價格の法則）。金は、一面においては常に商品だから、商品金と他商品との交換の割合もやはりこの變更の影響を受けるのだ。その結果はといふと、一定量（例へば一匁）の金と、他の諸商品とはおの／＼の生産價格の大きさに比例して交換されることになる。生産價格とは、諸君御存じの通り、生産費プラス平均利潤のことである。だが、生産價格といつても、それは一定の價値量以外のものではない。だから、つまり金と商品とはこの生産價格と呼ばれる價値量の大小に比例して交換されることになる。

ところで、同じ一匁の金であつても、それが掘り出される鑛山の如何によつて生産費が違ふか

ら、生産價格も違ふわけである。そこで、一匁の金は、その大小さま〳〵の生産價格のうちで、どの生産價格に從つて他の商品と交換されるかといふと、それは原則としては最高の生産價格に從つて交換されるのだ。

最高の生産價格といふのは、數ある金鑛の中でも生産條件の最も劣等な諸鑛山で掘り出される金の生産價格のことである。けれども、それはもちろん絕對的な意味での「最高」や「最劣等」を意味するのではない。一定の時には、金の需要と、金の生産條件とは、一定のものである。その一定の生産條件の下において、その一定の需要を充たすためには、一定數の金鑛が採掘されねばならぬ。吾々は、さうした一定數の金鑛の中で最劣等級の金鑛から出る金の生産價格を、最高生産價格と言ふのである。少くともこの生産價格に從つて金が他商品と交換されなければ、最劣等級の金鑛を經營する資本家達は平均利潤を得られない。さうなれば彼等は金鑛經營を止めて資本を他の有利な商品生産に投ずるだらうから、金の供給は減少して需要を充たさなくなる。

金がその最高の生産價格に從つて他商品と交換されるとすれば、ヨリ優良な金鑛を經營する資

本家達は、ヨリ少ない生産費でもつて金を掘り出すのだから、平均利潤以上の利潤を得ることになる。この餘分の利潤は、鑛山地代として鑛山の所有者の懐に入るのだ。かやうに、生産物がその最高生産價格に從つて交換されるといふことは、鑛産物や農産物などのやうに、それが生産される土地に限りのある場合にのみ生ずるのだ。その他の生産物の場合は、一般に、最高ではなくて平均的な生産價格に從つて交換される。

で、要するに、一定量の金は、その最高生産價格に當る價値量に從つて交換される。吾々が、資本主義社會において、金はその價値に從つて他商品と交換されるとか、その價値をもつて他商品の價値をはかるといふ時は、常にこの價値量を意味してゐる。一定量の金が含むところのこの價値量は、それだけの金を生産するに必要な社會的勞働量と等しくはないが、しかしそれによつて制約され、またそれの増減とともに増減する。そしてこの増減は商品價格一般の騰落をひき起す。

尚ほ、ついでに、金鑛資本家の利潤計算は、他の資本家の利潤計算とは少しく意味が違ふとい

ふことを注意しておかう。

例へば年に一千二百萬反の綿布を生産する紡績資本家ならば、一反は一圓だから一千二百萬圓の總收入になるといつた風に計算するだらう。そして此の內から生産費を差引いて、利潤と利潤率をはじき出すだらう。ところで、彼れの場合の一千二百萬圓なるものは、――一圓は二分の金だから、――二千四百貫の金を意味してゐる。そして、彼れの生産する一千二百萬反の綿布は、價値においてそれだけの金量に等しく、それだけの金量と交換されることを意味してゐる。しかし、彼は何も二千四百貫の金を受取るわけではないから、その金量は單に想像上の金量である。

ところが、金鑛資本家の生産物は、金そのものである。彼れの一年の生産高は恰度二千四百貫だとしよう。彼もやはりそれだけの金量を一千二百萬圓と計算する。が、それは何を示すのか？まさか、二千四百貫の金の價値が、二千四百貫の金の價値に等しいことを示すのではないだらう。おまけに、金が金に對して交換されるわけのものでもない。だから、彼れの場合は、想像上の一定金量（二分）を單位とし、それを圓と呼んで、現實の金量（二千四百貫）を計算するのである。

綿布資本家の方は、同じものを單位として、想像上の金量（同じく二千四百貫）を計算しなければならなかつた。が、金鑛資本家は、その生産物が貨幣商品たる金そのものだから、生産物そのものの數量を圓單位で數へさへすれば、その數字から生産費の數字を差引いて利潤をはじき出すことが出來るのだ。

三　金と物價

では、以上のことを頭において、金價値の變動が物價の變動を惹き起す過程を、考察してみよう——

金の價値は、金の一定量を生産するに必要な社會的勞働時間が増せば増すし、減れば減る。が増すやうなことは滅多にないし、あつても一時的だから、減る場合を問題にする。ところで、社會的必要勞働時間が減るといふことは、勞働の生産性が増大するといふことだ。たとへば前には二分の金を生産するのに平均一日かゝつたのが、今度は半日しかかゝらないといふが如きであ

る。單純な商品生産社會に、さういふことが起れば　それは直ちに金生産の勞働に從事する者の報酬を増加させたものである。だが、資本主義社會にあつては、さうでない。

金鑛の持主は資本家だ。採掘作業に必要な設備や機械の所有者は、資本家だ。實際に勞働する人達は、賃銀勞働者として、やつと喰ふだけの賃銀を貰ふだけである。勞働の生産性が増大して一日の勞働で前の二倍の金が採れるやうになつたからといつて、すぐに賃銀を二倍にして貰へるやうなことは萬々ない。もし賃銀が上がるとすれば、それは勞働者の生活資料の價格が騰貴してみんなが困り拔いたあげく、爭議だの何だのでさん〴〵鬪爭してからのことである。そこで、同じ一日の勞働が二倍の金を掘り出しても賃銀は上がらないとすれば、資本家の利潤は増大する。即ち、勞働の生産性の増大は、何よりも先づ資本家の利潤の増大となる。

金生産の勞働の生産性は、大體二つの原因によつて増大することが出來るのだ。一つは第一節で述べたやうな、今までよりもずつと豐饒な金鑛が發見され、採掘される場合である。もう一つは進歩した採金技師が採用される場合である。先づ第二の場合から始めよう。

金生産國には、生産費の最も安い良鑛から、最も高い惡鑛に至るまで、いろ〳〵あるだらう。進歩した採金技術は、最初はそのどれか一つに採用されるだらうが、やがてすべてに普及したものと假定しよう。その結果、最劣等級の金鑛の生産費も、前の半分で足るやうになつたとしよう。もう少し詳しく言ふと、前には例へば、二分の金の生産價格に當る價値量は、一〇勞働時間であつて、そのうちの八は生産費、二は利潤、――從つて利潤率は二五％であつたとする。そして、それが今度は、生産費は四の價値量で足ることになつたとする。言ひ換へれば、八の價値量の生産費をもつてすれば、四分の金、即ち前の二〇の價値量が得られることになつたとする。

さういふことになれば、資本家の利潤は、二の價値量から一二の價値量に増大する。即ち、一躍六倍する。利潤率は、前には $\frac{2}{8}=25\%$ 即ち二五％であつて、それは一般的な平均利潤率に等しかつたのだが、今度は $\frac{12}{8}=150\%$ 即ち一五〇％といふことになり、平均利潤率よりもべら棒に大きなものになつてしまふだらう。

だが、さうなればさうなるで、資本は動き出す。これはなんでも金鑛を掘らなくては嘘だとい

ふので、資本は四方八方から金鑛へ押寄せる。どの鑛山の生産も擴張され、休坑は掘り返され、新鑛も手當り次第に開かれるだらう。資本が行けば、勞働者もどし〳〵金鑛へ送られるが、それは産業豫備軍が動員されるのだから、勞賃はちつとも上がらない。

が、同時に一方、金鑛資本家の間に猛烈な競爭が起つて來る。どの金鑛も、かういふ時に他よりも安く金を供給して自分の市場を擴張しようとする。また、なにしろ生産費が半減したのだから、安くも供給出來るのだ。そこへもつてきて、全體の供給高は增大してゐるのである。だから金は、次第に、ヨリ少量の商品と交換されねばならなくなる。金が安くなれば、金に對する需要も增してはくるだらうが、しかしその增加にも限りがある。そこで、前には、二分の金が一〇の價値を持ち、從つて一〇の價値量の商品と交換されてゐたとすれば、今度は九の價値量の商品、七の價値量の商品と交換されるといふ風に、次第に、交換比率は落ちてゆく。では、どこまで低落するだらうか？

理論上はどうしても、二分の金が、五の價値量の商品と交換されるところまでゆかねばならぬ

わけである。なぜなら、二分の金の生産費は半減して四の價値量でしかなくなつてゐるのだし、四の價値量を費して生産された二分の金が、五の價値量の商品と交換されることになれば、利潤は一で、利潤率は $\frac{1}{4}=25\%$ 即ち二五%になり、一般的な平均利潤率と等しいものになるのだから。

で、もしも、二分の金が、五の價値量以上の商品と交換され、從つて金生産の利潤率が二五%以上であるならば、金生産への資本の流入は繼續し、金の供給增加と金鑛資本家相互の競爭は續くだらう。更にまた、金と商品との交換比率の低落が行き過ぎて、金生産の利潤率が二五%以下になるならば、引きあはなくなつた金鑛は閉鎖されて、金の供給は需要以下に減少するだらう。

右の如き、金の交換比率低落の過程は、これを諸商品の側から言へば、その價格が騰貴する過程なのだ。前に金二分と交換されてゐた諸商品――例へば一足の下駄、二足の足袋、四升の米、等々――は、次第に、三分の金、三分五厘の金と交換され、遂に四分の金と交換されるやうになる。二分の金を圓と呼ぶならば、前に一圓の價格を持つたものが、一圓五十錢、一圓七十錢の價

格を持ち、遂に二圓の價格を持つことになる。卽ち、物價は騰貴する。

かやうな價格騰貴が、すべての商品に及ぶやうになれば、金鑛で使用する石炭、藥品、機械、等々の價格も騰貴するし、勞働者の生活資料の價格も高くなるので、遂には、金鑛勞働者の名目賃銀も騰貴する。金鑛資本家は、圓を單位にして利潤計算をすると、それらのものの價格騰貴の一歩々々と共に、生產費は增して利潤は減ることになるだらう。新產金技術採用の直後には、彼等は四分の金を二圓と計算することが出來、その四分の金＝二圓に對する生產費を、一分六厘の金＝八十錢と計算することが出來たのだ。ところが、生產費を構成するところの、諸商品の價格は遂に、以前の二倍の金量と交換されて二倍の價格を持つに至つたのだから、今度は生產費を三分二厘の金＝一圓六十錢と計算しなければならなくなる。彼れの利潤は卽ち一圓二十錢から四十錢に減少し、利潤率は一五〇％から二五％に低落した勘定になる。もつとも、この變化と、前に價値量について述べた變化とは、實は同一のものであつて、吾々はたゞ同一の變化を異なる計算方法で示したに過ぎないといふことは明かだらう。

ここに注意すべきことは、「圓」は、法律上依然として二分の金であるけれども、その二分の金の價値は半減してゐるから、前に一圓と交換されたものが今度は二圓と交換されてゐるわけであつて、結果においては、法律を改正して一分の金を一圓と呼ぶことにしたのとおなじだといふことである。

金を生產する國が幾つもある場合でも、勞働の生產性の增大に基づく金價値の減少は、一の金生產國から他の金生產國へ急速に波及する。これは、金なるものはその價値に比して容積重量が少くて運輸が極めて容易なので、一國の金鑛資本家は生產費の安い金塊を直ぐに他國へ送つてその國の金鑛資本家と競爭し得るからである。

同樣に、金價値の減少による物價騰貴もまた――ヨリ遙に緩漫にではあるが――全世界に波及する。例へば、日本の資本家は、前には百斤六百圓の生糸を金生產國のアメリカへ送つて百二十匁の金を手に入れることが出來たのに、今や金價値の減少のために百八十匁の金が得られるといふことになれば、何を措いても生糸を金と交換しようとするだらう。六百圓の生糸を百八十匁の金

に換へて日本へ持ち込めば九百圓になる！　――さういふ譯だからまた生糸資本家は直ちに生糸百斤の價格を、六百圓から九百圓に引き上げるだらう。事實、彼等はさうすることが出來る。なぜといつて、もしも諸君が、百斤の生糸を九百圓で買はないならば、生糸の資本家はそれをアメリカへ送つて何時でも百八十匁の金（即ち九百圓に當るもの）を手に入れることが出來るのだ。

彼等は、金の價値がもつと下落すれば、それに應じて生糸の價格をもつと引上げるだらう。が、これはひとり生糸資本家のみではない。また日本の資本家のみではない。あらゆる國のあらゆる資本家が同樣の手續きによつてそれ〴〵の商品の價格を引上げてゆく。そしてそれが更に他の諸商品に及んで行き、價格騰貴は全世界の商品一般に波及する。

もつとも、金價値の減少の程度および物價騰貴の程度を決定する原因はなか〳〵複雜である。その重要なもの二三について說明すれば――

吾々の假定においては、勞働の生產性が二倍になつたのだから、それまで經營されてゐた諸金鑛は同一の勞働者數をもつて二倍の金量を供給し得るわけである。それで供給は二倍になるが、

しかし同時にまた、金が安くなつたために金の需要も增すだらう。商品價格一般が二倍に高まる以上、貨幣の流通速度や信用による債務相殺等の事情に變化がなければ、貨幣の流通必要量も二倍になる。その他各種の金準備の增加や、奢侈品・裝飾品のための金消費の增加などによつても、金の需要は增す。或はまた、金價値の低落に乘じて銀本位制から金本位制に乘りかへる國もあるだらう。そこで、もし、增加した供給と、增加した需要とが、ほゞ同じ位であるならば、前に說明したやうに金の價値は半減し、物價は二倍に騰貴するわけだ。

だが、かゝる需要の增加が、もしも供給の增加以上にのぼるならば、どうだらうか？　その場合には、從來經營された金鑛だけでは足らなくなつて、新らしい鑛山が採掘されることになる。この新らしい金鑛が、從來採掘されてゐた金鑛中の最劣等のものよりも、もつと劣惡の金鑛であるならば、金の生產價格は、今度は比較的生產費の高い金鑛の生產價格によつて決定されることになる。從つて、從來の最劣等金鑛の生產費の半減にも拘らず、金の價値は半分にまでは低落せず、物價は倍にまでは騰貴しないだらう。

だが、問題の新らしい金鑛が、もしも、從來の最劣等金鑛よりも却つて豐饒なものであるならば、金價値は半分以下に下落して、物價は二倍以上に騰貴する可能性がある。

もう一つは、金の需要增加が、供給よりも少ない場合、——この場合には、その少なさの程度によつては、從來の最劣等の金鑛は不用になるかも知れぬ。また、尻から二番の金鑛までも不用になるかも知れぬ。その場合には、金價値は半分以下に低落し、物價は二倍以上に騰貴する。更にまた、さういふことになるならば、金鑛事業は恐慌に襲はれるだらう。金生產の利潤率が一時激增した際に增投された資本の多くは丸損になつて、大變な破產が起る。かうした金價値の暴落と金鑛の恐慌は、もし新たに開發された金鑛の中に從來よりも非常に豐饒なものがあつたりすれば、尙更ら激烈であり得ることは明白だらう。

四　素晴しい金鑛發見の場合

今度は、採金技術には變化はないけれども、素晴しい金鑛が發見されたといふ場合を考へて見

る。

發見された金鑛は、大變な埋藏量を持つのみならず、鑛石の質が馬鹿によい、その點でも從來採掘されてゐた金鑛中の最良のものより優れてゐる、といふことになつたらどうか？

新鑛における勞働の生産性は最大であるから、生産費は最も安いだらう。從來の諸金鑛は、大體三等級に分かれてゐたとする。金の商品に對する交換比率、即ち金の市場價値は、最劣等級の鑛山の生産價格に等しかつたわけだが、そこでは、一〇の價値量を持つ二分の金を生産するのに、平均八の價値量の生産費を要し、中等級の金鑛では、平均六・五の價値量の生産費を要し、最優等級では、平均五の生産費を要したとしよう。しかるに、今度發見された素晴しい金鑛は、四の生産費しか要しないとする。

もちろん、資本はどん〳〵新鑛へ投下される。これまでになく生産費の安い金がどし〳〵市場へ供給される。

かういふことが起つても、金の價値は下落しない、從つて物價も騰貴しない、といふ説が發表

されたこともある。何故しないかといふと、金に對する「需要」は無限だから、增加した供給に對しては直ぐにそれだけの需要が起る、從つて新鑛の資本家は、生産費の安い金を、從來通りの交換比率（市場價値）で捌くことが出來るので、金の交換比率の低落（卽ち金價値の低落）も、物價の騰貴も起らないで、たゞ、新鑛において、ヨリ大なる剩餘利潤または鑛山地代が生ずるだけだ、といふのである。

この說は、少くとも二つの點で間違つてゐる。（一）金に對する所有慾は無限であつても、一定時における金に對する需要は決して無限ではない。（二）新鑛の資本家は、舊鑛の資本家達の市場を奪取すべく、金の交換比率を引下げて競爭する。

もしも金に對する需要が無限であるのなら――前にも言つたやうに――二分の金に對して百反の綿布が交換されるといつたことにならねばならぬ。そんなことは馬鹿げた均衡破壞であつて、現實には起り得ないことである。また、萬が一そんなことが起るとすれば、世の中に引合はない金鑛なるものは無いことになり、休鑛だの廢鑛だのいふものはあり得ないことになる。ところが、

さういふものは絶えずある。それは取りも直さず需要に限りがある證據ではないか。そして、需要に限りがある以上、金鑛資本家の間に競爭が起るといふことも當然だ。

そこで、競爭の結果、どの程度まで金の價値が低落するかといふと、それは――吾々の設例の條件の下においては、――供給増加と需要増加との程度によつて定まるだらう。

新鑛の資本家が金の交換比率を引下げれば、需要もそれに應じて増加する。前には、年に三萬貫の需要があり、三つの等級の金鑛はおの〳〵一萬貫づゝ供給してゐたとしよう。そして、もし金の市場價値が二分の一に低落すれば、一年の需要は三萬貫から四萬貫に増大するとしよう。その場合には、もし新金鑛の供給能力が非常に大きくて年に四萬貫以上であるならば、生産費の安い新鑛による供給は全需要を充たすから、從來の金鑛はすべて敗退せざるを得ないだらう。そして、それと同時に、金の市場價値は、一〇から五に、即ち二分の一に低落し、物價は二倍に騰貴するだらう。

だが、もしも、新鑛の供給能力が年に三萬貫に過ぎないならば、どうなるか？　その場合には、

最劣等級および中等級の金鑛は全部驅逐されるけれども、以前の最優等級のもの、一部は殘存して、不足分を供給するだらう。さういふことになれば、金の市場價値は、この殘存金鑛の生產價格によつて定まるから、一〇から五にまでは低落せず、およそ六・三の邊まで低落するだけだらう。が、その場合にはまた、總需要の增加もすくなくなるだらう。更に、新鑛の供給能力が二萬貫に過ぎないならば、同じやうな理由によつて、金の市場價値は八・二の邊まで低落するに過ぎないし、總需要の增加も、前の場合よりは更にすくなくなるだらう。最後に、新鑛の供給能力が年に一萬貫以下であるならば、金の市場價値は僅か低落するだけだらうし、總需要の增加も極くわづかに過ぎないことになるだらう。

　これらの場合においては、もちろん、物價の騰貴は、金價値低落のすくなさに比例して、すくないだらう。

が、いづれにせよ、素晴しい金鑛が發見されたとなると、金の價値は多かれ少なかれ低落するし、物價もそれに應じて騰貴する。これは理論上さうでなければならないばかりでなく、歷史的

にもその通りのことが起つてゐる。

五　金生産の富籤的性質

さうすると、金價値の變動が、物價の變動を惹き起す過程も大體わかつたことになるが、尙ほ誤解のないやうに、金の市場價値について一言しておかねばならぬ。

吾々は前にかういふことを言つた、——同じ一匁の金でも、鑛山によつて生産費が違ひ、生産價格が違ふのだが、金の市場價値、金と他商品との交換比率は、原則としては最高の生産價格によつて定まる。これを言ひ換へれば、生産された個々の一匁金塊は、生産條件の良否によつて、大小さまざまの個別價値を持つのだが、それらすべての一匁金塊は一樣に、その中での最大の個別價値に從つて他の諸商品と交換されるのだ、と。

ところで、——もしさうならば、それは、商品は一般に種々なる個別價値の平均的な大きさに從つて他の商品と交換されるといふ法則と矛盾するではないか？　それは一つの理論的矛盾では

ないか？　と言つた者がある。

こんなのは、例の淺薄極まる「矛盾指摘」の一つに過ぎないが、しかしその點をはつきりさせるといふと、事柄全體がもつとはつきりして來るから、手短かに說明する。

第一、矛盾だの何だのといふことを平氣で言へるのは、平均的な大きさといふことの意味がわからないからである。どんな商品にもあることだが、それを生產する個々の工場なら工場の生產條件の良し惡しによつて、同じ品物をつくるのに比較的わづかな勞力と費用で足るものと、さうでないものとがある。從つて同じ商品でも、優良な工場で出來るものは例へば一〇〇の個別價値を持ち、中等の工場のものは一一〇の個別價値を、劣等な工場のものは一二〇の個別價値を持つといつたことになるだらう。ちよつと考へると、その場合の個別價値の平均的な大きさは常に一一〇であるやうに思はれる。だが、それがそも〳〵の間違ひなのだ。

なるほど、供給される商品はたつた三つなら、平均的な大きさは一一〇に違ひない。しかし、さういふことは絕無にちかい。實際には、何十萬個、何百萬個のものが供給されてゐる。そこで、

百萬個のうちの八十萬個までは優良工場で生產されてゐる場合はどうだらう。その場合の、個別價値の平均的な大きさは、一一〇ではない。それは殆ど一〇〇にちかいものである。卽ち、

$$\frac{(80万\times100)+(10万\times110)+(10万\times120)}{100万}=103$$

といふことになる。この一〇三が、平均的な大きさなのだ。また、もしも劣等工場で生產されるものが八十萬個もあるならば、平均的な大きさは一一七であつて、それは殆ど、一二〇にちかいものである。

そこで、需要と供給が完全に均衡を得てゐるならば、その商品の市場價値は、第一の狀態の下においては一〇三の邊に定まるだらうし、第二の狀態の下においては、一一七の邊に定まるだらう。そして、第一の場合には、供給が少しでも需要を超過する傾向があれば、市場價値は恰度一〇〇になるだらう。また第二の場合には、需要が少しでも供給を超過するやうな傾向があれば、恰度一二〇になるだらう。さうなれば、第一の場合の市場價値は、最低の個別價値に等しいと同

時にまた平均的な大きさと殆ど同じものである。第二の場合の市場價値は、最高の個別價値に等しいと同時に、また平均的な大きさと殆ど同じものである。これだけで見ても、商品の市場價値は、一般に、その大小さまゞゝの個別價値の平均的な大きさによつて定まるといふことと、或種の商品の市場價値はその大小さまゞゝの個別價値の中でも最大のものに從つて定まるといふこと、この二つのことの間に、矛盾などはないことがわかるだらう。

では、商品の市場價値は、なぜ、百萬個の中でも特に八十萬個の持つ個別價値によつて決定されるだらうか？　吾々は、決して「紙上の算術」でそれを定めたのではない。それは、八十萬個を供給する資本家達は、市場における競爭上、殘餘の資本家達に對して壓倒的勢力を持つからだ。そして、この連中が平均利潤を得なければ、商品の主要部分が供給されなくなるからだ。つまり、この連中の供給する商品に對して平均利潤が與へられるのには、第一の場合にはおよそ一〇〇といふ市場價値、第二の場合にはおよそ一二〇といふ市場價値に定まらねばならないのだ。

そこで、特に、第一の場合を考へて見る。この場合の市場價値は一〇〇であつて、たゞ優良工

場の資本家達に平均利潤を與へるだけだ。だから、中等工場や劣等工場の資本家達は、平均利潤より少ない利潤しか得られない。この連中は、それで不服なら、資本を引あげて他の事業に移るだらう。問題は、彼等が止めてしまつたら、彼等の供給してゐた二十萬個はどうなるかといふことだ。

彼等が止めた場合に、彼等に代つて二十萬個を供給する資本家達が、優良工場並みの生産費でもつて生産することが出來るか、乃至はそれが出來なくても平均利潤以下の利潤で滿足するか、そのいづれかであるならば、供給は不足しないから、市場價値は依然として一〇〇であるだらう。工業生産の場合には、一般に、右のいづれかの事情によつて、供給は不足しないのだ。また、それ故にこそ、商品の市場價値は一般に個別價値の平均的な大きさによつて決定されることになる。

この場合には、個別的價値の平均的な大きさが市場價値を決定するといふ法則は何物にも妨げられずに作用する。そこが大切な點である。それさへ忘れなければ、かういふことは自明だら

う、――卽ちその法則の作用を妨げる要素が現はれてくるところでは、法則の作用は多かれ少なかれ變更を受けねばならぬ。これは、前に言つた引力の法則とゴム風船の關係とおんなじだ。

ところで、農業や鑛山の場合には、まさにこの法則の作用を妨げる要素が現はれてくるのである。

前の例解における工場を今度は金鑛に取り代へよう。――では、中等・劣等の金鑛をやつてゐた資本家が止めても、供給に不足を生じないだらうか？　理論的、原則的には、不足が生ずるといはねばならぬ。

どんな土地を耕しても、一反から五石の米がとれるといふわけではない。それは、土地そのもの、良否によることとで、人間の力で左右し得る事柄ではない。鑛山となると尙更らだ。どこを掘つても金が出るわけのものではない。どんな金鑛でも一匁の金を平均三時間の勞働で掘り出せるわけのものではない。一定の時においては、優良な耕地、優良な金鑛といふものには天然自然の制限がある。そこへもつて來て、自然の賜である良い土地はすべて私有されてゐて、持主は決

して只では使はせてくれないのだ。

それだから、中等・劣等の金鑛の資本家達が止めてしまふといふと、彼等に代つて金を掘る者が優良な鑛山を發見するまでは、供給は不足するにきまつてゐる。そこで彼等は強くなる。たとひ市場價値が一應は一〇〇といふところに定まつても、彼等は敢へて逃げ出さないで、一寸のあひだ生産を制限して頑張つてゐればそれでよい。百萬貫の需要に對して二十萬貫の不足があれば、金の市場價値はあがつてくる。金の需要者は、市場價値が一〇〇から一一〇になり、一二〇にまであがらなければ、二十萬貫の金が得られない！　そして一二〇まであがれば、劣等金鑛の資本家達も平均利潤をものにして得意滿面といふわけだ。

で、金の市場價値は、最高の生産價格によつて定まるといふのは、かういふ特別の事情があるからだ。事情といふのは、一口に言へば、平均化の法則の作用を妨げる要素の存在である。

問題は、要するに、かゝる要素が現はれるかどうかにかゝるのだ。從つて、さういふものが現はれないか、乃至は現はれてもその力が弱ければ、平均化の法則はすぐにその作用を貫徹しよう

とする。平均化の法則は、市場價値の根本法則だから、他の要素によつて變化を蒙ると否とを問はず、絶えず根強く作用しつゝある。

一般的な資本蓄積の進行と共に、金の需要および供給は增加する。歷史上、三百年とか四百年とかいふ相當長い期間をとつてみると、金の採掘は大體において劣惡な金鑛から優良な金鑛へ移つていつた。さういふことはまた、比較的短い期間においても起り得る。これらの場合には、金の生產は上向運動をとつてゐると言へるだらう。ところが、また、比較的短い期間においては、反對に、金の生產は優良金鑛から劣等金鑛へと移行して、下向運動をとることも珍らしくない。

上向運動の場合において、新しく發見された最優良の金鑛は、供給能力が少くて、やつと增加需要だけを充たすぐらゐのものであつたら、どうか？　その場合には「平均化の法則」の作用は妨げられ、金の市場價値は最高の個別價値又は生產價格に等しくなるだらう。しかし、かくも新金鑛の供給能力が非常に豐富であつて、增加需要のみならず、全需要をも充たすほどであるならば、平均化の法則は自己を貫徹し、金の市場價値は、個別價値又は生產價格の平均的な大きさに

等しくなるだらう。

かゝる場合には、優良金鑛が出現したために當然敗退すべき舊金鑛の資本家達は、一生懸命に採金事業にかぢりついてゐる。採金技術が發達し、金鑛業の資本構成が高度化し、固定資本が多くなればなるほど、いつたん投じた資本を引上げて他の事業に移すことは困難になる。だから、彼等は、たとひ平均利潤以下の利潤しか得られなくても、多少とも利潤が得られゝば、もとでをすつかり無くするよりは遙かに增しだから我慢する。

同樣に、下向運動の場合においても、既に採掘されてゐる諸金鑛はもはや生產擴張の餘地がなくなつて、增加需要を充たすためには、どうしても新たに採掘される最劣等金鑛からの供給を必要とするならば、「平均化の法則」の作用は妨げられ、金の市場價値は最高の個別價値又は生產價値に等しくなる。だが、さういふ場合でも、新たに採掘される最劣等な諸金鑛の資本家相互の間に激しい競爭があるならば、それだけ、「平均化の法則」の作用を妨げる力は弱められるだらう。そして、さうであればあるほど金の市場價値は、個別價値又は生產價格の平均的な大きさに一致

せんとする傾向をとる。かゝる場合には、最劣等級の金鑛の資本は、平均利潤以下の利潤を得るに過ぎないだらう。

かういふ風に、「平均化の法則」を妨げる要素の作用と並んで、また、その要素の力を弱める作用も働くといふことは、農業においてもあるが鑛業において更に甚だしく、金生産においては特に著しい。そしてそれは、金なる生産物の特殊性に基づいてゐる。

(一)金生産の富籤的性質。――これは諺にもあるくらゐだから誰でも知つてゐる。素晴らしいやつを掘り當てれば、それこそ文字通り成金だ。俗に鑛山師根性ともいふが、金はまた特別だ。他の鑛山とは違つて、金の出る鑛山だとなると、どうもうつちやつてはおけなくなる。きつと誰かゞ掘つて見る。それといふのも、一つには、金は、一般的富として無限の所有慾の對象となつてゐる。一つには、また金は、貨幣商品だから、すぐに何とでも交換出來る。更にまた、彼等の言葉でいへば、金は時價でならいつでも賣れる。そこで、錯覺が起つてくる。彼等の掘り出す金は、市場價値よりもずつと大きな個別價値を持ち、從つて「時價で賣つた」りすれば餘程の損に

なるやうな場合でも、金なら大丈夫といふ氣がするのだ。

南アフリカの採金業の二つの大きな會社の配當率を比べて見ると、一九〇六年から一九〇八年までのあひだ、一つの會社は三十割の配當をしたが、もう一つの方は無配當だつた。一九〇九年には、一つは六十割の配當をしたのに、一つは五分の配當しか出來なかつた。一九〇〇年のアメリカ合衆國では、金銀採掘に從事する一千七十九會社のうちで、配當をしてゐるものは百三十六會社に過ぎなかつた。無配當の會社のおよそ三分の一は試掘中のものだつた。

かうした「無配當」會社は、昔から今日まで、世界中で、どのくらゐ出來て亡びてまた出來たか、勘定も出來ないほど多いだらう。そして、その度每に、大變な資本および勞働力が投ぜられて、ほんの僅かな金をしか掘り出さなかつたものに違ひない。かうした點から見ると、年々金生産のために費される勞働は巨大な量にのぼつてゐて、それを實際生産される金に割り當てたら、平均一匁の金は想像出來ないほど多量の勞働を代表することになるのだらう。さうした事情は、昔は昔ほど相對的に甚だしかつたに違ひない。數々のゴールド・ラッシュのことは暫く措いても、

遠く古代から世界到るところの山に川に徒勞の金探求が續けられて來たことを思へば。――が、同じことは、銀にもあり、またダイヤモンドにもあつたらう。マルクスの次の言葉は、恐らくそれを意味してゐる――

「ヤコーヴは、果して金の全價値が支拂はれたことあるかを疑つてゐる。ダイヤモンドに至つては尙更らである。エシュヴェーグに依れば、一八二三年ブラジルのダイヤモンド諸坑における過去八十年間の採掘總高は、同國に行はれる甘蔗及び珈琲栽培業の一年半の平均生産物の價格にも達しなかつた。而も前者はヨリ多くの勞働、隨つてまたヨリ多くの價値を代表してゐたのである」(マルクス)。

(二)もう一つの特殊性は、國家による金生產の保護、奬勵である。これは、もちろん、國民經濟の對立から生じてくる。もしも、さうした對立がなく、金の爭奪戰がなく、金の國際的配分は世界市場における各國の役割の大小に應じたものであるならば、わざ〳〵國家が乘り出して金生產に特別の保護を與へる必要はない筈だ。しかし、多くの國家はそれを餘儀なくされる。國家は、

自國の資本家が貧弱な金鑛でも何でも掘ることを奬勵する。資本家を奬勵するのだから、宣傳やスローガンぐらゐでは間に合はぬ。金鑛を掘つても平均利潤が得られなければ、國家は何等かの名目で國庫金を出して利潤の補助をする。金鑛資本家が損をしても國庫金を投げ出して補償する、等。また、保護、奬勵の一つの方法は、「國產」の金を鑄貨價格以上で――例へば一匁の金を五圓以上で――「買ひ上げる」ことである。いづれにせよ、さういふことが多く行はれゝば行はれるほど、本來は資本に平均利潤を與へないやうな劣惡金鑛が多く採掘され、供給される金のますます多くの部分は市場價値以上の個別價値を持つことになる。

尙ほ一九二八年の世界金產額は、約六〇〇キログラムであつた。そしてその半額以上に當る三二二キロは、アフリカの南阿聯邦で採掘され、米國、カナダ、メキシコは、一四七キロを產出した。日本の金產額は、朝鮮、臺灣も合せて一六キロに足らないほどだから、有名な「佐渡の金山」なども實は問題にならないのだ。それから、國際聯盟の調査報告によると、一九三三年以後は、世界の金產額は漸減し、七年後の一九四〇年になると、現在より二〇%以上の減產となる豫定だ。

さうである。もつとも、最近は「滿洲新國家」なるものが出來て、その中だつたか近くだつたかに、何でも大變な金鑛が發見されたといふことが新聞に出てゐたやうだから、諸君も一つ出かけて見るのもよいかも知れぬ。——

六　金景氣はどうして起るか？

事實において、すばらしい金景氣が起ることもある。少くとも、これまでのところでは、度々起つてゐる。

資本主義の「搖籃時代」の十六世紀から十七世紀にかけては、アメリカ大陸の金銀産出の增大は、資本主義においしいお乳を與へたやうなものだつた。當時の謂ゆる「重金主義」や「重商主義」は、このお乳を理論づけたものである。

一五八二年には有名なコロラド金鑛が發見された。その時分が恐らく、單純な商品生産社會の最後のしかも最大のゴールド・ラッシュを生んでゐる。

『單純な商品生産の段階においては、勞働力が餘りに多く貴金屬の生産に向けられるといふと、農工業が衰微するといふことは、單なる理論上の假説ではなく、歴史上しば〳〵見られる事實である。十六世紀中に豐富な金銀産地がアメリカで發見されて以來、スペインの勞働勢力は翕然としてそれに向つて行つた。スペインの市場へは大量の貴金屬が投げ込まれ、それと同時にスペインの産業は衰微した』（カウツキー）。

アンダースンといふ歴史家によると、一五八八年のスペインにおける總人口五百萬人のうちで、成年男子は五分の一に過ぎなかつた。こんなに減つた理由の一つは、强壯な男子のアメリカ大陸移住だといふのである。

十八世紀には、大した金騷ぎは起らなかつたが、一八四八年のカリフォルニアのゴールド・ラッシュ時分から、また大變な騷ぎになつてきた。

カリフォルニアの金鑛發見の意義を誰よりも先きに指摘した者は、マルクスおよびエンゲルスであつた。彼等は、一八五〇年にすでに、この發見は『二月革命よりも重要なものである』と書

いてゐる。事實においてそれは、グラッドストーンが豫算演說で强調したやうに、『驚嘆すべき富と力』をイギリスにもたらした。その頃はまた、フランス帝國の黃金時代でもあつた。金は、雨のやうに「上流社會」に降りそゝぐやうに見えた。それと同時に、商取引は燦爛として躍動し、企業と投機とは熱病のやうに起つてきた。最後に、ドイツの大工業もまた、その發展の基礎はこの時期に築かれ、その後急速に發展したものである。

言ふまでもなく、かうした時期の特徵は、繼續的な物價騰貴である。物價が騰貴する理由はすでに諸君にわかつてゐる。物價が騰貴するといふ點は、單純な商品生產社會でも資本社會でも變りはないが、產業は衰微しないで却つて發展し、金輸入國の人口は減らないで却つて增大するといふことは、資本主義時代の特徵である。

金生產の增大は、一八六〇年に止まつた。それから、一八七〇年には、オーストラリアで金鑛が發見されたにも拘らず、全體としての金生產は減少しはじめ、一八七四年までは著しい減少傾向がつゞいた。物價は、目だつて下落した。その後、九十年代の初めまで、金の產出は大體に

おいて萎縮狀態を呈し、それと共に物價の低落傾向と、商工業取引の沈滯狀態が現はれた。

するとまた、新たなる金生產の增大の時期が始まつて來た。金の生產は今度は、人類が嘗つて見たこともないやうな大發展を遂げた。一八八六年には南アフリカのトランスヴァールの最初の金鑛が發見され、一八九〇年には、新しい採金技術が採用された。一八九六年にはクロンダイクの金鑛、一八九七年にはアラスカ金鑛が、續けさまに發見された。そこで、また、新らしい金景氣が起つてきた。

右の、十九世紀の第一次の金景氣時代の物價は、ロンドン市場の主要商品について見ると、一八四九年から騰貴し始め、一八五三年―六一年に急激に騰貴した。そして一八六二年には反動的な暴落を演じた。第二次の金景氣時代の物價騰貴は、一八九八年からぼつぼつ始まつて、一九〇五年―一九〇七年に急騰し、更に世界戰爭直前の恐慌期まで續いた。

金生產の增大または減退に基づく景氣の變動と、經濟周期に基づく景氣の變動（卽ち第三講第八節に述べたもの）とは、全く性質の違ふものである。しかし、兩者はもちろん、いろ〳〵な複雜な

形で重なり合つたり交錯したりする。經濟周期の好景氣局面は、金生産の増大によつて强められ、延長されるし、金生産の減退によつて弱められ、短縮される。經濟周期の恐慌および不景氣局面は、金生産の増大又は減退によつて、反對の影響を受ける、等。

物價騰貴を惹き起すところの、金價値の低落は、前述の通り二つの原因によつて生じ得る。その一つである採金技術の改良は、十六七世紀頃と今日とを比べれば非常に進んでゐるけれども、この技術的進歩なるものは比較的に徐々に起るのだし、また主として金生産が減退傾向をとる時に起つて金價値の騰貴および物價の下落を阻止するといふ働きをすることが多いので、金生産の技術的進歩のために積極的に金景氣が起つたといふことは殆どなかつた。ところが、もう一つの原因である優良金鑛の發見の方は、突然に起る。それに、カナダで大金鑛が發見された翌年にまたアラスカで大金鑛が發見されるといつた具合に、續けさまに起ることもある。そして、一つの大金産地が發見されるといふと、そこで最初掘り當てた鑛山よりも、次に掘る鑛山が一層豐饒で、三番目は更に豐饒だといふ風に、數年間にわたつて金生産の上向運動が續くことも珍らしく

ない。さういふ譯で、金景氣の起つたのは殆どすべて大金鑛の發見に基づいてゐた。

が、さて、金景氣なるものはどうして起るのか？

金價値の下落が物價騰貴を惹起すことはわかるとしても、それがために資本家的產業が一般に利潤を增して景氣づいたり、人口が增大したりするのはなぜだらう？

經濟周期における好景氣局面が始まるためには、商品に對する大きな需要が起り、多かれ少なかれ巨額の貨幣が續けさまに市場へ投げ入れられることが必要であつた。(第三講第八節)。この需要、この貨幣投入は、巨額の固定資本の更新のために起るのであつた。

ところで、素晴らしい金產地が發見され、金鑛がどん／＼開發されて行けば、それに必要な生產手段の需要が起ることは明かである。けれども、いかに大規模の金鑛開發が行はれても、大體金鑛に投ぜられる資本なるものは、投下資本全體に比較すれば極めて僅かである。世界中の金鑛資本を合せても、それは世界中の工業、鑛業、交通業の資本總體の恐らく千分の一にも足りないだらう。だから、金鑛開發のために必要な生產手段に對する需要は增加するからといつて、それ

がためにいきなり、永續きのする好景氣が起るといふやうなことはあり得ない。

さういふと、誰しも考へさうなことは、金は貨幣商品で特別のものだから、金の供給增加は卽ち貨幣の供給增加であつて、それが商品に對する大きな需要をつくり出すのだらう、といふことだ。俗學說では、大體、さういふ風に說かれてゐる。しかし、それもむろん間違ひである。俗學說で言はれてゐるやうに、貨幣そのものが直ちに需要をつくり出す力などを持つてゐるのなら、貨幣は大した怪物だが、現實の資本主義社會においては需要をつくり出すものは常に資本であり資本家であつて、貨幣ではない。資本により、資本家によつてつくり出された需要が市場に現はれた時に初めて、貨幣は購買手段として動くのだ。また、流通する貨幣の量が多くなるとすれば、それは物價が騰貴するからであつて、その逆ではない。そのことは前に詳しく述べてある。

ちよつと考へると、どしどし掘り出される金が資本家の手に入れば、資本家は贅澤になつていろんなものを買ひちらかし、金を市場へバラ撒いでもしさうな氣もするだらうが、あいにく資本家といふものはそんな甘いものではない。資本家の資本家たる所以は、がつちりしてゐるところ

にある。彼等は、いかにも金をバラ撒いて贅澤を盡しもするが、しかしそれは彼等がすでに利潤をしこたま握つてしまつた時である。彼等はまた、やたらに原料や機械を買ひ入れるために盛んに貨幣を市場へ投入することもあるが、しかしそれは、――例の一般的な固定資本の更新の時期ででもない限り、――彼等がすでに利潤を増しつゝある時か、乃至は少くとも利潤増大の見込のある時である。

金鑛を掘り當てた一部資本家の利潤増大だけでは、決して一般的な永續きのする「好景氣」は起らない。資本家的産業一般の利潤増加が續かなければ、「好景氣」なるものは決して續かない。では、物價騰貴でもつて資本家の賣る物が高くなるから利潤が増すかといふと、一概にさうも言へないことは明かだ。資本家は一方では製品を賣るが、他方では原料や機械や勞働力を買ふ。さういふものが一樣に高くなれば、利潤も増加する筈はない。

すると、問題は要するに、金鑛の發見なるものは、どうして資本家一般の利潤増加を招來し得るか、さうした増加利潤はどこから生ずるか、といふことだ。

ところで、諸君は、金の價値または貨幣の價値が下落したために物價が騰貴する場合には、すべての商品の價格が一度に同じ程度に騰貴するのではないことを知つてゐる。そして、勞働力の價格——卽ち賃銀——の騰貴は最もおくれるといふことを知つてゐる。それさへ忘れなければ大丈夫だ。

商品の價格騰貴はまちまちである。そこで、或る種の産業においては、製品の價格は騰貴したのに、原料や機械の價格はまだ騰貴しないといふことが起るだらう。さうすればその産業の利潤は增大する。が、他の産業においては、原料や機械の價格が早く騰貴して、製品の價格騰貴の方がおくれることもあるだらう。さうである限り、利潤はむしろ減る傾きがある。けれども、こゝに、すべての資本家の買ふ物であつて、しかも最も價格騰貴のおくれるものがある。それは、勞働力の價格であり、賃銀である。この勞働力といふ商品だけは別物だ。資本主義社會においては、この商品だけは常に過剩がある。その過剩は卽ち産業豫備軍といふ存在だ。だから、この豫備軍が出つくすまで、過剩勞働力がすつかり捌けるまでは、賃銀はあがらない。

さうならば、資本家一般の利潤は增大するわけではないか。

かうして生ずる一般的な利潤增加、――それが金景氣なるもの、原因である。利潤が增してくれば、資本家は一齊に生產擴張をやる。そこで、好景氣の浪はひろがつて行き、高まつてゆく。この運動は、名目賃銀の騰貴が他の諸商品の價格騰貴に追ひつくまでは續き得るわけである。

マルクスは、「剩餘價値學說史」の中で、金景氣の原因をはつきりと指摘した。このことは餘り知られてゐないやうだから、特にその一節を次に引用しておかう。

「實際において、金のこの流入は何に基づいたか？　勞働賃銀は、商品價格と同じ割合において は騰貴しなかつた。從つて勞働賃銀（實質賃銀）は低落した。そしてそれと共に、相對的剩餘勞働は增大し、利潤の率は高まつた。それは、勞働者がヨリ生產的になつたからではなくて、絕對的勞働賃銀（即ち勞働者が受取る生活資料の額）が壓し下げられたからだつた。一口に言へば、勞働者の狀態が劣惡化したからだつた。それ故にこそ、勞働者は、これらの諸國においては、實際上その使用者にとつてはヨリ生產的となつたのだ。この事實は、貴金屬の流入と相關係した。……

「最近の五六十年間において、殆ど全ヨーロッパに起つた、人口の驚くべき增大は、その主要なる理由が、恐らくアメリカ鑛山の生產性の增加にある。貴金屬の過剩が增大することは、商品の價格を、勞働の價格に比して大なる割合で引上げる。それは勞働者の狀態を壓し下げる。そして同時にそれは、その雇ひ主の利潤を增大する　そこで雇ひ主は、出來るだけ多くの勞働者を雇ひ得るやうに、出來るだけ自己の流動資本を增加せずにはゐられないやうになる」（バートン）。そしてこのことは、人口の增加を促進する。……云々（マルクス）。

人口も增すわけである。就業勞働者の狀態が劣惡化し、實質賃銀が低下すれば、資本の利潤は增すのだから、資本家はます／＼多くの勞働者を雇ひ入れる。勞働豫備軍は動員される。今まで喰へなくされてゐた多數の人々は、安い賃銀でも何でも雇はれる。さうすると、極度の榮養不良のためや病氣の手當が出來ないためなどで死んでしまふ筈の彼等の子供達が死なないといつたやうなことから、死亡率は減つてくる。また景氣に浮かされて結婚期を早めたり、流產、死產、墮胎等々が減つたりするといふやうなことから、出生率も增してくるだらう。そして、この「好景

氣」時代における勤勞者大衆の人口増加が大なれば大なるほど、そのあとに來る過剩人口、勞働豫備軍はます／＼大きなものとなり、その壓力によつて勞働者の狀態はます／＼劣惡化するだけなのだ！

第八講　インフレーション

一　價格變動の諸原因

諸君は、商品の價格なるものは、いろんな原因によつて變動するものであることを學ばれた。こゝで、その樣々な原因による價格變動を比較し、要約して、インフレーションの研究に入る準備をしよう。

一、貨幣の價値には變化がなく、たゞ個々の商品の價値が增減するために、その價値が騰落する場合。この場合の價格の動きは、商品によつていろ〳〵であり、まち〳〵である。

二、貨幣の價値にも商品の價値にも變化のない場合でも、商品に對する需要が供給を超過したり、供給が需要を超過したりすれば、商品の價格は、商品の價値を離れて騰落する。

この種の價格變動は、商品市場に絶えず起つてる。かゝる價格の動きもまた、商品によつて

いろ〳〵であり、まち〳〵である。だが、經濟周期の好景氣局面においては、一般に、商品の需要は供給を超過するから、商品の價格は——物によつて遲速はあり、程度の差はあり、また常に波狀線を描いてではあるが、——一般に騰貴する。反對に、恐慌局面においては、一般に、商品の供給の方が需要を超過してゐるから、商品の價格は——同じく條件づきではあるが、——一般に低落する。

第一の場合の價格變動と第二の場合とは、同時に起り得る。特に、恐慌期においては、生產過剩に原因する價格低落と、勞働の生產性が增大したために商品の價値が減少したことに原因する價格低落とが、重なり合つて現はれてくる。

以上二つの場合とは違つて、價格變動の原因が貨幣の方にある場合。——この場合には、商品價格は一般に騰貴するか、もしくは一般に下落する。が、これにおいても、三つの異なる原因がある。卽ち、

三、貨幣たる金の價値が低落すれば、商品價格は一般に騰貴する。反對に、金の價値が昂騰す

れば、商品價格は一般に下落する。

次に金の價値には變化がなくても、——

四、不換紙幣化した紙幣または兌換券が、流通必要量を超えて流通するために、通貨の價値減少が生じた場合には、商品價格は一般に騰貴する。乃至は、一般に、商品價格の下落が阻止される。

五、爲替相場が下落したために通貨の價値減少を生じた場合にも、同樣である。

最後に「信用膨脹」の場合がある。卽ち、

六、「信用膨脹」が起れば、商品價格一般の騰貴が生ずるか、またはその低落が妨げられる。

「信用膨脹」は、商品の需給關係を通して價格の變動を惹き起すのだが、これは一つの特別な原因として作用するのだし、また常に商品價格一般の騰貴傾向を惹き起す點において第四および第五の場合と同じである。

以上六つの價格變動の原因は、そのすべてなり、その幾つかなりが、同時に作用することは珍

しくない。さうした際には、その結びつきの具合によつて、價格の騰貴または低落は、或は強められ、或は弱められ、或は全く相殺されて中和されるだらう。だが、同じく價格の騰落であつても、その原因が異なる以上、意義と影響を異にするのだから、一と他を混同してはならないのだ。吾々は、右の第四、第五、第六の場合を、インフレーションの問題として研究することにしよう。

二　インフレーションの三つの型

本來の意味のインフレーションは、不換紙幣の流通法則に基づいて生ずるものである。それについては第五講の第五節に詳しく説明しておいた。一口に言へば、貨幣の流通必要量を超えて流通に投げ込まれた紙幣が價値減少を起して物價騰貴を招來する、これがインフレーションである。國際的支拂超過を持つところの金輸出禁止國において、爲替相場が下落した場合にも、インフレーションと同じやうな現象が起つてくる。けれども、この場合に物價が騰貴するのは、紙幣が價値減少を起すからではない。この場合に價値減少を起すのは通貨一般であつて、その通貨が紙

幣であると、兌換券であると、また金鑄貨であるとを問はないのだ。從つて、この通貨の價値減少なるものは、通貨の量がその流通必要量を超えて増大したために生ずるのではない。本來の意味のインフレーションにあつては、不換紙幣化した紙幣や兌換券が流通必要量を超えて流通に投ぜられたために價値減少を起すのだが、爲替下落の場合には、通貨の價値減少が起つたためにヨリ多くの通貨が流通しなければならなくなる。

さういふ譯だから、私は、爲替下落＝通貨價値減少による物價騰貴を、本來の意味のインフレーションと區別するのだが、しかし近來はこの現象も一般にインフレーションと呼ばれてゐるし、また現象形態においてはそれとこれとの間に大した差異はない。それで、私は、この現象をもインフレーションの題目のもとに扱ふことにしようと思ふが、それを本來の意味のインフレーションと區別するために、特に爲替インフレーションと呼ぶことにする。爲替インフレーションがどうして起るかといふことは、第六講の第七節および第十節に詳しく述べてある。また、本來の意味のインフレーションの方は、便宜上、簡單に紙幣インフレーションと呼ぶことにする。

もう一つの型のインフレーションは、信用インフレーションと呼ばるべきものである。

信用の膨脹は、直接にか間接にか、作用態の資本を増大させる。そこで、諸商品に對する需要は増大し、一般的な物價騰貴の傾向が生じてくる。それと共に通貨の流通量も増大する。これは、信用膨脹によつて作用態資本が増大せしめられる結果として、物價の騰貴傾向が起るのであつて、通貨が膨脹するために物價が騰貴するのではない。信用膨脹の一形態であるところの信用インフレーションにおいては、——少くともたゞそれだけでは——、通貨の價値減少は起らない。通貨の價値減少が起つたかどうかは、金に打歩が生ずるかどうかによつて知ることが出來る。

むろん、すべての信用膨脹が、信用インフレーションではあり得ない。休息態の貨幣資本が、作用態の生産資本に轉化されるのに比例して、信用は膨脹する。が、その信用が、實在する休息態貨幣資本の貸附によつて生じてをり、且つその信用が、支拂能力のある相手に與へられてゐる限り、どんなに信用が膨脹したところで、それは資本主義社會における「普通の現象」であつて、特に信用インフレーションといふべきものではない。

ところが一定の條件の下においては信用は必然的に「過大な膨脹」をやつてのける。その場合には、一般銀行ならば預金の額を遙かに超えて貸附をやつてゐるし、中央銀行ならば準備金を遙かに超えた貸附によつて巨大な空資本をつくり出してゐるといふだけではなく、信用の大なる部分は支拂能力のない相手に與へられてゐる。かやうな「過大信用」の結果として生ずる物價騰貴、それが信用インフレーションである。

で、信用インフレーションの場合には、支拂能力のないくせに信用を受けた者が資本家達であるならば、やがて信用恐慌がやつてくる。それが資本家達ではなくて國家であるならば、やがて國家財政の危機や破産がやつてくる。多くの場合は兩方だから、どちらもやつてくる。

信用インフレーションは經濟周期の好景氣局面においても生ずるのだ。好景氣が相當に發展してくれば、そこにはすでに過剩生産が起つてゐる。資本家達は、有頂天になつてゐて氣がつかないけれども、彼等の生産する商品の大きな部分は、早晩賣れなくなる筈のものであり、從つて、彼等が受けてゐる信用の大きな部分は、支拂不能となる筈のものである。しかるに、銀行は、正

にさうした際に、どし／＼貸す。預金の總額よりも二〇％も三〇％も多く貸す。從つて、中央銀行の兌換券發行も、準備金を遙かに超えて增大する。この信用インフレーションは、物價騰貴に拍車をかける。そして、大變な過剩生產恐慌と信用恐慌とに導くのだ。

資本主義の發展がまだそれほどでなかつた間は、好景氣局面に生ずる信用インフレーションは特別な問題を惹き起さなかつた。過大な信用は恐慌期において清算されて、「禍を後にのこす」やうなことはなかつたからである。ところが、資本主義が發展すればするほど、そして固定資本信用が發展すればするほど、信用インフレーションを惹き起した過大信用は、恐慌期において清算しきれなくなり、恐慌がをさまつてからもなほ「氷結した信用」として永く殘るやうになつてきた。そこで信用インフレーションなるものも、大きな問題として一般の注意にのぼつてきた。

マルクスは、それが問題にならなかつた時分にすでに、過大信用の不可避性をはつきりと指摘した。彼は言ふ――

『信用なるものは、過剩生產並びに商業上の過剩投機を促す主要な槓杆として現はれるのである

か、それはつまり、その性質上伸縮自在な再生産行程が、この場合、強ひて精一ぱいの限度まで擴大せしめられるからである。なぜ、再生産のかゝる擴大が行はれるかと言へば、それは、即ち社會的資本の一大部分が、その非所有者達によつて充用されるからである。自己の私的資本を所有する者は、みづからこれを生産上に運用する場合、氣遣はしげにその制限を考慮するのであるが、非所有者達はこの點もつと大膽である。』

あらゆる點において個々の資本家を對立させる私的所有制の下においては、かやうに一方では人の金だから借りられるだけ借りてやれといふ先生達があり、他方には人から預かつた金を貸して儲けるのが商賣だから、出來るだけ多く貸してやれといふ銀行家諸公があつて、過大信用を不可避ならしめる。と同時にまた、無計畫・無統制の資本主義社會においては、周期的に、必然に、「遊資」が山のやうに堆積して、利子率がべら棒に低落する。そこで、何でもいゝから早く金の借手を見つけ出して遊資を處分しなくてはどうにもやり切れないといふことになつてくる。その點に關しては、マルクスは、英國の一著者の次の言葉を引用して示してゐる。

一社會の過剩な富が周期的に累積されて、通例の投資部面に餘地を見出し得なくなつたのを捌くために、少くとも我國（英國）においては、過剩な遊資に對して絶えず捌け口を與へるところの、巨大な資本を要する企業が絶對的に必要とされるのだ。」

かくして、過大信用への必然性は與へられる。では、「過大信用」が生ずるといふことは、何を示すだらうか？　マルクスは書いてゐる――

「資本主義生產の對立的性質に基づく資本の價値增殖なるものは、或る一定の限定以上には現實的の自由な發展を許さないといふこと、從つてこの價値增殖は實際のところ生產の內在的な桎梏をなし、制限をなすのであるが、この桎梏、この制限は、絶えず信用制度のために破り拔かれるといふことを示すだけである」」

過大信用と、それに基づく信用インフレーションの理論的基礎は、以上の如くである。

が、近來特に問題になつてきたのは、信用インフレーションの一形態で、救濟インフレーションと名付くべきものである。これは、恐慌期に現はれる。そして、それは、過大信用の後始末の

ために更に過大信用が與へられるもので、その結果、物價の騰貴が生じないまでにも、物價の低落は阻止されることになる。

過大信用は國家に對しても與へられる。

××、××、恐慌等の時期に際しては、國家財政に大きな赤字が出る。さうすると、國家は、通常の租税徴收方法で得る收入をもつては到底支拂ふことの出來ないやうな尨大な借金をする。その場合には國家は中央銀行から大變な過大信用を受け、手に入れた通貨をもつて巨大な商品需要者として市場に現はれる。從つて物價は騰貴する。（恐慌期にあつては物價の低落が阻止される）。その際、もし通貨の價値減少が生ずれば、紙幣インフレーションが起るのだが、それが生じなければ、信用インフレーションが起るのだ。

もう一つ、極く最近にとてもやかましく言はれてゐる信用インフレーションの一形態がある。それは、國家が、恐慌による物價下落を喰ひ止める目的をもつて、（乃至は、爲替下落―物價騰貴を見越してやつた×××××××を成功させてやるといつたやうな目的をも兼ね）、中央銀行から

巨額の借金をして巨大な土木事業等々を起す場合である。これにあつても、國家が中央銀行から受ける信用は、通常の租税徵收方法で得る收入をもつては到底支拂ひ兼ねるものである限り、過大信用である。此頃、「世界各國は今や悉くインフレーション政策に轉向した、日本もやれ！」といふやうなことを言つてわい〳〵騷がれてゐるのは、主としてこの型の救濟―信用インフレーションのことである。

以上のやうないろんな形においての信用インフレーションを惹き起すところの過大信用の或るものは、外國からの借金――即ち外資輸入――といふ形態をとることも出來る。日清戰爭後から世界戰爭までの二十年間の日本は、國家が受ける過大信用に基づくところの、次々の信用インフレーションを持つたが、その借金のかなりの部分は外債によるものだつた。

一國に信用インフレーションが起り、物價騰貴が起るといふと、その國への輸入は增大し、その國からの輸出は困難になる。從つて、支拂超過は增大し、正貨が流出する。そしてこの支拂超過を緩和するため、または正貨を補充するために、新たなる外資輸入が行はれ、そこでまた新た

なる信用インフレーションが起つてくる。世界戰爭以前の日本が正にそれだつた。

異常に大なる金の流入もまたインフレーションを惹き起し得るといふことは、第六講第五節に述べておいた通りである。

一八九九年十二月から一九一〇年十二月までの十一年間に採掘された金は、どんな國の銀行へ流入したかといふと、世界中の金鑛の大多數はイギリスに屬してゐたにも拘らず、イギリスの銀行に入つたのは一千萬磅足らずに過ぎなかつた。それに對して、オーストリアへは五千三百五十萬磅、イタリーへは一億六千二百萬磅、ロシアへは一億九千萬磅、バルカン諸國へは四千八百萬磅の金が入つてゐる。そして、これらの國がこんなに巨額の金を手に入れることが出來たのは、主としてイギリスから借金をしたからであつたのだ。

かうした借金の一定の部分が、過大信用を意味するものである限り、信用インフレーションとなり得ることは言ふ迄もないだらう。信用インフレーションの起つた國の物價は、——その時が金價値低落の時期であるならば——金價値の低落に原因する騰貴の程度を超えて騰貴することに

なり、それだけ反動的な物價低落は激しくなる。

かやうに、金生產の增大・金價値の低落の時期においても大きな金流入が生じ得るが、戰時においても異常な金流入が生じ得る。

いづれの場合でも、流入した金に對して兌換券が發行され、それが銀行預金に轉化され、「遊資」が增大し、利子率が低下すれば、前に述べたと同樣の過程によつて過大信用および信用インフレーションが起り得る。

尙ほ、金の流入および外資の輸入に際して起る信用インフレーションは、その國が金輸出禁止をやつてゐる場合には特に起り易いといふことは注意すべき點である。

三　戰時の信用インフレーション

さて、以上において吾々は、信用インフレーションの起り得る樣々の場合を述べたが、これを物價運動の觀點から見ると、(一)物價の騰貴運動が促進される場合と、(二)物價の低落運動が妨げら

れる場合とに大別することが出來る。だから、吾々は、第一の場合の代表的なものとして戰時の信用インフレーションの發展過程を分析し、それから第二の場合を研究することにする。この二つの場合は、實踐的にも最も重要なものであるし、また、爲替インフレーションや紙幣インフレーションに對しても密接な關係を持つてゐる。

戰時に起る信用インフレーションは、經濟周期の好景氣局面に起る信用インフレーションよりも遙かに強烈であり、實に比較にならぬほど強烈である。これは、言ふ迄もなく、戰爭に際しては、全く特別な要因が作用するからである。

戰爭をする資本主義諸國は、互ひに、敵國の占領、敵國の屈服を目ざしてゐる。この目的を達するためには敵國の抵抗を打破しなければならぬ。從つて××の主要手段は、人命と富との大量的破壞であり、その相互的な破壞である。そこで、戰時經濟の根本特徵は、厖大な破壞的消費の發展にある。敵國に破壞を與へるための消費、敵國から破壞されたものを補充するための消費。この破壞的消費の主要な擔當者は、交戰國の××と××とである。

戰爭の繼續と擴大、××的消費の繼續と增大、——この過程が進行する限り、絶えず增大する商品需要が起つてくる。戰爭になつたからといつて、資本主義國の生產物は商品たる性質を失ひはしない。そこで戰爭の遂行者たる國家は、ます〳〵巨大な商品の需要者として、市場に現はれる。この國家にとつては、租稅收入ぐらゐではどうにも始末がつかなくなる。國家は、のべつ公債を發行して中央銀行に引受けさせ、ひつきりなしに發行される兌換券を購買手段として市場に投ずるより外はない。國家は、同盟國や中立國からも巨額の借金をするが、その場合にも、國內での購買手段たる兌換券を供給するものは中央銀行である。

で、戰時の信用インフレーションにおいては、尨大な破壞的消費の進行があるといふことと、××自體が破滅的な過大信用を中央銀行又は他の國家から受けるといふことが特徵である。つまり、戰時經濟においては、國家の受ける過大信用が主動的要素となつて、破壞的消費に基づく幻想的な巨大需要がつくり出され、それによつて資本家企業一般の利潤は激增し、極度の生產擴張が行はれ、それと共にまた一般銀行によつて過大信用が與へられて、そこに強烈な、全面的な信

用インフレーションが發展し、恐ろしい物價騰貴が起るのだ。

戰爭をする國は、もちろん、兌換を停止し、金の輸出禁止をやる。おまけに、兌換券は、本來の資本流通や商品流通とは無關係に、また金準備の大きさとも無關係に、どし／＼增發される。從つて、他の事情が同一なら、兌換券は信用を喪失して不換紙幣化し、通貨は價値減少を起して金に打步が生ずるだらう。さうなれば、すでに紙幣インフレーションが起つたのだ。

だが、戰時の支配者階級は、兌換券の信用喪失を喰ひ止めるためにあらゆる努力をする。主要交戰國は、巨額の商品を中立國や同盟國から買ひ入れるが、しかし出來るだけそれを信用で買入れて金流出を免れようとする。が、何よりも彼等は、國民の愛國心に訴へる。ブルヂョアジーも、のるか反るかの大勝負の際ではあり、また盛んに國民の愛國心に訴へてゐる際だから、彼等自ら兌換券の信用を破壞するやうな露骨な行動はとれなくなる、等、等。

さういつたやうなことで、兌換券の信用がどうにか維持されてゐる間は、主要交戰國と雖も紙幣インフレーションを免れることが出來るだらう。さうである限り、紙幣インフレーションに代

つて信用インフレーションが起るのだ。

破壊的消費の中心から遠ざかつてゐるところの副次的な交戰國や、中立國は、強烈な世界的信用インフレーションの中に捲き込まれる。彼等は、過大信用の授與者たる地位に立ち、また過大信用によつてつくり出された商品の需要に對する供給者たる地位に立つ。これらの國においても、物價騰貴の浪は荒れ狂ひ、利潤增大、生産擴張、一般銀行による過大信用授與が起つてきて、物價騰貴を更に促進する。

では、資本家の利潤はどんな風にして增すのであるか？

過大信用による尨大な繼續的な商品需要が起る結果として、需要は繼續的に供給を超過する。するとどうなるか？　マルクスは言ふ。

『需要が強大であつて、價格は最劣等の條件の下で生産された商品の價値によつて規制されるに至つても、尚ほ且つ需要が收縮しないとすれば、この價値が市場價値を決定する。このことは、需要が普通の需要を超えて大なる時にのみ……可能である』。

卽ち、何よりも先づ、商品の市場價値は、その最高の個別價値に等しいところまで高まつて行く。從つて、最劣等な條件で生產する資本家企業でさへ平均利潤を得ることになり、それより少しでも生產條件がよくて生產費の安い資本家企業はすべて超過利潤を得ることになる。だから、資本家達は、全く戰爭に限りますねと大はしやぎだ。殆どすべての資本家企業の生產は精一杯といふところまで擴張される。

ところが、何しろ一方では狂亂的な破壞的消費が進行するのだから、どんなに生產を擴張したところで追つつくものでない。需要が供給を超過する程度はますます强烈になる。さうなれば、商品の現實の市場價格は、市場價値からも離れて途方もなく刎ねあがつて行く。

かやうな價格騰貴が繼續するあひだは、資本の利潤はべら棒に大きくなることは明かである。資本家は、百萬圓の資本を投じ、百二十五萬圓の價格を持つ製品を賣つて二割五分の平均利潤が得られるといふ事情の下に事業を始めたとする。彼は、工場を建て、機械を買ひ、原料を仕入れ、勞働者を雇ひ入れた。そして、いよいよ第一回の生產を終るといふと、製品の價格は、彼が生產

を開始した時よりも、二〇%も高くなつてゐる。製品は百五十萬圓で賣れて行く。彼れの資本が一回轉する間に、利潤率は、二割五分から五割に激増する！　百萬圓だつた資本が百五十萬圓になつてゐる！

むろん、この間において、商品の價値が増大したのでもなければ、貨幣の價値が低落したのでもない。彼れの資本が増大したのは、たゞ供給を超過した需要のために、商品の市場價格が價値を超えて騰貴したからである。從つて、この場合の資本の價値増殖は、全く名目上のものである。言ひ換へれば、この場合には、單に圓とか弗とか磅とかいふ名目的貨幣單位で計算する限りにおいてのみ、資本の價値増殖が生ずるのだ。

だが、資本家としては、さういふ計算方法でもつて自己の資本の増減を知るより外に知りやうがない。マルクスが言つてゐる通り、――資本が生産部面に動いてゐるにせよ、流通部面に動いてゐるにせよ、價値としての『資本は、たゞ觀念的に計算貨幣の形態で……商品生産者乃至は資本主義的商品生産者の頭の中にあるに過ぎない』のだ。だから、彼は、「弗貰ひ」で儲けた金であ

らうと、殺人機械の價格騰貴から得た利潤であらうと、すべて一樣に、何千何百何十萬圓也と、彼れの帳簿に記入する。

かやうに、急速な物價騰貴といふ條件の下においては、回轉する資本は、名目的貨幣單位で計算された異常に大きな利潤を含んで、資本家の意識の上に現はれてくる。前例の資本家ならば、その帳簿の上では、百萬圓の資本が百五十萬圓に激增したことになつてゐる。

が、もちろん、彼れの資本の次の回轉に當つては事情が違つてくる。市場價格の騰貴するのは、彼れの製品だけではない。彼れの仕入れる原料や燃料の價格も高くなつてゐる。もしも、彼れが機械等々も新らしいのを買はねばならぬと假定すれば、それらのもの〻價格も高くなつてゐる。こゝでも、問題になるのは勞働力の價格であるが、とにかく一應、それも高くなつたと假定しておかう。さうすると彼れは、前に百萬圓で買へたいろんな物を、今度は百二十萬圓で買ふことになる。卽ち、彼れの生產費を構成する諸要素もまた、名目的貨幣單位で計算されて、實際の價値よりも著しく高くなつてゐる。が、それでも、もし彼れの資本が第二の回轉を終るまでに、

彼れの製品の價格が更にまた二割も高くなつてゐるとすれば、彼れの最初投じた百萬圓の資本は、今度は百八十萬圓になつて回收されるわけである。かういふ調子で進んで行けば、資本は四五回回轉するうちに三倍となり四倍となる勘定だ！

かやうに、信用インフレーションに際して資本家の手に累積する莫大な利潤は、主として、名目的な帳簿上の價値增殖から成つてゐる。戰時においては、この莫大な利潤と對應して、狂亂的な破壞的消費があり、それに伴ふ幻想的な過大信用がある。この點から見ると、××經濟なるものは、國民全體が、ブルヂョアジーの利益において、狂的大浪費を敢行することだと言へるだらう。

が、もう一つ、信用インフレーションの下における莫大な利潤の出所がある。それは、勞働者の實質賃銀の引下げである。戰時においては、就業勞働者および「產業豫備軍」のかなりの部分は、戰線に動員される。しかるに、生產の方は手一杯に擴張されるから、さすがの產業豫備軍も殆ど出つくすことになる。だから、名目賃銀は騰貴する。けれども、それは到底、勞働者の生活資料の價格騰貴には追ひつけない。殊に××には、買收された勞働運動指導者の組織的な裏切り

と、同じく組織的な××とによつて、勞働者達は爭議さへもろく／＼出來ないやうにされるから、なほさら名目賃銀の騰貴はおくれることになる。從つて、實質賃銀は必然的に引下げられ、それだけ資本家の利潤を增大させるのだ。

全資本家階級は、かうした利潤の甘露に醉つて、生產擴張狂になつてゐる。それと共にまた、彼等の帳簿上の利潤の基礎の上に新たなる過大信用が與へられ、生產能力の最後の一分子までも利用し盡させようとする。が、さうなると、もう、生產諸力の酷使になる。工場でも、鑛山でも、鐵道でも、船舶でも、また農場でも、それを構成する物質的諸要素の磨滅、破損、解體、涸渇が起るのだ。これは、戰爭行爲による直接の破壞ではなく、生產そのものによる生產諸力の破壞である。勤勞者大衆はくた／＼に疲れ果て、文字通り飢餓に襲はれてくる。

同時に一方、尨大な生產活動を支へてゐる信用の糸も次第に細つてくる。それに、信用は元來觀念的なものである。觀念的な變化と共に信用は瓦解し得る。交戰國の中でも、旗色のよくないものはものほど、急速にこの危險に曝される。

それは、××××××である。

かくして、いづれか一方が屈服して××行爲が終るや否や、怖ろしく深大な諸矛盾が全世界に爆發する。過大信用は一擧に清算されねばならぬ。それと共に生産は停止する。帳簿上の巨富は一擧に激減しなければならぬ。それと共に大量的な破産が起る。激烈な物價下落が起る。生産と消費との間には、底知れぬ深淵がぱくりと口をあいてゐる。金準備の國際的配分などはもう滅茶滅茶になつてゐる。

これは、經濟恐慌でもあるが、それ××のものである。これは、國家財政の破産でもあるが、それ以上のものである。

尚ほ、××は、帝國主義××××の場合を假定して述べてあることを注意しておかう。それから、もう一つ、戰時の信用インフレーションの發展過程に生ずる諸要素——物價騰貴、利潤增大、生産擴張、矛盾の激化、信用の崩壞、恐慌、國家財政の危機、等々——は、物價騰貴を促進する信用インフレーションの如何なるものにおいても、多かれ少なかれ現はれるといふことを注意し

ておかう。

四　恐慌期の信用インフレーション

資本主義の高度に發展した獨占の段階においては、一度信用インフレーションが起るといふと、いくらそのあとに恐慌が來ても、それがすつかり清算されて均衡が回復されるといふことはない。殊に、強烈な戰時信用インフレーションが起つたりすれば尙更だ。

獨占の段階における過大信用の大部分は、固定資本信用の形態をとつてゐる。過剩資本として處分されるべきものは、尨大な量にのぼるばかりでなく、その大なる部分は固定資本である。かゝる資本が恐慌によつて一擧に處分されるといふことになると、支配的な獨占資本、金融資本が參つてしまふ。

信用インフレーションの發展過程において、擴張または新設された經營は、恐ろしく高い價格の機械や建築材料や土地を買込んでゐる。そしてそれだけのものが投下資本として帳簿に計上さ

れてある。從つて、資本家の利潤計算においては、それらのものも、製品一單位の生産費の中へ入つて來るので、製品の市場價格がインフレーション當時の水準以下に下るといふと、資本家は損失勘定を出すことになるか、または極く低率の利潤しか計上出來ないことになる。だから、彼等は、物價が激しく低落すると、異常に大量的な破産に見舞はれる。

そこで、恐慌期に入るといふと、支配的ブルヂョアジーは、政府を救濟に乘り出させる。救濟の方法は大體二つある。一つは、破産企業に信用を與へて——即ち金を貸して——直接に救濟する方法である。もう一つは、物價の低落を喰ひ止めるために、政府が中央銀行から信用を受けて樣々の事業を起す方法である。が、いづれの場合も、過大信用の後始末をするために更に新たなる過大信用をつくり出す。

かくして、第二、第三の信用インフレーションが恐慌期において生ずることになる。

國家が過大信用を得て事業を起す結果として生ずる信用インフレーションは、獨占資本主義の段階以前にもしば／＼起つたし、また必ずしも資本家救濟を直接の目的としてそれが起されると

も限らない。しかし、その目的をもつて起される限りでは、救濟インフレーションと呼ぶことが出來るだらう。

ところで、もう一つの方の救濟インフレーションの場合においては、破産企業に信用を與へるのは、それを破産から救ふことが目的なので、インフレーションを起すことが目的なのではない。しかも、結果においてインフレーションが起るのだ。だから、この方のインフレーションは、支配的ブルヂョアジーがインフレーションを非常にいやがつてゐる時でも、しばしば起り得る。

例へば、こゝに幾つかの大企業が破産に瀕し、従つてそれに過大信用を與へてゐた諸銀行も破産に瀕し、預金の取付が起つたとする、乃至は取付が起りさうになつたとする。政府は、中央銀行をして直接に、または他の特殊銀行を通して間接に、破産企業に對してヨリ多くの過大信用を與へさせる。供給された兌換券は、破産企業から銀行への支拂手段として使用される。すると、その二億なら二億の兌換券は、關係銀行の手に入り、これらの銀行は更に大銀行からの借金を返すから、大銀行の手には急に遊資が増大することになる。

もし預金取付が起つてゐれば、中央銀行から供給された兌換券は、銀行から預金者への支拂手段として使用される。取付騒ぎが鎭まつてその五億なら五億の兌換券が、預金取付者の手から再び元の銀行へそれ〴〵元通りに預金されることになれば、これといふ變化は起らないが、實際はそれらの銀行の多くは閉鎖されるし、預金取付者の方でも今度はなるべく安全さうな大銀行を選んで預金する。するとまた大銀行は、俄かに巨額の遊資を持つことになる。

その結果は、利子率の低落となる。謂ゆる「變態性金融大緩慢」といふやつが生じてくる。利子率の低落は、何よりも先づ有價證券投機を刺戟する。有價證券の價格が上るといふと、會社も銀行も懐勘定が樂になつてくるから、恐慌過程に際して收縮すべき筈の信用や商取引が收縮しないことになる。さうなれば、それだけ物價の低落は鈍つてくる。物價の低落が鈍つたり、乃至は多少とも反騰傾向が現はれたりすると、利子率が低いといふことと相俟つて、いろんな商品の思惑が起つてくる。乃至は謂ゆる「假需要」が起つてくる。從つて減少すべき筈の通貨流通量も減少しない。さうした際にもし、政府も過大信用を得てどん〴〵事業を起したりすれば、——

恐慌過程はなほ進行中であり、生産と消費との均衡はちつとも回復されないに拘らず——、商品の市場價格は却つて一時騰貴傾向を現はしてくるだらう。謂ふところの「中間景氣」が起るのだ。

かうした救濟インフレーションは、その際に作用する種々なる要因の力の大小に相應して、強弱さま〴〵の程度において出現する。最も弱く現はれる場合には、物價の低落運動はたゞ僅かばかり鈍るだけのことで、通貨の流通量はたゞ減少のテンポが緩漫になるだけのこともあるだらう。俗説では、インフレーションといへば、必ず通貨の流通量が絶對的に增加するかのやうに思つてゐるが、それは淺薄な考へであつて、例へば右の如き場合でも、通貨の流通量が當然に減少すべきところまで減少しないとすれば、それはインフレーションの生じたことを現はしてゐる。

それはとにかく、救濟インフレーションなるものは、清算すべき過大信用を清算しないで却つて累增させ、解消さるべき矛盾を解消しないで却つて擴大させることは明かである。從つてそれは、恐慌を克服するどころか、ます〳〵恐慌を深め長びかせて、ます〳〵大きな××をもたらすに過ぎないのだ。

さういふことは、支配的ブルヂョアジーも知らない譯ではない。だから、彼等も決して信用インフレーションを起しさへすれば恐慌が克服出來るなどとは思はない。だが、及ばぬ時の神頼み、溺れる者は藁、である。彼等がもし「インフレーション政策」を想ふやうになるとすれば、それは彼等がいよ〳〵窮地に追詰められたことを物語り、背に腹は代へられなくなつたことを語るのだ。ところが、弱小資本家や小ブルヂョアは、本氣になつて「インフレーション政策」を期待する。そして彼等の中の「知識分子」は、眞面目くさつて、それを景氣政策として理論づけて見たりする。彼等はあんまり景氣來に期待をかけるものだから、まだ來もしない好景氣までも勘定に入れようとする、だから、信用インフレーションが過大信用によるものであることまでも忘れてしまふ。

彼等にせよ、支配的ブルヂョアージーにせよ、インフレーション政策なるものに何等かの御利益を認めるとすれば、それは信用なるものが消費と需要をつくり出し得るといふことである。むろん、それだけのことは妄想ではなくて事實である。マルクスも言つてゐる——

「信用の最高限度は、……産業資本の精一杯な使用、言ひ換へれば消費の限界を顧みずに考へた、産業資本の再生産力の精一杯な緊張に等しい。消費のかゝる限界は、再生産行程それ自身の緊張によつて擴大される。この緊張は、一方において勞働者達および資本家達による所得消費を大ならしめると同時に、他方にはまた生産的消費の緊張と同一に歸するからである。」

で、つまり、信用が生産活動を擴大する以上、それに比例して生産的消費は當然増大するし、利潤總額と賃銀總額も増大するとすれば、資本家と勞働者の個人的消費も増加することになる。だが、これはもちろん、好景氣局面においてのことである。しかも、好景氣局面においてさへ、信用は、生産を擴大させるほどには決して大衆の消費を増大させないのだ。

ところで、およそ一般的恐慌なるものは、社會の生産力と消費力との矛盾の爆發である。恐慌期においては、社會の生産力と生産とが、社會の消費力と消費とを著しく超えてゐる。この喰ひ違ひがある限り、物價は低落せずにはゐないのだ。前者が後者を超過しただけの分は、過剰資本となり、また賣れない商品となつて現はれてゐる。資本主義社會における恐慌の役割は、これ

らのものを強力的に處分して均衡を回復することにある。ブルヂョアジーは、この恐慌の強力作用に堪へ切れなくなつて、信用インフレーションによる救濟を渇望する。

カッセルだの、ケーンズだのといふブルヂョア學者が、貸附資本の不足こそ恐慌の原因だといつて嘆いたり、シュペンダーといふ先生が信用不足を悲しんだりしてゐるのは、みんな嘘つぱちなのであつて、實は右の如きブルヂョアジーの渇望を代辯するものに過ぎないのだ。

ところで、いくら信用が欲しいからといつて、それを與へるものがなければ信用は生じない。私的資本家の經營してゐる銀行は、どんな支配的な大銀行でも、いや大銀行は大銀行ほど、恐慌期において餘計な信用を與へることなどは眞平御免を蒙むるのだ。そこで、政府と、中央銀行とが動員される。政府は、公債を發行し、それを中央銀行に引受けさせて、得たる兌換券を購買手段として事業を起さねばならなくなる。

だが、それ自身恐慌の激浪に打ちひしがれてしこたま赤字を出してゐる政府そのものが、更に中央銀行から過大信用を得て事業を起してみたところで、さうやつて政府の投げ出す金なるもの

は、もし賃銀として勞働者の手に入る部分に三を加へるものとすれば、不變資本たる部分には七を加へるのだ。だから、生産力と消費力との開きは却つて増大する。さうでなくてさへ、賣れない商品が多過ぎるところへ、またも商品が投げ出されてはたまるまい。

そこで、商品を市場へ投げ出さないやうな土木事業とか、乃至は××××といつたやうな不生産的な事業が選ばれる。

で、政府はいよ〳〵「インフレーション政策」に乘り出す、といつて宣傳すれば、前に言つたやうな有價證券投機や商品の思惑が起つてきて、物價は落勢が鈍るか、又は反騰傾向を示すだらう。――一時的には、である。

假りに、それが日本の政府であつて、公債によつて手に入れた三億圓を投げ出すとしよう。この三億圓をそつくりそのまゝ三百萬人の勞働者に呉れてやることにすれば、一人當り百圓づゝ貰ふことになる。たとひ百圓づゝでも、貰はないよりはよい。ところが、失業者に失業手當をやるのでさへ「弊害がある」と稱して遠慮してゐるやうな有樣だから、百圓はおろか十圓だつて只で

呉れてやるやうな氣づかひはない。

ところで、三億圓が土木事業に投ぜられるとするならば、どうか？ そのうち賃銀として勞働者達の手に入るものは、大きく見積つても五千萬圓を出ないだらう。恐慌期には、失業者は腐るほどあつて、賃銀が極度に引下げられてゐる。五千萬圓の金は、二百萬人の失業者または半失業者を一ヶ月間だけ雇傭して一人に二十五圓づゝ與へることが出來るかも知れぬ。が、さうだとしてもこの二十五圓の大部分は、家賃、電氣・瓦斯等々の滯りや、その他の掛買ひの支拂ひ等々に充てられる。從つて資本家や地主や家主の懐具合は多少よくなるだらうが、大衆の消費力が積極的に增すやうなきづかひは斷じてない。

土木事業の材料等々を賣込む資本家達は、恐慌期の常として、生産設備の大きな部分を遊ばせておく。從つて、註文が增したからといつて、勞働者を雇ひ入れるやうなことはなく、就業勞働者の勞働を強化したり、勞働時間を延長したりして、結構間に合せるだらう。だから、實際に勞働者の手に入るものは五千萬圓よりもずつと少いわけになる。

残る二億五六千萬圓は、「珍品」、コンミッション、利潤等々として、直接に資本家とその一味の懐へ入るだらう。利潤の一部が蓄積されゝば、生産力は増大する。利潤の一部が、過去の過大負債の返済に充てられゝば、資本家の借金を政府が代つて背負ひ込んだに過ぎないことになる。そして、増大した政府の負債は、増大した租税等々の形において、勤勞者大衆が拂はねばならないのだ。それは、大衆の消費力の絶對的な減少となる。

かやうに、恐慌期においては、五億圓の土木事業位では、社會の消費力を増大させるやうな力はない。恐慌過程が強烈に進行中であればあるほどさうである。一方において、勞働者を短期間雇傭したところで、同時に他方では資本家による「合理化」と馘首が進みつゝあるから、コリ多くの勞働者が永久的な失業者として現はれてくる。事實において、この種の「インフレーション政策」は奏效したといふためしがない。一九二九年以來のフーヴァの「政策」は、アメリカの巨富の力を賴みに、次々に大袈裟な「インフレーション政策」を企圖して恐慌を喰ひ止めようとすることだつたが、只の一度だつて效果らしいものは出なかつた。

恐慌克服のための「インフレーション政策」なるものは、せい〴〵のところ、「中間景氣」を起すぐらゐが落ちである。そして、型の如く、恐慌を深め長びかせたその上に、國家財政の危機に導くといふ置土産を殘してゆく。が、もう一つ、――もしも物價の反騰傾向が多少とも長く繼續すれば、それは輸入の增大と輸出の減退を惹き起し、金の流出を激化せしめるだらう。

五　爲替インフレーションの特質

爲替インフレーションの發生および發展に關する理論は、一通り前に述べておいたから、こゝでは、この型のインフレーションを、信用インフレーションおよび紙幣インフレーションと比較して、二三の特質を指摘するに止めよう。

インフレーションが、信用インフレーションの段階にある間は、通貨の安定は失はれない。しかるに、爲替インフレーションにおいては、紙幣インフレーションの場合と同樣、通貨の安定が失はれてしまふ。

爲替インフレーションの場合には、爲替下落の續く限り、物價騰貴の傾向は作用しつゞける。そして爲替相場の下落は、國際的支拂超過が存在してそれが克服されない間は、繼續する。だから、等しく恐慌期に起つても、爲替インフレーションによる物價騰貴の傾向は、信用インフレーションによるそれよりも、一層根強く作用する可能性がある。だが、物價騰貴は、總じて、紙幣インフレーションの場合において最も強烈であり、また最も急速なテンポを持つ。

信用インフレーションの場合および紙幣インフレーションの場合には、物價の騰貴は、政府の起す事業に關係のある商品から始まることが多い。が、爲替インフレーションの場合には、常に、輸出入品の價格が眞先きに騰貴する。

商品の價格騰貴が各種の階級に與へる影響、および資本の再生産行程に與へる影響は、一つには騰貴のテンポと程度とによつて違つてくるが、一つには主要な輸出入品や投機商品がどんな商品であるかによつて異なるだらう。そして、それがどんな商品であるかといふことは、國々によつて異なる事柄である。

爲替下落に際しては、爲替ダンピングが起り得る。理論上は、爲替インフレーションにおいては爲替下落が物價騰貴に先行するし、紙幣インフレーションにおいては物價騰貴が爲替下落に先行する。しかし、紙幣インフレーションの場合でも、それが少しく發展すると、爲替の下落率の方が物價の騰貴率よりも大きくなる。さうなると、爲替ダンピングが起つてくる。

六　紙幣インフレーションの發展

戰時および恐慌期の信用インフレーションは、爲替インフレーションまたは紙幣インフレーションにまで發展せんとする強い傾向を持つてゐる。

交戰國に起るところの猛烈な信用インフレーションは、戰爭中にすでに、兌換券の不換紙幣化を惹き起したり、爲替下落を惹き起したりする可能性はあり過ぎるほどある。「戰時の非常手段」によつて、どうにかそれが喰ひ止められてゐたとしても、戰爭に疲れ切つた諸國の財政は、必然的に、破産に瀕してゐる。從つて、財政上の必要から、どうしても紙幣の洪水を起さずにはゐら

れない。また、交戰國の多くのものは、大變な支拂超過國になつてゐて、しかも金準備は涸渇してゐるだらう。これらの國は、たとひ戰敗國として莫大な賠償金の支拂を強制されなくても尚且つ爲替相場の暴落を來たすべき運命にある。資本は盛んに國外へ逃亡する。おまけに、戰後恐慌の不可避的な爆發がある！

恐慌期の信用インフレーションは、過大信用の上に過大信用を累積しつゝ、國家財政を危機に導いて行く。更にまたそれは、一國の國內物價を相對的に高めることによつて、輸入超過と支拂超過の增大に拍車をかけ、金流出を激成して金準備を涸渇させ、金本位停止に導いて行く。加ふるに、利子率の低落や、自國通貨の不安などに基づく資本逃亡もまた、この勢ひを促進する。

最後に、金本位停止によつて爲替インフレーションが起るといふと、それが更に紙幣インフレーションにまで發展し得るといふことは、第六講第十節に述べた通りである。

言ふ迄もなく、以上は單に三つの型のインフレーションについて、その一が他へと發展し得るといふこと、そして何れも紙幣インフレーションにまで發展し得るといふことを要約的に指摘し

ただけである。金本位停止にせよ紙幣インフレーションにせよ、それが實現するのは尚ほ多くの要因の作用に俟つものであることは、諸君のすでに研究されたところである。

さて、吾々は、紙幣インフレーションそれ自體の發展過程を研究するのには、その出發點として先づ、破産に瀕したブルヂョア××があるといふことを前提しなければならぬ。××財政が破産狀態に陷る原因はいろ〳〵あるだらう。むろん××もその一つである。××的××もその一つである。また、恐慌期に激成された巨大な支拂超過や金流出、救濟インフレーションの繰返しによる國家債務の激增、等の如きもその原因となり得るだらう。いづれにせよ、かゝる××は、すでにあらゆる課税手段に行詰つてゐるのだから、どうにか權力を維持しようとすれば、非常手段によつて租税を徵收するより外はない。そして、不換紙幣を濫發することは、正にさうした手段となり得るのだ。その點は、ブルヂョア學者もはつきりと認めてゐる。例へば、ケーンズは言ふ——

「苟も政府は、それが獨逸政府又は露國政府の如きものでも、紙幣の發行によつて永く支へる

ことが出來る。（彼は一九二三年に書いてゐる！　猶侯）。卽ち此の方法に依つて、現實の資源、――租税によりて徴收する財源と正に同樣の財源を、徴發することが出來る。此の方法は排斥されるものであるが、その效力は或る點までは認めねばならない。政府は、他に存續する手段を持たない場合でも、此の方法によつて存續し得る。これは、公衆が最も逋脫し難き稅法であり、他に何事をも强制し得ざる薄弱なる政府と雖も、猶實行し得る課稅の方法である。此の性質を帶びる紙幣の發行は、中央歐羅巴及び東部歐羅巴に行はれたる遞進的且破滅的な通貨膨脹であつて、例へば、前章に述べたる英國並びに米國に行はれたる制限的伸縮的の通貨膨脹とは異るものである。

（注意までに言ふが、こゝにケーンズが「制限的伸縮的の通貨膨脹」など、體裁のいゝ名前をくつつけてゐるのは、吾々の說明した信用インフレーションのことである。彼がそんなことを書いてから六年後のアメリカには素晴らしい取引所恐慌が起つたし、九年後のイギリスは金本位停止の泥沼に落ち込んだ。「制限的伸縮的」なインフレーションなるもの〻有難味はおよそそんなものである）。

で、とにかく、政府は、紙幣が流通してゐるのをいゝことにして、また自己の掌中に×××××を握つてゐるのをいゝことにして、やたらに××××を出して何でも欲しいものを手に入れようとする。すると、どういふことになるだらう？

例へば、先づ通貨は恰度流通必要量の十二億圓だけ流通してゐたとする。これは、金にすれば二十四萬貫だし、弗に直せば約六億弗だ。そこへ、政府が更に六億圓の紙幣を出していろんな物を買ひ込むとする。今度は十八億圓の紙幣が流通する。すると、紙幣は、不換紙幣の流通法則に從つて、價値減少を起し、紙幣の一圓は、もはや金二分ではなく、一分三厘三三しか代表しなくなる。百圓は、もはや五十弗ではなく、三十三弗三三にしか當らなくなる。それと共に、國內物價は一般に五割騰貴するわけだ。從つて、政府の出した六億圓は、十二萬貫の金ではなく、八萬貫の金しか代表せず、また三億弗ではなく二億弗にしか當らない。だが、政府は、少くともそれだけの金量と等しい價値の商品は手に入れることは出來るだらう。これは、流通する總價値量——即ち二十四萬貫の金に等しいもの——の三割三分三三に當るものだが、政府は恰度それだけの

ものを租税として取立てたのとおんなじだ。

では、誰が、その様な「租税」を負擔したのであるか？　それは、前から流通してゐた十二億圓の紙幣を、物價が騰貴するまで持つてゐた人達だ。彼等の十二億圓は、すでに三割三分三三の價値減少をした十二億圓だから、もはや元通りのものが買へるわけはない。前には二升のお醤油が買へた一圓紙幣でも、今度は一升三合三三しか買へない代物になつてゐる。その點では、どの一圓も平等だから、十二億圓についていふならば、それは恰度總價値量の中から政府の取り上げた三割三分三三に當るものを引去つた殘りのものしか買へないのだ。

さういふと、――世の中に一番金を持つてゐるのは大資本家であるから、ちよつと考へると大資本家達が一番多くその「租税」を負擔するかのやうに思へるかもしれないが、どうしてそんな譯ではない。一番拔目のないのは彼等である。彼等は、誰よりも先きに、物價騰貴のあることを知つてゐる。だから、彼等はいち早く紙幣を商品にかへておく。さうやつて商品にして持つてゐれば、その價格はきつと上つてくるのだから、彼等はきれいに課税を免れる。一番の馬鹿を見る

のは、後生大事に紙幣をしまつておく「中産階級」、紙幣は價値減少してゐるといふのに元通りの價格で賣つてゐる小生産者や小商人、政府や資本家から元通りの給料を支拂はれてゐる役人やサラリーマンや勞働者達である。例によつて例の如く、「租税」を負擔するのはこの人達である。

て、さういふ譯だから、インフレーションが起つてくると、やがては誰もかも負擔を他人に轉嫁しようと思つて、競爭的に金を物に換へ、まためい〳〵の賣る物を競爭的に高く賣らうとする。が、それについてはまた後で……。

ところで、政府が、不換紙幣を、流通必要量以上に流通へ投げ込むといふことになると、不換紙幣の流通法則の作用によつて、必然的に紙幣の洪水が起つてくる。先づ最も單純な場合を考へても、次のやうなことになつてくる。

最初政府は、八萬貫の金の價値(乃至は二萬弗)に等しい商品を手に入れるために六億圓の紙幣を出さねばならなかつた。ところが、その次に同額の商品を手に入れようとすると、今度は九億圓の紙幣を出さねばならなくなる。何故かといふに、更に九億圓だけ紙幣の流通量が増大して、

合計二十七億圓になれば、一圓は八厘八毛八八の金しか代表しなくなり、百圓は二十二弗二二にしか當らない、從つて九億圓の紙幣は、八萬貫の金(または二億弗)にしか當らない。更に、三回目に、政府がそれだけの價値のものを得ようとすると、同樣の計算によつて、十三億五千萬圓の紙幣を出さねばならなくなる。そして、その調子で行くといふと、十回目に出さねばならぬ紙幣額は、驚く勿れ、二百三十億六千萬圓になる！

これは、出發點に十二億圓の紙幣が流通した際は諸商品の價値は從來通りのものと假定したのだが、戰爭の後などでは、生産裝置がすつかり破壞されて勞働の生産性が非常に低下したために諸商品の價値そのものが特に甚だしく騰貴してゐるのが普通である。さういふ場合には、金ではかつた商品價格がすでに非常に騰貴してゐるのだから、國家が同一量の商品を獲得するためにそれだけ多く不換紙幣を出さねばならなくなり、從つて增發のテンポももつと增してくる。生産力の激減のために、社會的生産がぺちやんこになつて從來の社會的消費を充たさない、大衆は「飢餓恐慌」の眞只中にある、といふやうな狀態は、しばしば紙幣インフレーションの起る一原因をな

すものだ。

が、その點は暫くおくとしても、國家が發行し流通せしめねばならぬ紙幣の量は、別の諸理由によつて、更に加速度的に多くなつてくる。第一、政府が一度「紙幣印刷機による陰謀」をやり始めるといふと、從來の課税方法その他の方法によつて收入を得ることがます〱困難になり、從つて總歳出のます〱多くの部分を不換紙幣によつて支辨しなければならなくなる。戰後ドイツのインフレーションは、一九一九年頃から甚だしくなり始めたが、四年後の一九二三年のドイツ政府は、『上半期においてその國費の八三%を、又同年下期においてはその九〇%を、紙幣印刷機の力によつて支辨した』(!)。

第二、紙幣の價値減少は、發行紙幣の増加率よりも遙かに急速に進んだゆく。それは一つには爲替相場の下落の方がテンポが早いからである。が、それよりも何よりも、例の負擔の轉嫁ごつこのために、紙幣の流通速度が恐ろしく早くなる。つまり、政府は、一枚の紙幣を出して大藏省の帳簿一册買つただけであつても、その紙幣は、前には年に平均百回回轉して百枚分の仕事を流通界で

やつてゐたところを、今度は五百回も回轉して五百枚分の仕事をするといふことになる。さうなれば、紙幣はそれだけひどく價値減少をする。それから、も一つ、インフレーションが起るといふと從來の信用體系が崩壞するので、それを補ふために中央銀行が滅茶苦茶に資本家に信用を與へるやうになる。そしてその紙幣がみんな流通するのだから、紙幣の流通量は恐ろしく膨脹し、それだけ急速に價値減少をやる。

かやうに、紙幣の價値減少が甚しければ甚しいほど、政府は一册の帳簿を買ふのにも、ます〳〵大きな紙幣の山を積まねばならないといふわけだ。

さういつただけでは、諸君は、私が何か「理論的遊戲」でもやつてゐるかのやうに思ふといけないから、戰後ドイツに起つたインフレーションに關する活きた數字をお目にかけておく――

見給へ。一九一八年には二百二十億マルク流通してゐた紙幣が、三年後の一九二一年には一千百二十六億になつた。その一年五ケ月後の一九二三年五月には八兆五千六百四十億になり、更に

第一表

	紙幣の發行高（單位一〇億マルク）	一金マルクに對する紙幣マルク數	金マルクに換算した紙幣發行高（單位一〇億）
一九二〇年十二月	一八	一七	四・八
一九二一年十二月	一二三	四六	二・七
一九二二年三月	一四〇	六五	二・二
一九二二年六月	一八〇	九〇	二・〇・
一九二二年九月	三三一	三四九	〇・九
一九二二年十二月	一、二九五	一、七七八	〇・七
一九二三年二月	二、二六六	二、三三〇	〇・二
一九二三年三月	四、五九六	四、九五〇	一・〇
一九二三年六月	一七、〇〇〇	四五、〇〇〇	〇・四
一九二三年八月	二二六・〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	〇・一二六

（備考）ケーンズによる。

第二表

	紙幣の通用高（單位百萬マルク）	金ドルに對するマルク相場
	（平價マルク）	四・二〇
一九一八年末	三三、一八七・八	八・〇〇
一九一九年末	三五、六九八・四	四八・九〇
一九二〇年末	六八、八〇五・〇	七三・九〇
一九二一年末	一一三、六三九・四	一七三・〇〇
一九二二年末	一、二八〇、〇九四・八	六、七五〇・〇〇
一九二三年五月末	八、五六四、〇〇〇・〇	七四、七五〇・〇〇

（備考）ツエ・ハー・ヴエーによる。

それからたつた三月後の紙幣發行高は、百十六兆マルクといふ天文學的な數字になつてゐる！

いかに印刷機は機械だからといつて、よくも稼げるものではないか。

かうした紙幣の洪水が起るといふと、紙幣の價値減少がどんなスピードを出すかといふこともわかるだらう。第一表を見給へ。一九二二年の紙幣の發行高は一九二〇年の十六倍になつたが、その間に紙幣の「價値」は百分の一になつた。一九二三年八月の發行高は、一九二二年十二月の九十倍になつたが、その間に紙幣の「價値」は更に五百六十分の一になつたのだ。さういふわけだから、また、（もう一度第一表の第三段を見よ）、一九二〇年には八百十億マルクの發行紙幣は尙ほ四十八億の金マルクに相當したけれども、一九二二年になると、一兆二千九百三十億マルクの紙幣は七億金マルクにしか當らなくなり、一九二三年八月には百十六兆マルクの紙幣がたつた一億の金マルクにしか當らなくなつてゐる。同樣に、弗に對するマルク下落率も、紙幣量の增加率よりは遙かに早い。それは第二表を見れば一目瞭然だ。

だが、それは何を敎へるだらうか？

「紙幣印刷機による陰謀」なるものは、紙幣の價値が零になるまで續けることが出來る、また續けねばならなくなる、しかしまたその「陰謀」は紙幣の價値が必然的に零になるために破滅する、といふことを教へるのだ。

それはさうだらう、一マルク紙幣のねうちが一マルク金貨の百萬分の一に減つたりなんかすれば紙屑よりも厄介だ。前には一圓紙幣一枚出せば買へた品物が今度は百萬枚も出さねば買へないとなれば、すこし怒張つた妻君などは、ちよつと三越へ買物に行くのにも一圓紙幣をトラックに積んで出掛けねばならんといつたことになる。そんな風になつてくれば、誰だつて紙幣はあかんと言ふ筈だ。政府がいくら頑張つて何萬臺の印刷機を晝夜兼行で運轉して見たところで、紙幣の取り手がなくなればおしまひだ。

とは言へ、實際には、紙幣の「價値」が零に落ち込むずつと前にすでに紙幣インフーションは崩壞する。

紙幣インフレーションの發展は、大體、三つの段階を經過すると言ふことが出來る。

第一の段階。これは「潜在的なインフレーション」の段階といつてよいものだ。不換紙幣化した紙幣はすでに流通必要量を超えて發行され、また流通してもゐる。紙幣の價値減少と、それに基づく物價の騰貴はすでに始まつてゐる。けれども、多數の人々はまだ、その物價騰貴は時々起つては消える一時的現象の一つだと思ひ込んでゐる。通貨の價値に異常があるのではない、やがてまた一圓紙幣でもつて「一圓の物」が買へるやうになると信じてゐる。從つて、彼等は從來の習慣に從つて、さし當り使はない紙幣や「まさかの時の用意」の紙幣をまだ平氣で貯へてゐる―一口に言へば、紙幣に對する信頼はまだ失はれず、發行された紙幣の中の一定量はさま〴〵な形態で退藏されてゐる。

諸君は、前掲第一表一段の數字と、第二表一段の數字とを比較して見給へ。一九二〇年には、紙幣の流通高はまだ發行高よりも餘程すくないことがわかるだらう。しかし、一九二一年になると兩者の差はずつと減つてゐるし、一九二二年にはもう殆ど無くなつてゐる。これは、インフレーションが表面に現れてくると、誰れもが紙幣を物に換へようとして流通に投げ込むことになり、

大切にしまつておく者などはなくなるからである。

現在のやうな長い深刻な恐慌期においては、潜在的なインフレーションがすでに始まつてゐても、特別の理由から、特に大量の紙幣が退藏されてゐることが珍らしくない。こゝ一ヶ年ほどのドイツなどでは、その傾向が最も著しい。特別の理由といふのは、いつ何時信用恐慌や銀行恐慌が爆發するかわからないといふ不安である。さういふものが爆發すれば、頼みになるものは「現金」の外になんにもない。また、現金を持つてゐるものだけが強いのだ。さういふところへ氣がつくのは、概して大きな資本家である。彼等は、不安心な株券や土地などはさつさと賣つて現金に換へておく。懐へ流れ込んでくる配當や利子も、現金のまゝで持つてゐる。銀行は銀行で出來るだけ多く「手持現金」を持たうとする、等々。そこで、正常の場合に比較すると非常に大きな割合の紙幣額が流通界から引上げられて、確實と思はれる銀行だの、各人の金庫の中だのに退藏されてゐる。

だが、インフレーションが進展して、爲替相場の下落や物價騰貴のテンポが或る程度以上に高

まつてくるといふと、事情は一變する。ブルヂョアジーによつて退藏されてゐる大量の紙幣は、眞先きに、そして急激に流通へ投げ込まれる。やがて、大衆の退藏紙幣も投げ込まれる。それと共に、潛在的に存在してゐたインフレーションは、俄然表面へ現はれてくる。

第二の段階は、その時から始まるのだ。それは、お話しにならぬほど激烈な、流通の××として現はれる。通貨の安定は全く失はれ、物價は文字通り刻一刻と高まつてゆく。そしてこの××そのものによつて「インフレーション景氣」が發展する。それは、文字通りの空景氣だ。投機は滅法界盛んになり、インフレーション成金は簇生する。生産も增大傾向をとり、消費もしばしば增加する。だが、この空景氣の反面は、廣汎な大衆の××である。大衆の生活水準はぐん／＼引下げられてゆく。負擔を××する階級と××される階級、×××××階級と××××××階級との間の對立は加速度的に×××する。そしてそれと共に、紙幣に對する信賴××は、紙幣に對する××に代つてゆく。流通は××する。

第三の段階。それは、大衆收奪の過程が或る客觀的限度に逢着したときに現はれる。流通の×

×はます／＼甚だしく、空景氣の衰へる徴候は到る所に見えてくる。インフレーションは、ブルヂョアジー、支配者階級にとつても次第に無意味なものになり、厄介なものになつてくる。紙幣に對する消極的な××は、積極的な××に轉化する。流通の××が生じてくる。社會の必需品を供給する小生產者大衆は、流通手段たる紙幣を××しつゝ、太古的な自給自足と物々交換に復歸しようとする。そこで生活必需品が得られなくなる。大衆の上に××××××くる。階級間の諸對立鬪爭は、××××××して、政治的××××××する。

かやうに、インフレーションがインフレーションを止揚するところの第三の段階は、紙幣の價値が××に落込む前に生ずるのだ。

尙ほ、誤解のないやうに一言するが、紙幣インフレーションなるものは、しば／＼××××の下においても現はれる。けれども、それは現在のブルヂョア政府乃至は反××××の下に現はれるものとは全然その社會的意義を異にするものである。

無產階級××が、ブルヂョアジーの帝國主義××によつてさん／＼荒された國土において××

したといふやうな場合には、その國の生產裝置は××××になつてゐる上に、×××の諸勢力の攻撃は猛烈だ。そこで××××××××が、偉大な社會主義的建設の歴史的××の第一歩を踏み出すために必要な地かためをするのには、紙幣インフレーションによる課税手段も利用しなければならないことがある。しかしその場合には、前に述べたやうなインフレーション成金が出來たりするやうなことは絶對にない。まして大衆の××などはない。さうした際の×××××××は謂ゆる「戰時××××」の體制をもつて武裝されてゐる。假りに、一定額以上の××を手に入れるものが出來ても、それは直ちに國家が取上げてしまふだらう。また、勤勞者大衆に至つては彼等のみが×××の支配者階級であるのだから、その國にその時生產される物質のうちの、第一のそして最良の分前は、初めから彼等のものとして政治的に保證されてゐる。もしインフレーシンによつて收奪される者があるとすれば、それは舊制度において×××であつた連中だけに過ぎないのだ。

七　インフレーションと諸階級（一）

そこで、今度は、ブルヂョア××におけるインフレーションは、社會的にどんな影響を與へるかといふことを、立入つて考察すべき順序になつてきた。

インフレーションはすでに第二の發展段階に入込んだとしよう。國家はどし／＼紙幣を流通へ投げ出すし、物價は刻一刻と騰貴しつゝある。紙幣を受取つた者は、紙幣のねうちがずん／＼下がるから、一刻も早く、買ふべき物を買つて損害を免かれようとする。收奪を免かれようとする。流通にある貨幣はもはや一般的等價物の役目を果さない。一定額の貨幣を持つてゐれば、それと等しい價値の物はいつでもそれと引換へに得られるといふ狀態にあつてこそ、資本主義社會の商品流通は多少とも「圓滑」に進み得るのだが、さうした保證は今や全く失はれて、貨幣を持つ者はみす／＼損をする、いくら眞黑になつて稼いでも貨幣を所有することそれ自身のためにみす／＼貧乏になるといふのでは、流通の攪亂これより甚だしきはなしと言はねばならないだらう。

この攪亂はまた當然に、資本流通の攪亂を意味してゐる。資本家はもはや自分の生産費をはつきりと知ることが出來ないのだ。彼は今日一萬圓の原料を買ひ入れる、が、それを製品と化して賣り出す二週間後には、同じ原料が二萬圓に騰貴してゐるかも知れないのだ。更に、新たに原料を仕入れねばならない一ケ月後には、十萬圓に騰貴してゐないとも限らない。もしも彼が、生産費が三倍に騰貴してしまつた日に、自分の製品の價格を三倍に引上げて賣つてゐなければ、彼は忽ち損をする、彼は忽ち收奪される。貨幣はもはや價格の標準たる役目をつくさなくなつてゐる。だから、彼等は盲滅法に、自己の製品の價格を引上げてゆく。

が、かうした流通の攪亂は、一方には必然的に損失者をつくり出すと同時にまた他方には必然的に利得者をつくり出す。ぼんやりして金を持つてゐたやつが損をしただけそれだけ、すばやく金を物に換へたやつが得してゐる。高くなつた生産費に應じて高く賣らなかつたやつが損をしただけそれだけ、すばやく高く賣りつけたやつが得してゐる。この利得は全く假空なものに過ぎないのだが、資本家の帳簿の上には利潤として現はれる。たとひ帳簿上の利潤でも、利潤が増せば

「景氣」は出る。おまけに、土地でも家屋でも工場でも株券でも、すべて價値減少した紙幣單位で勘定されて、三倍、五倍、十倍の價格を持つてくる。價値はちつとも增してはゐないのだ。しかし、所有物件の價値を名目的な價格で言ひ現はすことに慣れ切つてゐる人達は、どうにも金持になつたやうな氣がしてしやうがない。まことに景氣のよいことである。

紙幣インフレーションに際して起る好景氣は戰時の信用インフレーションの場合のそれとは性質が違つてゐる。戰爭の場合には、たとひ破壞的消費に基づく需要にもせよ、全體としての需要の增大があり、それに基づいて好景氣が起るのだ。しかるに紙幣インフレーションの場合には全體としての需要の增加はなく、好景氣は全く一國內の流通の攪亂に基づいて起るのだ。戰爭に際しては、國際市場における流通の攪亂と、世界的規模における生產の攪亂とが起るのだが、紙幣インフレーションや爲替インフレーションの起らない限り、國內流通の攪亂はない。

そこで、先づ、紙幣インフレーションに際して起る販賣價格引上げの競爭の結果は、どんなことになるだらう？

この競爭においては、もちろん、大資本が勝利する。わけても獨占資本が勝利する。獨占的巨大企業や各種の獨占體は、市場の支配者である以上、引上げた販賣價格で賣りつけるのは容易だし、またどこまで引上げればよいかといふことも一番よく知つてゐる。反對に、原料等々を買ひ込む際には、安く値切り倒すことが出來るから、負擔を原料生産者等々に轉嫁することもわけはない。おまけに政府の政策を左右するほどの彼等だから、政府が次にどれだけの紙幣を増發するかを知るぐらゐのことは何でもない。

インフレーションは、獨占の利得を恐ろしく大きくすることによつて獨占を強化するが、更にまた次の理由からも獨占を強化する。といふのは、すべての商品の價格が滅茶苦茶に高くなるので、新らしい企業を起さうとすると建設費や設備費が恐ろしく高いものにつく、從つて既成の獨占は、「大變な景氣」にも拘らず、有力な競爭企業の出現に脅かされずに濟む。

ところで、まご〳〵してゐる小生産者達の方はどうなるか？

彼等の多くの者は、生産のために必要な諸材料を、獨占體や獨占企業から買つてゐる。彼等は

獨占が決定した價格で買ふより外はない。しかし、自分の生産した物を賣るといふ段になると、買手は消費力を切下げられた勤勞者大衆か、乃至はぐん〳〵値切り倒して買ふところの大企業である。こゝに、千圓のもとでで材料を買ひ込んで、六百足の足袋の製造販賣をする足袋屋さんがあるとする。彼は、どうも物が高いやうだからといふので、値段を引上げて賣る。彼は、六百足の賣上げとして二千圓を手に入れた。何だか景氣がいゝやうだ。ところが、その二千圓でもつて材料を仕入れようとすると、材料の價格はすでに三倍になつてゐる、六百足分の材料は、三千圓に騰貴したといふのである。さうなら、彼はもう四百足分の材料しか得られない。こいつはいけないといふので、今度は思ひ切つて一足十圓に値上げして、やつと四百足を賣りつくし、四千圓を手に入れた。が、その四千圓をもつて仕入れようとする材料の價格は、またも三倍ほど高くなつてゐる。おかげで今度は、二百六十六足分の材料しか得られない。足袋屋さんは、自分の資本が一回轉する毎に貧乏になつて行く。そして、とう〳〵しまひには、——即ち資本回轉の十三回目には、——四百十萬圓ほどの賣り上げでもつてたつた一足分の材料しか得られない！　足袋屋さ

んは、その一足の白足袋を自分で穿いて、死場所を探しにでも出かけるより外はない。

大企業の方は、紙幣の價値減小による生産費の騰貴と共に絶えず騰貴するところの再生産價格で賣るといふのに、小生産者達は、さうした生産價格以下で賣るから、こんな「悲劇」が起るのだ。これと全く同樣のことは、大多數の小賣商人にも當て嵌まる。

では、農民大衆はどうか？　これもおんなじだ。彼等の買ふ物は、大部分、獨占企業の生産物である。乃至は少くともその息のかゝつたものである。しかるに彼等の賣る物は、大きな資本を持つた投機商人の手にかゝる。買ふ時は相手の言ひ値で買ひ、賣る時は相手の言ひ値で賣る。そしてその度毎に收奪される。農産物が消費者の手に渡る時にはべら棒に高い値段になつてゐても、甘い汁は中間商人に吸はれてゐる。

では、「金を物へ」の競爭はどんな具合に發展するか？

紙幣を長くつかんでゐる者は、いくら眞黑になつて稼いでも貧乏すると同時にまた、紙幣をすばやく物にかへたやつは、遊んでゐても「金持」になる。むろんそれは、ねうちの下つた圓で數

へての「金持」に過ぎないのだが、それでも貧乏になるよりはよい。そこで、何でも物を持つに限るといふことになつて、差し當り必要のない物までもどし／＼買ふ。紙幣で持つてゐては堪らんから、貴金屬や寶石類でも買つておけ、といふやうな中産階級の連中はまだ罪のない方だが、そんなのよりずつと前にもう大きな資本が市場へ現はれて商品の買占めをおつぱじめる。これは大投機、大賭博だ。

　價格の狂的躍騰のために商品の生産費の計算が出來ないといふことになれば、投機は資本家的活動の中心目的とならずにはゐない。商品投機、株券投機、土地投機、爲替投機、等、等、等。が、こゝでも、最も「確實な投機」をやるのは大資本であり、獨占資本である。そして一番ひどい目に逢ふのは、貯へた小金の始末に困つて右往左往する「中産階級」の連中だ。

　この連中も慌てゝ株を買ひ込まうとする。もつと大きな連中も株を持たうとする。株は物だから、きつと儲かると思ふのだ。また、たしかに一時は大小の株成金が輩出する。そこで、噂は噂を生み、株といふ株はみんな羽が生えて飛ぶ。すると、凄いのが飛び出してくる。企業詐欺師といふ奴だ。

彼等の仕事は「泡沫會社」を製造することにある。虎のやうな××からの收奪を逃れようとして紙幣を株にかへる小投資者達は、狼のやうな企業詐欺師に收奪されるのだ！

が、いかに紙の上だけの企業が多いにもせよ、かうした「命がけの投資熱」が燃え上る以上、新らしい工場も建つし、新しい鑛山も掘られるといふことになる。戰後インフレーション期のドイツその他の中歐諸國や東歐諸國において、建設費や設備費が嘘のやうに高くなつたその最中に、盛んに新企業が起つたといふのは、この異常な――字の如く異常な――投資熱のためだつた。

物價騰貴のテンポが加速度化し、一日のうちに二割も三割もはね上るといつたことになると、「金を物へ」の爭ひはきちがひじみたものになつてくる。うどん屋さんは、うどんの賣上げを掴むや否や、一散駈けてうどん粉問屋へ駈けつける。うどん粉の値が上つてゐては大變だ！カフェーへ寄つて生ビールをひつかける「彼氏」は、一度に三つも持つて來させてテーブルの上に並べておく。そんなことをすれば、折角のナマも生温るくなるにきまつてゐるが、しかし一杯目を注文する迄に値上げをされたんぢや詰らない！で、もしも「彼氏」の思惑通り値上げがあると、「彼氏」

は見事に投機利得を獲得する。――だが、諸君、笑ひ事ではない。その日の「彼氏」の生ビール一杯は、二三千圓のインフレーション價格を持つてゐる！

紙幣を早く物に換へれば儲かるのだとすると、金を借りて餘計に物を買ひ込めば、それだけ儲けも大きくなるわけだ。そこで今度は借金の競爭が起つてくる。一萬圓借り出して買ひ込んだ品物が、一ケ月後に二萬圓に騰貴するといふと、それを賣つた金で年一割の利息を拂つて借金を返せば九千九百六十六圓の利得になり、五割の利息を拂つても九千五百八十三圓の利得になる。こんなうまい話はないといふことになる。

ケーンズは書いてゐる――『獨逸においては、一九二二年の秋に、かゝる手段で災厄の中から大財産が掴み取られたものである。一番儲けた者は、借りて借りて借り切つて、もつて實際利率と名目利率との差額を占むるにありと眞先きに氣づいた者であつた。このボロイ儲けが數ケ月續いてから、誰もが手を出し始めるやうになると、結果は名目利率の上にあらはれてきた。』むろん利率はぐん／＼騰貴した。だが、とても紙幣の價値減少のテンポには及ばなかつた。『一九二三年

七八九月の最後の通貨崩壞により、市場利率は全く暴騰して一ケ月十割といふ數字を示した。しかし、通貨の下落率に比べれば、この數字と雖も尙ほ不十分であつて、大膽に借り出す者は尙ほも金儲けをしたのである。』

ところで、借りた奴がいつも儲けるなら、貸した奴はあべこべにいつも損をするわけだ。そこで貸手がなくなつてくる。資本信用の與へ手がなくなる位だから、支拂信用の與へ手もない。手形取引、掛賣り、月賦販賣、等はもちろん、定期販賣をすることや、定期註文を受けることなども、危險極まることになつてくる。かくて、資本主義社會の「正常的」な××體制は、全く××する。これは流通の××から生ずる當然の結果である。かやうに、インフレーションの發展過程においては、信用恐慌と同樣な現象が起るのだが、その混亂は、一層大きな混亂を反映する好景氣のまばゆさの中に消え込んでゐる。

だが、信用の崩壞は、現實のものである。銀行は、「正常的」な貸附業務が殆どすべて無意味になると同時に一方、多額の預金をも喪失する。それはさうだらう、うつかり金なんか預けておか

うものなら、引出す時は十分の一のねうちに下るか、百分の一のねうちに下るか知れたものでない。だから、預金を引出して物にかへる者はあつても、金を預ける者などはない。で、銀行が破産を免かれる唯一の道は、自國の貨幣をボイコットして、預金でも貸出してもすべて外國貨幣で勘定することだ！

が、さうやつて見たところで、信用は必然的に收縮する。それにも拘らず、インフレーション期の中歐諸國には、銀行が盛んに新設された。それはどんな銀行か？　それは投機機關としての銀行だつた。通貨膨脹期間を通じて貨幣價値の低落を目的とする此種の投機機關は狂亂的な勢を以て濫設せられた。それは、株式取引所に於ける取引や、爲替取引などによつて獲得した外見的利益が、多數の資本家を騙つて、其資金の大部分を銀行の創立に使用せしむるに至つた爲である。その他すべての銀行もまた、「正常的」な信用業務が駄目になればなるほど、投機の機關に轉化せざるを得なくなる。

だが、信用が收縮すれば、單に流通が痛めつけられるばかりでなく、生產もまた減退せずには

ゐない。が、さうなつては大變だ。そこで今度は、國家が中央銀行に命じて資本家達や一般銀行にどし／＼信用を與へさせねばならなくなる。信用を與へるといつたところで、またもや紙幣を投げ出すのであつて、出す方は紙幣だから何でもないだらうが、これを信用として見れば、まことに呆れ果てた過大信用であるわけだ。かうした信用もまた、例の「命がけの投資熱」と共に、インフレーション期の「企業勃興」を促進し、泡沫會社の製造および狂亂的な投機のための手段を供給する。

一著者は書いてゐる、「一般市場における金利はすでに一〇〇％以上に達した時に、中歐諸國の發券銀行は、六％乃至一二％といふ低い割引率を維持してゐた。……發券銀行の大部分は多額の貸付に應じ、それがために通貨を更に膨脹せしめた。墺太利においてはそれが特にひどかつた。『卽ち同國においては、三年の間、個人に對する貸付は殆ど常に政府に對する貸付を超過してゐた。一九二四年五月三十日における紙幣流通額は二兆五千億ほどであつたが、そのうち一兆四千億以上は個人の信用要求に基づいて發行されたものである』（ハントス）。

八 インフレーションと諸階級 (二)

かうした過大信用は、もう一つの目的にも利用された。目的とは即ち借金を返すことである。

インフレーションの最中に金を借りて思惑や投機をする者が大變に儲けるのと同じ理窟によつて、前から金を借りてゐた者も、インフレーションによつて大變な得をする。例へば、綿糸一梱が百圓の相場の時に、銀行から百萬圓の金を借りてゐた紡績資本家があるとすると、その時の彼は綿糸一萬梱を賣らなければ借金が返せない、――しかるに、インフレーションでもつて物價は五倍に騰貴して綿糸一梱が五百圓になれば、五分の一の二千梱でもつて借金が返せるし、また百倍に騰貴して一梱千圓になれば、百分の一の百梱で借金が返せるだらう。

さういふわけで、産業資本家の負債は、物價の狂騰によつてひとりでに減つてゆく。彼等は、或る時期を見て、恐ろしく價値減少した紙幣を、發券銀行から只同樣で借り出して、前からの借金を返すといふわけだ。そんな紙幣でもつて返された銀行こそいゝ面の皮といふものだが、銀行

は銀行で、また預金者に對して同じ紙幣で支拂つて損失を轉嫁する。が、それにしても、銀行はやはりへたばらざるを得ないだらう。だから、速かに「轉身」して投機の機關にでもなるより外はない。

産業資本家と同樣に、農業資本家や地主の負債も減る。從つてインフレーションは、産業資本家や地主階級を強化する。

では、農民の借金はどうか？

日本などでは特にさうだが、農民の借金の多くは地主からの借金である。貸してゐる方の地主は、あらゆる手段をもつて、インフレーションによる損失を免かれようとするし、またさうする力を持つてゐる。高利貸式にびし／＼と早く取立てゝしまふのも一つの方法だ、現物で——即ち米や麥や繭などで——返させるといふ方法もある。そのほか、威嚇、懷柔、ごま化し、等、地主一流のいろんな手段方法がある。しかるに一方、農民の方は、前に述べたやうな理由で、ぐん／＼××されて行くのだから、いくら農産物の價格が上つたからといつて、借金を返すだけの金が浮び

出るやうな氣づかひは滅多にない。インフレーションの場合においても、實際に誰が損をするかといふことは、現實の力關係によつて定まるのだ。だから、――たゞ一つの間違ひのないことは、借金の問題をめぐつて、地主と農民との間に激烈な鬪爭が起るといふことだ。

が、それだけではない。鬪爭は更に地代をめぐつても激化する。

地代が金で支拂はれてゐる場合――即ち金納地代の場合――には、インフレーションが起るといふと、地主の方が割の惡い立場に立つ。例へば田一段歩について四十圓といふ契約をしたのちに紙幣がずん／＼價値減少をやれば、借金の場合と同じ理窟によつて、それを受取る方の側は馬鹿を見る。だから、地主は躍起となつて地代を引き上げて、農民の鬪爭を激發させる。反對に、地代が、米なら米といふ現物で支拂はれてゐる場合――即ち物納地代には、地主の方がとても割がいゝ。農民の方は、物價が上れば上るほど、契約した地代の何倍、何十倍にも當る物を取られることになる。そこで今度は、農民は、地代引下げの鬪爭、または物納を金納にせよといふ鬪爭を起さずにはゐられなくなる。

契約によつて一定された金額の地代を受取る者は損をするのと同じやうに、契約によつて一定された利息を受取る者はすべて損をする、——定期預金の利息、社債の利息、債券の利息、公債の利息、等々。有り餘る金で社債や公債を持ち、定期預金をしてゐるやうな大きな資本家達は、いろんな方法で、その損を取返したり、あべこべに却つて儲けたりする力を持ち合せてゐるが、さうでない小貯蓄者の大衆、へそくり金で債券や公債を買つたやうな者、僅かな遺産をさういふ物で持つてゐる寡婦や孤児、——すべてさうした「憐むべき中産階級」は、インフレーションによつて見る／＼うちに收奪され、文字通り裸かに剝かれてしまふのだ。

それは、さうだらうではないか。紙幣の價値が以前の百分の一に下落して物價が百倍になり、從つて百圓の生活費が一萬圓になつても、收入の方は以前と同じ百圓だ。この百圓はもとの一圓がものしか買へないのだ！　私の話が大きすぎると思つたら、諸君は前に掲げたドイツのインフレーションの數字をちよつと思ひ出すといゝ。ドイツの紙幣一マルクの價値は、一九二〇年末には金マルクの價値の十七分の一になり、次の年は四十六分の一、その次の年は一千七百七十八分

の一、そして一九二三年の八月には實に百萬分の一になつたのだ。

さういふ譯だから、公債の價格などはむろん××のところまで下落する。そして、それと共に、政府は、莫大な借金をきれいに××××ことになる。××同樣の紙幣でもつてどん／＼公債を「償還」するのだから、×××××も同然だ。さういふことがあるのだから、借金で首が廻らなくなつた政府は、きつと「紙幣印刷機の××」をやる。そして、さういふことをちやんと心得てゐる大資本家や大銀行は、インフレーションが起りさうになると、公債やなんかは眞つ先きに賣拂つて物にかへるのだ。

もう一つ、すばらしく儲ける者に輸出資本家がある。これは、例の爲替ダンピングによつて儲けるのだ。

紙幣インフレーションに際しても、爲替相場の下落のテンポは、國內物價の騰貴のテンポよりもずつと急速だ。それは、特に爲替投機が起るからであり、資本が逃避するからであり、外國貨幣を買ふ者が激增するからである。——そこで、爲替ダンピングがやれることになる。

この爲替ダンピングによつて輸出資本家がものにする巨額の利潤は、原料の國内價格が相對的に低いこと、わけても勞働力の價格――賃銀――が相對的に低いことから生じてくる。そして、この輸出資本家に巨利を與へる爲替ダンピングなるものは、全く、國民的勞働を只で外國へ投げ出すのだといふことは前に述べた通りである。

日本がアメリカへ爲替ダンピングをやれば、アメリカ資本家は、日本の商品を價値以下に安く買ふのだが、それと同じ理窟でもつて、アメリカの資本家は弗を日本へ持つて來て圓に換へ、その圓で日本の商品を買へば怖ろしく澤山買へるわけである。日本のインフレーション物價は四十倍に騰貴してゐても、弗に對する圓の下落率は更に甚だしく、平價の五十分の一に下落して百圓が一弗に當るなら、アメリカで八噸の石炭が買へる金をもつて、十噸の石炭を日本で買ふことが出來るだらう。だから、外國の資本は盛んにインフレーション國へ侵入する。

『すでに戰爭中において、貨幣價値の低落があつたため、外國はドイツの土地を安い價格でもつて購入することが出來た』。『ドイツが媾和條約を批准した後は、產業證券〔卽ち株券の如きもの〕

もまた、非常に有利な條件で、外國の獲得するところとなつた」（シュテーリヒ）、『貨幣價値のヨリ高き國々は、ヨリ低き國々から、その欲する一切の商品を買ひつくすことが出來る。彼等は、その貨幣價値の優越に基づき、價格の競爭において常に有利な立場に立つ。「といふのは、インフレーション國の人達よりもヨリ高い價格を拂ふ餘裕を持つからだ」。そしてそれ故に、低い貨幣價値の國々に存在するもので、彼等にとつて有利と思はれる一切の藝術品、一切の鑛山、工場、家屋、および事業を獲得することが出來る。』『講話成立後において、ベルリンその他のドイツ大都市に、アメリカ、オランダ、チエツク・スロヴァキアその他の諸國の銀行の設立を見たのは、上述の理由によるのである。彼等は、有利な條件で提供された建築物や企業をば、廉價に獲得したる獨逸貨幣をもつて買收した」（同上）。

同じ理由によつて、インフレーシヨン國へ出掛けて來た資本家、外交官、留學生、旅行者などは、べら棒な贅澤をすることが出來る。諸君の知合ひの中に、ドイツのインフレーション當時の留學生があるならば、どんな具合だつたか訊いて見るがいゝ。彼等は、上機嫌で、一生に一度

の富豪のやうな生活振りの數々を話してくれるだらう。

『インフレーションの最も深刻を極めた中歐諸國を通過した外國人は、これらの國々の有樣を見てその繁榮に驚いた。外面だけを見ると、貧困、飢餓、悲慘、といつた現象はちつとも現はれてゐないからである。大都市の中央には、贅澤品が山のやうに積まれてある。いろんな高級品は市場に充ち滿ちてゐる。レストランやオペラはいつも滿員の盛況だ。しかし、そんなのはほんの外見だけの現象である。少しく注意して觀察すると、この異常な消費の贅澤は、大部分、自國人がやるのではない、華美歡樂の巷に出入するものは外國人が多かつた。もつとも、歡樂と濫費の狂熱は、また、自國民の或る一群の中に浸潤してゐたのも否定出來ない事實である』（ハントス）。

この「自國民の或る一群」とは、言ふ迄もなく、投機師、企業詐欺師、大資本家、といつたやうなインフレーション成金の一群のことである。

それでは、勞働者やサラリーマンはどうか？　月々一定の賃銀や俸給に對して勞働力を賣つてゐる人達はどうか？

最大の犠牲と負擔は、この人達が背負はされるのだ。あらゆる商品の中で、最も騰貴のおくれるのは勞働力といふ商品だ。おまけに、此の人達は、勞働力の代金として手に入れた貨幣を一度に物に換へるわけにはゆかないのだ。彼等が、その日の〱生活必需品を買ふためにちび〱と金を小出しにしてゐるうちにさへ、物の値段は容赦なく上つてゆき、金のねうちは容赦なく下つてゆく。もう一つ、この人達こそ、全くの無財産であり、勞働力の外に賣る物はないのだから、紙幣の價値減少によつて受ける損害を、他の何等かの方法で埋め合す手段も皆目持たないのだ。賃銀や俸給も上るには上る。月に十萬圓の月給を取る者ぐらゐはザラに出來るだらう。いや、こいつ、三年前の社長の收入よりも大きいぞ、など〻言つて見たところで、一着十五萬圓の洋服を着て五萬圓の靴を履き、一本七千五百圓のステッキを抱へてカフェーに入つて一杯七百五十圓の水みたやうなコーヒーを飲むのではじまらない。況んや、もう月賦の洋服なんか買へないのだ。

都市の勤勞者大衆は、必需品の消費量を絶對的に減らされる。一九二三年のドイツにおいては、農民をも含めた國民全體の一人平均の牛肉消費量は、戰前の半分に減少した。馬鈴薯の消費量も

半減した。パンの原料たる粉類の消費量は、三割ほど減少した。これは單純な平均であるが、かやうな食料品を自分で生産する農民は比較的にその消費量を減らさないし、贅澤階級の消費量は増すとも減りはしないから、それらのものを差引くといふと、都市の勤勞者大衆の一人當りの分け前は悲慘な減り方をしたことがわかるだらう。

勤勞者大衆が、インフレーションによる生活程度の引下げと收奪とを僅かでも免かれる方法は、×××××にはない。ブルヂョア觀察者は、ドイツの勞働者階級の賃銀が騰貴したといふことを頼りに力說するのだが、强大な團結力と鬪爭力とを持つ勞働者階級が、サラリーマン階級などよりは比較的大きな鬪爭成果をあげるのは當り前のことである。

が、それにしても、實際のところはどうだつたか？　一九二三年四月におけるドイツの建築勞働者の賃銀は戰前の二千百四十一倍に騰貴した。印刷職工の賃銀は二千百六十倍に騰貴した。化學工業の勞働者の賃銀は二千六百十一倍に騰貴した。だが、それに對して生活費の方は？　生活費は、戰前の五千二百十六倍に騰貴した！

要約しよう——

インフレーションによつて、こつぴどく××されるのは、勞働者、サラリーマン、それから農民・手工業者等の小生產者、および小貯蓄者たる中產階級といふ諸大衆である。

インフレーションによつて利得する者は、第一には外國資本家、それから國內では、(一)スマートに立廻る投機師、(二)企業詐欺師、(三)いち早くうんと金を借りた奴、(四)輸出資本家、(五)獨占的資本家のたぐひである。この五つの要素を結びつけて一代の巨大成金になりすまし、一時世界中を驚かせた者に、スチンネスの如きがある。そしてこれらの私的資本家と並んで、インフレーション的利得者の一方の旗頭をなすのは、ブルヂョア××××××である。

では、帝國主義の階段における最强最大の支配的資本たる金融資本はどうか？　レーニンは、金融資本は「變形自在」の資本であると言つた。といふことは、融通の利く、轉身の妙を得た資本だといふことだ。金融資本は、物價が暴落する時はする時のやうに、また暴騰する時はする時のやうに、それぞれ都合よく陣容を立て直し、損失は他に轉嫁して利得の方を頂戴する。インフレ

ーション期の金融資本は、債權はいち早く取立てるし、公債なんかは眞先きに賣り拂ふ。と同時に一方、傘下の產業諸企業の獨占の兇器を磨ぎすまして、鷲のやうに市場へ舞ひ下る。また、銀行業務の方向轉換をやり、投機利得や貿易利得を奪取する。が、それよりも何よりも彼は、彼自身を××するところの××の强化してゆく光景を、いゝ氣持で眺めてゐることが出來るのだ。

かういふ譯だから、諸君がどうしても銘記しておかねばならないことが二つある。一つは、インフレーションなるものが前記の如き經濟的・社會的作用を營む以上、インフレーションはしば〳〵ブルヂョアジーが恐慌の負擔を大衆に轉嫁する手段となるといふことだ。そして、もう一つは、紙幣インフレーションに就いて述べた以上の事柄の多くのものは、程度の差こそあれ、爲替インフレーションや信用インフレーションに際してもまた起るといふことである。

九　流通の崩壞から生產の崩壞へ

以上のことから諸君もすでに氣づかれたであらうやうに、インフレーションなるものは、その

獨占過程において、特異の資本集中を押進める。この集中の特異性は、それが餘りにも破廉耻なものであることだ。

そのことゝ並んで、インフレーションなるものは必然的に過剩生産を惹き起すいふことも明かだらう。

前にも一言したやうに、この過程においては、國民全體としての消費の増加は起らないのだ。貯蓄者、小生産者、小商人はずん／＼××されてゆく。勞働者やサラリーマンは、始めのうちは就職する者の數が増すが、その時期においては特に名目賃銀の騰貴は緩漫だ。そして、名目賃銀が多少とも目立つて騰貴し始める時分には、紙幣の價値減少は超大スピードを出してゐるから、實質的な消費はぐん／＼低下する。かうした消費の減退は、たゞ、一連の成金共や外國資本家の贅澤な消費と、國家による消費との増加とによつて埋め合されてゐる。

しかるに、生産の方は、例によつて例の如き資本家的生産擴張の浪により、あわてふためいた金を物への運動の刺戟により、また外國への爲替ダンピングなどによつて、否應なしに増大する。

資本主義における生産の増大は、いつだつて利潤によつて刺戟されるのだが、この場合における特徴的な事柄は、二つある。（一）こゝでの利潤は、國内で得られる限りでは、投機に基づくか、乃至は賃擔轉嫁を通じての收奪に基づくところの帳簿上の利潤である。從つてそれは、インフレーションが終るや否や激減する。また、外國から受取る商品に含まれるヨリ小なる價値との差額を、商品に含まれるヨリ大なる價値と、爲替ダンピングによつて得られる利潤は、自國が與へる外國資本家との間に分け取りするものに過ぎないのだ。從つて、この方の利潤は、全體としてそれが巨額にのぼればのぼるほど、國内の物質的富を涸渇せしめるのだ。が、それにも拘らず、この利潤の刺戟によつて、外國向の生産は、内地向の生産を犧牲にまでして怖ろしく増大する。（二）もう一つの特徴は、資本家達は自己の得たる利潤を資本に再轉化して蓄積する際に、「正常的」な手續がとれないことである。といふのは、彼等は自己の資本を貨幣の形態で持つてゐることに絶えず恐怖を感ずるので、出來るだけ多くのものを固定資本に轉化しなければならなくなる。從つて固定資本は、絶えず流動資本を犧牲にして増大し、流動資本との均衡をます／＼破つて行く。

「企業家はすべて紙幣に對して極度の恐怖を感じたので、その獲得した利益は直ちにその事業の中に投ぜられた。從つて、企業家の利益や富は、すべて不動産の形式において殘つた。工業及び農業が、通貨膨脹の末期に於いて、生産能率の低下した設備の過剩に苦しんだのも、これがためである」(ハントス)。

かういふ譯だから、インフレーションの後には、どのみち猛烈な生産過剩恐慌と信用恐慌が爆發せずにはゐない。

けれども、生産と消費の矛盾はいかに深大化しても、インフレーションが尙ほ進行の餘地あるあひだは、物價が騰貴しつゞけるから、過剩生産恐慌の爆發を見るやうなことはない。これは注意すべき點である。紙幣インフレーションの場合には、過剩生産恐慌が爆發するに先立つて、生産そのものが崩壞する。

この生産の崩壞に立到る過程は、かうだ――

紙幣印刷機の活動によつて價格は否應なしに押上げられてゆくのだが、正にそれに基づく流通

の崩壊にまで發展すると共に、總利潤は必然的に減少し始める。そして利潤の減少は、先づ、生産の増加を緩漫化し、やがて生産の減少に導いてゆく。

利潤が減少し始めるといふことはたやすくわかる。小生産者大衆や小貯蓄者大衆の收奪と、勞働者やサラリーマン大衆の實質賃銀の低落、——この二重の過程が進行する以上、物質的消費の總量は減るのだから、資本家的商品の販路が縮小し、「國內市場の狹隘化」が生ずるといふことは明白だ。始めのうちは、——即ち收奪がまだそれほど進まないうちは、帳簿上の利潤が大きいから、總利潤は尙ほ增大する。が、收奪が進めば進むほど、そして收奪さるべき者が殘り少くなればなるほど、總利潤は增加しなくなり、遂には減少しはじめる。

しかるにまた、爲替ダンピングによる利潤も必然的に減つてくる。それはその筈だ、外國消費力の增加が原因となつて輸出が增すのでもなく、利潤が增すのでもない。だから、一定期間ダンピングが續けば、外國市場も必然的に過充となる。おまけにダンピングは、外國市場をひどく荒らすのだ。なるほど外國の一部の資本家は大いに利得しはするが、投賣される商品の競爭品や

代用品を生産する資本家達はひどい目にあはされる。だから、外國もいろんな對抗策を講じて爲替ダンピングの利益を殺ぐ。また、一般にマルクならマルクの相場が零に近づけば近づくほど、爲替下落のテンポは鈍つて來て、國內物價との開きが少くなる。かくして總利潤は減少しはじめる。

が、それと共にまた、別の理由も加はつて利潤率が低落しはじめる。といふのは、擴張または新設される企業の建設費は、絕對的にます〳〵高まるばかりでなく、物價騰貴が或る點以上に達すれば相對的にも高くなる。更にまた、利子率の暴騰のために、企業家利潤の率も低落する。

かうした諸傾向は、もちろん資本家的生産の刺戟を鈍らせて生産増加のテンポをます〳〵緩慢ならしめる。そして、この緩慢化は、次の諸事情によつて、更に甚だしくなつて行く。「命がけの投資熱」は、企業詐欺師達にしてやられる者が増せば増すほど冷めてくる。ます〳〵多くの者が、もとも子もなくするのだから、當然だ。一方、成金達は、摑んだ「巨富」を貨幣形態にしておくことが出來ないのだし、銀行が痛めつけられて貸付資本の供給もぐん〳〵減るのだから、流動資本

はます／＼涸渇する。さうなれば、もう、「資金」の缺乏そのものゝために、輸出品だらうと何だらうと、その生産を續けることが出來なくなる。

これは現實に、ドイツやオーストリヤに起つたことである。一著者は書いてゐる、――『貨幣價値が極度に低下するに至るや、利益の殘額はもはやその事業の運轉を確保し、生産を繼續するに足らざるに至つた。『商品の極度に低廉なる價格に於ける貨物の輸出は、つひには、輸出品における資金の缺乏を來たさしめるに至つた。』

だが、生産増加のテンポの緩漫化は、流通の攪亂が流通の崩壞にまでたちいたる過程において起るのだ。

流通の崩壞は、先づ、自國貨幣の排斥といふ形態で現はれてくる。前にも述べたやうに、銀行は眞先きに自國貨幣を排斥し、外國貨幣による計算に移つてくる。そして、この方法は、急速に資本家企業全般に擴がらずにはゐないのだ。いち／＼外國貨幣に換算しなければ取引が出來なくなる、――これは恐ろしく不便なことに違ひない。そんなことは永く續けられるものでもない。けれど

も、商品生產社會には貨幣はどうしても必要なものだし、また自ら收奪を免かれて負擔を他人に轉嫁するのには、それ以外の方法はない。が、しかしまた、その方法をとる以上は、新設企業の高い建設費、設備費の苦痛と、外國企業の競爭の壓力とは、いよ〳〵現實的なものになる。資本家達は、もはや、お互ひに對して負擔の轉嫁をすることは出來なくなる。彼等はたゞ、外國貨幣による計算に未だ移らない小生產者達や小賣商人に對してだけ、負擔を轉嫁し得るに過ぎなくなる。

が、次の必然的な發展として、生き殘つた小生產者達や小賣商人までが、すべて外國貨幣による計算に移つてくる。それをやられた日には、資本家達はもう彼等に負擔を轉嫁することさへも出來なくなる。殘るは勞働者、サラリーマンだけになる。

最後には、小生產者達や小賣商人が、紙幣を受取ることを××する。つまり紙幣に對しては賣らなくなる。さうかといつて、外國の貨幣が代つて流通する筈もない。金價値を持つ外國貨幣は、價値の尺度として、また計算貨幣としては役立つが、流通手段として必要な數量の外國貨幣を得ることは不可能だ。

紙幣は、支拂手段としてはすでに前から××されてゐた。が、今や、流通手段としても排斥されるのだ。インフレーション。この國の商品生産者は、遂に、流通手段までも失ふのだ。これが、流通の崩壊でなくて何だらう？　商品交換で立つてゐる社會が、その交換の媒介物を失ふのだ。

紙幣を眞先きに××する者は、農民である。農民は最も自給自足が容易だからだ。農民は、紙幣に對して收穫を賣却する場合には、緊急切迫の當面の支拂に必要な數量以上は決して賣却しなかつた。さうなれば必然的に、農業生産は減退する。ドイツ貨幣の瓦解は、また、收穫の瓦解を惹起した。

農民に次いでは、農民の必要品を供給する手工業的生産者達や小賣商人達が、紙幣を拒絶するやうになる。そして彼等は、太古的な物々交換に逆戻りする！

だが、それは、生活必需品の生産の激しい減少とならずにはゐない。資本家達は、外國に逃げ出すことも出來るだらう。外國から高價な品物を取り寄せることも出來るだらう。しかし、文字通り裸一貫で、賣る物とては、農民の必要としない勞働力だけの勞働者達はどうなるか？　餓死

あるのみだ。

「繼續的な通貨膨張は、國民多數の飢餓を惹き起すだけである。何故ならば、食料品の生産者は、彼等の生産物と引換へに價値下落せる紙幣を受取ることを拒絶するからである」。

これは、事實、ドイツに起つた。――『都會地及び人口稠密な工業地において、何百萬の勞働者達は、品物が市場にある時でさへ、十分な食料品を買ふことの出來ぬ狀態にあつた』。

かうなれば、生産の崩壞は全面的なものになる。

勞働者達は、始めは名目賃銀が上るので欺瞞されてゐる。が、やがて、實質賃銀の際限もない引下げに氣がついてくる。反抗と鬪爭が燃え上る。遂には大衆的飢餓が襲つてくる。勞働者大衆は××する。それは單なるストライキではない。全面的な××××だ。

資本主義的生産は初め異常な「能率低下」を惹き起す。が間もなく、××××生産の崩壞が來る。

かういふ譯で、インフレーションを起した「紙幣印刷機の陰謀」は、インフレーションの發展そ

のもいによつて粉碎される。そこで、ブルヂョアジーは「方向轉換」を迫られる。本年二月の「東洋經濟新報」一六〇頁にある次の一節は、その點を力説する――

「インフレーションは、國家によつて極限にまで、即ち紙幣にふくまれてゐる紙の價値に至るまで遂行せられ得る。さうなると、ブルヂョアジーにとつては、急激な轉回のみが可能である。ドイツにおいては、國家と産業資本と農業資本とがその債務から免れて了ひ、貯蓄者が剝奪され、勞働者の實質賃銀が低度に達し、そしてプロレタリアートが決定的な××的な××に入り込んだ時に、かゝる急激な轉向が行はれた。之が一九二三年五月以降、其後達し得られたマルクの安定に至る迄の期間である」（ツェー・ハー・ヴェー）。

が、通貨の「安定」化は、必然的に、物價の下落を惹き起す。そこで、今度は、生産過剩恐慌、信用恐慌が襲つて來る。これは、「通貨安定化恐慌」などゝ呼ばれてゐる。

「工業生産の制限、失業者の増加、商業の沈滞、國際收支の破壞、金融組織の顚覆、株式取引所相場の下落、絶えず増加してゆく解け合ひ、破産、等は、すべて通貨安定化恐慌の表徵である。

その貨幣安定化の恐慌は、通貨膨脹制度の停止によつて突發し、全中部歐羅巴に猛威を振つたものである」（ハントス）。

一〇 デフレーション

デフレーションは、インフレーションの反對である。デフレーションにおいては、通貨は收縮し、通貨の價値は騰貴し、物價は下落する。

破滅的な紙幣インフレーションと、生産の崩壞と、政治的危機とにも拘らず、ブルヂョアジーは尚ほ××を維持することが出來たとする。その場合には、彼等はどうしても通貨を安定させねばならなくなる。といふよりはむしろ、權力を維持するためには、彼等はどうしても通貨を安定させねばならないのだ。資本主義社會においては、貨幣制度の安定は「明日に對する信賴」を與へ、流通を立て直し、信用の基礎をつくり出す。それは、眼もあてられなくなつた經濟狀態の「改善」に向つての第一步をなす。

ところで、安定化を實現するのには、何よりも先づ、政府は、紙幣印刷機の運轉を止めねばならぬ。また、それがなか〳〵利目がある。ドイツなどでも『一つの心理的なる理由、即ち紙幣の印刷が全く停止したといふ確信は新しき支拂手段「通貨」の價値を維持せしめたのであつた』。これは無理もない。人々は厄病神退散の吉報を得たのだから。

次の仕事は、反古紙同樣になつた紙幣を流通から引上げることである。それには、大體、二つの方法がある。

一、新しい通貨、即ち金貨に兌換される紙幣なり銀行券なりを出して、紙屑の不換紙幣と引換へる。例へば、不換紙幣の百圓を、新しい銀行券の一圓と引換へるといふ風に。さうした引換へには、いろんな技術的なからくりがある。それをいち〳〵述べてはゐられないが、とにかく、その際にもし、價値減少した紙幣の百圓は恰度新銀行券の一圓に當つてゐて、新紙幣の一圓は以前と同樣に金二分を代表するものであるならば、通貨の價値は、舊平價において安定せしめられたわけである。

二、しかし、さうするのは、相當豐富な金準備が必要だ。例へば、二千億圓の不換紙幣が發行されてゐれば、それと引換へるのに二十億圓の新兌換券を出さねばならぬ。更に、この兌換券の信用を維持するのには、およそ三分の一の金準備が必要だとすると、六億六千萬圓ほどの正貨が要ることになる。ところが、ひどいインフレーションを起すやうな國は、どうせ正貨準備も涸渇してゐるにきまつてゐるから、正貨はたつた三億五千萬圓しかないとする。さういふやうな場合には、「平價の切下げ」が行はれる。

平價切下げといふのは、貨幣の本位として法定された金量を減らすことで、例へば二分の金が一圓であつたのを、今度は一分の金を一圓とするが如きである。この場合には通貨は新平價において安定せしめられることになる。さういふことにすれば、舊平價においては三億五千萬圓と呼ばれた金量は、今度は七億圓と呼ばれることになつて、新兌換券二十億圓の三分の一の金準備をなすだらう。それから、また、平價を切下げれば、物價の下落も少くて濟む。インフレーションが激烈であればあるほど、反動的な物價下落も激烈だ。經濟狀態が、それに堪へ得られない場合

には、勢ひ、平價切下げが選ばれる。

三、國家は、不換紙幣の所有者がそれをもつて租税を納めることを許したりなどして、紙幣の收縮をはかることもある。この方法は、第一、及び第二の方法と併用せられ得る。

ところで、これらの方策によつて貨幣制度を安定させる場合には、國家は、紙幣發行による財源獲得を止めてしまふのだから、それに代るべき現實的な國家豫算——即ち歳入と歳出の均衡——を持たねばならないことは言ふまでもない。特に戰爭の後などにインフレーションを起したりするやうな國家は、多くの場合、さういふことは至難であるし、また金準備の缺乏といふこともあるので、たいがいは外國の援助、干渉を受けるものである。

が、いづれにせよ、通貨の安定化と共に、通貨の收縮が起り、從つて物價下落が起るといふことは明かだらう。これが即ちデフレーションである。

通貨安定化恐慌は、それに際して起るのだ。この恐慌はまたデフレーション恐慌と呼ばれることもある。インフレーションに際して過剩生産が激成されてゐれば、これらの恐慌は、過剩生

産恐慌と絡み合つて起るだらう。信用インフレーションの場合には、通貨の安定は失はれてゐない。從つて、この型のインフレーションの破綻によつて起る恐慌は、通貨安定化恐慌ではなく、デフレーション恐慌である。これに際しては、通貨が收縮して物價下落が起るのではなく、物價下落が起つて通貨が收縮せしめられるのだ。更にその場合には、恐慌は「過大信用」を強力的に清算せんとする。

通貨安定化恐慌や、デフレーション恐慌は、途方もなく高く押し上げられてゐた商品價格の水準をぐつと押下げて、價格を價値にまで一致せしめようとする。が、そこまで價格が慘落したのでは、資本家企業の大半は破産する。そこでブルヂョアジーはびつくり仰天して、恐慌の發展を喰ひ止めようとする。さうすると今度は、新たなる救濟インフレーションが起つたりする。それが起らなくても、物價は下るところまで下らないで、ぐづ〳〵してゐることになる。しかし、どうしても下らずにはゐない筈のものだから、暫くするとまた下落しはじめて、デフレーション恐慌の繼ぎ足しをやる。さういふわけで、デフレーション恐慌は、時をおいて幾度も起ることが

珍らしくない。そして、最初は例へば産業企業の破産が主として起り、次のやつでは主として銀行がやられる、といつたことになる。

一度インフレーションが起つて相當の期間つゞくといふと、デフレーションは資本家にとつて怖るべきものになる。といふのは、インフレーションの時期に擴張された企業は、高い價格の土地や諸設備を買ひ込んでゐる。その價格は、名目上のものに過ぎないが、しかし資本家の帳簿の上では嚴然たる存在だ。從つてデフレーション期になつても、それらのものは、高い生産費として彼等の利潤計算に入り込む。それから、インフレーション期において名目的に高く決定された土地の賃貸價格、金利、動力代、租稅、等々も、いろんな形で殘つてゐて、生産費の中へ入り込む。インフレーション期の賃銀は、全くの飢餓賃銀なのだが、それでも名目的には高いものであり、デフレーション期にそれを引下げようとすれば勞働者階級の抵抗にぶつつかる。つまり、それらすべてのものは、インフレーション的要素として固定化する傾向がある。そこで、ブルヂョアジーにとつては、資本家的商品の價格が下落するといふと、すぐに「採算」がとれなくなる。だ

から、デフレーションがやつて來て物價下落がひどくなると、彼等は、救濟インフレーションを起してそれを喰ひ止めようとする。しかし、さういふことをやつたのでは、インフからデフ、デフからインフと、際限もないことになる。一口に言へば、一度インフレーションを起すといふと、どうにも清算し切れなくなつて、阿片中毒者みたやうな慘めなざまになる。

ところが、そこには更にまた、國際的な競爭といふやつがある。一國がインフレーション的要素を清算し切れないでゐると、ぴし／＼と外國資本にやつつけられる。割高な生產費を持つ國は、世界市場爭奪戰に敗退する。これはブルヂョアジーにとつては尙更らこわい。そこで、否應なしに、「產業合理化！」といふことになる。彼等は、勤勞者大衆の犧牲において生產費を切下げようとする。それはやり通せることもあり、やり通せないこともあるが、やり通せば今度は、生產能力が途方もなく大きくなつて、狹い市場の制限を突破するから、物凄い過剰生產恐慌が勃發する。さうするとまた、次に來るものは、インフからデフ、デフからインフへの蒸し返しだ。

それでは、デフレーションは、如何なる影響を各階級に與へるか？

今度は物價はぐん／＼下るのだから、前とあべこべに、早く物を金に換へたやつが得をする。金を借りてゐた者は損をし、貸してゐたやつは得をする。銀行資本と産業資本とを比較すれば、今度は銀行資本の方が割がよい。しかし、大資本はやはり利得するといふ點では、インフレーションの場合とおんなじだ。彼等は、割の悪い借金などはすぐに返せるし、物價下落に對する抵抗力も強い。支配的金融資本は、すばやく陣容を立直す。外國から借りてゐた金などは、爲替相場が有利になるからさつさと返し、國内の資本家に貸してゐた金は物價の下つたところで成る可く取立てるやうにする。獨占は、生産制限をやつて自分の賣る商品の價格はなるべく高位に維持し、買はねばならぬ原料や勞働力などの價格はうんと値切り倒す。今度はデフレーションの負擔を轉嫁するのである。が、何しろ、商品價格一般が下落するのだから、資本家階級と雖も、物價の騰貴するインフレーションの際のやうな利得はない。だから、彼等は、出來る限りデフレーションを避けようとする。しかし、すでにインフレーションを起した以上、デフレーションは避け難い。

資本家が有難がらない位だから、そのデフレーションが勤勞者大衆に與へる打撃は全く峻烈だ。強大資本は弱小資本に負擔を轉嫁するが、全體としての資本家階級および地主階級は、負擔を勤勞者大衆に轉嫁する。

負擔××の最も直接的な方法は首切りだ。賃銀や俸給の引下げだ。就業勞働者の勞働時間の延長だ。勞働の强化だ。大衆失業と窮乏化の嵐は、勤勞者大衆を吹き捲くる。ブルヂョアジーは、それだけ一應は懐勘定が樂になる。

勞働者やサラリーマン大衆の消費力は眞先きに減る。從つて、生活必需品を供給する手工業的小生產者や農民も參つてしまふ。彼等の賣る物は一番ひどく下落する。彼等がもし、大企業＝獨占企業の使用する原料や材料を生產してゐるならば、彼等の賣る物はこつぴどく値切り倒される。ところが、彼等の買ふ物の價格は、肥料であれ、綿糸であれ、電氣であれ、石炭であれ、鐵であれ、およそ獨占的企業の手にかゝつたものである限り、決してそれほど下落しはしない。賣る物は安いが、買ふ物は高い！ おまけに、家賃や地代や交通費や醫療費や小供の教育費や、——お

よそさうしたものはなか〳〵下らない。

最後に、租稅、公課の負擔が增大する。圓で數へた收入は減り、通貨の價値は高くなつたのに、同じ百圓なら百圓の租稅を取られるのだから堪らない。おまけに增稅にさへ見舞はれる。それは最もあり勝だ、インフレーションに際してすでに政府は破產狀態にあるのだから、デフレーションになればどうしても租稅を高くする！

租稅ならば資本家や地主も負擔するだらうと思ふかも知れないが、さうではない。表面上は資本家や地主が租稅を拂ふ場合でも、彼等はそれだけ搾取を強化したり、商品價格や地代を引上げたりして、租稅を勤勞者大衆の肩に轉嫁する。それに第一、デフレーションの際に資本に稅を課したりすると、資本はさつさと外國へ逃げ出すのだ。さうするとまたインフレーションへの逆戾りだ！

かういふわけで、インフレーションの時にさん〴〵負擔を轉嫁された勤勞者大衆は、デフレーションでまた一切の犧牲を背負はされる。これは、資本主義社會における特徵的な出來事である。

一　平價切下

平價切下げなるもの、意味はすでに諸君にわかつてゐる。こゝでは、歐洲諸國が戰後インフレーションの後始末にやつた平價切下げのことを一通り說明しておかう。眞先きに通貨を安定させたのは墺太利であつた。墺太利は、クローネといふ舊貨幣を廢して、シリングといふ新貨幣をこしらへた。そして紙幣の一萬クローネを一シリングと引換へた。本位貨幣の法定金量で比較すると、英貨一磅は、舊貨幣だと二四・〇二クローネに相當したが、新貨幣にすると三四・五八五シリングに相當する。卽ち、約四四%ほど平價は切下げられたわけである。

これに次いではベルギーが、一九二六年に、平價切下げを行つた。ベルギーのこしらへた新貨幣の一ベルガは、舊貨幣一フランの金量の五分の一のものであつた。これは八〇%の切下げだ。

一九二九年には伊太利の順番が來た。伊太利は、新貨幣はこしらへずに、リラ貨で押通した。

しかし、戰前の一リラの金量は〇・〇二九〇三二五グラムであつたやつが、今度は〇・〇〇七九一九グラムに切下げた。ドイツは、紙幣一兆マルク(！)を、新らしい一マルクと引換へた。ドイツのやつた平價切下げも、實質においては同じもので、たゞ、形式において他の諸國と異なつたに過ぎない。

最後に、フランスが、一九二八年に平價を切下げた。フランスの平價切下げは、しばしば「模範的」なものとされ、日本などにも大分讃美者があるやうだから、少し詳しく述べておかう。

フランスは、戰勝國といふ素晴しい榮冠を得たには得たが、戰爭のために目も當てられぬ經濟的破壞を蒙つたその上に、一千三百億法といふべら棒な金を戰費に蕩盡した。おかげで、政府は借金で足腰がたゝなくなるし、むろん租税收入などは激減した。そこで國家財政に大穴が開いて、どうにも動きがとれなくなつた。

そんな風であつたから、戰時の信用インフレーションはすでに實質上の紙幣インフレーションに轉化してゐた。たゞ、それがなほ潛在的に存在したために表面に勃發しなかつたといふだけの

ことだつた。

ところが、一九一八年の下半期になると、政府はとう／＼爲替資金に詰つて「爲替統制」を放棄しなければならなくなつた。すると、忽ちフランの相場は暴落した。次表を見給へ。

第一表　英貨一ポンドに對するフランの平均爲替相場

年	法
1914	25.22
1919	35.00
1920	50.00
1921	51.93
1922	56.90
1923	75.74
1924	85.27
1925	102.59
1926—1月	129.00
1926—3	136.00
1926—6	169.00

かういふ風にフランが「底拔け」に下落して行つた主要な原因は、紙幣インフレーションが爆發したことゝ、資本に課税されたことによつて、資本はフランスを見限つてどん／＼外國へ逃げ出したからである。そこで一九二六年の七月二十日には、つひに、英貨一磅に對するフランの相場は二四〇法二〇といふところまで陷沒した。磅に對する法の平準相場は二五法二二五だつた(1)

だから、これは法の價値が殆ど百分の一に減つたわけで、日米爲替で言へば百圓がたゞの五錢か六錢になつたやうなものだつた。これでは、「戰勝國」のブルヂョアジーもぢつとしてはゐられない。フランも「マルクの二の舞」をやりさうになつたのだ。

こゝにおいてか、フランス・ブルヂョアジーは、ポアンカレーを先頭に押立たブルヂョア擧國一致內閣を即製した。この內閣は何をしたか？　先づ第一に、財政の「緊縮」をやつて歲出をきりつめ、勤勞者大衆への課税を重くし、資本への課税を輕くした。さうして、もうフランスも大丈夫だからと、おいで〳〵をして、逃げた資本を連れ戻さうとした。次には、中央銀行に非常手段的な制限外發行を許して、再び「爲替統制」に出動させた。すると、資本はのこ〳〵戻つて來た。それと共に爲替相場も回復しはじめた。さういふ具合にしてフランスは、「爲替統制」を繼續し、翌年の一九二七年三月以降は、對英爲替相場を一二四法近邊に「安定」させることに成功した。つまり、爲替相場を「釘付け」にしたわけだ。だが、こゝに諸君の記憶を要することは、フランスはこの爲替統制のために、約四億の金を使つたといふことだ。

かくして、フランスは、一九二八年一月十日に新貨幣法を制定し、法の平價を五分の一に切下げた。前の一法は〇・二九〇三二二五グラムの金だつたが、新らしい一法はぐつと貧弱になつて〇・〇六五グラムでしかない。それで恰度、磅に對する法の平準相場は、一二四法二一になる。

この平價切下げの社會的影響について、フランスの一學者は書いてゐる――『平價を切下げれば、自國貨幣でもつて額面を表示された有價證券の所有者達は、永久に貨幣回復の希望を失ふことになり、〔註、これは收奪されるといふことだ〕また預金者、債權者等はこれによつて損失を蒙ることになる。反對に外國貨幣でもつて表示された有價證券の所有者及び債權者等は、不測の利益を獲得することになる。〔註、だから資本は前以て自國有價證券から脫け出して外國有價證券に姿を變へてゐた〕。されば、フランスの如く證券利子生活者の極めて多數存在する國においては、この方面の犧牲者は相當に(!)多いだらうと思はれる。』

相當に多いどころか、フランスの平價切下げによつてきれいに收奪されたのは、數知れぬ小貯蓄者達だつたのだ。そして儲けたのは、法の高いうちに外國證券に乘りかへてゐた大利子衣食者

の連中だ。それは、このあひだの「押買ひ」よりもボロかつた。いざとなると、平價切下げが人氣を博すといふ理由の一つはそれである。

大利子衣食者の機關たる中央銀行も大儲けした。中央銀行の持つてゐた五十五億法の金準備は、價値を切下げられた法で計算されて一躍五倍以上になつた。二百八十九億法になつた。これと五十五億との差額は、どうなつたか？　差額の二百三十四億は、一應政府が取つたことにした、そして、それでもつて戰時及び戰後に中央銀行から受けた過大信用――大借金――を返すことにした。だから、名目はどうでも、結局は、紙屑紙幣を國家に「貸上げ」た中央銀行が巨利を博したことになる。おまけに政府は、中央銀行に對する古借金のうちの三十億法だけは、新らしい利附公債の形にして活かすことにした！

すると「教訓」はかうである――

平價切下げもまた、デフレーションの負擔轉嫁の一方法に過ぎないのだ。フランスが「模範的」な平價切下げをやり得たのは、(一)公債その他確定利附の有價證券の大きな部分が廣汎な小貯蓄者

の手にあつたので、收奪が容易だつたこと、(二)フランス・ブルヂョアジーが巨大な海外投資を持つてゐたので、それを流動化して自國へ回流させることが出來たこと、(三)フランスがなほ相當巨額の金準備を保有したので、爲替統制をやり得たこと、などに基づいてゐる。

第九講　恐慌と貨幣

一　信用恐慌

本講においては、貨幣および信用に關する恐慌現象を取扱ふことにする。が、私は、こゝ迄ですでに、豫定の倍以上の紙數を費してしまつてゐる。それに、これから扱ふ筈の問題としては、世界的な金本位崩壊と、日本の金再禁止後の展望といふ大きな現實の問題がまだ殘つてゐる。さういふ譯で、本講の說明は、殘念ながら、極く簡單にすまさなければならなくなつてゐる。もつとも、私は、恐慌に關する研究は近く別の一本に纏める筈だから、その際には十分に補ひをつけられるつもりでゐる。

では、信用恐慌から始めよう。

信用恐慌とは、一口に言へば、全面的な信用の崩壊、および、それに基づく廣汎な支拂不能の

勃發を意味するのであつて、第三講第八節に述べた一般的恐慌の發展過程において生じ得るものである。

資本主義經濟の發展における循環運動は、不景氣、好景氣、恐慌といふ三大局面を通過して、再び不景氣局面に回歸する。この古典的な產業周期の諸局面を、もつと注意して觀察すると、――安靜狀態、活況增大、繁榮、過剩生產、恐慌、停頓、そして再び安靜狀態――といふ諸局面を呈することが知れるだらう。信用恐慌は、多くの場合、「過剩生產」の局面から「恐慌」の局面への移り際に勃發して、全恐慌を非常に激烈ならしめる。

しからば、信用の全面的な崩壞はどうして生ずるか？

「安靜狀態」の局面においては、貨幣資本の供給は多いが、需要は少く、利子率は平均的な水準よりも低く落込んでゐる。「活況增大」の局面に入るといふと、流通信用が徐々に增大して、貸附資本の供給過剩狀態はだん／＼無くなつてくる。從つて、第三の「繁榮」の局面に入ると、利子率も平均的水準に達するやうになる。かやうに、利子は次第に高くなるが、利潤の方は一層急

速に増大するから、生産はどし／＼擴張される。從つて、流通も擴大される。

かくして、「繁榮」の局面が進展するのにつれて、資本家達は、流通信用だけでは足らなくなつてくる。從つて、銀行信用を獲得しなければならなくなる。ところがまた、「繁榮」の増進と共に流通が擴大され、市場の範圍が遠方にまで及ぶやうになると、その理由からしても、ます／＼多く銀行信用を得なければならなくなる。

こゝまで來るといふと、もう、信用はぐん／＼膨脹する一方だ。企業家達は、競爭的に借りようとするし、銀行の方でも競爭的にしかも「大膽」にどし／＼貸す。その時分にはすでに、過剩生産は生じてゐるのだが、信用膨脹に基づく外面的な繁榮の陰にかくれてゐる。企業家も銀行も有頂天になつてゐる。何でも買ひさへすれば儲かるんだから無理もない。商品取引所でも、株式取引所でも、投機は熱狂的に旺盛だ。とても景氣がいゝ。そこで、銀行信用に對する需要は、投機の方面からも盛んに起つて來る。銀行は、オーライでいくらでも貸してやる。

だが、そんなことが、何時までも續く筈はない。

第一、いくら銀行でも、もうこれ以上は貸出せないといふ點に立到ることは明かだ。銀行は、預かつた金を貸す。しかし、總預金に對しては、その何分の一かに當る支拂準備金を持たねばならぬ。銀行の貸出の總額が、預金の總額を越えてしまふといふと、遂には支拂準備金に手をつけなければ貸出が出來なくなる。支拂準備金は、だん〳〵減つて、銀行が信用を保つのに必要な最低限にまで迫つてくる。

そこで、銀行は、利子率を高めたりいろ〳〵して、貸し澁るやうになる。然るに、ウンと事業を擴張してしまつてゐる企業家の方は、ます〳〵多くの信用を要求する。そして、遂には、どうにも信用が得られなくなつて、資金に詰まる資本家企業が出來てくる。かゝる企業の數は增す。

第二、——同時に一方、過剩生產は、ます〳〵激しくなるし、また、表面に現はれようとする。註文は前ほど活潑でなくなるし、市場へ持込まれる商品は前ほど賣行がよくなくなる。そこで、金に詰まつた資本家達は、商品の投賣を餘儀なくされる。何でもいゝから商品を賣つて現金を手に入れなければ、支拂が出來ないのだ。だが、過剩生產の表面化や、投賣のために、商品の價

格の騰勢が止まるか、または下落が始まるといふことになると、資本家企業が信用を受ける能力はそれだけ減る。だから、銀行はます／＼信用を與へなくなる。

第三、さうかうしてゐるうちに、企業詐欺師達のつくつた泡沫會社が破綻を暴露する。乃至は弱少企業が破綻の瀬戸際に追ひ込まれる。銀行は、いよ／＼警戒する。氣の早いのは、貸金の回收を開始する。企業家同志も、こいつ危いぞと、支拂の請求を嚴重にする。

かうなれば、もう、信用の急激な收縮、信用の全面的な××は、脚下に迫つてゐる。過剰生産は否でも應でも現實化せずにはゐない。支拂手段を獲得することが、資本家企業にとつて死活的重大事となつて來た恰度その時に、支拂手段の供給は杜絶する。彼等が、支拂手段を手に入れる方法は、もはや商品の投賣り以外にはない。あつちでもこつちでも投賣りだ。諸商品の價格は、暴落する。

この暴落のおかげで、資本家達は今度は、債務に對する支拂に金が不足する。手形は方々で不渡りになる。利子率は、びつくりしたやうに飛上る。金を融通しようなど、いふ者は一人もなく

なつて、誰も彼も貸しの分を取立てようとする。流通信用は一掃される。信用の急激な收縮だ。そして崩壞だ。

資本家AがBに對して支拂不能に陷ると、Bは更にCに對して支拂不能になる、等々といふ具合に、支拂不能の浪は、信用の鎖を傳つて全面的に波及する。それは、信用恐慌爆發の光景だ。

二　銀行恐慌

破綻を暴露した資本家諸企業に、銀行がしこたま貸附けてゐたとする。さうすれば、銀行も破產の捲き添を喰ふ。銀行は、「休業仕候也」といふ札を出す。

そんなのが、方々に現はれるといふと、今度は、銀行の信用が崩壞する。あんな大きな銀行がやられるやうではといふので、預金者達は預金の引出しに殺到する。取付けだ。みんなが現金で拂つてくれと言ふ。取付者は殺氣立つてゐる。しかし、銀行は、僅かな準備金以外はすつかり貸附けて、金庫は空つぽになつてゐる。

それからそれと聞き傳へた預金者大衆は、血眼になつて、どの銀行へも取付けに押かける。銀行の大半は休業の札を出す。取付は、一地方に起つて、全國的に波及することが珍しくない。かくして、信用恐慌は、銀行恐慌にまで發展し得るものである。

資本主義の沒落期においては、銀行恐慌は、飛んでもない時にぽかつと爆發することがある。過剰生産恐慌が勃發し、激烈な物價下落が起るといふと、銀行も多かれ少なかれやられるが、しかし政府の救濟などのおかげで多くの銀行は一時破綻を免れることがある。そして、一年か二年してから、二度目の物價下落が起るとか乃至はさういつたやうな何等かのきつかけがあるといふと、また銀行恐慌が突發して前の繼ぎ足しをやる。そこでまた救濟インフレーションが起つたりなどして「小康を得る」が、そのために却つて過大信用の上塗りをやることになり、信用の氷結は擴大されて銀行の狀態はます／\惡化する。そこで、また三四年もたつて物價下落等々が起るといふと、今度は馬鹿に大きな爆發をやる、といつたことになり勝ちだ。

三　貨幣恐慌

信用恐慌や銀行恐慌とからみ合つて、貨幣恐慌なるものも起り得る。信用の突如たる收縮、崩壞に見舞はれた資本家達は、現金だ！　現金だ！　と、全く現金に叫び出す。つまり、鹿が新鮮な水を喘ぎ求めるやうに貨幣を喘ぎ求めるのだ。

それはその筈だ、——取引の大部分を信用でやつてゐたところへ、その信用がぺちやんこになつたのだから、いくら現金があつても足りつこはない。現金がなければ賣らないと言ひ、早く現金で支拂つてくれといひ、支拂ひが濟まないうちは賣らないと言ふ。そこで、當座預金までが引出される。これは何のことはない、「現金制度の復活」だ。

手形は駄目になる。信用貨幣として流通してゐた無數の手形が、急に貨幣そのものに轉化せねばならなくなる。信用による相殺は駄目になる。無數の債權債務の相殺の際に計算貨幣であつたところのものが、俄かに現實の貨幣に轉化せねばならなくなる。

ところが、資本家達は、その貨幣、その現金が得られない。殊に、銀行恐慌の起る前後などは、みんなが貨幣を退藏してゐるから、ます〳〵得られない。

そこで、支拂手段に對する猛烈な爭奪が起つてくる。そして貨幣に打歩が生じてくる！「唯一の富」として嗅ぎ求められるところのものが、特別に高く評價されるのだ。これは、貨幣恐慌である。

貨幣恐慌は、信用恐慌に際しては多かれ少なかれ現はれてくる現象だが、その時にもし信用を喪失しない發券銀行があつて、擔保の範圍をうんと擴げるといつたやうな方法でもつて「非常時」的な信用を與へ、兌換券をふんだんに出してやれば、貨幣恐慌は避け得ることがある。そこで、兌換券の發行に對する法律上の制限といふ問題がやかましくなる。イギリスでは、その制限をゆるめることによつて一八九七年に貨幣恐慌を喰ひ止めたが、アメリカでは、その制限を強行したために一九〇七年のすばらしい貨幣恐慌が起つたといふことは、有名な話である。

尚ほ、注意までに一言しておくが、――たとひ貨幣恐慌といふところまで行かなくても、恐

慌期においては、特に信用恐慌が多かれ少なかれ發展してゐる場合には、「資本家が金に困る」といふ現象が見られるのだ。そこで、「恐慌期に金に困るのは資本家である、だから大衆の購買力の低下が恐慌の原因なのではない」といつたやうな珍論が飛び出してきたりする。前に吾々は、ブルヂョア的研究者達がよく資本と通貨とを混同していろんな珍論を吐くといふことを指摘したが、今度の珍論は、所得の貨幣形態と、資本の貨幣形態との混同に基づくのだ。資本家が「金に困る」のは、資本を貨幣形態で回收すること、および獲得することが困難になるからで、それは恐慌そのものゝ一現象である。「大衆の購買力の低下」なるものは、大衆の貨幣所得の總額が、大衆の消費のために生産される商品の總價格よりも遙かに低下することで、これは恐慌の一原因である。だから、ブルヂョア的研究者達の珍論には、恐慌現象と恐慌原因との混同といふおまけがつく。

四　取引所恐慌

「安靜狀態」から「活況增大」の時期を經て「繁榮」の局面に入るといふと、株式取引所は素晴らしい景氣を出してゐる。利子率の低いことと、會社企業の利潤が增加して配當が大きいこととがその主要原因である。それこそ一攫千金の株成金も、ぼつ〱現はれてくる。銀行は、投機業者達に信用を與へてゐる。

投機資金の需要の增大は、前に述べた諸事情と相俟つて、利子率を高める。だが、産業上の「繁榮」は尚ほも繼續し、やがて好景氣の頂點に到達する。株成金も、ます〱凄いのが現はれて、世間の評判は大變だ。そこで多くの慾張つた素人達が株に手を出すやうになり、職業的投機者達は彼等を踏み臺にして自分の商賣を擴大する。投機信用の需要はます〱大きくなつて利子率も高まつてくる。高い利息で金を借りて相場をやるからには、株價の變動が大幅になつて投機利得が大きくならなくては引合はないことになるのだが、恰度その頃には、そろ〱「過剩生産」の局面が展開しはじめてあちこちに破綻が暴露したり、商品の中に下落するものが現はれたり、銀行は貸出を警戒して投機資金の供給が減り始めたりするので、買方と賣方との對抗も強烈になつ

て、相場の動きはとても大幅だ。

が、この際に決定的な役割を演ずるものは、やはり信用である。信用の不可避的な崩壞の時期が近づいてくる。銀行が投機に融通し得る資金はます／＼減少し、投機は制限されざるを得ない。これは、買方にとつての大きな打擊となり、相場の下落を惹き起す。ところが、株券の價格が下るといふと、高い價格で計算した株券等々を擔保にとつて投機資金を融通してゐた銀行は、擔保の追加を要求する。しかし多くの投機業者や「素人筋」の連中などは、この要求に應ずることが出來ない。そこで、擔保株は強制賣却に附せられる。すると俄かに株の供給增加となるから、相場は急激に低落する。この低落は、賣方がそれを賣叩きの機會に利用するので、一層激成される。相場の低落は更に新たなる信用の制限となり、更に新たなる強制賣却を惹き起す。かくして、低落は慘落となり、大ガラとなる。取引所恐慌の襲來だ。

取引所恐慌は、金融市場や信用關係における變化によつて直接に惹き起される。この恐慌の襲來は、直接には、單に利子率の高さ如何にのみかゝつてゐる。從つてこの恐慌は、過剩生產恐慌

の爆發に先立つてすでに起り得る。だが、それは一般的な過剰生産恐慌の前觸れに過ぎないのだ。
大資本家や大銀行は、すつかり相場の下がつた株券等々を買ひ込んでおき、やがて市況が立ち直つて相場が上がるとそれを賣放つて巨利を懐にする。

前にも一言したやうに、資本主義の沒落期においては、投機が非常に大きな要因となる。巨大な投機が國際的規模において發展する。今度の世界經濟恐慌の前觸れの一つをなした一九二七年の米國取引所恐慌の爆發も、さうした事情の現はれである。

五　恐慌と金流出

諸君は了解してゐられることゝは思ふが、念のために言へば、以上はすべて、資本主義の古典的な發展段階——即ちおよそ十九世紀の四分の三の時期——における典型的な恐慌現象を說明したものである。次に問題になるのは、同樣の段階における恐慌期およびその前後に起る金流出である。

例へば、イギリスといふやうな主要資本主義國について觀察すると、金の流入は、活況増大期から繁榮期にかけて利子率がなほ平均水準以下にある時期において、最も盛んである。なぜさういふことになるかといふと、この段階にあつては、國内の商品價格は一般に低いので輸出は優勢であるに拘らず、輸入はそれに伴つて増大し得ないし、おまけに有價證券輸出といふやうなことまでが行はれるからである。ところがこの段階は、國内的に見てもすでに貸附資本が比較的豐富に存在してゐるところへ更に金が流入して來るのであつて、この金たるや第一次的には貸附資本としての外は作用し得ない形態の資本として流入するのだから、その超過流入は特に利子率の騰貴を抑へる傾向が著しい。

しかるに、繁榮期の終りから過剰生産期にかけては、恰度反對の現象が生じて來る。即ち、商品はもはや前ほどすら〳〵と捌けなくなり、市場は荷嵩みになつて、外觀だけの景氣が單に信用によつてのみ維持されてゐるといつた状態になつてきて貸附資本の需要は著しく増大し、從つて利子率もすでに平均的な水準を突破しはじめるといふ風になると、今度は金の流出が起つて來

る。しかも連續的な激しい流出になつて來る。

これは、好景氣による商品價格騰貴の結果、輸入はどん／＼増すといふのに、輸出の方は國內市場の吸收力が旺盛であるかの如く見えるのでそれほど促進されないからである。ところで、かういふ事情の下に生ずる金流出は、さらでだに缺乏を告げてゐるところの貸附資本を、更に缺乏させる結果になるから、その影響は極めて深大だ。利子率はいやが上にも騰貴させられる。しかるに、この利子率の騰貴は、いきなり信用取引を收縮させる代りに、却つて急激に膨脹させるのだ。といふのは、利子率の引上が始まるといふと、これはいよ／＼金融逼迫の時期も遠くないといふので、競爭的な資本家達は少しでも利息の安いうちに出來るだけ多く借り出しておかうとする。そしてそれと並んでまた、銀行信用の不足を補ふための私的商業信用も極端な緊張狀態に導かれる。

つまり恐慌前に生ずる激しい金流出は、「繁榮の崩壞」に先行するところの「信用の過度の緊張」を惹き起す一大要因をなすのである。

ところで、金の流出が激しいといつたところで、それは金高で言へば知れたものである。一國内に流通してゐる貨幣の總量に比較しても十分の一とか五分の一とかに過ぎないし、ましてこれを貸附資本の總額に比較すれば全く微々たる數量に過ぎないのだ。しかるに、それが非常に大きな要因をなすといふのは、どうしたわけか？

マルクスは、二つの理由をあげてゐる。一つは、その金流出の起る時期、――その時期の特殊事情に關係する。諸君御承知のやうに、秤の平衡は、ほんの僅かな分銅を加へてもガラッと覆へることがある。それとおんなじだ。乃至はまた、謂ゆるキャスティング・ヴォートなるもの、作用を考へてもわかるだらう。つまり、恐慌期の直前及び恐慌期の金流出は、さうした極微量の分銅として、乃至は一のキャスティング・ヴォートとして作用する。

もう一つの理由は、金なるものが、貨幣形態における資本として持つ特殊性である。

この場合に、なぜ金が國外へ出て行くかといふと、それは國際的支拂超過が生じて爲替相場が正貨現送點以下に下がるからである。支拂のために金を持出す資本家達は、――銀行であれ輸入

商であれ——、自己の資本の貨幣形態としてそれを送るのだ。その際、彼等は、自己の資本を商品形態で輸出することはもはや不可能だ。何故なら、イギリスならイギリスの商品はもう外國市場に一杯になつてゐて、價値の實現が困難になつてゐる、ヨリ以上商品を送れば値下りで大變な損をするといふ有樣になつてゐる。從つて、どうしても、貨幣形態で送らねばならないのだが、しかし相手は外國だから、たゞの貨幣形態では間に合はぬ。それは、絶對的な貨幣形態、世界貨幣形態、卽ち金形態でなければならないのだ。これを資本として見れば、貨幣資本の絶對的形態、世界貨幣資本の形態でなければならないのだ。

さうだとすれば、恐慌期の金流出が、異常に大きなモメントをなすのは當然だ。それは、資本問題から直接に貨幣問題に轉化する！

さればこそ、「近世の銀行制度が金の流出について持つ不安は、貴金財を以つて唯一の眞の富なりとする貨幣制度が嘗つて夢想したところの一切を凌駕する」（マルクス）といふわけだ。

て、要するに、恐慌前の金流出は、商品の過剰輸出入のシグナルとして、一般的恐慌および金

融恐慌の赤玉信號をかゝげるといふことになる。

六 貨幣本位恐慌

貨幣本位恐慌といふのは、貨幣本位が本位としての機能を喪失することで、謂ゆる金本位停止と共に起る恐慌現象である。

信用の崩壞は、發券銀行をも混亂の渦中に捲き込み得る。さうなれば、大衆的兌換要求が起つて兌換停止となり、兌換券の信用喪失を惹き起し得る。これについては前に詳しく述べてある。

また、激烈な金流出は、金準備の危機に導き得る。さうなれば、資本逃避、爲替投機等々が起つて金輸出禁止―爲替暴落となり、貨幣本位――例へば圓――の價値減少を惹き起し得る。これについても前に詳しく述べてある。更にまた、この貨幣本位恐慌なるものが、どうして破滅的なインフレーションにまで發展し得るか、それはどんな諸結果をもたらすか、といふことも、一通り說明がすんでゐる。

兌換停止、金輸出禁止といふ形態で現はれる貨幣本位恐慌は、資本主義の古典的な段階における一般的恐慌に際しても往々起つたことは、前にも指摘した。

『中央銀行は、信用制度の支柱であり、そして金準備はまた、中央銀行の支柱である』(マルクス)。従つて金準備は『銀行券の兌換保證であり、また全信用制度の支柱』である。貨幣本位恐慌にあつては、かうした支柱に故障が生じるのだから、事は大變だ。

かういふことが起り得るのは、信用および銀行の發展そのもののためである。マルクスは言ふ——

『信用營業及び銀行營業の發達は、一方に、一切の貨幣資本を驅つて資本に奉仕せしめると同時に(或ひは、畢竟同じことだが、一切の貨幣所得を資本に轉化せしめると同時に)、他方にはまた、一定の循環段階に於いて金屬準備を縮小してもつてその盡すべき機能をもはや全うし得なくする一の最低限度にこれを達せしめる。斯く發達した信用營業及び銀行營業こそ、全組織體のこの過度な感受性を造り出すものである。發達のヨリ低度な生産諸段階に於いては、準備金がその平均

程度に比して減少又は増大するといふことは相對的にどうでもよい事柄である。また、他方に於いて、極めて著しい金の流出でさへも、それが産業循環の危急な時期に生じないとすれば、相對的に無效なのだ。

かういふわけで、金の流出が、貨幣本位恐慌を惹き起し得るのも、それがやはり「危急な時期」に生ずるからだといふことになる。ところで、資本主義の沒落期にあつては、多かれ少なかれ「危急の時機」が、世界の此の國か彼の國かに、のべつ現はれるといつたことになる。その次第については第三篇に述べるであらう。

七　金融恐慌

以上によつて、諸君は、信用恐慌・銀行恐慌・貨幣恐慌・貨幣本位恐慌・取引所恐慌は、いづれも貨幣及び信用を通じて相關聯する恐慌現象であることを知られたであらう。これらのもの丶綜合としての恐慌現象は、金融恐慌と呼ばれるのだ。

金融恐慌は、なか〳〵複雜したもので、現實にはいろ〳〵な形をとつて現はれるけれども、しかしどんな形で現はれやうと、それは常に、貨幣及び信用そのものに內在する諸矛盾の爆發に外ならない。

吾々は、本講においては、一般的恐慌の發展過程における一段階としての金融恐慌を扱つた。言葉をかへて言へば、吾々の扱つたのは、一般的恐慌の、金融部面における顯現形態としての、金融恐慌である。けれども、金融恐慌なるものは、常に必ずしも一般的恐慌に伴つて生ずるものではなく、一般的恐慌から獨立しても生じ得る。例へば、國家が、通貨の統制に氣狂ひじみた干渉を行つたりなんかした場合には、それ自身獨立した金融恐慌が起ることがある。

それから、金融恐慌の個々の要素をなすところの諸恐慌は、何時もそのすべてがうち揃つて起るとは限らない。例へば、信用恐慌等々は起つても貨幣恐慌は起らないとか、銀行恐慌等々は起つても貨幣本位恐慌は起らないとか、いろ〳〵である。更に、それらの恐慌のどれか一つだけがぽかつと起るといふこともあれば、また、その幾つかのものがかなりの時をおいて一つづゝ起つ

てくるといふことも珍らしくない。特に、資本主義の沒落期においては、一般的恐慌と金融恐慌との結びつき具合も複雜になるし、金融恐慌の個々の諸要素の間のつながりもいろ／＼な形をとるやうになる。だが、それらの點をさへ忘れなければ、本講で取扱つた古典的發展段階の諸恐慌の分析は、沒落期の恐慌現象を研究する場合にも立派に役に立つ。

尙ほ、參考までに言へば、昭和二年の恐慌は、日本における戰時および戰後の信用インフレーションの破綻の時期に起つたもので、銀行恐慌が主となつて信用恐慌および取引所恐慌を伴つたところの金融恐慌であつたのだ。

もう一つ、ブルヂョアジーや、ブルヂョア的研究者にとつては、金融恐慌だけが恐慌であるやうに思はれたり、一般的恐慌の全體が單に金融恐慌に過ぎないやうに思はれたり、從つてまた信用の收縮こそが一切の恐慌の原因のやうに思はれたりする、といふことを注意しておかう。例へば今度の一九二七年以來の世界恐慌に際しても、ブルヂョアジーやブルヂョア・ジャーナリズムは、この未曾有の恐慌の發展を指して單に「不況の深刻化」だとか「殺人的不景氣」だとかいふやうな

い・加減な言葉でゴマ化してゐた。それは、一つには故意に恐慌を隠蔽しようといふ努力に基づくのだが、一つには、金融恐慌だけが恐慌だと考へるイデオロギーが手傳つてゐる。その證據には、彼等は、昭和二年の金融恐慌はいきなり恐慌として承認した。

言ふ迄もなく、金融恐慌は、一般的恐慌を怖ろしく深刻ならしめる。しかし、一般的恐慌こそは基本的なものであり、金融恐慌はむしろ派生的なものである。例外的な場合を除けば、金融恐慌の根柢には、常に、生產及び流通が社會的要求を遙かに超えて擴大されたといふ事實、――生產と消費の矛盾の深大化――が横たはるのだ。金融恐慌の前提であるところの、信用の急激な收縮や崩壞も、かゝる矛盾の深大化のために起るのだ。これこそが原因であつて、信用の收縮・崩壞はその結果である。

もしも、生產力と消費力、生產能力と販賣可能性、生產と市場との間に均衡がとれて再生產過程が故障なく進んでゐたならば、信用の需要の增大と共に預金も增大するし貸附の回收も「順調」にゆくわけだから、預金と貸出との間の均衡が破れたりする筈はなく、從つてまた、信用の急收

縮や崩壞なども起らなかつた筈なのだ。資本及び商品の過剩生產に基づいて信用の破綻が生ずるといふことは、資本主義の內在法則の作用によることで、いくら信用制度を「整備」しようと、いくら銀行が「愼重な態度」をとらうと、到底避けられるものではない。

八　國際金融恐慌への發展

發展した資本主義の段階における一般的恐慌は、それが一二の國に爆發するといふと、やがて全世界に波及して世界恐慌となる。從つて金融恐慌も、それが一般的恐慌の一の發展段階として現はれる限り、同じやうに一國から他國を襲つて國際金融恐慌にまで發展する。

マルクスは、恐慌が世界恐慌に發展する過程を分析した――

一國に起つた恐慌は、先づ輸出入の流れに乘つて他國へ波及する。素晴らしい好景氣時代の終りから恐慌期にかけての諸國の輸出入を見ると、一見奇妙な現象を呈してゐる。僅かな例外を除けば、好景氣を持つた主要資本主義國は、どれもこれも貿易勘定が

「逆」になつてゐる。これはどうしたわけか? ほかでもない、どの國もみな過大な輸出入をやつたからである。そしてその結果として、今やどの國の市場も輸入商品でだぶついてゐるのである。これは、もちろん、世界中に一般的な過剰生産が起つたことの現れだ。

例へばイギリスが金の流出に惱んでゐるとする、それは餘りに多く輸入しすぎたからだ。が、同時にまた、他の諸國は、イギリスの商品でもつて一杯になつてゐる、即ち他の諸國もまた餘りに多く輸入しすぎたのだ。さういふ譯だから、この場合の金流出は、もはや單なる支拂超過の問題ではない。

假りにイギリスが眞先きに恐慌に襲はれて、特殊の支拂超過の清算を始めたとしよう。それは、恐慌の強力作用による清算だ。

イギリスでは、金流出が口火になつて恐慌が爆發し、なほも金流出が續いてゐる。國内の取引は、營業は、崩壞した。そこで、支拂超過の一部分は、イギリスの輸入業者の破産と支拂不能とにより、從つて外國資本家が大きな損失を蒙ることによつて、清算される。また、一部分は、外

國市場への商品の投賣りにより、卽ち『商品資本の一部を安い價格で外國へ追ひやる』ことによつて、清算される。更に一部分は、外國の有價證券を賣拂ふといつたやうな方法で清算される。それと共に、イギリスの金流出は減り、だん／＼なくなつてくる。

だが、イギリスがさういふ方法で支拂超過を「清算」した以上、他の國が無事でゐられるわけはない。その國の資本家は大損をした。破産が起つてくる。英國商品のダンピングは市場を荒した。商品價格の崩壞が起つてくる。イギリスがどん／＼賣つたおかげで有價證券の市價も低落する。これらすべては、その國に信用の極度の緊張や急收縮や、取引所ガラや、銀行破産などを惹き起さずにはゐない。

今度は、その國が、「恐慌の強力作用による清算」をやる順番だ。イギリスが「清算」を始めるまでは、ほんのちよつとのあひだこの國の支拂差額は「順」になつてゐる。しかし、イギリスの「清算」の進行と共に當然に「逆」になつてくる。それが本當なのだ。謂はゞ「地金が現はれる」のだ。そこで、金流出は始まるし、國内の騷ぎはいよ／＼大きくなつて、恐慌にまで發展する。

——以下、右に準ずといふわけだ。

これを見ても、この場合の金の流出は、一つの恐慌現象であるといふことがわかるだらう。金流出は、順を追うて各國に巡つて行く。金流出の起る順番は、どの國がいつ總決算をやる番になるか、恐慌がいつどの國を襲つてその潜在的諸要素を爆發させるかを示すのだ。

資本主義の沒落期の一つの特徴は、「世界的な好景氣」なるものが起らないことである。從つて世界恐慌の具體的な起り方も違つてくるし、國際金融恐慌の具體的な發展過程も違つてくる。それは、第三篇において、もつと具體的に研究すべき問題である。

第三篇　金本位の崩壊

第十講　資本主義の一般的危機

一　帝國主義世界戰爭

昭和五年の總選擧に際して河上肇氏の書かれたパンフレットの中に次のやうな一節がある――

『さて今から約十年あまり前の一九一四年から同じく一八年へかけて、歷史上未曾有と稱せられる世界大戰爭が行はれたといふことは、周知のことであるが、しかしその戰爭の中心は、遠くヨーロッパの方に懸け離れてゐたために、日本は參戰國の一つでありながら、その慘害を蒙ることが最も少なかつた。そのために、一般には世界戰爭の實に恐るべきものであることを、今もなほ充分に意識してゐないのであるが、假にごく大ざつぱな數字を擧げて見ても、あの世界大戰爭のために戰死した者の數は約九百萬人、死傷者合計二千八百萬人である。

日本内地の人口は、大正十四年度の國勢調査の結果によると、生れたての赤ん坊から、八十九

十の老人に至るまで、男女のすべてを合計して、約五千五百萬人であつたから、それを標準とすれば、つまり當時における全人口の半分だけのものが——すなはち男女老若のすべてを合して、二人のうち一人づゝのものが——あの大戰爭のために死んだり怪我をしたりした割合になつてゐるのである。

それからまた費用の方は、直接の戰費だけでも（すなはち戰爭のため間接に生じた總ての損害は計算外においても、）交戰諸國を合すると、約五千億圓に達してゐる。

この五千億圓といふ金高が如何に大金であるかといふことをはつきりさせるために、私は次の事實を述べておかう。日本一の大富豪三井一家の純資産は約八億乃至十億と推定されてゐるが、この十億といふ金高を一圓札で數へるといふことになると、どんなに急いでやつても一年や二年で算へ盡せるものではない。假りに今年の正月元日に滿二十歳に達した男があり、その男が今年の正月元日から、夜も晝もぶつ通しに、年中少しも休まないで一秒毎に一圓づゝ計算し始めたとすれば、彼れが十億圓といふ金高を數へ終るのは、彼れが滿五十四歳に達した年——すなはち昭

和三十九年――の九月十一日の午前一時四十六分十秒といふ時である。十億圓といふ金高はそれほどのものである。このことは後の話に關係があるから、大體の見當をつけるために右のお話しをしたのであるが、世界大戰爭のためには、右に述べた十億圓の更に五百倍だけの富が、人間同志が互ひに殺し合ふための費用として消耗し盡されたのである。もしこれだけの金を全無產大衆の直接の利益のために使つたならば、どれだけ多くの幸福が生まれたか知れないのだが、それが僅か四年間に煙にされてしまつたのである。

世界的な規模における戰爭が如何に恐るべきものであり、如何に文明の敵であるかは、たゞ以上述べた事實だけによつても納得できる。

それなら、此の如き世界戰爭は再び起る氣遣ひはないかと言へば、決してさうではなく、むしろその反對である。

これはまことに解り易く書いてあるが、また全くその通りであるのである。

ところで、吾々は、この一九一四年――一九一八年の世界戰爭を、帝國主義世界戰爭と呼んで

ゐる。なぜさう呼ぶか？　それは、帝國主義によつて必然ならしめられた戰爭であつたから。

こゝに帝國主義といふのは、資本主義の一定の發展段階を意味してゐる　資本主義は、世界的に見て、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、一つの新しい發展段階に入り、深刻な質的變化を遂げるに至つた。この段階は一口に言へば、獨占の段階である。有名な、レーニンの規定によれば――

『帝國主義は、獨占と金融資本の支配が確立され、資本輸出が優れた重要性を得、國際的トラストによる世界の分配が始まつてをり、最大の資本主義諸國の間に地球の全地域の分割が終了されてゐるところの、さうした發展段階における資本主義である』。そして『帝國主義は、××××××である』。

この帝國主義の段階においては、必然的に次のやうなことが生じてくる。

(一)金融資本の支配は、獨占資本主義の寄生的な特質及び最も××な特質を現はして、資本家的獨占の桎梏を堪へ難きものたらしめる。そして、それによつて、資本主義に對する勞働者階級の

××と××を増大せしめ、大衆を、唯一の抜道である××××××××××てる。

(二)植民地や半植民地諸國への資本輸出の増大、「勢力範圍」の擴大、世界の分割を終るまでに發展した植民地爭奪の政策、——これらのものによつて資本主義は、今や、少數の帝國主義強國が人類の大多數の上に加へる××と束縛との「世界體制」に轉化する。從つて、世界の人口は、二つの陣營に分裂する。即ち、一方には廣大な植民地及び半植民地諸國を××し××するところの「先進」資本主義諸國、他方には資本主義の桎梏から自己を解放せんとするところの植民地及び半植民地諸國の廣汎な諸大衆。

(三)「勢力範圍」の獨占はすでに確立し、諸植民地の獨占はすでに確立した。しかるに、個々の資本主義國の發展は恐ろしく不均等である。從つて、諸國の間の均衡はぐん／＼破れてくる。が、地球上のすべての土地はすでに領有されてゐるのだから、この破れた均衡を回復する道はたゞ一つしかない。諸國のブルヂョアジーは、好むと好まざるとに拘らず、世界の×××に向つて闘爭する。かくて、地球上の諸地域をふんだんに取つた國々と、ヨリ多くの分前を欲する國々との間

に、必然的に××が××する。これこそ、帝國主義戰爭である。

この帝國主義戰爭は、一九一三年にアメリカに起つた恐慌がヨーロッパを襲ひ始めた時に勃發した。

戰爭中の經濟がいかなるものであつたかは、前にもあらまし述べてある。

戰爭のおかげで、産業周期の通常の發展はまつたく中斷された。

戰爭は、獨占を保護された主要産業に對して、無制限の「市場」をつくり出してやつた。戰爭は、いくら買つても買ひ過ぎるといふことのない「偉大な需要者」として現はれた。

生産手段の生産は、××手段の生産に取かへられた。個々人の消費に充てられるべき物質の恐ろしく大量のものが、生産せずに××する幾千萬の人々によつて消費された。而も、ます／＼高い價格において消費された。こんな氣狂ひじみた過程は、一直線に×××××進むものだつた。

それにも拘らず、資本主義社會の對立の極度の尖銳化のおかげでもつて、その破滅への過程は却つて「繁榮」の外觀を呈したのだ！　國家は、ひつきりなしに公債を發行し、市場を紙幣で氾

濫させながら、何十億といふ計算から何千億といふ計算に移つて行つた。商品取引の手段であつた信用制度は、××のために國民財産を動員する手段に轉化した。厖大な負擔は、何代か後の子孫の肩にまで背負はされた。

××による破壞と並んで、生産による生産力の破壞が進行した。機械や建物は、がたぴしやになる迄使ひへらされた。農村では、地力が涸渇した。都市や交通機關の建設の仕事は全く抛擲された。

が、紙幣や銀行券の際限もない膨脹と並んで、公債や株券や社債は絶えず増大し、騰貴した。卽ち、生産資本が破壞されるのに從つて、擬制資本は増大した！

諸君、――かうした過程は、實に、四年も續いたのであつた。

二　戰後の世界恐慌

資本主義は、帝國主義世界戰爭の終りの頃から、更に新たなる發展段階に入込んだ。

それは「資本主義の一般的危機」の段階である。「帝國主義は、×××××前夜」であつた。「資本主義の一般的危機」は、××××の段階である。吾々が前に「資本主義の沒落期」と呼んだのは、卽ちこの段階を指してゐる。

資本主義の一般的危機の第一の時期は、戰爭中の一九一七年頃から始まつた。大正十三年に出版された「資本主義經濟の沒落」といふ書物の中にある次の一節は、その時期の有樣を眼に見るやうに書き現はしてゐる――

「一九一七年七月には、ロシアの××が顚覆された。一九一七年五月以來、イギリスには猛烈な同盟罷工運動が勃發した。一九一七年十一月には、ロシアのプロレタリアートが××權力を××した。一九一八年十一月には、ドイツ及びオーストリア・ハンガリーの××××が崩壞した。同盟罷工運動は、多くのヨーロッパ諸國を襲ひ、次の一年間には、異常な廣範圍に及んだ。一九一九年三月には、ハンガリーにソヴィエット共和國が出現した。同年の末には、アメリカは、金屬工、坑夫及び鐵道從業員の激烈な同盟罷工によつて震撼された。ドイツの××××は、一九一九年の

一月及び三月闘爭の後、一九二〇年三月、カップの反亂當時においてその絶頂に達した。フランスでは、國内の形勢は一九二〇年五月に至つて最も緊張した。イタリーでは、絶えず有力になりつつある工業及び農業プロレタリアートの運動が、一九二〇年九月に遂に、勞働者による工場・農場及び土地の××を導いた。チェックのプロレタリアートは、一九二〇年十二月、同盟罷工の××に訴へた。一九二一年三月には、中部ドイツの勞働者が××し、イギリスの坑夫は大同盟罷工を始めた」。

この第一の時期は、直接の×××××時期とも呼ばれる。この時期においては、ロシア社會主義聯邦ソヴィエット共和國が、あらゆる干渉や×××を打負かしてプロレタリア××を××し、また第三インタナショナルが、組織され、確立された。が、他方においては、西歐プロレタリアートの次々の敗北があり、ブルヂョアジーの一般的攻勢が始まつてきた。一九二三年におけるドイツ・プロレタリアートの敗北と共に、この第一の時期は終つた。

經濟の部面には、戰後の世界恐慌が、この時期に勃發した。

この經濟恐慌は、戰爭の終了と共に當然に起るべきものだつた。戰爭によつてつくり出された巨大な商品需要は、戰爭が濟めば急に無くなるのだから、恐慌が起るのは當り前である。しかし、それが起れば、政治的××は一層×××し、ブルヂョアジーの××となるのは必然だ。そこで、彼等は、戰爭の終了後も猶ほ×××××制の下に紙幣の增發を續けたり、新らしい公債を發行したり、資本家の利潤を保證したり、重要商品の價格を統制したり、食料品供給や給料や賃銀などに對して國家的補助を與へたり、――一口に言へば戰時同樣の政策を繼續して、恐慌の爆發を喰ひ止めた。その上に、アメリカが歐洲諸國に信用で商品を供給したこともまた、彼等の努力を助ける結果になつた。

それと同時に、交戰狀態の終了したこと、、僅かながらも國際關係が復活したこと、は、世界中のいろんな商品に對する新たなる需要を呼び起してきた。そこで、戰爭中は不用になつてゐた商品の大量が甦へるやうなことになり、商人や貿易商や投機師達は、一攫千金の機會に惠まれた。

さういふ譯で、戰爭直後の一九一九年から二〇年の初にかけて恐ろしい空景氣が起つてきた。

しかし、これが全くの空景氣に過ぎなかつたといふことは、「繁榮」の中心が商業方面にあつたこと、工業生産は世界的に見て戰前よりもずつと低かつたこと、そして忽ち大恐慌の勃發を見たことによつても明かだ。

それはその筈である。四年も續いた××的作業の後に本當の好景氣などが來ては耐らない。事實において、戰爭が終つた時には、世界はすでに過剩生産の地域と、過少生産の地域とに分裂してゐたのであつた。

即ち一方には戰爭中に主として商品供給者たる地位を占め、從つて急激に生産力の增大を來たした地域、——即ち米國、日本等。この地域においては、山積する商品の販路が失はれたために大變な過剩生産が生じてゐた。これに對して他方では戰爭と封鎖の下に、大規模な商品の破壞や、物的及び人的の生産諸力の破壞が行はれたために、また階級鬪爭が極度に高潮したために、生産不足と饑餓に陷つた地域。これは言ふ迄もなく戰爭の中心地帶であつたヨーロッパの狀態で、そこでは過少生産が生じてゐた。しかも商品の有り剩る地域から缺乏する地域へそれを送ること

は、全く資本主義的な理由によつて不可能であつた。かゝる狀態は、前記の短い期間だけは潛在化されてゐたけれども、一九二〇年の初に空景氣が崩壞すると同時に俄然表面に現はれてきた。信用、商業及び工業を全面的に××した恐慌は、一九二〇年（大正九年）の三月に、先づ日本に勃發した。恐慌の浪は、四月にはアメリカを襲ひ、それからイギリス、フランス、及びイタリーに移り、更にヨーロッパの中立諸國にも波及した。そしてその年の下半期には資本主義の領域内にある××に擴がつた。

この恐慌は、正しく一の經濟恐慌ではあつたが、それは資本主義の一般的危機の段階に生じた點において、また戰爭中及び戰後二ケ年間の××と疲弊の上に吹き出でた空景氣に對する深刻な反動であつた點において、從來の「正常的な」産業周期の一局面としての恐慌とは性質を異にするものだつた。

米國は、恐慌から比較的早く回復したし、日本は、後に詳しく述べるやうに、救濟インフレーションによつて恐慌の深化を喰ひ止めたが、過少生産を持つた中歐及び東歐諸國においては、夙

餓恐慌は貨幣本位恐慌にまで發展し、×××な紙幣インフレーションが發展した。そしてそれと共に、その他のヨーロッパ諸國においても惡性インフレーションが起つてきた。

かうしたインフレーションと共に、國内信用も國際信用も××した。貿易は瓦解した。物々交換への逆戻り、農民の自給自足への復歸、等の傾向まで現はれてきた。資本主義世界經濟全體が××し、資本主義の諸關節は脱臼し、階級と階級との間には×××××が築かれた。

むろん、世界市場は、混亂に陷つた。ヨーロッパは、アメリカや日本の生産物を必要としたが、それに對して交換價値を提供することが出來なかつた。ヨーロッパは貧血に苦しむし、アメリカや日本は鬱血に惱んだ。

金本位は崩壞した。世界市場には一般的等價物がないも同樣だつた。ヨーロッパ諸國の九割九分までの爲替相場は激しく低落し、動搖した。それは、世界市場における商品および資本の取引に對する最大の障碍をなし、資本主義生産をだらしのない投機に轉化した。

これは、諸君の記憶に値ひする事柄である。世界のブルヂ・アジーは、十九世紀の後半から世

界戰爭までの六七十年のあひだ、金本位の崩壞といふ現象を全く知らずに過してきた。それは、「尋常」の恐慌期にはもう起らなくなつてゐた。ブルヂョアジーは、永年の經驗を積み重ねて、金本位の崩壞を防ぐあらゆる手段を心得てゐた。しかるに、帝國主義××××の直後に起つた恐慌においては、世界的な金本位××が起つたのだつた。これは、あの恐慌が、資本主義の一般的××の段階に生じた恐慌であつたことに基づいてゐる。この金本位の崩壞こそは、資本主義の××××××××したことの一表現であつたのだ。これは注意を要する點である。

三　一應の安定化から再び危機へ

諸君は、中歐諸國のブルヂョアジーが、そこに起つた破滅的なインフレーションを如何に利用したかを知つてゐる。

インフレーションは、勞働者階級と小生産者大衆と、貯蓄者層との犧牲において、大ブルヂョアジーを利益するやうな風に、所得の分配を變へて行つた。そしてそれと共に、ブルヂョア××を

も強めて行つた。

インフレーションは、プロレタリアートの實質賃銀を自働的に引下げ、××によつて彼等が戰ひ取つたものを彼等の手から奪ひ去つた。それと同時にブルヂョアジーは、改良主義者の助けをかりてプロレタリアートの注意をば、大きな政治問題からその日〱の賃銀問題の方へ外らせることが出來た。更にまた、彼等は、××される小ブルヂョアや官吏層などの反抗の鋒先を、「戰爭成金」だの「ジューの奸商」だの「無暗にストライキをやる不埒な勞働者」だのといふうまい逆宣傳によつて、そつちの方へ轉向させ、ファッシスト運動を組織するための基礎をつくつて行つた。社會民主主義者は、ブルヂョアジーの手先になり、プロレタリアートを裏切つて、その前衛を打負かして行つた。

かうしてつくり出された社會的基礎の上に、ブルヂョアジーは先づ貨幣の安定化に着手した。これらの「過少生産の地域」においては、××の鎮壓によつて××の强化が可能となり、剰餘價値・利潤の生産が可能となるにつれて、生産の擴張が行はれた。他方、過剰生産の地域におい

ては、ブルヂョアジーは生產の制限をやつて急場を凌いだ。そこで、世界經濟の激しい分裂が、緩和される傾向になつてきた。

更に、貨幣の安定化によつて爲替相場が安定するのにつれて、貿易や資本輸出も增加し始めた。貧窮化した諸國においては資本が缺乏して利子率が高く、利潤率も前記の理由によつて高まつてきたので、資本過剩に惱んでゐた肥大と溢血の國々から資本が流れ込んできた。アメリカとイギリスの資本は、特に、中歐諸國の貨幣の安定化に際して「援助」を與へた。この援助は、貸附ける方の資本家達にとつて素晴しい儲け仕事であつた。おまけにそれは、全體としての資本主義社會にとつては、××の擴大に對する一時的防禦となり、同時にまた救濟によつて購買能力を與へられたヨーロッパに對してヨリ多くの商品を賣り込むことが出來ることを意味したのだ。更にまたそれは、ヨーロッパにおける生產の擴張を結果したことは言ふ迄もない。

かういふ具合にして、資本主義の世界經濟は、とにかく一應は、新たなる均衡狀態に向つて進むことが出來たのだ。

それと共に資本主義は、その一般的危機の段階における「第二の時期」に入込んできた。これは、「相對的安定化の時期」とも呼ばれるものである。この時期を特徴づけるものは、(一)資本主義制度の部分的な安定化、(二)資本主義經濟の一應の立直し、(三)資本の攻勢の發展と擴大、(四)プロレタリアートの守勢的鬪爭、等である。が、それと同時にまた他方では、(五)ソヴィエト聯邦における急速な經濟的上昇および社會主義建設における著しい成功、(六)諸國の廣汎な大衆に對するプロレタリア×の政治的影響の増大、それから、(七)特に植民地における××運動の高潮、といふことが著しい特徴をなしてゐる。

これを見てもわかるやうに、「安定化の時期」が生じたといふことは、資本主義の一般的××の消滅を意味するものではなくて、それがたゞ一時的に緩和されたといふだけのことである。從つて、謂ふところの「安定化」は、部分的な安定化に過ぎなかつた。なぜなら、資本の支配の鞏固化はまだすべての國においては達成されてゐなかつたし、經濟の回復もまたすべての國において戰前の水準に達してはゐなかつた、等、等。更に、その安定化は、一時的な安定化に過ぎなかつ

たつ。なぜなら、前に鋭く現はれた危機の諸要素は、遠からぬうちに再現して安定化への諸傾向を打ち負かすことは明かだつたから。更にまた、この安定化は不確かな、脆弱な安定化に過ぎなかつた。なぜなら、資本主義の諸矛盾と諸對立は、たとひ表面に鋭くは現はれなかつたにせよ、なほ異常に深大なものであつたから。

で、一口に言へば、第二の時期は、×××の段階に生ずる潮の滿ち干きの一局面に過ぎなかつた。それはむしろ、「××の波の谷間」と呼ばるべきものであつたのだ。

一九二三—四年から一九二六—七年までつゞいたこの時期においては、資本主義諸國における生産と貿易とは一般に上昇した。しかし、それは平均的に見ると、戰前の水準をやつと取戻したか、乃至は僅かばかり超過した程度のものにすぎなかつた。大多數の資本主義國の貨幣は安定したが、しかしフランスの紙幣インフレーションと法の崩壊はこの時期に起つてゐたし、他の諸國も金本位に關する絶えざる不安と、金爭奪の脅威の下に立つてゐた。更に著しい特徴は、主要資本主義國の發展が恐ろしく均等を缺いたことである。それは、二つの最大資本主義國であるア

メリカとイギリスとを比較しただけでもわかるだらう。同樣に、景氣の發展も非常に不揃ひだつた。そして、どの國のどんな「好景氣」の眞最中にも、常に多數の失業者が生じてゐた。かやうに失業が慢性化し固定化するといふことは、資本主義の××期でなければ見られない現象だ。

さういふ譯であつたから、「安定化」が進行し成長するのに從つて、その進行と成長それ自體の中から新たなる危機が生み出されずにはゐなかつた。かやうに、一般的危機の新たなる尖鋭化の時期として現はれた第三の時期は、「第三期」と呼ばれる。それは、一九二七年を轉換期として、一九二八年から始まつた。

一、安定化の時期において、主要資本主義國のブルヂョアジーは、狹隘化した市場、貧弱な販賣可能性に當面し、競爭的に、極度に生産費を切下げんがため、また利潤を確保せんがために、資本家的「合理化」を強行し、高度の生産技術を採用し、おまけにぐん／＼獨占化を押進めて行つた。それがために、一時的な景氣はあちこちに起つてきた。が、これらの運動が進めば進むほど、生産能力の方は飛躍的に増大するといふのに、大量の勞働力が不用になるから、失業者は増

大して市場は却つて狹くなつてきた。激增した生產能力は、狹隘な市場の限界にます〳〵激しく衝突せずにはゐなかつた。これは、必然的に、强烈な過剩生產恐慌の爆發となる。また各國による市場爭奪戰の熾烈化となる。

二、かやうに、一般的に、生產能力に對して市場と販賣可能性はます〳〵狹くなるといふことと並んで、資本主義諸國の生產及び貿易の增大が非常に不均等であるといふ事實のために、××の××は深められてきた。諸國の發展は、互ひに、他を亂したり覆へしたりするやうなことなしに、順調にすら〳〵と進むのではない。反對に、諸國は、市場の支配者となるために生死の鬪爭をやり、この鬪爭の結果、或る者は優勝して進出し、或る者は驅逐されて敗退せざるを得ないのだ。市場の消化力と諸國の勢力範圍とが多かれ少なかれ固定的だといふのに、生產能力と供給は急速に增大し、市場を爭ふ國家の數は殖え、おまけに米國――とそして或る程度までは日本――などのやうに市場の分前をぐん〳〵增して行く國と、ドイツ、カナダ、支那、印度などのやうに新たに復興または擡頭する國と、フランス、イタリーのやうな停滯の國と、それからイギリスの

やうな凋落の國があるといふことになれば、とても只では濟まなくなるのが當然だ。

二、技術的進歩、資本家的合理化、および獨占化は、勞働の強烈化と固定的失業の増大と賃銀の切下げ――一口に言へば勞働者狀態の劣惡化を惹き起した。それは、プロレタリアートの反抗、鬪爭を尖鋭化した。更に、植民地及び半植民地民族に對する抑壓は、その××運動の浪を高めた。かくして、××××は、退潮期から高潮期に移行する。

四、最後に、安定化の時期におけるソヴィエット聯邦の社會主義的生産は、資本主義諸國の生産と衝突する點にまで發展した。これは反ソヴィエット鬪爭を尖鋭化する。

かくして、第三期は、再び戰爭と××の××の時期として現はれてきた。

四　資本主義の一般的危機

一般的危機の段階における資本主義は、以上のやうな發展の諸時期を持つたけれども、すべての時期を通じて、戰前の資本主義と異なる特質を持つてゐる。それはどんな特質か？

第一、資本主義は沒落の過程にある。資本主義の均衡は多かれ少なかれ震撼されてゐる。

第二、從つて、資本主義のこの發展段階は、××と××の時代として特徴づけられる。

第三、資本主義は、もはや、國際經濟の統一的な包括的な體制を代表しない。資本主義的經濟體制と並んで、社會主義的經濟體制が存在し、後者は前者と對立する。そしてこの××××經濟體制は、それが存在するといふ單なる事實によつて資本主義の腐敗を曝露し、その基礎を×××かしつゝ、成長し成熟しつゝある。

第四、帝國主義××××と、ソヴィエット同盟に於ける××の××と、——この二つの事實は、植民地及び從屬諸國における帝國主義の支配を動搖させた。帝國主義の權威はこれらの國において××となり、帝國主義はもはやこれらの國において在來の方法を遂行する能力を持つてゐない。

第五、戰爭中及び戰後において、植民地および半植民地諸國に、若き資本主義が發生した。そしてそれは、市場において、古き資本主義諸國との競爭に成功してゐる。そしてそれによつて市場獲得のための全鬪爭を異常に激化させてゐる。

第六、世界戰爭は、大多數の資本主義諸國に大變な置土產を殘して行つた。企業の生產能力が十分に利用されないこと、そして絕えず失業者軍が存在すること。この失業者軍は、もはや產業豫備軍ではなくて、失業常備軍であり、しかも巨大な常備軍である。

ざつとかういふ次第である。

資本主義の一般的危機の段階においても、諸君が第三講その他において研究したところの資本主義一般の內在的諸矛盾のすべてのものが、その作用を續けてゐることは勿論である。また、本講の第一節に述べたやうな帝國主義の特殊の內在的諸矛盾も勿論その作用を續けてゐるが、それらの要因は、それが質的に新らしいものとして現はれ、此の一般的危機の段階を以前の諸段階と區別せしめるやうな形態で現はれる限りにおいてのみ、この段階の特質をなすのである。前からある矛盾が單に量的に增大したといふだけでは、新らしい段階の特質をなすものではない。また、さうした新特質が生じなければ、新らしい段階といふものもない。

第十一講「金の偏在」

一　國際收支の均衡の破壊

さて、吾々に與へられた課題は、最近に起つた金本位崩壊の現象を分析してその意義を確かめることである。吾々は、すでに、この現象の發生の背景であり地盤であるところの一般的狀勢を明かにした。次の仕事は、ヨリ具體的な、特殊の條件を究明することである。

今度のやうな世界的な金本位崩壊は、資本主義の一般的危機の××なればこそ起つたのだ。崩壊の起る前提の一つは、金の國際的配分における均衡がひどく破れたことである。そして、それは更に、資本主義世界全體から見た國際收支の均衡が破れたことに基づいてゐる。

世界戰爭以前における資本主義世界經濟においては、國際間の收支に一種の均衡が保たれてゐた。その狀態を大つかみに言ふと——

世界の諸國は大體において二つの大きなグループに分かれてゐた。一つは生産力の發展した主要資本主義國、――即ち、イギリス、ドイツ、フランス、等の、西部及び中部ヨーロッパ諸國。もう一つは、生産力の發展しない植民地・半植民地諸國。前者は後者に、工業製品を供給し、後者は前者に、食料品と原料品を提供した。生産力の低い國々は、絶えず支拂超過にならうとする。金を送つても追つつかぬ。すると主要資本主義國は、彼等の方へ資本を持込んで行く。この受取分によつて彼等は、繼續的な支拂超過を免れる。その代り彼等は、今度は、經濟的および政治的に搾取されることになる。

さうなると、生産力の低い國々から帝國主義諸國へ送り込む食料品や原料の價値の一部分は、前同樣、資本主義國から來る工業製品の對價に當るものだが、その他の部分は、資本の利潤や利子を支拂ふもの、および政治的搾取者への貢物に當るものとなる。そこで、さういふものがある以上、彼等はまたも支拂超過になる。さうするとまた、帝國主義國は彼等の方へ資本を送り込み、その一時的な受取分によつて彼等は支拂超過を免れる。

ざつとかういふ風にして一種の均衡が保たれてゐた。ロシア、日本、アメリカ合衆國といつたやうな資本主義國は、一方では帝國主義國として資本も輸出するし、その他何でもやつたけれども、他方では繼續的な支拂超過國として、絶えず資本を輸入した。主要資本主義國の方は、これらすべての國に絶えず資本を供給して利潤や利子を收得し、それを更にまた資本に轉化して供給した。從つて彼等としては、自分の資本に金の卵を生ませるところの國々に生產・流通の破綻が起きても困るから、彼等にも相當額の金準備を持たせておくやうに——散々いぢめてからではあるが——取計らひもした。

かやうにして得られる均衡なるものは、むろん、たゞ相對的な、一時的な、偶然的な均衡に過ぎなかつた。が、それでもそれは、爲替相場の激しい動搖を避け得る程度の均衡であつた。

帝國主義が成熟するのにつれて、右の如き均衡はます〳〵危つかしいものになつてきた。帝國主義諸強國は、その新たに蓄積する資本に、相當量の利潤を生ませ得るやうな、新しい投資の機會を見出すことがます〳〵困難になつてきた。この事情は、彼等を、武力鬪爭に——帝國主義世

界戰爭に――驅り立てた主要原因であつたのだ。

ところが、帝國主義戰爭の結果は、在來の均衡の永久的な破壞となつた！　その原因としては、戰爭のおかげて、(一)資本主義諸國の生産力の分前は激變した。そしてその後の發展はます〳〵均衡を破つてゐる。(二)國際間の債權債務關係も激變した。そしてその後の發展によつてます〳〵始末におへないものになつてきた。(三)植民地・半植民地國には、經濟上および政治上の變革が起つてきた。そしてその後もます〳〵發展しつゝある。(四)プロレタリア××は資本主義世界市場から脫退した。そしてその後は更に、社會主義的生産を著しく發展させて、資本主義世界市場に對する脅威となつてきた。

誰でも知つてゐるやうに、戰爭中から戰後にかけて米國の生産力は素晴しく增大した。日本の生産力も著しく增大した。フランスも殖えた。世界の生産力におけるこの三國の分前は非常に大きくなつた。

が、アメリカの場合は特殊の重要性を持つてゐる。アメリカは、世界の生産力のおよそ半分を

占めるやうになつた。しかもその發展は特に工業生産において著しいのだから、アメリカの輸出能力は激増し、それによつて先づ受取分が激増した。ところが、この國は必要な食料品や原料品の大部分を自給する。さういふ物を外國から輸入する必要は少いから、支拂分は比較的僅かである。おまけに、食料品や原料品をも多量に輸出する。從つて、それによつても受取分は大きくなる。かういふわけで、米國は、歴史上曾つて見たこともない特異の受取超過國として現はれてきた。この國は、一九一六年から一九二一年までの六年間に、合計百七十六億弗の輸出超過を持つた。毎年平均三十億弗近くである。

貿易上の受取超過がそんな途方もないものになつたのだから、米國は一躍資本輸出國になり上つた。米國の海外投資は、一九二三年には早くも五十億弗を超過した。恰度その時分から貿易上の輸出超過はずつと減つて平均四、五億弗でしかなくなつたが、その代り海外投資からの利潤や利子の收入が殖えてきた。(例へば一九二六年には六億八千弗)。こんなべら棒な受取超過が繼續したのでは、世界中の金は忽ちアメリカへ流れ込んでしまふだらう。そこでアメリカは、年々十

億弗以上の海外投資を續けてきたが、それでもなほ受取超過は繼續し、金はひつきりなしにアメリカへ流入した。むろんアメリカとしては、もつと澤山海外投資をやりたいのだが、しかしそれが出來ないのだ。出來ない理由はあとで述べるが、その一つは世界の領土的分割が終了し、帝國主義諸國の旣得の「勢力範圍」が確立されてゐて、アメリカの割り込み得る餘地が狹く限られてゐるからである。

同時に一方、世界の生産力においてイギリスとドイツの占める割合は激減した。しかも、この二國は戰前においては最强大な帝國主義國であつたのだ。

イギリスの貿易上の支拂超過は激增した。一九一五年から二〇年までの輸入超過は合計三十億磅(卽ち約三百億圓!)で、毎年平均五億磅に上つた。その後は餘程減つたけれども、毎年二億磅から四億磅位の輸入超過が續いてゐる。

世界貿易におけるイギリスとアメリカの地位は顚倒した。アメリカの輸出は、到るところにイギリスを犧牲にして增大しつゝある。主要な植民地及び半植民地國に對する輸出總額の中で兩國

の占める割合を比較するとよくわかる。第一表に示されたやうに、米國の占める割合は、戰前に比較すると、どこでも著しい増大を示してゐる。

しかるに英國の占める割合は、到るところで減つてゐる。第二表を見給へ。

第一表

主要植民地に對する輸出中に米國の占める割合

	1913年	1926–27年
	%	%
印度	2.6	7.9
インドネシヤ	2.1	6.5
支那	6.0	16.4
オーストラリヤ	13.7	24.6
エヂプト	1.9	4.7
南阿	8.8	15.3
ブラジル	15.7	28.7
アルゼンチン	14.7	24.7
カナダ	64.0	64.9

第二表

主要植民地に對する輸出中に英國の占める割合

	1913年	1926–7年
	%	%
インド	64.2	47.8
インドネシヤ	17.5	15.1
支那	16.5	10.2
エヂプト	30.5	25.6
ブラジル	24.5	21.2
アルゼンチン	31.0	19.3
オーストラリヤ	51.8	43.4
カナダ	21.3	16.8
アフリカ	50.1	42.8

かやうにイギリスの輸出能力は激減し、貿易上の支拂超過は激増したのに搗てて加へて、イギリスの海外投資からの利潤および利子の收入がまた激減した。それはその筈だ。第一、ソヴィエト

トのプロレタリア××は、ツァーの政府が國民搾取のため、帝國主義政策遂行のためにイギリスやフランスから借り込んでゐた尨大な借金を、きれいに蹴つた。イギリスが、そのソヴィエット權力を顚覆しようとして、邊境諸國に注ぎ込んだ金はきれいにこけついた。ドイツも、あの通りで、借金の利息なんか拂へない。植民地諸國は、インドを始め、反帝國主義＝民族××の浪が荒れ狂つてゐる。さういふ譯で利子收入も激減した。

かやうに、イギリスは、元來が勘定足らずのところへ持つてきて、更に、アメリカやフランスに對する帝國主義的對抗に後れを取らないやうにと、無理算段をして資本を輸出した！

こんな有樣である以上、イギリスから金が流出したのは不思議でない。一九一五年から一九二五年に至る十一年のあひだ一年もかゝさずに金は流出した。そして、そのうちの統計不明の三ケ年を除いても、金流出は合計一億四千七百萬ポンド（卽ち約十五億圓）にのぼつてゐる。（統計不明の年といふのは一九一七年、一八年、一九年だから、當時の巨額の流出を加へれば、もつと大變なことになる）。しかるに、アメリカの方へは、同じ期間に、十六億ドル以上の金が流入した。

それからドイツ、――これは、アルサス・ローレンを取られ、植民地全部をとられた上に、文字通り莫大な償金支拂を強制された。ヤング案に基づくドイツ賠償金は、五十九ヶ年に亙つて――即ち一九八八年まで支拂はれるもので、最初の三十七ヶ年は、毎年平均約十九億九千萬マルク、第三十八年度から五十六年度までは十六億乃至十七億、そして五十七年度以降は九億乃至八億づつ支拂ふといふものだ。

これでは、いかにドイツが猛烈な飢餓輸出をやつて貿易の受取超過をこしらへて見ても、追つつくものではない。この賠償金の支拂が續く限り、ドイツは借金に借金を重ねるより外はない。ドイツは、永久に――といふ意味はドイツが資本主義國である限り――支拂超過國であらねばならぬ。

日本は、戰後、生産力の分前を増大した國の一つでありながら、繼續的な支拂超過國になつてゐる。これは、一つには、毎年巨額の輸入超過が續き、且つ巨額の利子を支拂ふからである。そしてそれは、日本が戰後もずつと金輸出禁止をやつて信用インフレーションを起してゐたこと、

及び厖大な××を持つことに基づいてゐる。支拂超過の續いたもう一つの理由は、舊對支投資の利潤や利子がろく〳〵入つて來ないのに、支那への産業資本輸出は續けられてゐることである。そして前者は、支那革命の發展といふ事實のためであり、後者は、支那の資本主義的發展によつて新たに關稅が設けられたことなどによる。かくして、日本からも、繼續的な金流出が起つた。

フランスは、ドイツからアルサス・ローレンや植民地を取つたにも拘らず、貿易上では依然として支拂超過國である（受取超過であつたのはたゞ一九二四―二七年のインフレーション期に爲替ダンピングをやつた時だけだ）。對外投資からの利子收入はといふと、これはイギリスの場合とほゞ同樣の理由によつて、戰後は激減した。そこで、經濟的には立派な支拂超過國に落ちぶれたフランスは、政治的に横車を押し、ドイツからの償金を金で取立てたり、その他いろんな辛辣な方法で、金のかき集めに狂奔し、相當な成功を收めてゐる。

主要資本主義國の方は以上の如き有樣だが、植民地・半植民地諸國においても變革が起つてきた。

第一には、これらの國における資本主義的發展と工業化。これは、資本主義諸國の工業生産物の市場を狹める。この事實は、日本、イギリス、ドイツ、フランスのやうな國々を、貿易上もしくは全體としての支拂超過國におとし入れる一大要因をなしてゐる。

第二は、植民地・半植民地諸國における××と××、從つて不斷の政治的不安。これは、一方では、帝國主義諸國が在來の投資に對する利潤や利子として受取るものを激減させ、イギリス、フランス、日本等の國際收支を著しく惡化させてゐる。と同時にまた他方では、アメリカなどの新たなる資本輸出の機會を非常に少くする。おかげで、アメリカの繼續的な受取超過は、新しい資本輸出によつて緩和されることが出來ないで、金はひつきりなしにアメリカへ流入する。

激しい政治的不安に基づく資本輸出の困難は、ひとり植民地的諸國に對してだけのことではない。ドイツ、イタリー、日本のやうな國に對しても同樣だ。この場合には、戰爭の××の不斷の存在といふことが、大いに手傳つてゐる。それから、ソヴィエット聯邦の諸地域、即ち戰前には最大の資本輸入國の一つだつた廣汎な地域に對しても、資本輸出は政治的理由によつて不可能化し

てゐる。

ソヴィエット聯邦は、その獨自の××××××××××、大して外國資本の助けをからなくても、すばらしい「五ヶ年計畫」を成功的に遂行し得た。しかし、ドイツ、イタリー、××のやうな資本主義國は、思ふやうに資本輸入が出來ないために、支拂超過の一時的彌縫すらが非常に困難だ！

同樣の困難は、植民地的諸國においては十倍も鋭い形態で現はれる。

これらの國々の或るものにおいては、依然として原始的な農業が主要産業である。かゝる地域では、××や戰亂や、帝國主義者のやけ糞の××や搾取などによつて、農業のすさまじい××があり、飢饉がある。おまけに世界市場における農産物の價格はべら棒に安くなつてゐる。それは深刻な農業恐慌だ。

植民地的諸國の他のものにおいては、戰爭中から戰後にかけて、資本主義的農業經營が急速に發展し、特作物への專門化が行はれ、農業の生産力は怖ろしく增大した。そして、それが大變な

過剩生産を結果して、農産物價格の慘落を惹起した。それはさうだらう。主要資本主義國中の米國は、そんな農産物を買ふどころか、自國の大農業の過剩生産に困り拔いてゐる。それから、アメリカを始め、イギリスやドイツやフランスや日本では、絶えず工業生産設備の大きな部分が遊んでゐるやうな有様だから、原料品に對する需要はいつも供給以下である。更にまた、絶えず巨大な失業者軍があり、賃銀は極度に切り下げられ、小生産者大衆は窮乏化してゐるのだから、食料品に對する需要も常に供給以下である。こゝでも深刻な農業恐慌だ。

この世界的な農業恐慌は、戰爭後ずつと慢性症状を呈して來た。そして、それは一方では、植民地大衆の消費力＝購買力を低下させ、それによつて英、獨、佛、日の對植民地輸出の減退をひき起し、それらの國の支拂超過を增大させる。が、他方ではまた、農産物價格の暴落によつて、農産物を輸出する植民地的諸國そのもの、受取勘定を激減させ、それらの被搾取國の一群をみじめな支拂超過國たらしめる。

かういふわけである。この狀態を吾々は、國際收支の均衡の破壞と名づけるのだ。これは決し

て一時的な現象なのではない。

均衡の破壞は、資本主義の一般的危機の諸要素に基づいて生じてゐる。

かうした均衡の破壞から、必然的に、次の如き傾向が生れてきた。(一)金はイギリスや日本のやうな資本主義國からも、また大多數の植民地的諸國からも絶えず流出し、そして絶えずアメリカやフランスへ流れ込む。たゞドイツだけはちつとも有難くない例外をなす。こゝでは、政治的危機が餘りに×××してゐる。賠償金を取立てる國々は、ドイツ資本主義のつぶれるのを恐れ、且つはまた仲間のうち一國だけがうまくやり過ぎるのを恐れるので、嚴重な監視の下にいろんな無理算段をしてドイツの金準備を保存させてゐる。

そこで、金は、もはや、以前のやうに諸國の間を流れて往つたり來たりするのではなく、一二の國へ往きつきりになる傾向がある。從つて、他のすべての國の金準備は涸渇する傾向がある。これが「金の偏在」を生ぜしめる根本事情の一つである。(他の諸事情は後に説く)。

戰後の第二の時期に資本主義世界經濟がどうにか安定化した狀態にあつたあひだは、破壞され

た國際收支の均衡はいろんなやりくりでどうにか未だ彌縫されることが出來、「金の偏在」も、金本位制を脅かすには至らなかつた。だが、第三期の世界恐慌が始まるや否や、繼續的な支拂超過國からの金流出は急に激しくなつてきた。そして、金本位制の崩壞にまで導いた。

が、その恐慌の過程を述べる前に、二三の説明を添へておかう。

二　アメリカとフランスへの金集中

こゝに興味ある問題は、なぜアメリカとフランスに金が集中されたかといふことである。これには、上來説明した一般的な原因の外に、それと關聯した特別の原因がある。

戰後になつて、生産力と消費力との矛盾が怖ろしく激化し、それが表面に現はれてくると、資本主義世界の殆どすべての國は爭つて關税を引上げた。それはいづれも、他國を犧牲にして自國産業の利潤を維持しようとしたのであつた。

(一)過剩生産地域に屬する國々は、その國內市場が自國の生産能力に對して非常に狹いので、自

國產業と競爭する安い外國品の輸入を妨げねばならなかつた。(二)戰爭中に新たに資本主義的工業を發展させた國々は、戰後再び先進資本主義國の工業品が侵入して來るのを妨げねばならなかつた。これらの國々は、植民地・半植民地國に屬するものが多かつたが、その中には中歐及び東歐の過小生產地域にあるものも少くなかつた。

(三)更に一般に、戰後は例のインフレーションが起り、一二三の國の外はすべて爲替相場が下落し、それに乘じて猛烈な爲替ダンピングが行はれた。そして、爲替ダンピングが一通り收まると、今度は殆どすべての國が、猛烈に資本家的合理化を押進めて、只さへ狹い世界市場の爭奪に進出した。この二つの事情によつて、すべての國はますます關稅壁を高めねばならなかつたのだ。

かうした異常な「關稅戰」は、資本主義世界經濟の深大な矛盾と混亂に基づいて展開されたものだが、その關稅戰によつて更に矛盾と混亂が深められたことは勿論である。

もし關稅を引上げたのが一國だけで、他のすべての國は引上げないのならば、その國は或る程度まで輸入を阻止して輸出を增すといふ目的を達することも出來るだらう。しかし、一國が引上

げれば他國も引上げる。そしてすべての國が引上げるならば、どの國も目的を達することが出來なくなるばかりでなく、どの國にとつても海外市場は前より一層狹くなる。これは、みんなで謂はゞ共喰ひをするやうなものだから、仕方がない。そこで、その結果はといふと、すべての國の消費者大衆は資本家の利潤を維持するために關稅だけ高い物を買はされるし、また世界經濟が個々の國民經濟に分裂する程度はます／＼甚しく、個々の國民經濟はます／＼孤立經濟に轉化する。そして全體としての國際貿易はます／＼減退する。

ところで、さういふ場合に、比較的に打撃の少いのは米國のやうな國である。即ち、國土が廣く且つ豐饒で、原料も食料も自國で生産し得る國である。そこで、米國は、眞先に、しかも最も強烈に關稅を引上げた。この引上げは、米國の貿易上の受取超過を促進したばかりでなく、米國に對する諸國の支拂を商品の形態ですることを困難ならしめ、金そのものをもつてしなければならないやうにした。從つて、米國への金流入は、二重三重の原因によつて激成されるといふことになつてきた。で、米國は、自らそれを意圖したにせよしないにせよ、結果においては金吸收

の政策をとつたことになる。そしてこの政策は、根本的には、戰後の米國及び資本主義世界一般に生じた激しい過剰生産その他一聯の深大矛盾によつて強制されたものである。

が、また、××と××の時代であるところの、資本主義の一般的危機の段階にあつては、「唯一の商品」「唯一の現實的富」であるところの金は、國際政治經濟において異常な重要性を得ずにはゐない。だから、戰後において、事實上、金の爭奪が怖ろしく激化したのは不思議でない。この金の爭奪戰は、ドイツから賠償金を取立てる帝國主義諸強國、わけても英、米、佛の三國の間に、最も劇的に演じられてゐる。

三國の間には、經濟的および政治的に尖鋭な對立がある。金の爭奪もこの對立を反映する。爭奪戰においては米國が一番強かつた。米國は、貿易上の受取超過といふ武器を持つてゐる。高い關税といふ要塞を持つてゐる。更に英、佛のいづれに對しても債權國の強味を持ち、おまけに豐富な貨幣資本といふ武器を持つてゐる。本當の武器の點は暫くおいても、これらすべてをもつて「武裝」された米國は、俺れの方への支拂は金でしろ、と頑張つた。

かくしてきた、米國の本當の武器――軍備――は、米國の債權と同時に膨脹しなければならなかつたのだ。すべての帝國主義國は、軍艦や大砲や飛行機や毒瓦斯を手にした、全く大がゝりな××貸である。

米國に借金のあるイギリスやフランスは、米國へ返すかね、利息を拂ふかねを他の國々から取立てた。が、就中、ドイツから取立てた。

ところで、イギリスやフランスは、米國に對する支拂を金ですれば、金は米國に向つて流出し、自國の金準備が減つてくる。そこで、その埋め合せをつけるために、そこら中から金をかき集めねばならなくなる。肝腎のドイツには、やつと自國通貨を安定させ得るだけの最小限度の金だけしかない。

ドイツは、賠償支拂をしようと思へば、商品を輸出するより外はないといふのに、英・米・佛の方では商品を持込まれては困るといふ。さうかといつて、賠償金の取立てを斷念するわけでもない。そこで、ドイツは、金でも拂へないし、商品でも拂へないので、どうしても新らしく借金

をして賠償金を拂ふより外なくなつた。

取立者の或者は、ドイツから金で支拂を受ける分を貸しにした。しかし、他の者は、どうあつても金で取らなければ承知出來ないといふ。そこで、どうにも仕方がないので、更に或る者は、ドイツが支拂へるやうに金そのものを貸してやる。全く大變な騷ぎである。(彼等が、いづれかの形において、ドイツに貸したのはいゝが、それに對して更に利息を取るのだから、矛盾はます〳〵大きくなるだけだ!)

さうした四つ巴の金爭奪のゴタ〳〵を繰返しつゝ、結局どういふ傾向になつたかといふと、金の總量でいふとアメリカが一番多く取り、割合でいふとフランスが一番多く取り込んだ。そしてイギリスの金保有は、總量においても割合においても、減少した。

イギリスが金を喪失したのは、前に述べた一般的原因によること勿論だが、今の四つ巴の爭奪戰に關する限りでは、イギリスの帝國主義政策上、フランスを牽制するためにドイツを味方につける必要があつたので、比較的多くドイツを「援助」したといふこともあづかつて力ある。

それでは、フランスはどうして金をかき集めたか？

何と言つてもフランスは賠償金取立ての親玉で、賠償金全體の五割二分をせしめてゐる。また、いま言つたやうな爭奪戰の要所々々で一番駄々をこねたのもフランスである。だから、イギリスやアメリカがドイツに融通した分は、廻り道をしてフランスの手に入つたものが少くない。

ところが、フランスは前にも言つたやうに、貿易上の支拂超過國であるばかりでなく、フランスの受取勘定の源泉をなすところの對外投資そのものは戰後は非常に減つたのだ。それは五分の一に減つたなど、言ふ者すらもあるほどだ。そこで、非常に無理なやりくりをして金をかき集めねばならなかつたのだが、その仕事をフランスは主としてインフレーション時代にやつてゐる。爲替ダンピングもその一つだし、平價切下げもその一つである。が、主要な方法は次のやうなものだつた。高利貸帝國主義のフランス・ブルヂョアが持つてゐた對外長期投資の外國證券は、戰時及び戰後次第に外國市場で賣り拂はれ、一部は短期資金に振替へられた。フランが安定化して來ると、これらの在外短期資金は、前に逃げ出した資本と共に、我れおくれじとフランスへ舞ひ戻

るので、外貨爲替は洪水のやうにフランス市場へ押寄せた。フランス銀行は通貨を殆ど無制限に發行して、この外貨爲替を買ひ取つた。するとフランス政府は、その莫大な通貨を吸收するためにどし／＼內國公債を發行し、得たる通貨をもつて、フランス銀行からの借入金を返して行つた。通貨はフランス銀行に回收された。

その結果はといふと、ブルヂョア達の多くは、それまでフランス銀行が持つてゐた公債を（新公債の形式で）代つて持つことになり、フランス銀行はそれまで多數のブルヂョア達が持つてゐた海外投資を集中的に持つことになつたのだ。フランス銀行は、自己の手に集中した在外資金の大量を短期資金と化し、それを動かすことによつて、爲替相場を左右して、フランスへの金流入を促進し得たといふわけだ。

が、それにしても、フランスへの金の集中は、フランスの富裕化に基づくのではなくて、窮乏化に基づくものであることは明かだらう。フランスが貧乏しなければ、何も無理なやりくりをして金を集める必要はなかつたのだし、またフランスが金を國內へ集中しただけそれだけ、フラン

スの海外投資は減少したのであつた。

序でにもう一つ、——フランスは、右と同じやうな方法によつて長期の海外投資の非常に多くのものを流動化し、それを短期の資金に轉化してニューヨーク、ロンドン等々に置くやうになつたといふことを注意しておかう。さういふことをしたのは、ずつと前に述べたやうに、國際金融市場の一般的な不安定に基づくのだが、この不安定は更に、資本主義の一般的危機の一産物である。

なほ、以上、金の爭奪戰については、英、米、獨、佛の四ケ國について述べたが、それは單に代表的なもの、中心的なものとして述べたので、爭奪戰は全世界に亙つて行はれ、すべての國が、それ〴〵の程度・形態においてそれに參加したことは言ふ迄もない。

三　謂ゆる「金の偏在」の意義

次に掲げる第三表は、金の國際的配分がどんな風になつたかを數字的に示すものだが、これだ

けの數字からでも、幾つかの重要な傾向を看取することが出來るだらう。

戰前の一九一三年と、戰後の一九二七年とを比較すると、五大帝國主義國の間の金の配分は非常な變化を來たしてゐる。第一には、アメリカ及び日本の分前の激增と、ドイツの分前の激減。第二には、アメリカの分前が圖拔けて大きくなつて配分上の均衡がすつかり破れてゐる。一九二九年になると、フランスの分前も激增し、米、佛二國への金集中の傾向が現はれてゐる。これは、

第三表　五大資本主義國の金保有量

	一九一三年末	一九二七年末	一九二九年末	一九三〇年末
イギリス	三、九二〇（一七・五）	三、一一三（一〇・三）	二、九八三（九・二）	三、〇三〇（八・六）
アメリカ	七、九三七（三五・三）	一八、三八四（六一・一）	一七、九八四（五五・四）	一九、二八一（五四・九）
フランス	五、八八七（二六・二）	四、一二八（一三・七）	六、八五五（二一・一）	八、八一二（二五・二）
ドイツ	四、一八〇（一八・六）	一・九三一（六・四）	二、三四九（七・二）	二、二八二（六・五）
日本	五四六（二・四）	二・五三六（八・四）	二、三二三（七・一）	一、七〇四（四・九）
五ケ國計	二、四七〇（一〇〇・〇）	三〇・〇九二（一〇〇・〇）	三二・四九四（一〇〇・〇）	三五・一〇九（一〇〇・〇）

備考　一、單位は百萬ライヒスマルク、括弧內は五ケ國計に對する割合
　　　二、「數字」に現はれた世界恐慌より引用

一九三〇年に至つて非常に著しいものとなつた。同年には、五大強國の金保有總高中の八〇％は米佛二國に歸してゐる。そして英國の分前はたつた八・六％に過ぎなくなつた。それと並んで日本の分前も著しく減少して五％以下に落ち込んだ。

更に一九二七年から三〇年までの四ケ年間における金の移動は、すべての點において非常に急激であつたことも明かだが、これを五大帝國主義國の總計について見ると、三百億マルクから三百五十億マルクへの激增が見られるのだ。この間に金生産の增加は無いのだから、五大帝國主義國が四年間に獲得した五十億の金は、それだけ他の諸國――その多くは植民地・半植民地諸國――が喪失したのであつた。

かやうに金は、すべての國の犧牲においてアメリカとフランスへ集中されたため、この二國の金保有高は一九三〇年末に、二百七十八億マルクに達し、世界全體の金保有高五百億マルクの五五・六％を占めるに至つた。うち、米國は百九十億（三八％）、佛國は八十八億（一七・六％）を占めた。米國では、あんまり金が多過ぎるので、到底その全部を金準備に充てることが出來なくな

り金證券なるものを發行して、保有金量の可成りの部分を退藏せしめねばならなくなつた。

ブルヂョアジーは、この金の偏在があるために、いろんな矛盾や對立が起るのだと言ふ。が、事實はその正反對なのだ。彼等は、いつも原因と結果を顛倒する。諸君のすでに知られる通り、資本主義の一般的危機の段階において異常に×××したところの諸矛盾・諸對立こそは、金の偏在を惹き起した原因なのだ。

一の世界體制としての資本主義の××。

ソヴィエット聯邦の出現と××。

最大帝國主義國の一つだつたドイツの、永久的債務國＝支拂超過國への轉化。

慢性化した國際農業恐慌と植民地の政治的不安。

殆どすべての植民地・半植民地諸國の非常に惡化した國際收支。

帝國主義國の方から彼等の支拂超過を次々に彌縫してくれる筈の資本輸出の減退。

それと並んでまた、資本輸出が思ふやうに出來ないので繼續的な受取超過＝金流入を持つ米國

のやうな國の出現。

帝國主義諸國の利子收入の減退。

關稅戰の恐ろしい激化。

××と××の不斷の脅威を背景とする金爭奪。

「金の偏在」なる事實は、これらの矛盾對立を惹起す力などはない、あべこべに金の偏在を××したものこそ、これらの矛盾・對立である。

が、もちろん、金の巨大な部分が一二の國に集中されることになれば、殘餘の比較的少量の金に對する爭奪は一層激しくなる。そして、かゝる爭奪を未曾有に××せしめつゝ、遂に金本位制の一大破局をもたらしたものは、第三期世界恐慌の××であつたのだ。

第十二講　第三期世界恐慌

一　この世界恐慌の特質

一九二九年から始まつた第三期世界恐慌は、資本主義の一般的危機の地盤の上に展開した未曾有の深刻な恐慌である。

一九二〇年の恐慌以來、世界的な全面的な好景氣は一度も起らなかつたにも拘らず、この恐慌は恐ろしく激烈な過剩生產恐慌として爆發した。それは、戰時及び戰後のインフレーション的諸要素がまだ充分に清算されてゐなかつたこと、相對的安定化の時期の强烈な產業合理化によつてつくり出された矛盾が異常に深大なものであること、その時期を通じて慢性的な國際農業恐慌がますます深まつてきたこと、等に基づくのだ。

吾々は、先づ、この恐慌の一般的な特質を確かめておくべきである。

(一)これは、世界のすべての資本主義經濟を除すところなく捉へた一般的恐慌である。ブルヂョアジーは、いやそんなことはない、フランスやスカンヂナヴィアは恐慌の外にある、などと言つてゐた。しかし、彼等がさう言つた舌の根の乾かないうちに、それらの國々も恐慌に捲き込まれた。ブルヂョアジーは、いややつぱり例外がある、あのアイスランド島を見給へ、とも言つた。（笑つてはいけない！）。だが、これさへも恐慌に捲き込まれた。

(二)が、それほどの大恐慌の眞只中に、×××××××××××××××。それは生憎資本主義國ではない。それはソヴィエットの國であり、社會主義の國である。ブルヂョアジーは、一生懸命に、その事實を押隠さうとしてゐたが、どうにも隱し切れないので、今度は、ソヴィエットは小麥のダンピングをやつて世界市場を混亂させてゐる、などと言ひはじめた。が、彼等が何と言はうと、×××××××××××××××はちつとも受けないばかりでなく、あべこべに素晴らしい經濟的上昇をやり遂げてゐる。謂はゆる五ケ年計畫の成功である。

これは、この×××××××が、これまでのすべての恐慌と全く異なつて、二つの經濟體制の

××を中心として展開してゐることを意味するのだ。この××、この對立は、一方には全體としての資本主義、他方には社會主義を建設しつゝある國、といふ××である。そしてそれは、刻々に、資本主義の基礎そのものの××と××とを促進しつゝある。だからブルヂョアジーは、資本主義の內部の對立が特別に尖銳化する度每に、いつも×××××××をにらみつけるのだ。

(三)この恐慌は、非常に高度の獨占資本主義の段階において起つてゐる。そのために、恐慌の種々なる國における發展も、また種々なる生產部內における發展も、恐ろしく不均等である。かゝる不均等は、物價運動の點にも、生產縮小の點にも現はれてゐる。獨占の發展した國は、恐慌の負擔を、原料供給國に轉嫁してゐるし、獨占產業・獨占企業の商品は、非獨占產業・企業の商品に負擔を轉嫁してゐる。獨占價格を維持する手段としては生產制限が行はれるので、生產の縮小は、原料品部門との間の均衡を缺いてゐる。更にまた、個々の資本主義國の間においても、高低様々の關稅障壁が、物價の下落を不均等ならしめた。

(四)この恐慌は、深刻な農業恐慌と一緒に起つて、互ひにからみ合ひ、また深め合つてゐる。現

時の農業恐慌には三つの型がある。A、技術的進歩のために増大した農業生產能力と、狹く限られた消費力との間の矛盾の爆發、――かくして起つた農業恐慌は、農業ブルヂュアを債務地獄に突落してゐる。B、農業技術の非常におくれた國々（支那、インド等）の農業恐慌、――こゝでは農地は荒廢し、農業は退化しつゝある。C、工業原料の供給國たらしめられた單栽制植民地（ブラジル、アルゼンチン等）が襲つた農業恐慌、――これは最も激烈を極めてゐる。それは、工業恐慌の影響を受け、その負擔を轉嫁せられてゐる。が、いづれにせよ、農業恐慌は、工業生產物及び農產物の販路を縮小し、また農業諸國及び植民地諸國への工業生產物の輸入を激減させてゐる。

（五）今度の世界經濟恐慌は、これまでのすべての恐慌のうちで最も深刻な恐慌である。これは生產の縮小、操業率の低下、等において最も鋭く現はれてゐる。（これについては後に述べる）。獨占體は、價格維持のために途方もない生產制限をやつてゐる。そこで、生產から除外された資本、活動しない生產資本が、利潤の一部を侵蝕し、そのために利潤減少が甚だしい。獨占體は、損失

轉嫁の「權利」は持つてゐるが、同時にまた利潤喪失の「義務」も負はされてゐる。彼等が生産制限をすればするほど、商品一單位は高いものにつく。高いものにつくから、彼等はます／＼獨占價格を維持するために生産制限をしなければならぬ。これはいたちごつこといふものだ。

（六）この第三期恐慌は、恐ろしく長期に亙る恐慌である。獨占體は、それ自體の內部における鬪爭や、樣々の形で來る外部からの競爭などがあつても、價格の引下げは極めて緩漫にしか行はない。このことは、商品の賣行きを妨げ、滯貨を增大し、それによつてます／＼恐慌を深め、且つ長びかせる。うち見たところ、ブルヂョアジーは、一生懸命で、恐慌を長びかせることに腐心してゐるやうだ。恐慌は、累積した矛盾を、資本の破壞によつて一時的に解消する作用を持つのだが、この資本の破壞なるものは、商品の減價と生産資本の廢棄とによつて遂行される。以前のブルヂョアジーは、商品の減價を防ぐために生産資本を廢棄したものだが、腐朽した獨占資本主義においては、瘦せる生産資本が、利子だけは一人前に取られて、不相應な利潤部分を喰つてゐる。そして資本の破壞は、獨占資本主義のおかげで、なしくづし式に極く僅かづゝしか行はれない。

更に、小賣價格が卸賣價格ほど下らないことも、恐慌を長びかせる。小賣價格がそれほど下らないのは、資本主義の一般的危機のために租税負擔が激減してゐること、商品販賣の困難なために流通の費用が増大してゐること、交通機關が獨占されてゐることなどに基づくのだ。

二　恐慌はいかに發展したか

世界恐慌は、一九二九年十月の米國取引所恐慌を契機として全面的に展開した。アメリカは、「震源地」としては確かに最大のものであつたが、しかし唯一の震源地ではなかつた。一九二九年下期の資本主義世界には、次のやうな狀勢の國々が存在した。

およそ一億の人口を有する東歐諸國（チェッコ、オーストリー、ハンガリー、ポーランド、バルカン等）は、米國取引所恐慌に先立つてすでに尖鋭な恐慌に襲はれてゐた。

フランス、ベルギー、スヰス、スカンヂナヴィア等の西歐諸國は、一九二九年に先立つ數年間に亙つて相當に強い好景氣があつて、恐慌の諸要素はすでに成熟してゐた。從つて、米國からの

恐慌の衝撃を受ければ、早晩、尖鋭な恐慌を起す可能性を持つてゐた。

イギリスは、ずつと慢性的不況状態にあつた。內亂によつて支離滅裂の支那があつた。景氣變動の激しいドイツがあつた。日本は、その一年前に金融恐慌に見舞はれて、デフレーションへの轉換を強制されてゐた。濠洲は、すでに深刻な不況に襲はれてゐた。インドにも不況が見舞つてゐた。南米諸國は、獨立した農業恐慌の地域をなしてゐた。

そこへ持つてきて、米國取引所恐慌の爆發だ。米國は大きい。米國に起つた震撼は、その貿易を通じ、投資網を通じて、急速に全世界に波及せずにはゐなかつた（もつとも米國では十月末の取引所恐慌が爆發する四五ヶ月前からすでに恐慌過程が開始されてゐた。それは生産指數の低落にはつきりと現はれてゐた。ただブルヂョアジーが、そんなことはちつとも氣付かずに「萬年景氣」を謳歌してゐただけのことである）。

合衆國に起つた恐慌は、先づ第一に、これと密接な關係にあるカナダを襲つた。カナダは、小麥の大輸出國であるだけに、特に農業恐慌を手ひどく感じた。前々から不況の中にあつたラテン・

アメリカも、すでに深刻な恐慌に襲はれた。これは、世界の工業國わけても英米に對する鑛物及び農產物を供給する國だから、それは當然だ。

一九二九年の中頃からドイツに始まつてゐた恐慌過程は、十二月から激烈な發展形態をとつた。イギリスにおける慢性的不況から恐慌への轉換は、少しおくれて一九三〇年の第一四半期に始まり、第二四半期から急激な發展を遂げた。

それから間もなく、アフリカの諸國と濠洲が激しい恐慌に捲き込まれた。濠洲では、一九二九年八月から始まつてゐた小麥恐慌や羊毛恐慌が非常に激化した。

一九二八年以來次第に尖銳化した農業恐慌を持つてゐたインドは、一九三〇年には全面的恐慌となつたし、同時に內亂や銀の暴落などのために荒廢してゐた支那においても、工業恐慌が尖銳化してきた。東歐諸國に起つてゐた恐慌の尖銳化は申すまでもない。日本についてはあとで詳しく述べるが、金解禁の決定された一九二九年六月からデフレーション恐慌は急性的になり、米國恐慌の衝擊を受けて更に全面的に熾烈化したことは、諸君もおよそ御承知だらう。

最後にフランス、これは、一番おくれて――乃至は最も徐々たる過程を經て――恐慌の中に捲き込まれて行つた。それは、この國が大きな商品需要能力ある廣大な領土を併合したこと、ドイツから盛んに賠償金を取立てたこと、戰爭で荒廢した地方の復舊事業を尚ほも續けてゐたこと、戰時および戰後に新たに建設された一聯の企業が高度の競爭力を持つてゐたこと、などによつて、初めは恐慌に對する抵抗力が比較的强かつたからである。だが、それにも拘らず、若干の產業部門は早くも一九二九年頃から恐慌の徵候を見せてゐたし、一九三一年には全フランスが、紛れもなく恐慌の中に捲込まれてゐた。

三　一九三一年の恐慌深度

さて、第三期世界恐慌は、以上のやうな過程をとつて發展したのだが、一九三一年にはつひに未曾有の國際金融恐慌が勃發した。この國際金融恐慌は、金本位の崩壞に導いた。それは、今度の世界經濟恐慌の發展における新らしい局面をなすものである。また、言ふ迄もなく、それは一

般的恐慌が非常に深まつたことの現はれである。吾々は、一般的恐慌が、一九三一年には、どれほどの深度に達したかを一通り確かめておかう。

この目的のためには、主要資本主義國の狀態を見なければならぬ。

アメリカにおいては「アナリスト」の物價指數（一九一三年＝一〇〇）は、次のやうに低落した。

一九二九年平均	一四五・四
一九三〇年平均	一二七・七
一九三一年六月	一〇〇・〇

卽ち米國の物價は、六月に早くも戰前の水準にまで陷落した。

アメリカにおける生産は、「アナリスト」の生産指數によると、一九二九年五月の一一〇から一九三一年の五月には七七に落ち込んだ。卽ち二年前に比して、三〇％强の縮小だ。貿易の減退はもつとひどい。

	輸入（百萬弗）	輸出（百萬弗）	計（百萬弗）
一九二九年平均	三六二	四三〇	七九二

一九三〇年平均	二六〇	三一五	五七五
一九三一年平均	一七六	一八五	三六一

即ち、一九三一年六月の貿易は、二年前に比べると半分以下に激減した。そして、輸出の減退は輸入の減退よりも更に甚だしい。

こんな風だから失業者は激増した。失業者は、一九三〇年二月から三一年一月までの間に、六百萬人から一千萬人に殖えた。

イギリスの物價は、「エコノミスト」指數によると次の如く低落した。

一九一三年平均	一〇〇
一九二九年平均	一三七
一九三〇年平均	一一二
一九三一年末	九七

即ち、これは、年末には、戰前の水準以下に陥ることすでに三%といふ狀態だ。

生産の指數は、一九二九年第四四半期の一一五から、一九三〇年第四四半期の九三に低落した。一年間に約二〇%の縮小。その後の縮小がもつと激しくなつたことは次の數字に現はれてゐる。

	銑鐵（千トン）	鋼鐵（千トン）	石炭（百万トン）
一九三〇年九月	四三・二	五九・〇	一九・九
一九三一年九月	二五・二	四〇・六	一七・二

貿易は、一月から九月までの貿易額について、一九三一年を二九年に比較すると、輸入において三〇・七%の減少、輸出においては四六・二%の減退だ。

失業は、一九三一年末には二百五十七萬二千人にのぼつた。

次はドイツ、――こゝでは、物價は一九二九年一月の一三九から、一九三一年一月には一一五に低落した。生産指數は、七月の數字を比較すると、一九二九年の一〇五から、三一年の七四に落ちてゐる。二年間に約三〇%の減少。

貿易の減少は次の通りである。

	輸入（百万マルク）	實物給付輸出
一九二九年の月平均	一・一二〇	一・〇五七
一九三〇年の月平均	八六六	九四四
一九三一年の九月	四四八	八一二

二年前に比較した減少率　　五五％　　二〇％

輸出の減り方が比較的少いのは、賠償金支拂のための強制輸出であるからに過ぎない。

ドイツの失業は一九三〇年二月の三百二十萬人から、一九三一年一月には五百三十萬人になつた。

最後に、フランスでは、一九三一年の物價指數は、二九年一月に比して約二三％低落した。フランスにおける生産の減少は、前に述べた理由によつて比較的僅かである。しかし、次の生産指數を見るならば、一九三一年にはフランスがすでに恐慌に襲はれたことは明瞭だ。

一九二九年七月	一三九
一九三〇年七月	一四一
一九三一年七月	一二三

同様のことは貿易を見てもわかる。即ち次の通りである。

	輸入（百万フラン）	輸出（百万フラン）
一九三〇年五月	四・〇九〇	三・六七五

一九三一年五月	三・五七五	二・四三八
同　九月	三・三四六	二・四三〇

フランスが恐慌に入り込むと、多數の外國勞働者は眞先きに退去した。それにも拘らず、一九三一年九月には、失業者は約百萬人に達し、短時間勞働者は三百五十萬人にのぼつた。日本については後に述べるが、以上を見ても、一九三一年に達した恐慌の深さを知るに足るだらう。

第十三講　金本位制の崩壊

一　國際金融恐慌の爆發

以上のやうな次第で、一九三一年には、一般的恐慌がぐん／＼深まつてきて、つひに國際金融恐慌の爆發に導いた。

この金融恐慌は、以前のやうに一般的恐慌の發展の初期に現はれないで、およそ一年半乃至二年を經てから大規模に勃發した。かうした特殊性は、主として二つの事情に基くものである。(一)資本主義が沒落期にあることの一つの現はれとして、第三期世界恐慌に先立つ世界的好景氣の時期がなかつたこと、および(二)獨占が非常に高度に發展してゐること、これである。即ち、

第一には、世界的規模における好景氣がなく、從つて好景氣局面に特有な、強烈な信用膨脹の局面が世界的規模において展開しなかつた。故に、取引所恐慌や物價の急落などが生じても、直

ぐに急性的な××崩壊を惹き起さなかつた。

第二、獨占が非常に高度に發展し、金融資本が非常に强大なものになつたゝめに、彼等に屬する大企業は比較的長く恐慌の衝撃に耐へることが出來た。彼等は、しばしば政府を出動させて、種々なる方法で自己救濟をやると同時に、破産狀態に陷つた諸企業はこれを併呑して行つた。かくて、恐慌の負擔は、中小企業及び勤勞者大衆に××され、また資本主義國から植民地、半植民地國に轉嫁された。

第三には、相對的安定化の時期における經濟的上昇が、長く强く一般的でなかつたゝめに、遊休資本(遊資)は吸收し盡されてゐなかつた。從つて、遊資は、恐慌期に入るといふと激增した。しかもその尨大な遊資は、强大な金融資本の手に集中されてゐた。そこで金融市場は、金融資本を中心とする部分と、中小銀行及び中小企業とによつて構成される部分とに分裂した。前者においては遊資が氾濫し、後者においては資金が甚しく涸渇した。かゝる分裂は、國際的にも、また一國内にも生じた。そこで獨占的金融資本は、自己の處分し得る豐富な遊資を動員して、瀕死

の大企業に輸血することも出來たし、買收や合併を——即ち謂ゆる「整理」を——押進めることも出來た。が、中小銀行や中小企業の方は、金融地獄に突落されて、恐慌の負擔を轉嫁されたのだ。

かういふ譯で、一般的恐慌が始まると共に信用の××もすでに始まつてはゐたのだが、しかしそれはすぐに信用恐慌の全面的な爆發とはならないで、暫くのあひだ潜在化されてゐたのであつた。從つて一九三〇年の秋までは、大企業の破産の波の發展は徐々たるもので、信用恐慌は主として地方的な中小銀行およびそれと結びついた中小企業の大量的破産といふ形態をとつてゐた。米國などはその最も著しい場合であつて、一九三〇年に一千三百四十五行の地方小銀行の破産が起つてゐる。これらの破産銀行の預金總額は八億六千五百萬弗にのぼつた。更に一九三一年の最初の八ヶ月には、——つまり急性信用恐慌の爆發前には——合計約七億の預金を有する九百三十二行が破産した。

だが、これらすべての阻止的要因の作用にも拘らず、××すべきものは爆發せずにはゐなかつ

た。一九三一年になると事態は一變した。信用恐慌の波は急激に高まつてきた。そしてその下半期には未曾有の鋭さをもつ金融恐慌が、全世界に××した。

マギアールは、この國際金融恐慌の發展の初期の有樣を次のやうに描いてゐる――

一九三一年の春及び夏にかけて、世界恐慌の發展に、數多の新しい重要なモメントが現はれた。中部及び南部ヨーロッパの數多の諸國――オーストリア、ドイツ、ハンガリー、ルーマニア、レットランド、ポーランド――においては、大量的な破産が起つた。この破産の波は最も強大な獨占企業、最も強大な銀行すらも捲き込んで行つた。かゝる強烈な破産は、先づ、スヰス、オランダ、イタリー、ベルギー、スペインに起つた。これらすべての集團的××の地盤の上に、一聯の諸國においては信用恐慌と貨幣恐慌とが發展した。それは、ドイツ、ハンガリー、オーストリアにおいて、最も尖鋭な形態をとつた。

この金融恐慌は、イギリスのやうな強大な帝國主義國においてさへも發展した。マクドナルドは、ポンドの救濟に乘り出さねばならなくなつた。

信用恐慌と貨幣恐慌は、同時に、中部および南部アメリカのすべての諸國にも荒れ狂つた。ブラジル、ペルー、ボリビヤにおいては、恐慌はすでに××破産にまで導いた。
それと共に濠洲は、もはや押し隱せない××破産の狀態にある。この聯邦の個々のものはすでに公然と破産を宣告した。

かうした集團的破産、並びに貨幣・信用恐慌の地盤の上に、一聯の諸國では、貸付資本の驚くべき騰貴、割引歩合の暴騰が現はれた。(ドイツ、オーストリヤ、ハンガリー、ユーゴー・スラヴィア、イギリス、デンマルク、インド)。この利子率の暴騰は、これらの諸國だけには限られず、次々の諸國に擴がつて行くだらう。――云々。

かういふ風にして起つてきた國際金融恐慌は、一九三一年の下半期には、次ぎの諸要素を含むものにまで發展した――

(一)信用恐慌。即ち私的諸企業の大量的な支拂不能。錯綜した支拂の諸連鎖――信用體系――の××。誰も彼も現金を欲し、一人も信用を與へようとする者はない。

(二)銀行恐慌。卽ち信用恐慌のヨリ高度な特殊形態。諸銀行に對する大量的××が起り、諸銀行を支拂××に突き落とす。

(三)貨幣恐慌。卽ち「現金制度の復活」への運動、しかも、貨幣はあつても退藏されてゐて流通に現はれない。ために生ずる貨幣の缺乏、貨幣の爭奪。現金に對する打步の發生。これは、信用恐慌・銀行恐慌と結びついて多かれ少なかれ起つたが、しかしまだ潛在的な形態をとつてゐた。

(四)貨幣本位恐慌。卽ち金本位停止によつて、貨幣はもはや、その一般的等價物たる機能を、國內的にも國際的にも「正常的」な仕方で果さなくなる。爲替相場の下落、通貨の價値減少が起る。

(五)××破產。卽ち私的信用の××および貨幣の價値減少と結びついて生ずる、國家そのもの、支拂不能。外國に對し、國內に對し、または双方に對する國家の支拂不能。

これらの諸要素から成る國際金融恐慌は、もちろん、個々の國々においては、多かれ少なかれ異なる形態をとつて現はれた。

が、この國際金融恐慌は、一般に、次の四つのものを契機として勃發したのであつた。

第一は、利潤の破局的殺減。恐慌が深まれば深まるほど、資本の有機的構成の高い大企業は、ます〳〵激しい生産制限によつて、商品の原價を比例以上に高めるといふ結果となつた。この事情は、その他の事情と相俟つて、利潤を破局的に殺減するに至つた。さうかといつて、生産制限を少くして、しかも高い獨占價格を維持しようとすれば、恐慌の眞最中に新たなる過剩生産を次次に惹き起し、賣れない商品の山はます〳〵大きくなり、恐慌はいよ〳〵長引いて、打撃と損失はます〳〵大きくなる。そこで資本家企業が破産を免かれんがための信用需要は激増し、それによつて信用は極度の緊張に導かれた。資本家企業は、欲する信用が得られなかつた。そこで破産が來た！　このことは、特に中央ヨーロッパにおける急性信用恐慌の××の一契機をなした。

第二の契機は、農業恐慌。これについては間もなく述べる。

第三の契機は、國家財政の深大な××である。これは、戰時および戰後に亘つて××主義の費用が恐ろしく増大し、ブルヂョア××は山のやうな負債を背負つたこと、そこへもつてきて第三期世界恐慌は異常に深く且つ長いこと、この二つの事情に基づいてゐる。恐慌の進展と共に、國

家收入は急速に減少し、巨大な「赤字」が年々增大した。國家は收入の減少に應じて歳出を減らさうとしても、××××××××といふ代價を拂はなければ、幾分でも減らすことが出來ないといふ始末である。

第四は、政治的對立の尖鋭化。卽ち××と××との切迫した狀勢そのものが、一つの契機をなしてゐる。

これらの契機がいかに作用し、いかなる役割を演じたかといふことはこれから述べるところによつて明かになるだらう。が、單に右のやうに數へ上げただけでも、これらのものが普通の恐慌期には存在しない異常な契機であることはわかるだらう。

で、今度の國際金融恐慌は、その爆發の時期から見ても、またその契機の點から見ても、全く異常なものである。かうした異常性は、更に、この恐慌の異常な強烈さを伴はずにはゐなかつた。

以下、この國際金融恐慌が、どうして金本位の崩壊に導いたかといふ問題を中心にして、吾々

の分析を進めて見よう。

二　金流出の急性化

　戰後は、各國の金保有の配分が著しく不均等になり、それが次第に甚だしくなつたことは前に述べた通りである。ところが第三期の恐慌に入つてからは、金の流出は急性化し、たゞさへ少かつた、多數國の金保有は、急速に涸渇した。金の流出が恐慌期において如何なる役割を演ずるかといふことは、諸君はすでに知つてゐる。

　急性的な金流出は、先づ、農業恐慌に襲はれた植民地・半植民地諸國から起つた。この點においても、農業恐慌は、今度の金融恐慌の一契機をなすばかりでなく、その出立點の一つをなしたと言へる。

　これについて、ヴァルガは書いてゐる——

「農業恐慌は、經濟恐慌に結びついて、未曾有の尖鋭化をやつてゐた。農産物および工業原料品

の價格の暴騰は、これらのものを生産する諸國が、世界市場でそれを賣つて受取る賣上金を、およそ半分乃至はそれ以下に減らしてしまつた。

たゞ一例だけを上げておかう。濠洲の輸出の總價格は一九二八―二九年には一億四千百萬磅だつたのが、一九三〇―三一年には、名目上で、八千九百萬磅に落ちた。名目上でといふわけは、その間に濠洲の磅は二〇%も減價したからであつて、それを考慮に入れゝば、輸出の實際の價格は二年間に半分以上に減つたことになる。多くの植民地的諸國、即ちアルゼンチン、ブラジル、チリー、等々も、これと似たりよつたりの有樣である』。

ところで、これらの國は、國際的に大變な債務を負つてゐる。例へば、濠洲は、たゞ外國債の利拂のためだけでも、年々三千六百萬磅を要するのだ。だから、民間債務を入れないで、たゞそれだけを取つても、最近年度の總輸出賣上金の半分に當るといふ始末である。これらの諸國は、さうでなくてさへ繼續的な支拂超過國で、新しい借款を起したり、その他いろんな形態の資本輸入をやつて、やつと國際勘定の辻褄を合せてゐた。ところが、今度は、その支拂超過が、恐慌に

よつて飛躍的に增大したのである。そこで、資本輸入の必要は死活的な必要となつて來たのだが、丁度さうなつた時に、資本の輸入は不可能になつてきた。それは、これらの國々の決定的な生產部門である農業が深刻な恐慌に襲はれたゝめに、國家も、地方自治體も、鐵道のやうな企業も、その他資本家的諸企業一般も、すべてその信用能力の激減を來たしたからである。資本主義社會では、かうした場合にはいつもさうなるのであつて、吾々はそれを矛盾の尖銳化と稱するのだ。

そこで、どうなつたか？　急性的な金流出だ。

一九二九年一月一日から、三一年一月一日までの二ケ年間に、これらの債務國から債權國の手に移つた金は、約三十億マルクに達した。これは世界の金保有總高——公に報告されてゐる——の一〇%に當るのだ。かうした金流出は、一九三一年に至つて更に激化した。

こんな風だから、債務國の爲替相場は、一齊に下落した。一九三一年一月十五日の爲替相場は、一九二九年末に比べると、次のやうに下落した。濠洲は一四・五%、アルゼンチンは二五・七%、

ブラジルは一八・一%、ペルーは二五・七%、ウルグァイは二九・五%、支那は三九・七%、香港は四二・九%、ヴェネズエラは六・六%、ニュージーランドは六・一%。——これは、言ふまでもなく、金を送つても送つても送り切れなかつたからである。

	一九二九年一月一日		一九三〇年一月一日		一九三一年一月一日	
債權國	一、二七七百万磅	六五%	一、三九一百万磅	六九・五%	一、五六四百万磅	七四・五%
債務國	六八〇	三五	六一〇	三〇・五	五三一	二五・五

(備考) (一)マクミラン報告による。(二)債權國は、イギリス、合衆國、フランス、ベルギー、オランダ、スヰス及びスウェーデン、債務國は、それ以外のすべての國——但しソヴィエット同盟とスペインとを除いて。

ところで、諸君が記憶してゐるであらうやうに、これらの國は、たゞさへ金保有が缺乏してをつたのだ。しかるに、例へば濠洲は、一九三一年一月にたつた七千五百萬弗しか持つてゐなかつたのに、一年間にその三二%に當る二千四百萬弗の金を喪失し、年末には五千百萬弗しかなくなつた。これでは國家破産の状態に陷るのは當然だ。ブラジルと、チリーと、ウルグァイは、公然

と、對外支拂の停止を宣言した。即ち、對外國家破産に陷つた。

だが諸君、これらの國が國家破産に陷つたからといつて、それはこれらの國の勤勞者大衆がなまけたからでもなければ、これらの國に商品が缺乏したからでもない。それどころか、勤勞者大衆は眞黑になつて働いてゐる、また働きたがつてゐる。商品も山のやうに生産されてゐる。たゞ、それらのものが、資本主義的に「過剩」であつたのだ。それで、價格の暴落が起つたのだ。だから、その價格を少しでも引上げようとして、ブラジルでは、四百萬袋のおいしいコーヒーをむざ／＼と燒いた。それでもまだ「過剩」だといふので、コーヒーを肥料に用ひたりした。アメリカでは、棉花を生産するすべての國が棉花栽培をやめてはどうかなどゝ言ひ出した。イギリスの政府とセイロンの政府は、ゴムを生産するすべての國に向つて、各國の輸出するゴムの半分を廢棄しようではないかと提議した。マギアールが次のやうに言つたのは正當ではないか、――「マルチ・ア諸××は、ます／＼貯藏品廢棄の役割を引受け、諸國の生産力の公然たる××者として現はれる。

だから、事態の核心はかうである。資本主義の矛盾の世界的な×××、——そのためにこそこれらの國の商品が貨幣に轉形され得ないといふこと、——それが、激烈な金流出を惹き起し、××破産を惹き起したのだ。

三　資本の逃亡

植民地諸國においては、激烈な金流出や、爲替下落や、××破産への過程と並んで、諸企業の收益は悲慘な激減をやり、それが更に株や社債の暴落となり、信用の××を結果した。

だが、かうしたことは、彼等の債權者たる資本主義國に向つても反作用せずにはゐなかつた。一方に起る破産は、他方に飛火する。彼等に信用を與へてゐた債權國の信用體制も××に立つ。が、それとは別にも、——資本主義國自體においてすでに、利潤の破局的な殺滅のために信用××が成熟した。それは前にも一言した。

なるほど、これら債權諸國は、全體としては、債務國の犠牲において巨額の金保有を獲得し

た。だが、彼等のすべてが一様に金保有を増したのではない。いや、増したのではないどころではない、彼等の多くの者の金保有は却つて激減した。つまり、彼等の間にも、急性的な金流出が起つたのだ。

ところで、これらの主要資本主義國における金保有の配分は、さうでなくてさへ非常に不均等であつたのだ。一九三〇年末の金配分の狀態は、諸君のすでに知られる通りであつて、人口僅か四千萬のフランスが、經濟的發展の遙かに高度なイギリスの殆ど三倍の金貯藏を持ち、また人口も生産高も遙かに大きいドイツの金保有高の殆ど四倍も持つてゐた。それは更に、日本の四倍餘、イタリーの七倍近くに當るものだつた。米國の金保有は、四年前に比べると、絕對量は前よりも増したが、相對量は減つてゐた。從つて、それは、資本主義的世界經濟において米國經濟の占める比重にほゞ相應したもので、もしそれより餘り減るならば、米國にとつても危險だといふ狀態になつてゐた。

『かういふ不釣合な金配分は、資本主義にとつて、經濟的方面のみならず政治的方面でも特殊の

困難を惹き起してゐる。なぜなら、金は、最も重要な戰爭準備金屬の一つだから！』(ヴァルガ)。

しかるに、この不均衡な金配分は、一九三一年になると俄然急歩調で激成されてきた。

「合衆國とフランスへの金流入は、恐慌年度一九三〇年中ずつと繼續し、一九三一年の最初の數ヶ月においても、發券銀行の總裁達や、イギリス及びフランスの國庫の代表者達がひつきりなしに會議をやつたにも拘らず止らなかつた。……今年(一九三一年)の最初の十一週間に、フランス銀行は更に二十三億フラン(八千四百萬弗)の金を蓄め込んだ』(ヴァルガ)。

が、そんなことでは濟まなかつた。フランスへの金流入は五月からまた猛烈になつて、フランスの金保有高は毎月飛躍的に増大した。そして英國が金本位停止をやつた九月以降の四ヶ月間には、實に四億弗も増加して、一ヶ年を通算すると約六億弗の増加となつた。その結果、一九三一年末のフランスは、約二十七億弗の金保有を持つた。ところが、それに對して、アメリカ、イギリス、日本、ドイツの金保有高は、いづれもこつぴどく減つたから、金配分の不均衡はお話しにならぬものになつてゐる。(これに關する詳しい數字は「東洋經濟新報」一四八九號二〇頁の表を見給へ。)

が、こゝで一層重要なことは、一九三一年においては、フランスを除く主要資本主義國は、交る〲に激烈な金流出に襲はれたといふことだ。

眞先きに襲はれたのはドイツであつた。ドイツは六月と七月に二億四千四百萬弗の金を喪失した。

お次ぎはイギリスの番だつた。イギリスは、金流出が始まると、アメリカとフランスから莫大の信用を得て埋め合せたにも拘らず、七月から十一月までの五ヶ月間に一億六百萬弗の金を喪失した。

第三の順番はアメリカで、九月から十月に起つた金流出は、アメリカの金を一擧に七億二千七百萬弗も減らしてしまつた。

どん尻に控へたのは日本であつた。これは十月と十一月の二ヶ月間に一億四千萬弗の金をフイにした。

吾々は、前に、資本主義の古典的な段階における恐慌がいかにして世界恐慌にまで發展する

か、——一國に爆發した金融恐慌がいかにして國際金融恐慌にまで發展するかを明かにしておいた。（第九講第八節）。さうした際に、各國を順番に襲ふ急性的な金流出といふやつがどんな役割を演じたかを、諸君は記憶してゐられるだらう。

吾々は、古典的な世界恐慌を說明した際には、それに先立つて世界的な好景氣があり、それに基づいてすべての國が輸入超過になつてゐる、といふことを前提した。今度のやうな沒落期の世界恐慌の場合には、さういふことはない。過剩生產はあつても、それは全面的な好景氣の結果ではなかつた。從つてまた甚しい輸入超過——支拂超過はあつても、それは特定な國々における特殊の原因——農業恐慌だの、生產力減退だの、救濟インフレーションだの——によるものだつた。が、それにも拘らず、一般的な世界恐慌の發展がおよそ二年もつゞいてから、一九三一年に、主要資本主義國を交る〴〵襲つた金流出は、マルクスの規定した役割と本質上同一の役割を演じたのだ。即ち、それは「危急の時機」における金流出として、「秤の平衡を覆す極微量の分銅」の役目を演じたのだ。

今度の急性的金流出は、一國に起つた金融恐慌を、次々に他國に波及させて全面的に熾烈化するといふ作用を營んだ點はおなじであるが、しかし、右に述べたやうな特殊の事情があるがために、この急性的金流出は特殊の原因によつて生じてゐるし、また流出する金も特殊の資格において流出した。

各國が順番に急性的金流出に見舞はれたのは、各國が交る〴〵貿易差額の決濟を迫られたからではなく、各國から次々に資本が逃げ出したからである。だから、流出した金は、國際的支拂手段の資格においてではなく、逃亡する資本の資格において流出した！

今度の恐慌に際しては、貨幣資本の恐ろしい過剰が生じた。その原因は——

一、甚しい生産制限のため、また商取引および有價證券取引の甚しい萎縮のために、巨額の貨幣資本が生産および流通の領域から解放された。

二、しかるに、國內市場においては、有價證券の新たなる發行が極度に減少した。

三、ところがまた、資本主義諸國から植民地・半植民地への資本輸出も駄目になつた。

四、そこへもつてきて、國内的にも國際的にも、金融市場の分裂が起つて、たゞさへ途方もなく過剰な貨幣資本は、極く少數の大銀行の手に集中され、ます／＼過剰性を發揮した。

かうなれば、過剰貨幣資本の氾濫だ。危險な方の金融市場では、資金饑饉に襲はれて利子率は目の玉の飛び出るほど高くなつたのに、比較的安全と思はれる金融市場の方では、使ひ途のない資金の洪水が起つて利子率はべら棒に低下した。これは、すでに、深刻な信用恐慌が潛在的に發展しつゝあつたことの現はれだ。

かうした過剰資金は、何時でも逃げ出せるやうに身支度をした短期の資金として、國際金融市場に溢れ出た。一九三〇年から三一年にかけてます／＼尨大な量にのぼつた「國際短期資金」は、逃げ廻る資本の大量として世界市場に登場したのであつた。

この資本逃亡は、恐慌期の貨幣退藏運動の一つの現はれだ。現代の資本家達は、潛在的な信用恐慌が發展してくると、出來るだけ多く現金を持つてそれを安全なところに保存しようとする

が、しかしそれを天井裏にかくしたり土を掘つて埋めたりなんかしないで、比較的安全さうな大銀行へ預けたり、また比較的安全さうな國へ送つておいたりする。

さういふわけで、國際市場に現はれてくる逃亡資本は、おそろしく神經過敏になつたやつではあるが、しかし根が資本だから利得のことは忘れない。だから、少しでも利子の高さうなところを狙つて逃げてゆく。また、ついでに爲替投機をやる機會などがあれば決して見逃さぬ。だが、逃げ廻る資本としての彼等は、何等かの危險信號を認めるや否や、ラッシュをやる。ドイツからイギリスへ、イギリスからアメリカへ、アメリカからフランスへ、等。

ところが、一九三一年の狀態では、すべての資本主義國が危險信號を揭げずにはゐられなかつたのだ。どこでも、潛在的な信用××が表面化しさうになつてゐた。どこでも、××財政の危機が熟してゐた。多くの國の金準備は非常に減つてゐた。二三の國では國內の×××××がとがり切つてゐた。そしてどこへ行つても、戰爭危機の雰圍氣が充ち〳〵てゐた。

ところが、これらのことに關する何等か危險信號にびつくりして、資本がバタ〳〵と逃げ出す

といふことそれ自體、それがまた大きな危險信號の役をする。なぜといつて、あはてふためいた資本の大量的逃亡こそは、急性的金流出を惹き起す！

が、かゝる金流出は、危險の信號から忽ち危險そのものに轉化する。それは秤の平衡をひつくり返すから。

こゝで、吾々は、マルクスの言葉を思ひ出す。――彼は、金流出は單なる資本問題ではなくて「貨幣問題」だと言つた。この警句は、一九三一年の恐慌のために吐かれたかと思ふくらゐ剴切だ。だが、一九三一年の金流出は「貨幣問題」であると同時にまた、「ブルヂョア的富の保存の問題」であつたと言へるだらう。

更に、一九三一年の金流出は、主要資本主義國に次々に起つて信用恐慌を擴大深化させただけではない。それはまた、國家財政の破綻と、國際支拂超過の激增と、金準備の涸渇とを持つ資本主義國に、次々に貨幣本位恐慌を惹き起さずにはゐなかつたのだ。

が、それに際して、いかにも一九三一年らしいことが起つたといふのは、逃亡資本までが政治的

な役割を演じたことである。國際短期資金は、軍艦や大砲と同じやうに、帝國主義的抗爭の武器に轉化した。この武器を最も有效に使用したのはフランスであつた。金爭奪の一時的勝利者として豐富な金準備を持つてゐたフランスは、また、フランス銀行の手に集中された莫大な短期資金を持ち、それをもつて、――あちこちと逃げ廻る國際短期資金の大軍をリードしつゝ――「危急な時機」に見舞はれた對手國に政治的壓迫を加へる道具とした。

四　最弱の環

吾々は、主要資本主義諸國が急性的金流出に襲はれた順序に從つて考察を進めて見よう。

一つの連鎖が强力的に斷ち切られる時は、その最も弱い環から破れるものである。沒落期の世界資本主義は、もはや統一的な包括的な體制ではないが、しかしやはり沒落期相應な一種の體制をなし、一つの連鎖をなしてゐる。この連鎖における最弱の環の一つとしては、ドイツがあり、オーストリーがある。

一九三一年のドイツには、××××の豫備條件がはつきりと××した。

オーストリーは、恐慌の打撃を最も深刻に受けてゐた。

このオーストリーにおいては、――諸君はちよつと意外に思ふかも知れないが、――金融資本の集中は最高の段階に達してゐた。そこでは、たつた一つの銀行が、一國の全經濟生活に對する支配權を掌中に收めてゐた。その一つの銀行といふのは「オーストリー信用銀行」で、オーストリーの全産業の八〇%を支配した。が、この銀行はもはや、オーストリー・ブルヂョアジーの自由になる銀行ではなくて、イギリス、アメリカ、フランスの金融資本の道具に過ぎないものだつた。この銀行は、その管理部に椅子を占めてゐる英、米、佛の代表者の思ふやうになるのだし、またわけても英蘭銀行のコンツェルンに直屬した。

「オーストリー信用銀行」は、しかし、一九三一年にはもう全く生活能力を失つてゐた。なぜさうなつたかといふと、それはオーストリーの産業そのものが、舊王國の分解の結果、生活能力を失つたからであり、またオーストリーの産業ばかりではなく、この「信用銀行」の支配してゐる

從屬國の多數の企業までが、長く深い第三期恐慌のために全く危險な狀態に陷つたからである。

二年近くも續いた第三期世界恐慌は、資本主義戰線のこの最も弱い一環において、眞先きにブルヂョア的信用體制の××を衝いた。すさまじい銀行・信用××が××した。

一方、植民地的諸國においてはずつと前からすでに信用の××が起つてゐたことは前に述べた通りだが、これらの國と並んで他方では、中央ヨーロッパの諸國も、長期はもとより短期の資本までが、前々から非常な缺乏を告げてゐた。その結果、これらの國々における利子率は、資本輸出諸國の數倍に昇騰したにも拘らず、資本の流入は少しも起らなかつた（國際金融市場の分裂！）。資本が流入しないどころか、あべこべにドイツやオーストリーに稼ぎに來てゐた短期の資金までが、ずん／＼引上げられるといふ始末になつた。資本は逃亡した。そしてその逃亡は、信用恐慌に口火をつけた。

信用恐慌は、オーストリーから始まつた。何よりも、「オーストリー信用銀行」の崩壞は、あの世界資本主義の中心を襲つた金融恐慌の導火線となつたのだ。

生活能力を失ひ切つたこの銀行は、氷結した信用のおかげで、一億四千萬シルリングといふ缺損を暴露した。氣の毒なことには、この銀行の頭取は、世にも名高いロスチヤイルドであつたのだ。

「先祖代々積るロスチヤイルド家信頼の念を動搖されて、預金を引出した者は、誰よりも先づ國內の預金者であつた。……外國の金融資本は、この「信用銀行」とそれからオーストリー國立銀行とを救濟するために馳せつけた。「有名なヤング案で出來た「國際決濟銀行」は、オーストリー國立銀行に一億シルリングの割引信用を與へ、その條件として、國家の裏書ある「信用銀行」の債券はすべて引受けてやるやうに忠告した。このやうにして、危險は、オーストリー國家に、つまり勞役大衆に轉嫁された』（ヴァルガ）。

つまり、「信用銀行」がやつた「不良貸」から生ずる損失は國庫金で辨償させることにして、一億シルリングの貸付の安全をはかつたわけである。ブルヂョアジーは、どこでも同じやうなことをやる！

が、それだけでは足らなかつた。國家は更に、「信用銀行」の株を持つといふ形式で、一億シルリングの新資本を供給してやることにした。だが、この金をどうして出すか？　オーストリーの國家それ自身は無一文である。

で、結局、國家は一億五千萬シルリングの大藏證券みたやうなものを發行し、これをフランスの銀行で割引して貰はうといふことになつてきた。

けれども、高利貸帝國主義の傳統を持つフランスは、只ではうんと言はなかつた。彼は一つの條件を出した、――前に成立した「獨墺關稅同盟」を破棄し給へ、さうすれば貸して上げてもいゝ、と。

ところで、この「獨墺關稅同盟」とは何か？　これは一口に言へば中歐の戰敗國を一つの經濟單位に結合してフランスに對抗しようといふやつだ。フランスは前からこいつの出現に神經を苛立たせてゐた。それはあながち無理もない。といふのは――

「ヨーロッパ大陸に行はれるフランスの政策は、二つの傾向から成つてゐる。「一つは」支拂不能

な債務者を絞め殺すつもりでゐる高利貸の盲目的狂熱・（もう一つは）破産した金融帝國主義の代りに、――ザール及びルール地方並びに上シレジアの石炭盆地の助けを借りて――工業帝國主義の前提條件をつくり出さうとする掠奪的重工業の貪慾。

が、第二の傾向は、イギリスに向けられてゐる。イギリスの政策は、ドイツの石炭とフランスの鑛石とを分離せしめることにある。しかも、此の二つのものを結びつけることこそは、ヨーロッパの再建のための、最も重要な條件の一つをなすものである」（第三回大會決議）。

が、さうかといつて、オーストリーの方で、フランスの言ひなり次第になるわけには尚更ら行きかねた。「獨墺關稅同盟」の成否こそは、ドイツ及びオーストリーにとつての死活的な問題であり、從つて「信用銀行」そのものにとつても生死の問題であつたのだ。だから、――アインチッヒに言はせると、――フランスは「粥一食のために生存權を賣る」ことをオーストリーに要求したわけだつたのだ。

さうやつて、すつたもんだやつてゐるうちに、オーストリーからの金流出が始まつた！

今度は、あまり懐の温かくもない英蘭銀行が乗り出してきた。そして、五百萬磅だけ融通した。オーストリーは、これでやッと一息つくことが出來た。

だが、この融通にも、大變な條件がつけられた、オーストリー國家は、「信用銀行」の預金總額約十億シルリングに對して保證を與へなければならなかつたのだ。

「オーストリーのブルヂョアジーと議會は、殆どすべての危險を國家に轉嫁するこの要求を異口同音に承認した。××主義の枠の內ではその外に血路は一つもなかつたのだ。といふのは、オーストリー國立銀行の財產狀態は極度まで逼迫した。五月七日から六月十五日にかけて、國立銀行の貸付手形總額は、七千萬シルリングから四億八千八百萬シルリングに激增した。こんな風であつたから、外國の援助がなければ必然的に本位貨の破局が起るところだつたのだ」（ヴァルガー）

五　ドイツの危機

オーストリーに對する支配權の問題をめぐるフランスとイギリスの鬪爭では、どうやらイギリ

スの方が勝味であつた。フランスは、オーストリーでは失敗したけれども、しかしやはり關稅同盟を廢棄させようといふ野心を捨てはしなかつた。フランスは、「逃亡資本の武器」を今度はドイツに向けた。

ところで、ドイツの狀勢はどんなだつたかといふと、――

先づ第一には、ドイツの喉首をぐい／＼締めつけてゐる借金があつた。その對外債務は、その頃までに百七十億マルクに達してゐた。ドイツは、初めはアメリカなどから長期の信用を得たが、だん／＼それが出來なくなつて、短期の債務が殖えてきた。オーストリーに信用恐慌が××した時分には、ドイツの諸銀行だけでも約八十億マルクの外國短期資金を引入れてゐた。かうした短期資金は、いつ引上げられるかわからないのだから、一度信賴の動搖が起つてくると、ドイツ資本主義の特別の弱點となることは明かだつた。

ドイツは、その莫大の短期債務を、次から次と借替へることによつてどうにか破綻を免かれて來たのだが、遂にはその借替へも全く不可能化してきた。それは、一方では、貸す方のイギリス

やアメリカの狀態が非常に惡化したからであり、他方ではまたドイツそれ自體の狀態が極度に惡化したからである。

前にも言つたやうに、經濟恐慌は最大の打擊をドイツに與へてゐた。ドイツにおける工業生產の減退は、どの資本主義國よりもひどかつた。失業も古今未曾有の程度に達した。ドイツ政府は、矢繼早に「緊急勅令」を出さねばならなかつた。それはいづれも勤勞者大衆の非常な負擔となるものであつたが、それでも國家財政に均衡を與へることは出來なかつたのだ。一口に言へば、ドイツには、××××の前提條件が××しつゝあつたのだ。（これは少しあとの話だが、共產黨とヒットラー黨の進出がめざましかつた九月の選擧後に、新たなる資本逃亡が起つたのも、××××が主たる動機であつた）。

こんな風だから、借金の借替へが出來なくなつたのも當然だ。それはつまり、ドイツに稼ぎに來てゐた大量の短期資金が逃げ腰になり、浮足になつてきたのである。

さういふところへ持つてきて、フランスは、例の「逃亡資本の武器」をドイツに向けたのだ。

フランスは、ドイツから急速に短期資金を引上げた。それで、フランス系でない短期資金までびつくりしてドイツを飛出したことは言ふ迄もない。そこで、どうなつたか？

ライヒス銀行の外國爲替保有高及び金保有高は、五月三十日の二十五億七千六百萬マルクから、六月二十三日には十五億一千四百萬マルクに減つた。素晴しい金流出だ！　おかげで、流通兌換券に對する金準備は、かつがつ四〇％といふ法定限度にまで落込んだ、ライヒス銀行は割引歩合を一擧に五％から七％に引上げたが、そんなことは糞の役にも立たなかつた。そこで、ライヒス銀行は、六月二十日に遂に、信用制限を斷行しなければならなくなつた。それがどんな危急の狀態を意味したかは、ライヒス銀行が政府に與へたといふ警告の内容を見ればわかるだらう。それは、官吏の俸給の支拂ひに必要な金額を政府に前拂ひすることが出來さうもない、といふのであつた。つまり、七月一日には、官吏俸給の支拂ひのための金、勞働者のための金、失業者手當のための金は、一文もなくなるといふ危險が迫つてゐたのである。

六　フランスの役割

フランスは、ドイツがさうなることをよく知つてゐた。

フランスは、いざとなれば、賠償金を棒に振る覺悟であつた。それは、彼が政治的目的を達するために拂はねばならぬ代價であつた。フランスの宿望は、ヨーロッパを打つて一丸とする聯盟國をつくつて、その首班となることにある。一九二七年以來、フランスの政策に轉換が起つたことを、アインチヒは次のやうに書いてゐる――

戰後二三年のあひだは、ドイツから取立てる賠償金の、金融上の重要性は、政治上の重要性よりもまさつてゐた。しかし、その後フランスがとにかく豫算の均衡を回復することに成功し、そして法貨の平價切下げによつて公債の五分の四を「整理」した後は、收入財源としての賠償金の相對的重要性は減少した。從つて、それの金融上の重要性は、政治上の重要性のために影を薄くされるやうになつてきた。

一九二七年頃までは、ドイツの支拂能力を維持するといふことが、フランスにとつて金融の見地から非常な重要性を持つてゐたが、一九二七年後においては、フランスは、政治上の目的に叶ふならばドイツを支拂不能に陷しいれても大して痛痒を感じないでゐられるやうになつた。もちろん、さうなればフランスの實質的收入を減らすことにはなるが、しかし同時に、英米その他に對するフランス自身の戰債の支拂を停止すれば、その純損失は著しく減殺されるであらう。されば、賠償問題に讓歩して或る程度までドイツを回復させようとすることは、フランスにとつてはもはや根本的重要問題ではなくなつた。

が、さうかといつて、フランスは賠償支拂から生ずる財政上の利益を進んで抛棄するつもりのなかつたことは言ふまでもない。つまり、フランスは、お菓子を喰べても喰べても喰べ切れないやうな解決策をとらうとしたのである。

フランスは、自國に害を及ぼさない程度においてドイツを財政的に弱めると同時に、今後の賠償支拂を不可能ならしめないやうな狀態にドイツをおいて、そしてドイツをしてフランスの援助

に頼らしめようとしたのであつた。それと同時にまた、フランスの政策は、ドイツを助けることの出來た國々、わけても英國の、金融支配力を弱めることを狙つてゐた。——云々。

フランスがそんな風であるから、ドイツをその窮地から救び出さねばならないと誰よりも先きに感じたのは、イギリスのブルヂョアジーであつた。イギリスは莫大な金をドイツに貸してゐる。そしてそれが焦げついてゐる。ドイツの××化は恐ろしい。それに第一、フランスの覇權を強めることはイギリスにとつて耐えがたいことである。

だが、イギリスが救濟に乘り出すといつても、もはや單獨でそれをやる力はなかつた。そこで英國は、先づ、アメリカ・ブルヂョアジーに相談を持ちかけた。

ロンドンにゐた米國大使メロンは、ドイツに投下されてゐるアメリカ資本（六十億乃至百億マルク）が危險に脅かされてゐることをフーヴァーに指摘し、更にそれよりも大きな危險——フランスの暴力政策のために資本主義社會の存續が脅かされる危險を指摘して、ドイツ・ブルヂョアジーの救濟の必要を力說した。

かくて、六月三十日、あの有名なフーヴァー・モラトリアム案は成立した。これによれば、アメリカは、民間私的債務は別として、國家的債務の利子支拂をドイツのために一年間猶豫する、そして英國、佛國、その他の債權國も同樣の猶豫を與へれば、それらの國のアメリカに對する戰債の利拂をも猶豫する、といふのであつた。——當時、この案が成立したのを聞いて、景氣回復の福音でもあるかのやうに躍り上つた連中が日本にもなか／＼澤山あつたのは、いつもながらたわいもないことだつた。

フランスは、か〻る「人道的」な、餘りに「人道的」な提案に對して、眞正面から反對するわけには行き兼ねた。だが、彼は交渉が揉めてゐる間も、相變らずドイツから金を引出すことを止めはしなかつた。

そこで、ドイツでは——

ダナート銀行が潰れた。北部羊毛コンツェルンがつぶれた。このコンツェルンは英蘭銀行と密接な關係のあるものだつた。ドイツの公定割引率は一躍一〇%に引上げられ、商品擔保貸付利率は

一五%に引上げられた。多くの地方自治體は支拂不能に陷つた。勞働者は大量的に解雇された。輸入は全く杜絶した。

今やドイツは、信用恐慌を喰ひ止めるのには、少くとも二十億マルクの外國信用を必要とした。これを得るか、乃至は再び破滅的なインフレーションを起して名實共に破産してしまふか、だ。

ライヒス銀行總裁ルーターは、飛行機でロンドンへ飛んで行つた。しかし信用を得ることは出來なかつた。けだし、英國の足下にも火がまはつたから。――

ドイツ救濟の相談をするロンドン會議は結局失敗に終つた。政治問題を持ち込まうとするフランスと、經濟的救濟のみを欲するドイツとの間がうまく行く筈はない。が、それよりも何よりも、肝腎のロンドンの腰がすつかり拔けてしまつたのだ。四大資本主義國の代表者達が恐慌喰止めの會議をしてゐる眞最中に、イギリス自體から金がどん／＼流出したからである。

脚下から崩れたロンドン會議は、スチムソンの提唱に從つて次のやうな骨拔きの決議をした。

——(一)ドイツは新らしい信用を受けないこと、(二)ドイツに短期信用を與へてゐる國は、短期資金を引上げないこと(謂ゆる「中止協定」)、(三)「國際決濟銀行」の派遣する銀行家委員會は、ドイツの信用需要を調査し、短期債務を長期債務に借替へる案を考究(!)すること。たゞそれだけのものだつた。

金融恐慌の火の手はすでにイギリスへ移つてゐた。

フランスは、事々に自分の大陸政策の邪魔をするイギリスの腰を挫くために、ロンドンへも秘かに金融遠征を試みたのであつた。おかげで、ロンドン會議中に盛んに金が流出した。七月二十五日までの二週間に、イギリスから流れ出した金は、約三千萬磅(三億圓)にのぼつたのだ。

が、もちろん、この金流出は、フランスの政策のみによるものではない。五六月頃からヨーロッパに爆發した金融恐慌は、多くの國をして、ロンドンに置いた資金の引上げを餘儀なくさせた。フランスの政策は、この客觀的狀勢がなければ無效であつたであらう。火事がなければ火事場泥棒はない。金融恐慌がなければフランスも仕事が出來なかつただらう。フランスの演じた役割は、

帝國主義的對立の前は「尖端を行く」ことによつて、諸國の金流出の激化と金融恐慌の擴大深化とに拍車をかけたものである。

七　イギリスの危機

英國ブルヂ・アジーは、萬策をつくして金本位維持に努力した。

彼等は、國際金融市場の中心に立ち、「世界の銀行」の地位を占めてゐた。そして、英國の國民的所得總額三十五六億磅のおよそ五割五分を獲得する彼等は、その三分の一以上を利子所得として手に入れてゐる。彼等が、國際金融市場の覇權を保持し得るか否かは、彼等が金本位を維持し得るか否かにかゝつてゐた。

しかし、彼等の努力は徒勞であつた。

彼等は公定割引歩合を一擧に二・五％から三・五％に引上げた。しかし、いつもと違つて、金流出は止まうともしなかつた。急激な金流出のおかげで、兌換券に對する金準備の率は日一日と低

下した。彼等は、兌換券の保證準備發行の限度を擴張することを餘儀なくされた。それは、切迫した狀勢と金準備の危機との存在を公言したやうなものだつた。資本は慄へ上つて逃げ出した。

誰でも考へることは、あんなに尨大な海外投資を持つ英國が、應急的にそれを動員して危機を乘切ることが出來なかつたか、といふことだらう。しかし、それが出來なかつたのだ。

なるほど、イギリスの海外投資は三十五億乃至四十億磅といはれるが、しかしその大部分は個々の資本家の私的投資である。金融恐慌の眞只中に、彼等の所有する外國公債や社債などを大量的に賣出したりすれば、價格は忽ち暴落する。ブルヂョア政府は、國民的金準備を保持するために、さういふ投資を私的資本家に強制し得る力などはない。こゝでも、生產の社會的性質と、所有の私的性質とは見事に衝突した。その上に、政府の處分し得る有價證券を賣拂ふことすらも不可能だつた。もし賣拂へば、多大の損失を生ずるだけではない。その大部分は、安い價格で米國ブルヂョアジーの手に移り、それと共に多數の債務國に對する英國の支配權は永久に米國の手に歸したであらう。こゝでも、帝國主義的對立が、生產の社會性と衝突した。

更にまた、英國の海外投資のかなりの部分は、恐慌によつてすでに絶望的に氷結してゐた。ドイツその他の中歐諸國において、スカンヂナヴィアにおいて、また濠洲において。——

そこで、萬策盡きた英國は、自己の二大競爭者たる米佛の前に平身低頭して、五千萬磅の借入れをしなければならなくなつた。五千萬磅のクレヂットは成立した。

ところで、フランスは、自ら金引出しの張本人でありながら、何故このクレヂットを與へたか? アインチヒによると「フランス政府は、ロンドンはすでに十分に弱められ、それ以上弱められゝばフランスの磅投資までが危險に瀕する點にまで達してゐることを知つた」からである。だが、もう一つの理由は、フランスの政治的動機であつた。英國が金本位停止を強ひられたのは、すべてフランスの所爲だつたといはれることは、大陸政策上、フランスを非常に不利な地位に陷しいれたであらう。英國の金本位停止は、多數の歐洲諸國に大きな打擊を與へるから。

だが、このクレヂットも、金流出を阻止することは出來なかつた。英國は第二の借入れの必要に迫られた。そしてそのクレヂットを成立させる爲には、マクドナルドの露骨な裏切りや腐つた

勞働黨内閣の崩壞とを必要とし、恥知らずの「擧國一致内閣」による財政の立直しを必要とした。

英國の一九三一―三二年度の豫算は、一億二千萬磅の赤字を出した。メイ委員會は、この赤字は、主として社會施設の節約によつて――卽ち主として失業者大衆の犧牲において――埋めるがよいと申し出た。英國ブルヂョアジーは、異口同音に、財政難は全く社會施設費の膨脹によると宣傳した。しかしそれは嘘である。一九三一―三二年度の豫算を、戰前の一九一三年度に比較すると、全體としては二一%餘の膨脹になつてゐるのに、社會施設費に原因する増加は、わづか一六%に過ぎなかつたのだ。しかるに、××から生じた國債元利・戰爭年金等々の××主義的負擔の増加は、六〇%にのぼつてゐた！　イギリスの財政難は、他の殆どすべての帝國主義諸國と同樣に、帝國主義的負擔の激増と、恐慌による收入の激減とから生じてゐる。

英國ブルヂョアジーは、八月二十四日に新内閣が成立すると間もなく、更に米佛から八千萬磅を借入れることが出來た。英國政府は絶對に發表を拒否したけれども、このクレヂットは、恐らしく「屈辱的」な條件をもつて得られたのだ。

フランスは、幾つかの拾ひ物をした。アインチヒは書いてゐる。

『米佛二國のクレヂット成立が報道されるといふと、何人ももはやロンドンには他に金融的援助を與へる能力がなくなつたこと、またニューヨークが諸國に與へる援助と雖もフランスと協力しなければならなくなつたことを信ずるやうになつた。（反佛主義の英蘭銀行總裁モンターギュ・ノールマンは却けられた）。英蘭銀行は、フランスの利益に反する如何なる行動もとらないといふ道德上の義務を負ふことになつた。』

ロンドンが、ハンガリー國庫債券の發行に參加することを拒絶したことは、このフランスの勝利を決定的に示すものだつた。この拒絶の結果、ハンガリー政府は、同國の金融破局を救ふために援助を與へ得る唯一の國として、フランスの爲すがまゝにならねばならなかつた。ハンガリー政府は、フランスの政治的條件を承諾しなければならなかつた。この降伏に次いで間もなく、ドイツ及びオーストリーが關稅同盟について降伏した。

むろん、フランスの拾つたものは、イギリスの失つたものであつた。が、それにも增して特徵

的であつたのは、イギリスが受けた一億三千萬磅（十三億圓）のクレヂットにも拘らず、金流出の危險は去らなかつたことである、イギリスは、クレヂットの設定によつて一時は、金で支拂ふところを爲替で支拂つて、金流出の勢を潜在化すことは出來た。しかし、その間に資本の逃亡が止んだわけではない。止むどころか、ます／＼大量的な逃亡が進行した。さればこそ巨額のクレヂットも瞬くうちに使ひつくされたのだ。

九月の半から再び激烈な金流出が始まつた。

一方では國際金融恐慌の×××な深刻化、他方では英國それ自體の刻々の惡化とその暴露、――この動かしがたい事實は、最大帝國主義國の一切のブルヂョア的努力をうち負かして、ひたすらに資本逃亡と爲替投機とを募らせた。

ロンドンは、一九三一年三月に約二億五千四百萬磅の短期債務を持つてゐた。しかるに、英蘭銀行の金保有高は平均一億五千萬磅に過ぎなかつた。だから、外國短期資金が大量的に引揚げられ、資本が大量的に逃げ出せば、英國の金本位はどうしても危機に陷るやうな状態にあつたのだ。

そこへ持つてきて、英國の對外收支全體の惡化による正銘の支拂超過があり、國家財政の大きな赤字があり、フランスとの對立があり、助け舟を出す米國の惡化があつて、しかも英國政府はそれらすべての打擊を自ら承認して米佛の前に頭を下げ、「擧國一致內閣」まで飛び出さすやうな大騷ぎをしたのだから、堪らない。

金融恐慌の容赦なき惡化と共に、文字通り金が欲しさに英國から短期資金を引揚げる國が殖えただけではない。フランスが政策的に引揚げたゞけではない。英國の不可避的な金輸出禁止と磅の下落を見越した逃亡資本の大群が現はれてきた。それは、一つには金輸出禁止で磅が下落してから金を持ち出せば大變な損になるからだし、一つには磅資金を素早く弗や法に換へておけば大變な投機利得になるからだ。むろんこの種の逃亡資本の中には、英國自體の資本も大量的に加はつてゐた。英國政府のコムミュニケが『引揚資本の大部分は疑ひもなく外國勘定のものである』と言つたり、裏切者のスノーデンが『あの國難の際に自ら資本を國外へ持出すやうな非愛國的な人間は英國には一人もゐなかつた』と恥しげもなく聲明したりしたのは、みんな嘘つぱちである

どう計算して見たところで、もし英國資本が入つてゐなかつたとすれば、英國からの逃亡資本は餘りに巨額すぎて、どうにも算盤が合はないのだ。――

最後の破局は、「擧國一致內閣」そのものゝ下に勃發した。九月十六日には遂に、この內閣の減俸案に反對する艦隊暴動が突發した。それと共に、急流のやうな金流出が始まつた。九月十六日には、三十四萬七千磅、十七日―四十八萬一千磅、十八日―百七十七萬七千磅、十九日―九十八萬八千磅……。かくて、英國の金準備は遂に一億三千萬磅を割りさうになつてきた。

これは、傳統の後光眩ゆき英國の金本位に止めを刺した。最大の資本主義國は、九月二十一日金本位停止を宣言した。

ちよつと書き添へておきたいのはフランスのことである。さすがのフランス銀行も、英國金輸出禁止の時に出し遲れた金がある。それは七十七億フラン(六億二千萬圓)ほどのものだつた。その後、磅が下つたので、その金は五十二億フランほどのねうちしかなくなつた。二十五億フランばかりの損である。フランス・ブルヂョアジーは、囂々たる反對を押切つて、この損失を國家に補

償させることにした！　彼等は、前にフランス銀行が英國にクレヂットを與へたお蔭で、彼等の私的資本をどし／＼英國から引揚げてゐたのである。

ついでにもう一つ、――一九三一年中にイギリスから流出した金の半分以上は、フランスへ流入した。フランスに次いで多いのはオランダで、イギリスからそこへ流入した金は一億磅ほどだつた。他方、イギリスへ流入した金もある。それは、トランスヴァール、濠洲、ドイツおよび南阿から流出したものだ。が、英國は差引き巨額の金流出となつたことは前記の通りである。米國も、差引き巨額の金流出となつた。それも前に記したが、米國から流出した金の大部分――約八〇％――はやはりフランスへ流入した。それに對して、米國へ流入した金は、アルゼンチン、カナダ、日本、ドイツ等から流出したものである。

八　金本位制の崩壊

ヴァルガは、その「世界經濟年報」第十五輯の冒頭を次の言葉で始めてゐる：――

『世界經濟恐慌はまた新たな飛躍的尖鋭化をやつた。イギリスの金融恐慌は、金本位制の廢棄にその恐ろしい表現を見出し、この金融恐慌と共に、殆ど全××××××は金融恐慌に襲はれた。イギリスでは金本位制は否應なく廢棄され、この廢棄にあたつて、合衆國とフランスとは金本位の水準を救ふために總額一億三千萬磅の二つの巨大な信用を提供するにはしたが、この金本位制の否應なしの廢棄は非常な重要さを持つ事件である。だが、それは、孤立した、特別にイギリスだけの現象ではない。それは、現在の經濟恐慌中に次々と××主義戰線の最も弱い環をつかんで行く金融恐慌の鎖のなかの新らしい一つの環なのだ。

　この鎖の最も重要な環は、濠洲、アルゼンチン、中央ヨーロッパ諸國のグループ即ちドイツ、オーストリア、ハンガリー、それからもう一度南アメリカに飛んでチリーとブラジルとの對外支拂不能、それにすぐ續いてイギリスに於ける金本位制の終末、そしてイギリスに於ける金融恐慌に誘發されて、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー及び地球の人口の四分の一を包括する英帝國の全領域に於ける金融恐慌である。』

イギリスにおける金融恐慌は、金融恐慌の鎖のなかの一つの環ではあるが、しかしその一つの環の重要さは怖ろしく大きい。ヴァルガは續けて言ふ。

『イギリスに於ける金融恐慌は、異常な重要さを持つ一つの世界史的事件である。この金融恐慌は、その世界經濟的重要さから言つて、ドイツの國際的破産の場合とは比較にならぬほど大きい。その理由は、たゞ單にイギリスが地球人口の四分の一を包括する強力なイギリス帝國の組立ての核心を成してゐるからだといふだけではない。イギリス本位貨は國際貿易、海運、銀行業及び保險業の主要本位貨でもあつた。だから、磅の減價は、その世界經濟的結果から言つて、ドイツ金融恐慌の結果とは比較にならぬほど大きいのだ。』

彼は更に、米國における最も有力なブルヂョア機關紙の一つである『金融商業時報』の社說から、次の言葉を引用する。

『イギリスの金本位廢棄の重大な諸結果は、過大に評價しようとしても殆どしきれないほどである。それは、この一世紀の破局的事件の一つである。この事件は確かに、多くの有害な結果を

伴ふであらうし、イギリス及び恐らく全世界は、これらの諸結果の下に苦しまなければならないだらう。」（三一年九月二十六日の記事）。

で、言ふ迄もなく、英國の金本位停止は、英國だけの事件では濟まなかつた。英國の金本位が倒れると、それにつゞいて一聯の國々の金本位が將棋倒しに倒れていつた。理由は明白である――

一、英國は、自國の金本位を停止して強制的に金の流出を妨げると同時に、他の諸國から金を流入せしめようとする。乃至は少くとも一時的にでも受取勘定を殖やすために對外投資を引揚げる。そこで、イギリスに對して債務を負ふ一聯の國々は、自國からの金流出によつて金融恐慌はます／＼熾烈化するから、次々に金本位停止を餘儀なくされる。その代表的な場合は、英領植民地の諸國や、對英債務國。

二、磅が下落するといふと、英國に對する輸出を主としてゐた國々や、英國の輸出と競爭してゐた國々は、爲替相場の關係上、貿易勘定が非常に惡化して金流出が激化するから、次々に金本位停止を餘儀なくされる。代表的な場合は、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンラン

ド、等。

三、英國から資金を引揚げそこねた國々は、磅が下落してから引揚げると大變な損になる。そんな大損は、銀行破産、銀行恐慌等々を惹起す。だから、彼等の金は、謂はゞ英國で罐詰にされたことになる。ところが、國際金融恐慌に捲き込まれてゐる彼等としては資金の必要はます／＼急なのだから、埋め合せに、他の國々から金を引揚げる。かうして引揚げられた國々は急性的、激烈な金流出が起り、金本位停止を餘儀なくされる。代表的な場合は米國の引揚げに逢つたカナダ。

四、さうでなくてさへ金準備の涸渇してゐた國々、資本が國外へ逃亡しつゝあつた國々では、英國の金本位停止によつて自國の金本位停止のます／＼避けがたいことが明かになり、いよ／＼猛烈な資本逃亡と爲替投機が起つてきて、急性的な金流出となり、金本位停止を餘儀なくされる。代表的な場合は日本。

これらの事情は、多くの場合重なり合つて現はれる。そしてそれだけ一層力強く作用する。また、何といつても危急の際だから、各國は、それらの事情がなほ現實には起らなくても、起るこ

との避けがたいのを知るや否や、――立後れては大變だから、――あはて、金本位停止をやる。

さういふわけで、諸國の金本位は將棋倒しに倒れていつた。

九月二十一日には、英國が金本位停止をやるとすぐにコロンビヤも金本位停止をやつた。

二十四日にはポルトガルがやつた。

二十六日には、ボリビヤ、インド、エヂプト、アイルランドの金本位停止。

二十八日には、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン。

十月十三日にはフィンランド。

二十日にはカナダ。

そして十二月十三日には日本。

ところで、アルゼンチンと濠洲はすでに一九二九年十二月以來金本位停止をやつてゐた。更にまた世界戰爭以來ずつと金本位停止をやつてゐたニュージーランド、スペイン、ブラジルのやうな國々もあつたのだ。

かくして一九三一年末にはつひに全世界の人口の七〇％を占める廣汎な地域に亘つて金本位制は××したのであつた。

これは明かに金本位の崩壊である。これは、一國や二國の金本位停止とは全く意味がちがつてゐる。

××は、資本主義世界の最廣汎な部面において起つてゐる。こゝでは、貨幣本位はもはやその「正常的」な機能をつくさない。資本主義社會になくてならない一般的等價物はもはや一般的等價物として満足に機能しない。國と國との間の商品交換の媒介物はもはや自由に市場に現はれない。これは、流通の怖ろしい××だ。

この××は、必然的に、生産に向つて反作用する。世界の生産は分裂せしめられ、各國の生産は孤立せしめられ、従つて全體としても個々においても、生産はます／＼縮小せしめられずにはゐない。

金本位の崩壊によつて金融恐慌が×××すればするほど、ブルヂョアジーの金に對する欲求は

ます／＼熾烈化する。信用が××すればするほど、彼等の役に立つものはたゞ金だけになるからだ。信用制度の最後の支柱たる兌換券を維持するのには、その發行の基礎たるものはます／＼金でなければならなくなり、金以外のものはます／＼駄目になる。戰後、金の缺乏を來たした多くの國は、磅爲替や弗爲替を、兌換準備金の全部または一部分に充てゝゐたが、これらの國々は、英國の金本位が危險になるのにつれ、またその廢棄の後は尙更ら、あはてゝ磅爲替や弗爲替を賣つて金そのものに轉化しなければならなかつたのだ。（そのことは、英國および米國の急性的金流出を惹起した一原因である）。

が、それだけではない。貨幣としての金は、その最も素朴な、本來的な機能に立返つて、ブルヂョアジーの前に現はれる。ブルヂョアジーは、前には、――この通り何でも信用でやれるのだから金なんか有つても無くてもいゝものだぐらゐのことを言つてゐた。金は、國內ではたゞ、信用といふ全上層建築の基礎として、兌換準備の役をするに過ぎないやうに見えたのだ。ブルヂョアジーは、その基礎さへも不用のやうに思つてゐた。しかし、今や、その信用の上層建築は全く

××されたのだ。彼等は、今や、その所有する富、所有する價値を、金といふ現物形態で××しなければ安心が出來なくなつてきた。つまり、唯一の實在的富としての、唯一の××された價値形態としての、金の機能が鋭く前面に立現はれたのだ。だから、彼等は、兌換券を集めては金と引換へようとする。さうしなければ、彼等の所有する價値、ブルヂョア的富を、自分のために保存することが出來ないのだ。彼等は、もう、價値を生産に投じて増殖することなどは諦めて、價値の單なる保存に專念する。これは、「蓄積」の野蠻形態への逆戻りである。そして、それがためにも、生産はます〳〵縮小せずにはゐない。

かうした、傾向の上に立つて、すべての國の政府や中央銀行は、また一般銀行でさへも、出來るだけ多くの金を自分の方へ取らうとして半狂亂の鬪爭をやる。アメリカやフランスのやうな金獨占國さへが、金爭奪戰に夢中になる。そして、それが更に、恐慌的金流出を激成し、一切の××を深めてゆく。

マルクスは言つた、――『生産物の貨幣形態をば、單なる消極的なもの理念的なものとして、

單なる觀念として、現はれしめるものは、これ即ち生產の社會的性質に對する信賴である」（傍點は私が施した）。だから、生產の社會的性質に對する信賴が保たれてゐた間は、信用が貨幣金に代つて仕事をした。しかし、恐慌は、生產の社會的性質に對する信賴を××き、信用を××させた。信用の××と共に、貨幣金は現物形態で現はれてきた。

マルクスは更に言つた、――『金の流出の結果の上から見れば、「資本主義」生產は現實的には社會的生產として社會的管理の下に立つものではないといふ事情が、富の社會的形態は富の外部にある一の物として存在するといふ形で、目立つて現はれるのだ。』かゝる事實は『資本主義制度の下において初めて目立つた形で現はれ、且つ奇怪極まる矛盾及び不合理の形をとるやうになる。なぜならば、(一)直接の使用價値を、生產者達の自家使用を、目的とする生產は、資本制度の下においては最も完全に止揚されて、富は單に生產と流通とのもつれとして言ひ現はされるところの社會的行程としてのみ存在するに過ぎなくなり、しかして(二)信用制度が發達するに從ひ、資本制生產は、富及びその運動のかくの如き金屬的な制限を、物的たると同時に幻想的な制限を、

絶えず止揚せんとつとめつゝ、しかもまた絶えずこの制限に頭を打ちつけるからである。

この言葉は、諸君が一九三一―二年の狀態を直視するならば、まるで豫言者の言葉のやうに響くてはないか。――金の存在量は限られた少量のものである。それにも拘らず、信用制度の下においては、ブルヂョア財產のすべてが金で計算されたものとして蓄積されてゐる。この觀念的な存在は、恐慌が襲ふや否や、限られた少量の金の上に、自己を現實化さうとするのである。

九　それから――

金本位の崩壞後、すべての主要資本主義國の狀態はぐん〳〵××した。

ドイツは、外國からの信用の途を一切うち斷たれた。

おまけに、英米佛の三國はドイツから短期資金を引揚げないといふ「中止協定」をやつたにも拘らず、ドイツからの金流出は繼續した。それは「中止協定」そのものに大きな穴があるからでもあるが、ドイツ資本そのものが盛んに逃亡するからでもある。ドイツの資本家達は輸出商品

代金その他外國から受取るべき金を本國へ取寄せないで、大部分外國に置いておく。彼等は、もう、マルクの將來に安心が出來ないのだ。

ライヒス銀行の金準備の流通紙幣に對する割合は次のやうにずん／＼低落した。

九月七日	九月三十日	十月十七日
四一・三％	三一・二％	二八・六％

ライヒス銀行の金保有高は、次ぎのやうに激しく減少した。

一月十日	九月十九日	十月三十一日	一月九日（本年）
五二七（百萬弗）	三二一	二六六	二三四

潜在的な貨幣恐慌は、強烈に進展しつゝある。『貯蓄預金は引出され、銀行券は大口に退藏されてゐる。……ケルン貯蓄銀行の頭取ブファールブッシュは、この棚に上げられた貨幣の額を十億マルクと推算してゐる』（ヴァルガ）。

わづか八九年前にインフレーションの苦味を喫したドイツ・ブルヂョアジーは、死身になつてインフレーションを防いでゐる。おまけに今度は、ドイツの對外債務はその金額を外國貨幣で定

められてゐるから、インフレーションを起したが最後、完全な××あるのみだ。

ドイツを支配してゐるのは最も深刻な信用、貨幣××である。通貨が盛んに退蔵されるので、貨幣の激しい缺乏が現實に起りさうになつてゐる。しかも政府は通貨を供給することが出來ないのだ。ヨリ多くの通貨の供給が紙幣インフレーションに轉化する危險は餘りにも迫つてゐる。金準備の涸渇したドイツはそんな風だが、莫大な金準備や短期資金を抱へてゐる國の惡化もそれに劣らず甚だしい。

フランスの貿易は、一九二八年以來ずつと惡化を續けてきたが、一九三一年の最初の九ヶ月間の貿易は更に著しく惡化した。前年の同期に比較して、輸入の減退は一五％だが、輸出の減退は二八・三％になつてゐる。おまけに、ドイツの破産以來、例の巨額の賠償金を取立て得る望みも非常に稀薄になつた。更にフランスが政治的必要からいろんな小國に與へた借款も事實上すでに氷結した。更にまたフランスへ逃げ込んでゐる巨額の外國短期資本も、いつ引揚げられるかわからないのだ。

だから、いかにフランスがしこたま金を抱へ込んでゐたところで、それがフランスの安全を保證するやうな氣づかひはない。

今のところまだフランスには、短期資金の横溢がある。フランス銀行には二百五十億フランの振替資金が利子も附かずに寢てゐるのだ。が、それらのものは全く役に立たない金になつてゐる。なぜといつて、工業企業は破滅してゐる。そしてそれと結びついた銀行がやられてゐる。

大きな破産の先驅は一九三〇年のウーストリ財團及びドヴィルダー財團であつた。一九三一年の上半期にも大規模の破産があつたが、九月には信用ー銀行恐慌が全幅的に××した。フランスで第四番目に大きな預金銀行「ナショナル・クレディー」が關係企業會社の破綻から破産してしまつた。フランスの二大事業銀行の一つである「ユニオン・パリジヤン」は、同じく關係會社の破綻から破産に陷り、その他の大銀行の支持のお蔭でやつと持ちこたへてゐた。

そんな風で、十月にはもう銀行券では安心出來なくなつた貯蓄者達が、毎日フランス銀行から數百萬フランの金塊を引出して行くやうになつてきた。大銀行も、お客さんの金貨拂ひの要求に

應ずるために金準備を持ちはじめてゐた。その上に外國金貨の取引が盛んに行はれ、外國金貨はすでにわづかながら打歩を生じてゐた。――こゝでも、潜在的な貨幣恐慌だ。

米國は、一九三一年に入つてから信用恐慌が急速に成熟した。次のやうな諸事情は、この信用恐慌の契機をなしてゐる。

(一)農業恐慌が恐ろしく深刻化したために、借地農の大衆的支拂××が生じた。(二)地價は半額に暴落し、土地を抵當にとつてゐた銀行や保險會社等々は破産した債務者から收奪した農産物の買手がないといふやうな始末で、巨大な資本が氷結してしまつてゐる。(三)都市の不動産、家屋、建築用地、等の價格の暴落、そのために十億弗にも上る信用が氷結してゐる。(四)有價證券相場の慘落。恐慌の進行中に幾度も取引所ガラが來て、株の相場は恐慌前の四分の一以下になつてゐる。百何十億弗の擬制資本は消えてなくなつた。(五)恐慌の進行中に賣れない商品の山が大きくなつてゆく乃至は極くわづかしか減らない。小麥、棉花、銅、石油等々の數十億の在荷は增加した。かうした商品に投じてある資本は堅く氷結し、商品價格の下落と共に、解けてゆく氷のやうに小さくな

る。

さういふ譯で、一九三一年中に、合計二千三百行の中小銀行が破産した。その大部分は九月以後に起つた。十月と十一月の二ヶ月で十五億弗の預金が銀行から引出された。

そんな風だから、國家財政もまた、二十億弗といふ巨大な「赤字」を出し、次年度の「赤字」は更に二十五億弗にも達しさうな勢ひだ。

さういふところへ、英國の金本位停止が起り、金流出の順番がアメリカへ廻つてきた。この流出は恐ろしく急性的なもので、わづか三週間のあひだに米國聯邦準備銀行の金保有高を四億五千萬弗も減らすほどのものだつた。九月と十月の二ヶ月間に米國の喪失した金の總額は七億二千七百萬弗にのぼつた。かゝる金流出は、私個人のあらゆる本位貨に對する不信任の表示であつた。

もちろん米國の金保有高は巨額にのぼつてゐたが、しかし米國の短期債務も尨大なものだつた。當時、米國に集まつてゐた短期資金はおよそ三十億弗以上に達したであらう。これに對して米國は諸外國に短期債權を持つてゐたが、その大部分は、七月以來ドイツで焦げついた上に更に九

月二十七日以來はイギリスで債權者になつてゐた。從つて、差引勘定をした米國の短期債務は二十億乃至二十五億弗にのぼつたであらう。一方米國はその金額に二倍する長期の對外投資を持つてはゐたが、これは恰度英國の長期投資と同じやうに、その大部分は焦げついて當分回收の見込はない。しかるに、他方、巨額にのぼる米國の株式及び公社債が外國資本家によつて所有されてゐて、この方はいざとなれば短期資金に轉化されて引揚げられる懼れのある潜在的短期債務に過ぎなかつた。

かういふ譯だから、——米國の場合は英國とは違つて非常に豐富な金準備を抱へてゐたにも拘らず、——今言つたやうな急性的金流出が起るといふと、ウォール街はわけもなく恐怖に襲はれた。激烈な取引所ガラはその表現だつた。更に、銀行取付が勃發するだらうといふ不安も非常に昂まつた。

米國でも、ドイツやフランスと同じやうに、潜在的な貨幣恐慌を意味する銀行券の退藏は盛んに行はれた。それは、兌換券に對する金準備の率をそれだけ引下げる結果になつた。

そこで、フーヴァーは、資本金五億弗の「全國信用會社」といふ救濟銀行をでつち上げて、大大的な信用膨脹によつて危急の時機を乘切らうとした。しかし、それは大失敗だつた。銀行は、自分の金をこんな會社に拂込んで自分の競爭者を救濟することなどは御免を蒙つたからである。フーヴァーは仕方なしに今度は「復興金融會社」なるものをつくり、その資本金五億弗の全額を國庫金から拂込んだ。つまり破産銀行救濟のために國庫金を流用したわけである。それからまた、準備制度を改革して銀行券の増發が出來るやうにもした。

これらの行動は、金融恐慌が異常に×××したこと、恐慌の衝撃は獨占資本それ自體に向けられてきたことを、裏書したやうなものだつた。從つて、新たなる金流出も起つてくるし、銀行券の退藏も激増した。

インフレーションが起るだらう、弗もあぶないだらうといふ懸念からの資金引上げや、軍縮會議の「準備」のためにするフランスの資金引上げやなどで、一月四日から二月二十一日の間に二億弗近くの金がアメリカから流出した。

二月三日には、ソーヴァーは次のやうなア・ピールを出さねばならなくなつた。

『余の算定する所に依れば普通銀行にあるべきはずの資金約十二億五千萬弗が銀行から引出されて民間に死藏されてゐる。しかして保證準備の關係よりして一弗の死藏が信用機關に及ぼす影響は決して單に一弗に止るものに非ずして數弗を引出したこととなり、我が國の經濟的恢復を阻害すること甚大なるものがある。』(「東洋經濟新報」七年二月十三日號)

だが、退藏された銀行券の實際の額は、ソーヴァーの「算定」よりもずつと巨額で、二十億弗にのぼるとされてゐる!

一〇 展　望

さて、こゝで、金本位の崩壊から直接に生ずる影響の二三を考察して、一應の締めくゝりをつけることにしよう。

一聯の金輸出禁止國の爲替相場はどんな風に下落したか? それは第一表に現はれてゐる。

これを見ると二つのことがわかる。第一、下落が甚しい。平準相場からの下落が二〇%以下

第一表

金輸出禁止國の爲替下落率
（いづれも對米爲替相場）

	1932年2月6日	1932年3月28日
	%	%
イギリス	29.2	21.2
スペイン	60.0	60.9
カナダ	14.3	10.8
スウェーデン	28.0	26.7
デンマーク	29.1	25.6
ノルウェー	30.0	27.4
ポルトガル	27.6	—
フインランド	42.5	—
インド	28.1	—
アルゼンチン	39.0	39.4
ブラジル	49.8	46.8
ペルー	—	43.0
日本	29.0	34.0

備考　二月六日の數字は「アナリスト」三月二十八日の數字は「ステーテイスト」より算出
三月二十八日イギリスの數字は「中外」により算出

のものはカナダ一國だけで、その他は概して三〇%——四〇%の下落、甚しいのは六〇%も下落してゐる。第二、かうした下落と同時に、動搖の激しいこともわかる。二月と三月とを比較して見給へ。——かういふ有樣では、たゞさへ縮小する貿易がます〳〵萎縮するのは當然だ。

金本位崩壞の起つた昨年の九月から本年二月までの主要資本主義國の貿易は、第二表の如く、

どこもかしこも激しい減少だ。

第二表

	英國 前年度	英國 今年度	英國 減少率	米國 前年度	米國 今年度	米國 減少率
輸入	四六八（百万磅）	四四二（百万磅）	五・六%	一、二四五（百万弗）	九〇九（百万弗）	二七・〇%
輸出	二四二	二二五	七・〇	一、六七五	一、〇六七	三六・三
合計	七一〇	六六七	六・一	二、九一〇	一、九七六	三二・四

	獨逸 前年度	獨逸 今年度	獨逸 減少率	佛蘭西 前年度	佛蘭西 今年度	佛蘭西 減少率
輸入	四、三二〇（千ライヒスマルク）	二、七八五（千ライヒスマルク）	三五・五%	二五（百万フラン）	一七（百万フラン）	三二・〇
輸入	五、一三三	四、一九八	一八・四	一九	一三	三一・六
合計	九、四五三	六、九七三	二六・三	四四	三〇	三一・八

	伊太利 前年度	伊太利 今年度	伊太利 減少率	和蘭 前年度	和蘭 今年度	和蘭 減少率
輸入	五、五三五（千リラ）	三、三五七（千リラ）	三九・三%	九一九	七二五	二一・一%
輸出	三、九八二	三、五〇五	一二・〇	六五九	四八三	二六・七
合計	九、五一七	六、八六二	二七・九	一、五七八	一、二〇八	二三・四

	印度 前年度	印度 今年度	印度 減少率	日本 前年度	日本 今年度	日本 減少率
輸入	六二七（千ルーピー）	四八〇（千ルーピー）	二三・五%	五九二（百万円）	六〇七	増 二・七%
輸出	八七三	六七〇	二三・三	五九二	四九六	一六・二
合計	一、五〇〇	一、一五〇	二三・三	一、一八四	一、一〇三	六・八

備考　前年度は一九三〇年九月——一九三一年二月　今年度は一九三一年九月——一九三二年二月
和蘭、印度は両年度共九月——一月　伊太利は両年度共九月——十二月

これらの數字について注意すべきことは、第一に「前年度」の貿易なるものがすでに恐慌前に比べて、二、三割も減少してゐたのであつて、それと比較してさへ「今年度」はひどい減少となつてゐるといふことだ。第二、金輸出禁止國の今年度の貿易額は、二割も三割も價値減少した磅やルピーや圓で言ひ現はされてゐるといふことだ。例へばイギリスだが、磅は約三割も下落してゐたのだから、同一の貿易額をその下落した磅で言ひ現はせば約四三%ほど大きくならねばならないのだ。然るに、現實の貿易額は、増大するどころか、あべこべに六%も減少してゐるのだ。その點では、インドの如きは、全くお話しにならぬひどさである。三〇%も下落したルピーで言ひ現はした貿易が、更に二六%も減少した。

第三に注意を要するのは、輸出ダンピングがちつとも利かないといふことだ。例へばイギリスを見給へ。輸入の減少率よりも、輸出の減少率の方が却つて大きいではないか？　日本の如きは、——十二月からの金輸出禁止だから此の數字には影響はまだ十分に現はれてゐないけれども——輸入の方は「見越輸入」のおかげで二・七%増加したといふのに、輸出の方は一六・二%も減つて

ゐる。國際收支の恐ろしい惡化だ。

これらすべてのことは、市場が如何に狹隘化したかを語るのだ。

そんな風にして、主要な資本主義國のどこもかしこも、輸出がぐん／＼減るのに輸入はそれほど減らないとなると今度は、どこもかしこも言ひ合したやうに關稅の引上げだ。みんなが關稅を高くすれば、みんなの輸出が尙更ら激しく減るのだが、××××の枠内においては、それ以外の「對策」はない！

イタリーは、イギリスの金本位停止後いちはやく關稅引上げをやつた。續いて、コロンビヤ、インドも、九月中に引上げた。十月には、アルゼンチンと南阿聯邦がやり、オランダは輸入制限令を布いた。十一月には、フランスが、金輸出禁止國からの輸入商品に對する附加稅增徵を開始した。これは公然と爲替ダンピングに對抗したものだ。するとイギリスは、それと殆ど同時に「異常輸入關稅法」といふやつを持ち出した。傳統的「自由貿易主義」を誇つてゐたイギリスは、この法律によつて、從價十割といふ禁止稅を課し得ることになつたのだ。これらと並んで、

トルコも、輸入の制限・禁止法を實施した。

關税戰は、一九三二年になつてます／＼激化した。米國では、さうでなくてさへ高い關税壁のあるところへ、更に爲替下落國の商品に對する新關税を問題にした。ポーランド、フランス、ドイツ、セイロン、カナダ、シヤムは、いづれも關税を引上げたし、イタリーは、重要商品四種に對する輸入禁止をやつた。南阿聯邦は爲替ダンピング税を新設し、チリーは爲替管理をやり、フランスは特に日本の爲替ダンピングに對抗するために對日爲替補償附加税といふやつをこしらへた。濠洲は硫安の輸入制限をやつた。そしてイギリスは、一般輸入品に對して一律に一割の引上げを斷行した。日本も、負けずに關税引上げ案を練つてゐる。

これらの關税引上げは、一つには、關税の增收によつて財政の赤字を埋めることを目指すのだから、ます／＼氣の毒である。×××××は、揃ひも揃つて自分の首を自分で絞めてゐる。

最後に、金本位の崩壊によつて導いた國際金融恐慌が、資本主義世界にもたらす最も重要な結果

は、どうか?

先づ、誰でも氣づくであらうことは、販賣市價獲得の鬪爭の白熱化だ。販賣の可能性が少くなればなるほど鬪爭は激化する。この鬪爭と結びついて、××主義の對立が異常に×××する。それは更に金の爭奪戰にも拍車をかける。

また、一方では植民地・半植民地諸國が恐慌の負擔を轉嫁されて債務の支拂不能や××破産に陷つたこと、他方では主要資本主義國がます／＼市場に飢ゑて來たことは、後者が前者に加へる抑壓、干渉、××、××の×××とならずにはゐない。それは、帝國主義と被抑壓民族との間の××××××すると同時に、帝國主義國相互の間の對立を尖銳化する。同時にまた、ソヴィエット同盟と資本主義世界との間の××が異常に××××××ことは明白だ。

一九三一年には、世界をもう一度××し直すための、最初の××はすでに始まつた。しかも、それはいつ反ソヴィエット××に××××するか知れないやうな有樣だ。

一方、×××階級の狀態は格段に××したし、また更に××する。

失業は、とつくに古今未曾有の數に達してゐるのに、その數字はまだ殖える一方である。しかるにまた、就業勞働者の生活狀態が恐ろしく惡いのだ。今度の恐慌にあつては、これまでの恐慌の場合とは違つて、賃銀の切下げられたほど生計費は下らない。その點は、金本位崩壞後の爲替インフレーションや信用インフレーションのためにます／＼ひどくなつてゆく。

では、インフレーションはどんな風に發展するだらうか？

今のところでは、現實的な紙幣インフレーションはまだどこにも起つてゐない。しかし、紙幣インフレーションの第一の發展段階、即ち潜在的な段階にあると見做し得る國は少くない。わけても、ドイツがさうである。ドイツでは、英米佛の支拂猶豫協定や短資引上中止協定があるために、辛うじて紙幣インフレーションの爆發を免れてゐる有様だ。しかも、そんな協定は何時破れるかわからないのだ。ドイツにおいては明白に××××××××××がある。

同時にまた、イギリスや、アメリカや、××などにおいてインフレーション景氣が起り、それによつて恐慌が克服されるといふやうな見透しなどは少しもない。

それどころか、アメリカやフランスでさへ、まだ金本位停止の危機を脱してはゐないのだ。第三期世界恐慌は、まだ底をついてはゐない。

經濟恐慌は、たとひ資本主義の一般的危機の段階に起つたものでも、それはやはり産業周期の一局面を代表するものだから、資本主義が存續する限り、一應の終りを持つ筈のものである。が、資本主義の×××××は、經濟恐慌とは全く異なるものである。この方は、資本主義の枠内で×××××ものではない。しかも、あらゆる點から見て×××××××××××のである。

第四篇　金再禁止後の展望のために

第十四講　世界戰爭から金解禁まで

一　戰時における日本資本主義の膨脹

日本が去年の十二月に金本位停止をやつてからもう四ケ月ほどになる。金再禁止をやるといふと、景氣が立ち直つていろんないゝことがあるといふことだつたが、そんな様子は×××××ない。それどころか、×××××した。政治を見ても經濟を見ても、これから一體何が飛び出すのかといふ暗黒な×××××があるだけだ。從つて、今後の發展についての見通しを持つ必要はますます切實だ。しかし、今後の展望のためには、事の性質上どうしても世界戰爭當時にまで遡つて、何が今日の狀勢をもたらした根本事情であるかを見究めておく必要がある。

諸君の知られる通り、日本資本主義は、世界戰爭の時期からその直後にかけて、異常な發展と膨脹を遂げてゐる。念のために二三の數字を示すといふと——

會社資本は、戰前（大正三年）に二十億圓ほどだつたものが、戰後（大正八年）には殆んど六十億圓に激增した。五年間に殆んど三倍したのである。

從つて、生産や貿易も激增した。貿易は、十二億圓から四十二億圓になつた。生産は三十二億圓から百三十億圓になつた。卽ち四倍である。もつとも、それは商品の價格で比較してのことだが、これを商品の數量で比較するといふと增加率はずつと少くて、重要商品二十三種の生産增加率はおよそ六割ぐらゐのものだつた。これは、言ふまでもなく、價格の騰貴が異常に激しかつたことを示すのだ。

そこで物價だが、これは大正三年を一〇〇とすると、大正八年には二五四、大正九年には三三八といふ飛躍的暴騰をやつてゐる。

諸君は、これだけを見ても、そこに強烈な信用インフレーションが起つてゐたことを看取されるだらう。事實において、――世界的にはもちろんのこと、――日本の內部においても信用は恐ろしく膨脹した。銀行の貸出は三十三億から百二十二億になつて、およそ三倍半に膨脹し、會社資

本の增加よりもひどかつた。しかも、通貨の膨脹は、もつとひどかつた。日銀の兌換券發行高は、三億八千五百萬圓から、十五億五千五百萬圓になつた。これは四倍以上の膨脹だ。おまけに流通速度もずつと早くなつてゐる！

かくて、世界戰爭が捲き起した未曾有の破壞的消費と信用インフレーション、——その一大旋風の中に日本資本主義は立つてゐた。

が、物凄い破壞的消費の世界的中心から遠ざかつてゐた日本資本主義は、自らは大した破壞を蒙ることなしに、專ら破壞的消費のための商品供給者たる地位を占め、おまけに戰爭前にイギリスやドイツなどがアジア・南洋・アフリカに持つてゐた市場までもどさくさ紛れに頂戴した。

そこで、日本には三十年振りの輸出超過が始つて四年も續き、合計十四億圓の出超が出來たその上に、運賃收入等々も激增した。從つて、大正八年末までの五年間に六億圓ほどの金が流入し、國內の金準備は、大正三年にはたつた一億二千八百萬圓しかなかつたものが、七億圓に增大した。が、日本ブルヂョアジーの獲得した金のもつと大きな部分は外國に保有され、その「在外正貨」

は二億から十三億円以上に激増したので、內外併せれば、大正八年末の金保有高は二十億圓以上に達したのだ。日本ブルヂョアジーは、アメリカ・ブルヂョアジーと共に、確かに、戰爭成金たるの光榮を得た譯である。

二　戰後恐慌とインフレーション

とはいへ、たゞそれだけで目出度し〱といふわけには行き兼ねた。

大正九年には遂に來るべきものが來た。未曾有の大恐慌である。九年三月に資本主義日本に爆發した恐慌は、一九二〇年――二一年の戰後世界恐慌の導火線をなしたことは前に述べた通りである。

強烈な物價下落、――それは一年間に四〇%にも及んだ。そしてそれと共に恐慌に特有な一切の混亂が勃發した。

だが、あの恐慌に際しての物價下落はとても四〇%やそこいらで濟む筈のものではなかつたの

だ。恐慌直前の物價水準は、實に、戰前に比べると二三八%も高かつた！　昨年の物價水準はすでにほゞ戰前の水準にまで低落したが、かやうに十年以上もかゝつて下げただけの分を、あの時一氣に下げてしまつて戰前の水準に復すのがむしろ本當だつたのだ。あの時に、かゝる急激な物價下落を起さないでそれを喰ひ止めた主要な要因は、新たなるインフレーションであつた。このインフレーションは、世界の殆んどすべての國にいろんな形で起つたのだが、日本ブルヂョアジーの起した救濟インフレーションは、英米のそれよりもずつと強烈なものだつた。

では、彼等は何故に救濟インフレーションを起さねばならなかつたのか？

大正九年の大恐慌は、「戰時經濟」によつて激成されたところの異常に深大な矛盾の爆發であつた。日本の資本家的諸企業の生產能力は戰爭中に何倍かに激增したが、その激增した生產能力は主として破壞的消費に應ずるものであつたから、戰爭が終つて破壞的消費が止めば、少くともその半分位は過剩になる。そしてそれと共に、生產資本の恐ろしく巨大な部分は過剩資本となる。從つて過剩資本を持つ諸企業は恐ろしく多數に上り、それはみんな破產するか、乃至は少くとも資

本の切捨（謂ゆる整理）を餘儀なくされる。さうした諸企業に信用を與へてゐた恐ろしく多數の銀行もまた同じ運命を持つ。

かういふ譯で、――あの恐慌は、本來、さうしたものをすべて一氣に清算してしまふ役目を持つてゐたのだが、しかしさうした「清算」たるや、實に經濟的、政治的、社會的の、一大破局そのものでなければならなかつたのだ。

更に、あの恐慌に際しては、全く新らしい事情が生じてゐた。戰時を通じて資本の集積は急激に進展した。資本の構成も急激に高まつて、固定資本の割合が非常に増大した。銀行は尨大な固定資本信用を與へてゐた。一口に言へば、日本資本主義は、急激に、獨占と金融資本の段階に入込んでしまつてゐた。從つて、恐慌の衝撃は、直接に、支配的金融資本への衝撃となる、

そこで、金融資本の自己防衛と自己救濟といふことが、前記の事情及びその他の諸事情と相俟つて、救濟インフレーションを不可避ならしめたのであつた。

日本の資本主義が、獨占資本主義にまで發展したといふことは、一の質的變化を意味するが、

それと並んで、それにも劣らない重大な變化が戰後の日本資本主義に生じてきた。その一つは、長いあひだ日本資本主義に對して「産業豫備軍」を供給すると共に、日本資本主義の國内市場廣大の目的に役立つてきたところの、半封建的な日本農業は、遂に資本主義の下においては自己の生産力を發展させることが出來ない點にまで到達し、一の變革的な段階に入込んだことである。もう一つは、日本資本主義は、世界的に見てすでに沒落の段階、一般的危機の段階に入込んだところの資本主義の、その一環となつたことである。これらの質的變化は、日本に起つた救濟インフレーションといふ全然新らしい現象の根柢に横たはる基本的事情であつたのだ。

では、救濟インフレーションの膳立はどうだつたか？　それは——

一、國家の負擔における、大規模の直接的な資本救濟。——政府及び日本銀行は、大正九年に、約四億圓の直接的救濟資金を支出し、更に十二年十月に再發した銀行恐慌に際して、二億五千萬圓を支出した。

二、資本に對する租税の減免、補助金や輸出奬勵金の下附、關税の引上げ、國産愛用の奬勵、

等、等。

三、謂ゆる積極政策の名の下に押し進められた「植民地經營」、軍備擴張、大規模の土木事業や鐵道建設、それから海運・造船・製鐵・軍事工業・電信電話、等々の大擴張、「對支積極政策」、「西比利亞出兵」、——これらの目的のために發行された公債は次のやうに激増した。

	拓殖事業公債（千萬圓）	軍事公債（千萬圓）	殖産興業公債（千萬圓）
大正八年	一四	一五〇	九〇
大正十四年	三五	一七六	一六〇

四、最後に、——最も重要な事の一つだが、——日本ブルヂョアジーは、大正六年にやつた金輸出禁止を、戰後もずつと繼續した。これを繼續したのは、一つには新たなる戰爭の危機が尖鋭化したことによるが、一つには、日本の資本主義經濟が急激なデフレーション——物價下落に堪へられなかつたからなのだ。政府は、金輸出禁止を繼續すると同時に、戰爭中海外に保有した正貨(金)をどし〳〵國内へ持込んできた。そこで兩々相俟つて、新たなる信用インフレーションのための地盤を提供したのであつた。

三　インフレーション政策の破産

吾々は、九年恐慌から大正十四年に及んだ日本ブルヂョアジーの經濟政策をインフレーション政策と呼んでゐる。

日本における戰時および戰後のインフレーションは、主として信用インフレーションであつたが、爲替相場の下落と共に爲替インフレーションも加はつた。そのために、例へば大正十四年には、金に二割九分餘の打歩が生じた。（以前私の書いたものゝ中には、この打歩の發生は紙幣インフレーションに基づくかのやうに誤解させ易い言葉があるが、さうではないのだから、念のために斷つておく）。

戰後のインフレーションの直接の結果として、收縮すべき兌換券が膨脹し、低落すべき物價が騰貴した。日本の物價水準は、米國のそれよりも著しく高かつたし、英國に比べてさへも高かつた。次表を見よ。

	大正三年七月	大正九年七月	大正十年七月	大正十一年七月	大正十二年七月	大正十三年七月	大正十四年七月	大正十五年七月
東京	一〇〇	二五二	二〇七	二一二	二〇二	二〇六	二〇九	一八八
紐育	一〇〇	二二四	一二四	一四〇	一五一	一四一	一六〇	一四七
倫敦	一〇〇	三〇七	一八七	一七一	一六三	一八二	一七三	一五八

ところで、かうしたインフレーション政策は、どんな作用を營んだか？

それは、第一、膨大な過剰資本と過剰生産能力とを、——恐慌がそれを強力的に處分するのを妨げて——、そのまゝ先きへ持越した。從つて、生産力と消費力との間の深大矛盾は依然存在し、たゞ一時的に潜在化されただけである。が、それだけではない。この政策は、直接的にも、また物價騰貴を通しても、いろんな方法で資本家企業の利潤を増してやるのだから、企業及び生産はますます擴張され、さらでだに過剰な資本と生産能力とをいやが上にも増大させた。

それは、いろんな數字の上に現はれてきた。まづ、代表的な生産手段であるところの銑鐵、鋼材、洋灰、工業藥品、綿糸、生糸を見ると、これらのものゝ昭和二年の生産(平均)は、戰爭景氣の頂點をなした大正八年の生産(平均)よりも、更に八六％も増大した。それから、發電力の増大、

これは、昭和二年には大正八年に比して一五九%も多くなつてゐる。同じ期間において、紡錘の總噸數は三二%、鐵道哩數は四二%增大した。鐵道哩數は、實に、戰後の不況期八年間において、戰時の好況期を含む先行八年間のと同じテンポで增加したのであつた。

最後に資本、――これは全國會社の拂込資本について見ると、大正八年に六十億圓であつたものが、大正十五年には百二十億圓になつた。卽ち、七年間に二倍した。更に、信用もまた膨脹を續け、全國普通銀行の貸出は、同じ期間において、五十六億圓から九十二億圓に增加した。これこそ、過大信用の上に過大信用を累積したものでなくて何だらう。

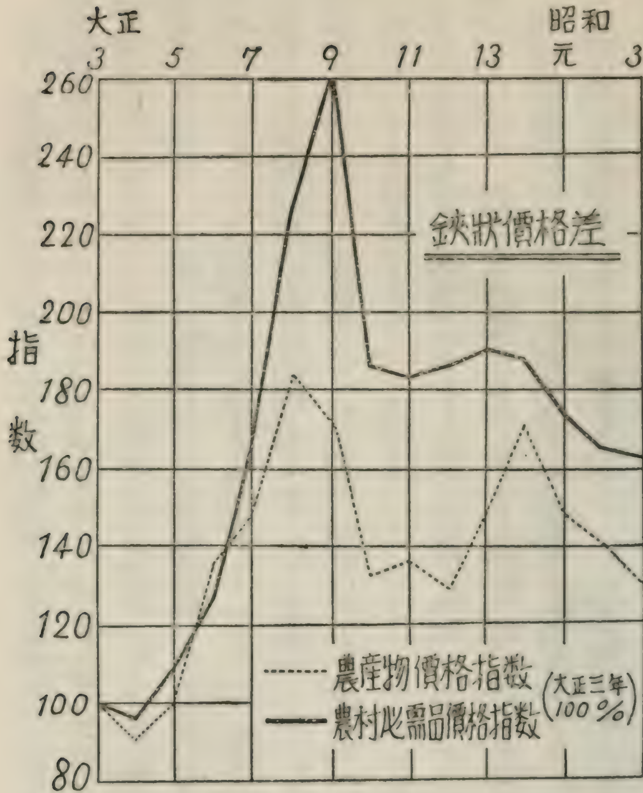
かういふわけで、インフレーションの作用は二重であつた。それは、前からの過剩資本や過大信用を持越させたばかりでなく、そこへ更に新たなる過剩資本や過大信用を積み重ねて行つて生産能力の彪大な過剩をつくり出したのだ。だが、インフレーションはもう一つの作用を營んだ。卽ち、それは同時に他方で、勤勞者大衆の消費力をずん／＼切下げた！

インフレーションが如何にして大衆の××となるかといふことは、理論的にはすでに諸君の研

究ずみである。信用インフレーションによる收奪は、紙幣インフレーションの場合ほど強烈ではないが、しかし同様の作用を起す。

小生産者大衆は、一般に、買ふ物は高いのに賣る物は安いといふ破目になつて××される。それの最も代表的な場合は農民である。次に掲げるグラフは、その關係を示すもので、點線の方は主要農産物の價格の動き、もう一本の線は農村必需品の價格の動きを現はしてゐる。これで見ると一目瞭然だ。大正三年における兩種の商品のそれ〳〵の平均價格を一〇〇として、その後の動きを比較すると、戰爭中はどちらもどうやら同じ歩調で進んでゐたが、大正八年にはもう二つの間に大變な開きが出來た。九年恐慌以後のインフレーション期においては、ちよつとのあひだ農の價格が上がつたために開きが狹くなつたことはあるが、傾向的には開きはます〳〵大きくなつてゆく。吾々はこの開きを、鋏状價格差と呼んでゐる。

が、むろん、それだけのことではない。その他種々なる理由——こゝには一々述べないが——によつて、農民大衆は戰後急速に窮乏化してきたことは周知のことである。



備考）1） 農產物は米、麥、繭（全國春繭の平均）の三品

2） 農村必要品は魚肥、油粕、砂糖、鹽、味噌、醬油、日本酒、白木綿、フランネル、マッチの十品（大正十四年以後はフランネルの代りに硫酸アンモニアを入れた）

3） 品目の關係上昭和三年までの平均指數しか得られなかつた。種々異なる品目に基づいた鋏狀價格差のグラフは「日本經濟年報」第二輯一四七頁にある。昭和三年以後はそれを參照。

次は、勞働者大衆、——これは、五人以上の工場および鑛山について見ても、大正八年には就業勞働者數二百七萬九千八人のものが、大正十五年には二百十六萬八千人になつて、僅か八萬九千人を增加したに過ぎない。これはたつた四%の增加である。ところが、同じ期間において、內地人口は一〇%增加した。假りに勞働者人口の自然的增加率もそれと同一だと假定しても、自然的增加率は一〇%だのに、就業者の增加率は四%に過ぎないとすれば、就職不可能の失業者が著しく殖えたことは明かだ。これに、農村で喰へなくなつた者等々を加へれば、過剩人口の增大は大變なことになる。これは諸君の知られる通り、戰後における「就職難」の一般的熾烈化となつて現はれたところのものである。

そんな風だから、また、勞働者やサラリーマンの賃銀や俸給も低落した。日本ブルヂョアジーは、どういふわけか、正確な賃銀統計を發表することを厭がるが、比較的眞相を語るやうに思はれる「商工省賃銀統計表」によると、主要諸產業の平均賃銀は、大正八年から十一年までを最高として、その後は明かに低落を示してゐる。物價が上がつたのに名目賃銀は低落したのだから、實質賃銀

の低落は實に甚だしかつたのだ。

　かうした勞働者狀態の××は、マルクスの謂はゆる「絕對的法則」が、自己を貫徹したのである。この惡化は、主として、戰後における農民その他小生產者大衆の急速な沒落、中小企業の沒落、および强大企業における「合理化」に基づいゐる。これを言ひかへれば、日本における戰後インフレーションの時期は、同時に「資本攻勢」の時期であつたのだ。支配的ブルヂョアジーは、この時期において、勞働者階級が、、、、、、、、、、、、、、、、、勞働條件や賃銀を再び半植民地的な水準に引下げたのだ。

が、それに際しても、彼等は一つの矛盾に陷つた。といふのは、彼等としては、產業合理化と、弱小資本の整理とを、徹底的に押進めたかつたのだが、しかし彼等は同時にインフレーションを持つたので、それが思ふやうに行かなかつたことである。おかげで彼等は、世界的な合理化運動の時期においてドイツやアメリカに對してすつかり立ちおくれてしまつたのだ。

　もう一つ、大衆の消費力を切下げた大きな要因は、租税その他の公課の負擔である。帝國主義

政策とインフレーション政策とのために浪費された巨大な國費は、結局、租税收入によつて××されるのだから、その負擔は直接にか間接にかすべて勤勞者大衆の負擔となる。大正二年――三年の會計年度においては、日本國民は一人當り平均所得の一八%に當るものを租税として負擔したが、大正十二年――三年の會計年度には、二二%の負擔になつた！

かういふ譯で、一方では大衆の消費力が切下げられ、他方では資本の過剰蓄積と過大信用の累積とによつて生産能力が增大した。これでは全く押すに引つ張るだ。かやうに擴大深化した矛盾は、どの道恐慌となつて爆發せずにはゐなかつた。しかもその恐慌は、ますます激烈なものとならずにはゐなかつた。

大正十四年にはもう利潤は餘り增さなくなつてきた。或る產業の利潤は減少し始めた。それは一旦潜在化された過剰生産が、今度は擴大されて表面へ現はれてきたからである。矛盾はいよいよ爆發に近づいた。

ところが、その爆發の時期は、二三の事情によつて早められた。

(一)日本資本主義が戰時において獲得したところのアジア・南洋の市場獨占は戰後もなほ暫くのあひだ續いたのだが、イギリスやドイツの資本は次第に日本資本に對する競爭力を回復したし、米國もまた力強く輸出貿易に進出した。かゝる競爭の激化は、日本資本の貿易利潤を引下げた。そこへ持つてきて、日本商品の最大市場の一たる支那においては、澎湃たる打倒帝國主義の革命運動が進展し、日貨排斥の旗幟は高々と揭げられた。この運動は大正十四年に頂點に達した。更に、印度やエヂプトでも動亂が起るし、各國の關稅も引上げられた。

(二)ヨーロッパにおける戰後の「復興」作業は大正十四五年頃までに大體終了し、商品の需要は急に減退した。更に、大正十四年から十五年にかけて、イギリス、濠洲、カナダ等々の十四ケ國が金解禁をやつたので、デフレーションが起つてきた。それらの原因によつてこの二ケ年には、英・米を始め世界一般に、相當激しい物價下落が起つてきた。

(三)日本では、インフレーションによる物價騰貴に加へて、大正十二年に大地震があつたために、十三年から十四年にかけて輸入が激增し、爲替相場は暴落した。資本家達は、國內市場は惡化し

つゝあつた際だから、爲替下落に乘じて盛んに爲替ダンピングをやつた。しかし爲替の動搖はこわいから、政府は爲替統制に乘り出して正貨を現送した。そこで、兩々相俟つて爲替相場は、大正十四年末から十五年にかけてやゝ急速に回復した。この爲替相場の騰貴も、國内の物價下落を刺戟した。

これらの刺戟も加はつて、大正十五年の日本物價は遂に一一%ほど下落した。

インフレーションによつて潜在化されつゝます〳〵擴大したところの、生産力と消費力との矛盾は、今や爆發せずにはゐなかつた。

産業諸企業の利潤の激しい減少と共に、銀行の狀態も急に惡化を深めてきた。尨大な過大信用は、俄然「氷結した信用」として表面に現はれてきた。東京組合銀行の貸出は、預金を超過すること二七%(!)といふべら棒な狀態になつてきた。それは昭和二年三月のことである。

そこで、戰爭景氣に際して恐ろしく膨脹した鈴木コンツェルンや松方コンツェルンの破産に續いて、臺灣銀行や十五銀行までが破綻を暴露した。それから、どんな騒ぎになつたかは、まだ諸

君の記憶に新しいだらう。

あの金融恐慌の激烈さは、三週間のモラトリアムを必要としたことが何よりも雄辯に物語る。全國で取付を受けなかつた銀行は數へるほどしかなかつたし、騒ぎが一通り鎭まつてからも尚ほ休業を續けた銀行は三十六行に達した。大衆的取付の起つた十日間に、日本銀行は十四億圓餘の兌換券を増發した。卽ち、四月十六日の發行高は十二億二千五百萬圓であつたが、二十六日には二十六億六千萬圓に激増した。つまり、そんなに巨額の支拂手段が一擧に供給されねばならなかつたのだ。

四　デフレーション政策への轉換

大正十四五年頃から破綻を現はしてきたインフレーション政策は、金融恐慌の爆發によつて完全に破產した。

もつとも、インフレーション政策は、金融恐慌の起る前にすでに實質的に破產してゐたのであ

つて、支配的ブルヂョアジーはデフレーション政策への轉換を餘儀なくされてゐた。大正十五年九月に大藏大臣になつた片岡直溫は、金解禁の準備を始めてゐた、金融恐慌は、この轉換の過程において爆發したものである。

勤勞者大衆の××過程が進展し、彼等の消費力の減退のために過剩生産が表面化し、所謂の増加が止むやうになれば、信用インフレーションはもうブルヂョアジーにとつて不用なものになる。そしてそれから先きはたゞ彼等にとつて厄介な事だけが殘るのだ。

第一に厄介だつたのは、インフレーション物價のために生産費を切下げることが出來ず、合理化を押進めることが出來ず、おかげで世界市場の爭奪戰に敗退しさうになつたことである。

が、それと同じ事情は、何よりも先づ繼續的な輸入超過——國際勘定の惡化——金準備の喪失といふ形で彼等の前に現はれてきた。

何しろ、他の國より三割も四割も物價を高くしておいたのだから、どうにも仕方がない。例外的な輸入超過を惹き起した震災年度及び次年度を除いても、毎年平均三億二千萬圓ほどの輸入超

過が、大正九年以來繼續して大正十五年に及んだのだ。七年間の輸入超過の累計は二十七億七千萬圓(一)に達した。このうちの七億圓ほどは貿易外の受取勘定で埋合はされたけれども、總勘定における支拂超過は二十億圓以上になつた。そんな譯だから、金準備もまたずん／＼減つた。大正八年末には二十億もあつたものが、大正十五年末には十三億圓ほどに減り、殊に「在外正貨」は十三億圓から二億圓に激減した。これでは、ブルヂョアジーも落ちつかれまいではないか。

さういふ巨額の支拂超過の繼續は、爲替相場の墜落と動搖を惹起さずにはゐなかつた。これがまたブルヂョアジーにとつて厄介極まるものであることは、諸君のすでに御承知のことである。

それからもう一つ、國家財政の窮乏化が加はつてきた。國家歳出は累年增大を續けるといふのに、租稅收入の方は一向に增さなくなつてきた。從つて、前にはなか／＼大きなものだつた歳計剩餘金は年々減少して、大正十五年にはとう／＼激減した。つまり、もう一歩進めば「赤字」といふところまで來た譯である。

かうなつてくれば、もうインフレーションは、まことに厄介極まるものとなり、ブルヂョアジー

としては、出來ることなら一日も早く清算したいといふことになる。そこへ持つて來て、支配的金融資本としては、デフレーション政策へ轉換するに必要な準備がすつかり出來てゐた。

といふのは、大衆は窮乏化し、國家財政も窮乏化し、金準備の喪失も巨額にのぼつたにも拘らず、金融資本そのものは、インフレーションのおかげでうんと強大化した。金融資本は最強最大の獨占資本として、インフレーションから吸取れるだけの利益はすべて吸取つた。

第一、インフレーションを起すことによつて激烈な恐慌の衝撃を免れた金融資本は、その掌中にある一切の勢力を動員し、一切の經濟上及び經濟外の壓力と妨害と誘惑とによつて着々とその支配權を全産業の上に押擴げて行つた。過剩資本が恐慌によつて處分される場合になつてくると、資本家はおの／＼自分の損を出來るだく少くするために猛烈な鬪爭をおつぱじめるといふことは前に述べたが、金融資本はこの鬪爭において「黄金色に輝ける」勝利の榮冠を得たわけである。これを別な言葉でいへば、恐慌後の資本集中の過程において、金融資本はぐん／＼自己の支配力を强めたのだ。

第二、金融資本に屬する多數の諸企業の中で利得能力を喪失したもの——即ち過剩資本に過ぎないもの——は、國家の保護や補助金などの力により、また合理化などによつて、他の過剩資本を犧牲にして利潤獲得を一應回復した。金融資本に屬する銀行は、「不良貸附」を一通り整理した。つまり、金融資本は、自分の繩張りはしつかりと固め、デフレーション恐慌の衝撃に堪へ得るといふ自信を得た。そこで、デフレーション政策に轉換すれば、物價の低落が起るために自分の競爭者の過剩資本は一氣に「整理」され、競爭者は沒落して自分は更にそれだけ有利な地位に立ち、ます／＼強大化すといふ斷定になつてきた。

これらすべての理由によつて、大正十五年にはすでにデフレーション政策への轉換が企てられたのだが、しかし資本主義の發展法則、資本主義生產の無政府性は、ブルヂョアジーの意圖より百倍も強いので、爆發すべき金融恐慌は容赦なく爆發したといふわけである。

この金融恐慌は更に一つのお土產を殘して行つた。それは第二の救濟インフレーションである。このインフレーションは、全くブルヂョアジーの意圖に反して起つたのだ。彼等がそれを利用して

幾らかでも儲けたとすれば、それは彼等が轉んでも只は起きまいとしただけのことなのだ。

全國的取付の十日間に放出された十億圓の兌換券は、恐慌時の支拂手段の供給として、日本銀行が一般銀行に貸附けたものである。その十億圓中の三億圓ほどは、騷ぎが一通りをさまると日本銀行へ戻つてきた。何故かといふと、預金を取付けた人達は、自分の銀行が安全だつたことを知つてから、再びその銀行へ預金した。そこで、これらの銀行は、日本銀行から借りたものを返してきた。それが、大體において、この三億圓に當るものである。だが、殘る七億圓は日本銀行へ戻らなかつた。これは、日本銀行が、不良銀行・破産銀行に貸附けたものであつて、この不良貸が取れなくて日本銀行が損をするやうになれば、政府はその損を埋めるために××の金を日本銀行に呉れてやるといふ保證をした。これが「特別融通法」——謂ゆる「特融」——による貸附といふやつで、この不良貸は五年後の今日でも尚ほ五億圓ほど殘つてゐる。

で、不良銀行・破産銀行に貸附けた七億圓は、銀行恐慌直後にどうなつたかといふと、彼等はその一部分は預金取付者に支拂つたし、一部分は大銀行から借りた金を返すために大銀行に支拂

つた。預金者の中でも大多數の小預金者達は、丸損をするか又は極く僅かしか支拂つて貰へなかつた。彼等は見事に××された。が、少數の大きな資本家達は預金の支拂を受けて損失を免れた。そして彼等は今度はその金を、ヨリ安全と思はれる大銀行へ預金した。

すると、誰が救濟されたかは明かだらう。それは、損失を免れたところの大銀行や大資本家だけだつた。そして、損失の負擔は、一部分は小預金者達に××されたし、一部分は一先づ國家に××されたのだ。何故といつて、大資本家や大銀行は不良銀行に對する債權を取立て、しまつたが、不良銀行はその取立てに應ずべく日本銀行から借りた金の方は返せない、そして不良銀行が返せない時は政府がそれだけの金を日本銀行に××××××といふのだから、事は明瞭だ。そこで、結果においては、政府が大資本や大銀行に金を××××××のとおんなじだが、政府は別に金のなる木を持つわけではなく、くれてやつた金は後で××として×××××から取立てるのだから、負擔はすべて×××××××されたわけである。

ところで、この救濟騒ぎを通して、大銀行の手には巨額の預金と資金がころげ込んできた。彼

等はフイになりさうな貸金を急に取立てることが出來たばかりでなく、弱小銀行の手にあつた預金も急に彼等のところへ集つて來たのだから、無理もない。おかげで、五大銀行の預金は俄かに六億圓ほど増加した。次表を見給へ。

第一表　五大銀行の預金増加

	全國普通銀行	五大銀行	五大銀行の占める割合
	百万円	百万円	%
大正十五年末	九、〇一一	二、二三二	二四・七
昭和二年末	八、九〇六	二、八一七	三一・六
昭和三年末	九、二一五	三、一二九	三四・〇

だが、かうした大銀行預金の激増は、必然的に利子率の低落を惹き起し、それによつて新たなる救濟インフレーションを起さずにはゐなかつた。

金融資本は、自己の銀行が手に入れた莫大な預金を利殖するために日本銀行に二億圓の手持公債を吐き出させ、政府に三億五千萬圓の公債を發行させた。彼等は更に、今こそ諸會社は高利の負債を低利の社債に借替へる絶好時機だと宣傳した。そこで諸會社は盛んに社債を起し、大銀行

と信託會社は爭つてこれを引受けた。大阪市電氣事業債の五千三百萬圓の如きは、三井銀行の一手引受で、二圓餘のプレミアムまでついた。公債や社債の發行の限度に達すると、彼等は今度は取引所投機へと方向を轉じ、取引所景氣を助成した。

この新たなるインフレーションは、もはや商品價格一般を騰貴させる力はなかつたが、有價證券の價格を高め、重要商品の價格下落を阻止したことは爭へぬ。かうした傾向は、商品生産を刺戟し、生産事業の擴張や新設を促して、過剰生産と過剰資本の繼ぎ足しをする働きをした。そしてそれと共に、「不良會社」の整理を妨げた。で、一口に言へばこのインフレーションは、またもや過剰生産恐慌の爆發を一應喰ひ止めて、既成の矛盾を更に深大化したのだ。

が、他方において、金融恐慌は、多數の弱小銀行を沒落させ、それと共に弱い資本家企業や小生産者大衆を大量的に沒落させた。そこで今度はいよ〳〵、就業勞働者の數が絶對的に減少するといふことになつた。かくして勤勞者大衆の消費力は更に激減した。

さういふ譯だから、インフレーションにも拘らず資本家企業の利潤率は一般に低落した。從つ

て、銀行利潤も低落した。五大銀行の利潤すらも低落した。これは、利息を拂ふ預金の方は激増したといふのに、利息をとる貸出の方はそれほど増さないといふ、新しい矛盾が起つたからである。

かくて、インフレーション政策の破産は今や完結した。しかるにまた、デフレーション政策への轉換の必要は、次の事情も加はつたために、もはや絶對命令的なものとなつてきた。

事情といふのは、金融恐慌後、爲替相場はまたも甚しく低落し、またも激しく動搖したことだ。そしてその原因の一つとして、「在外正貨」が極度に涸渇したことだ。在外正貨は一億圓にも足らなくなつた。そんなことは日露戰爭以來無かつたことだ。しかるに、金輸出禁止を繼續してインフレーションを起してゐる限り、輸入超過＝支拂超過を少くする見込は全くなくなつた。さうかといつて、日本から正貨を現送し、金を流出させたりすれば、またもや恐慌騷ぎが起きてくる。この窮境を脫する應急手段としては、外國から金を借りて在外正貨を補充するよりほかなくなつた。ところが、外債を起すとなると、金輸出禁止などをしてゐたのでは、相手に足下を見ら

れてこつぴどい條件を強ひられる！

で、日本ブルヂョアジーは、これらすべての事情のために退つ引きならないところまで追ひ詰められて金解禁をやることになつたのだ、デフレーションを起すことになつたのだ。一口に言へば、インフレーション政策の破産の完結によつてデフレーションを強制され、金解禁を強制されたのであつた。

第十五講　金解禁から金再禁へ

一　金解禁

一九三〇年（昭和五年）一月の金解禁は、以上の如き事情によつて、日本ブルヂョアジーが實行を餘儀なくされたものである。彼等としては、すでにデフレーション政策と金解禁を餘儀なくされた以上、國內的にも國際的にも、この政策の線に沿うて出來るだけ自己の利得と勢力とを強大ならしめようと努めたのは言ふまでもない。

彼等の意圖の中心目標は、世界市場における彼等の競爭力の增大といふことだつた。

金解禁をやれば、爲替相場が安定し、貿易上の障碍が除かれるから、それだけ貿易利潤の總額も增加し得るだらう。また、金解禁によつて國內物價が低落すれば、彼等の商品の生產費を切下げることが出來るから、それだけ世界市場における彼等の競爭力は增大する、それによつても、

貿易利潤は増大するだらう。同時にまた、國内物價が低落すれば、輸入は減つて輸出は增すから、累年の輸入超過は克復され、貿易上の支拂超過は餘程少くなるか乃至は却つて受取超過になる。おまけに、貿易が増進すれば、それに伴つて運賃や保險料の收入も增す。さうなればいよ／＼もつて國際勘定は改善され、今迄のやうに年々金を失ふやうなことはなくなつて、あべこべに年々金が流入して來るだらう。さうなつてこそ、本當に金準備の涸渇を免れることが出來、豐富な金準備を獲得し得るだらう。いや、全くそれが根本對策といふものだ。――と、彼等は考へた。

金解禁といふ仕事を引受けた濱口内閣は、忠實にこれらの意圖を實現せんとしたのであつた。だから、――諸君もまだ忘れはしないだらう――金解禁當時のスローガンは緊縮・消費節約・整理・合理化、低物價・低原價、といふやつだつた。また、こんなのもあつた。――「強く正しく明るき政治」、「財界安定國運發展の根本政策を遂行する」、「國民は協力一致國家の借金を返さねばならぬ」、「金解禁の斷行により國際經濟の常道に復す」、「解禁は財界甦生の第一歩」、「産業合理化の提唱」、「失業對策の萬全を期す」、等、等。吾々は、かういふやつを、デマと言ふのである、

――吾々が當時徹底的に暴露したやうに……。

もちろん、ブルヂョアジーは、上に述べたことの外にも、金解禁による利得をいろ〳〵摑むことをもくろんでゐた、――また摑みもした。金融資本は、物價の低落と信用の收縮のために國内の「弱體企業」が窮地に陥るのに乘じ、整理、買收、合併等々を押進めて、自己の支配を擴大强化する。また、最大の債權者としての彼等は、物價下落・貨幣價値騰貴によつて、自働的に利得する。更にまた、下落してゐた爲替相場が囘復する機會を摑んで、投機利得をものにする。等、等。

が、金解禁をやれば、物價が下落するのみならず、金も流出する。いづれも、彼等としてはちつとも有難くないことである。しかし、もう背に腹は代へられなくなつてゐたし、それに彼等は、物價下落も金流出も、ほんの一時のことで、しかも僅かで濟むと思つてゐた！　が、それにしても、彼等が最も怖れたものは金流出であつた。理由はもう諸君におわかりだらうと思ふが、彼等の特に怖れたのは、激烈な金流出を導火線とする金融恐慌の××だ。それはさうだらう、彼等は

二年前に度膽を抜かれたばかりだし、大體彼等の金融機構そのものが××なのだ。

そこで、日本ブルヂョアジーは金流出を少くすることと、金融機構を防衛することとを主眼として、金解禁の準備をした。また、解禁後も、一貫してその方針で進んで行つた。

ところで、——何といふ皮肉だらう——、彼等が金解禁の準備を決定的に開始したのは、第三期世界恐慌の導火線たる米國取引所恐慌が爆發する四ヶ月前であつたのだ。彼等は、差迫つてゐた世界恐慌を見透すことが出來なかつたのだ。米國取引所恐慌は昭和四年十月―十一月に起つた。當時、あの恐慌を、當代隨一のブルヂョア指導者井上準之助は何と見てゐたか、——興味ある問題だ。

『御承知の如く亞米利加は戰後引續き繁昌を續け、一昨年頃から株の相場が非常に高くなり、それが昨年十月の末に反動が來まして急激に株が下つたのであります。恰も大正九年の日本の財界の反動の如き狀態(!)であります。その時は唯單に有價證券市場の恐慌である、亞米利加全體の經濟狀態には何等重大なる變動を與へるものではない、譬へて申しますと、人の身體の何處

かに腫物が出來て、それが潰決して膿が出たと云ふやうな次第でありまして、其人の身體全體には何等狂ひのないものである、斯う云ふ觀測をし、我れ人共に左樣信じて居つたものであります」。

もつとも、これはひとり井上に限つたことではない、すべての國のブルヂョアジーが、米國は大丈夫だと安心し切つてゐた。それに大體、恐慌を前にして恐慌の見透しを缺くといふことは、古今東西のブルヂョアジーに共通な、全く特徴的な事柄なのだ。

が、さて、金解禁準備の具體的方策だが、それは、第一、國家財政の「緊縮」と、消費節約の宣傳（「緊縮小唄」等）、――これは主として輸入を減らして金流出を防がうとしたものだ。第二、新規の公債募集をやらないこと、謂ゆる「非募債主義」、――これは、第一の方策と相俟つて財政の均衡の回復を目指しもしたが、それよりも當面、公債市價の下落を阻止して金融機構を防衛せんとするものだつた。日本の銀行わけても金融資本は、前講に述べたやうに、昭和二年以來莫大な公債を集中的に所有するに至つたので、公債市價の下落は彼等の最も恐れるところであつた。

この「緊縮財政」と「非募債主義」とは、デフレーション政策の表看板ともいふべきものであつた

のだ。

もう一つ、――第三には、ヨリ技術的な方策として、政府は、大藏省預金部の資金まで流用し、一億數千萬圓の金をつかつて急速に爲替相場を釣り上げた。更にまた、米國と英國から一億圓のクレデット（一年間）を得た。これは專ら急激な金流出を防止する手段であつた。

金流出を恐怖する理由はわかるとしても、何故そんなに金の流出する惧れが多かつたのか？根本的にはもちろん日本が巨額の支拂超過國であつたからだが、もつと直接的には、猛烈な爲替投機の起る危險があつたからである。つまり資本家達が投機利得を追求する結果、激烈な金流出の起る惧れがあつたのだ。

が、かゝる投機は、ブルヂョア政府の防止し得るものでなかつたことはもちろんだ。金融資本は、金解禁前に爲替が下落してゐた時、卽ち圓が安かつた時に、アメリカで弗を借込んで圓を買つておき、解禁されてから正貨現送によつて弗を返して儲けようとした。また、弗で支拂ふべき金を金解禁後まで支拂はずにおき、解禁後正貨現送をして支拂つて儲けようとした。更に、大正

十三四年頃の爲替下落の時期にすでに金解禁を見越して電力會社その他が米國から借込んでゐた金も巨額に上つてゐた。さういふ譯で、金解禁後、それらの投機利得を實現すべく、眞先きに正貨現送をやつたのは三井銀行や三菱銀行であつた。今度の金再禁止を見越して盛んに弗買ひをやつて儲けた連中は、金解禁に際しては圓買ひをやつて大いに儲けてゐたのだといふことは、注意すべき點である。

二　恐慌の發展

資本主義日本は、たとひ第三期世界恐慌に捲き込まれなくても、金解禁と共に急性的なデフレーション恐慌を持たずにはゐなかつた。そして、それ自體のデフレーション恐慌を持つ日本は、どの道、第三期世界恐慌の「震源地」の一つとならずにはゐなかつたのだ。

ところで、先づ、金解禁をやれば何故に激しい物價低落が起るのか？　これも諸君にはもうおわかりのこと、思ふが、念のために言へば、解禁と同時に金そのものが國際支拂手段として自由

に出動し得ることになるから、下落してゐた爲替相場は平準點を回復する、そしてそれと共に圓の價値減少は無くなるから、それまで價値減少した圓で言ひ現はされて高くなつてゐた商品價格は今や低落する、といふわけだ。この物價低落と共に、通貨の收縮が起ることも明かである。で、別な言葉で言へば、金解禁は、爲替インフレーションを清算して、物價下落、デフレーションを惹起すのだ。

ところで、昭和四年六七月頃の爲替相場はおよそ四十四弗であつた、即ち弗に對する圓の下落は一二%ほどであつた。だから、爲替相場が平準點を回復して五十弗近くになれば、物價の方はそれに應じて約一二%低落することになる。しかし、昭和四年の日本にはもう過剩生產の現實化が始まつてゐたので、爲替相場の下落にも拘らず物價は上らないで却つて下げてゐた。從つて、爲替相場の回復騰貴といふ原因によつて物價の下落する率は、一二%よりも少くて、恐らく七%か八%ぐらゐのものに過ぎなくなつてゐた。

然るに、昭和四年七月の日本物價は、大正三年七月の物價水準を一〇〇とすると、なほ一七四

といふ高い水準にあたつたのだ。これは、第一表の如く、米國の物價水準より二一%も高いものだつた。

第一表　物價指數の比較

	日本	米國	英國
大正三年七月	一〇〇	一〇〇	一〇〇
昭和四年七月	一七四	一四四	一四一

かやうに日本物價が高位にあつたのは、爲替インフレーションのみによるのではなく、——爲替の下落は一二%に過ぎなかつたから——、信用インフレーションによるところが多かつたのだ。そしてこの信用インフレーションもまた、金解禁デフレーション政策によつて清算されずにはゐなかつたのだ。政府の「緊縮財政」と「非募債主義」は、從來過大信用によつてつくり出してゐた商品需要を消滅させる。それと共に、一般銀行が與へてゐた過大信用も收縮を餘儀なくされる。金流出による利子率の騰貴もそれを促進する。更に、爲替下落に基づく輸入の不利は金解禁と共

に無くなるから、外國商品の競爭が強く感ぜられ、これもまた信用の收縮を促進する。

かういふ風にして信用インフレーションが清算されてしまへば、物價はそれに應じて低落し、少くとも英米の物價水準と一致する邊まで低落しなければならなくなる。從つて、假りに英米の物價が昭和四年七月の水準に停止してゐたにしても、日本物價は約一七%ほど下落せずにはゐなかつたわけである。少くともこれだけのものは、日本自體に起るデフレーションに基づく下落であつたのだ。

ブルヂョアジーも、——間違つた理論的見解に基づいてではあつたが、——およそそれ位の物價下落は來るものと考へてゐた。しかし、彼等はまた、大體それぐらゐの下落ですむものと考へてゐた。そして、それが大變な間違ひであつたのだ。

彼等が全く見落してしまつたのは次のことである。卽ち、一九二九年の下期に始まつた世界恐慌は、日本をも含む資本主義世界を襲つた未曾有の過剩生產恐慌であること、しかもその恐慌は同時に、日本をも含めた世界的なインフレーション的諸要素を清算せんとする恐慌であつたこと、

これである。

かゝる恐慌である以上、物價の下落は一七%やそこいらですむ筈はない。日本物價が低落して英米物價に追ひつかうとしても、英米物價そのものがぐん／＼落ち込んでゆく。それがどこまで落ち込むかと言へば、少くとも戰前の物價水準まで低落することは明かだし、本當は戰前の水準よりも餘程低いところまで落ち込むべき筈なのだ。何故かといふと、戰時および特に戰後における技術的進歩や合理化のために、勞働の生產性は資本主義世界のどこでもで飛躍的に高まつた。即ち同一の商品は、今日、戰前よりもずつと少い社會的勞働時間によつて生產することが出來る。即ち商品の價値は一般に戰前よりもずつと低落した。そして過剩恐慌なるものは、高められてゐた商品の價格をその價値にまで一致せしめる作用を營むのだからである。

さうだとすれば、物價はたゞ戰前水準まで下るだけだとしても、昭和四年七月を基準とする日本物價は、四二・五%も低落しなければならないのだし、戰前水準以下に落ち込むとなると、五〇%の低落になるか、六〇%の低落になるかわからんといふ事情であつたのだ。

さういふわけで、吾々は當時、「解禁恐慌」の發展を展望した際に、次のやうな結論に基づいて、當時のブルヂョア的デマを暴露したのであつた、——「解禁恐慌の過程は、これらすべての理由により、またブルヂョア的對策も作用することにより、恐らくはなか〳〵長期に亘り、且つ多くの曲折を持つであらう。そしてその營む作用は、全體として、經濟的にも社會的にも極めて深刻でなければならぬ。」

では、恐慌はどんな風に發展したか？

前にも言つたやうに、政府は、昭和四年六月にすでに、金解禁をやつてデフレーション政策を聲明し、解禁準備として急速に爲替相場の釣り上げを開始した。

これは、潜在的な恐慌諸要因を現實化して、恐慌爆發の導火線を與へるのに十分だつた。が、それと並んで、資本主義世界のこゝかしこで第三期世界恐慌の口火は切られ、それとこれとが互ひに作用し反作用しつゝ、世界恐慌の火の手は全面的に擴がつて行つた。

日本における第三期世界恐慌の發展過程については、私はすでにかなり詳しい研究を發表し

てゐるので、詳細はそれに譲ることにして、こゝでは極く太い線で發展の粗筋だけを描いてゆく。――

昭和四年六月に濱口解禁内閣が出現した前後から、物價と株式相場の下落は急歩調を帶びてきた。そして八月には、先驅的な取引所ガラが起つた。銅、鐵、鋼などのや、激しい下落も現はれた。

十月から十一月にかけて、銀塊相場の暴落があり、また米國取引所恐慌が爆發した。銀の暴落は支那の爲替相場の暴落を惹起したので、支那を最大の輸出先とする綿糸の價格も暴落した。米國取引所恐慌の爆發は、生糸價格の暴落を惹起した。生糸及び綿糸の暴落は、同時にまた、日本の爲替相場の急激な回復騰貴によつて拍車をかけられたことはもちろんだ。

昭和五年一月に金解禁が實行されてから間もなく、砂糖と硫安も暴落した。綿糸は、銀の相場がべら棒に下るのと、インドが關稅を引上げたことなどで、三月まで大きく下げつゞけた。三月には、國家の負擔において生糸資本家と銀行とを救濟する「糸價補償法」が實施された。

四月になると、船會社株の大崩落を先頭とする二度目の取引所大ガラが來た。それから銅の激しい下落。生糸も「補償法」を尻目にかけて大暴落、そして七月まで釣瓶落し――。同時に一方、繭の暴落、小麥の暴落、そして蔬菜や果實の暴落も加はつて、急性的な農業恐慌が爆發した。

諸商品は、全體として、六月―七月に最もひどい下落を演じた。重要諸産業は、例外なしに、恐ろしく高率の生産制限をやつた。それと並んで、賃銀は猛烈に切下げられ、失業者は加速度的に増大した。

事業計畫資本（事業への新投資）は、加速度的に減少した。貿易は、加速度的に減少した。殆どすべてのカルテルにおいて、ひつきりなしに混亂が起つた。一二のカルテルは實質的に崩壞した。

他方、金解禁による金流出は、八月までに二億二千萬圓に達した。そのうちの八千萬圓は、資本の逃亡をも意味する海外投資によるものだつた。これと並んで銀行の預金は毎月減少した。し

かるに銀行の貸出の方は、舊貸付がずん／＼氷結してゆくので、却つて増大した。六月末および八月末の貸付利率は、危險プレミアムを含んで急騰した。そして、公債は暴落した。

恰度その頃までに、恐慌の狼は重工業部門をも完全に呑みつくした。と同時に、恐慌の旋風中心は、産業の部面から金融の部面へ移つて行つた。デフレーションによつて金融部面に激成された矛盾は恐ろしく×××してきた。それは、金流出と、利子率昂騰、公債下落、等を契機とするものだつた。信用の極度の緊張が起つてきた。信用××は成熟した。そしてそれを直接原因とするところの、一ダースほどの大企業の破綻暴露の××が迫つた。信用××は銀行を捲き込みさうになつてきた。

そこへ持つてきて資本逃亡による第二の急性的金流出が起つてきた。正金銀行は一生懸命に正貨を現送して爲替相場の下落を喰ひ止めようとしたのだが、相場は正貨現送點以下に落ちてゆく！　かくて十月には、支配的金融資本及びその政府のあわてふためいた政策轉換が起らずにはゐなかつた。卽ち、「徹底的整理」を高唱してゐた彼等は、「應急的救濟」への急旋回を餘儀なくさ

れた。

各種のカルテルは、再組織をやるやら大騷ぎをして、シンヂケート化やトラスト化への努力をした。

だが、同じ十月に、米の暴落、農業恐慌の異常な尖鋭化。

農產物價格は殆ど半減した。農民の副業や賃勞働の收入も激減した。おまけに政府は、都市の失業者大衆を自ら救助しないでどし／＼農村へ歸してやつたので、それによつて農民の負擔は更に加重した。

かくして今や廣汎な農民層はたゞ借金に借金を重ねることによつてのみ生產を續けねばならなくなつた。しかもその借金をすることすらが、多くの農民にとつて×××化してきた。農民の大衆的な沒落、恐ろしい窮乏化。

同時に一方、國家財政は、歲入の激減によつて、破綻を、赤字を現はしてきた。「救濟資金」として利用し得る大藏省預金部資金も涸渇した。そこで、デフレーション政策の表看板だつた「非募

債主義」も、實質的に拋棄されざるを得なくなつてきた。

三　デフレーション政策の破産

かういふ風で、日本ブルヂョアジーのデフレーション政策は、昭和五年の十月からもう破産し始めた。その月の物價は、昭和四年七月の物價水準よりも二五%ほどの下落になつてゐた。つまり、彼等のデフレーション政策は、二五%の物價下落によつてぺちやんこになつたのだ。

こゝに諸君の記憶すべきことがある。彼等は、インフレーション政策の完全な破産によつて、デフレーション政策への轉換を餘儀なくされたのであつた。そして、その強制された新政策を、「財界甦生への第一歩」だなどと吹き立て、堂々と遂行したのであつた。しかるにそのデフレーション政策は、たつた一年と四ヶ月で、早くも破綻に追ひ込まれたのだ！

かうした政策破綻を反映したところの、彼等のスローガンの變化もまことに面白い。初めの頃の「消費節約」は、いつの間にか「國産愛用」に變つてゐた。「買ふな」が「買へ」に變つたの

だ。初めの頃の「産業合理化」は、いつの間にか「産業統制」に變つてきた。前には、生産原價を切下げろと言つてゐたのが、今度は販賣價格を釣上げろといふことになつたのだ。

時の政府は、公債は斷じて募集しないと口先きでは痩我慢を言つてゐたけれども、昭和五年末にはもう何とかかんとか理窟をつけて事實上公債募集をやり始めた。それに大體、資本家救濟のためになけなしの國庫金を投げ出すやうになつては、もう「緊縮財政」もくそもあつたものでない。

政府は、破産に瀕した大企業――樺太工業、日本製糖、日本人肥、日本麥酒鑛泉、東部醸造、淺野セメント、等々に、興業銀行を通じて救濟資金を供給した。株式投機市場へも救濟資金を供給した。一部の地方へも勸業銀行を通じて救濟資金をばら撒いた。また、公債價格の釣上げと銀行の救濟とのために、市場からも銀行からも巨額の公債を買上げた。これらのために新たに放出された救濟資金は三億圓を下らなかつた。そしてその大部分は政府及び日本銀行から出たのであつた。

さういふことをすれば、新たな救濟インフレーションが起るのは當然だ。それはもう、デフレーションからインフレーションへの逆戻だ。その上、日本銀行をして自由に有利に通貨を供給させるための保證準備發行の額の限度擴張といふことも計畫されるといふやうな有様になつてきた。

四　恐慌深化の新局面

救濟インフレーションは果して起つた。

今言つたやうに、昭和五年の第四四半期は全く切迫した狀勢にあつた。各地方に起つた銀行××の浪は高まり擴がつて、××××××は金融××の門口に立つた。ブルヂョアジーは、デフレーション政策の抛棄を迫られた。彼等は信用××を喰ひ止めるためにインフレーション的操作を餘儀なくされた。救濟資金は三億圓も放出された。支拂手段として供給されたこの巨額の貨幣は、流通手段として社會的に必要な貨幣の量を遙かに超過した。

それと共に、恐慌期に特有な貨幣の運動が進行した。貨幣に對する請求權——債權——を行す

る資本家や銀行は、大急ぎでその請求權を實行して貨幣そのものを手に入れた。自己の貨幣資本を保管する場所(中小銀行等々)の××を感知した人々は、預金になつてゐるそれを爭つて引出して、ヨリ安全に見える場所(大銀行等々)に移した。これらすべては、金融市場の分裂を――卽ち危險な部分と比較的安全な部分とへの分裂を、激成した。

その結果、たつた二つか三つの大銀行だけは、手許にあふれた資金を持てあまし、短期の貸付利率をはかに引下げた。そしてそれは、昭和六年の二月から三四月にかけて金融緩慢の外觀を與へることとなつた。

それと同時に一方、若干のカルテルが生産制限率を引上げたり、シンヂケート化したことなどのために、經濟インフレーションと相俟つて、物價の下落は一時停滯した。

更にまた、棉花の輸入が激減したこと、しかも、例年よりもその輸入期が後れたことなどによつて、輸出超過の時期から輸入超過の時期への移り變りがおくれたので、何だか貿易勘定が改善されたやうな外觀も現はれた。

ブルヂョアジーは、これらの現象を捉へて、「不景氣底入れ」の宣傳をした。物價はもう下げるだけ下げてしまつてこれ以上下らない、貿易勘定も、輸入超過がこんなに少くなつて、すつかり改善された、金融は緩慢になつて金利が下つたから、事業を刺戟する、だからもう不景氣はおしまひだ、と景氣よく說き立てた。

また、前には、――金輸出禁止をやる外に日本の財界を救ふ途はない、金輸出再禁止こそ恐慌を克服し、景氣を挽回し、財界立直しの第一步をなすもので、しかも橫暴な金融資本を膺懲する方法ともなるものだ、――かういふことを言つてゐた「再禁止論者」なる人達も、今言つたやうなブルヂョア的宣傳に調子を合せ、半年前の「悲觀論」から俄かに「樂觀論」に早變りして固有のオポチュニズムを曝け出し、少くとも一年位は好況が續くだらうなどと言ひ出した。

恐慌現象を過小評價することがマルクス主義的だと考へてゐる人達も尻馬に乘つて、金融××の表面化が喰ひ止められたこと、金流出に中斷があつたこと、一時的にでも改善が生じたことなどを指摘してはしやぎ立て、金輸出再禁止の不可避性などは問題にしようともしなかつた。

だが、吾々の見解は、それら一切の傾向と鋭角的に對立した。吾々は次のやうに主張した——そこにはたゞ、改善の外觀があるだけだ。現實の改善などは一つもない。一時的な改善すらもない。おまけに、その改善の外觀を持つ新しい局面は、正に恐慌の××によつて生じ、恐慌の深化そのものを意味し、更に新たなる深化を約束する。物價の下向運動の一般的な終了などはどこにも見當らぬ。下向運動の一時的な澁滯こそ、反動的な激しい下落を孕んでゐる。貿易勘定の「改善」と見えるのは、實は、貿易全體が破局的に減退したことの現はれであり、且つ入超期と出超期との常態的なけぢめがなくなつたことを意味してゐる。

また、金融緩慢が宣傳され、金融緩慢らしい外觀は一方にあるけれども、他方廣汎な「危險な市場」にはべら棒に高い金利が支配する。「比較的安全な市場」の金利でさへも、一般的には危險プレミアムを含む高利率を示してゐる。しかも「危險な市場」はます〳〵擴大されて、安全な市場の安全性を奪ひつゝある。

わけても支配的金融資本は、救濟インフレーションを通じ、自己の不良貸附を政府や日本銀行

に押付けることによつてまんまと巨額の遊資を握つたのだが、彼等は、――金融資本の錯覺者達か事業資金の利息も下るだらうなどと皮算用をしてゐるうちに――、日本ではなくて外國の公債や社債を買ひ込まうともくろんでゐる。さういふ調子だから、またも新たなる資本逃亡によつて、またしても急性的な金流出が起るにきまつてゐる。

――と。

五　全面的な惡化

事實において、全面的な惡化は間もなく始まつた。

主要商品の價格及び一般物價は、またも激しく下落した。第一表を見給へ。

第一表　物價指數の低落

	銅	洋鐵	石炭	綿絲	生絲	洋紙	砂糖	木材	米	麥	總平均
昭和六年四月	九二	七〇	二四二	一五〇	七七	一〇七	二三九	一〇三	一五四	一三四	一一七・九
同　十月	七四	六四	二三三	九八	七〇	一五七	二三八	一三七	一四八	一〇七	一〇六・九

電氣事業や海運界の惡化も特に甚だしくなつてきた。

前年は豐作であつたが、今度は凶作のために農業恐慌は更に一段と尖鋭化することも確實になつてきた。しかも、凶作の見透しは確實化したにも拘らず、米の相場は却つて下落した。

更に、資本家諸企業は、ひどい生産制限をやり、また投賣りをやつたにも拘らず、賣れない商品の山（滯貨）は、下半期を通じて殆ど減少しなかつた。そして十一月の滯貨は、前年同期よりも却つて增加した。第二表を見給へ。

第二表　滯貨個數

昭和六年二月	21.840
六月	22.113
七月	21.806
八月	21.883
九月	21.007
十月	20.001
十一月	21.886
前年十一月	21.755

貿易の萎縮は、ます〱××的な性質を帶びてきた。そのことは、恐慌の影響を受けなかった昭和三年の貿易と比較すると最も明瞭だ。

昭和六年六月の貿易は、三年六月に對して三七・九％の減退に止まつてゐたが、その後減退率は次第に大きくなつて、十一月には五二・〇％になつた！　即ち、半額以下に減つたのだ。しかも、輸出の減退するテンポは輸入の減退よりも早く、前者が後者を追越しさうになつてきた。輸入の方は、四二・三％の減退（六月）から、五四・〇％の減退（十一月）になつたが、輸出の方は、三二・五％の減退から、五〇・三％の減退へといふ大變なスピードを出してきた。

日本ブルヂョアジーの貿易勘定改善の希望はこゝに全く消えねばならなくなつた。

昭和五年の貿易總額は、四年より十四億圓も減つたのに、輸入超過は一千萬圓しか減らなくて一億六千萬圓にのぼつた。昭和六年には五年よりも更にまた七億圓も總額が減つたのに、輸入超過の方は二千萬圓しか減らなくて、まだ一億四千萬圓もある。そして六年の貿易總額は、早くも、四年の二分の一近くまで落ちてゐる。この調子では、貿易額を十分の一位にまで減らさなく

ては、輸入超過の克服などは出來さうもない！

かういふ譯で、デフレーション政策は、いよ〳〵完全な破產に近づいた。日本ブルヂョアジーは、貿易改善の限度にぶつかつて、國際的競爭における敗退の危險に脅かされてきた。「整理の徹底」など、言つては見たもの、、そして整理を進めては見たもの、、整理を要する資本の額は、正に××そのものが深まるために際限もなく殖えてきて、信用××の地盤は刻々に××××ゆく。

か、る全面的な××――これこそ、日本資本主義を國際金融恐慌の一環たらしめた基本的事情であつたのだ。

そして、そこへ持つてきて、果して激烈な金流出が起つてきた。――

第十六講　強制された金再禁止

一　弱き一環としての日本

資本主義日本が金輸出再禁止を強制されるだらうといふこと、従つて圓の價値減少が起るだらうといふこと、――さういふ見透しは、昭和五年の第四四半期においてすでに可能であつた。吾々は、當時、そのことの物質的基礎を究明した。

信用＝××××の加速度的な成熟、こゝかしこでの破綻の××、大量的な金流出、ひつきりなしの正貨現送にも拘らず爲替相場の低落傾向。さうしたことのために、その頃からすでに圓に對する信頼は失はれ始めてゐた。そして、潜行的な預金××と並んで、資本の逃亡が起つてゐた。大藏省の報告によると、昭和五年度の「本邦人海外放資」は、二億七千萬圓にのぼり、尖鋭な恐慌期にも拘らず、前年より却つて四千四百萬圓も増加した。出て行く方は多くなつたが、入つ

てくる方は減少した。即ち、「本邦人海外放資回收」の方は、恐慌期に拘らず、却つて六千萬圓も減少した。これらの金額の少なからぬ部分は、多かれ少なかれ、圓に信頼を失つた日本資本の國外逃亡を意味したのだ。

指導的金融資本は、昭和五年の秋まではまだ明かに金本位維持に向つてゐた。だが、切迫した××××を辛うじてインフレーション的操作で喰ひ止めてからの金融資本は違つてきた。彼等は、一方では金本位維持に執着しながらも、他方では自ら金本位の××に導く行動をとらずにはゐられなかつた。

昭和六年（一九三一年）の春に激成された金融市場の分裂は、大きな危險信號の一つであつた。この金融市場の分裂は、第一の轉換點をなした。二三の巨大銀行の手に集中されて「金融大緩慢」を現出した巨大な遊資――どこにも手のつけやうのない遊資――は、利廻りがいゝから外債を買ふのだといふ名の下に、米國へ、英國へと送られた、主としてこれに原因する昭和六年度の金流出は、九月中旬までに約七千萬圓にのぼつた。

かくして資本流出は、圓に對する不安によつて強められたのだが、同時にまた、圓に對する不安そのものは、金流出により、正貨準備の際限もない減少によつて強められたのだ。

第二の、そして決定的な轉換點は、九月に來た。

一九三一年の九月は、十八日に「滿州事變」の勃發を持ち、その三日後に、英國金本位停止＝磅の崩落を見た。弱き一環としての日本資本主義、國內狀勢の全面的××を持つた日本は、この時から、決定的に國際××恐慌の鎖の一環となつてゐる。

それ自身××過程の一產物である「滿州事變」の勃發は、資本主義日本をいきなり「戰時狀態」に引入れただけではない、特殊な國內政治狀勢の異常な緊張に導いた。かうした事變と異變とは、その發展によつておのづから金輸出禁止＝兌換停止を惹起するのを常則とする。

同時に一方、「世界の銀行」英國の金本位と磅との凄まじい崩壞は、日本の金本位と圓に對する不安を激成した。「英國がやる位だから日本も」といふ考へは、電波のやうに全ブルヂョア階級に擴がつた。

ところが、前にも一言したやうに、日本の支配的金融資本による外債買付その他の投資は、金本位停止當時の英國において二千萬磅（約二億圓）にのぼつてゐた。この巨額の資金は、今や、英國の貨幣本位恐慌、磅の下落にでくわして數千萬圓の損失勘定を生ずるに至つたのだ。そして、その損失を免かれる×××××は、今や日本自身の金本位停止によつて圓を下落させるにあるといふことになつてきた。

この時から、金再禁の不可避性は現實的に決定し、その事實化は單に「時期の問題」に過ぎなくなつたのだ。

が、何と特徴的なことだらう、最大の指導的金融資本は、この時、弗買ひ投機の最先頭に立つたのだ。彼等は、英國の金本位停止直後の數日間に、一億數千萬圓の弗爲替を買ひ込んだ！

利潤のための生産、その基礎の上に立つ資本主義社會は、かくも偉大な『非愛國的な投機者流』（井上に言はせれば）の登場するのを妨げる力などはない。それは全く『合法的な營利行爲』（三土に言はせれば）であつた。そして彼等の投機の目的物は、必ず下落すべき日本の圓であつ

たのだ。「エコノミスト」の言ひ草ではないが、彼等は「日本を取引した」のである

二　弗買ひと金流出

きちがひじみた弗買ひ投機の勃發と共に、氣違のやうな金流出が起つてきた。——不思議はない。

が、それだけではなかつた。それとうち重なつて、輸出貿易に對する致命的な打撃が來た。といふのは、磅爲替の下落に乘じた英國商品は、日本商品を押しのけて東洋市場わけても支那市場へ進出した。日本資本は見る〳〵市場を奪はれてゆく。——もつとも、それは、ブルヂョアジーが當時宣傳したやうに、「磅下落による英國の有利な地位」といふことのみに原因したのではない。それよりもむしろ、「××××」と共に捲き起つた澎湃たる「排日」の浪、それが決定的な原因であつたのだ。そこへ持つてきてインドはまたも關税を引上げた、等、等、といふわけで、國際金融恐慌と金本位崩壞の暴風雨は強烈に日本を襲つたのであつた。

そこで、何よりも先づ、綿絲布の輸出がぺちやんこになつた。前には大威張りだつた紡績資本家は、「商談一つない十一月」を過さねばならなかつた。

が、賣る方の「商談」は無かつたが、彼等は買ふ方の「商談」でその埋合せをつけようとした。卽ち、棉花の見越輸入であり、弗爲替投機である。彼等は、金輸出禁止を見越し、それによる値上りを思惑して、やけにアメリカの棉を買付けた。あんまり途方もなく買ふものだから、米國の新聞は、これは××準備の綿火藥用のものに違ひないなどと書立てたほどだつた。それは、米國新聞の誤解であつたかどうか知らないが、とにかく紡績資本家は素晴しい見越輸入の投機をやつたこと、それからまたアメリカで棉を買付けてそれをそこで轉賣すれば、有難い弗を幾らでも手に入れることが出來たといふことは、紛れもない事實であつた。そんな風だからまた、小麥、木材、等々の見越輸入も激增した。

こんなに輸入ばかり多くなれば、支拂超過はます／＼增大して、金流出に拍車をかける。が、時の藏相井上は、生絲の輸出が增加してきたからその點は大丈夫だと聲明した。するとまた、

敵役の武藤は、いやそんなことはない、生絲輸出の増加は實は輸出代金をそのまゝ弗に換へようとする者が多いからなんだと應酬した。これは武藤の方が正しかつた。米國市場の生絲の需要を尨大なものにして生絲價格の新たな暴落を惹起したところの、生絲輸出の增大は、弗買ひ投機の一手段に過ぎなかつたのだ。

かういつた風な投機の競爭の眞只中に、支配的金融資本は、「本格的」な弗買ひ投機を堂々と押進めた。それは、外債への投資、圓預金の弗預金への振替へ、弗爲替買ひ、といふ形態をとるものだつた。

「滿州事變」と、不安のために外債邦債の價格が暴落したのでそれを買ふと利廻りがよいといふ事情も、弗買ひ投機に拍車をかけた(外貨邦債といふのは、日本の國家その他が外國から借金をして發行した公債等で外國貨幣の額面金額を持つもののことである)。

かういふ譯で、あの運命的な九月二十一日から僅か三月の間に資本家達の買ひ込んだ弗爲替の總額は五六億圓の巨額に達したのだ。

正金銀行は矢繼早に金塊を送り出しても追つつかなかつた。十月以後たつた三月のあひだに、金は三億五千萬圓も流出した。從つて金準備は八億から六億へ、六億から四億八千萬圓へとずんずん落込んだ。それと共に兌換券に對する金準備の割合は、六割から五割へ、五割から遂に四割以下へと陥没した。

ところで、正貨（金）は何故に弗買ひ投機者自身の手によつて輸送されないで、正金銀行の手によつて輸送されたのか？　それは、正金銀行が、最有力な半官的な爲替銀行として、弗買ひ連中に對して弗爲替を賣り應じつゝ、正貨の現送によつて爲替相場を維持せんとしたからである。かやうに、正金銀行が爲替相場維持のために弗爲替を賣つたこと、即ち謂はゆる「統制賣り」をやつたことは實に怪しからんといきまいた者がある。例へば三土は言ふ――

「……もし、統制賣り無かりせば、「弗買ひの」內外銀行は「自ら」正貨現送の途をとつたであらう。然しその場合は必然に正貨減少に伴ふ作用を起し、自然にその傾向を防止する……故に自然のまゝに放任しておいたならば、現送は自らある程度で濟んだ筈である。又各自現送實行

となれば、その目的をある程度に世間に知らしむる必要上投機の分子は自ら制限を受ける。然るに統制賣といふ隱れたる形式をとつたため、投機を助長したことは遺憾である。例へば外燈を消し窓を明け放ちて盜賊を誘ひ入れたやうなものである……」(「東朝」一月四日)。

かう言つて、弗買ひ金融資本を盜賊扱ひにしたなども、さすがに第一流の政治家だけあるが、金準備が無くなれば弗買ひも自然に無くなるといふ議論も大變面白い。ところが、これに反對した井上の主張も決して間違つてはゐなかつた。井上は言つた――

「……この時に際し正金がドル爲替を賣却しなかつたら、その結果はどうたらうか。彼等(弗買ひ資本家)は必ずや正貨兌換を求めて日本銀行に殺到するに違ひない。……この一時に殺到する正貨の兌換を日本銀行はどうして防止出來やう。……猛烈な思惑が擡頭し、一擧に巨額の正貨が現送せんとすれば、從つて生ずる結果は推して知るべきであらう。即ち短時日の間に預金は急激に引出され、通貨は一擧に收縮し、金融梗塞と、あるひは恐るべき財界パニックが勃發しないとも限らないのである」(「東朝」一月五日)。

これを見ても、一國の堂々たる國民的金準備が、かうした際にどんな慘めな運命に陷るかがわかるだらう。

ついでながら、あの時の弗買ひの技術的な問題について一言說明すると、例へば三井なら三井は前以て、何月何日(例へば十二月三十日)に弗爲替を買ふといふことを正金銀行に申込むと、正金銀行はその日に弗爲替を賣るべきことを契約する。するとその期日には、三井は正金に圓貨幣を支拂ふし、正金は三井に弗爲替を渡さねばならないことになる。そこで正金は、弗爲替を用意する必要に迫られるが、しかしそんなに巨額の弗爲替はないのだから、爲替相場を維持するのには、正貨を現送し、弗貨幣を手に入れておかねばならぬ。だが、輸送する金を手に入れるのには、日本銀行で兌換して貰はねばならないし、それには兌換券が要る。そこで正金は、コール(最短期資金)を市場から借り集め、それを兌換してどし／＼正貨を現送した。ところで、さうやつて正金がコール市場から莫大な金を吸收すると、短期資金は缺乏し、金利はべら棒に高くなる。すると弗買ひ連中は約束の十二月三十日が來ても、契約した莫大な弗爲替に對する支拂ひに

必要な金が得られなくなる。さうなれば、さすがの弗買ひ連も兜を脱いで契約を解除するより外はないだらう。——といふのが井上や正金銀行の策戰であつたのだ。

いづれにせよ、五億の六億のといふ巨大投機のおかげで、國民的金準備はあの通りになるし、金融市場はこつぴどく荒らされたのだ。

三　貨幣本位恐慌の爆發

て、さういふわけで、投機と資本逃亡による急激な巨額の金流出は、忽ち金融××を×××した。

それはさうだらう、たゞさへ減り勝ちの銀行預金は、またもどかつと減つたのだ。資本が逃げ出すのだから當然だ。東京組合銀行の預金は、九月末から十月末までの間に二億二千萬圓も減つた。五大銀行の預金さへも減つた。しかるに貸出の方は、例の氷結によつて却つて殖えた。そこで東京組合銀行の貸出は、遂に預金を超過した。預金一〇〇に對する貸出の割合は、九月には

九七であつたのが、十一月には一〇七になつた。そんな風だから、銀行の手持現金も激減した。十月末の全國普通銀行のそれは、前月末より一億二千萬圓も減つた。

金利は暴騰した。日本銀行は政策的に二回も公定利率を引上げた。十月十一月のコール利率は、九月の殆ど二倍になつた。手形割引歩合も十一月一日—一錢九厘、十九日—二錢九厘、といふ風に躍騰した。

更に、國家財政の赤字も大きくなり、公債は暴落した。

歳末の支拂決濟期が迫れば迫るほど、巨額の支拂手段が必要になるといふのに、その支拂手段はますます得られなくなつてきた。

恰度さういふところへ、米國の凄まじい惡化が起つてきた。米國における生絲の滯貨は激増した。國内における重工業と海運業の惡化は××的になつてくるし、恐慌農村では、米の收穫は六百萬石も減收で、「凶作恐慌」か加重されてきた。

十二月一日の「エコノミスト」は、ごく控へ目に書いた——『地方××の破綻は最近再び激化

されてゐるが、危惧さるべきはひとり地方小××のみではない筈である』（四七頁）

金解禁を金看板にした内閣は、不可避的な貨幣本位××への旋風と戰ひつゝ、金本位を維持せんと踠けばもがくほど、その脚下へ、信用・銀行××の××は迫つてきた。

しかも、その××よりも一足先きに貨幣本位××は××した。そして、何よりも先づ、デフレーション政策の破産と共に破産した解禁内閣を爆破した。金再禁止とは、貨幣本位恐慌×××××××××。

解禁内閣がいよ〳〵倒れさうになり金輸出禁止の避けがたいことがわかるや否や、兌換請求者は中央銀行へ××した。中央銀行はあらゆる阻止的手段を講じたにも拘らず、十二月十三日から四日間の兌換請求は數百萬圓を超えた。

かくて、兌換停止の避けがたいことがわかるや否や、ピカ〳〵の金は忽ち三〇%の打歩を生じた。「野見宿禰」や「菅原道眞」の價値は、黄金そのものに對して三〇%下落した。日本の圓は、アメリカの金弗に對していきなり二〇%下落した。金融資本の巨大投機は、たしかに「確實な投

機」であつた。

四　强制された再禁止

井上をはじめ民政黨の政治家達は、「非愛國的な弗買ひ投機者流」と、それに結びついた一連の政治家とが、いゝ、任意に、金再禁止をやつたやうなことを言つて、盛んに攻撃した。しかし、その當時はどうにもせよ、今となつてはもう、金再禁止が避け得られたと信ずる者などはないだらう。

金再禁止は一つの恐慌現象であつた。いかなる恐慌現象も、それ〴〵の危機を深めて××に導く一聯の資本家行動から成るものだ。投機の結果が最大の危險性を孕む時、誰も彼も投機に走つてゐる。信用が最も切望される時、誰も彼も信用を與へない。貸附の取立が最も恐怖される時、誰もが××てようとする。大衆の購買力の增大が最も必要な時、誰も彼も勞働者を馘首する、等等。ちつとも珍らしいことでない。およそこれらの、資本主義の××を現はす行動なくしては、

恐慌現象なるものはあり得ないのだ。資本主義社會の經濟法則は、金融資本家の意志よりも、政府の意志よりも、政治家の意志よりも壓倒的に強力なのだ。

最後に、――皮肉なことには、――「解禁内閣」の井上その人が金本位維持の立役者として恐らく最有能な政治家であつたといふことは、そして恐らくはその最善の努力にも拘らず、金本位停止が來たといふことは、停止の不可避性を劇的に立證する。金再禁止は、飽く迄も、強制された金再禁止であつたのだ。

尙は念のために言ひ添へておくが、この再禁止は、「再禁止論者」の改良主義が要求し主張したやうな意識的計畫的な「政策」の統制ある遂行などとは、およそ××の形態をとつて現はれた。××された金再禁は、目も當てられぬ混亂と對立とを通じて、正に×××、無計畫そのもの、所産として、××過程そのもの、發展として、それ自身一の××として、現はれた。それは、金融資本が、強制された政策としての金再禁を自己の「政策」とした時に始めて來た。それは「再禁止論者」が防止する筈の資本逃避や金流出が大量的に激成されて、肝腎の正貨が五億以下に落込

んだ時に初めて來た。そして「再禁止論者」が「膺懲する」筈だつた金融資本は、膺懲されるどころか、とんでもない巨大利得を懐にした。

五　弗買ひの利得

金融資本による弗買ひの利得は、文字通り莫大だつた。

新しい内閣が非公式に發表したところによると、金融資本の買込んだ弗爲替は五億數千萬圓にのぼつてゐた。弗に對する圓の下落は昨年中にすでに二割以上だつたから、それによつて生ずる利得は一億圓を超える勘定だつた。

金融資本は、前の金解禁の時には、弗を借入れて圓を買ひ、圓が上つた時に弗を返濟して大きな投機利得をあげてゐた。その時忠實に御用を勤めたのは民政內閣であり、井上藏相であつた。

金融資本は、今度の金再禁に際しては、しこたま弗を買込んだのだから、圓が下つてから弗を賣つて投機利得を實現しなければならなかつた。今度は誰が××を勤めたかは世間周知のことで

ある。

金融資本が莫大な投機利得を實現するためには、年内に圓の下落が起ることが必要だつた。年内に圓が下落するためには、年内に金本位停止が起らねばならなかつた。それが起るのには、とにかく年内だけでも金本位を維持して生き延びようと踠いてゐた民政黨内閣を倒さねばならなかつた。誰がどうしてそれを倒したかは世間周知のことである。

政友會は、金融資本のデフレーション政策の矛盾がまだ強度に展開しなかつた間は、金再禁止の問題については全く口を緘んでゐた。しかるに十一月頃になると、俄に金再禁止の旗じるしを黨の政綱として高々とおし立てた。そして、その再禁止がいかにも恐慌克服の、景氣好轉の、秘策であるかのやうに宣傳した。そして政友會内閣は見事に政權を獲得した。

政友會内閣が、金本位停止に次いで眞先きにしたことは、歳末資金といふ名をもつて預金部の金を貸出すことだつた。金融資本は、そのおかげでらく〱と巨額の支拂手段を手に入れて、買約した×××を受取ることが出來た。

それから間もなく、すべての新聞はセンセーショナルな事件を報道した。事件といふのは、弗買ひの總額はそれまで世間の想像したやうに三四億圓位のものではなくて、實は五億數千萬圓にのぼつた、從つて正金銀行は尚ほ一億三千萬圓の正貨現送を必要とする、といふことである。新聞は敢て政府がそれを發表したとは書かなかつたやうだが、しかしこの報道によつて爲替相場は忽ち四十弗から三十五弗に暴落した。卽ち圓は更に暴落した。それも、正しく年內にだ。おかげで、およそ一億圓と見積られてゐた××資本の××利得は忽ち二億二三千萬圓に激增した。利喰ひ轉賣の機會も生じた。おまけに、前に磅の下落によつて生じた數千萬圓の損失勘定も消えてなくなつた！

第十七講　金再禁止後の發展

一　「再禁止景氣」はどうなつた？

金解禁をやつた民政黨内閣によると、『金解禁は財界甦生への第一歩』であつた。ところが、金再禁をやつた政友會内閣は、今度は、金、、再禁が財界甦生の第一歩だと主張した。高橋藏相は言つた――

『金輸出再禁止に伴ふ爲替低落、輸出促進、對内物價騰貴、事業刺戟の傾向は、以上の窮境打開に役立つべく、景氣好轉の契機をなすであらう』（「東日」一月一日）。

つまり、爲替が下るので輸出は促進され、國内物價が騰貴するので事業は刺戟されて、景氣が出るといふのである。

讀者諸君は、すでに、理論的にも、經驗的にも、かうした見解を批判し得る筈である。

私は、金本位停止の二週間ばかり後に、「金再禁を批判する」といふ論文を書いた。その中で、私は若干の展望を試みた。それは大體次のやうなものであつた。

一、この金輸出禁止の結果は、爲替低落―輸出促進ではなくて、爲替動搖―輸出阻害となるだらう。

二、更に、國内物價騰貴―事業刺戟ではなくて、國内物價騰貴―投機刺戟となるだらう。

三、支配的ブルヂョアジーは、インフレーションを怖れてゐるが、しかし運命的なインフレーションへの一路を進まずにはゐられない。

四、信用=××××の××はます〳〵深まつてゆく。そしてその××を喰ひ止めんとする努力は、ます〳〵インフレーションに拍車をかける。

五、勞働者大衆、農民、小生産者、小商人の諸大衆の狀態は、非常に××する。

六、國家財政の赤字はます〳〵大きくなる。

等、等。

そこで、先づ爲替と貿易がどうなつたかを見よう。

爲替は、月平均で見ると、一月—三六弗、二月—三四弗、三月—三二弗といふ風に低落した。そして、騰落の幅は、毎月三弗乃至五弗といふ大幅だ。——激しい動搖だ。

で、一月—三月の輸出は、爲替の低落にも拘らず、前年同期に比して一二%も減少した。一二%といふと、大したことでもなささうだが、さうでない。二八%乃至三六%も下落した圓で言ひ現はされた金額においてそれだけ減少してゐるのだから、大變な減少だ。おまけに、貿易勘定はべら棒に惡化した。三ケ月間の輸入超過は、早くも一億六千萬圓に達した。前年は、この期間の入超は三千七百萬圓に過ぎなかつたのだ。この惡化は、主として莫大な見越輸入に原因する。もう一つ、——詳しい數字は省略するが、——爲替相場下落の結果、日本はヨリ多くの勞働を與へてヨリ少ない勞働を買はされるといふ傾向がはつきりと現はれてきた。この傾向は、世界恐慌のために海外市場が恐ろしく狹隘化してゐるために、特に著しい。

代表的な場合は、「輸出の大宗」といはれる生絲である。三月初の生絲の輸出について一新聞は

書いてゐる――『爲替の四割近い暴落に對し、本邦生絲の價格は僅かに一割五分の値上りに過ぎず、二割以上の爲替差益は結局米國市場に奪はれた勘定になる』(東朝)。しかも、四月には生絲の暴落がきて、この一割五分の値上りすらも消えてなくなつた！　が、生絲だけではない。四月十五日の「中外財界」は、一月―三月の貿易を分析し、『國別輸出について見るに、排日に禍された支那は言ふまでもないが、新市場からの敗退が著しく目立つ』ことを報道した。これによると、南阿、フィリッピン、トルコ、海峽植民地等への日本輸出は、いづれも五六割の減少をきたし、『その他アルゼンチン、シャム、蘭領インド等、新市場全滅のかたちだ』といふのである。もつとも、これは「敗退」といふのは必ずしも當らない。これらの國々は、恐慌深化のために、支拂能力を喪失したのだから。

で、要するに、爲替ダンピングの「利益」なるものはちつとも現はれないで、「不利益」だけが強く現はれてゐる。

さういふ譯で、今後と雖も、貿易好轉の見透しなどは×××ない。世界恐慌は深化する。諸國

の爲替相場の下落と動搖、輸入制限、爲替管理、關稅戰爭の激化、等々は、日本の輸出をます〳〵萎縮させるだらう。（吾々は、下落した圓で表現された名目上の貿易額に惑はされてはならぬ。）見越輸入が非常に多いことを考慮に入れても、本年度の日本貿易は大きな支拂超過となるだらう。

國內物價の運動に關する見透しにおいても、吾々は間違つてゐなかつた。

第一表

物價指數

（大正三年 100）

	日	米	英
昭和六年一月	126.0	106.9	100.1
二月	125.6	105.3	100.4
三月	125.9	106.0	100.0
七月	121.5	101.0	94.4
八月	120.7	97.5	94.1
九月	119.0	95.3	98.3
十月	116.8	92.9	98.9
十一月	116.9	90.9	99.5
十二月	120.1	88.8	99.4
昭和七年一月	126.8	86.4	98.8
二月	128.3	84.0	101.2
三月	126.0	82.1	98.6

物價指數は、第一表のやうに動いた。諸君は、同表において、日本物價の運動を英米のそれと比較することも出來る。

日本物價は、十一月の一一六から、一二〇、一二六、一二八といふ風に騰貴した。これは、もちろん、主として爲替インフレーションの物價騰貴である。が、注意を要することは、物價の騰貴率は爲替の下落率よりも遙かに少いことである。爲替は二八%乃至三六%も下落したのに、物價は十一月に比較して八%乃至九%の増加に過ぎない。これは、現在が深刻な恐慌期であるからであつて、その理由は第八講第四節及び五節に述べた通りのものである。

ところで、三月の日本物價を見給へ。三月には、爲替相場は尚ほも低落したに拘らず、物價の方はもう上げないで、却つて下げてゐる。吾々は、前記の論文の中でかう言つた――『商品價格の騰貴の浪は、カルテル、問屋等々から、小賣を經て、消費者大衆に行くと、鼻を撲つだらう』と。三月には早くも鼻を撲つたのだ。大衆の消費力が非常に低下してをり、なほも低下せしめられつゝあるのだから、それは當り前である。

が、日本物價に、三月には早く反動的な下落を演じたにも拘らず、なほ英國物價に比較してさへもずつと高く、米國物價に比較すれば恐ろしく高いのだ。この傾向は昭和六年の一月に早くも現はれてゐた。それは、前に說明した救濟インフレーションに原因する。これに原因する物價の高まりは現在もなほ續いてゐるのであつて、それはそれだけ輸出を不利とし、輸入を有利ならしめて、貿易勘定を惡化させる一要因をなしてゐる。

恐慌期に生じた爲替インフレーション物價の特徵は、いろんな點に現はれてゐる。第一、等しく爲替相場の影響を受ける商品でも、輸入品の方は輸出品よりも遙かに騰貴が甚だしい。後者の騰貴は一五・一%だのに、前者の騰貴は二七・六%にのぼつてゐる。卽ち、外國からは高く買はねばならないが、外國へ賣る時はそれに應じて高く賣ることは出來ないのだ。第二、今度は貿易商品と國內商品とを比べると、國內商品は騰貴が非常に緩慢であるばかりでなく、二月には早くも反落を演じ、三月になるともう十一月の水準にまで下つてしまつてゐる。これは國內市場の狹隘化がいかに甚だしいかを語るのだ。（第二表を見給へ）。第三、大衆消費力の恐ろしい

第二表

類別物價指數

（三菱調査）

	國內	貿易
昭和六年十一月	161	96
十二月	163	99
昭和七年一月	165	107
二月	163	108
三月	161	107

低下といふ事實を反映して、消費資料たる諸商品の騰貴率は最も低い。しかるに、投機的商品が最も多いところの原料品は圖抜けて大きな騰貴率を示してゐる。第三表を見給へ。

第三表　類別物價指數（ダイヤモンド社調）

	原料品	生産財	消費財
昭和六年十月	九四・一	七六・六	一〇七・四
昭和七年三月	一二九・一	九〇・一	一二三・二
騰貴率	三六・五%	一五・九%	一三・八%

では、金はどうなつたか？

金に生じた打歩はます／＼高くなつてきた。が、その過程において一つ面白いことが起つてゐる。それは金の密輸出である。三月二日の讀賣新聞はかう書いた――

「更に注目すべきは、豫てから懸念されてゐた金の密輸出が漸く行はれてきたことである。即ち金輸出禁止と日銀の金の時價買上回避とによつて、金の内地相場は目下一匁六圓五六十錢に抑へられてゐるので、一部には産金業者から金を買入れ、これを密輸出して外國において一匁七圓五十錢強の割合で資金化するオペレーションが次第に行はれ始めて來た。云々」。

金の密輸出は當然起つたであらうが、しかしこの記事は、その材料の出所次第では、或る宣傳的の意味があつたかも知れないのだ。日本の金鑛所有者は三菱、久原、等、いづれも巨大資本家だが、彼等は金本位停止後しきりに「金を時價で買上げろ」といつて政府に迫つてゐた。政府は、この記事が出てから間もなく、金の「時價買上げ」を開始した。時價買上げといふのは、一匁の金に對し、七圓とか八圓とかの兌換券を金鑛資本家に與へるもので、その割合は大體その時々の

爲替相場によつて定めるのだ。例へば、爲替相場が、三〇%下落して、三五弗ほどであれば、金一圓に對して五圓の四割三分增の七圓十五錢を與へるといふが如きである。四月十九日の「買上げ價格」は七圓十一錢であつた。それは言ふまでもなく金鑛資本家に巨大な××を與へるものだ。なぜなら、爲替相場は三〇%下落してゐても、國內物價は僅かしか騰貴してゐないのだし、金の生產費の騰貴は尚更ら少ないのだ。

更に、「經濟知識」五月號は、かういふことも書いてゐる、「この產金の時價買上げ運動と同時に產金業者は昨年の暮から今年にかけて再禁止による爲替暴落を見越して盛んに金塊を買ひ集め、思惑によつて一擧に利益を占めようとすることを企圖致しまして、既に二月までにかうした產金業者は約六百萬圓のストックを持つてゐました」。彼等は、こんなことまでやつて大きな投機利得をものにした。

ところで、前記の如き物價騰貴は、吾々の見透し通り、事業の刺戟とはならないで、たゞ投機の刺戟となつたことも、今や明かだ。

それは先づ、諸君もすでに見た通り、投機的商品の特に著しい騰貴となつて現はれた。第二には、見越輸入の激増となつて現はれた。が、それよりも何よりも、株式取引所だけの素晴しい活況となつて現はれた。最も旺盛な投機の目標となる「花形株」の價格指數は、十月の七二から、一月の一二五に飛躍した。實に七四%の暴騰である。

投機への刺戟がこんなに強烈だつたのは二つの理由に基づいてゐる。一つは、金本位停止に原因する價格騰貴の運動は、圓の安定が失はれて流通の××が起つたからに過ぎないこと。もう一つは、現在が深刻な恐慌期であつて、一方には貨幣資本の莫大な過剰がありながら、生産的活動はます〳〵萎縮するものだから、機會さへあれば資本は投機に向ふこと、これである。

だが、この大變な取引所景氣も、四月にはもう崩壞した。「花形」の新東株などは再禁止前の相場に崩落した。

他方、價格騰貴がちつとも生産や事業を刺戟しなかつたことは、次の諸事實の中にはつきりと現はれてゐる。

（一）重要商品中の重要商品たる綿絲、生糸、鐵、石炭の生産は概して減少した。この四商品の生産指數の總平均は、

十一月	十二月	一月
三三九・三	三三五・一	三〇九・二

といふ風に落ちてきた。

（二）重要諸産業は、人絹などの外は、依然として三五％から五五％の高率な生産制限を餘儀なくされてゐる。

（三）ところが、滯貨の方は増大した。全國倉庫在荷個數は次のやうな有樣だ。

一月	二月	三月
二六、二五九千個	二七、五五一千個	二九、一五九千個

更に「東洋經濟」はかうも言ふ——『本年一月において鐵道貨物發送瓩數、倉庫在荷、入庫高それ〴〵著しい増加を示せるに拘らず、出庫高が減少を來してをることは、なほ實際の需要の

増加が起つてゐないもので、荷動き高の増加は單に値上り見越による〔卽ち投機的な〕仕入れの増加を現はしてゐるに過ぎぬ……。

（四）最後に、事業計畫資本の數字を見給へ。これは會社の新設とか、會社の増資とかに用ひられる資本の數量だが、本年一月——三月のそれは、昨年同期の殆ど半分に減つてゐる！

昭和五年一月—三月	六年一月—三月	七年一月—三月
三八、四七五千圓	二九、七七五千圓	一六、二六六千圓

一體、どこに「事業刺戟」があるといふのか？　あるものはたゞ「事業殺減」ではないか。

が、それもその筈だ、貨幣本位××がやたらに事業を刺戟したりなんかしては堪らない。しかも、それは日本だけの現象なのではない。金本位停止をやつた英國などにおいても、事業計畫資本の激減が起つたのだ。

て、——以上の如きが「再禁止景氣」の運命であつた。

二　負擔の轉嫁

昭和四年下期に恐慌が始まつて以來、恐慌の××の殆どすべてを背負はされたものは、勤勞者大衆であつた。

失業は昭和六年の春にすでに二百萬人を越えてゐた。ところが、――金輸出再禁止をやると、物價が騰貴して事業が刺戟されるから、失業者も少くなる、さういふ宣傳とは全く反對に――、金輸出禁止後も失業はずん〳〵增してゐる。內務省が月々發表してゐる失業調査なるものの數字は、實際の失業者數の五分の一にも當らないほどのものだが、その數字でさへ、この一月は四十八萬といふ最高記錄に達し、十二月に比して一萬の增加となつてゐる。日本銀行調査の就業勞働者指數も同じことで、十二月の七三・一から一月の七二・九に落ちてゐる。物價騰貴の鈍つた二月、物價下落の起つた三月には、失業は更に增大してゐることは明かだ。諸君は、尙ほこの外に、謂ゆる短時間勞働をやらされて四時間か五時間分の賃銀しか貰つてゐない半失業の就業勞働者が

非常に多いことを忘れてはならないのだ。

賃銀の切下げが恐慌以來猛烈だつたのは周知のことである。そこへ持つてきて、金再禁止後には、就業勞働者の賃銀收入はまたがたつと減つたのだ。日本銀行の賃銀調査のやうな資本家に都合のよい調査の數字にも、そのことははつきりと現はれた。即ち「實收賃銀」の指數は一月になると次のやうに激減した。

十月	十一月	十二月	一月
八八・四	八八・五	八九・二	八七・六

吾々は、前記の一論文においてかう言つた――「資本家が隙さへあらば「合理化」をやらうと身構へてゐるこの際に、金再禁＝物價騰貴のお蔭で失業者が減るの、勞賃が高まるのといふ宣傳ぐらゐ人を馬鹿にした××はない」と。吾々のこの見透しも誤まつてゐなかつたのだ。

失業者は殖えた、就業勞働者の賃銀收入は激しく減つた。それで、生產費でも下るならまだしもだが、それはあべこべに急激に高まつた。東京朝日新聞社の生計費指數は次のやうに急騰し

てゐる。

十一月	十二月	一月	二月	三月
一五九	一六一	一六五	一六八	一六六

吾々が、「勞働者大衆は、一方からは勞働強化、馘首、賃銀切下げといふ××の繼續、他方からは生計費の昂騰といふ怪物の出現で、全く挾み擊にされるだらう」と言つたのは、少しも間違つてゐなかつたのだ。

農民の狀態も劣らず××した。

米の東京相場は、投機資本家の手にかゝつて恐ろしく暴騰した。資本家や地主は巨利を得た。この米價暴騰は生計費を高めた主要原因の一つであつた。しかし、地主ではない本當の農民の大多數は、金本位停止前の十月から十一月に、凶作で非常に減つた收穫米を非常に安い値段ですつかり賣拂つてゐた。地主は、小作料として取立てた米を、高値が出るまで賣らずに持つてゐたが、窮乏の農民大衆は一日も早く米を賣つて金にかへねばならなかつたのだ。そして金再禁止後

も、農民の賣り渡す米の値段（謂はゆる庭先相場）は、平均二十三圓十九錢といふ、生産費以下のものである。

生絲は、再禁止後一二ヶ月は、投機的な暴騰を演じたが、四月十五日の相場はもう未曾有の安値に陷落した。だから、今年の春繭の相場は、昨年春の慘めな相場よりも更にまた慘めなものに相違ない。

かやうに、農民の賣る物は騰貴しないかまたは却つて下落するといふのに、農民の買ふ物の方は上げてゐる。鋏狀の價格差はます／＼大きくなつてゆく。

僞瞞インフレーションで××されるものには、勞働者大衆および、農民のやうな小生産者大衆の外に、廣汎な小賣商人がある。

再禁止後は、小賣價格の騰貴のテンポは、卸賣價格の騰貴のテンポよりもずつと緩慢だ。卸賣價格の方はカルテルや投機者の手にかゝつて、ずん／＼上げるけれども、小賣價格の方は購買力を切下げられた大衆相手の價格だから、そんなに上げられる譯がない。少し上げやうものな

ら、賣行きがうんと減る。さうでなくてさへ、流通上の諸費用や租税等々の負擔を××されてゐる小賣商人は、今や、高く仕入れて安く賣り、おまけに前ほど賣れないといふのだから、資本の一回轉毎に急速に貧乏になるわけだ。

左に再禁止後の卸賣價格と小賣價格の指數を示しておかう。

	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月
卸賣價格	一二六・八	一二六・九	一三〇・一	一三六・八	一三八・三	一三六・〇
小賣價格	一三九・六	一三〇・二	一三四・六	一三八・八	一三八・六	一三六・四
卸賣價格を一〇〇とした小賣價格の率	一一一・〇	一一一・四	一一二・〇	一〇九・五	一〇八・〇	一〇八・三

で、要するに、吾々が前にインフレーションの理論のところで述べた諸々の傾向は、今や現實に起つてきた。金本位停止の最初の三ヶ月間の重要な結果の一つは、大衆の消費力の急激な×××であつた。

三　「金融の梗塞」

——「信用××××の××は去つたどころではない。金再禁は、その方の××を一時潛在化す。だが、潛在化することによつて却つて××ならしめる」。これが吾々の見透しであつた。

切迫した××××は、金本位停止によつてたしかに一時は緩和された。が、それは前に理論のところで述べたやうな理由によるものに過ぎなかつた。だから、再禁止後二月と經たないうちに、またも××××××はあがつた。

「金融梗塞」といふのは、どうにも信用が得られない、支拂手段が得られない、どうも不安で仕方がない、といふ狀態だ。一口に言へば、信用の異常な緊張といふ狀態だ。

先づ、大きな數字を一瞥しよう。

銀行預金は、再禁止後、目立つて減少した。三月末の全國銀行の預金は、十一月末に比べると、三億六千萬圓も減つてゐる。ところが貸出の方は一億三千萬圓も殖えた。從つて、貸出は預

金を超過することになり、預金一〇〇に對して貸出は一〇五といふ割合になつた。かやうな貸出の超過は、東京社員銀行において特に甚だしく、四月九日の比率は一一七といふ大變なことになつてゐる。それはさうだらう、この東京の有力銀行の預金は、十二月に比べると殆ど一二%も減つたのだ。

そんな風だから、金利も昂騰した。公表された金利でさへ、次のやうな有様だ。

		一月十一日	二月十日	三月十日	四月七日
東京市場のコール金利	(高)	一・五錢	一・七錢	一・六錢	一・六錢
	(低)	一・五	一・七五	一・六	一・六五
商業手形	(高)	一・六	一・七	一・七	一・六五
	(低)	二・〇	二・一	二・一	二・二

これらが、「金融の梗塞」を示す表面的な數字である。

が、かういふことになつたのも別に不思議はない。英國金本位停止の九月以來、國外へ流出し

た資本は五六億圓にのぼつたのだ。ブルヂョア的研究者達は、かやうに逃げ出した資本も、再禁止になつて爲替相場が下ればまた日本へ戻つて來るだらう、そして再び貸附資本として市場に現はれるだらう、さうすれば金融も樂になるといふ、希望を織り込んだ見透しを立ててゐた。しかし、それが全くの空頼みに終つたのだ。

流出資本のうちの二三億圓は外貨邦債に投資されたが、それはそのまゝになつてゐる。資本家達はその半分くらゐのものを內地へ取寄せたけれども、有價證券の形態で取寄せたのだから、向うにあるのもおんなじだ。外貨邦債は下落しつゝあるから、彼等が外貨邦債を賣り放つて資金に還元するやうなことは當分ない。

形に姿を變へた流出資本の他の部分はといふと、その一部は、巨額な見越輸入に基づく莫大な輸入爲替の支拂に充てられてゐる。そしてその殘りは、本年中に期限の到來する巨額の對外債務の支拂に充てられてゐる。弗買ひ連中は、買込んだ弗の始末をかうして着々とつけて行つて、莫大な投機利得を實現するのだが、おかげで、流出した五六億の資本の殆ど全部が國內市場には

姿を現はさないといふことになつたのだ。

ところが、それだけではなくて、資本流出は、金輸出禁止後も、外貨邦債投資その他のかたちにおいて繼續した。

そこへ持つてきて、莫大な見越輸入といふやつも加はつた。この投機は資本の逃亡とは違ふけれども、大きな資金需要を惹起して、信用を緊張させた點ではおんなじだ。更にまた、この見越輸入と並んで、國內での思惑・投機のための資金需要が激增したのであつた。これらは、爲替インフレーションの發展と共に必然的に起つてくる「金を物へ」の運動の現はれである。投機利得に目の眩んだ資本家達は、預金をどん／＼引出したり、高い利息も厭はず貸附を受けたりして、資金を調達した。銀行の預金が減つて貸出が殖えたのは當然だ。が、これ等の運動と並行して貨幣退藏の運動も進行した。銀行預金は、それがためにも減つたのだ。資本家達は、一方では、「現金の有難味」を痛切に感じてきた。有名な一證券業者は言つてゐる――『一寸した例でも、今は銀行でも保險會社でも、財產を資金にしてとつておく。そして

何時でも相當に引出せるやうな準備をしてゐる。萬一の事が起ればそれを引出さうといふので準備をしてをります。……〔つまり〕資本の移動を自由にすることが出來るやうにやつてゐる。これは近頃の資本の特質である』（「經濟情報」新年號座談會、七三頁、山村氏談）。同じ傾向は、資本家達による貨幣退藏を惹起す。中小資本家は、銀行から預金を引出して、ヨリ完全と思はれる郵便貯金に振替へてゐる。郵便貯金は增加した。『その主因は、言ふまでもなく、×××××に基づく』のだと一新聞が書いたのは當つてゐる。諸君は、恐慌期に入つてから郵便貯金は一時甚だしく減少したことを思ひ出さねばならぬ。それは、謂はゆる郵便貯金階級に屬する人達が、あんまり懐具合が苦しくなつたので、引出したからである。さうした引出しはむろん續いてゐるのだが、今度は別の階級が新たに郵便貯金制度を利用し始めたので、郵便貯金の增加が起つたのだ。

他方、銀行の貸出は、その「氷結」部分がますます多くなるために、增大した。第一、前からの貸附が、農業恐慌の新たな深まりによつて、ますます氷結した。これは、地主や富農を相手にしてゐる地方銀行において特に甚だしい。ところがまた、投機「景氣」に捲き込まれて新たに貸

付けた分も、「景氣」の崩壊と共に氷結した。

十二月から一二月へかけての「再禁止景氣」が殘したお土産はざつと次のやうなものである。

第一は、今言つた信用氷結の増大。思惑で仕入れた商品が賣れなくなれば、支拂ひは出來なくなり、借金は返せなくなり、貸金は取れなくなる。

第二、自分の金で仕入れた場合でも、商品の價格が下れば、資本に穴があく。

第三、まだ現實に穴はあかなくても、莫大な見越輸入をやつた連中の流動資本は涸渇した。いづれにしても、信用の緊張となり、不安となる。

第四、工場から問屋へ、問屋から小賣商へと商品が運ばれて、そこで賣れなくなつた場合、——この場合には、負擔を轉嫁された小賣商人大衆の破産となる。これも信用を惡化させずにはゐなかつた。

かういふ譯で、信用＝××の××の新たなる×××が起つてきた。これは、前から作用してゐる一般的な恐慌諸要因の外に、新たなる要因が加はつたからである。吾々の見透しでは、『投機は、

恐慌の新段階の一契機をなすだらう』といふことを強調せずにはゐられなかつた。事實において金本位停止による一時的緩和――思惑・投機の勃興――一時的緩和の終了――投機景氣の崩壞――「金融梗塞」――といふ過程によつて、信用――××××の新たなる××化は生じたのだ。

中央銀行は、「對策」として、三月十五日に公定利子率の引上げを斷行した。しかし、それがために緊張が緩和されるやうなことはなかつた。一新聞が書いたやうに、『一般銀行は、資金逼迫の度が極端に甚だしいので、利下げどころか、貸出率は些かもゆるめてゐない』といふ有樣だつたから……

そこで中央銀行は第二の「對策」として、二億圓餘の××××を餘儀なくされた。――果して救濟インフレーションである！

四　救濟インフレーションの擡頭

ところが、今や、一億圓餘の××××ぐらゐでは追つつかないので、更に大々的な銀行××案

が日程にのぼされてゐる。この案の表面上の目的は、二十億圓になんなんとする××××の××貸附（不動産擔保のもの）の始末をするといふにある。が、この救濟運動の先頭に立つてゐるものは金融ブルヂョアジーの頭目達の「五日會」であることからも知られるやうに、實際に救濟されるものは××××でないことだけは明かである。

今のところ、救濟案は二案ある。一つは政友會案で、不動産金融會社を作れといふのだ。この會社設立の目的は、――

『……十六億二千萬圓に達せる一般銀行の不動産固定貸を資金化して地方金融の安定を期すると共に、一般産業資金の融通を圓滑にし以て我財界回復の一助たらしめんとするにある』

のださうで、資本金は一億圓、そのうち二千萬圓は日本銀行が出し、三千萬圓は民間銀行等が出し、殘る五千萬圓は政府が出す、そして『本會社發行の社債は、政府により完全且つ無條件に保證せられること、本會社はその發行せる社債等を現金の代用として交付すること』といふ大變なものである。

が「五日會」の大將達は、こんな會社に出資するのはいやだから、反對してゐる。そして反對理由の第一として、「實現するとしてもその手續その他に相當時日を要し、從つて、憂慮されてゐる期末（六月末）の間に合はざる惧れあり」といふ切迫した狀勢を擧げてゐる。では「五日會」それ自身の案はどうか？

　これはまた一層露骨なもので、

『一、地方銀行の凍結固定貸を勸銀に於て肩替りせしめ、これが損失は國家に於て補償すること

一、右勸銀の肩替り總額は地方銀行の不動產貸付額十六億二千萬圓のうち十億圓と查定すること。

一、國家の損失補償限度は約五千萬圓とし、補償年限は十ケ年とすること。

一、肩替り資金は取敢えず一億五千萬圓乃至二億圓程度として、これが調達は政府に於て新たに公債を發行し、これを預金部に托し、勸業債券を引受けること』。

これは間もなく實行されるだらう。その結果、負擔は誰に××されるのか、どんな公債インフ

レーションが起るのか、その作用はどうか――さういふことはもう諸君にわかつてゐる。

かうした案と並んで、更に、日本銀行の保證準備發行の限度をべら棒に擴張しようといふ案がある。現在の一億二千萬圓を、八億または十億圓に擴張しようといふのである。更にまた、日本銀行が貸附に際して取る擔保の範圍を擴張して今迄のやうにやかましいことは言はないやうにしようといふ案もある。これも間もなく實現するであらう。

これらの「對策」はもちろん、金融××を×××××ことを目指してはゐるのだが、それは同時にまた救濟インフレーションの膳立てであることも明かだ。

今の場合、救濟インフレーションが起れば、それに伴つて必然的に起るのは、××市場分裂の××、貨幣退藏、資本流出、および輸入超過である。資本流出や輸入超過の増大は、たゞさへ下げてゐる爲替相場を更に低落させる。そこで、ブルヂョアジーは早くも爲替管理の必要を叫んでゐる。そして輸入阻止を目指す關稅引上げの實行に至つてはもう既定の方策となつてゐる。

最後に××財政、――これはもちろん××の増大だ。

五月の臨時議會に提出される豫算案はまだ確定はしないけれども、およそ五億圓の公債を新たに增發するであらうことは殆ど確實だ。その內譯は大體次のやうになつてゐる。

軍事費のため	二億一千萬圓
赤字埋めのため	一億四千萬圓
鐵道のため	五千萬圓
內地及び植民地に事業を起すため	一億圓

この最後の項目は御覽の通り大した金額ではない。それで、政友會がかねてから唱へてゐた「產業五ケ年計畫」といふ素晴しい膨脹政策の公約は反古になつたと批評されてゐるやうな次第である。で、今のところまだ、救濟インフレーションの膳立には、積極的な救濟インフレーションの御馳走はない。が、破產したインフレーション政策への惨めな××××××××××。

五　展望のために

この書物が多少とも注意深く讀まれた諸君は、こゝまででもう今後の展望の輪廓を得られたこ

と私は信じてゐる。が、なほ補足を兼ねて、重要な契機の二三を指摘すれば——

(一)　物價の運動。

爲替の激しい下落にも拘らず、物價はそれほど上らないで早くも反落したのは、(a)國內の大衆消費力が異常に低下したことに加へて、(b)世界の物價(特に米國の物價)が第三期恐慌によつて強く低落しつゝあること、(c)諸外國の爲替相場が激しく低落してゐることに原因する。これらの要因が作用する限り、日本物價は、爲替インフレーションがあつても大して上げないし、却つて低落する可能性もある。この際、諸君は、第三期世界恐慌の性質上、各國の物價は一般に、戰前の水準よりもずつと低いところまで行くのが本當だといふことを記憶すべきである。

一方には、物價をぐん／＼引下げる恐慌の作用がある。が、他方には、物價を押上げるところの爲替下落の作用がある。そして爲替相場はまだ／＼餘程下落する可能性は十分にある。從つてそれは、物價の下落運動を澁滯させずにはゐない。

民政黨は、金本位の回復といふことを唱へてゐる。しかし、さういふことの實現される望みは今

のところ絶無に近い。

(二)　景氣の問題。

金本位××の續く限り、通貨の安定は失はれ、商品價格の動きは全くだらしのないものになるのだから、資本家達はお先眞暗である。だから、彼等は投機に走らずにはゐられない。從つて、「投機景氣」ならばまたもお見舞申さないとは限らない。

景氣といふ點では、「滿蒙新國家」も問題になる。一頃は、その出現によつて日本の景氣は忽ち立ち直るといふやうな話もあつた。何でも世界中の「資源」が滿蒙に集まつてゐるやうな噂もあつた。しかし、「曾我迺家五郎の諷刺」とかゞ利いたわけでもあるまいが、最近は少し樣子が變つてきて、「滿蒙資源の再吟味」などといふ聲も聞えてきた。

いづれにせよ、滿蒙については、次の諸點に注意すべきだらう。(一)日本の貿易において滿蒙の占める割合は、貿易總額の百分の一乃至百分の二位のものに過ぎない。(二)滿蒙への資本輸出は絶大な政治的・・と闘はねばならぬ。(三)滿蒙における起業は、それが工業や鑛業であるならば折角

結構な物を生産しても今のところ捌け口がない。もし××市場へでも賣らうとしようものなら、飛んでもない騒ぎが持上るだらう。(四)日本の農民を大々的に滿蒙へ移住させるといふ計畫は支那の農業勞働者及び農民の競爭のために實現性がない。もし、朝鮮でやつたやうに、土着の農業勞働者を使役して半資本主義的農業經營を起したりなんかすれば、恰度朝鮮米の洪水が日本へ押寄せたやうに、滿州米の洪水が押寄せてきて、政府はしよつちう米の買上げばかりやつてゐなければならないだらう。

(三)　金融×××××。

これは、今迄述べたことでたいがいわかるだらう。

(四)インフレーションの發展。

現にブルヂョアジーやその代辯者達が要望し企圖してゐるやうな救濟インフレーションは、××を克服する力などはない。反對に、××を深め長びかすだけである。

が、救濟インフレーションは信用インフレーションの一種であり、信用インフレーションや爲

替インフレーションは、××ーンフレーションにまで發展し得ることを諸君は知つてゐる。

かゝる發展轉化を促進する契機は――

(a)金融××を××××ようとするブルヂョア的努力。

(b)世界恐慌わけても國際××××のヨリ以上の深まり。特に米國に起るかも知れぬ金本位停止。

これは起り得る。今年に入つてからの米國の悪化は凄まじい。××××は毎月二三百づゝ起つてゐる。世界の「花形株」だつたスチール株などは三十弗以下の相場に陥没した。おまけに新しい金流出が起つてゐる。

(c)××への××。これにおいては、ドイツにおける××の××を契機として×××××××××の××を見る可能性と、××××を契機として第二の×××××××の××を見る可能性とが絡み合ひ、強め合つてゐる。

最後に、これはもう言ふ迄もないことだが、今後の發展の方向はどうあらうと、またどんな形態をとらうと、すべての××は勤勞者大衆の×××××されるのだ。

階級闘争××××××。

金の經濟學　終

昭和七年四月廿九日印刷
昭和七年五月三日發行



金の經濟學

定價一圓五拾錢

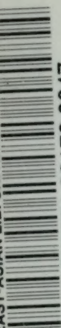
著者　猪俣津南雄

發行者　木田開
東京市麹町區丸ノ内二丁目二ノ一

印刷者　堀修造
東京市牛込區榎町七番地

發行所　東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルデイング五八八區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ内五三五―五三七番

日清印刷株式會社


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03173 0047